SPARC M12/M10

XSCF リファレンスマニュアル
XCP 306x/235x 版

マニュアル番号 : C120-E684-26
2019 年 3 月

目　次

はじめに

本書は、オラクルまたは富士通の SPARC M12/M10 システムの、XSCF ファームウェア用のマニュアルページをまとめたものです。

本書は XCP（XSCF Control Package）のメジャーリリースに対応して改版されています。本書に対応する XCP 版数は、すでに最新ではない、またはお使いのサーバにインストールされている版数とは異なる場合があります。ファームウェアの最新情報を入手するために、お使いのファームウェアに対応したプロダクトノートと、最新版のファームウェアに対応したプロダクトノートを参照してください。また、XSCF ファームウェア内のマニュアルページも併せて参照してください。

なお、SPARC M12 は、Fujitsu SPARC M12 という製品名でも販売されています。SPARC M12 と Fujitsu SPARC M12 は同一製品です。

SPARC M10 システムは、Fujitsu M10 という製品名でも販売されています。SPARC M10 システムと Fujitsu M10 は同一製品です。

対象読者

本書は、コンピュータネットワークおよび Oracle Solaris の知識を有するシステム管理者を対象にして書かれています。

関連マニュアル

お使いのサーバに関連するすべてのマニュアルはオンラインで提供されています。

■ Oracle Solaris などのオラクル社製ソフトウェア関連マニュアル

  http://docs.oracle.com/en/

■ 富士通マニュアル

  グローバルサイト

  http://www.fujitsu.com/global/products/computing/servers/unix/sparc/downloads/manuals/

  日本語サイト

  http://www.fujitsu.com/jp/products/computing/servers/unix/sparc/downloads/manual/

SPARC M12 をお使いの場合は、「SPARC M12 関連マニュアル」に記載されているマニュアルを参照してください。

SPARC M10 をお使いの場合は、「SPARC M10 関連マニュアル」に記載されているマニュアルを参照してください。

SPARC M12 関連マニュアル (*1)
SPARC M12 プロダクトノート
SPARC M12 早わかりガイド
Fujitsu SPARC M12 Getting Started Guide/SPARC M12 はじめにお読みください（*2）
Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 Important Legal and Safety Information（*2）
Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 Safety and Compliance Guide SPARC M12/M10 安全に使用していただくために
Software License Conditions for Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 SPARC M12/M10 ソフトウェアライセンス使用許諾条件
Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 Security Guide
SPARC Servers/SPARC Enterprise/PRIMEQUEST 共通設置計画マニュアル
SPARC M12-1 インストレーションガイド
SPARC M12-2 インストレーションガイド
SPARC M12-2S インストレーションガイド

SPARC M12 関連マニュアル (*1)
SPARC M12 PCI カード搭載ガイド
SPARC M12/M10 システム運用 ・ 管理ガイド
SPARC M12/M10 ドメイン構築ガイド
SPARC M12/M10 RCIL ユーザーズガイド（*3）
SPARC M12/M10 XSCF リファレンスマニュアル
SPARC M12/M10 XSCF MIB・TRAP 一覧
SPARC M12-1 サービスマニュアル
SPARC M12-2/M12-2S サービスマニュアル
SPARC M12/M10 クロスバーボックス サービスマニュアル
SPARC M12/M10 PCI ボックス サービスマニュアル
SPARC M12/M10 用語集
外付け USB-DVD ドライブ使用手順書

*1: 掲載されるマニュアルは、予告なく変更される場合があります。
*2: 印刷されたマニュアルが製品に同梱されます。
*3: 特に SPARC M12/M10 と FUJITSU ETERNUS ディスクストレージシステムを対象にしています。

SPARC M10 関連マニュアル (*1)
SPARC M10 システム プロダクト ノート
SPARC M10 システム 早わかりガイド
Fujitsu M10/SPARC M10 Systems Getting Started Guide SPARC M10 システム はじめにお読みください（*2）
Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 Important Legal and Safety Information（*2）
Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 Safety and Compliance Guide SPARC M12/M10 安全に使用していただくために
Software License Conditions for Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 SPARC M12/M10 ソフトウェアライセンス使用許諾条件
Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 Security Guide
SPARC Servers/SPARC Enterprise/PRIMEQUEST 共通設置計画マニュアル
SPARC M10-1 インストレーションガイド
SPARC M10-4 インストレーションガイド
SPARC M10-4S インストレーションガイド

SPARC M10 関連マニュアル (*1)
SPARC M10 システム PCI カード搭載ガイド
SPARC M12/M10 システム運用 ・ 管理ガイド
SPARC M12/M10 ドメイン構築ガイド
SPARC M12/M10 RCIL ユーザーズガイド（*3）
SPARC M12/M10 XSCF リファレンスマニュアル
SPARC M12/M10 XSCF MIB・TRAP 一覧
SPARC M10-1 サービスマニュアル
SPARC M10-4/M10-4S サービスマニュアル
SPARC M12/M10 クロスバーボックス サービスマニュアル
SPARC M12/M10 PCI ボックス サービスマニュアル
SPARC M12/M10 用語集
外付け USB-DVD ドライブ使用手順書

*1: 掲載されるマニュアルは、予告なく変更される場合があります。
*2: 印刷されたマニュアルが製品に同梱されます。
*3: 特に SPARC M12/M10 と FUJITSU ETERNUS ディスクストレージシステムを対象にしています。

安全上の注意事項

SPARC M12/M10 システムをお使いになる前、または取り扱う前に、次のドキュメントを熟読してください。

- Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 Important Legal and Safety Information
- Fujitsu SPARC M12 and Fujitsu M10/SPARC M10 Safety and Compliance Guide
  SPARC M12/M10 安全に使用していただくために

表記上の規則

本書では、以下のような字体や記号を、特別な意味を持つものとして使用しています。

字体または記号	意味	記述例
AaBbCc123	ユーザーが入力し、画面上に表示される内容を示します。 この字体は、コマンドの入力例を示す場合に使用されます。	XSCF> **adduser jsmith**
AaBbCc123	コンピュータが出力し、画面上に表示されるコマンドやファイル、ディレクトリの名称を示します。 この字体は、枠内でコマンドの出力例を示す場合に使用されます。	XSCF> **showuser -p** User Name: jsmith Privileges: useradm auditadm
『』	参照するマニュアルのタイトルを示します。	『SPARC M10-1 インストレーションガイド』を参照してください。
「」	参照する章、節、項、ボタンやメニュー名を示します。	「第 2 章 ネットワーク接続」を参照してください。

本文中のコマンド表記について

XSCF コマンドには (8) または (1) のセクション番号が付きますが、本文中では (8) や (1) を省略しています。

各コマンド共、参照を促す場合にはコマンド名にセクション番号を付けています。

CLI（コマンドライン・インターフェース）の表記について

コマンドの記載形式は以下のとおりです。

- 値を入力する変数は斜体で記載
- 省略可能な要素は [ ] で囲んで記載
- 省略可能なキーワードの選択肢は、まとめて [ ] で囲み、| で区切り記載

マニュアルページの構成

ここでは、マニュアルページに含まれる各セクションについて説明しています。

Intro(1) には、XSCF シェルコマンドとその概要がアルファベット順に書かれています。

各 XSCF シェルコマンドは、以下の項目順で説明されています。なお、項目に対して概要する説明がない場合は、項目自体が省略されています。

セクション	説明
名前	XSCF シェルコマンド名とコマンドの概要が書かれています。
形式	コマンドの構文が書かれています。 字体は以下の規則に基づいて使い分けられています。 **bold**. コマンド名や定数など、表示されているとおりに入力します。 *italic*. 変数など、コマンド実行時に適切な値に置き換えます。 括弧などの記号は以下の規則に基づいて使い分けられています。 [ ] . この括弧で囲まれているオプションやオペランドは省略できます。囲まれていないものは省略できません。 { } . この括弧で囲まれているオプションやオペランドは 1 組として扱われます。 | . "|" で区切られているオプションまたはオペランドから 1 つだけ指定します。 ... . 直前のオプションまたはオペランドを複数指定できます。
説明	コマンドの機能など、詳しい説明が書かれています。コマンドを実行したときの動作や表示される内容について説明されます。オプションやオペランドの指定のしかたなどは説明されません。
ユーザー権限	コマンドを実行するために必要な権限について書かれています。ユーザー権限によって実行できる内容に違いがある場合は、ここで説明されます。

セクション	説明
オプション	オプションの意味や指定のしかたについて書かれています。オプションにオペランドが必要な場合は、ここで説明されます。 1 文字だけのオプションを複数指定する場合は、最初に指定したオプションのあとに、オプションのアルファベット部分だけを続けて指定することもできます。 例） **ioxadm env -e -l -t** **ioxadm env -elt**
オペランド	オペランドの意味や指定のしかたについて書かれています。オプションのあとに続くオペランドは「オプション」で説明されます。
詳細説明	「説明」で書かれている内容の他に、補足的な説明が必要な場合はここで説明されます。「説明」の内容が長くなるような場合に説明を分割するときにも使用されます。
使用例	コマンドの実行例が書かれています。実行例の説明、実行コマンド、および実行した結果システムから表示されるメッセージが書かれています。
終了ステータス	実行したコマンドが正常に終了したかどうかを表すステータスについて書かれています。正常に終了した場合は "0"、異常終了した場合は ">0" で表されます。
関連項目	関連するコマンド名が書かれています。

マニュアルへのフィードバック

本書に関するご意見、ご要望がございましたら、マニュアル番号、マニュアル名称、ページおよび具体的な内容を、次の URL からお知らせください。

- グローバルサイト
  `http://www.fujitsu.com/global/contact/`
- 日本語サイト
  `http://www.fujitsu.com/jp/products/computing/servers/unix/sparc/contact/`

リファレンス

XSCF コマンド一覧

名前 Intro - XSCF ファームウェアで提供されるコマンドを一覧表示します。

説明 Intro ページは、SPARC M12/M10 システムの XSCF ファームウェアで提供されるユーザーコマンド（exit(1)、man(1)、および who(1)）とシステム管理コマンド（addboard(8) で始まる他のすべてのコマンド）を一覧にしたものです。XSCF コマンドの中には、Oracle Solaris コマンドと同じ名前のものがありますが、使用方法は異なります。詳細は、各コマンドのマニュアルページを参照してください。

XSCF では、以下のコマンドがサポートされています。

exit	XSCF コマンドシェルを終了します。
man	XSCF シェルコマンドのマニュアルページを表示します。
who	XSCF にログインしているユーザーアカウントを一覧表示します。
addboard	物理システムボード（PSB）を物理パーティション（PPAR）構成に組み込む、または割り当てます。
addcodactivation	CPU コア アクティベーションキーをシステムに追加します。
addfru	Field Replaceable Unit（FRU）および筐体を増設します。
addpowerschedule	自動電源制御（APCS）での電源投入／切断スケジュールを追加します。
adduser	XSCF ユーザーアカウントを作成します。
addvbootcerts	Oracle Solaris をブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書を追加します。
applynetwork	XSCF ネットワークの内容を XSCF に適用します。
clearremotepwrmgmt	SPARC M12/M10 システムの電源連動機能（Remote Cabinet Interface over Lan : RCIL）の管理情報を削除します。
console	制御ドメインコンソールに接続します。
deleteboard	物理システムボード (PSB) を物理パーティション (PPAR) 構成から切り離します。
deletecodactivation	CPU コア アクティベーションキーをシステム から削除します。
deletepowerschedule	自動電源制御（APCS）での電源投入／切断スケジュールを削除します。
deleteuser	XSCF ユーザーアカウントを削除します。

deletevbootcerts	Oracle Solaris をブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書を削除します。
diagxbu	クロスバーケーブルおよびクロスバーユニットの診断を行います。
disableuser	XSCF ユーザーアカウントを無効にします。
dumpcodactivation	CPU コア アクティベーションキーをファイルに保存します。
dumpconfig	XSCF 設定情報をファイルに保存します。
enableuser	XSCF ユーザーアカウントを有効にします。
flashupdate	ファームウェアをアップデートします。
getflashimage	ファームウェアイメージファイルをダウンロードします。
getremotepwrmgmt	SPARC M12/M10 システムの電源連動機能（Remote Cabinet Interface over Lan : RCIL）の設定ファイルを取得します。
initbb	SPARC M12-2S/M10-4S およびクロスバーボックスをシステムから切り離し、工場出荷状態に初期化します。
ioxadm	PCI ボックス、およびホストサーバに接続されたリンクカードを管理します。
nslookup	ホスト名をインターネットネームサーバに照会します。
password	XSCF ユーザーアカウントのパスワードと有効期限を設定します。
ping	ICMP の ECHO_REQUEST パケットをネットワーク上のホストへ送信します。
poweroff	物理パーティション（PPAR）を停止します。
poweron	物理パーティション（PPAR）を起動します。
prtfru	システムおよび PCI ボックスの FRUID データを表示します。
rastest	疑似故障を発生させます。
rebootxscf	XSCF を再起動します。
replacefru	Field Replaceable Unit（FRU）および筐体を交換します。
reset	指定した物理パーティション（PPAR）または論理ドメイン（ゲストドメイン）をリセットします。

`resetdateoffset`	システム時刻と各物理パーティション（PPAR）の時刻との差分をリセットします。
`restorecodactivation`	CPU コア アクティベーションキーを復元します。
`restoreconfig`	XSCF 設定情報を復元します。
`restoredefaults`	XSCF 搭載ユニットの設定情報やそのバックアップ情報を工場出荷時の状態に戻します。
`sendbreak`	指定した物理パーティション（PPAR）の制御ドメインにブレーク信号を送ります。
`setad`	Active Directory を構成します。
`setaltitude`	システムの高度を設定します。
`setaudit`	システムの監査機能を管理します。
`setautologout`	XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を設定します。
`setcod`	物理パーティション（PPAR）で使用する CPU コアリソースを割り当てます。
`setdate`	XSCF の時計の日付、時刻を設定します。
`setdomainconfig`	物理パーティション（PPAR）起動時の論理ドメイン構成を指定します。
`setdualpowerfeed`	二系統受電モードを設定します。
`setemailreport`	電子メールレポート機能を設定します。
`sethostname`	マスタ筐体と XSCF がスタンバイ状態の筐体の、ホスト名および DNS ドメイン名を設定します。
`sethsmode`	CPU の高速モードの有効／無効を設定します。
`sethttps`	XSCF ネットワークで使用する HTTPS サービスの開始と停止を設定します。また、認証関連の設定を行います。
`sethwproperty`	ハードウェア特性を設定します。
`setinterimpermit`	CPU コアの一時利用機能の有効／無効を設定します。
`setldap`	XSCF を Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）クライアントとして設定します。
`setldapssl`	LDAP over SSL を構成します。
`setlocator`	オペレーションパネルの CHECK LED の点滅状態を設定します。

setloginlockout	ログイン時のロックアウト機能を有効または無効にします。
setlookup	認証とユーザー権限のためにLDAPサーバの使用について有効／無効を設定します。
setnameserver	XSCFネットワークで使用されるネームサーバおよびサーチパスを設定／削除します。
setnetwork	XSCFで使用されるネットワークインターフェースを設定または削除します。
setntp	XSCFの時刻同期に関する設定を行います。
setpacketfilters	XSCFネットワークで使用されるIPパケットフィルタリングルールを設定します。
setpasswordpolicy	システムのパスワードポリシーを管理します。
setpciboxdio	SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4SのPCIスロットからPCIボックスに搭載されたPCIカードへの、ダイレクトI/O機能に関する設定を行います。
setpcl	物理パーティション（PPAR）構成情報（PCL）を設定します。
setpowercapping	消費電力制限に関する設定を行います。
setpowerschedule	スケジュール運転情報を設定します。
setpowerupdelay	システムの暖機運転時間および空調待ち時間を設定します。
setpparmode	物理パーティション（PPAR）の動作モードを設定します。
setpparparam	制御ドメインのOpenBoot PROM環境変数の強制書き換えおよびブートスクリプトの登録、削除を行います。
setprivileges	ユーザー権限を割り当てます。
setremotepwrmgmt	SPARC M12/M10システムの電源連動機能（Remote Cabinet Interface over Lan : RCIL）に関する設定を行います。
setremotestorage	リモートストレージへの接続を管理します。
setroute	XSCFネットワークインターフェースのルーティング情報を設定します。
setservicetag	サービスタグを有効または無効にします。

setsmtp	Simple Mail Transfer Protocol（SMTP）サービスを設定します。
setsnmp	SNMP エージェントを管理します。
setsnmpusm	SNMPv3 エージェントの User-based Security Model（USM）設定します。
setsnmpvacm	SNMPv3 エージェントの View-based Access Control Model（VACM）設定を変更します。
setsscp	サービスプロセッサ間通信プロトコル（SSCP）の IP アドレスを割り当てます。
setssh	XSCF ネットワークで使用する Secure Shell（SSH）サービスに関する設定を行います。
settelnet	XSCF ネットワークで使用する Telnet サービスを開始または停止します。
settimezone	XSCF のタイムゾーンおよびサマータイムを設定します。
setupfru	デバイスのハードウェアに関する設定を行います。
setvbootconfig	Oracle Solaris のベリファイドブートのポリシーと、ブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書の有効／無効を設定します。
showad	認証とユーザー権限のために LDAP サーバを使用しているかを表示します。
showaltitude	システムの高度を表示します。
showaudit	監査システムの現在の状態を表示します。
showautologout	XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を表示します。
showbbstatus	SPARC M12/M10 システムの筐体の状態を表示します。
showboards	物理システムボード（PSB）の情報を表示します。
showcod	CPU コア アクティベーションの登録および設定情報を表示します。
showcodactivation	システムに追加した CPU コア アクティベーションキーの情報を表示します。
showcodactivationhistory	CPU コア アクティベーションキーの追加と削除のログ（Capacity on Demand（CoD）ログ）を表示します。

showcodusage	CPU コアリソースの使用情報を表示します。
showconsolepath	現在物理パーティション（PPAR）に接続されている制御ドメインコンソールの情報を表示します。
showdate	XSCF の時計の日付、時刻を表示します。
showdateinfo	XSCF および論理ドメインの日付、時刻を表示します。
showdateoffset	システム時刻と各物理パーティション（PPAR）の時刻との差分を表示します。
showdomainconfig	指定した物理パーティション（PPAR）の論理ドメイン構成情報を表示します。
showdomainstatus	現在の論理ドメインの状態を表示します。
showdualpowerfeed	二系統受電モードの状態を表示します。
showemailreport	電子メールレポートの設定データを表示します。
showenvironment	システムの吸気温度、温度センサー情報、電圧センサー情報、ファン回転情報を表示します。
showfru	デバイスのハードウェアに関する設定内容を表示します。
showhardconf	システムに搭載されている Field Replaceable Unit（FRU）の情報を表示します。
showhostname	マスタ筐体と XSCF がスタンバイ状態の筐体に設定されているホスト名を表示します。
showhsmode	CPU の高速モードの設定値を表示します。
showhttps	XSCF ネットワークに設定されている HTTPS サービスの状態を表示します。
showhwproperty	ハードウェア特性の設定を表示します。
showinterimpermit	CPU コアの一時利用機能の設定状態および情報を表示します。
showinterimpermitusage	CPU コア アクティベーションや CPU コアリソースに関する情報を表示します。
showldap	サービスプロセッサの Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）設定を表示します。
showldapssl	LDAP over SSL の構成およびメッセージを表示します。
showlocator	オペレーションパネルの CHECK LED の状態を表示します。

showloginlockout	ユーザーアカウントのロックアウト機能に設定されている時間を表示します。
showlogs	指定したログを表示します。
showlookup	認証とユーザー権限のために LDAP サーバを使用しているかを表示します。
showmonitorlog	監視メッセージログの内容をリアルタイムに表示します。
shownameserver	XSCF ネットワークに設定されているネームサーバおよびサーチパスを表示します。
shownetwork	XSCF に設定されているネットワークインターフェースの情報を表示します。
shownotice	XSCF Control Package（XCP）の著作権および著作権に関するライセンス情報を表示します。
showntp	XSCF ネットワークに設定されている NTP 情報を表示します。
showpacketfilters	XSCF ネットワークで設定されている IP パケットフィルタリングルールを表示します。
showpasswordpolicy	現在のパスワードポリシーの設定を表示します。
showpciboxdio	SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S の PCI スロットから PCI ボックスに搭載された PCI カードへの、ダイレクト I/O 機能の設定状況を表示します。
showpcl	現在設定されている物理パーティション（PPAR）構成情報（PCL）を表示します。
showpowercapping	消費電力制限の状態を表示します。
showpowerschedule	スケジュール運転情報を表示します。
showpowerupdelay	現在設定されているシステムの暖機運転時間と空調待ち時間を表示します。
showpparinfo	物理パーティション（PPAR）のリソース情報を表示します。
showpparmode	現在設定されている物理パーティション（PPAR）の動作モードを表示します。
showpparparam	指定した物理パーティション（PPAR）の次回起動時に設定される、制御ドメインの OpenBoot PROM 環境変数およびブートスクリプトを表示します。

showpparprogress	電源制御シーケンス中の、物理パーティション（PPAR）の詳細な状態を表示します。
showpparstatus	現在の物理パーティション（PPAR）の状態を表示します。
showremotepwrmgmt	SPARC M12/M10 システムの電源連動機能（Remote Cabinet Interface over Lan : RCIL）の設定およびノードの電源状態を表示します。
showremotestorage	リモートストレージの情報を表示します。
showresult	直前に実行したコマンドの終了ステータスを表示します。
showroute	XSCF ネットワークインターフェースに設定されているルーティング情報を表示します。
showservicetag	サービスタグの現在の状態を表示します。
showsmtp	Simple Mail Transfer Protocol（SMTP）の設定情報を表示します。
showsnmp	SNMP エージェントの設定情報と現在のステータスを表示します。
showsnmpusm	SNMP エージェントに関する現在の User-based Security Model（USM）情報を表示します。
showsnmpvacm	SNMP エージェントに関する現在の View-based Control Access（VACM）情報を表示します。
showsscp	サービスプロセッサ間通信プロトコル（SSCP）に割り当てられている IP アドレスを表示します。
showssh	XSCF ネットワークに設定されている Secure Shell（SSH）サービスの内容を表示します。
showstatus	縮退された Field Replaceable Unit（FRU）を表示します。
showtelnet	XSCF ネットワークに設定されている Telnet サービスの状態を表示します。
showtimezone	現在設定されている XSCF のタイムゾーンとサマータイム情報を表示します。
showuser	XSCF ユーザーアカウント情報を表示します。
showvbootcerts	各物理パーティション（PPAR）に設定されている、Oracle Solaris をブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書の情報を表示します。

`showvbootconfig`	Oracle Solaris のベリファイドブートのポリシーと、ブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書の有効／無効の設定を表示します。
`snapshot`	環境、ログ、エラー、および Field Replaceable Unit Identifier（FRUID）に関するデータを収集し、転送します。
`switchscf`	XSCF のアクティブ状態とスタンバイ状態を切り替えます。
`testsb`	指定した物理システムボード（PSB）に初期診断を行います。
`traceroute`	指定したホストまでのネットワーク経路を表示します。
`unlockmaintenance`	`addfru`(8) および `replacefru`(8) による多重起動ロック状態を解除します。
`version`	ファームウェアの版数を表示します。
`viewaudit`	監査レコードを表示します。
`xscfstartupmode`	SPARC M12-1/M10-1 の起動モードを設定します。

リファレンス

ユーザーコマンド

名前

exit - XSCF シェルを終了します。

形式

exit

説明

exit は、XSCF シェルを終了して閉じるコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

名前

man - XSCF シェルコマンドのマニュアルページを表示します。

形式

man *command_name* ...

man -h

説明

man は、指定した XSCF シェルコマンドのマニュアルページを表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

command_name	マニュアルページを表示するコマンドを指定します。スペースで区切って複数指定できます。 *command_name* に「Intro」を指定した場合は、XSCF シェルコマンドの一覧が表示されます。

詳細説明

マニュアルページが長い場合は、1 画面ごとに区切られて表示されます。このときは、キーを使用して、以下のように操作できます。

キー	説明
[Enter]	次の 1 行を表示します。
スペース	次の 1 ページ分を表示します。
[b]	半ページ分遡ります。
[q]	マニュアルページの表示を中断します。

マニュアルページを表示する場合は、ターミナルソフトの設定を TERM=vt100 としてください。

使用例

使用例 1 addboard(8) のマニュアルページを表示します。

```
XSCF> man addboard
```

使用例 2 XSCF シェルコマンドの一覧を表示します。

```
XSCF> man Intro
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

who - XSCF にログインしているユーザーアカウントを一覧表示します。

形式

who

who -h

説明

who は、XSCF にログインしているユーザーアカウントを一覧表示するコマンドです。

以下の情報が表示されます。

- XSCF ユーザーアカウント名
- 使用している端末
- アイドル時間
- ログイン時刻
- リモートホスト名

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 XSCF にログインしているユーザーアカウントを一覧表示します。

```
XSCF> who
USER       TTY      IDLE      TIME            HOST
Sxf        pts/0    00:00     Jul 17 05:29:11 jjjj.gggg.fujitsu.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

リファレンス

システム管理コマンド

名前

addboard - 物理システムボード（PSB）を物理パーティション（PPAR）に組み込む、または割り当てます。

形式

addboard [[-q] -{y|n}] [-f] [-v] [-c configure] [[-m *function=mode*]...] -p *ppar_id psb* [*psb*...]

addboard [[-q] -{y|n}] [-f] -c assign -p *ppar_id psb* [*psb*...]

addboard [[-q] -{y|n}] [-f] -c reserve -p *ppar_id psb* [*psb*...]

addboard -h

説明

addboard は、PPAR 構成情報（PCL）に基づいて、物理システムボード（PSB）を物理パーティション（PPAR）に組み込む、または割り当てるコマンドです。

物理システムボード（PSB）は、1 つのビルディングブロック（BB）を指します。

addboard は、SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 では使用できません。

以下のいずれかの組み込み手段が指定できます。

configure	指定した PPAR に PSB を組み込みます。組み込まれた PSB は、論理ドメインに割り当てできるようになります。PPAR の電源が切断されている、または制御ドメインの Oracle Solaris が稼働していない場合は、組み込まれずにエラーとなります。
assign	指定した PPAR に PSB を割り当てます。割り当てられた PSB は、指定した PPAR に予約され、他の PPAR からは組み込み、割り当てができなくなります。割り当てられたあとは、PPAR を再起動するか addboard を-c configure で実行した場合に、PPAR に組み込まれます。
reserve	指定した PPAR に PSB の組み込みを予約します。動作は-c assign と同じです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

platadm	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c assign	PSB を PPAR 構成に割り当てます。-c を省略した場合は、-c configure が指定されたとみなされます。
-c configure	PSB を PPAR 構成に組み込みます。-c を省略した場合は、-c configure が指定されたとみなされます。
-c reserve	指定した PPAR に PSB の組み込みを予約します。動作は-c assign と同じです。
-f	PSB を、強制的に PPAR へ組み込みます。 **注意 –** -f により強制的に PPAR へ PSB を追加した場合、追加したすべてのハードウェアリソースは正常に動作しない可能性があります。そのため、-f は通常の運用では使用しないことをお勧めします。-f を指定した場合は、必ず、追加した PSB やデバイスの状態を確認してください。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-m` *function=mode*

動作モードとその値を設定します。複数の *function* を同時に設定できます。`-m` を省略した場合は、デフォルトの値が設定されます。*function* には動作モードを指定します。以下のいずれかを指定できます。

`bind`

組み込み対象の PSB により追加されるリソースの自動割り当て機能（有効／無効）を設定します。
`addboard` 実行前に `deleteboard`(8) を実行し、リソースを削減していた場合に、追加リソースの自動割り当て機能を有効にすると、`deleteboard`(8) 実行前のリソース割り当て状態に戻ります。ただし、`addboard` 実行前に論理ドメイン構成を変更した場合、論理ドメイン構成変更時のリソース割り当て状態になります。

`diag`

PSB を PPAR 構成に組み込むときに実行する、ハードウェア診断のレベルを設定します。

function に `bind` を指定した場合、*mode* には以下のいずれかを指定できます。デフォルトは `resource` です。

`resource`	追加リソースの自動割り当て機能を有効にします。
`none`	追加リソースの自動割り当て機能を無効にします。追加されるリソースは指定した PPAR に空きリソースとなります。

function に `diag` を指定した場合、*mode* には以下のいずれかを指定できます。デフォルトは `min` です。

`off`	ハードウェア診断を実施しません。
`min`	ハードウェア診断レベルを標準に設定します。

`-n`

プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。

`-p` *ppar_id*

PSB を組み込む、または割り当てる PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。

`-q`

プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

`-v`

PSB の組み込み処理に対して、詳細な進捗状況を表示します。`-q` と一緒に指定した場合は無視されます。

SPARC M12-2S では、本オプションを省略しても詳細な進捗状況が出力されます。

`-y`

プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

psb 組み込む、または割り当てる PSB 番号を指定します。スペースで区切って複数指定できます。以下の形式で指定します。

xx-y

xx	BB-ID の 00 から 15 までの整数で指定します。
y	0 で固定となります。

詳細説明

- `-c configure` を指定した場合は、PSB に対してハードウェア診断が行われてから、PPAR に組み込まれます。そのため、コマンドの実行に時間がかかることがあります。
- `addboard` で PSB を割り当てたり、組み込んだりするには、あらかじめ、`setpcl`(8) を使用して、PCL を設定しておく必要があります。
- 対象の PPAR が電源投入処理中、または切断処理中にコマンドが実行された場合は、ビジー状態となります。PPAR の処理が終了したあとで、再度実行してください。
- PCL の詳細は `setpcl`(8)、`showpcl`(8) を参照してください。
- PPAR が稼働していない場合でも、`addboard` は実行できます。しかし、PPAR 稼働中に`-c configure` を指定して `addboard` を実行する場合は、Logical Domains（LDoms）Manager が動作している必要があります。
- PPAR DR 機能設定を無効にしている場合は、PPAR 稼働中に `addboard -c configure` を実行することはできません。PPAR DR 機能については、`setpparmode`(8)、`showpparmode`(8) を参照してください。
- PPAR で CPU コア アクティベーション違反が発生している場合は、PPAR 稼働中に `addboard -c configure` を実行することはできません。
- PSB の交換時に、`-m` を省略するか `-m bind=resource` を指定して `addboard` を実行した場合、`deleteboard`(8) を実行する前のリソースの割り当て状態に戻らないことがあります。交換前の CPU やメモリ、I/O デバイスのリソース量が、交換後のリソース量と異なっている場合は、リソースの割り当て状態を元に戻すことはできません。リソースの割り当て状態が元に戻らなかった場合、リソースは空きリソースになります。このときは、Oracle VM Server for SPARC の `ldm` コマンドを使用して、論理ドメインにリソースを割り当てなおしてください。
- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 に対して、PSB 00-0、01-0、02-0、03-0 を割り当てます。

```
XSCF> addboard -y -c assign -p 0 00-0 01-0 02-0 03-0
PSB#00-0 will be assigned into PPAR-ID 0. Continue?[y|n] :y
PSB#01-0 will be assigned into PPAR-ID 0. Continue?[y|n] :y
PSB#02-0 will be assigned into PPAR-ID 0. Continue?[y|n] :y
PSB#03-0 will be assigned into PPAR-ID 0. Continue?[y|n] :y
```

使用例 2 PPAR-ID 2 に対して、PSB 00-0、01-0、02-0、03-0 を強制的に割り当てます。

```
XSCF> addboard -f -c assign -p 2 00-0 01-0 02-0 03-0
PSB#00-0 will be assigned into PPAR-ID 0. Continue?[y|n] :y
PSB#01-0 will be assigned into PPAR-ID 0. Continue?[y|n] :y
PSB#02-0 will be assigned into PPAR-ID 0. Continue?[y|n] :y
PSB#03-0 will be assigned into PPAR-ID 0. Continue?[y|n] :y
```

使用例 3 SPARC M10-4S で、PPAR-ID 0 に対して PSB 01-0 を組み込みます。

```
XSCF> addboard -c configure -p 0 01-0
PSB#01-0 will be configured into PPAR-ID 0. Continue?[y|n] :y
Start connecting PSB to PPAR. [3600sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120.....150.....180.....210..end
Connected PSB to PPAR.
Start configuring PSB to Logical Domains (LDoms) Manager. [1800sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
Configured PSB to Logical Domains (LDoms) Manager.
Operation has completed
```

使用例 4 SPARC M10-4S で、PPAR-ID 0 に対して PSB 01-0, 03-0 を組み込みます。

```
XSCF> addboard -c configure -p 0 01-0 03-0
PSB#01-0 will be configured into PPAR-ID 0. Continue?[y|n] :y
Start connecting PSB to PPAR. [3600sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120.....150.....180.....210..end
Connected PSB to PPAR.
Start configuring PSB to Logical Domains (LDoms) Manager. [1800sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
Configured PSB to Logical Domains (LDoms) Manager.
PSB#03-0 will be configured into PPAR-ID 0. Continue?[y|n] :y
Start connecting PSB to PPAR. [3600sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120.....150.....180.....210..end
Connected PSB to PPAR.
Start configuring PSB to Logical Domains (LDoms) Manager. [1800sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
Configured PSB to Logical Domains (LDoms) Manager.
Operation has completed
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

deleteboard(8), **diagxbu**(8), **setpcl**(8), **setpparmode**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showfru**(8), **showpcl**(8), **showpparmode**(8), **showpparstatus**(8), **testsb**(8)

名前

addcodactivation - CPU コア アクティベーションキーをシステムに追加します。

形式

addcodactivation [[-q] -{y|n}] *key_signature*

addcodactivation [[-q] -{y|n}] [-u *user*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] -F *url*

addcodactivation [-V] [-{y|n}] [-u *user*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] -F *url*

addcodactivation -h

説明

addcodactivation は、指定した CPU コア アクティベーションキーを SPARC M12/M10 システムに追加するコマンドです。

注 – このコマンドを実行する前に、CPU コア アクティベーションキーを取得する必要があります。CPU コア アクティベーションキーを取得する場合は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』を参照してください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-F *url*
: 追加する CPU コア アクティベーションキーが含まれる URL を指定します。以下のような形式がサポートされています。

  ファイルは絶対パスで指定します。

  http://*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
  https://*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
  ftp://*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
  file:///media/usb_msd/*absolute_path*/*file*

-h
: 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-n
: プロンプトに対して自動的に「n」(no) と応答します。

-p *proxy*
: 転送に使用するプロキシサーバを指定します。-t *proxy_type* を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。*proxy* は *servername:port* の形式で指定します。

-q
: プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

-t *proxy_type*
: プロキシの種類を指定します。-p と一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。

-u *user*	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。127 文字以内で指定できます。
-V	詳細なネットワークアクティビティを表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。-q と一緒に指定できません。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

key_signature	追加する CPU コア アクティベーションキーを指定します。二重引用符（"）で囲んで指定します。

詳細説明

コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

使用例

使用例 1 SPARC M10-1 で、コピーした CPU コア アクティベーションキーを追加します。

```
XSCF> addcodactivation "Product: SPARC M10-1
SequenceNumber: 116
Cpu noExpiration 2
Text-Signature-SHA256-RSA2048:
SBxYBSmB32E1ctOidgWV09nGFnWKNtCJ5N3WSlowbRUYlVVySvjncfOrDNteFLzo
 :
 :
1TSgrjnee9FyEYITT+ddJQ=="
Above Key will be added, Continue?[y|n]: y
```

使用例 2 SPARC M12-2S で、コピーした CPU コア アクティベーションキーを追加します。

```
XSCF> addcodactivation "Product: SPARC M12-2S
SequenceNumber: 116
Cpu noExpiration 1
Text-Signature-SHA256-RSA2048:
SBxYBSmB32E1ctOidgWV09nGFnWKNtCJ5N3WSlowbRUYlVVySvjncfOrDNteFLzo
 :
 :
1TSgrjnee9FyEYITT+ddJQ=="
Above Key will be added, Continue?[y|n]: y
```

使用例 3 URL で指定した CPU コア アクティベーションキーファイルから CPU コア アクティベーションキーを一括で追加します。

```
XSCF> addcodactivation -F file:///media/usb_msd/cod_key.txt
Above Key will be added, Continue?[y|n]: y
```

```
.......... done.
successfully added Activation Key  count : 10.
```

使用例 4 URL で指定した CPU コア アクティベーションキーファイルから CPU コア アクティベーションキーを個別に追加します。

```
XSCF> addcodactivation -F file:///media/usb_msd/cod_key_M10-
1_116.txt
Above Key will be added, Continue?[y|n]: y
.......... done.
successfully added Activation Key  count : 1.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

deletecodactivation(8), **dumpcodactivation**(8), **restorecodactivation**(8), **setcod**(8), **showcod**(8), **showcodactivation**(8), **showcodactivationhistory**(8), **showcodusage**(8)

名前

addfru - Field Replaceable Unit（FRU）および筐体を増設します。

形式

addfru

addfru -h

説明

addfru は、FRU および筐体を増設するコマンドです。

FRU および筐体の選択や、確認、挿入など、増設に必要な設定を、メニュー形式で対話的に行うことができます。

addfru では、以下の FRU および筐体を増設できます。

- SPARC M10-1/M10-4
  - SPARC M10-1/M10-4 の電源ユニット（BB/PSU）
- SPARC M10-4S
  - SPARC M10-4S（BB）
  - SPARC M10-4S の電源ユニット（BB/PSU）
  - クロスバーボックスの電源ユニット（XB-Box/PSU）
- SPARC M12-1/M12-2
  - SPARC M12-1/M12-2 の電源ユニット（BB/PSU）
- SPARC M12-2S
  - SPARC M12-2S（BB）
  - SPARC M12-2S の電源ユニット（BB/PSU）
  - クロスバーボックスの電源ユニット（XB-Box/PSU）

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明

- 増設の対象となる FRU の実装状況または筐体の状態によっては、増設作業が実施できないことがあります。このとき、対象となる FRU または筐体を選択すると作業が実施できないことを表すエラーメッセージが表示されます。

  増設作業が実施できない条件は、以下のとおりです。

  - すべての FRU および筐体共通

    対象の筐体（対象が FRU のときはその FRU が搭載された筐体）が以下のいずれかの状態の場合

- ファームウェアのアップデート中の場合
- SCF READY 状態でない場合
- すでにシステムに認識されている場合

■ SPARC M12-2S/M10-4S およびクロスバーボックスの PSU

すべての FRU および筐体共通の条件にあてはまらない場合は、常に実施可能

■ SPARC M12-2S/M10-4S

- setsscp(8) を使用して、対象となる SPARC M12-2S/M10-4S の SSCP リンクに、IP アドレスを設定していない場合
- 対象の SPARC M12-2S/M10-4S に設定された BB-ID と同じ ID を持つ筐体が、以前システムに組み込まれていた場合（initbb(8) で減設した場合は除く）
- 選択された筐体が、システム構成上、接続できない筐体である場合

- SPARC M12-2S/M10-4S において､選択した BB-ID に対してすでに筐体のシリアル番号等の情報がシステムに登録されている場合は、エラーメッセージが表示され、addfru で増設することはできません。その場合は、replacefru(8) を使用して、交換作業を実施してください。
- addfru はマスタ XSCF でだけ実行できます。スタンバイ状態の XSCF で実行しようとするとエラーとなります。

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

initbb(8), **replacefru**(8), **setsscp**(8), **showhardconf**(8), **testsb**(8), **unlockmaintenance**(8)

名前 addpowerschedule - 自動電源制御（APCS）での電源投入／切断スケジュールを追加します。

形式

addpowerschedule {-p *ppar_id* |-a} -m daily {on= *ontime* |off= *offtime* |on= *ontime* off= *offtime*} term=*value*

addpowerschedule {-p *ppar_id* |-a} -m weekly {on= *ontime* |off= *offtime* |on= *ontime* off= *offtime*} pattern= *week* term= *value*

addpowerschedule {-p *ppar_id* |-a} -m monthly {on= *ontime* |off= *offtime* |on= *ontime* off= *offtime*} pattern= *value* term= *value*

addpowerschedule {-p *ppar_id* |-a} -m special {on= *ontime* |off= *offtime* |on= *ontime* off= *offtime*} date= *value*

addpowerschedule {-p *ppar_id* |-a} -m holiday date= *value*

addpowerschedule -h

説明 addpowerschedule は、自動電源制御（APCS）で使用する電源投入／切断スケジュールを追加するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

platadm	すべての物理パーティション（PPAR）に対して実行できます。
pparadm	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a	すべての PPAR を対象としたスケジュールを設定します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-m daily	毎日繰り返される電源制御スケジュールを追加します。
-m weekly	週単位で繰り返される電源制御スケジュールを追加します。
-m monthly	月単位で繰り返される電源制御スケジュールを追加します。
-m special	単発の電源制御スケジュールを追加します。
-m holiday	スケジュール運転の休止を追加します。
-p *ppar_id*	スケジュールを追加する PPAR-ID を設定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

`on=`*ontime*
: 電源の投入時間を設定します。*ontime* には、*hhm*`0` の形式で指定します。

hh	時（24 時制）を指定します。
m`0`	分（10 分単位）を指定します。

`off=`*offtime*
: 電源の切断時間を設定します。*offtime* には、*hhm*`0` の形式で指定します。

hh	時（24 時制）を指定します。
m`0`	分（10 分単位）を指定します。

`term=`*value*
: スケジュールの実施期間を設定します。`daily` の場合、*value* は *MMDD-mmdd* 形式で指定します。`weekly` と `monthly` の場合、*value* は *MM-mm* 形式で指定します。

MM	開始月を指定します。
DD	開始日を指定します。
mm	終了月を指定します。
dd	終了日を指定します。

`pattern=`*week*
: 週単位のスケジュールに対して、実施する曜日を指定します。*week* は以下の形式で指定できます。曜日を複数指定する場合は、曜日と曜日の間をカンマ（,）で区切ります。

`sun`	日曜日を指定します。
`mon`	月曜日を指定します。
`tue`	火曜日を指定します。
`wed`	水曜日を指定します。
`thu`	木曜日を指定します。
`fri`	金曜日を指定します。
`sat`	土曜日を指定します。

`pattern=`*value*
: 月単位のスケジュールに対して、実施する日にちを設定します。*value* には、*DD-dd* 形式で指定します。

DD	開始日を指定します。
dd	終了日を指定します。

`date=`*value*
: 単発のスケジュールまたはスケジュールの休止に対して、実施または休止する年月日を設定します。*value* には、*YYMMDD* 形式で指定します。

YY	西暦（2000-2037）の下 2 桁を指定します。
MM	月を指定します。
DD	日を指定します。

詳細説明

- 追加したスケジュールは、setpowerschedule(8) で PPAR-ID のスケジュール運転を有効に設定した場合に実施されます。ただし、オペレーションパネルのモードスイッチが Service の場合は実施されません。
- showpowerschedule(8) を使用すると、追加したスケジュールの内容を確認できます。
- 追加したスケジュールを削除する場合は、deletepowerschedule(8) を使用します。
- 存在しない *ppar_id* や時間、過去の年月日や無効なオプションを指定した場合には、異常終了します。
- スケジュールは、システム全体で最大 4096 件まで設定できます。
- 同じ時間にスケジュールが重複した場合には、以下の優先順位で実施されます。

  1. スケジュールの休止（holiday）
  2. 単発のスケジュール（special）
  3. 月単位のスケジュール（monthly）
  4. 週単位のスケジュール（weekly）
  5. 毎日のスケジュール（daily）

- 同じ優先順位で電源の投入と電源の切断が重複した場合には、電源の切断が実施されます。
- 論理ドメインの構成を変更した場合は、制御ドメイン上で ldm add-spconfig コマンドを実行し、最新の構成情報を XSCF に保存してください。保存しない場合は、自動電源切断処理が、正しく動作しないことがあります。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 1 を 1 月 1 日から 12 月 31 日の期間、毎日 9:00 から 21:30 に運転するスケジュールを追加します。

```
XSCF> addpowerschedule -p 1 -m daily on=0900 off=2130 term=0101-
1231
XSCF>
```

使用例 2 PPAR-ID 1 を 2 月から 4 月の期間、毎週月曜、火曜、水曜、木曜、金曜の 7:10 から 19:50 に運転するスケジュールを追加します。

```
XSCF> addpowerschedule -p 1 -m weekly on=0710 off=1950
pattern=mon,tue,wed,thu,fri term=02-04
XSCF>
```

使用例 3 PPAR-ID 1 を 5 月から 6 月の期間、毎月 1 日から 5 日の 9:20 から 18:40 に運転するスケジュールを追加します。

```
XSCF> addpowerschedule -p 1 -m monthly on=0920 off=1840 pattern=01-
05 term=05-06
XSCF>
```

使用例 4 PPAR-ID 1 を 2013 年 3 月 4 日限定で 0:00 から 23:50 に運転するスケジュールを追加します。

```
XSCF> addpowerschedule -p 1 -m special on=0000 off=2350 date=130304
XSCF>
```

使用例 5 PPAR-ID 1 に設定した 2013 年 5 月 4 日のスケジュールをキャンセルします。

```
XSCF> addpowerschedule -p 1 -m holiday date=130504
XSCF>
```

使用例 6 PPAR-ID 1 を 6 月から 8 月の期間、毎週月曜 7:10 に投入し、毎週金曜 19:50 に切断するスケジュールを追加します。

```
XSCF> addpowerschedule -p 1 -m weekly on=0710 pattern=mon term=06-
08
XSCF> addpowerschedule -p 1 -m weekly off=1950 pattern=fri term=06-
08
XSCF>
```

使用例 7 PPAR-ID 1 を年をまたいだ 12 月 1 日から 3 月 1 日の期間、毎日 6:00 から 22:00 に運転するスケジュールを追加します。

```
XSCF> addpowerschedule -p 1 -m daily on=0600 off=2200 term=1201-
0301
XSCF>
```

使用例 8 PPAR-ID 1 を年をまたいだ 11 月から 2 月の期間、毎月 1 日の 8:00 に投入し、毎月 29 日の 20:00 に切断するスケジュールを追加します。

```
XSCF> addpowerschedule -p 1 -m monthly on=0800 pattern=01-01
term=11-02
XSCF> addpowerschedule -p 1 -m monthly off=2000 pattern=29-29
term=11-02
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

deletepowerschedule(8), **setpowerschedule**(8), **showpowerschedule**(8)

名前

adduser - XSCF ユーザーアカウントを作成します。

形式

adduser [-u *UID*] *user*

adduser -h

説明

adduser は、新しい XSCF ユーザーアカウントを作成するコマンドです。

XSCF ユーザーアカウントは、XSCF の設定、操作、管理、および運用に使用されます。新しく作成したユーザーアカウントには、パスワードが設定されていません。したがって、password(8) でパスワードを設定するか、Secure Shell （SSH）による公開鍵をユーザー用に設定するまで、ログインに使用できません。作成されたユーザーアカウントはロックされますが、無効になっているわけではありません。指定できるユーザーアカウント数は、1 ユーザーアカウントあたり平均 10 文字とすると、100 ユーザーアカウントまでです。

ユーザーアカウントデータに対して Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）、Active Directory、または LDAP over SSL を使用するように XSCF で設定されている場合、ユーザーアカウント名および（設定している場合は）ユーザー識別子は、XSCF、LDAP、Active Directory または LDAP over SSL で未使用のものでなければなりません。

ユーザーアカウントを作成すると、現在のパスワードポリシーの値が、作成されたユーザーアカウント用のファイルに保存されます。パスワードポリシーの詳細は、setpasswordpolicy(8) を参照してください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-u *UID*	指定された識別子（UID）で新しいユーザーを作成します。*UID* を指定する場合は、100 から 60000 までの整数にする必要があります。-u を省略した場合は、ユーザー識別子は 100 以上の整数で自動的に割り当てられます。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

user	作成する XSCF ユーザーアカウント名を指定します。ユーザーアカウント名は、英小文字、数字、ハイフン「-」、アンダースコア「_」を組み合わせて 31 文字以内で指定します。大文字は使用できません。先頭文字は英小文字で指定してください。利用可能なユーザーアカウント名として jsmith、j_smith、j_smith-0123 などがあります。

使用例

使用例 1 新しいユーザーを作成します。

```
XSCF> adduser -u 359 jsmith
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

deleteuser(8), **disableuser**(8), **enableuser**(8), **password**(8), **setpasswordpolicy**(8), **showpasswordpolicy**(8), **showuser**(8)

名前

addvbootcerts - Oracle Solaris をブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書を追加します。

形式

addvbootcerts -p *ppar_id* [[-q] -{y|n}] *certname* [-u *username*] [-X *proxy* [-t *proxy_type*]] -F *url*

addvbootcerts -p *ppar_id* [-V] [-{y|n}] *certname* [-u *username*] [-X *proxy* [-t *proxy_type*]] -F *url*

addvbootcerts -p *ppar_id* [[-q] -{y|n}] *certname signature*

addvbootcerts -h

説明

addvbootcerts は、物理パーティション（PPAR）に対して、Oracle Solaris をブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書を新規追加するコマンドです。システムにプレインストールされている証明書とは別に用意した証明書をベリファイドブートで使用したい場合に、addvbootcerts を使用して追加することができます。

証明書は、使用されていない管理番号の小さい順に登録されます。証明書は PPAR ごとに最大で 5 個まで登録できます。すでに登録済みの証明書の管理番号は、showvbootcerts(8) で確認できます。

X.509 公開鍵証明書のサイズは 4 K バイト以内である必要があります。証明書のサイズが 4 K バイトを超えるとエラーとなります。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

platadm	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-F *url*
: ベリファイドブート用の X.509 公開鍵証明書をロードします。*url* は以下のいずれかの形式で指定します。

  ファイルは絶対パスで指定します。

  http://*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
  https://*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
  ftp://*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
  file:///media/usb_msd/*absolute_path*/*file*

-n
: プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。

-p *ppar_id*
: X.509 公開鍵証明書を追加する PPAR の PPAR-ID を指定します。

-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-t *proxy_type*	プロキシの種類を指定します。-p オプションと一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。
-u *username*	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。ユーザー名は 127 文字以内で指定してください。
-V	詳細なネットワークアクティビティを表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用します。-q と一緒に指定することはできません。
-X *proxy*	転送に使用するプロキシサーバを指定します。-t *proxy_type* を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。*proxy* は *servername:port* の形式で指定します。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

certname	証明書の名称を指定します。ファイル名と一致させる必要はありませんが、PPAR 内で一意にする必要があります。また、英数字、ハイフン (-)、アンダースコア (_) を組み合わせて 32 文字以内で指定する必要があります。先頭文字は英文字にしてください。
signature	コピーした X.509 公開鍵証明書を追加します。値は二重引用符 (“) で囲んで入力します。

使用例

使用例 1 コピーした X.509 公開鍵証明書を、「CUSTOM_CERT_1」の名称で PPAR-ID 0 に追加します。

```
XSCF> addvbootcerts -p 0 CUSTOM_CERT_1 "-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIFEzCCA/ugAwIBAgIQB62zBpmCOdvdYEFEcb4/cTANBgkqhkiG9w0BAQUFADCB
njELMAkGA1UEBhMCVVMxGzAZBgNVBAoTEk9yYWNsZSBDb3Jwb3JhdGlvbjEfMB0G
A1UECxMWVmVyaVNpZ24gVHJ1c3QgTmV0d29yazE1MDMGA1UECxMsQ2xhc3MgMiBN
 :
GuygEAGV+A==
-----END CERTIFICATE-----"
The above elfsign X.509 key certificate will be added to PPAR-ID 0,
Continue?[y|n]:
```

使用例 2 コピーした X.509 公開鍵証明書を、「CUSTOM_CERT_3」の名称で PPAR-ID

2 に追加します。確認のメッセージには「y」と応答します。

```
XSCF> addvbootcerts -p 2 CUSTOM_CERT_3 "-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIFEzCCA/ugAwIBAgIQB62zBpmCOdvdYEFEcb4/cTANBgkqhkiG9w0BAQUFADCB
njELMAkGA1UEBhMCVVMxGzAZBgNVBAoTEk9yYWNsZSBDb3Jwb3JhdGlvbjEfMB0G
A1UECxMWVmVyaVNpZ24gVHJ1c3QgTmV0d29yazE1MDMGA1UECxMsQ2xhc3MgMiBN
 :
GuygEAGV+A==
-----END CERTIFICATE-----"
The above elfsign X.509 key certificate will be added to PPAR-ID 2,
Continue?[y|n]:y
.... done.
successfully added this certificate to PPAR-ID 2 as index 3.
```

使用例 3 URL で指定した X.509 公開鍵証明書を、「customcert3」の名称で PPAR-ID 4 に追加します。確認のメッセージには「y」と応答します。

```
XSCF> addvbootcerts -p 4 customcert3 -F
file:///media/usb_msd/vboot/3rd_perty_cert_xyz
The above elfsign X.509 key certificate will be added to PPAR-ID 4,
Continue?[y|n]:y
.... done.
successfully added this certificate to PPAR-ID 4 as index 3.
```

使用例 4 X.509 公開鍵証明書がすでに最大数まで登録されている場合、証明書を追加しようとするとエラーになります。

```
XSCF> addvbootcerts -p 6 CUSTOM_CERT_6 -F
file:///media/usb_msd/vboot/3rd_perty_cert_xyz
Exceeded the number of certificates that can be registered to PPAR-ID 6.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

deletevbootcerts(8), **setvbootconfig**(8), **showvbootcerts**(8), **showvbootconfig**(8)

名前

applynetwork - XSCF ネットワークの内容を XSCF に適用します。

形式

applynetwork [[-q] -{y|n}] [-M]

applynetwork -h

説明

applynetwork は、設定された XSCF ネットワークの内容を XSCF に適用するコマンドです。

XSCF ネットワークの内容を設定するには、以下の 3 つの手順で行います。

1. 以下のコマンドでネットワークを設定します。
   - sethostname(8) で XSCF ホスト名と DNS ドメイン名を設定します。
   - setnameserver(8) でネームサーバとサーチパスを設定します。
   - setnetwork(8) で XSCF-LAN の IP アドレスとネットマスクを設定します。
   - setroute(8) で XSCF ネットワークインターフェースのルーティングを設定します。
   - setsscp(8) で SSCP の IP アドレスを設定します。
2. applynetwork を実行して、設定された内容を XSCF に適用します。
3. rebootxscf(8) を実行して、適用された内容をもとにすべての XSCF を再起動します。

注 – applynetwork を実行しないで XSCF を再起動した場合は、設定したネットワークの内容が XSCF に適用されません。また、設定した内容自体が消去されてしまいます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」(no) と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

- XSCF ネットワークの適用時には、XSCF-LAN の IP アドレスおよびネットマスクの設定が必須です。これらの内容が正しく設定されていない場合は、XSCF ネットワークの設定は適用されません。
- SPARC M12-2S/M10-4S で、up 状態となっている XSCF-LAN が以下のように設定されている場合はエラーとなります。setnetwork(8) で正しく設定してください。
  - xbbox#80-lan#0、xbbox#81-lan#0、引き継ぎ IP アドレス lan#0 のサブネットが異なる場合
  - xbbox#80-lan#1、xbbox#81-lan#1、引き継ぎ IP アドレス lan#1 のサブネットが異なる場合
  - xbbox#80-lan#0、xbbox#80-lan#1、SSCP リンクのいずれかのサブネットが重複している場合
  - xbbox#81-lan#0、xbbox#81-lan#1、SSCP リンクのいずれかのサブネットが重複している場合
  - xbbox#80-lan#0、xbbox#81-lan#1、SSCP リンクのいずれかのサブネットが重複している場合
  - xbbox#81-lan#0、xbbox#80-lan#1、SSCP リンクのいずれかのサブネットが重複している場合
  - bb#00-lan#0、bb#01-lan#0、引き継ぎ IP アドレス lan#0 のサブネットが異なる場合
  - bb#00-lan#1、bb#01-lan#1、引き継ぎ P アドレス lan#1 のサブネットが異なる場合
  - bb#00-lan#0、bb#00-lan#1、SSCP リンクのいずれかのサブネットが重複している場合
  - bb#01-lan#0、bb#01-lan#1、SSCP リンクのいずれかのサブネットが重複している場合
  - bb#00-lan#0、bb#01-lan#1、SSCP リンクのいずれかのサブネットが重複している場合
  - bb#01-lan#0、bb#00-lan#1、SSCP リンクのいずれかのサブネットが重複している場合
  - リモートストレージで使用するスレーブ XSCF のネットワークインターフェースの IP アドレスと重複している場合
- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 で、up 状態となっている bb#00-lan#0、bb#00-lan#1 のサブネットが重複している場合はエラーとなります。setnetwork(8) で正しく設定してください。
- sethostname(8) で設定した DNS ドメイン名と setnameserver(8) で設定したサーチパスの文字数の合計が 256 文字を超える場合は、エラーとなります。
- 搭載されている SPARC M12/M10 システムの筐体またはクロスバーボックスすべてに対して、SSCP リンクの IP アドレスが設定されていない場合はエラーとなります。setsscp(8) で正しく設定してください。

- ルーティング情報のゲートウェイアドレスに、どの XSCF-LAN にも含まれていない IP アドレスがあった場合はエラーとなります。setroute(8) で正しく設定してください。
- ルーティング情報の宛先となるIPアドレスとSSCPリンクのサブネットが重複している場合は、エラーとなります。setsscp(8) で正しく設定してください。
- リモートストレージで使用するスレーブXSCFのネットワークインターフェースの IP アドレスと SSCP リンクの IP アドレスが重複している場合は、エラーとなります。setsscp(8) で正しく設定してください。
- リモートストレージで使用するスレーブXSCFのネットワークインターフェースの IP アドレスと、そのスレーブ XSCF を含む SSCP リンクのいずれかのサブネットが重複している場合は、エラーとなります。setsscp(8) で正しく設定してください。
- 複数の XSCF で構成されたシステムの場合、XSCF フェイルオーバー中は applynetwork を実行しないでください。

使用例

使用例 1 ビルディングブロック構成の SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）で、以下の ネットワークの設定を XSCF の再起動後に適用します。

- ホスト名（bb#00）: hostname-0
- ホスト名（bb#01）: hostname-1
- DNS ドメイン名 : example.com
- ネームサーバ : 10.23.4.3
- インターフェース : bb#00-lan#0 を起動時に UP にする
- IP アドレス（bb#00-lan#0）: 10.24.144.214
- ネットマスク（bb#00-lan#0）: 255.255.255.0
- ルーティング（デフォルトゲートウェイ）: 10.24.144.1
- インターフェース : bb#01-lan#0 を起動時に UP にする
- IP アドレス（bb#01-lan#0）: 10.24.144.215
- ネットマスク（bb#01-lan#0）: 255.255.255.0
- ルーティング（bb#01-lan#0 のデフォルトゲートウェイ）: 10.24.144.1
- IP アドレス（SSCP）: 192.168.1.1 から 192.168.1.4、192.168.1.9 から 192.168.1.12、192.168.1.17 から 192.168.1.18
- ネットマスク（SSCP）: 255.255.255.248、255.255.255.248、255.255.255.252
- スレーブ XSCF の IP アドレス（bb#02-lan#0）: 10.24.144.216
- スレーブ XSCF のネットマスク（bb#02-lan#0）: 255.255.255.0

■ スレーブ XSCF のデフォルトゲートウェイ（bb#02-lan#0）: 10.24.144.1

```
XSCF> applynetwork
The following network settings will be applied:
  bb#00 hostname   :hostname-0
  bb#01 hostname   :hostname-1
  DNS domain name  :example.com
  nameserver       :10.23.4.3

  interface        :bb#00-lan#0
  status           :up
  IP address       :10.24.144.214
  netmask          :255.255.255.0
  route            : -n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

  interface        :bb#00-lan#1
  status           :down
  IP address       :
  netmask          :
  route            :

  interface        :bb#01-lan#0
  status           :up
  IP address       :10.24.144.215
  netmask          :255.255.255.0
  route            : -n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

  interface        :bb#01-lan#1
  status           :down
  IP address       :
  netmask          :
  route            :

  interface        :lan#0
  status           :down
  IP address       :
  netmask          :

  interface        :lan#1
  status           :down
  IP address       :
  netmask          :

  SSCP network ID:0 netmask    :255.255.255.248

  interface                    :bb#00-if#0
  IP address                   :192.168.1.1

  interface                    :bb#01-if#0
  IP address                   :192.168.1.2

  interface                    :bb#02-if#0
  IP address                   :192.168.1.3
```

```
  interface                     :bb#03-if#0
  IP address                    :192.168.1.4

  SSCP network ID:1 netmask     :255.255.255.248

  interface                     :bb#00-if#1
  IP address                    :192.168.1.10

  interface                     :bb#01-if#1
  IP address                    :192.168.1.9

  interface                     :bb#02-if#1
  IP address                    :192.168.1.11

  interface                     :bb#03-if#1
  IP address                    :192.168.1.12

  SSCP network ID:2 netmask     :255.255.255.252

  interface                     :bb#00-if#2
  IP address                    :192.168.1.17

  interface                     :bb#01-if#2
  IP address                    :192.168.1.18

Remote Storage settings:

  interface        :bb#02-lan#0
  IP address       :10.24.144.216
  netmask          :255.255.255.0
  gateway          :10.24.144.1

  interface        :bb#02-lan#1
  IP address       :
  netmask          :
  gateway          :

  interface        :bb#03-lan#0
  IP address       :
  netmask          :
  gateway          :

  interface        :bb#03-lan#1
  IP address       :
  netmask          :
  gateway          :

Continue? [y|n] :y
```

使用例 2 ビルディングブロック構成の SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）で、以下の ネットワークの設定を XSCF の再起動後に適用します。

- ホスト名（xbbox#80）: hostname-0
- ホスト名（xbbox#81）: hostname-1
- DNS ドメイン名 : example.com
- ネームサーバ : 10.23.4.3
- インターフェース : xbbox#80-lan#0 を起動時に UP にする
- IP アドレス（xbbox#80-lan#0）: 10.24.144.214
- ネットマスク（xbbox#80-lan#0）: 255.255.255.0
- ルーティング（デフォルトゲートウェイ）: 10.24.144.1
- インターフェース : xbbox#81-lan#0 を起動時に UP にする
- IP アドレス（xbbox#81-lan#0）: 10.24.144.215
- ネットマスク（xbbox#81-lan#0）: 255.255.255.0
- ルーティング（xbbox#81-lan#0 のデフォルトゲートウェイ）: 10.24.144.1
- IP アドレス（SSCP）: 192.168.1.1 から 192.168.1.17、192.168.2.1 から 192.168.2.17、192.168.3.1 から 192.168.3.4、192.168.4.1 から 192.168.4.4、192.168.5.1 から 192.168.5.2
- ネットマスク（SSCP）: 255.255.255.0、255.255.255.0、255.255.255.0、255.255.255.0、255.255.255.0
- スレーブ XSCF の IP アドレス（bb#00-lan#0）: 10.24.144.216
- スレーブ XSCF のネットマスク（bb#00-lan#0）: 255.255.255.0
- スレーブ XSCF のデフォルトゲートウェイ（bb#00-lan#0）: 10.24.144.1

```
XSCF> applynetwork
The following network settings will be applied:
  xbbox#80 hostname:hostname-0
  xbbox#81 hostname:hostname-1
  DNS domain name  :example.com
  nameserver       :10.23.4.3

  interface        :xbbox#80-lan#0
  status           :up
  IP address       :10.24.144.214
  netmask          :255.255.255.0
  route            : -n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

  interface        :xbbox#80-lan#1
  status           :down
  IP address       :
  netmask          :
  route            :

  interface        :xbbox#81-lan#0
  status           :up
  IP address       :10.24.144.215
  netmask          :255.255.255.0
```

```
route             : -n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

interface         :xbbox#81-lan#1
status            :down
IP address        :
netmask           :
route             :

interface         :lan#0
status            :down
IP address        :
netmask           :

interface         :lan#1
status            :down
IP address        :
netmask           :

SSCP network ID:0 netmask    :255.255.255.0

interface                    :xbbox#80-if#0
IP address                   :192.168.1.1

interface                    :bb#00-if#0
IP address                   :192.168.1.2

interface                    :bb#01-if#0
IP address                   :192.168.1.3

interface                    :bb#02-if#0
IP address                   :192.168.1.4

interface                    :bb#03-if#0
IP address                   :192.168.1.5

interface                    :bb#04-if#0
IP address                   :192.168.1.6

interface                    :bb#05-if#0
IP address                   :192.168.1.7

interface                    :bb#06-if#0
IP address                   :192.168.1.8

interface                    :bb#07-if#0
IP address                   :192.168.1.9

interface                    :bb#08-if#0
IP address                   :192.168.1.10

interface                    :bb#09-if#0
IP address                   :192.168.1.11

interface                    :bb#10-if#0
```

```
IP address                    :192.168.1.12

interface                     :bb#11-if#0
IP address                    :192.168.1.13

interface                     :bb#12-if#0
IP address                    :192.168.1.14

interface                     :bb#13-if#0
IP address                    :192.168.1.15

interface                     :bb#14-if#0
IP address                    :192.168.1.16

interface                     :bb#15-if#0
IP address                    :192.168.1.17

SSCP network ID:1 netmask     :255.255.255.0

interface                     :xbbox#81-if#1
IP address                    :192.168.2.1

interface                     :bb#00-if#1
IP address                    :192.168.2.2

interface                     :bb#01-if#1
IP address                    :192.168.2.3

interface                     :bb#02-if#1
IP address                    :192.168.2.4

interface                     :bb#03-if#1
IP address                    :192.168.2.5

interface                     :bb#04-if#1
IP address                    :192.168.2.6

interface                     :bb#05-if#1
IP address                    :192.168.2.7

interface                     :bb#06-if#1
IP address                    :192.168.2.8

interface                     :bb#07-if#1
IP address                    :192.168.2.9

interface                     :bb#08-if#1
IP address                    :192.168.2.10

interface                     :bb#09-if#1
IP address                    :192.168.2.11

interface                     :bb#10-if#1
IP address                    :192.168.2.12
```

```
    interface                      :bb#11-if#1
    IP address                     :192.168.2.13

    interface                      :bb#12-if#1
    IP address                     :192.168.2.14

    interface                      :bb#13-if#1
    IP address                     :192.168.2.15

    interface                      :bb#14-if#1
    IP address                     :192.168.2.16

    interface                      :bb#15-if#1
    IP address                     :192.168.2.17

    SSCP network ID:2 netmask      :255.255.255.0

    interface                      :xbbox#80-if#2
    IP address                     :192.168.3.1

    interface                      :xbbox#81-if#2
    IP address                     :192.168.3.2

    interface                      :xbbox#82-if#2
    IP address                     :192.168.3.3

    interface                      :xbbox#83-if#2
    IP address                     :192.168.3.4

    SSCP network ID:3 netmask      :255.255.255.0

    interface                      :xbbox#80-if#3
    IP address                     :192.168.4.1

    interface                      :xbbox#81-if#3
    IP address                     :192.168.4.2

    interface                      :xbbox#82-if#3
    IP address                     :192.168.4.3

    interface                      :xbbox#83-if#3
    IP address                     :192.168.4.4

    SSCP network ID:4 netmask      :255.255.255.0

    interface                      :xbbox#80-if#4
    IP address                     :192.168.5.1

    interface                      :xbbox#81-if#4
    IP address                     :192.168.5.2

  Remote Storage settings:
```

```
interface          :bb#00-lan#0
IP address         :10.24.144.216
netmask            :255.255.255.0
gateway            :10.24.144.1

interface          :bb#00-lan#1
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#01-lan#0
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#01-lan#1
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#02-lan#0
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#02-lan#1
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#03-lan#0
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#03-lan#1
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#04-lan#0
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#04-lan#1
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#05-lan#0
IP address         :
netmask            :
gateway            :
```

```
interface          :bb#05-lan#1
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#06-lan#0
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#06-lan#1
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#07-lan#0
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#07-lan#1
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#08-lan#0
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#08-lan#1
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#09-lan#0
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#09-lan#1
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#10-lan#0
IP address         :
netmask            :
gateway            :

interface          :bb#10-lan#1
IP address         :
netmask            :
```

```
  gateway          :

  interface        :bb#11-lan#0
  IP address       :
  netmask          :
  gateway          :

  interface        :bb#11-lan#1
  IP address       :
  netmask          :
  gateway          :

  interface        :bb#12-lan#0
  IP address       :
  netmask          :
  gateway          :

  interface        :bb#12-lan#1
  IP address       :
  netmask          :
  gateway          :

  interface        :bb#13-lan#0
  IP address       :
  netmask          :
  gateway          :

  interface        :bb#13-lan#1
  IP address       :
  netmask          :
  gateway          :

  interface        :bb#14-lan#0
  IP address       :
  netmask          :
  gateway          :

  interface        :bb#14-lan#1
  IP address       :
  netmask          :
  gateway          :

  interface        :bb#15-lan#0
  IP address       :
  netmask          :
  gateway          :

  interface        :bb#15-lan#1
  IP address       :
  netmask          :
  gateway          :

Continue? [y|n] :y
```

使用例 3 SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 で、以下の ネットワークの設定を XSCF の再起動後に適用します。

- ホスト名（bb#00）: hostname-0
- DNS ドメイン名 : example.com
- ネームサーバ : 10.23.4.3
- インターフェース : bb#00-lan#0 を起動時に UP にする
- IP アドレス（bb#00-lan#0）: 10.24.144.214
- ネットマスク（bb#00-lan#0）: 255.255.255.0
- ルーティング（デフォルトゲートウェイ）: 10.24.144.1

```
XSCF> applynetwork
The following network settings will be applied:
  bb#00 hostname   :hostname-0
  DNS domain name  :example.com
  nameserver       :10.23.4.3

  interface        :bb#00-lan#0
  status           :up
  IP address       :10.24.144.214
  netmask          :255.255.255.0
  route            : -n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

  interface        :bb#00-lan#1
  status           :down
  IP address       :
  netmask          :
  route            :

Continue? [y|n] :y
```

使用例 4 bb#00-lan#0、bb#00-lan#1 のルーティングを設定しないで、XSCF ネットワークの設定を適用します。

```
XSCF> applynetwork
The following network settings will be applied:
  bb#00 hostname   :hostname-0
  DNS domain name  :example.com
  nameserver       :10.23.4.3

  interface        :bb#00-lan#0
  status           :up
  IP address       :10.24.144.214
  netmask          :255.255.255.0
  route            :

  interface        :bb#00-lan#1
  status           :up
  IP address       :10.24.131.215
```

```
    netmask           :255.255.255.0
    route             :

Continue? [y|n] :y
```

使用例 5 すべてのインターフェースが down 状態で、XSCF ネットワークの設定を適用します。

```
XSCF> applynetwork
The following network settings will be applied:
    bb#00 hostname    :hostname-0
    DNS domain name   :example.com
    nameserver        :10.23.4.3

    interface         :bb#00-lan#0
    status            :down
    IP address        :10.24.144.214
    netmask           :255.255.255.0
    route             :

    interface         :bb#00-lan#1
    status            :down
    IP address        :10.24.131.215
    netmask           :255.255.255.0
    route             :

Continue? [y|n] :y
```

使用例 6 ビルディングブロック構成の SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）で、マスタ XSCF は正常で、スタンバイ状態の XSCF が異常のときに、XSCF ネットワークの設定を適用します。

```
XSCF> applynetwork
The set state is as follows now.
    bb#00 hostname    :hostname-0
    bb#01 hostname    :
    DNS domain name   :example.com
    nameserver        :10.23.4.3

    interface         :bb#00-lan#0
    status            :up
    IP address        :10.24.144.214
    netmask           :255.255.255.0
    route             :-n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

    interface         :bb#00-lan#1
    status            :down
    IP address        :10.24.131.215
    netmask           :255.255.255.0
    route             :

    interface         :bb#01-lan#0
```

```
status            :down
IP address        :
netmask           :
route             :

interface         :bb#01-lan#1
status            :down
IP address        :
netmask           :
route             :

interface         :lan#0
status            :down
IP address        :
netmask           :

interface         :lan#1
status            :down
IP address        :
netmask           :

SSCP network ID:0 netmask    :255.255.255.248

interface                    :bb#00-if#0
IP address                   :192.168.1.1

interface                    :bb#01-if#0
IP address                   :192.168.1.2

interface                    :bb#02-if#0
IP address                   :192.168.1.3

interface                    :bb#03-if#0
IP address                   :192.168.1.4

SSCP network ID:1 netmask    :255.255.255.248

interface                    :bb#00-if#1
IP address                   :192.168.1.10

interface                    :bb#01-if#1
IP address                   :192.168.1.9

interface                    :bb#02-if#1
IP address                   :192.168.1.11

interface                    :bb#03-if#1
IP address                   :192.168.1.12

SSCP network ID:2 netmask    :255.255.255.252

interface                    :bb#00-if#2
IP address                   :192.168.1.17
```

```
  interface                     :bb#01-if#2
  IP address                    :192.168.1.18

Remote Storage settings:

  interface         :bb#02-lan#0
  IP address        :
  netmask           :
  gateway           :

  interface         :bb#02-lan#1
  IP address        :
  netmask           :
  gateway           :

  interface         :bb#03-lan#0
  IP address        :
  netmask           :
  gateway           :

  interface         :bb#03-lan#1
  IP address        :
  netmask           :
  gateway           :

bb#01 could not apply the network settings.
Continue? [y|n] :y
```

使用例 7 SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 で、XSCF ネットワークの設定を適用します。プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> applynetwork -y
The following network settings will be applied:
  bb#00 hostname    :hostname-0
  DNS domain name   :example.com
  nameserver        :10.23.4.3

  interface         :bb#00-lan#0
  status            :up
  IP address        :10.24.144.214
  netmask           :255.255.255.0
  route             : -n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

  interface         :bb#00-lan#1
  status            :down
  IP address        :
  netmask           :
  route             :

Continue? [y|n] :y
Please reset the all XSCFs by rebootxscf to apply the network settings.
```

```
Please confirm that the settings have been applied by executing
showhostname, shownetwork, showroute, showsscp and shownameserver after
rebooting the all XSCFs.
```

使用例 8 DNS サーバとサーチパスを設定したあとに、XSCF ネットワークの設定を適用します。

- ネームサーバ : 10.23.4.3、10.24.144.5、10.24.131.7
- サーチパス : example1.com、example2.com、example3.com、example4.com、example5.com

```
XSCF> applynetwork
The following network settings will be applied:
  bb#00 hostname   :hostname-0
  DNS domain name   :example.com
  nameserver        :10.23.4.3
  nameserver        :10.24.144.5
  nameserver        :10.24.131.7
  search            :example1.com
  search            :example2.com
  search            :example3.com
  search            :example4.com
  search            :example5.com

  interface         :bb#00-lan#0
  status            :up
  IP address        :10.24.144.214
  netmask           :255.255.255.0
  route             : -n 0.0.0.0 -m 0.0.0.0 -g 10.24.144.1

  interface         :bb#00-lan#1
  status            :down
  IP address        :
  netmask           :
  route             :

Continue? [y|n] :y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

rebootxscf(8), **sethostname**(8), **setnameserver**(8), **setnetwork**(8), **setremotestorage**(8), **setroute**(8), **setsscp**(8)

名前

clearremotepwrmgmt - SPARC M12/M10 システムの電源連動機能（Remote Cabinet Interface over Lan : RCIL）の管理情報を削除します。

形式

clearremotepwrmgmt [-a|-G *groupid*] [[-q] -{y|n}]

clearremotepwrmgmt -h

説明

clearremotepwrmgmt は、電源連動グループに登録されていたホストノードにある電源連動グループの管理情報を削除するコマンドです。

ホストノードを電源連動グループへ組み込んだり、電源連動グループから削除したりする前に、対象のホストノードで実行する必要があります。I/O ノードには管理情報が保存されないため、clearremotepwrmgmt を I/O ノードで実行する必要はありません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	設定されているすべての電源連動グループの管理情報を削除します。-a と-G を省略した場合は、-a が指定されたとみなされます。
-G *groupid*	削除する電源連動グループを設定します。*groupid* には削除するグループ ID を 1 から 32 までの整数で 1 つだけ指定します。-a と-G を省略した場合は、-a が指定されたとみなされます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- clearremotepwrmgmt を実行する場合、電源連動機能が有効な場合はエラーとなります。あらかじめ setremotepwrmgmt -c disable によって無効にする必要があります。電源連動グループが存在していない場合は正常に終了します。
- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

使用例

使用例 1 ホストノードにある電源連動グループの管理情報を削除します。

```
XSCF> clearremotepwrmgmt
```

```
All remote power management group informations are cleared.Continue?
[y|n]: y
The command completed successfully.
XSCF>
```

使用例 2 ホストノードにあるすべての電源連動グループの管理情報を削除します。

```
XSCF> clearremotepwrmgmt -a
All remote power management group informations are cleared.Continue?
[y|n]: y
The command completed successfully.
XSCF>
```

使用例 3 ホストノードにある電源連動グループ 1 の管理情報を削除します。

```
XSCF> clearremotepwrmgmt -G 1
Group#01 remote power management group informations are cleared.Continue?
[y|n]: y
The command completed successfully.
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

getremotepwrmgmt(8), **setpacketfilters**(8), **setremotepwrmgmt**(8), **showremotepwrmgmt**(8)

名前 console - 制御ドメインコンソールに接続します。

形式 **console** [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* [-f | -r] [-s *escapeChar*]

console -h

説明 console は、XSCF シェルから、指定した物理パーティション（PPAR）の制御ドメインコンソールに接続するコマンドです。

制御ドメインコンソールには、入出力可能な RW コンソールと参照のみ可能な RO コンソールがあります。1 つの PPAR に対して、RW コンソールは 1 つだけ、RO コンソールは複数接続できます。すでに RW コンソールが接続されている場合に、RW コンソールに接続しようとするとエラーになります。この場合でも、platadm 権限または対象の PPAR に対して pparadm 権限を持つユーザーであれば、強制的に RW コンソールに接続できます。このとき、現在接続されている RW コンソールは切断されます。

制御ドメインコンソールを終了して XSCF シェルに戻る場合は、[Enter] キーを押してから、[#] +[.]（ピリオド）キーを押します。

注 – ドメインからログアウトしないでドメインコンソールから XSCF シェルに戻った場合、あるいは、ドメインからログアウトしないで XSCF シェルを終了した場合は、自動的にドメインからログアウトされます。このとき、ドメインコンソールから起動したバックグラウンドプログラムに対しても終了シグナルが送信される場合があります。

注 – OpenBoot PROM 環境変数の input-device を "*keyboard*"、output-device を "*screen*" に設定して USB キーボードおよびグラフィックスカード経由で制御ドメインコンソールを使用している場合、本コマンドを使用して、制御ドメインコンソールを RW コンソールに接続しないでください。-r を指定して、RO コンソールで接続してください。誤って、制御ドメインコンソールを RW コンソールとして接続すると、コンソールが出力されなくなります。コンソールを再び出力させるには、本コマンドを終了させて、OS を再起動してください。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-f`	強制的に RW コンソールに接続します。現在接続されている RW コンソールは切断されます。`platadm` または対象 PPAR に対して `pparadm` 権限を持つユーザーだけが指定できます。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-n`	プロンプトに対して自動的に「n」(no) と応答します。
`-p` *ppar_id*	接続する PPAR-ID を設定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定できます。
`-q`	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
`-r`	RO コンソールに接続します。
`-s` *escapeChar*	エスケープ記号を設定します。デフォルトは「#」です。*escapeChar* として、以下の文字を指定できます。二重引用符 (") で囲んで指定します。 「#」、「@」、「^」、「&」、「?」、「*」、「=」、「.」、「|」 指定したエスケープ記号は `console` を実行したセッションにだけ有効です。
`-y`	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- 制御ドメインコンソールでは、行頭文字で使用される 「#」はエスケープ記号とみなされます。エスケープ記号は、コンソールに対して特別な処理をさせる場合に指定します。「#」との組み合わせで指定できる処理の例は、以下のとおりです。

「#」+「?」	ステータスメッセージを出力する
「#」+「.」(ピリオド)	制御ドメインコンソールを切断する

- 行頭でコンソールに「#」を入力する場合は、[#] キーを 2 回押します。
- 現在 PPAR に接続されている制御ドメインコンソールの情報を表示する場合は、`showconsolepath`(8) を使用します。

使用例

使用例 1　PPAR-ID 0 の RW コンソールに接続します。

```
XSCF> console -p 0

Console contents may be logged.
```

```
Connect to PPAR-ID 0?[y|n] :y
:
<<ドメインコンソールの入出力の内容が表示されます。>>
:
<<[#]+[?] キーを押した場合はステータスメッセージが出力されます。>>
console: read write mode.
:
<<[#]+[.] キーを押して制御ドメインコンソールを切断します。>>
exit from console.
XSCF>
```

使用例 2 PPAR-ID 1 の RW コンソールに強制的に接続します。このときエスケープ記号に「#」を指定します。

```
XSCF> console -p 1 -f -s "#"

Console contents may be logged.
Connect to PPAR-ID 1?[y|n] :y
:
<<ドメインコンソールの入出力の内容が表示されます。>>
:
<<[#]+[?] キーを押した場合はステータスメッセージが出力されます。>>
console: read write mode.
:
<<[#]+[.] キーを押して制御ドメインコンソールを切断します。>>
exit from console.
XSCF>
```

使用例 3 PPAR-ID 2 の RO コンソールに接続します。

```
XSCF> console -p 2 -r

Console contents may be logged.
Connect to PPAR-ID 2? [y|n]: y
:
<<ドメインコンソールの入出力の内容が表示されます。>>
:
<<[#]+[?] キーを押した場合はステータスメッセージが出力されます。>>
console: read only mode.
:
<<[#]+[.] キーを押して制御ドメインコンソールを切断します。>>
exit from console.
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

sendbreak(8), **showconsolepath**(8)

名前

deleteboard - 物理システムボード（PSB）を物理パーティション（PPAR）構成から切り離します。

形式

deleteboard [[-q] -{y|n}] [-f] [-v] [-c disconnect] [[-m *function*=*mode*]...] *psb* [*psb*...]

deleteboard [[-q] -{y|n}] [-f] [-v] -c unassign [[-m *function*=*mode*]...] *psb* [*psb*...]

deleteboard [[-q] -{y|n}] [-f] -c reserve *psb* [*psb*...]

deleteboard -h

説明

deleteboard は、現在組み込まれている PPAR 構成から物理システムボード（PSB）を切り離すコマンドです。

物理システムボード（PSB）は、1 つのビルディングブロック（BB）を指します。

deleteboard は、SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 では使用できません。

PSB を切り離したあとの状態によって、以下のいずれかの切り離し手段が指定できます。

disconnect	PSB を PPAR 構成から切り離して、割り当て状態にします。PSB は PPAR 構成に割り当てられたままのため、PPAR を再起動するか addboard(8) を実行することで、再び PPAR に組み込むことができます。
unassign	PSB を PPAR 構成から完全に切り離して、システムボードプールにします。システムボードプールとなった PSB は、他の PPAR 構成に組み込んだり、割り当てたりできるようになります。
reserve	PSB を PPAR 構成からすぐに切り離さず、切り離しの予約だけを行います。予約されたあとは、指定した PPAR が停止したときに、PPAR 構成から PSB が切り離されてシステムボードプールになります。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

platadm	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c disconnect	PSB を PPAR 構成から切り離して、割り当て状態にします。-c を省略した場合は、-c disconnect が指定されたとみなされます。

-c reserve	PSB の切り離しを予約します。-c を省略した場合は、-c disconnect が指定されたとみなされます。
-c unassign	PSB を PPAR 構成から完全に切り離して、システムボードプールにします。-c を省略した場合は、-c disconnect が指定されたとみなされます。
-f	指定した PSB を、強制的に切り離します。

注意 – -f で PSB を PPAR から強制的に切り離す場合、CPU がバインドされているプロセスや、デバイスにアクセスしているプロセスに対して、重要な問題が発生する可能性があります。そのため、-f は通常の運用では使用しないことを推奨します。-f を指定した場合は、必ず PPAR の状態や業務プロセスの状態を確認してください。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-m *function=mode* 動作モードとその値を設定します。*function* には動作モードを指定します。以下のいずれかを指定できます。

`unbind`

切り離し対象の PSB のリソースを使用している論理ドメインを移動する場合、移動先のリソースが不足しているときの動作モードを設定します。

移動先にリソースが確保できなかった場合、以下のいずれかの処理が実施されます。

- リソースの移動が必要な論理ドメイン自身、または PPAR 内の、いずれかの論理ドメインのリソースを削減して、移動先のリソースを確保します。
- PPAR 内のいずれかの論理ドメインをシャットダウンして移動先のリソースを確保します。

function に `unbind` を指定した場合、*mode* には以下のいずれかを指定できます。デフォルトは `none` です。

`none` 移動先のリソースを確保しません。移動先のリソースが不足している場合は `deleteboard` がエラーとなります。PPAR が factory-default で稼働している場合は指定できません。エラーになる場合、Oracle VM Server for SPARC の仮想 DR 機能によって、論理ドメインから CPU コアやメモリを削除しておく必要があります。

`resource` リソースの移動が必要な論理ドメインのリソース、または PPAR 内の、いずれかの論理ドメインのリソースを削減し、移動先のリソースを確保します。移動先リソースを確保するためにいずれかの論理ドメインがシャットダウンされることはありません。

`shutdown` リソースの移動が必要な論理ドメインのリソース、またはいずれかの論理ドメインのリソースを削減し、移動先のリソースを確保します。確保できなかった場合、いずれかの論理ドメインをシャットダウン して、移動先のリソースを確保します。

`-n` プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。

`-q` プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

`-v`	PSB の切り離し処理に対して、詳細な進捗状況を表示します。`-q` と一緒に指定した場合は無視されます。 SPARC M12-2S では、本オプションを省略しても詳細な進捗状況が出力されます。
`-y`	プロンプトに対して自動的に「y」(yes)と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

psb 切り離す PSB 番号を指定します。スペースで区切って複数指定できます。以下の形式で指定します。

xx-y

xx	BB-ID の 00 から 15 までの整数で指定します。
y	0 で固定となります。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- `-c disconnect` を指定した場合に、PPAR が停止しているとき、または PSB が PPAR 構成からすでに切り離されているときは、何も実行されません。また、PPAR が起動プロセス中や停止プロセス中のときはエラーとなります。
- `-c unassign` を指定した場合に、PPAR が停止しているとき、または PSB が PPAR 構成からすでに切り離されているときでも、PSB は割り当て状態からシステムボードプールに切り替わります。PSB がすでにシステムボードプールのときは、何も実行されません。PPAR が起動プロセス中や停止プロセス中の場合はエラーとなります。
- `-c reserve` を指定した場合に、PPAR が停止している、または PSB が PPAR 構成からすでに切り離されているときは、ただちに、割り当て状態からシステムボードプールに切り替わります。PSB がすでにシステムボードプールのときは、何も実行されません。
- PSB を切り離す場合には、PSB 上のハードウェアリソースが Oracle Solaris から切り離されます。したがって、コマンドの実行に時間がかかることがあります。
- PSB が割り当てられた状態とは、指定した PPAR への組み込みが予約された状態のことです。PPAR を再起動するか `addboard(8)` を実行することで組み込まれます。すでに割り当てられている PSB を、他の PPAR に対する組み込み、割り当ての対象として指定することはできません。
- システムボードプールとは、どの PPAR にも属していない状態のことです。システムボードプールの PSB はどの PPAR にも属していないため、PCL で定義されていれば、自由に割り当てたり組み込んだりできます。
- PPAR が稼働していない場合でも、コマンドは実行できます。しかし、PPAR 稼働中に `-c unassign` または `-c disconnect` を指定して実行する場合は、Logical Domains(LDoms)Manager が動作している必要があります。

- PPAR が factory-default で稼働しているときに -m unbind=none を指定するとエラーとなります。PPAR が factory-default で稼働している場合は、-m unbind=resource または -m unbind=shutdown を指定してください。
- PPAR DR 機能設定を無効にしている場合は、PPAR 稼働中に deleteboard -c unassign または deleteboard -c disconnect を実行することはできません。PPAR DR 機能については、setpparmode(8)、showpparmode(8) を参照してください。
- PPAR で CPU コア アクティベーション違反が発生している場合は、PPAR 稼働中に deleteboard -c unassign または deleteboard -c disconnect を実行することはできません。

使用例

使用例 1 PSB 00-0、01-0、02-0、03-0 をシステムボードプールにします。(PPAR が電源切断状態の場合)

```
XSCF> deleteboard -c unassign 00-0 01-0 02-0 03-0
PSB#00-0 will be unassigned from PPAR immediately. Continue?[y|n] :y
PSB#01-0 will be unassigned from PPAR immediately. Continue?[y|n] :y
PSB#02-0 will be unassigned from PPAR immediately. Continue?[y|n] :y
PSB#03-0 will be unassigned from PPAR immediately. Continue?[y|n] :y
```

使用例 2 PSB 00-0、01-0、02-0、03-0 の切り離しを予約します。

```
XSCF> deleteboard -c reserve 00-0 01-0 02-0 03-0
PSB#00-0 will be unassigned from PPAR after the PPAR restarts.
Continue?[y|n] :y
PSB#00-0 will be unassigned from PPAR after the PPAR restarts.
Continue?[y|n] :y
PSB#00-0 will be unassigned from PPAR after the PPAR restarts.
Continue?[y|n] :y
PSB#00-0 will be unassigned from PPAR after the PPAR restarts.
Continue?[y|n] :y
```

使用例 3 SPARC M10-4S で、PSB 01-0 をシステムボードプールにします。(PPAR が電源投入状態の場合)

```
XSCF> deleteboard -c unassign 01-0
PSB#01-0 will be unassigned from PPAR immediately. Continue?[y|n] :y
Start unconfigure preparation of PSB. [1200sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
Unconfigure preparation of PSB has completed.
Start unconfiguring PSB from PPAR. [7200sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
Unconfigured PSB from PPAR.
PSB power off sequence started. [1200sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
Operation has completed
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **replacefru**(8), **setpcl**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showpcl**(8), **showfru**(8), **showpparstatus**(8)

名前

deletecodactivation - CPU コア アクティベーションキーをシステムから削除します。

形式

deletecodactivation [-f] [[-q] -{y|n}] -i *key-index*

deletecodactivation -h

説明

deletecodactivation は、指定された CPU コア アクティベーションキーを SPARC M12/M10 システムから削除するコマンドです。

注 – CPU コア アクティベーションキーの詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』を参照してください。

CPU コア アクティベーションの数と物理パーティション（PPAR）に割り当てた CPU コアリソースの数がシステムによって確認されます。CPU コア アクティベーションキーを削除すると CPU コア アクティベーションの数が割り当て中の CPU コアリソース数を下回る場合、CPU コア アクティベーションキーはシステムから削除されません。この場合に CPU コア アクティベーションキーを削除するには、割り当て中の CPU コアリソース数を減らす必要があります。setcod(8) で CPU コア アクティベーションの割り当てを変更してください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-f	指定された CPU コア アクティベーションキーをシステムから強制的に削除します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-i *key-index*	システムから削除する CPU コア アクティベーションキーの管理番号を指定します。管理番号は showcodactivation(8) で確認できます。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

使用例

使用例 1 管理番号 10 番の CPU コア アクティベーションキーを削除します。

```
XSCF> deletecodactivation -i 10
Above Key will be deleted, Continue?[y|n]:y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addcodactivation(8), **setcod**(8), **showcod**(8), **showcodactivation**(8), **showcodactivationhistory**(8), **showcodusage**(8)

名前

deletepowerschedule - 自動電源制御（APCS）での電源投入／切断スケジュールを削除します。

形式

deletepowerschedule [[-q] -{y|n}] {-r *id*|-p *ppar_id*|-a}

deletepowerschedule -h

説明

deletepowerscheduleは、APCSで使用する電源投入／切断スケジュールを削除するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

platadm	すべての物理パーティション（PPAR）に対して実行できます。
pparadm	管理権限を持つPPARに対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8)を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	すべてのスケジュールデータを削除します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-p *ppar_id*	スケジュールを削除するPPAR-IDを指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0から15までの整数で指定できます。指定されたPPAR-IDに設定されているすべてのスケジュールが削除されます。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-r *id*	削除するスケジュールデータを指定します。*id* は、showpowerschedule(8)で確認できます。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- showpowerschedule(8)を使用すると、現在設定されているスケジュール内容が確認できます。
- スケジュールは、addpowerschedule(8)で設定できます。
- 存在しない *ppar_id* や *id*、無効なオプションを指定した場合は、エラーとなります。
- addpowerschedule -aで設定された、すべてのPPARを対象としたスケジュールデータは、deletepowerschedule -p *ppar_id* では削除されません。
- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

使用例

使用例 1　PPAR-ID1 に設定されたすべてのスケジュールを削除します。

```
XSCF> deletepowerschedule -p 1
PPAR-ID 1 Power schedule will be deleted, Continue?[y|n]:y
XSCF>
```

使用例 2　スケジュール ID 3 に設定されているスケジュールを削除します。

```
XSCF> deletepowerschedule -r 3
ID 3 Power schedule will be deleted, Continue?[y|n]:y
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addpowerschedule(8), **setpowerschedule**(8), **showpowerschedule**(8)

名前

deleteuser - XSCF ユーザーアカウントを削除します。

形式

deleteuser *user*

deleteuser -h

説明

deleteuser は、XSCF ユーザーアカウントを削除するコマンドです。

deleteuser を実行すると、XSCF ユーザーアカウント、およびパスワードや Secure Shell（SSH）用の公開鍵など、ユーザーアカウントに関連づけられているすべてのデータが削除されます。

ユーザーアカウントを削除すると、削除したユーザーアカウントで実行している XSCF シェルや XSCF Web のセッションが同時に終了します。ユーザーアカウントがシステムから削除されるので、そのユーザーアカウントではログインできなくなります。現在ログインしている自分のアカウントを削除することはできません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

user	削除する XSCF ユーザーアカウントを指定します。

使用例

使用例 1 XSCF ユーザーアカウントを削除します。

```
XSCF> deleteuser jsmith
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

adduser(8), **disableuser**(8), **enableuser**(8), **showuser**(8)

名前

deletevbootcerts - Oracle Solaris をブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書を削除します。

形式

deletevbootcerts -p *ppar_id* [-f] [[-q] -{y|n}] -i *index*

deletevbootcerts -h

説明

deletevbootcerts は、物理パーティション（PPAR）に登録された、Oracle Solaris をブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書を削除するコマンドです。

deletevbootcerts で削除可能な証明書は、addvbootcerts(8) でユーザーが追加した証明書だけであり、システムにプレインストールされている証明書を削除することはできません。また、削除したい証明書をベリファイドブートで使用しないように、事前に設定する必要があります。設定は showvbootconfig(8) で確認できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

platadm	すべての物理パーティション（PPAR）に対して実行できます。
pparadm	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-f	指定された X.509 公開鍵証明書を PPAR から強制的に削除します。
-i *index*	削除する X.509 公開鍵証明書の管理番号を指定します。指定可能な管理番号は 1 〜 5 です。管理番号は showvbootcerts(8) コマンドで確認できます。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-p *ppar_id*	X.509 公開鍵証明書を削除する PPAR の PPAR-ID を指定します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 に管理番号 1 番で登録されている X.509 公開鍵証明書を削除します。

```
XSCF> deletevbootcerts -p 0 -i 1
```

```
Index 1, CUSTOM_CERT_1 will be deleted from PPAR-ID 0,
Continue?[y|n]:y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addvbootcerts(8), **setvbootconfig**(8), **showvbootcerts**(8), **showvbootconfig**(8)

名前

diagxbu - クロスバーケーブルおよびクロスバーユニットの診断を行います。

形式

diagxbu [[-q] -{y|n}] -b *bb_id* -t *target_bb* [-t *target_bb*...]

diagxbu [[-q] -{y|n}] -b *bb_id* -p *ppar_id*

diagxbu -h

説明

diagxbu は、指定した SPARC M12-2S/M10-4S 筐体およびクロスバーボックスに搭載されているクロスバーユニット、およびクロスバーユニットに接続されるクロスバーケーブルの診断を行うコマンドです。

クロスバーユニットは、SPARC M12-2S/M10-4S 筐体またはクロスバーボックスに搭載され、クロスバーケーブルで接続されています。diagxbu ではクロスバーケーブルで接続された SPARC M12-2S/M10-4S 筐体間の通信が正常に行われるかどうかを確認することで、診断を実施します。diagxbu を実行する場合は、診断を開始する SPARC M12-2S/M10-4S 筐体と、通信先となる SPARC M12-2S/M10-4S 筐体を指定する必要があります。

診断を開始する SPARC M12-2S/M10-4S 筐体は-b *bb_id* で指定します。診断を開始する SPARC M12-2S/M10-4S 筐体上の物理システムボード（PSB）は、システムボードプールまたは電源が切断されている必要があります。

通信先となる SPARC M12-2S/M10-4S 筐体は、PSB の状態により、以下のいずれかを指定します。

- PSB がシステムボードプールまたは電源が切断されている場合は、-t *target_bb* で SPARC M12-2S/M10-4S 筐体を指定します。
- -t *target_bb* で指定する SPARC M12-2S/M10-4S 筐体は複数指定できます。このとき、SPARC M12-2S/M10-4S 上の PSB が PPAR に組み込まれていない、または組み込まれた PPAR の電源は切断されている必要があります。
- PSB が物理パーティション（PPAR）で稼働中の場合は、-p *ppar_id* で PPAR を指定します。-p *ppar_id* は 1 つだけ指定できます。このとき、PPAR の電源は投入されている必要があります。

診断の結果、クロスバーケーブルおよびクロスバーユニットに異常が発生している場合は showlogs error で確認できます。また、クロスバーユニットが縮退している場合は showstatus(8) で確認できます。

diagxbu は、SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 ではサポートされていません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-b *bb_id* 診断を開始するSPARC M12-2S/M10-4S筐体のBB-IDを指定します。*bb_id*に指定できる値は以下のとおりです。

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合
  0～3の整数
- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合
  0～15の整数

-tまたは-pと一緒に指定できます。

-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-n プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。

-p *ppar_id* 通信先のSPARC M12-2S/M10-4S筐体が稼働しているPPARのPPAR-IDを指定します。*ppar_id*はシステム構成によって、0から15までの整数で指定できます。

-q プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

-t *target_bb* 通信先となるSPARC M12-2S/M10-4S筐体のBB-IDを指定します。*bb_id*に指定できる値は以下のとおりです。

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合
  0～3の整数
- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合
  0～15の整数

-y プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- -b *bb_id*または-t *target_bb*で指定した、SPARC M12-2S/M10-4S筐体上のPSBが以下の状態の場合は、エラーになります。
  - PPARに組み込まれており、そのPPARが稼働中の場合
  - PPARに組み込まれており、そのPPARがOpenBoot PROMまで起動している場合
  - PPARに組み込まれており、そのPPARの電源が投入中、切断中、またはリセット中の場合
  - addboard(8)またはdeleteboard(8)コマンド実行中の場合
- -p *ppar_id*で指定したPPARが以下の状態の場合は、エラーになります。
  - PPARが構築されていない場合

- PPAR が稼働中以外の状態の場合

- testsb(8) または別の diagxbu を実行している場合に diagxbu を実行しようとすると、エラーとなります。
- クロスバーケーブルおよびクロスバーユニットの診断中に[CTRL]+[C] キーを押すと診断が中断されます。
- SPARC M12-2S/M10-4S 筐体が 1 台のみのシステムでは、クロスバーユニットの診断を実施することはできません。
- 診断対象と通信先の SPARC M12-2S/M10-4S 筐体および PPAR は、次のように選択します。
  - クロスバーボックスを診断する場合

    クロスバーボックスの交換または増設後に、クロスバーボックスを使用した通信が正常に実施できるか診断する場合は、以下の手順で実施します。

    1. showboards -a コマンドを実行し、電源が切断状態（Pwr 欄が n で、かつ Test 欄が Testing でない）で、かつ Fault 欄が Normal となっている PSB をすべて確認します。

    2. 1. の PSB のうち、任意の SPARC M12-2S/M10-4S 筐体を診断対象とし、残りのすべての SPARC M12-2S/M10-4S 筐体を通信先として指定し、diagxbu を実行します。

    上記の手順で診断する場合は、電源が切断状態で、かつ Fault 欄が Normal となっている PSB が少なくとも 2 つ以上必要です。1 つしかない場合や、クロスバーボックスの交換時にあらかじめ電源を切断する必要のある PPAR が存在しない場合は、下記のように稼働中の PPAR を指定して診断を実施してください。このとき、診断対象の SPARC M12-2S/M10-4S 筐体と PPAR は、次のように選択します。

    [診断対象のクロスバーボックスが XBBOX#80 または XBBOX#81 の場合]

    -p で指定する PPAR に含まれている BB-ID と -b で指定する BB-ID のうち、少なくとも 2 台が 0 ～ 11 の範囲に存在するように指定します。

    [診断対象のクロスバーボックスが XBBOX#82 または XBBOX#83 の場合]

    -p で指定する PPAR に含まれている BB-ID と -b で指定する BB-ID が、0 ～ 11 の範囲と 12 ～ 15 の範囲にそれぞれ少なくと 1 台以上存在するように指定します。

    なお、電源が切断状態にある PSB が存在しない場合や SPARC M12-2S/M10-4S 筐体が 1 台のみのシステムでは、クロスバーボックスの診断を実施することはできません。

  - SPARC M12-2S/M10-4S 筐体を診断する場合

    SPARC M12-2S/M10-4S 筐体の交換または増設後に、その SPARC M12-2S/M10-4S 筐体を使用した通信が正常に実施できるか診断する場合は、次のいずれかを行います。

    \- すでに構成済みの PPAR に組み込む予定がある場合、その PPAR-ID を -p で指定し、さらに診断対象の BB-ID を -b で指定して diagxbu を実行します。

- 組み込み予定の PPAR が未構築で、PPAR の構成がすでに決定している場合、その PPAR を構成する SPARC M12-2S/M10-4S 筐体のうち、診断対象の BB-ID を-b で、それ以外のすべての SPARC M12-2S/M10-4S 筐体を-t で指定して diagxbu を実行します。

- 組み込み予定の PPAR が未決定のとき、showboards -a ですべての PSB の状態を確認し、電源が切断状態（Pwr 欄が n で、Test 欄は Testing 以外）で、かつ Fault 欄が Normal の PSB が存在する場合はそれらのうち任意の BB-ID を-t で、存在しない場合は任意の PPAR-ID を-p で与え、さらに診断対象の BB-ID を-b で指定して diagxbu を実行します。

使用例

使用例 1 BB-ID 0 と BB-ID 1 間のクロスバーケーブルおよびクロスバーユニットの診断を行います（正常に終了した場合）。

```
XSCF> diagxbu -b 0 -t 1
XBU diagnosis is about to start, Continue?[y|n] :y
Power on sequence started. [7200sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
XBU diagnosis started. [7200sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
Power off sequence started. [1200sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
completed.

*Note*
Please confirm the error of XBU by "showlogs error".
In addition, please confirm the degraded of XBU by "showstatus".
```

使用例 2 PPAR-ID 0 と BB-ID 1 間のクロスバーケーブルおよびクロスバーユニットの診断を行います（正常に終了した場合）。

```
XSCF> diagxbu -b 1 -p 0
XBU diagnosis is about to start, Continue?[y|n] :y
Power on sequence started. [7200sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
XBU diagnosis started. [7200sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
completed.
Power off sequence started. [1200sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
completed.

*Note*
Please confirm the error of XBU by "showlogs error".
In addition, please confirm the degraded of XBU by "showstatus".
```

使用例 3 PPAR-ID 0 と BB-ID 1 間のクロスバーケーブルおよびクロスバーユニットの診断を行います（異常が発生した場合）。

```
XSCF> diagxbu -b 1 -p 0
XBU diagnosis is about to start, Continue?[y|n] :y
```

```
Power on sequence started. [7200sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
 .
 .
completed.
Power off sequence started. [1200sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
completed.
A Hardware error occurred by XBU diagnosis.

*Note*
Please confirm the error of XBU by "showlogs error".
In addition, please confirm the degraded of XBU by "showstatus".
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showlogs(8), **showstatus**(8), **testsb**(8)

名前

disableuser - XSCF ユーザーアカウントを無効にします。

形式

disableuser *user*

disableuser -h

説明

disableuser は、XSCF ユーザーアカウントを無効にするコマンドです。

現在ログイン中のセッションには影響を与えません。無効にしたユーザーアカウントは、次回以降のログインで使用できなくなります。この設定は、Secure Shell（SSH）だけでなくシリアル接続されたコンソールや Telnet 接続にも適用されます。XSCF Web へのログインも無効になります。

パスワードや SSH キーなど、無効になったユーザーアカウントに関連づけられているすべてのデータは、XSCF に保存されています。enableuser(8) を使用すると、無効になっているユーザーアカウントを再び有効にできます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

user	無効にする XSCF ユーザーアカウントを指定します。

使用例

使用例 1 XSCF ユーザーアカウントを無効にします。

```
XSCF> disableuser jsmith
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

adduser(8), **deleteuser**(8), **enableuser**(8), **showuser**(8)

名前

dumpcodactivation - CPU コア アクティベーションキーをファイルに保存します。

形式

dumpcodactivation [-v] [-V] [[-q] -{y|n}] [-e [-P *password*]] [-u *user*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] *url*

dumpcodactivation -h

説明

dumpcodactivation は、XSCF に設定されている CPU コア アクティベーションキーを、指定したファイルに保存するコマンドです。

ファイルに保存された CPU コア アクティベーションキーは、restorecodactivation(8) を使用して、XSCF に復元することができます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-e	ファイルを暗号化します。-P *password* でパスワードを指定できます。-P *password* を省略した場合は、パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。CPU コア アクティベーションキーを暗号化して保存すると、復元時にはパスワードが必要となります。パスワードを紛失してしまった場合は、CPU コア アクティベーションキーは復元できません。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-P *password*	暗号化するためのパスワードを設定します。-e と一緒に指定します。-P を省略した場合は、パスワードを設定するためのプロンプトが表示されます。128 文字以内で指定できます。
-p *proxy*	転送に使用するプロキシサーバを指定します。-t *proxy_type* を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。*proxy* は *servername:port* の形式で指定します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-t *proxy_type*	プロキシの種類を指定します。-p と一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。
-u *user*	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。127 文字以内で指定できます。

-v	詳細な情報を表示します。サーバの問題を診断する場合に使用されます。
-V	詳細なネットワークアクティビティを表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

url CPU コア アクティベーションキーの保存先となる URL を指定します。以下のような形式がサポートされています。

ファイルは絶対パスで指定します。

`http://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file*
`https://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file*
`ftp://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file*
`file:///media/usb_msd/`*absolute_path*`/`*file*

詳細説明

コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

CPU コア アクティベーションキーは、システムのシリアル番号が一致しているシステムから退避したデータのみ、復元させることができます。

使用例

使用例 1 USB デバイスに CPU コア アクティベーションキーを保存します。

```
XSCF> dumpcodactivation -v -V file:///media/usb_msd/cpukey.cfg
reading database ... ..................................*done
creating temporary file ... done
starting file transfer ...transfer from '/ssd/dumpcodactivation.mAuleL' to
'file:///media/usb_msd/cpukey.cfg'
* Closing connection #0
done
removing temporary file ... done
operation completed
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

dumpconfig(8), **restorecodactivation**(8)

名前

dumpconfig - XSCF 設定情報をファイルに保存します。

形式

dumpconfig [-v] [-V] [[-q] -{y|n}] [-e [-P *password*]] [-c *comment*] [-u *user*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] *url*

dumpconfig -h

説明

dumpconfig は、XSCF 設定情報を指定したファイルに保存するコマンドです。

XSCF 設定情報とは、以下の情報を指します。

- システム固有情報

  システム固有情報とは、設置場所やネットワーク情報など、システム個別で使用される情報のことで、以下のものがあります。

  - NTP：NTP 設定
  - 高度設定
  - パワーキャッピング：パワーキャッピング設定
  - 電源スケジュール：電源スケジュール設定、スケジュール有効／無効、復電投入モード
  - 電源連動（RCIL）：電源連動設定、電源連動グループ設定
  - XSCF ネットワーク：引き継ぎ IP アドレス、SSCP、ホスト名、ドメイン名、ルーティング、DNS 設定、IP パケットフィルタリングルール
  - SSH/Telnet サービス：SSH サービス設定、Telnet サービス設定、ホスト公開鍵、ユーザー公開鍵、タイムアウト時間
  - HTTPS サービス：HTTPS サービス設定、認証局、ウェブサーバの秘密鍵、ウェブサーバ証明書
  - リモート保守サービス設定情報：REMCS 設定
  - CPU コア アクティベーション情報：CPU コア アクティベーションキー、CPU コアリソース情報
  - 論理ドメイン構成情報：論理ドメイン構成、起動予約情報
  - OpenBoot PROM 環境変数設定情報：Oracle Solaris ／ OpenBoot PROM 設定
  - ベリファイドブート：Oracle Solaris をベリファイドブートするときに使用する X.509 公開鍵証明書情報
  - リモートストレージ：リモートストレージへの接続設定

- システム共通情報

  システム共通情報とは、システム間で共通に使用できる情報のことで、以下のものがあります。

  - ユーザー管理：ユーザーアカウント、パスワードポリシー、パスワード、ユーザー権限、ロックアウト機能
  - 監査（Audit）：監査設定
  - 時刻：タイムゾーン、サマータイム

- 暖機運転時間：暖機運転時間設定
- 二系統受電：二系統受電設定
- 空調待ち：システム起動までの待ち時間設定
- ダイレクトI/O機能: PCIボックスに実装されたPCIカードへのダイレクトI/O機能の有効・無効
- SSH/Telnet サービス：タイムアウト時間
- LDAP サービス：LDAP クライアント、LDAP の有効・無効
- Active Directory サービス：Active Directory クライアント
- LDAP over SSL サービス：LDAP over SSL クライアント
- メール通報：SMTP 設定、メール通報機能
- SNMP：SNMP エージェント、トラップホスト、v3 トラップホスト、User-based Security Model（USM）管理情報、View-based Access Control Model（VACM）管理情報
- システムボード設定：メモリミラー
- リモート保守サービス設定情報：ASR 機能（service tag の有効・無効）
- 物理パーティション構成情報：PSB の物理パーティション割り当て状態、コンフィグレーションポリシー、I/O 無効化オプション
- 物理パーティションモード設定
- OpenBoot PROM 環境変数設定情報：XSCF 設定
- SPARC M12-2S の CPU の高速モード

`restoreconfig`(8) を使用すると、保存された設定情報は XSCF へ復元できます。復元される XSCF 設定情報の詳細については、`restoreconfig`(8) を参照してください。

XSCF 設定情報ファイルとは、XSCF 設定情報を base64 エンコーディングテキスト形式で保存したファイルのことです。ファイル名は、ユーザーが任意に指定することができます。また、`-e` オプションを指定すると暗号化されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

`platadm`, `platop`, `fieldeng`

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

- `-c` *comment*

  ファイルにコメントを設定します。保存された XSCF 設定情報が複数ある場合など、ファイルを区別するときに利用できます。コメントは復元時に XSCF に読み込まれることはありません。

  comment にはコメントを 132 文字以内で指定します。英数字、二重引用符（"）、スペースを使用して指定できます。英字は大文字／小文字を区別します。スペースを使用する場合は、コメント全体を二重引用符で囲みます。特殊文字は指定できません。

  コメントの例は以下のとおりです。

  `-c "This is a valid comment"`

  二重引用符で囲まずにスペースを使用しているため、次の例は正しくありません。
  `-c This is an invalid comment`

  使用できない特殊文字が含まれているため、次の例は正しくありません。
  `-c "This! is @invalid"`

- `-e`

  ファイルを暗号化します。`-P` *password* でパスワードを指定できます。`-P` *password* を省略した場合は、パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。XSCF 設定情報を暗号化して保存すると、復元時にはパスワードが必要となります。パスワードを紛失してしまった場合は、XSCF 設定情報は復元できません。

- `-h`

  使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

- `-n`

  プロンプトに対して自動的に「`n`」（no）と応答します。

- `-P` *password*

  暗号化するためのパスワードを設定します。`-e` と一緒に指定します。`-P` を省略した場合は、パスワードを設定するためのプロンプトが表示されます。128 文字以内で指定できます。

- `-p` *proxy*

  転送に使用するプロキシサーバを指定します。`-t` *proxy_type* を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。*proxy* は *servername:port* の形式で指定します。

- `-q`

  プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

- `-t` *proxy_type*

  プロキシの種類を指定します。`-p` と一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。

- `-u` *user*

  認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。127 文字以内で指定できます。

-v	詳細な情報を表示します。サーバの問題を診断する場合に使用されます。
-V	詳細なネットワークアクティビティを表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

url　XSCF 設定情報の保存先となる URL を指定します。以下のような形式がサポートされています。

ファイルは絶対パスで指定します。

`http://`*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
`https://`*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
`ftp://`*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
`file:///media/usb_msd/`*absolute_path*/*file*

詳細説明

コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

注 – dumpconfig(8) で保存した XSCF 設定情報を同一筐体または他の筐体に restoreconfig(8) で復元した場合は、XSCF 設定情報が正しく復元されているかを確認してください。

使用例

使用例 1　USB デバイスに XSCF 設定情報を保存します。

```
XSCF> dumpconfig -v -V file:///media/usb_msd/system.cfg
file '/media/usb_msd/system.cfg ' already exists
Do you want to overwrite this file? [y|n]: y
reading database ... ...................................*done
creating temporary file ... done
starting file transfer ...transfer from '/ssd/dumpconfig.mAuleL' to
'file:///media/usb_msd/system.cfg '
* Closing connection #0
done
removing temporary file ... done
operation completed
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

dumpcodactivation(8), **restoreconfig**(8)

名前

enableuser - XSCF ユーザーアカウントを有効にします。

形式

enableuser *user*

enableuser -h

説明

enableuser は、無効になっている XSCF ユーザーアカウントを有効にするコマンドです。

有効になったユーザーアカウントは、Secure Shell（SSH）を使用して、コンソールでのログインに使用できるようになります。enableuser を使用すると、disableuser(8) で無効にしたアカウントを再び有効にできます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

user	有効にする XSCF ユーザーアカウントを指定します。

使用例

使用例 1 ユーザーアカウントを有効にします。

```
XSCF> enableuser jsmith
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

adduser(8), **deleteuser**(8), **disableuser**(8), **showuser**(8)

名前

flashupdate - ファームウェアをアップデートします。

形式

flashupdate -c check -m {xcp |xscf} -s *version*

flashupdate [[-q] -{y|n}] -c update -m {xcp |xscf} [-f] -s *version*

flashupdate -c sync

flashupdate -h

説明

flashupdate はファームウェアをアップデートするコマンドです。

以下のファームウェアをアップデートします。-c check を指定すると、アップデートが可能かどうかを事前に確認できます。

- XSCF Control Package（XCP）全体（XSCF ファームウェア、ハイパーバイザファームウェア、OpenBoot PROM ファームウェア、Power-On Self-Test（POST）ファームウェア）のアップデート
- XSCF ファームウェアのみのアップデート

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c check	指定したファームウェアのアップデートが可能かどうかを確認します。
-c update	指定したファームウェアをアップデートします。XSCF が複数構成のシステムの場合は、すべての XSCF が同時にアップデートされます。
-c sync	XSCF が複数構成のシステムの場合に、各 XSCF ファームウェアの版数を合わせます。XSCF を含む FRU を交換した場合などに使用します。
-f	指定したファームウェアの版数にアップデートする場合、すでに同じ版数が書き込まれている場合でも、再度書き込みを行います。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-m xcp	XCP 全体を対象にします。ファームウェアのチェック、登録、アップデートを行う場合に指定します。
-m xscf	XSCF ファームウェアを対象にします。ファームウェアのチェックまたはアップデートを行う場合に指定します。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。

`-q`	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
`-s` *version*	ファームウェアのチェック、登録、アップデートを行う場合の、ファームウェアの版数を指定します。*version* にはメジャー版数とマイナー版数をそれぞれ 10 進数で指定します。次の形式で指定できます。 *xxyy* *xx* メジャー版数 *yy* マイナー版数
`-y`	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- XCP や XSCF ファームウェアをアップデートすると、XSCF が再起動されます。そのため、XSCF に LAN 接続している場合には、いったん接続が切断されます。
- 故障している Field Replaceable Unit(FRU)がある場合は、ファームウェアはアップデートできません。FRU の故障を解消してからアップデートしてください。
- XCP 2050 以降のファームウェアにアップデートする場合、アップデートが完了すると、マスタ XSCF とスタンバイ状態の XSCF が自動的に切り替えられます。
- `flashupdate` 実行中は `switchscf`(8) を実行しないでください。
- `-m xscf` オプションは、XSCF ファームウェアのみをアップデートする場合に使用します。

使用例

使用例 1 ファームウェアを 0101 版にアップデートしてよいか、確認します。

```
XSCF> flashupdate -c check -m xcp -s 0101
```

使用例 2 ファームウェアを 0101 版から 0102 版にアップデートします。

```
XSCF> flashupdate -c update -m xcp -s 0102
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
XCP update is started. [2400sec]
 0..... 30..... 60..... 90.....120.....150.....180.....210.....240.....-
270.....300.....330.....360.....390.....420.....450.....480.....510.....|
540.....570.....600
```

使用例 3 XSCF ファームウェアを 0101 版から 0102 版へアップデートします。

```
XSCF> flashupdate -c update -m xscf -s 0102
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
XCP update is started. [2400sec]
```

```
 0..... 30..... 60..... 90.....120.....150.....180.....210.....240.....-
270.....300.....330.....360.....390.....420.....450.....480.....510.....|
540.....570.....600
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

version (8)

名前

getflashimage - ファームウェアイメージファイルをダウンロードします。

形式

getflashimage [-v] [[-q] -{y|n}] [-u *user*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] *url*

getflashimage -l

getflashimage [[-q] -{y|n}] [-d]

getflashimage -h

説明

getflashimage は flashupdate(8) で使用する XCP ファームウェアイメージファイル、または ioxadm(8) コマンドで使用する PCI ボックスファームウェアイメージファイルをダウンロードするコマンドです。

XSCF ユニット上に同じ種類の旧バージョンのファームウェアイメージファイルが 2 つ以上ある場合は、新しいバージョンのファームウェアイメージファイルがダウンロードされたあとに、最も古いバージョンのファームウェアイメージファイルが削除されます。ダウンロードが成功したあとは、ファームウェアイメージファイルが正しいかどうかがチェックされ、MD5 チェックサムの値が表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-d	サービスプロセッサ上にある、旧バージョンの XCP イメージファイルをすべて削除します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-l	サービスプロセッサ上にある、XCP イメージファイルの一覧を表示します。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」(no) と応答します。
-p *proxy*	転送に使用するプロキシサーバを指定します。-t *proxy_type* を指定しない場合、デフォルトのプロキシは http です。*proxy* は *servername*:*port* の形式で指定します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-t *proxy_type*	プロキシの種類を指定します。-p と一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。

-u *user*	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。
-v	詳細な情報を表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

url

ファームウェアイメージをダウンロードする URL を指定します。以下のような形式がサポートされています。

ファイルは絶対パスで指定します。

http://*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
https://*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
ftp://*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
file:///media/usb_msd/*absolute_path*/*file*

file は以下のいずれかの値となります。

BBXCP*vvvv*.tar.gz
PCIBOX*vvvv*.tar.gz

また、*vvvv* には 4 文字のバージョン番号が入ります。

詳細説明

コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

使用例

使用例 1 HTTP サーバから XCP ファームウェアイメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage http://imageserver/images/BBXCP2070.tar.gz
  0MB received
  1MB received
  2MB received
...
  88MB received
  89MB received
  90MB received
Download successful: 92977 Kbytes in 52 secs (1770.387 Kbytes/sec)
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a0
```

使用例 2 FTP サーバから XCP ファームウェアイメージファイルをダウンロードしま

す。

```
XSCF> getflashimage ftp://imageserver/images/BBXCP2070.tar.gz
  0MB received
  1MB received
  2MB received
...
  88MB received
  89MB received
  90MB received
Download successful: 92977 Kbytes in 52 secs (1770.387 Kbytes/sec)
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a1
```

使用例 3 ポート番号 8080 の HTTP プロキシサーバを使用して、XCP ファームウェアイメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage -p proxyserver:8080 http://imageserver/images/
BBXCP2070.tar.gz
  0MB received
  1MB received
  2MB received
...
  88MB received
  89MB received
  90MB received
Download successful: 92977 Kbytes in 52 secs (1770.387 Kbytes/sec)
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a2
```

使用例 4 ユーザー名とパスワードを使用して、XCP ファームウェアイメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage -u jsmith http://imageserver/images/
BBXCP2070.tar.gz
Password: [not echoed]
  0MB received
  1MB received
  2MB received
...
  88MB received
  89MB received
  90MB received
Download successful: 92977 Kbytes in 52 secs (1770.387 Kbytes/sec)
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a3
```

使用例 5 USB メモリスティックから XCP ファームウェアイメージファイルをダウン

ロードします。

```
XSCF> getflashimage file:///media/usb_msd/images/BBXCP2070.tar.gz
  0MB received
  1MB received
  2MB received
...
  88MB received
  89MB received
  90MB received
Download successful: 92977 Kbytes in 52 secs (1770.387 Kbytes/sec)
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a3
```

使用例 6 FTP サーバから XCP ファームウェアイメージファイルを-v オプション付きでダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage -v ftp://imageserver/images/BBXCP2070.tar.gz
Free space: 423MB
transfer from 'ftp://imageserver/images/BBXCP2070.tar.gz' to '/data/firm/
xcp//BBXCP2070.tar.gz'
  0MB received
  1MB received
  2MB received
...
  89MB received
  90MB received
* Closing connection #0
Download successful: 92977 Kbytes in 52 secs (1781.409 Kbytes/sec)
Checking file...
MD5: d5c6e721644cf6524107f79c6b9ebb10
```

使用例 7 XSCF ユニット上に旧バージョンの XCP ファームウェアイメージファイルが 1 つある場合に、FTP サーバからイメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage ftp://imageserver/images/BBXCP2070.tar.gz
Existing versions:
        Version                  Size  Date
        BBXCP2052.tar.gz    95209343  Tue Mar 04 10:41:01 UTC 2014
  0MB received
  1MB received
...
  89MB received
  90MB received
Download successful: 92980 Kbytes in 62 secs (1505.969 Kbytes/sec)
Checking file...
MD5: 5cba43c3a76f719b6e59edff47dcc6d0
```

使用例 8 XSCF ユニット上に旧バージョンの XCP ファームウェアイメージファイルが 2 つある場合に、FTP サーバからイメージファイルをダウンロードします。

最も古いイメージファイルが 1 つ削除されます。

```
XSCF> getflashimage ftp://imageserver/images/BBXCP2092.tar.gz
Existing versions:
        Version                Size  Date
        BBXCP2052.tar.gz    95209343  Tue Mar 04 10:41:01 UTC 2014
        BBXCP2070.tar.gz    95167872  Mon Mar 17 10:25:21 UTC 2014
Warning: About to delete existing old versions.
Continue? [y|n]: y
  0MB received
  1MB received
...
  89MB received
  90MB received
Download successful: 92980 Kbytes in 62 secs (1505.969 Kbytes/sec)
Checking file...
MD5: 5cba43c3a76f719b6e59edff47dcc6d0
```

使用例 9 XSCF ユニット上に旧バージョンの PCI ボックスファームウェアイメージファイルが 1 つある場合に、FTP サーバからイメージファイルをダウンロードします。

```
XSCF> getflashimage ftp://imageserver/images/PCIBOX1209.tar.gz
Existing versions:
        Version                Size  Date
        PCIBOX1208.tar.gz     143080  Thu Jul 21 11:14:17 JST 2016
  0MB received
Download successful: 137 Kbytes in 0 secs (3063.844 Kbytes/sec)
Checking file...
MD5: adcc61b2a650b432ecca84a7d81a25c5
```

使用例 10 XSCF ユニット上に旧バージョンの PCI ボックスファームウェアイメージファイルが 2 つある場合に、FTP サーバからイメージファイルをダウンロードします。一番古いイメージファイルが 1 つ削除されます。

```
XSCF> getflashimage ftp://imageserver/images/PCIBOX1210.tar.gz
Existing versions:
        Version                Size  Date
        PCIBOX1208.tar.gz     140749  Thu Jul 21 11:15:02 JST 2016
        PCIBOX1209.tar.gz     143080  Thu Jul 21 11:14:17 JST 2016
Warning: About to delete existing old versions.
Continue? [y|n]: y
  0MB received
Download successful: 137 Kbytes in 0 secs (4988.642 Kbytes/sec)
Checking file...
MD5: 5ccf246ffcbbb17ee6c0d996924bcd2a
```

使用例 11 XSCF ユニット上にあるファームウェアイメージファイルを、種類を問わずすべて削除します。

```
XSCF> getflashimage -d
XSCF>
```

使用例 12 XSCF ユニット上にあるファームウェアイメージファイルの一覧を表示します。

```
XSCF> getflashimage -l
Existing versions:
        Version                 Size  Date
        BBXCP2070.tar.gz    95209343  Tue Mar 04 10:41:01 UTC 2014
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

flashupdate(8), **ioxadm**(8)

名前

getremotepwrmgmt - SPARC M12/M10 システムの電源連動機能（Remote Cabinet Interface over Lan : RCIL）の設定ファイルを取得します。

形式

getremotepwrmgmt {-G *groupid*} [-v] [-u *user*] [-X *proxy* [-t *proxy_type*]] [-y|-n] *configuration_file*

getremotepwrmgmt -h

説明

getremotepwrmgmt は、電源連動グループの設定情報を取得し、CSV 形式の管理情報ファイルとして保存するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-G *groupid*	電源連動グループのグループ ID を 1 つ指定します。1 から 32 までの数値を指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-t *proxy_type*	プロキシの種類を指定します。-X と一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。
-u *user*	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。
-v	詳細な情報を表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用します。
-X *proxy*	取得に使用するプロキシサーバを指定します。-t *proxy_type* を一緒に指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。*proxy* は *servername:port* の形式で指定します。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

configuration_file 管理情報ファイルの保存先 URL を指定します。以下の形式がサポートされています。

ファイルは絶対パスで指定します。

`http://`*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
`https://`*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
`ftp://`*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
`file:///media/usb_msd/`*absolute_path*/*file*

詳細説明

- 存在しないグループ ID を-G で指定した場合はエラーとなります。
- getremotepwrmgmt で取得された電源連動グループの管理情報ファイルは、setremotepwrmgmt -c config を実行するときに、そのまま使用できます。
- 管理情報ファイルは CSV 型式としてください。管理情報ファイルのフォーマットは『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』を参照してください。
- 管理情報ファイルはグループごとに作成する必要があります。1 つの管理情報ファイルに複数のグループ ID が混在している場合はエラーとなります。
- 管理情報ファイルに情報の配信先へアクセスするためのパスワードが設定されておらず、かつデフォルトユーザーが指定されていない場合は、電源連動グループの情報を配信する段階でパスワードの入力を要求されます。
- 既存の電源連動グループの設定を更新する場合は、以下の手順で実行してください。

  1. getremotepwrmgmt を実行し、更新する電源連動グループの設定情報を管理情報ファイルとして取得します。
  2. 手順 1. で取得したファイルを編集します。
  3. setremotepwrmgmt -c disable で、更新する電源連動グループの電源連動機能を無効にします。
  4. 手順 2. で修正した管理情報ファイルを指定して setremotepwrmgmt -c config を実行し、電源連動グループの設定を更新します。
  5. setremotepwrmgmt -c enable を実行し、更新した電源連動グループの電源連動機能を有効にします。

使用例

使用例 1 FTP サイトに電源連動グループ 1 の管理情報ファイルを取得します。

```
XSCF> getremotepwrmgmt -G 1 -X proxyserver:8080 -u jsmith ftp://
dataserver/data/rpm_group.1.conf
Group#01 remote power management group information is got.Continue? [y|n]:
y
transfer from '/tmp/rpm_group.1.conf' to 'ftp://dataserver/data/
rpm_group.1.conf'
Password:
```

```
* About to connect() to proxyserver port 8080
* Trying proxyserver... * connected
* Connected to proxyserver (xxx.xxx.xxx.xxx) port 8080
* Proxy auth using (nil) with user ''
* Server auth using Basic with user 'jsmith'
> PUT ftp://dataserver/data/rpm_group.1.conf HTTP/1.1
Authorization: Basic bHdhbmc6bHdhbmc=
User-Agent: dumpconfig
Host: dataserver:21
Pragma: no-cache
Accept: */*
Content-Length: 24720
Expect: 100-continue
< HTTP/1.1 100 Continue
< HTTP/1.1 200 OK
< Server: Sun-Java-System-Web-Proxy-Server/4.0
< Date: Mon, 04 Aug 2012 16:46:11 GMT
< Transfer-encoding: chunked
* Connection #0 to host proxyserver left intact
* Closing connection #0
The command completed successfully.
XSCF>
```

使用例 2 http サイトに電源連動グループ 1 の管理情報ファイルを取得します。

```
XSCF> getremotepwrmgmt -G 1 -X proxyserver:8080 -u jsmith http://
dataserver/data/rpm_group.1.conf
Group#01 remote power management group information is got.Continue? [y|n]:
y
The command completed successfully.
XSCF>
```

使用例 3 USB デバイスに電源連動グループ 1 の管理情報ファイルを取得します。

```
XSCF> getremotepwrmgmt -G 1 -v file:///media/usb_msd/
rpm_group.1.conf
Group#01 remote power management group information is got.Continue? [y|n]:
y
Making sure mount point is clear
Trying to mount USB device /dev/sda1 as /media/usb_msd
Mounted USB device
file '/media/usb_msd/rpm_group.1.conf' already exists
Do you want to overwrite this file? [y|n]: y
removing file 'file:///media/usb_msd/rpm_group.1.conf' ... done
reading database ... ..............*done
creating temporary file ... done
starting file transfer ...transfer from '/tmp/rpm_group.1.conf.HE1RZa' to
'file:///media/usb_msd/rpm_group.1.conf'
done
removing temporary file ... done
Unmounted USB device
The command completed successfully.
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

clearremotepwrmgmt(8), **setremotepwrmgmt**(8), **showremotepwrmgmt**(8)

名前

initbb - SPARC M12-2S/M10-4S およびクロスバーボックスをシステムから切り離し、工場出荷状態に初期化します。

形式

initbb [[-q] -{y|n}] [-f] -b *bb_id*

initbb -h

説明

initbb は、対象となる SPARC M12-2S/M10-4S およびクロスバーボックスをシステム構成から切り離し、工場出荷時の状態に初期化するコマンドです。

initbb を実行したあと、SPARC M12-2S/M10-4S およびクロスバーボックスは停止状態となります。

initbb は、SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 では使用できません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-b *bb_id*	初期化する SPARC M12-2S/M10-4S またはクロスバーボックスを指定します。*bb_id* には、SPARC M12-2S/M10-4S の場合は 0 から 15 まで、クロスバーボックスの場合は 80 から 83 までの整数で指定できます。
-f	対象の SPARC M12-2S/M10-4S またはクロスバーボックスが異常状態であっても強制的にシステム構成から切り離します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- initbb はマスタ XSCF で実行してください。マスタ XSCF であるかどうかは showbbstatus(8) で確認できます。
- initbb ではマスタ XSCF を初期化できません。
- initbb を実行したあと、SPARC M12-2S/M10-4S およびクロスバーボックスはシステムから切り離され、停止状態となります。再度システムに組み込むには、システムの電源を投入しなおすか、対象の SPARC M12-2S/M10-4S およびクロスバーボックスを増設してください。
- 初期化対象の SPARC M12-2S/M10-4S またはクロスバーボックスの、XSCF に対してシリアル接続しておくことにより、初期化の状況および完了を確認できます。

- クロスバーボックスを初期化する場合は、システムが停止している状態で実行してください。システムが停止していない場合、エラーとなります。

  システム停止状態とは、すべての PPAR が停止している状態です。起動している状態の場合は、`poweroff -a` を実行することで、すべての PPAR が停止し、その後システムの電源が切断されます。システム電源の状態は、`showhardconf(8)` を実行し、「System_Power:」の表示（「On」または「Off」）を参照することで確認できます。
- SPARC M12-2S/M10-4S を初期化する場合は、SPARC M12-2S/M10-4S 上の物理システムボードがシステムボードプール状態、または PPAR 構成から切り離された状態で実行してください。物理システムボードがシステムボードプール状態でない場合はシステムボードプール状態となります。PPAR 構成に組み込まれていて PPAR が稼働中の場合は、エラーとなります。
- SPARC M12-2S/M10-4S を初期化する場合は、対象の SPARC M12-2S/M10-4S と同じ ID を持つ PPAR の電源が切断されている必要があります。
- SPARC M12-2S/M10-4S を初期化したあとは、対象の SPARC M12-2S/M10-4S と同じ ID を持つ PPAR の電源が投入できなくなります。これは、以下のどちらかの方法で解消できます。
  - 初期化した SPARC M12-2S/M10-4S を増設して、再度システムに組み込む
  - 別の PPAR-ID に PPAR 構成を変更する
- 対象の SPARC M12-2S/M10-4S またはクロスバーボックスのシリアル番号がシステムのシリアル番号として使用されている場合は、エラーとなります。
- コマンド実行時のプロンプトで、「n」を入力した場合、SPARC M12-2S/M10-4S の初期化は行われずに終了します。
- `-f` を指定した場合は、SPARC M12-2S/M10-4S またはクロスバーボックスが異常状態であっても、システム構成が切り離されます。しかし、対象の SPARC M12-2S/M10-4S またはクロスバーボックスが正常でない場合は、正常に初期化される保証はありません。
- コマンドを実行すると､システムに登録されている CPU コア アクティベーションキーは削除されます。CPU コア アクティベーションキーを保持する場合は、`dumpcodactivation(8)` で CPU コア アクティベーションキーをあらかじめ保存しておきます。`initbb` を実行したあとに、`restorecodactivation(8)` を実行して、保存しておいた CPU コア アクティベーションキーを復元してください。

  CPU コア アクティベーションキーを保存せずに `initbb` を実行した場合は、再度、CPU コア アクティベーションキーを登録する必要があります。
- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

使用例

使用例 1 BB#01 を工場出荷時の状態に初期化します。コマンド実行後、BB#01 は停止します。

```
XSCF> initbb -b 1
You are about to initialize BB/XB-Box.
NOTE the following.
```

```
 1. BB/XB-Box is excluded from the system and halted.
 2. PPAR-ID of the same value as BB-ID becomes invalid.

Continue? [y|n] :y
```

使用例 2 XBBOX#81 の初期化をします。プロンプトには自動的に「y」と応答します。コマンド実行後、XBBOX#81 は停止します。

```
XSCF> initbb -y -b 81
You are about to initialize BB/XB-Box.
NOTE the following.
 1. BB/XB-Box is excluded from the system and halted.
 2. PPAR-ID of the same value as BB-ID becomes invalid.

Continue? [y|n] :y
```

使用例 3 BB#01 を初期化します。プロンプトは非表示にして、自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> initbb -q -y -b 1
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showbbstatus(8)

名前

ioxadm - PCI ボックス、およびホストサーバに接続されたリンクカードを管理します。

形式

ioxadm [-f] [-A] [-v] [-M] env [-e] [-l] [-t] [*target* [*sensor*]]

ioxadm [-f] [-A] [-v] [-M] list [*target*]

ioxadm [-f] [-A] [-v] [-M] locator [on|off] [*target*]

ioxadm [-f] [-A] [-v] [-M] poweroff *target*

ioxadm [-f] [-A] [-v] [-M] poweron *target*

ioxadm [-f] [-A] [-v] [-M] reset *target*

ioxadm [-f] [-A] [-v] [-M] setled [on|off|blink] *target* *led_type*

ioxadm serial *target* *serial_num*

ioxadm -c check *target* -s *version*

ioxadm [-f] [-A] [-v] [-M] -c update *target* -s *version*

ioxadm [-f] [-A] [-M] versionlist [*target*]

ioxadm -h

説明

ioxadm は、PCI ボックス、およびホストサーバに接続されたリンクカードを管理するコマンドです。

ioxadm を使用するには、オペランドとそのオペランドが必要とするオプションを指定する必要があります。対象のデバイスに指定できるのは、ホストサーバ内蔵の PCI スロットに搭載されているリンクカード、PCI ボックス、または PCI ボックス内の Field Replaceable Unit（FRU）です。ホストサーバ内のリンクカードは、ホストサーバからリンクカードまでのパスを示す文字列で識別されます。

詳細な情報は、オプションの *target* の項を参照してください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

ユーザー権限	オペランドまたはオプション
platop	env, list, versionlist オペランド
platadm	serial 以外のすべてのオペランド
fieldeng	すべてのオペランド

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-A
: 出力のヘッダーを非表示にして、解析可能な出力のみ表示します。各フィールドはシングルタブによって区切られます。

-c check
: ファームウェアが適用できるかどうかチェックします。オペランドで指定する版数、*target* のファームウェアについてチェックします。*target* に指定できるのは PCI ボックスのみです。

-c update
: オペランドで指定する版数、*target* のファームウェアをアップデートします。*target* に指定できるのは PCI ボックスのみです。

  PCI ボックスを指定すると、PCI ボックスおよびリンクカードのファームウェアをアップデートします。

  注 – 本オプションを指定したアップデートでは、「Firmware update is started.」が表示されてから「Firmware update has been completed.」が表示されるまで、30 分程度何も表示されません。

-f
: 警告を無視して、強制的にコマンドを実行します。

-h
: 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-M
: テキストを 1 画面ずつ表示します。

-s *version*
: ファームウェアの版数を指定します。ファームウェアのチェック、登録、アップデートを行う場合に指定します。*version* にはメジャー版数、マイナー版数を続けて指定します。

  ファームウェアの版数は「*xxyy*」のように 4 桁で指定します。各番号の意味は以下のとおりです。

xx	メジャーリリース番号
yy	マイナーリリース番号

-v
: 詳細な情報を表示します。詳細は、各オペランドを参照してください。

target

対象のデバイスを指定します。ホストサーバ内蔵の PCI スロットに搭載されたリンクカード、PCI ボックス、または PCI ボックス内部の FRU のいずれかを指定できます。

ホストサーバのスロットに搭載されたリンクカードは、リンクカードへの *host_path* によって識別されます。

host_path はプラットフォームに依存し、リンクカードが搭載されたホストサーバの、スロットへのパスを示します。*host_path* は以下の形式で示されます。

`BB#0-PCI#0`

PCI ボックスは、シリアル番号によって識別されます。

シリアル番号で参照するには、「`PCIBOX#`*nnnn*」を使用します。「*nnnn*」は PCI ボックスのシリアル番号の下 4 桁です。

PCI ボックス内部の FRU は、以下のように識別されます。

`PCIBOX#`*nnnn*`/IOB` – I/O ボード

`PCIBOX#`*nnnn*`/FANBP` – ファンバックプレーン

`PCIBOX#`*nnnn*`/PSU#0` – 背面下のベイにある電源ユニット

`PCIBOX#`*nnnn*`/PSU#1` – 背面上のベイにある電源ユニット

`PCIBOX#`*nnnn*`/FAN#0` – 前面左のベイにあるファンユニット

`PCIBOX#`*nnnn*`/FAN#1` – 前中央のベイにあるファンユニット

`PCIBOX#`*nnnn*`/FAN#2` – 前面右のベイにあるファンユニット

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

env [-e] [-l] [-t] [*target* [*sensor*]]

PCI ボックスまたはリンクカードの環境状態の要約を表示します。

-e	電気に関する状態（電圧の測定値、ファンの回転速度など）を表示します。
-l	LED の状態を表示します。
-t	温度センサーの測定値を表示します。
target	オプションの *target* の項を参照してください。env オペランド固有の内容は、下記を参照してください。
sensors	データを表示するセンサーを指定します。指定しない場合は、すべてのセンサーについての情報が表示されます。*target* と一緒に使用します。

PCI ボックス内の FRU またはホストサーバのスロット内のリンクカードを *target* として指定した場合は、env はその FRU についての環境情報のみを表示します。

-e､-l､-t のいずれも指定しない場合は、すべてのセンサーの情報が表示されます。いずれのセンサーも指定しない場合は、すべてのセンサーの情報が表示されます。*target* を指定しない場合は、すべての PCI ボックスについての情報が表示されます。

target として PCI ボックスを指定した場合、env は指定された PCI ボックス内部のすべての FRU、およびホストサーバに搭載されているリンクカードに対するセンサー測定値の一覧を表示します。

env の各オプションは、どのような組み合わせでも使用できます。

以下の情報も、env およびその表示結果に適用されます。

- 結果は表形式で表示されます。各 FRU は 1 列目に表示されます。2 列目はセンサー名で、I/O ボードの吸気温度の場合は T_INTAKE、12.0 V の電圧測定値は V_12_0V のように表示されます。3 列目、4 列目、5 列目はそれぞれセンサー測定値（Value）、センサー分解能（Resolution）、単位（Units）が表示されます。使用例 1 を参照してください。
- 各 FRU にはさまざまなセンサーが含まれます。*sensor* に複数の値を指定する場合は、値をスペースで区切って指定します。*sensor* に指定できる値は、使用例 1 の Sensor カラムに示されています。Units には、摂氏温度、電圧、LED、排気量、消費電力、および RPM が表示されます。
- *sensor* の名前は FRU に依存しており､FRU のタイプによって異なります。場合によっては、個々の FRU 間でも異なることがあります。

（続き）

- -v を指定した場合は、詳細な情報が出力されます。通常の出力に加えて、センサーでサポートされる最大値と最小値（Max, Min）が、上下の警告しきい値（Min Alarm, Max Alarm）とともに出力に含まれます。
  LED インジケータは、これらのフィールドをサポートしていません。
  「-」はサポートしていないフィールドであることを示しています。

list [*target*]

システムが管理する PCI ボックスを一覧表示します。

target を指定せずに list を実行すると、PCI ボックスの一覧が表示されます (1 行に 1 つの PCI ボックスが表示されます)。各行には、その PCI ボックス固有の識別子、およびそのリンクカードのホスト固有の名前が含まれます。使用例 3 を参照してください。

PCI ボックスの引数またはリンクカードのパスを指定してコマンドを実行すると、指定した FRU が含まれる単一の行が表示されます。*host path* を指定した場合は、そのリンクカードの情報だけが表示されます。-v を設定した場合は、出力に FRU の詳細情報が含まれます。使用例 4 および使用例 5 を参照してください。

locator [on |off] [*target*]

PCI ボックスの CHECK LED (シャーシロケーター) の状態を設定、または問い合わせます。

オプションを指定せずに locator を実行すると、指定した FRU に関する LED の、現在の状態が出力されます。

オプションのフィールドを使用する場合、*target* 引数は必須です。指定できる *target* は PCI ボックスのみです。

on	LED を点滅させます。
off	LED の点滅を解除します。

シャーシロケーターが点滅していると、PCI ボックスの Value カラムには Fast が表示されます。

poweroff *target*

指定の FRU を停止します。該当の LED が点滅して、FRU の取り外しが可能になったことを示します。指定できる *target* は PSU とファンユニットです。*target* が PSU の場合は-f と一緒に使用してください。

注 – 同一の PCI ボックスにある電源ユニットとファンユニットは、それぞれ、2 台以上を停止させることはできません。

注 – LED とファンは、2 つの電源ユニットから電力の供給を受けているため、1 つの電源ユニットを停止しても動作する場合があります。

`poweron` *target*

指定の FRU を起動します。該当の LED が消灯して、FRU が使用可能になったことを示します。指定できる *target* は PSU とファンユニットです。

`reset` *target*

本オペランドは、サポートされていません。

`setled [on|off|blink]` *target* *led_type*

LED 状態を設定します。

`off`	消灯します。
`on`	点灯します。
`blink`	点滅します。

指定できる *target* は PCI ボックスのみです。

指定できる *led_type* は LOCATE のみです。

注 – on はサポートされていません。

`serial` *target* *serial_num*

PCI ボックスのシリアル番号を設定します。PCI ボックスの I/O ボードとファンバックプレーンを同時に交換した場合に、シリアル番号を再登録する場合に使用します。

指定できる *target* は PCI ボックスのみです。

`versionlist` [*target*]

target に PCI ボックス、またはリンクカードのいずれかを指定すると、PCI ボックスとリンクカードの組み合わせに対して、各装置のファームウェアの版数が比較されます。

target を指定して `versionlist` を実行すると、各ファームウェアの版数の比較結果が表示されます。

比較結果は表形式で表示されます。各行には、PCI ボックスの装置名、PCI ボックスのファームウェア版数、リンクカードの装置名、リンクカードのファームウェア版数、および比較結果 (mismatch：差異あり、equal：同一) が表示されます。mismatch の場合、行の先頭にアスタリスク（*）が表示されます。使用例 7 を参照してください。

使用例

使用例 1 温度、電圧、電流、ファン回転速度センサーの測定値を表示します。

```
XSCF> ioxadm env -te PCIBOX#1005
Location                      Sensor            Value Resolution Units
PCIBOX#1005                   AIRFLOW         180.000      0.000 CHM
PCIBOX#1005                   P_CONSUMPTION    68.000      0.000 W
PCIBOX#1005/PSU#0             FAN            3648.000      0.000 RPM
```

```
PCIBOX#1005/PSU#1            FAN              3776.000       0.000 RPM
PCIBOX#1005/FAN#0            FAN              3706.000       0.000 RPM
PCIBOX#1005/FAN#1            FAN              3597.000       0.000 RPM
PCIBOX#1005/FAN#2            FAN              3653.000       0.000 RPM
PCIBOX#1005/IOB              T_INTAKE           26.000       0.000 C
PCIBOX#1005/IOB              T_PART_NO0         29.500       0.000 C
PCIBOX#1005/IOB              T_PART_NO1         29.750       0.000 C
PCIBOX#1005/IOB              T_PART_NO2         29.750       0.000 C
PCIBOX#1005/IOB              V_12_0V            12.189       0.000 V
PCIBOX#1005/IOB              V_3_3_NO0           3.381       0.000 V
PCIBOX#1005/IOB              V_3_3_NO1           3.382       0.000 V
PCIBOX#1005/IOB              V_3_3_NO2           3.395       0.000 V
PCIBOX#1005/IOB              V_3_3_NO3           3.393       0.000 V
PCIBOX#1005/IOB              V_1_8V              1.801       0.000 V
PCIBOX#1005/IOB              V_0_9V              0.900       0.000 V
XSCF>
```

使用例 2 1 つのリンクに関するすべてのセンサー測定値を表示します。ヘッダーは非表示にします。

```
XSCF> ioxadm -A env BB#00-PCI#00
BB#00-PCI#00    DATA    On      -       LED
BB#00-PCI#00    MGMT    On      -       LED
```

使用例 3 すべての PCI ボックスまたはリンクカードのパスを表示します。

```
XSCF> ioxadm list
PCIBOX                       Link
PCIBOX#1005                  BB#00-PCI#00
PCIBOX#1006                  BB#01-PCI#01
```

使用例 3 では、PCI ボックスとホストサーバ内部のリンクカード間の接続を、リストで表示しています。

使用例 4 単一の PCI ボックスを表示します。

```
XSCF> ioxadm list PCIBOX#1005
PCIBOX                       Link
PCIBOX#1005                  BB#00-PCI#00
```

使用例 5 ホストパスを使用し、詳細出力モード、ヘッダー非表示で、カードを表示します。

```
XSCF> ioxadm -A -v list BB#00-PCI#0
BB#00-PCI#00    CARD    1210    PP12340268      CA20365-B59X 001AA
                On
XSCF>
```

使用例 6 PCI ボックスのロケーター LED のステータスを表示します。

```
XSCF> ioxadm locator PCIBOX#1005
Location                     Sensor            Value Resolution Units
PCIBOX#1005                  LOCATE             Fast          - LED
PCIBOX#1005/FAN#0            LOCATE              Off          - LED
PCIBOX#1005/FAN#1            LOCATE              Off          - LED
PCIBOX#1005/FAN#2            LOCATE              Off          - LED
```

使用例 7 PCI ボックスのファームウェア版数、接続先のリンクカードのファームウェア版数、および比較結果を表示します。

```
XSCF> ioxadm versionlist
 PCIBOX                       Ver         Link                       Ver
   Info
* PCIBOX#1005                 1150        BB#00-PCI#00              1210
    mismatch
  PCIBOX#1006                 1210        BB#01-PCI#01              1210
    equal
```

使用例 8 PCI ボックスのファームウェアを 1210 にアップデートすることができるかチェックします。

```
XSCF> ioxadm -c check PCIBOX#1005 -s 1210
Firmware update executable.
XSCF>
```

使用例 9 PCI ボックスのファームウェアを 1210 にアップデートします。

```
XSCF> ioxadm -c updatek PCIBOX#1005 -s 1210
Firmware update is started. (version=1210)
Firmware update has been completed.
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前 nslookup - ホスト名をインターネットネームサーバに照会します。

形式 **nslookup** *hostname*

nslookup `-h`

説明 `nslookup` は、指定したホスト名を、インターネットネットサーバに照会するコマンドです。

以下の情報が表示されます。

Server	インターネットネームサーバ名
Address	インターネットネームサーバの IP アドレス
Name	ホスト名
Address	ホストの IP アドレス

ユーザー権限 このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド 以下のオペランドがサポートされています。

hostname	ネットワークインターフェースに設定されているホスト名を指定します。Fully Qualified Domain Name（FQDN）または省略形で指定できます。

詳細説明 何も指定しないで `nslookup` を実行すると、エラーとなります。

使用例

使用例 1 `scf0-hostname0` というホスト名の情報を表示します。

```
XSCF> nslookup scf0-hostname0
Server:  server.example.com
Address:  192.168.1.100

Name:    scf0-hostname0.example.com
Address:  192.168.1.101
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

password - XSCF ユーザーアカウントのパスワードと有効期限を設定します。

形式

password [-e *days* | *date* | NEVER] [-i *inactive*] [-M *maxdays*] [-n *mindays*] [-w *warn*] [*user*]

password -h

説明

password は、XSCF ユーザーアカウントのパスワードとパスワードの有効期限を設定するコマンドです。

パスワードは 32 文字以内で指定します。以下の文字が使用できます。

- abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
- ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
- 0123456789
- !@#$%^&*[]{}()_-+='~,></"?;:[SPACE]

1 つ以上のオプションを指定して password を実行すると、アカウントの有効期限が変更されます。デフォルトの値は、setpasswordpolicy(8) を参照してください。

オプションを省略して password を実行すると、パスワードを変更するためのプロンプトが表示されます。

user を省略して password を実行すると、現在のユーザーアカウントが対象となります。

ユーザー名が指定されるかどうかにかかわらず、ユーザーアカウントは、ローカルなものでなくてはなりません。もしユーザーアカウントがローカルでなければ、password はエラーになります。

現在のユーザーアカウントに適用できるパスワードは、以下の制約も含みます。

- "012345" や "zyxwvu" など、5 文字以上の連続性のある文字列でないこと
- "qazwswzaq" や "qazwsswzaq" など、左右対称の文字列を指定しないこと
- "XXzzzzzzX" （X：英大文字、z：数字）で表される、英国国民保険番号に一致しないこと
- 固有名詞など、辞書文字列に一致しないこと
- ユーザー名が、パスワードと一致しないこと
- 現在設定中のパスワードの大文字と小文字だけのような、少しだけ変更した文字列を指定しないこと

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下の権限が必要です。

useradm	すべてのユーザーアカウントのパスワードと有効期限を設定できます。
上記以外	自分のユーザーアカウントのパスワードだけ設定できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-e *days*|*date*|Never

days には本日を起点とする XSCF ユーザーアカウントの有効期間の日数を設定します。0 から 10730 までの数値で指定できます。現在の日付に *days* で指定した数値を加えた結果が 2038 年 1 月を超えた場合は、指定した数値は無効となりコマンドは実行されません。

date にはアカウントの有効期限が切れる日付を設定します。2038 年 1 月を超えない日付で指定します。以下のいずれかの形式で指定できます。

mm/dd/yy (10/30/12)
yyyy-mm-dd (2012-10-30)
yy-mm-dd (12-10-30)
dd-Mmm-yy (30-Oct-12)
dd-Mmm-yyyy (30-Oct-2012)
dd Mmm yy ("30 Oct 12")
dd Mmm yyyy ("30 Oct 2012")
Mmm dd, yy ("Oct 30, 12")
Mmm dd, yyyy ("Oct 30, 2012")

スペースを含む形式を使用する場合は、二重引用符(")で囲みます。大文字と小文字は区別しません。

Never は、アカウントの有効期限がないことを表します。大文字と小文字は区別されません。

-h

使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-i *inactive*

パスワードの有効期限が切れてからアカウントがロックされるまでの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成された時点で割り当てられます。デフォルトは -1 です。値が -1 の場合は、パスワードの有効期限が切れたあともアカウントがロックされないことを表します。-1 から 999999999 までの整数で指定します。

-M *maxdays*	パスワードが有効である最大日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成された時点で割り当てられます。デフォルトは 999999 です。0 から 999999999 までの整数で指定します。
-n *mindays*	パスワードを変更してから、次に変更するまでの間の最小日数を設定します。デフォルトは 0 です。いつでもパスワードを変更できることを表します。0 から 999999999 までの整数で指定します。 この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。
-w *warn*	ユーザーにパスワードの有効期限の警告を発してから実際に有効期限が切れるまでの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成された時点で割り当てられます。デフォルトは 7 です。0 から 999999999 までの整数で指定します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

user	XSCF ユーザーアカウント名を指定します。

詳細説明

- *user* に他ユーザーを指定してパスワードを変更するときは、システムのパスワードポリシーは自動では反映されません。*user* は新ユーザーの初期パスワードを作成するときやユーザーアカウントが失効されたり、パスワードを忘れたりした場合に使用してください。現在のユーザーアカウントのパスワードを変更するときは、必ず、システムのパスワードポリシーに従ったパスワードを指定してください。showpasswordpolicy(8) を実行すると現在のパスワードポリシーを参照することができます。
- useradm 権限を持つユーザーによる操作で他のユーザーアカウントを指定した場合は、ssetpasswordpolicy(8) コマンドでの設定によらず、パスワードと有効期限を設定できます。例えば、指定された他のユーザーアカウントのパスワードに有効期限が指定されている場合でも、パスワードと有効期限を設定できます。このとき、パスワードおよび有効期限とも、設定した値で上書きされます。

使用例

使用例 1 パスワードの有効期限を 2012 年 2 月 2 日に設定します。

```
XSCF> password -e 2012-02-02
```

使用例 2 パスワードの有効期限が切れてから 10 日後にロックします。

```
XSCF> password -i 10
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpasswordpolicy(8), **showpasswordpolicy**(8)

名前

ping - ICMP の ECHO_REQUEST パケットをネットワーク上のホストへ送信します。

形式

ping [-c *count*] [-q] *host*

ping -h

説明

ping は、ICMP の ECHO_REQUEST データグラムを用いて、指定したホストまたはゲートウェイからの ECHO_RESPONSE を引き出すコマンドです。

ping が正常に実行できれば、XSCF と、指定したホストまたはゲートウェイ間のネットワークは正常であると判断できます。また、結果からネットワーク性能を計測することができます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

- *host* に「localhost」、ループバックアドレス「127.0.0.0/8」、SSCP リンクのインターフェースを指定する場合

  fieldeng
- 上記以外

  必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c *count*	パケットを送信する回数を指定します。指定した回数分パケットを送信し、その応答を受信すると、ping は終了します。省略した場合は、ユーザーが終了するまでパケットを送信し続けます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-q	出力を抑制します。途中経過を表示せず、開始時と終了時だけ出力します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

host	パケットを送信するホスト名または IP アドレスを指定します。

使用例

使用例 1 scf0-hostname0 というホスト名にパケットを 3 回送信します。

```
XSCF> ping -c 3 scf0-hostname0
PING scf0-hostname0 (192.168.1.100): 56 data bytes
64 bytes from 192.168.1.100: icmp_seq=0 ttl=64 time=0.1 ms
64 bytes from 192.168.1.100: icmp_seq=1 ttl=64 time=0.1 ms
64 bytes from 192.168.1.100: icmp_seq=2 ttl=64 time=0.1 ms
```

```
--- scf0-hostname0 ping statistics ---
3 packets transmitted, 3 packets received, 0% packet loss
round-trip min/avg/max = 0.1/0.1/0.1 ms
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

poweroff - 物理パーティション（PPAR）を停止します。

形式

poweroff [[-q] -{y|n}] [-f] [-M] -p *ppar_id*

poweroff [[-q] -{y|n}] [-M] -a

poweroff -h

説明

poweroff は、PPAR を停止するコマンドです。

指定したすべての PPAR を停止します。Oracle Solaris に対して通常のシャットダウン処理が行われてから、PPAR が停止します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	起動しているすべての PPAR を停止します。platadm、fieldeng 権限を持つユーザーだけが指定できます。暖機運転待ち、空調待ち、または PPAR の起動処理中の場合でも停止します。
-f	XSCF によって指定した PPAR を強制的に停止します。-p と一緒に使用します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-p *ppar_id*	停止する物理パーティションの PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。暖機運転待ち、空調待ち、または PPAR の起動処理中の場合は停止しません。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

- 論理ドメインの Oracle Solaris が動作中の場合は、論理ドメインに用意されている shutdown の-i 5 オプションに相当する停止処理が行われます。
- 論理ドメインの Oracle Solaris が起動中の場合は、停止できません。起動完了後に、再度 poweroff を実行してください。
- 論理ドメインの Oracle Solaris がシングルユーザーモードで動作中の場合は、poweroff を使用して停止できません。論理ドメインで shutdown を実行してください。
- 論理ドメインの構成を変更した場合は、制御ドメイン上で ldm add-spconfig コマンドを実行し、最新の構成情報を XSCF に保存してください。保存しない場合は、PPAR の停止処理が、正しく動作しないことがあります。
- poweroff を実行すると、指定された PPAR ごとに、以下の形式で、停止結果が表示されます。

Powering off	正常に停止したことを表します。
Not powering off	エラーが発生し、停止できなかったことを表します。結果とともに、エラーメッセージが表示されます。

- showdomainstatus(8) を使用すると、システム上の各 PPAR が停止しているかどうかを確認できます。
- ゲストドメインの状態によっては、シャットダウンに時間がかかることがあります。詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』の「第 6 章 システムを起動する／停止する」を参照してください。
- 論理ドメインで、ゲストドメインが Active 以外の状態のときに poweroff を実行すると、電源の切断に時間がかかる場合があります。

使用例

使用例 1 すべての PPAR を停止します。

```
XSCF> poweroff -a
PPAR-IDs to power off:00,01,02,03
Continue? [y|n]:y
00:Powering off
01:Powering off
02:Powering off
03:Powering off

*Note*
 This command only issues the instruction to power-off.
 The result of the instruction can be checked by the "showpparprogress".
XSCF>
```

使用例 2 PPAR-ID 0 を停止します。

```
XSCF> poweroff -p 0
PPAR-IDs to power off:00
Continue? [y|n]:y
00:Powering off
```

```
*Note*
 This command only issues the instruction to power-off.
 The result of the instruction can be checked by the "showpparprogress".
XSCF>
```

使用例 3 PPAR-ID 0 を強制的に停止します。

```
XSCF> poweroff -f -p 0
PPAR-IDs to power off:00
The -f option will cause domains to be immediately resets.
Continue? [y|n]:y
00:Powering off

*Note*
 This command only issues the instruction to power-off.
 The result of the instruction can be checked by the "showpparprogress".
XSCF>
```

使用例 4 PPAR-ID 2 を停止します。プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> poweroff -y -p 2
PPAR-IDs to power off:02
Continue? [y|n]:y
02:Powering off

*Note*
 This command only issues the instruction to power-off.
 The result of the instruction can be checked by the "showpparprogress".
XSCF>
```

使用例 5 PPAR-ID 2 を停止します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> poweroff -q -y -p 2

XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

poweron(8), **reset**(8), **showdomainstatus**(8), **showpparprogress**(8)

名前 poweron - 物理パーティション（PPAR）を起動します。

形式 **poweron** [[-q] -{y|n}] [-M] -p *ppar_id*

poweron [[-q] -{y|n}] [-M] -a

poweron -h

説明 poweron は、PPAR を起動するコマンドです。

指定したすべての PPAR を起動します。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a	セットアップが完了している、すべての PPAR を起動します。platadmまたはfieldeng権限を持つユーザーだけが指定できます。「セットアップが完了している PPAR」とは、setupfru(8) によって設定が完了している PPAR のことです。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-p *ppar_id*	起動する物理パーティションの PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

- poweron を実行すると、指定された PPAR ごとに、以下の形式で起動結果が表示されます。

Powering on	正常に起動されたことを表します。
Not Powering on	エラーが発生し、起動できなかったことを表します。結果とともに、エラーメッセージが表示されます。

- showhardconf(8) を使用すると、PPAR が起動されているかどうかを確認できます。

使用例

使用例 1 すべての PPAR を起動します。

```
XSCF> poweron -a
PPAR-IDs to power on:00,01,02,03
Continue? [y|n]:y
00:Powering on
01:Powering on
02:Powering on
03:Powering on

*Note*
 This command only issues the instruction to power-on.
 The result of the instruction can be checked by the "showpparprogress".
```

使用例 2 PPAR-ID 0 を起動します。

```
XSCF> poweron -p 0
PPAR-IDs to power on:00
Continue? [y|n]:y
00:Powering on

*Note*
 This command only issues the instruction to power-on.
 The result of the instruction can be checked by the "showpparprogress".
```

使用例 3 PPAR-ID 0 を起動します。プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> poweron -y -p 0
PPAR-IDs to power on:00
Continue? [y|n]:y
00:Powering on

*Note*
 This command only issues the instruction to power-on.
 The result of the instruction can be checked by the "showpparprogress".
XSCF>
```

使用例 4 PPAR-ID 1 を起動します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動

的に「y」と応答します。

```
XSCF> poweron -q -y -p 1
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

poweroff(8), **reset**(8), **showdomainstatus**(8), **showpparprogress**(8)

名前

prtfru - システムおよび PCI ボックスの FRUID データを表示します。

形式

prtfru [-c] [-l] [-M] [-x] [*container*]

prtfru -h

説明

prtfru は、システムおよび PCI ボックスから Field Replaceable Unit Identifier（FRUID）を取得するコマンドです。

出力形式はツリー構造で、FRU の階層を含めた各コンテナが出力されます。

引数を指定しないで prtfru を実行すると、FRU の階層とすべての FRUID コンテナデータが出力されます。

注 – 物理パーティション（PPAR）からの FRU 情報は、このコマンドを使用しても取得できません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c	コンテナとコンテナデータだけを出力します。このオプションは FRU ツリー階層を出力しません。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-l	FRU ツリー階層だけを出力します。このオプションはコンテナデータを出力しません。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-x	prtfrureg.dtd のシステム識別子（SYSTEM）を付けて XML 形式で出力します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

container	データを格納する特定のハードウェアのパス名を指定します。

詳細説明

prtfru(8) コマンドは、一度に複数実行することはできません。別のユーザーが実行しているときに prtfru(8) コマンドを実行した場合はエラーとなります。

使用例

使用例 1 SPARC M10-4S で FRU ツリー階層を表示します。

```
XSCF> prtfru -l
/frutree
/frutree/BB#0 (fru)
/frutree/BB#0/CMUL (container)
```

```
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#00A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#01A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#02A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#03A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#04A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#05A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#06A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#07A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#10A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#11A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#12A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#13A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#14A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#15A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#16A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#17A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#00B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#01B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#02B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#03B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#04B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#05B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#06B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#07B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#10B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#11B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#12B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#13B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#14B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#15B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#16B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#17B (container)
/frutree/BB#0/CMUU (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#00A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#01A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#02A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#03A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#04A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#05A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#06A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#07A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#08A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#09A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#10A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#11A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#12A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#13A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#14A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#15A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#16A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#17A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#00B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#01B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#02B (container)
```

```
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#03B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#04B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#05B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#06B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#07B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#08B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#09B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#10B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#11B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#12B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#13B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#14B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#15B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#16B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#17B (container)
/frutree/BB#0/XBU#0 (container)
/frutree/BB#0/XBU#1 (container)
/frutree/BB#0/PSUBP (container)
/frutree/BB#0/OPNL (container)
/frutree/BB#0/PSU#0 (container)
/frutree/BB#0/PSU#1 (container)
/frutree/BB#1 (fru)
/frutree/BB#1/CMUL (container)
/frutree/BB#1/CMUL/MEM#00A (container)
/frutree/BB#1/CMUL/MEM#01A (container)
      :
```

使用例 2 SPARC M12-2S で FRU ツリー階層を表示します。

```
XSCF> prtfru -l
/frutree
/frutree/BB#0 (fru)
/frutree/BB#0/CMUL (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#00A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#01A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#02A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#03A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#04A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#05A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#06A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#07A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#00B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#01B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#02B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#03B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#04B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#05B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#06B (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#07B (container)
/frutree/BB#0/CMUU (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#00A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#01A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#02A (container)
```

```
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#03A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#04A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#05A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#06A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#07A (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#00B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#01B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#02B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#03B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#04B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#05B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#06B (container)
/frutree/BB#0/CMUU/MEM#07B (container)
/frutree/BB#0/XBU#0 (container)
/frutree/BB#0/XBU#1 (container)
/frutree/BB#0/XSCFU (container)
/frutree/BB#0/PSUBP (container)
/frutree/BB#0/OPNL (container)
/frutree/BB#0/PSU#0 (container)
/frutree/BB#0/PSU#1 (container)
/frutree/BB#0/PSU#2 (container)
/frutree/BB#0/PSU#3 (container)
```

使用例 3 SPARC M10-4 でコンテナの一覧を表示します。

```
XSCF> prtfru -lc
/frutree
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#00A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#01A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#02A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#03A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#04A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#05A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#06A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#07A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#10A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#11A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#12A (container)
/frutree/BB#0/CMUL/MEM#13A (container)
  :
```

使用例 4 SPARC M12-2S で、XSCFU の FRUID データを表示します。

```
XSCF> prtfru /frutree/BB#0/XSCFU
/frutree/BB#0/XSCFU (container)
    AREA NAME:OPL_Header
        OPL_Header: OPLFRU
        reserved: 0000000000000000
    AREA NAME:TroubleInfo_Area
        header.csn_1st: 00000000000000000000
        header.csn_last: 00000000000000000000
        header.xcp_ver: 0000000000000000
        header.start_date: Thu Jan  1 09:00:00 1970
```

```
        xscfu_error0.common.record_id: 00000000
        xscfu_error0.common.type: 00
        xscfu_error0.common.time_stamp: Thu Jan  1 09:00:00 1970
        xscfu_error0.common.temperature: 00
        xscfu_error0.common.csn:
        xscfu_error0.common.error_code:
0000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000
0000000000000
000000000000000000000000
        xscfu_error0.common.reserve: 0000000000
        rsv: 0000000000000000
        xscfu_error1.common.record_id: 00000000
        xscfu_error1.common.type: 00
        xscfu_error1.common.time_stamp: Thu Jan  1 09:00:00 1970
        xscfu_error1.common.temperature: 00
        xscfu_error1.common.csn:
        xscfu_error1.common.error_code:
0000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000
0000000000000
000000000000000000000000
        xscfu_error1.common.reserve: 0000000000
        rsv: 0000000000000000
    AREA NAME:System_Area
        reserved:
0000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000
0000000000000
0000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000
0000000000000
0000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000
0000000000000
0000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000
0000000000000
0000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000
0000000000000
0000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000000
000000000
    AREA NAME:Common_Header
        format_version: 01
        internal_use_area_starting_offset: 0d
        chassis_info_area_starting_offset: 00
        board_area_starting_offset: 01
        product_info_area_starting_offset: 00
        multirecord_area_starting_offset: 00
    AREA NAME:Board_Area
        Language: 19
        Manufacture_Data_Time: Sun Nov 29 09:00:00 2015
        Manufacturer: FUJITSU LIMITED
        Product_name: XSCFBQC_A
        Serial_number: PP154903GH
        Part_number: CA20369-B08X 001AA/9999999
    AREA NAME:Internal_Area
        area_length: 03
        board_id: 0101
        fru_type: 0000
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

ioxadm (8)

名前

rastest - 疑似故障を発生させます。

形式

rastest -c {test|hb}

rastest -h

説明

rastest は、疑似的に故障を発生させ、エラーログを登録するコマンドです。

登録されるエラーログは、rastest 用に定義されたエラーログです。登録されたエラーログは showlogs(8) で確認できます。

SNMP エージェントを有効にしている場合は、トラップを送信できます。SNMP エージェントの設定は setsnmp(8) を参照してください。

rastest を実行しても、リモート保守サービスや電子メールへ通報されることありません。また、コンポーネントが縮退されることなく、LED も点灯しません。PPAR がパニックし再起動することもありません。

rastest を実行すると、システムで使用されているモデルを自動的に判別し、モデルに応じて、以下の FRU を被疑箇所としたエラーログが登録されます。

オプションにより、以下のどちらかの疑似故障が発生されます。

test　　被疑故障用のエラーログを登録します。

- SPARC M12-1/M10-1

第 1 被疑箇所	/MBU
第 2 被疑箇所	/OPNL
第 3 被疑箇所	/PSU#0

- SPARC M12-2/M10-4

第 1 被疑箇所	/BB#0/CMUL
第 2 被疑箇所	/BB#0/OPNL
第 3 被疑箇所	/BB#0/PSU#0

- SPARC M12-2S/M10-4S

第 1 被疑箇所	/XBBOX#80/XBU#0
第 2 被疑箇所	/XBBOX#80/OPNL
第 3 被疑箇所	/XBBOX#80/PSU#0

または

第 1 被疑箇所	/BB#0/CMUL
第 2 被疑箇所	/BB#0/OPNL
第 3 被疑箇所	/BB#0/PSU#0

hb	ハートビート通知のエラーログを登録します。

- SPARC M12-1/M10-1

  第 1 被疑箇所　　/MBU

- SPARC M12-2/M10-4

  第 1 被疑箇所　　/BB#*xx*/CMUL

- SPARC M12-2S/M10-4S

  第 1 被疑箇所　　/XBBOX#*xx*/XBU#0

  または

  第 1 被疑箇所　　/BB#*xx*/CMUL

xx: マスタ XSCF の BB-ID

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c hb	ハートビート通知のエラーログを登録します。
-c test	被疑故障用のエラーログを登録します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明

- 被疑故障（-c test）の場合は、以下のエラーログが登録され、トラップが送信されます。
  - エラーログ

```
Date: May 30 17:10:45 JST 2013
    Code: 80000000-003e01009301009600-ff0200010000000000000000
    Status: Alarm                     Occurred: May 30 17:10:42.798 JST 2013
    FRU: /BB#0/CMUL,/BB#0/OPNL,/BB#0/PSU#0
     Msg: Pseudo error for test trap notice
```

  - トラップ

```
2013-05-30 17:09:52 A4U4S144 [10.26.147.53] (via UDP: [10.26.147.53]:54687)
TRAP, SNMP v1,
community paplcommunity
        XSCF-SP-MIB::scfMIBTraps   Enterprise   Specific   Trap
(XSCF-SP-MIB::scfComponentStatusEvent) Uptime: 1:55:35.40
        XSCF-SP-MIB::scfComponentErrorStatus.bb.0.cmul.0.notApplicable.0 =
INTEGER:
faulted(3)
        XSCF-SP-MIB::scfTrapStatusEventType.0 = INTEGER: alarm(1)
```

```
       XSCF-SP-MIB::scfSystemSerialNumber.0 = STRING: 2081208019
       XSCF-SP-MIB::scfSystemType.0 = STRING: SPARC M10-4S
       XSCF-SP-MIB::scfSystemName.0 = STRING: A4U4S144
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFaultEventCode.0 = STRING: FF020001
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFaultTimestamp.0 = STRING: May 30 17:10:42.798
JST 2013
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFaultKnowledgeUrl.0
https://support.oracle.com/msg/M10-Testalert
<https://support.oracle.com/msg/M10-Testalert>
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFruSerialNumber1st.0 = STRING: PP120903GW
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFruPartNumber1st.0 = STRING: CA07361-D912 A0 /
BGA-16CL-01
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFruSerialNumber2nd.0 = STRING: PP120902HF
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFruPartNumber2nd.0 = STRING: CA07361-D011 A0 /
NOT-FIXD-01
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFruSerialNumber3rd.0 = STRING: MD12070325
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFruPartNumber3rd.0 = STRING: CA01022-0761 / D-01
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFruPartPath.0 = STRING: /BB#0/CMUL,/BB#0/OPNL,/
BB#0/PSU#0
       XSCF-SP-MIB::scfTrapProductName.0 = STRING: Fujitsu M10-4S
       XSCF-SP-MIB::scfTrapSupportServiceStatus.0 = INTEGER:
supportServiceRequired(1)
       XSCF-SP-MIB::scfMIBTrapData.26.0 = STRING: "M10-Testalert"
```

- ハートビート通知（-c hb）の場合は、以下のエラーログが登録され、トラップが送信されます。
  - エラーログ

```
Date: May 31 15:28:23 JST 2013
   Code: 10000000-00a6010000ff0000ff-ff0100010000000000000000
   Status: Information            Occurred: May 31 15:28:20.370 JST 2013
   Msg: Pseudo error for heartbeat trap notice
```

  - トラップ

```
2013-05-31 15:28:30 XB-SYS39 [10.26.147.113] (via UDP:
[10.26.147.113]:57525) TRAP, SNMP
v1, community paplcommunity
       XSCF-SP-MIB::scfMIBTraps  Enterprise  Specific  Trap
(XSCF-SP-MIB::scfComponentStatusEvent) Uptime: 0:15:14.83
       XSCF-SP-MIB::scfComponentErrorStatus.xbbx.1.xbux.0.notApplicable.0 =
INTEGER
normal(1)
       XSCF-SP-MIB::scfTrapStatusEventType.0 = INTEGER: information(4)
       XSCF-SP-MIB::scfSystemSerialNumber.0 = STRING: 2111206002
       XSCF-SP-MIB::scfSystemType.0 = STRING: SPARC M10-4S
       XSCF-SP-MIB::scfSystemName.0 = STRING: XB-SYS39
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFaultEventCode.0 = STRING: FF010001
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFaultTimestamp.0 = STRING: May 31 15:28:20.370
JST 2013
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFaultKnowledgeUrl.0 = STRING:
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFruSerialNumber1st.0 = STRING:
       XSCF-SP-MIB::scfTrapFruPartNumber1st.0 = STRING:
```

```
        XSCF-SP-MIB::scfTrapFruSerialNumber2nd.0 = STRING:
        XSCF-SP-MIB::scfTrapFruPartNumber2nd.0 = STRING:
        XSCF-SP-MIB::scfTrapFruSerialNumber3rd.0 = STRING:
        XSCF-SP-MIB::scfTrapFruPartNumber3rd.0 = STRING:
        XSCF-SP-MIB::scfTrapFruPartPath.0 = STRING:
        XSCF-SP-MIB::scfTrapProductName.0 = STRING: Fujitsu M10-4S
        XSCF-SP-MIB::scfTrapSupportServiceStatus.0 = INTEGER:
supportServiceRequired(1)
        XSCF-SP-MIB::scfMIBTrapData.26.0 = STRING: "M10-Heartbeat"
```

使用例

使用例 1 疑似故障用のエラーログを登録します。

```
XSCF> rastest -c test
XSCF>
```

使用例 2 ハートビート通知用のエラーログを登録します。

```
XSCF> rastest -c hb
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setsnmp(8), **showlogs**(8)

名前

rebootxscf - XSCF を再起動します。

形式

rebootxscf [[-q] -{y|n}] -a

rebootxscf [[-q] -{y|n}] -b *bb_id*

rebootxscf [[-q] -{y|n}] -s

rebootxscf -h

説明

rebootxscf は、XSCF を再起動するコマンドです。

以下のコマンドで設定した内容は、rebootxscf で XSCF を再起動したあと、XSCF に反映されます。

- applynetwork(8)
- setaltitude(8)
- setntp(8)

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	すべての SPARC M12/M10 システムの筐体、クロスバーボックスの XSCF を再起動します。マスタ XSCF 以外からは実行できません。
-b *bb_id*	指定した *bb_id* の XSCF を再起動します。マスタ XSCF 以外からは実行できません。*bb_id* は、対象が SPARC M12/M10 システムの筐体の場合は 0 から 15 まで、クロスバーボックスの場合は 80 から 83 までの整数で指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」(no) と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-s	自 XSCF を再起動します。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- コマンドを実行すると、telnet や ssh 等の XSCF への接続が切断されます。

- `-a` を指定した場合は、すべての SPARC M12/M10 システムの筐体、クロスバーボックスの XSCF を再起動します。個別の SPARC M12/M10 システムの筐体のみを再起動する場合は、`-b` *bb_id* を指定してください。
- `setdate`(8) で自動的に実行される XSCF の再起動をキャンセルした場合、`rebootxscf` で XSCF を再起動しなおしても、設定した内容は XSCF に反映されません。

使用例

使用例 1 すべての XSCF を再起動します。

```
XSCF> rebootxscf -a
The XSCF will be reset. Continue? [y|n]:y
```

使用例 2 すべての XSCF を再起動します。プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> rebootxscf -y -a
The XSCF will be reset. Continue? [y|n]:y
```

使用例 3 自 XSCF を再起動します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> rebootxscf -q -y -s
```

使用例 4 自 XSCF の再起動を途中で中止します。プロンプトには自動的に「n」と応答します。

```
XSCF> rebootxscf -n -s
The XSCF will be reset. Continue? [y|n]:n
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork(8), **setdate**(8)

名前 replacefru - Field Replaceable Unit（FRU）および筐体を交換します。

形式

replacefru

replacefru -h

説明 `replacefru` は、FRU および筐体を交換するコマンドです。

FRU の交換に必要な FRU および筐体の選択、確認、交換などを、メニュー形式によって、対話的に行うことができます。

`replacefru` では、以下の FRU および筐体を交換できます。

- SPARC M10-1/M10-4
  - SPARC M10-1/M10-4 のファンユニット（BB/FAN）
  - SPARC M10-1/M10-4 の電源ユニット（BB/PSU）
- SPARC M10-4S
  - SPARC M10-4S（BB）
  - SPARC M10-4S のファンユニット（BB/FAN）
  - SPARC M10-4S の電源ユニット（BB/PSU）
  - クロスバーボックスのファンユニット（XB-Box/FAN）
  - クロスバーボックスの電源ユニット（XB-Box/PSU）
  - クロスバーボックスの XSCF ユニット（XB-Box/XSCFU）
- SPARC M12-1/M12-2
  - SPARC M12-1/M12-2 のファンユニット（BB/FAN）
  - SPARC M12-1/M12-2 の電源ユニット（BB/PSU）
- SPARC M12-2S
  - SPARC M12-2S（BB）
  - SPARC M12-2S のファンユニット（BB/FAN）
  - SPARC M12-2S の電源ユニット（BB/PSU）
  - SPARC M12-2S の XSCF ユニット（BB/XSCFU）
  - クロスバーボックスのファンユニット（XB-Box/FAN）
  - クロスバーボックスの電源ユニット（XB-Box/PSU）
  - クロスバーボックスの XSCF ユニット（XB-Box/XSCFU）

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、`fieldeng` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーとなります。

詳細説明

- 交換の対象となる FRU の実装状況または筐体の状態によっては、交換作業が実施できないことがあります。このとき、対象となる FRU または筐体を選択すると作業が実施できないことを表すエラーメッセージが表示されます。

  交換作業が実施できない条件は、以下のとおりです。

  - すべての FRU および筐体共通

    対象の筐体（対象が FRU のときはその FRU が搭載された筐体）が以下のいずれかの状態の場合

    - ファームウェアのアップデート中の場合

    - SCF READY 状態でない場合

  - SPARC M12-2S/M10-4S およびクロスバーボックスの FAN

    交換に伴う取り外しによって筐体の稼働に必要な最少実装数を満たさなくなる場合

    なお、最少実装数は筐体の種別や電源の状態によって異なります。

  - SPARC M12-2S/M10-4S およびクロスバーボックスの PSU

    正常に稼働している PSU が 1 台だけの場合

  - SPARC M12-2S の XSCFU

    - 対象の XSCF ユニットがマスタ筐体に搭載されている場合

    - 対象の SPARC M12-2S が保守中または未実装の場合

    - 電源制御、システム構成変更、または XSCF の再起動を伴うユーザー設定が実行中の場合

    - 対象の SPARC M12-2S が電源投入中の場合は、以下のとおり、組み込まれている PPAR 内の交換対象ではない XSCFU および PPAR の稼働状態によっては交換作業を行えない場合があります。

    -- 交換対象の XSCFU が故障しておらず、交換対象ではない XSCFU が故障している場合

    -- 交換対象ではない XSCFU が再起動中の場合

    -- PPAR が電源投入中または電源切断中の場合

    -- 制御ドメインの稼働状態が「Solaris running」以外の場合

    -- CPU コア アクティベーション違反が存在する場合

  - クロスバーボックスの XSCFU

    対象の XSCF ユニットがマスタ筐体に搭載されている場合

  - SPARC M12-2S/M10-4S

    - 対象の SPARC M12-2S/M10-4S がマスタ筐体の場合

- 対象の SPARC M12-2S/M10-4S を含む物理パーティション（PPAR）が電源投入状態の場合

- 対象の SPARC M12-2S/M10-4S に設定された BB-ID と同じ ID を持つ筐体が、以前システムに組み込まれたことのない場合

- 対象が XSCF ユニット以外の FRU または筐体の場合､対象の FRU または筐体 を選択し、抜去が完了した時点でそれ以降の作業をキャンセルすると、抜去のみを実施することができます。このとき、対象の FRU または筐体 は保守中の状態が保持されます。保守を完了させるには、replacefru で再度その FRU または筐体の保守作業を実施してください。

注 – 上記にある筐体の「抜去」は、筐体の保守のために一時的にシステムから切り離すことを目的としています。シリアル番号など、対象となる筐体に関する情報はシステムから削除されません。また、抜去した筐体は初期化もされません。筐体を恒久的にシステムから切り離す「減設」を実施する場合は、initbb(8) を使用してください。

- replacefru を使用して、筐体の情報が登録されていない BB-ID の筐体を、新規にシステムへ増設することはできません。筐体の増設する場合は addfru(8) を使用してください。
- replacefru はマスタ XSCF でだけ実行できます｡スタンバイ状態の XSCF で実行しようとするとエラーとなります。

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **addfru**(8), **deleteboard**(8), **initbb**(8), **showhardconf**(8), **showlogs**(8), **showpparstatus**(8), **testsb**(8), **unlockmaintenance**(8)

名前

reset - 指定した物理パーティション（PPAR）または論理ドメインをリセットします。

形式

reset [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* por

reset [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* -g *domainname* sir

reset [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* -g *domainname* panic

reset [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* xir

reset -h

説明

注 – reset はシステムを強制的にリセットするため、ディスクなどの故障を引き起こす可能性があります。Oracle Solaris がハングアップした場合のリカバリーなどに限定して使用してください。

reset は、指定した PPAR または論理ドメインをリセットするコマンドです。

リセット方法として、以下の 4 種類が指定できます。

por	PPAR をリセットします。
sir	論理ドメインをリセットします。
panic	論理ドメインの Oracle Solaris にパニックを指示します。停止処理中や停止中は無視されます。
xir	PPAR 内のすべての CPU をリセットします。

xir を指定して PPAR をリセットすると、論理ドメイン構成が factory-default の状態で PPAR が起動し、ハイパーバイザのダンプファイルを採取します。詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』の「8.13 ハイパーバイザのダンプファイルを採取する」を参照してください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-g *domainname*	リセットする論理ドメインの論理ドメイン名を指定します。panic か sir を指定した場合だけ指定できます。制御ドメインをリセットする場合、論理ドメイン名は primary で固定です。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」(no) と応答します。
-p *ppar_id*	リセットする PPAR-ID を 1 つだけ指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

por	PPAR をリセットします。
sir	論理ドメインをリセットします。
panic	論理ドメインの Oracle Solaris にパニックを指示します。
xir	PPAR 内のすべての CPU をリセットします。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- showhardconf(8) を使用すると、リセット指示後の、現在の PPAR の状態を確認できます。
- 以下の状態で reset を実行すると、Oracle Solaris が起動される前に処理が停止します。
  - setpparmode(8) でゲストドメインのオートブート機能が無効となっている場合
  - OpenBoot PROM 環境変数 auto-boot? で論理ドメインのオートブート機能が無効となっている場合
- 論理ドメインの構成を変更した場合は、すべての論理ドメインを active または bound 状態にしたうえで、制御ドメイン上で ldm add-spconfig コマンドを実行し、最新の構成情報を XSCF に保存してください。active または bound 以外の状態の論理ドメインが 1 つでもあるときに構成情報を XSCF に保存した場合、-g オプションでその論理ドメインを指定すると、以下のいずれかの現象が発生することがあります。
  - reset コマンドが失敗する。
  - 指定した論理ドメイン以外の論理ドメインがリセットされる。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 の論理ドメインである GuestDomain0001 をリセットします。

```
XSCF> reset -p 0 -g GuestDomain0001 sir
PPAR-ID:00
GuestDomain to sir:GuestDomain0001
Be sure to execute "ldm add-spconfig" before using this command when you
have changed the ldm configuration.
Otherwise, an unexpected domain might be reset.
Continue? [y|n] :y
00 GuestDomain0001 :Resetting

*Note*
 This command only issues the instruction to reset.
 The result of the instruction can be checked by the "showdomainstatus".
XSCF>
```

使用例 2 PPAR-ID 0 の CPU をリセットします。プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> reset -y -p 0 xir
PPAR-ID to reset:00
Continue? [y|n]:y
00 :Resetting

*Note*
 This command only issues the instruction to reset.
 The result of the instruction can be checked by the "showpparprogress".
XSCF>
```

使用例 3 ただちに、PPAR-ID 0 をリセットします。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> reset -q -y -p 0 por
XSCF>
```

使用例 4 実行した reset を途中で中止します。

```
XSCF> reset -p 0 -g GuestDomain0001 sir
PPAR-ID :00
GuestDomain to sir:GuestDomain0001
Be sure to execute "ldm add-spconfig" before using this command when you
have changed the ldm configuration.
Otherwise, an unexpected domain might be reset.
Continue? [y|n]:n
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

poweroff(8), **poweron**(8), **setpparmode**(8), **showpparstatus**(8), **showpparprogress**(8)

名前

resetdateoffset - システム時刻と各物理パーティション（PPAR）の時刻との差分をリセットします。

形式

resetdateoffset [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id*

resetdateoffset [[-q] -{y|n}] [-a]

resetdateoffset -h

説明

resetdateoffset は、XSCF で管理されるシステム時刻と、各 PPAR で管理される時刻との差分をリセットするコマンドです。

XSCF ではシステム時刻と各 PPAR の時刻との差分が保存されています。setdate(8) の実行またはNTP サーバを使用した時刻同期によってシステム時刻を変更すると、各 PPAR の時刻と変更されたシステム時刻との差分が更新されます。保存された時刻の差分は PPAR やシステムを再起動した場合でも保持されています。

resetdateoffset は、システム時刻と、各 PPAR の時刻との差分をリセットします。これにより、再起動後の各 PPAR の時刻は、システム時刻と同じ時刻に設定されます。

注 – resetdateoffset は、物理パーティションの初期構築時のみに使用するコマンドです。物理パーティションの初期構築以外では、resetdateoffset を使用しないでください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	すべての PPAR の時刻との差分を初期化します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-p *ppar_id*	時刻の差分をリセットする PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- オプションを何も指定しない場合は、すべての PPAR の、時刻との差分がリセットされます。
- `resetdateoffset` は PPAR が停止した状態で実行してください。

使用例

使用例 1 システム時刻と PPAR-ID 1 の時刻との差分を初期化します。

```
XSCF> resetdateoffset -p 1
Clear the offset of PPAR-ID 1? [y|n] :y
XSCF>
```

使用例 2 システム時刻とすべての PPAR の時刻との差分を初期化します。

```
XSCF> resetdateoffset -a
Clear the offset of all PPARs? [y|n] :y
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showdateoffset(8)

名前 restorecodactivation - CPU コア アクティベーションキーを復元します。

形式 **restorecodactivation** [-v] [-V] [[-q] -{y|n}] [-P *password*] [-u *user*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] *url*

restorecodactivation -h

説明 `restorecodactivation` は、`dumpcodactivation`(8) で保存した CPU コア アクティベーションキーを XSCF に復元するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、`platadm` または `fieldeng` 権限が必要です。システムにあらかじめ用意されている `default` アカウントでも実行できます。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」(no) と応答します。
-P *password*	暗号化されたファイルを復号するためのパスワードを指定します。暗号化された CPU コア アクティベーションキーを復元するときに-P を省略した場合は、パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。128 文字以内で指定できます。
-p *proxy*	転送に使用するプロキシサーバを指定します。-t *proxy_type* を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。*proxy* は *servername*:*port* の形式で指定します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-t *proxy_type*	プロキシの種類を指定します。-p と一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。
-u *user*	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。127 文字以内で指定できます。
-v	詳細な情報を表示します。サーバの問題を診断する場合に使用されます。
-V	詳細なネットワークアクティビティを表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

url CPU コア アクティベーションキーが保存されている URL を指定します。以下のような形式がサポートされています。

ファイルは絶対パスで指定します。

`http://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file*
`https://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file*
`ftp://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file*
`file:///media/usb_msd/`*absolute_path*`/`*file*

詳細説明

- 保存されている CPU コア アクティベーションキーの先頭には、テキスト形式で、基本的な識別情報が含まれています。テキストビューワーを使用して、以下の情報を確認できます。
  - CPU コア アクティベーションキーが保存されたときのシステム
  - 保存された日付
  - 暗号化されているかどうか
- `restorecodactivation` を実行する前には、すべての物理パーティション（PPAR）の電源を切断する必要があります。
- CPU コア アクティベーションキーは、システムのシリアル番号が一致しているシステムから退避したデータのみ、復元させることができます。

使用例

使用例 1 USB デバイスに保存された CPU コア アクティベーションキーを復元します。

```
XSCF> restorecodactivation -v -V file:///media/usb_msd/cpukey.cfg
initiating file transfer from 'file:///media/usb_msd/cpukey.cfg' ...
transfer from
'file:///media/usb_msd/cpukey.cfg' to '/ssd/transferred_file_cod.bin'
* Closing connection #0
done.
*** The CPU core Activation keys are overwritten in the backup data.
*** Do you want to restore this keys to your system? [y|n]:y
operation completed
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

dumpcodactivation(8), **restoreconfig**(8)

名前 restoreconfig - XSCF 設定情報を復元します。

形式 **restoreconfig** [-v] [-V] [[-q] -{y|n}] [-P *password*] [-s network={yes|no}] [-u *user*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] *url*

restoreconfig -h

説明 restoreconfig は、dumpconfig(8) で保存した XSCF 設定情報を XSCF へ復元するコマンドです。

XSCF 設定情報とは、以下の情報を指します。

- システム固有情報

  システム固有情報とは、設置場所やネットワーク情報など、システム個別で使用される情報のことで、以下のものがあります。

  - NTP：NTP 設定
  - 高度設定
  - パワーキャッピング：パワーキャッピング設定
  - 電源スケジュール：電源スケジュール設定、スケジュール有効／無効、復電投入モード
  - 電源連動（RCIL）：電源連動設定、電源連動グループ設定
  - XSCF ネットワーク：引き継ぎ IP アドレス、SSCP、ホスト名、ドメイン名、ルーティング、DNS 設定、IP パケットフィルタリングルール
  - SSH/Telnet サービス：SSH サービス設定、Telnet サービス設定、ホスト公開鍵、ユーザー公開鍵、タイムアウト時間
  - HTTPS サービス：HTTPS サービス設定、認証局、ウェブサーバの秘密鍵、ウェブサーバ証明書
  - リモート保守サービス設定情報：REMCS 設定
  - CPU コア アクティベーション情報：CPU コア アクティベーションキー、CPU コアリソース情報
  - 論理ドメイン構成情報：論理ドメイン構成、起動予約情報
  - OpenBoot PROM 環境変数設定情報：Oracle Solaris ／ OpenBoot PROM 設定
  - ベリファイドブート：Oracle Solaris をベリファイドブートするときに使用する X.509 公開鍵証明書情報
  - リモートストレージ：リモートストレージへの接続設定

- システム共通情報

  システム共通情報とは、システム間で共通に使用できる情報のことで、以下のものがあります。

  - ユーザー管理：ユーザーアカウント、パスワードポリシー、パスワード、ユーザー権限、ロックアウト機能
  - 監査（Audit）：監査設定

- 時刻：タイムゾーン、サマータイム
- 暖機運転時間：暖機運転時間設定
- 二系統受電：二系統受電設定
- 空調待ち：システム起動までの待ち時間設定
- ダイレクトI/O機能: PCIボックスに実装されたPCIカードへのダイレクトI/O機能の有効・無効
- SSH/Telnet サービス：タイムアウト時間
- LDAP サービス：LDAP クライアント、LDAP の有効・無効
- Active Directory サービス：Active Directory クライアント
- LDAP over SSL サービス：LDAP over SSL クライアント
- メール通報：SMTP 設定、メール通報機能
- SNMP：SNMP エージェント、トラップホスト、v3 トラップホスト、User-based Security Model（USM）管理情報、View-based Access Control Model（VACM）管理情報
- システムボード設定：メモリミラー
- リモート保守サービス設定情報：ASR 機能（service tag の有効・無効）
- 物理パーティション構成情報：PSB の物理パーティション割り当て状態、コンフィグレーションポリシー、I/O 無効化オプション
- 物理パーティションモード設定
- OpenBoot PROM 環境変数設定情報：XSCF 設定
- SPARC M12-2S の CPU の高速モード

XSCF 設定情報は、`dumpconfig`(8) で保存したシステムと同じサーバモデルに対してのみ、復元することができます。

XSCF 設定情報は、復元先と `-s network` オプションの組み合わせにより、以下のとおり復元されます。

- XSCF 設定情報を保存したシステムの XSCF に復元する場合

  `-s network` オプションの指定値によらず、システム固有情報とシステム共通情報の両方が復元されます。

- XSCF 設定情報を保存したシステムとは別のシステムの XSCF に復元する場合

  `-s network=no`（デフォルト値）を指定した場合は、システム共通情報のみ復元され、システム固有情報は復元前の設定が維持されます。

  `-s network=yes` を指定した場合は、システム固有情報とシステム共通情報の両方が復元されます。

このコマンドでは、XSCF 設定情報の整合性を確認し、ネットワーク情報を探しだし、XSCF 設定情報ファイルのバージョンおよびシステムクラスが一致しているかどうかを検証します。

XSCF 設定情報ファイルとは、XSCF 設定情報を base64 エンコーディングテキスト形式で保存したファイルのことです。ファイル名は、ユーザーが任意に指定することができます。また、`-e` オプションを指定すると暗号化されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、`platadm` 権限が必要です。システムにあらかじめ用意されている `default` アカウントでも実行できます。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h`
: 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-n`
: プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。

`-P` *password*
: 暗号化されたファイルを復号するためのパスワードを指定します。暗号化された XSCF 設定情報を復元するときに`-P` を省略した場合は、パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。128 文字以内で指定できます。

`-p` *proxy*
: 転送に使用するプロキシサーバを指定します。`-t` *proxy_type* を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。*proxy* は *servername*:*port* の形式で指定します。使用例 3 を参照してください。

`-q`
: プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

`-s network={yes|no}`
: `no`（デフォルト値）

- XSCF設定情報を保存したシステムのXSCFに復元する場合

  システム固有情報とシステム共通情報の両方が復元されます。

- XSCF 設定情報を保存したシステムとは別のシステムの XSCF に復元する場合

  システム共通情報のみ復元され、システム固有情報は復元前の設定が維持されます。

`yes`

  復元先が XSCF 設定情報を保存したシステムと同じかどうかにかかわらず、システム固有情報とシステム共通情報の両方が復元されます。

`-t` *proxy_type*
: プロキシの種類を指定します。`-p` と一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。

`-u` *user*	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。127 文字以内で指定できます。
`-v`	詳細な情報を表示します。サーバの問題を診断する場合に使用されます。
`-V`	詳細なネットワークアクティビティを表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。
`-y`	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

url

XSCF 設定情報が保存されている URL を指定します。以下のような形式がサポートされています。

ファイルは絶対パスで指定します。

`http://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file*
`https://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file*
`ftp://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file*
`file:///media/usb_msd/`*absolute_path*`/`*file*

詳細説明

- XSCF 設定情報の先頭に、テキスト形式で、基本的な識別情報が含まれています。テキストビューワーを使用して、以下の情報を確認できます。
  - XSCF 設定情報が保存されたときのシステム
  - 保存された日付
  - 暗号化されているかどうか
- `restoreconfig` コマンドはシステムが停止している状態で実行してください。システムが停止していない場合、エラーとなります。

  システム停止状態とは、すべての PPAR が停止している状態です。起動している状態の場合は、`poweroff -a` を実行することで、すべての PPAR が停止し、その後システムの電源が切断されます。システム電源の状態は、`showhardconf`(8) を実行し、「System_Power:」の表示（「On」または「Off」）を参照することで確認できます。
- `restoreconfig` では、XSCF 設定情報がダウンロードされ、情報が正しいかどうか認証されます。認証が終わると、XSCF が再起動され、データが復元されます。

注 – `dumpconfig`(8) で保存した XSCF 設定情報を同一筐体または他の筐体に `restoreconfig`(8) で復元した場合は、XSCF 設定情報が正しく復元されているかを確認してください。

注 – `restoreconfig(8)` コマンドで XSCF 設定情報を復元したあと、PPAR に電源を投入する際、Oracle Solaris の時刻合わせを実施してください。各論理ドメインの Oracle Solaris の時刻を合わせるには、NTP サーバによる時刻同期を実施するか、または各論理ドメイン上で `date` コマンドを使用します。

使用例

使用例 1 USB デバイスに保存された XSCF 設定情報を復元します。

```
XSCF> restoreconfig -v -V file:///media/usb_msd/system.cfg
Making sure mount point is clear
umount: /media/usb_msd is not mounted (according to mtab)
Trying to mount USB device /dev/sdb1 as /media/usb_msd
mount: I could not determine the filesystem type, and none was specified
Trying to mount USB device /dev/sdb as /media/usb_msd
Mounted USB device
obtaining lock ... done
initiating file transfer from 'file:///media/usb_msd/system.cfg' ...
transfer from
'/ssd/transferred_file.bin' to 'file:///media/usb_msd/system.cfg'
* Closing connection #0
Unmounted USB device
done
file decoding done.
Configuration backup created on Tue Oct  9 10:31:22 2012
 from system 'M10-4S' with serial number '2081208014', version '0001'
validating backup configuration data
 :
 :
*** Do you want to restore this configuration to your system? [y/n]:y
requesting XSCF reboot to perform restore ... requested
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

dumpconfig(8), **restorecodactivation**(8)

名前

restoredefaults - XSCF 搭載ユニットの設定情報やそのバックアップ情報を工場出荷時の状態に戻します。

形式

restoredefaults -c factory [-r activation]

restoredefaults -c xscf

restoredefaults -h

説明

restoredefaults は、XSCF 搭載ユニットの設定情報やそのバックアップ情報を、工場出荷時の状態に戻すコマンドです。

restoredefaults を実行する場合は、XSCF にシリアルで接続してください。XSCF-LAN で接続した場合は、実行中にネットワークの接続が切断されてしまいます。

以下の種類の初期化範囲を指定できます。

factory	システム全体を工場出荷時の状態に戻します。XSCF 搭載ユニットの設定情報とそのバックアップ情報のうち、ユーザーによって設定された情報とエラー情報が初期化されます。
xscf	XSCF 搭載ユニットの設定情報を工場出荷時の状態に戻します。XSCF 搭載ユニットのうち、ユーザーによって設定された情報とエラー情報、および CPU コア アクティベーションキーが初期化されます。

- SPARC M12-1/M10-1 の場合

  XSCF 搭載ユニットの設定情報はマザーボードユニット（MBU）の XSCF ユニット内部に保存されますが、そのバックアップ情報は PSU バックプレーン（PSUBP）に保存されます。

- SPARC M10-4/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

  XSCF 搭載ユニットの設定情報は CPU メモリユニット（下段）（CMUL）の XSCF ユニット内部に保存されますが、そのバックアップ情報は PSU バックプレーンユニット（PSUBP）に保存されます。

- SPARC M12-2/M12-2S（クロスバーボックスなし）の場合

  XSCF 搭載ユニットの設定情報は XSCF ユニット内部に保存されますが、そのバックアップ情報は PSU バックプレーンユニット（PSUBP）に保存されます。

- SPARC M12-2S（クロスバーボックスあり）/SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

  設定情報は XSCF インターフェースユニット（XSCFIFU）内部に保存されますが、そのバックアップ情報はクロスバーバックプレーンユニット（XBBP）に保存されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c factory	システム全体を工場出荷時の状態に戻します。
-c xscf	XSCF 搭載ユニットの設定情報を工場出荷時の状態に戻すとともに CPU コア アクティベーションキーを削除します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-r activation	CPU コア アクティベーションキーを削除します。-c factory を指定した場合に CPU コア アクティベーションキーも削除するときに指定します。 なお、-c xscf を指定する場合は本オプションを指定することはできません。

詳細説明

- restoredefaults はマスタ XSCF で実行します。マスタ XSCF は showbbstatus(8) で確認してください。
- SPARC M12-2S/M10-4S の場合、restoredefaults は SPARC M12-2S/M10-4S 単体で実行してください。複数の SPARC M12-2S/M10-4S が接続された状態で実行するとエラーとなります。
- restoredefaults を実行したあと、初期化された XSCF 搭載ユニットは停止します。停止後はシステムの入力電源を切断してから再投入してください。
- -c xscf を指定した場合は、バックアップ情報は残っています。したがって、システムの入力電源を切断してから再投入すると、保存されているバックアップ情報が読み込まれ、XSCF 搭載ユニットの設定情報は初期化される前の状態に戻ります。ただし、CPU コア アクティベーションキーに関しては、XSCF 搭載ユニットの情報、およびそのバックアップ情報の両方とも消去されます。
- restoredefaults はシステムが停止した状態で実行してください。システムが停止していない場合はエラーとなります。

  システムが停止している状態とは、すべての物理パーティション（PPAR）が停止している状態です。PPAR が起動中であった場合は、poweroff -a を実行することで、すべての PPAR が停止され、その後システムの電源が切断されます。システム電源の状態は、showhardconf(8) を実行し、「System_Power:」の表示（「On」または「Off」）を参照することで確認できます。
- -c factory だけを指定した場合は、システム内の CPU コア アクティベーションキーの情報は削除されません。CPU コア アクティベーションキーの情報も削除する場合は、-r activation を一緒に指定してください。
- -c xscf を指定した場合は、XSCF 搭載ユニットとそのバックアップ情報に登録されている CPU コア アクティベーションキーが削除されます。CPU コア アクティベーションキーを保持する場合は、dumpcodactivation(8) で CPU コア ア

クティベーションキーをあらかじめ保存しておきます。restoredefaults -c xscf を実行したあとに、restorecodactivation(8) を実行して、保存しておいた CPU コア アクティベーションキーを復元してください。

CPU コア アクティベーションキーを保存せずに restoredefaults -c xscf を実行した場合は、再度、CPU コア アクティベーションキーを登録する必要があります。

- PSU バックプレーンやクロスバーバックプレーンがインストールされていない状態で-c factory を指定した場合はエラーとなります。

使用例

使用例 1 XSCF 搭載ユニットの設定情報を工場出荷時の状態に戻すとともに、CPU コア アクティベーションキーを削除します。

```
XSCF> restoredefaults -c xscf

WARNING:
 If this system does not have BACK UP, this command will set all the user
 settable XSCF configuration parameters to their default value as they
 were set when the system was shipped out.
 Furthermore, this command will delete all logs in the intended chassis XSCF.
 Check the man page of this command before you run it.

 NOTE:
  The CPU core Activation keys will be also removed.

Continue?[yes/no](default no):yes
You must check the following points.

 1. Have the ability to power cycle the system.
 2. Have access to the serial console and hold the serial console of the
    XSCF to confirm the completion of the command.

If you answer "yes" this command will HALT the XSCF when it completes.
You will need to power cycle the system after the XSCF BOOT STOP.

Do you really want to continue?

Continue?[yes/no](default no):yes
The initialization of XSCF will be started.
 XSCF     : all data clear
            (Including CPU core Activation keys)
 BACK UP  : not clear
XSCF will be automatically rebooted. Afterwards, XSCF will be initialized.
Continue?[yes/no](default no):yes
CoD initialization complete.
Syncing file systems...  complete
Setting FRUID-ROM to writable complete
Clear BB-ID complete
XSCF shutdown request was completed.

    <snip>....XSCF reboot..<snip>
```

```
XSCF clear : start

    <snip>

XSCF clear : complete

Please turn off the breaker after XSCF halt.
```

使用例 2 システム全体を工場出荷時の状態に戻します。このとき、CPU コア アクティベーションキーは削除しません。

```
XSCF> restoredefaults -c factory

WARNING:
 If this system does not have BACK UP, this command will set all the user
 settable XSCF configuration parameters to their default value as they
 were set when the system was shipped out.
 Furthermore, this command will delete all logs in the intended chassis XSCF.
 Check the man page of this command before you run it.

Continue?[yes/no](default no):yes
You must check the following points.

 1. Have the ability to power cycle the system.
 2. Have access to the serial console and hold the serial console of the
    XSCF to confirm the completion of the command.

If you answer "yes" this command will HALT the XSCF when it completes.
You will need to power cycle the system after the XSCF BOOT STOP.

Do you really want to continue?

Continue?[yes/no](default no):yes
The initialization of XSCF will be started.
 XSCF     : all data clear (exclude SYSTEM ID data)
 BACK UP  : all data clear (exclude SYSTEM ID data)
XSCF will be automatically rebooted. Afterwards, XSCF will be initialized.
Continue?[yes/no](default no):yes
Disabling IDIAG prompt complete
Setting FRUID-ROM to writable complete
Clear BB-ID complete
Backup common DB complete
XSCF shutdown request was completed.

    <snip>....XSCF reboot..<snip>

XSCF clear : start

    <snip>

XSCF clear : complete

Please turn off the breaker after XSCF halt.
```

使用例 3 システム全体を工場出荷時の状態に戻すとともに、CPU コア アクティベーションキーを削除します。

```
XSCF> restoredefaults -c factory -r activation

WARNING:
 If this system does not have BACK UP, this command will set all the user
 settable XSCF configuration parameters to their default value as they
 were set when the system was shipped out.
 Furthermore, this command will delete all logs in the intended chassis XSCF.
 Check the man page of this command before you run it.

 NOTE:
  The CPU core Activation keys will be also removed.

Continue?[yes/no](default no):yes
You must check the following points.

 1. Have the ability to power cycle the system.
 2. Have access to the serial console and hold the serial console of the
    XSCF to confirm the completion of the command.

If you answer "yes" this command will HALT the XSCF when it completes.
You will need to power cycle the system after the XSCF BOOT STOP.

Do you really want to continue?

Continue?[yes/no](default no):yes
The initialization of XSCF will be started.
 XSCF     : all data clear (exclude SYSTEM ID data)
            (Including CPU core Activation keys)
 BACK UP  : all data clear (exclude SYSTEM ID data)
            (Including CPU core Activation keys)
XSCF will be automatically rebooted. Afterwards, XSCF will be initialized.
Continue?[yes/no](default no):yes
Disabling IDIAG prompt complete
Setting FRUID-ROM to writable complete
Clear BB-ID complete
CoD initialization complete.
Backup common DB complete
XSCF shutdown request was completed.

    <snip>....XSCF reboot..<snip>

XSCF clear : start

    <snip>

XSCF clear : complete

Please turn off the breaker after XSCF halt.
```

使用例 4 システム全体を工場出荷時の状態に戻す際、DR 機能が無効に設定されてい

るPPARが存在すると、DR機能が自動的に有効になる旨の注意喚起が表示されます。

```
XSCF> restoredefaults -c factory

WARNING:
 If this system does not have BACK UP, this command will set all the user
 settable XSCF configuration parameters to their default value as they
 were set when the system was shipped out.
 Furthermore, this command will delete all logs in the intended chassis XSCF.
 Check the man page of this command before you run it.

Notice:
 PPAR DR function will be enabled automatically. Please confirm the current
 setting by showpparmode(8).

Continue?[yes/no](default no):yes
You must check the following points.

 1. Have the ability to power cycle the system.
 2. Have access to the serial console and hold the serial console of the
    XSCF to confirm the completion of the command.

If you answer "yes" this command will HALT the XSCF when it completes.
You will need to power cycle the system after the XSCF BOOT STOP.

Do you really want to continue?

Continue?[yes/no](default no):yes
The initialization of XSCF will be started.
 XSCF     : all data clear (exclude SYSTEM ID data)
 BACK UP  : all data clear (exclude SYSTEM ID data)
XSCF will be automatically rebooted. Afterwards, XSCF will be initialized.
Continue?[yes/no](default no):yes
Disabling IDIAG prompt complete
Setting FRUID-ROM to writable complete
Clear BB-ID complete
Backup common DB complete
Syncing file systems...  complete
XSCF shutdown request was completed.

        <snip>....XSCF reboot..<snip>

XSCF clear : start

        <snip>

XSCF clear : complete

Please turn off the breaker after XSCF halt.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showbbstatus(8), **showlogs**(8)

名前

sendbreak - 指定した物理パーティション（PPAR）の制御ドメインにブレーク信号を送ります。

形式

sendbreak [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id*

sendbreak -h

説明

sendbreak は、指定した PPAR の制御ドメインにブレーク信号を送るコマンドです。

制御ドメインコンソールから、PPAR 上の Oracle Solaris に対してブレーク信号を送ると、Oracle Solaris から OpenBoot PROM へ制御が移行され、OpenBoot PROM 用のプロンプト（ok）が表示されます。

注 – オペレーションパネルのモードスイッチが「Locked」にセットされている場合、setpparmode(8) のブレーク信号送信抑止を「有効」に設定するとブレーク信号は送信されません。詳細は、setpparmode(8) を参照してください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

platadm	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-p *ppar_id*	ブレーク信号を送る PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定できます。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 の制御ドメインに対してブレーク信号を送ります。

```
XSCF> sendbreak -p 0
Send break signal to PPAR-ID 0?[y|n] :
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

console(8), **setpparmode**(8), **showconsolepath**(8)

名前

setad - Active Directory を構成します。

形式

setad {enable|disable}

setad loadcert [[-q] -{y|n}] [-i *n*] [-u *username*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] *URL*

setad loadcert [[-q] -{y|n}] [-i *n*] console

setad rmcert [[-q] -{y|n}] [-i *n*]

setad group {administrator|operator|custom} -i *n* name [*groupname*]

setad group custom -i *n* roles [*privileges*]

setad userdomain -i *n* [*domainname*]

setad defaultrole [*privileges*]

setad timeout *seconds*

setad server [-i *n*] [*ipaddr* [: *port*]]

setad logdetail {none|high|medium |low|trace}

setad log [[-q] -{y|n}] clear

setad {dnslocatormode|expsearchmode|strictcertmode} {enable|disable}

setad dnslocatorquery -i *n* [*service*]

setad default [[-q] -{y|n}]

setad -h

説明

setad は、Active Directory を構成するコマンドです。Active Directory を有効にする、または無効にするには、このコマンドを enable または disable のオペランドとともに実行します。Active Directory のモード (dnslocatormode など) を有効にする、または無効にするには、そのモードを enable または disable とともに指定します。

プロパティを消去する、または設定解除するには、setad コマンドを、オペランドに何も値を設定しないで実行します。たとえば、setad group custom -i 1 name は、グループ 1 から name プロパティを消去します。プロパティが設定されていない場合は、値なしで表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-i` *n*	インデックスマーカーを、1 から 5 の値で設定します。オペランドにより、インデックスマーカーの対象が異なります。
	`group`
	グループのインデックスマーカー
	`userdomain`
	ユーザードメインのインデックスマーカー
	`server`, `loadcert`, `rmcert`
	代替 Active Directory サーバのインデックスマーカー
	`dnslocatorquery`
	DNS サーバのインデックスマーカー

`-n`	プロンプトに対して自動的に「`n`」(no) と応答します。
`-p` *proxy*	転送に使用されるプロキシサーバを設定します。`-t` *proxy_type* で修正しない場合の、デフォルトの転送タイプは `http` です。プロキシサーバの値は *サーバ名* [: *ポート番号*] の形式で指定してください。使用例 8 を参照してください。
`-q`	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
`-t` *proxy_type*	プロキシの種類を指定します。`-p` と一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。
`-u` *username*	認証が必要となるリモート ftp または http サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。
`-y`	プロンプトに対して自動的に「`y`」(yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

`enable`	他のオペランドなしで使用すると、Active Directory を有効にします。
`disable`	他のオペランドなしで使用すると、Active Directory を無効にします。

`loadcert console`
: コンソールに CA 証明書の入力プロンプトを表示します。ファイルからコピーした CA 証明書を貼り付けるには、このコマンドを使用します。[Ctrl]+[D] で入力を終了します。

  `-i` を省略した場合はプライマリ Active Directory サーバに設定されます。`-i` を指定した場合は代替 Active Directory サーバに設定されます。

`loadcert` *URL*
: Active Directory サーバ用の CA 証明書をロードします。以下のフォーマットがサポートされています。

  ファイルは絶対パスで指定します。

  `http://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file*
  `https://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file*
  `ftp://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file*
  `file:///media/usb_msd/`*absolute_path*`/`*file*

  `-i` を省略した場合はプライマリ Active Directory サーバに設定されます。`-i` を指定した場合は代替 Active Directory サーバに設定されます。

`rmcert`
: Active Directory サーバ用の CA 証明書を削除します。CA 証明書を削除するためには、`strictcertmode` は無効になっている必要があります。

  `-i` を省略した場合は、プライマリ Active Directory サーバに設定されます。`-i` を指定した場合は代替 Active Directory サーバに設定されます。

`group administrator name`
: *groupname* を指定した場合は、インデックスマーカーで指定された管理者グループの name プロパティにグループ名を割り当てます。管理者グループは、`platadm`、`useradm`、`auditadm` 権限を持ち、変更することはできません。*groupname* を省略した場合は、インデックスマーカーで指定された管理者グループの name プロパティを消去します。

`group operator name`
: *groupname* を指定した場合は、インデックスマーカーで指定されたオペレーターグループの name プロパティにグループ名を割り当てます。オペレーターグループは、`platop`、`auditop` 権限を持ち、変更することはできません。*groupname* を省略した場合は、インデックスマーカーで指定されたオペレーターグループの name プロパティを消去します。

`group custom name`	*groupname* を指定した場合は、インデックスマーカーで指定されたグループの name プロパティにグループ名を割り当てます。*groupname* を省略した場合は、インデックスマーカーで指定されたグループの name プロパティを消去します。
`group custom roles`	*privileges* を指定した場合は、インデックスマーカーで指定されたグループの role プロパティを、グループに対して割り当てます。*privileges* を省略した場合は、インデックスマーカーで指定されたグループの role プロパティを消去します。
`userdomain`	*domainname* を指定した場合は、インデックスマーカーで指定されたユーザードメインを設定します。*domainname* を省略した場合は、インデックスマーカーで指定されたユーザードメインを消去します。ユーザードメインは XSCF で `setad userdomain` を使用するか、ログインプロンプトで「*ユーザー名@ドメイン名*」の形式で指定できます。 ■「`login:` **ima.admin@dc01.example.com**」のようにログインプロンプトでユーザードメインを設定した場合は、ユーザードメインは今回のログイン内だけで使用されます。`showad userdomain` で表示される、事前に設定されたユーザードメインは無視されます。 ■「`login:` **ima.admin**」のようにログインプロンプトでユーザードメインが設定されない場合、XSCF はユーザーを認証するために、事前に設定されているユーザードメインを、順番に確認します。
`defaultrole`	*privileges* を指定した場合は、デフォルトの権限を設定します。*privileges* を省略した場合は、デフォルトの権限を消去します。`defaultrole` が構成されている場合、ユーザーは、認証後に `defaultrole` によって指定された権限を持ち、ユーザーグループメンバーシップはチェックされません。`defaultrole` が構成されていない場合、ユーザーの権限は、グループメンバーシップに基づき Active Directory サーバから得られる情報によって決定されます。
`timeout` *seconds*	トランザクションのタイムアウト時間を、秒単位で設定します。*seconds* には 1 から 20 までの数値を指定できます。デフォルトは 4 です。設定したタイムアウト時間が構成上短すぎる場合は、ログイン作業、またはユーザー権限を設定するための検索に失敗することがあります。

`server`	IPアドレスを指定した場合は、プライマリ、および最大5つの代替Active Directoryサーバを設定します。ホストネームを使用するには、DNSが必ず有効になっている必要があります。ポート番号をIPアドレスとともに指定することができます。指定しない場合は、デフォルトのポートが使用されます。IPアドレスを省略した場合は、Active Directoryサーバを消去します。 `-i`を省略した場合はプライマリActive Directoryサーバを設定します。`-i`を指定した場合は代替Active Directoryサーバを設定します。
`logdetail`	Active Directoryサーバへの認証および認可の診断メッセージのロギングを、指定した詳細レベルで有効にします。このログは故障対応時に使用され、XSCFリセット時に消去されます。以下のいずれかのレベルを指定できます。

`none`	診断メッセージを記録しません。通常のシステム動作中は、この設定を使用します。
`high`	重大性が高い診断メッセージだけ記録します。
`medium`	重大性が高い、および重大性が中程度の診断メッセージだけ記録します。
`low`	重大性が高い、重大性が中程度、および情報を含む診断メッセージを記録します。
`trace`	重大性が高い、重大性が中程度、情報を含む、およびトレースレベルの診断メッセージを記録します。

`log clear`	Active Directoryサーバへの認証および認可の診断メッセージのログファイルを消去します。
`dnslocatormode`	DNSロケーターモードを有効（enable）または無効（disable）にします。デフォルトは無効です。有効にすると、XSCFがDNSサーバに対し、ユーザー認証に使用するActive Directoryサーバを知るための問い合わせを行います。

expsearchmode	拡張検索モードを有効（enable）または無効（disable）にします。デフォルトの Active Directory は、安全性を確保するため、意図的に検索が制限されています。検索の基準は、ユーザーの環境に対応するために、拡張することができます。拡張検索モードはデフォルトでは無効です。これは User Principal Name（UPN）が Fully Qualified Domain Name のサフィックスを持つとみなされます。拡張検索モードを有効にすると、より具体性の高い UPN 検索がただちに引き続き行われない場合、追加の検索が行われます。
strictcertmode	サーバ証明書の署名検証を有効（enable）または無効（disable）にします。デフォルトでは無効です。無効の場合は、チャネルはセキュリティ保護されますが、証明書の署名を検証しません。サーバ証明書の署名検証を有効にする場合は、サーバ認証が提示されたときに署名の妥当性が確認できるように、サーバ証明書をあらかじめロードしておく必要があります。 データは、サーバ証明書の署名検証が無効になっていても、常に保護されます。サーバ証明書の署名検証は、プライマリ Active Directory サーバ、および代替 Active Directory サーバに対しても同様に、適用されます。
dnslocatorquery	DNS ロケータークエリーを構成します。DNS ロケータークエリーが動作するためには、DNS および DNS ロケーターモードが必ず有効になっている必要があります。DNS ロケーターサービスクエリーは、DNS サービスを識別します。
default	Active Directory 設定をリセットし、工場出荷時設定に戻します。

使用例

使用例 1 Active Directory プライマリサーバを、デフォルト以外のポートを指定して、構成します。

```
XSCF> setad server 10.1.12.250:4040
```

使用例 2 管理者グループ 3 の名前を設定します。

```
XSCF> setad group administrator -i 3 name CN=spSuperAdmin, \
OU=Groups,DC=Sales,DC=aCompany,DC=com
```

使用例 3 グループ 2 の名前を設定します。

```
XSCF> setad group custom -i 2 name CN=spLimitedAdmin, \
OU=Groups,DC=Sales,DC=aCompany,DC=com
```

使用例 4 グループ 2 の権限を設定します。

```
XSCF> setad group custom -i 2 roles auditadm,platop
```

使用例 5 代替サーバ 4 の CA 証明書をコンソールからロードします。

```
XSCF> setad loadcert -i 4 console
Warning: About to load certificate for Alternate Server 4:
Continue? [y|n]: y
Please enter the certificate:

-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIETjCCAzagAwIBAgIBADANBgkqhkiG9w0BAQQFADB8MQswCQYDVQQGEwJVUzET
MBEGA1UECBMKQ2FsaWZvcm5pYTESMBAGA1UEBxMJU2FuIERpZWdvMRkwFwYDVQQK
ExBTdW4gTWljcm9zeXN0ZW1zMRUwEwYDVQQLEwxTeXN0ZW0gR3JvdXAxEjAQBgNV
...
-----END CERTIFICATE-----
[Ctrl]+[D]
XSCF>
```

使用例 6 ユーザードメイン 2 を構成します。<USERNAME> はテンプレートであり、以下に示すとおり正確に入力する必要があります。認証中に、<USERNAME> は、ユーザーのログイン名に置き換えられます。userdomain は UPN、または Distinguished Name（DN）のいずれかの形式で指定します。

```
XSCF> setad userdomain -i 2 \
'<USERNAME>@yoshi.example.aCompany.com'
```

使用例 7 指定した URL を使用して、Active Directory 用の CA 証明書をロードします。

```
XSCF> setad loadcert http://domain_2/UID_2333/testcert
```

使用例 8 ポート番号 8080 の http プロキシサーバを使用して、Active Directory 用の CA 証明書をロードします。

```
XSCF> setad loadcert -p webproxy.aCompany.com:8080 \
http://domain_2/UID_2333/testcert
```

使用例 9 ユーザー名とパスワードを使用して、Active Directory 用の CA 証明書をロードします。

```
XSCF>setad loadcert -u yoshi \
http://domain_2/UID_2333/testcert
```

使用例 10 代替サーバ 3 用の CA 証明書を削除します。

```
XSCF> setad rmcert -i 3
```

使用例 11 重大性が高い診断メッセージのロギングを設定します。

```
XSCF> setad logdetail high
```

使用例 12 プロンプトには自動的に "y" と応答し、診断メッセージをログファイルから

消去します。

```
XSCF> setad log -y clear
```

使用例 13 サーバ証明書の署名検証を有効にします。

```
XSCF> setad strictcertmode enable
```

使用例 14 DNS ロケータークエリーを構成します。*service* は、実行される DNS クエリーを示します。portID は一般にレコードの一部ですが、<PORT:*portnumber*> のフォーマットを使用することによって、これを上書きできます。また、認証中のドメインに固有の named サービスを、<DOMAIN> 置換マーカーを使用して指定することができます。

```
XSCF> setad dnslocatorquery -i 2 \
'ldap.tcp.gc.msdcs.<DOMAIN>.<PORT:3269>'
```

使用例 15 デフォルトの権限を構成します。privileges は、`setad group custom roles` コマンドで使用されるものと同じです。

```
XSCF> setad defaultrole platadm platop
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showad(8)

名前 setaltitude - システムの高度を設定します。

形式 **setaltitude** -s altitude= *value*

setaltitude -h

説明 setaltitude は、システムの高度を設定するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-s altitude=*value*	システムの高度を設定します。*value* にはシステムを設置した地点の高度をメートル（m）で指定します。0 以上の整数で 100 m 単位で指定できます。100 m 単位未満は切り上げられます。デフォルト値は 0 m です。

詳細説明

- システムの高度を設定すると、吸気温度の異常を早めに検出することができます。システムの高度がわからない場合は高めに設定してください。なお、システムの高度が設定されていない場合も、CPU 温度の異常などで温度異常を検出することができるため、システムに致命的なダメージを与えることはありません。
- 設定した内容を反映させるには、rebootxscf(8) を使用して、XSCF を再起動する必要があります。
- 高度の設定では負の数はサポートされていません。高度が海抜より低い場合は、altitude=0 を指定してください。
- showaltitude(8) を使用すると、現在設定されているシステムの高度が確認できます。

使用例

使用例 1 システムの高度を 1000 m に設定します。

```
XSCF> setaltitude -s altitude=1000
1000m
```

使用例 2 システムの高度を 200 m に設定します。指定した値は 100 m 単位以下は切り上げられます。

```
XSCF> setaltitude -s altitude=157
200m
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

rebootxscf(8), **showaltitude**(8)

名前

setaudit - システムの監査機能を管理します。

形式

setaudit enable|disable|archive|delete

setaudit [-p count|suspend] [-m *mailaddr*] [-a *users*=enable|disable|default] [-c *classes*= {enable|disable}]... [-e *events*=enable|disable]... [-g {enable|disable}] [-t *percents*]

setaudit -h

説明

setaudit は、システムリソースの使用に関するデータの収集を管理するコマンドです。

監査データには、セキュリティに関連するシステムイベントのレコードが含まれています。このデータは、システムで実行されたアクションに対する、責任の割り当てに使用できます。監査では、指定のイベントが発生したときにレコードが生成されます。監査レコードを生成するイベントは以下のとおりです。

- システムの起動と停止
- ログインとログアウト
- 認証のアクション
- 管理のアクション

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、auditadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a *users*=enable|disable|default

指定されたユーザーの監査レコード生成ポリシーを設定します。*users* は、有効なユーザー名のカンマ区切りリストです。

enable または disable にすると、ユーザーの監査レコード生成はそれぞれ有効または無効になります。この設定によって、指定された各ユーザーのグローバルポリシーは無効になります。ユーザーのグローバルポリシーを設定するには、-g を使用してください。

default に設定すると、ユーザーのポリシーはグローバルポリシーに従うように設定されます。ユーザーのグローバル監査レコードポリシーを確認する場合は、showaudit -g を使用してください。

-c *classes*=enable|disable

指定された監査クラスの監査レコード生成ポリシーを変更します。*classes* は、監査クラスのカンマ区切りリストです。クラスは数値または名前によって指定できます。ACS_ プレフィックスは省略できます。たとえば、監査に関連するイベントのクラスは、ACS_AUDIT、AUDIT、または 16 と表現できます。

有効なクラスは以下のとおりです。

all
: すべてのクラス

ACS_SYSTEM(1)
: システムに関連するイベント

ACS_WRITE(2)
: 状態を変更できるコマンド

ACS_READ(4)
: 現在の状態を読み出すコマンド

ACS_LOGIN(8)
: ログインに関連するイベント

ACS_AUDIT(16)
: 監査に関連するイベント

ACS_PPAR(32)
: 物理パーティション（PPAR）管理に関連するイベント

ACS_USER(64)
: ユーザー管理に関連するイベント

ACS_PLATFORM(128)
: プラットフォーム管理に関連するイベント

ACS_MODES(256)
: モードに関連するイベント

このオプションは複数指定できます。複数指定すると、リストの順序で-e と一緒に処理されます。使用例 1 を参照してください。

enable または disable にすると、指定されたクラスの監査レコード生成はそれぞれ有効または無効になります。-e を使用すると、個別のイベントに対するこれらの設定を無効にできます。クラスおよびイベントの監査レコード生成ポリシーは、すべてのユーザーに適用されます。個々のユーザーごとに固有のクラスおよびイベントのポリシーを指定することはできません。

-e *events*=enable|disable

指定された監査イベントの監査レコード生成ポリシーを変更します。*events* は、監査イベントのカンマ区切りリストです。イベントは数値または名前によって指定できます。AEV_ プレフィックスは省略できます。たとえば、SSH ログインのイベントは、AEV_LOGIN_SSH、LOGIN_SSH、または 0 と表現できます。

有効なイベントの一覧は、showaudit -e all を参照してください。

このオプションは複数指定できます。複数指定すると、リストの順序で-c と一緒に処理されます。使用例 3 を参照してください。

enable または disable にすると、指定されたイベントの監査レコード生成はそれぞれ有効または無効になります。これらの設定によって、イベントに対するクラスの設定は無効になります。クラスの設定は、-c によって設定されます。

クラスおよびイベントの監査レコード生成ポリシーは、すべてのユーザーに適用されます。個々のユーザーごとに固有のクラスおよびイベントのポリシーを指定することはできません。

-g enable|disable

ユーザーのグローバル監査レコード生成ポリシーを設定します。

disable に設定した場合は、すべてのユーザーアカウントに帰属できる監査レコードが生成されません。これらの設定は、-a によって個々のユーザーごとに無効になる場合があります。

-h

使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-m *mailaddr*

ローカルの監査領域の使用量がしきい値に達した場合に送信される電子メールのメールアドレスを設定します（-t を参照）。電子メールアドレスは、有効な形式の電子メールアドレス「user@company.com」である必要があります。*mailaddr* に none を指定すると、電子メール通知を無効にします。

-p suspend|count

監査トレールが全容量に達した場合に従うポリシーを設定します。有効な値は以下のとおりです。

suspend
: 空き領域が確保されてレコードの書き込みが可能になるまで、またはポリシーが count に変更されるまで、監査レコードに書き込もうとするプロセスはすべて一時停止します。

count
: 新たな監査レコードは削除されます。また、削除されるレコードの数がカウントされます。

注 – suspend を指定すると、エラーによる縮退が発生したり、XSCF が再起動されたりすることがあります。監査トレールへの書き込みポリシーは、デフォルトである count を指定してください。また XCP2250 以降では、suspend を指定すると count を指定したときと同じ動作になります。

-t *percents*

ローカルの領域の使用量に関して警告を発行するしきい値を設定します。*percents* は、使用済みの領域のパーセンテージを示すカンマ区切りリストです。このリストには最大 4 つの値を設定できます。たとえば、50、75、80、90 という値を設定すると、監査レコードに使用できる領域の消費率がそれぞれ 50 %、75 %、80 %、90 % に達したときに警告が発行されます。デフォルトは 80 % です。

警告は、コンソールにメッセージとして発行されます。また、オプションで、電子メールを使用して管理者に警告を発行することもできます。-m *mailaddr* を参照してください。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

archive
: 現在の監査トレールをアーカイブするようにログのアーカイブ機構に通知します。

注 – 監査ログの転送は、現在サポートされていません。

`delete`	古いほうの監査ログのパーティションから監査トレールのデータを削除し、現在のパーティションにします。`delete` は、ローカルの監査トレールが全容量に達した場合に、新たな監査レコード用に領域を空けるために使用できます。 **注 –** パーティション内のスペースは、ログのアーカイブ時に、必要に応じて自動的にクリアされます。操作が必要とされるのは、監査ポリシーまたはネットワークの問題が監査ログのアーカイブの妨げとなる場合のみです。 **注 –** `setaudit delete` を 2 回実行すると、新しいほうの監査ログのパーティションからもデータを削除し、監査トレールのデータを何も残しません。 **注 –** 監査ログの転送は、現在サポートされていません。 監査ログの管理の詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』を参照してください。
`disable`	監査トレールへの監査レコードの書き込みを無効にします。その後、現在の監査トレールをアーカイブするようにログのアーカイブ機構に通知します。 **注 –** 監査ログの転送は、現在サポートされていません。
`enable`	監査トレールへの監査レコードの書き込みを有効にします。

詳細説明

`showaudit`(8) を使用すると、現在設定されている監査システムの内容が確認できます。

使用例

使用例 1 名前によりクラスを変更します。ログインおよび監査に関連する監査クラスを無効にして、リードに関連する監査クラスを有効にします。

```
XSCF> setaudit -c LOGIN,AUDIT=disable -c ACS_READ=enable
```

使用例 2 番号によりクラスを変更します。クラス 8（ログイン）および 16（監査）を無効にして、1（システム）を有効にします。

```
XSCF> setaudit -c 8,16=disable -c 1=enable
```

使用例 3 クラスを変更してイベントを有効にします。イベント 64（ユーザー）だけを無効にして、クラス 1（システム）を有効にします。

```
XSCF> setaudit -c 1=enable -e 64=disable
```

使用例 4 監査を有効にします。監査トレールのためのレコードの書き込みを有効にします。

```
XSCF> setaudit enable
```

使用例 5 警告を有効にします。容量が 50 % および 75 % に達した場合に警告を送ります。

```
XSCF> setaudit -t 50,75
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showaudit(8)

名前

setautologout - XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を設定します。

形式

setautologout -s *timeout*

setautologout -h

説明

setautologout は、XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を設定するコマンドです。

デフォルトのタイムアウト時間は 10 分です。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-s *timeout*	XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を指定します。*timeout* にはタイムアウトする時間を分単位で指定します。1 から 255 までの整数で指定できます。

詳細説明

- 設定されたセッションタイムアウト時間は、次回のログイン以降で有効になります。
- showautologout(8) を使用すると、現在設定されている XSCF シェルのセッションタイムアウト時間が確認できます。

使用例

使用例 1 XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を 30 分に設定します。

```
XSCF> setautologout -s 30
30min
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showautologout(8)

名前

setcod - 物理パーティション（PPAR）で使用する CPU コアリソースを割り当てます。

形式

setcod [-p *ppar_id*] -s cpu

setcod [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* -s cpu -c {set|add|del} *permits*

setcod -p *ppar_id* -s cpu *permits*

setcod -h

説明

setcod は、PPAR で使用する CPU コアリソースを割り当てるコマンドです。CPU コアリソースを割り当てるには、CPU コア アクティベーションの数を設定します。

オペランドの *permits* を指定しないで setcod コマンドを実行すると、PPAR ごとに対話形式で CPU コア アクティベーションの数を指定できます。CPU コア アクティベーションの数を入力するプロンプトには、指定できる CPU コア アクティベーション数の最大値が丸括弧で、現在設定されている CPU コア アクティベーション数が角括弧（[ ]）で表示されます。CPU コア アクティベーションの数を指定しない場合は現在の値が保持されます。

また、オプションの-p *ppar_id* を指定しなかった場合は、すべての PPAR について CPU コア アクティベーション数を入力するためのプロンプトが表示されます。

注 – -c set を指定して CPU コア アクティベーションの数を指定する場合、オペランド *permits* には、追加または削除する数ではなく、現在設定されている数に追加分を足した数、または現在設定されている数から削除分を引いた数を指定してください。追加または削除する数だけを指定すると、CPU コア アクティベーションの数を減らし過ぎてしまい、システム停止を引き起こすことがあります。-c オプションを省略した場合も同様です。

このコマンドを実行する前に、addcodactivation(8) を使用して CPU コア アクティベーションキーを SPARC M12/M10 システムに追加する必要があります。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c set
: PPAR に CPU コアリソースを割り当てます。

  オペランド *permits* には、PPAR に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を指定します。

-c add
: PPAR へ CPU コアリソースを追加します。

  オペランド *permits* には、PPAR に追加する CPU コア アクティベーションの数を指定します。

`-c del`	PPAR から CPU コアリソースを削除します。 オペランド *permits* には、PPAR から削除する CPU コア アクティベーションの数を指定します。
`-p` *ppar_id*	設定対象の PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。
`-s cpu`	PPAR に CPU コアリソースを割り当てます。 オペランド *permits* には、PPAR に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を指定します。オペランド *permits* を省略すると、対話形式で PPAR ごとに CPU コア アクティベーションの数を指定できます。
`-q`	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
`-y`	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。
`-n`	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

permits

PPAR に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を指定します。0 以上の整数で、1 コア単位で指定できます。

オプション-c で指定する引数 {set|add|del} によって、*permits* で指定する数値の意味が以下のとおり異なります。

注意 – 運用中の PPAR に対して *permits* を誤って指定して CPU コア アクティベーションの数が不足した場合、システム停止を引き起こすことがあります。

-c set

PPAR に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を指定します。使用可能な CPU コア アクティベーションの数を超える値を設定することはできません。使用可能な CPU コア アクティベーションの数は、showcod(8) コマンドで確認できます。

-c add

PPAR に追加する CPU コア アクティベーションの数を指定します。追加可能な CPU コア アクティベーションの数を超える値を設定することはできません。追加可能な CPU コア アクティベーションの数、および現在 PPAR に割り当てられている CPU コア アクティベーションの数は、showcod(8) コマンドで確認できます。

注 – 追加可能な CPU コア アクティベーションの数とは、システムにインストールされている CPU コア アクティベーションにおいて、どの PPAR にも割り当てられていない CPU コア アクティベーションの数を指します。

-c del

PPAR から削除する CPU コア アクティベーションの数を指定します。現在 PPAR に割り当てられている CPU コア アクティベーションの数を超える値は指定できません。現在 PPAR に割り当てられている CPU コア アクティベーションの数は、showcod(8) コマンドで確認できます。

注 – -c オプションを省略した場合、*permits* の値は-c set 指定時と同様に扱われます。ただし、-c オプションを省略すると setcod は以下のとおり動作するため、必ず-c オプションを指定することを推奨します。

- 設定変更を実行する際、ユーザーへの確認 [y/n] を実施しません。
- 運用中の PPAR に対して CPU コア アクティベーションの割り当て数削減を実行する際、警告メッセージを出力しません。運用中の PPAR に対して *permits* を誤って指定して CPU コア アクティベーションが不足した場合、システム停止を引き起こすことがあります。

詳細説明 以下の指定は-c set に統合され、将来的にサポートされなくなる可能性があります。

setcod -p *ppar_id* -s cpu *permits*

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を 30 に設定します。

```
XSCF> setcod -p 0 -s cpu -c set 30
PROC Permits assigned for PPAR 0 :    0 -> 30

PROC Permits assigned for PPAR will be changed.
Continue? [y|n] :y

Completed.
```

使用例 2 PPAR-ID 0 に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を 32 から 30 に変更します。PPAR が稼働中で、割り当てられている CPU コア アクティベーションの数より少ない数を指定した場合は、警告メッセージが出力されます。

```
XSCF> setcod -p 0 -s cpu -c set 30
PROC Permits assigned for PPAR 0 :    32 -> 30

Note:
  There is a possibility that logical domains are stopped
  for CoD resource violation.

PROC Permits assigned for PPAR will be changed.
Continue? [y|n] :y

Completed.
```

使用例 3 PPAR-ID 0 に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を 2 つ追加します。

```
XSCF> setcod -p 0 -s cpu -c add 2
PROC Permits assigned for PPAR 0 :    30 -> 32

PROC Permits assigned for PPAR will be changed.
Continue? [y|n] :y

Completed.
```

使用例 4 PPAR-ID 0 に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を 2 つ削除します。

```
XSCF> setcod -p 0 -s cpu -c del 2
PROC Permits assigned for PPAR 0 :    30 -> 28

PROC Permits assigned for PPAR will be changed.
```

```
Continue? [y|n] :y

Completed.
```

使用例 5 PPAR-ID 0 に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を 2 つ削除します。PPAR が稼働中の場合は警告メッセージが出力されます。

```
XSCF> setcod -p 0 -s cpu -c del 2
PROC Permits assigned for PPAR 0 :    30 -> 28

Note:
  There is a possibility that logical domains are stopped
  for CoD resource violation.

PROC Permits assigned for PPAR will be changed.
Continue? [y|n] :y

Completed.
```

使用例 6 PPAR に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を設定します。割り当てられている CPU コア アクティベーションの数より少ない数を指定した PPAR の中で、いずれかが稼働中であった場合は、警告メッセージが出力されます。

```
XSCF> setcod -s cpu
PROC Permits installed: 10 cores
PROC Permits assigned for PPAR 0 (10 MAX) [Permanent 2cores]
 Permanent [2]:4
PROC Permits assigned for PPAR 1 (6 MAX) [Permanent 4cores]
 Permanent [4]:2
PROC Permits assigned for PPAR 2 (4 MAX) [Permanent 4cores]
 Permanent [4]:2
PROC Permits assigned for PPAR 3 (2 MAX) [Permanent 0cores]
 Permanent [0]:
PROC Permits assigned for PPAR 4 (2 MAX) [Permanent 0cores]
 Permanent [0]:2
PROC Permits assigned for PPAR 5 (0 MAX) [Permanent 0cores]
 Permanent [0]:
PROC Permits assigned for PPAR 6 (0 MAX) [Permanent 0cores]
 Permanent [0]:
PROC Permits assigned for PPAR 7 (0 MAX) [Permanent 0cores]
 Permanent [0]:
PROC Permits assigned for PPAR 8 (0 MAX) [Permanent 0cores]
 Permanent [0]:
PROC Permits assigned for PPAR 9 (0 MAX) [Permanent 0cores]
 Permanent [0]:
PROC Permits assigned for PPAR 10 (0 MAX) [Permanent 0cores]
 Permanent [0]:
PROC Permits assigned for PPAR 11 (0 MAX) [Permanent 0cores]
 Permanent [0]:
PROC Permits assigned for PPAR 12 (0 MAX) [Permanent 0cores]
 Permanent [0]:
```

```
PROC Permits assigned for PPAR 13 (0 MAX) [Permanent 0cores]
 Permanent [0]:
PROC Permits assigned for PPAR 14 (0 MAX) [Permanent 0cores]
 Permanent [0]:
PROC Permits assigned for PPAR 15 (0 MAX) [Permanent 0cores]
 Permanent [0]:

PROC Permits assigned for PPAR will be changed.

PROC Permits assigned for PPAR 0 :    2 -> 4
PROC Permits assigned for PPAR 1 :    4 -> 2
PROC Permits assigned for PPAR 2 :    4 -> 2
PROC Permits assigned for PPAR 3 :    0 -> 0
PROC Permits assigned for PPAR 4 :    0 -> 2
PROC Permits assigned for PPAR 5 :    0 -> 0
PROC Permits assigned for PPAR 6 :    0 -> 0
PROC Permits assigned for PPAR 7 :    0 -> 0
PROC Permits assigned for PPAR 8 :    0 -> 0
PROC Permits assigned for PPAR 9 :    0 -> 0
PROC Permits assigned for PPAR 10:    0 -> 0
PROC Permits assigned for PPAR 11:    0 -> 0
PROC Permits assigned for PPAR 12:    0 -> 0
PROC Permits assigned for PPAR 13:    0 -> 0
PROC Permits assigned for PPAR 14:    0 -> 0
PROC Permits assigned for PPAR 15:    0 -> 0

Note:
  There is a possibility that logical domains are stopped
  for CoD resource violation.

Continue? [y|n] :y

Completed.
```

使用例 7 PPAR-ID 0 に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を 30 に設定します。

```
XSCF> showcod -p 0
PROC Permits assigned for PPAR 0: 0
XSCF> setcod -p 0 -s cpu 30
XSCF> showcod -p 0
PROC Permits assigned for PPAR 0: 30
```

使用例 8 PPAR-ID 0 に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を 2 つ追加して 32 にします。

```
XSCF> showcod -p 0
PROC Permits assigned for PPAR 0: 30
XSCF> setcod -p 0 -s cpu 32
XSCF> showcod -p 0
PROC Permits assigned for PPAR 0: 32
```

使用例 9 PPAR-ID 0 に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を 2 つ削除して 28 にします。

```
XSCF> showcod -p 0
PROC Permits assigned for PPAR 0: 30
XSCF> setcod -p 0 -s cpu 28
XSCF> showcod -p 0
PROC Permits assigned for PPAR 0: 28
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addcodactivation(8), **deletecodactivation**(8), **showcod**(8), **showcodactivation**(8), **showcodactivationhistory**(8), **showcodusage**(8)

名前 setdate - XSCF の時計の日付、時刻を設定します。

形式 **setdate** [[-q] -{y|n}] [-u] -s *date*

setdate -h

説明 setdate は、XSCF の時計の日付、時刻を設定するコマンドです。

日付、時刻を設定する場合に-u を指定せずに地方時で指定したときは、協定世界時（UTC）に変換されてから設定されます。

コマンド実行後は、XSCF が自動的に再起動されます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-s *date*	日付、時刻を設定します。*date* は、以下のどちらかの形式で指定できます。 *yyyy.MM.DD-hh:mm:ss* 「年 . 月 . 日 - 時（24 時制）: 分 : 秒」 *MMDDhhmmyyyy.ss* 「月日時（24 時制）分年 . 秒」
-u	時刻と日付を UTC に設定します。省略した場合は地方時となります。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- setdate で時刻を設定すると、各物理パーティション（PPAR）のハイパーバイザ時刻との差分に影響を与え、PPAR 起動時に時刻のズレが発生することがあります。時刻を設定したあとは、showdateoffset(8) を使用して、XSCF と各 PPAR のハイパーバイザ時刻の差分を確認してください。差分が大きくなった場合は、resetdateoffset(8) で時刻の差分をリセットしてください。
- XSCF NTP クライアント機能が有効に設定されている状態で setdate を実行すると、エラーとなります。ただし、保守交換によって時刻がハードウェア時計の初期値（2001 年）になっている場合に限り、XSCF NTP クライアント機能が有効に設定されている状態でも、setdate で時刻を設定できます。XSCF NTP クライア

ント機能の設定状況は、showntp(8) で確認できます。

- showdate(8) を使用すると、現在設定されている XSCF の日付、時刻が確認できます。

使用例

使用例 1 現在時刻を JST で「2012 年 10 月 20 日 16 時 59 分 00 秒」に指定し、UTC に変換して設定します。設定後は XSCF を再起動します。

```
XSCF> setdate -s 102016592012.00
Sat Oct 20 16:59:00 JST 2012
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
Sat Oct 20 7:59:00 UTC 2012
XSCF>
(以降、リセット処理が継続されます。)
```

使用例 2 現在時刻を UTC で「2012 年 10 月 20 日 7 時 59 分 00 秒」に設定します。設定後は XSCF が再起動されます。

```
XSCF> setdate -u -s 102007592012.00
Sat Oct 20 07:59:00 UTC 2012
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
Sat Oct 20 7:59:00 UTC 2012
XSCF>
(以降、リセット処理が継続されます。)
```

使用例 3 現在時刻を JST で「2012 年 10 月 20 日 16 時 59 分 00 秒」に設定します。プロンプトには自動的に「y」と応答します。設定後は XSCF が再起動されます。

```
XSCF> setdate -y -s 102016592012.00
Sat Oct 20 16:59:00 JST 2012
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
Sat Oct 20 7:59:00 UTC 2012
XSCF>
(以降、リセット処理が継続されます。)
```

使用例 4 現在時刻を JST で「2012 年 10 月 20 日 16 時 59 分 00 秒」に設定します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に「y」と応答します。設定後は XSCF が再起動されます。

```
XSCF> setdate -q -y -s 102016592012.00
XSCF>
(以降、リセット処理が継続されます。)
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setntp(8), **settimezone**(8), **showdate**(8), **showntp**(8), **showtimezone**(8)

名前

setdomainconfig - 物理パーティション (PPAR) 起動時の論理ドメイン構成を指定します。

形式

setdomainconfig -p *ppar_id*

setdomainconfig [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* -i *index*

setdomainconfig [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* -c default

setdomainconfig -h

説明

setdomainconfig は、次回 PPAR を起動したときの論理ドメイン構成を指定するコマンドです。

-i *index* を指定しないで setdomainconfig を実行すると、プロンプトに論理ドメイン構成の一覧が表示されるので、一覧の中から、次回 PPAR 起動時に使用する論理ドメイン構成の Index を指定します。Index を指定しない場合、現在の設定が保持されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c default	論理ドメイン構成を工場出荷時の状態（factory-default）に設定します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-i *index*	論理ドメイン構成指定の管理番号を指定します。管理番号は showdomainconfig(8) で確認できます。1 から 8 までの整数で指定できます。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-p *ppar_id*	論理ドメイン構成を設定する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- 論理ドメイン構成の保存は、Logical Domains（LDoms）Manager から行います。

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- `showdomainconfig`(8) を使用すると、現在設定されている論理ドメイン構成が確認できます。
- "factory-default" 以外の論理ドメイン構成において､本コマンドの`-c default` または`-i` *index* オプション、あるいは Oracle VM Server for SPARC による設定で、論理ドメイン構成を "factory-default" に変更した場合、次回の PPAR 起動時に OpenBoot PROM 環境変数が初期化されます。論理ドメイン構成が "factory-default" の場合は、これらのオプションを指定しても OpenBoot PROM 環境変数は初期化されません。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 の論理ドメイン構成を「ldm-set1」に設定します。

```
XSCF> setdomainconfig -p 0
PPAR-ID      :0
Booting config
 (Current)   :ldm-set2
 (Next)      :ldm-set2
----------------------------------------------------------------------------
-----
Index        :1
config_name  :factory-default
domains      :1
date_created:-
----------------------------------------------------------------------------
-----
Index        :2
config_name  :ldm-set1
domains      :8
date_created:'2012-08-08 11:34:56'
----------------------------------------------------------------------------
-----
Index        :3
config_name  :ldm-set2
domains      :20
date_created:'2012-08-09 12:43:56'
----------------------------------------------------------------------------
-----
Select Index of Using config_name :2
PPAR-ID of PPARs that will be affected :00
Logical domain config_name will be set to "ldm-set1".
Continue? [y|n] :y
```

使用例 2 PPAR-ID 0 の論理ドメイン構成を「ldm-set2」に設定します。

```
XSCF> setdomainconfig -p 0 -i 1
Index        :1
config_name  :ldm-set2
domains      :8
date_created:'2012-08-08 11:34:56'
```

```
--------------------------------------------------------------------------
-----
PPAR-ID of PPARs that will be affected:00
Logical domain config_name will be set to "ldm-set2".
Continue? [y|n] :y
```

使用例 3 PPAR-ID 0 の論理ドメイン構成を工場出荷時の状態に設定します。プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> setdomainconfig -y -p 0 -c default
PPAR-ID of PPARs that will be affected :00
Logical domain config_name will be set to "factory-default".
Continue? [y|n] :y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showdomainconfig(8)

名前 setdualpowerfeed - 二系統受電モードを設定します。

形式 **setdualpowerfeed** {-a|-b *bb_id*} -s *key*

setdualpowerfeed -h

説明 setdualpowerfeed は、システムの二系統受電モードを有効または無効にするコマンドです。

注 – SPARC M10 システムおよび SPARC M12-1 には、電源ユニットが 2 台搭載されています。二系統受電機能を有効／無効のどちらに設定しても、冗長構成のシステムの挙動に影響はありません。二系統受電に関する設定機能は、現在の状態を確認するためのシステム管理者用のメモとして利用します。
SPARC M12-2/M12-2S には電源ユニットが 4 台搭載されています。二系統の場合、電源ユニットが 2 台ずつの受電系統になります。詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』を参照してください。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a	すべての SPARC M12/M10 システムの筐体およびクロスバーボックスの二系統受電モードを設定します。
-b *bb_id*	二系統受電モードを設定する BB-ID を設定します。*bb_id* は SPARC M12/M10 システムの筐体の場合は 0 から 15 まで、クロスバーボックス の場合は 80 から 83 までの整数で指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-s *key*	システムの二系統受電モードを設定します。*key* には以下のどちらかを指定できます。 enable　二系統受電モードを有効にします。 disable　二系統受電モードを無効にします。

詳細説明

- showdualpowerfeed(8) を使用すると、現在設定されている二系統受電モードの状態が確認できます。
- showhardconf(8) を使用すると、現在設定されているモデルと電源ユニット（PSU）の情報が確認できます。
- 二系統受電の設定は、setdualpowerfeed の実行直後に反映されます。XSCF を再起動する必要はありません。

使用例

使用例 1 システム全体の二系統受電モードを無効にします。

```
XSCF> setdualpowerfeed -a -s disable
BB#00:enable -> disable
BB#01:enable -> disable
BB#02:enable -> disable
BB#03:enable -> disable
BB#04:enable -> disable
BB#05:enable -> disable
BB#06:enable -> disable
BB#07:enable -> disable
BB#08:enable -> disable
BB#09:enable -> disable
BB#10:enable -> disable
BB#11:enable -> disable
BB#12:enable -> disable
BB#13:enable -> disable
BB#14:enable -> disable
BB#15:enable -> disable
XBBOX#80:enable -> disable
XBBOX#81:enable -> disable
XBBOX#82:enable -> disable
XBBOX#83:enable -> disable
```

使用例 2 BB-ID 01 の二系統受電モードを有効にします。

```
XSCF> setdualpowerfeed -b 1 -s enable
BB#00:disable -> disable
BB#01:disable -> enable
BB#02:disable -> disable
BB#03:disable -> disable
BB#04:disable -> disable
BB#05:disable -> disable
BB#06:disable -> disable
BB#07:disable -> disable
BB#08:disable -> disable
BB#09:disable -> disable
BB#10:disable -> disable
BB#11:disable -> disable
BB#12:disable -> disable
BB#13:disable -> disable
BB#14:disable -> disable
BB#15:disable -> disable
XBBOX#80:disable -> disable
```

```
XBBOX#81:disable -> disable
XBBOX#82:disable -> disable
XBBOX#83:disable -> disable
```

使用例 3　SPARC M10-1 で二系統受電モードを有効にします。

```
XSCF> setdualpowerfeed -b 0 -s enable
BB#00:disable -> enable
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showdualpowerfeed(8), **showhardconf**(8)

名前 setemailreport - 電子メールレポート機能を設定します。

形式 **setemailreport** [-v] [-t]

setemailreport [-s *variable*= *value*]...

setemailreport -h

説明 setemailreport は、リモート保守用に電子メールレポート機能を設定するコマンドです。

オプションを指定しないで setemailreport を実行すると、電子メールレポート機能を対話形式で設定できます。対話形式で設定する場合は、以下のオプションを使用します。

-a	受信者の追加
-d	受信者の削除
-r	受信者の置換（デフォルト）

電子メールレポートを非対話形式で設定する場合は、-s を指定します。

setsmtp(8) を使用してメールサーバとポートを設定したあとは、setemailreport -t でテストメールを送信できるようになります。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-s` *variable=value*　電子メールレポート機能を設定します。

variable には以下の値を指定できます。

`enable`	電子メールレポート機能を有効にするかどうかを指定します。
`recipient`	電子メールの受信アドレスを指定します。

variable に `enable` を設定した場合、*value* には以下のどちらかを指定できます。

`yes`	電子メールレポート機能を有効にします。
`no`	電子メールレポート機能を無効にします。

variable に `recipient` を設定した場合、*value* には受信する電子メールアドレスを指定します。カンマ（,）、コロン（:）、またはセミコロン（;）で区切って複数指定できます。複数指定した場合は二重引用符（"）で囲みます。

`-t`　テストメールを送信します。

`-v`　詳細なメッセージを表示します。

詳細説明

- `showemailreport`(8) を使用すると、現在設定されている電子メールレポートのデータが確認できます。
- `setemailreport` で使用できるメールアドレスは、RFC5322 の 3.4.1. Addr-Spec Specification を基準とした、以下の形式です。
  - local-part と domain をアットマーク（@）で連結した「local-part@domain」の形式で、local-part は 64 文字以内、domain は 255 文字以内、またメールアドレス全体は 256 文字以内とします。
  - local-part には以下の文字が使用できます。

    - abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

    - ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ

    - 0123456789

    - !#$%&'*+-/=?^_`{|}~.

    ドット（.）は local-part の先頭と末尾には使用できません。また、2 つ以上連続して使用できません。
  - domain は構成要素となるラベルをドット（.）で連結した「ラベル 1. ラベル 2」の形式で指定します。

    ドット（.）は domain の先頭と末尾には使用できません。また、2 つ以上連続して使用できません。
  - domain の構成要素であるラベルには以下の文字が使用できます。

    - abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

    - ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ

- 0123456789

- .-

ハイフン（-）は ラベルの先頭には使用できません。

■ recipient に複数の宛先を指定する場合は、メールアドレス全体を二重引用符（"）で囲ったうえで、各メールアドレスをカンマ（,）、コロン（:）、またはセミコロン（;）で区切った形式で指定します。

注 – 利用するメールサーバによっては、上記で定義された記号が利用できない場合があります。

注 – RFC5322 で定義されている以下の書式はサポートしていません。
3.2.1. Quoted Characters で定義されている quoted-pair
3.2.2. Folding White Space and Comments で定義されている CFWS, FWS, comment
3.2.4. Quoted Strings で定義されている quoted-string
3.4.1. Addr-Spec Specification で定義されている domain-literal
4 Obsolete Syntax で定義されている各種の廃止された書式

使用例

使用例 1 対話形式で電子メールレポート機能を有効にします。

```
XSCF> setemailreport
Enable E-Mail Reporting? [no]:yes
E-mail Recipient Address [useradm@company.com]:
Do you want to send a test mail now [no]? yes
... Sending test mail to 'useradm@company.com'
```

使用例 2 対話形式で電子メールレポートを受信する電子メールアドレスを追加します。

```
XSCF> setemailreport
Enable E-Mail Reporting? [yes]:[Enter]
E-mail Recipient Address [useradm@company.com]: -a adm2@company.com
```

使用例 3 対話形式で電子メールレポートを受信する電子メールアドレスを削除します。

```
XSCF> setemailreport
Enable E-Mail Reporting? [yes]:[Enter]
E-mail Recipient Address [adm2@company.com]: -d adm2@company.com
```

使用例 4 電子メールレポート機能を非対話形式で設定します。

```
XSCF> setemailreport -s enable=yes -s
recipient="useradm@company.com,adm2@company.com"
```

使用例 5 テストメールを送信します。

```
XSCF> setemailreport -t
... Sending test mail to 'useradm@company.com'
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setsmtp (8), **showemailreport** (8)

名前

sethostname - マスタ筐体と XSCF がスタンバイ状態の筐体の、ホスト名および DNS ドメイン名を設定します。

形式

sethostname *xscfu hostname*

sethostname -d *domainname*

sethostname -h

説明

sethostname は、マスタ筐体と XSCF がスタンバイ状態の筐体の、ホスト名および DNS ドメイン名を設定するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-d *domainname*	マスタ筐体／ XSCF がスタンバイ状態の筐体に設定する DNS ドメイン名を指定します。*domainname* はラベル要素をピリオド（.）で区切った形式で指定します。ラベル要素には、英数字またはハイフン（-）が使用できます。ただし、先頭は英字、末尾は英数字で指定してください（RFC 1034 に準拠）。*hostname* と合わせた文字数が 253 文字以内になるように指定します。これは、*hostname* と *domainname* をつなぐためのピリオド 1 文字と、ルートドメインを表すピリオド 1 文字の合計 2 文字分が予約されるため 253 文字までとなります。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

hostname	マスタ筐体と XSCF がスタンバイ状態の筐体に設定するホスト名を指定します。Fully Qualified Domain Name（FQDN）ではなく省略された形式で、63 文字以内で指定します。また、*domainname* と合わせた文字数が 253 文字以内になるように指定します。これは、*hostname* と *domainname* をつなぐためのピリオド 1 文字と、ルートドメインを表すピリオド 1 文字の合計 2 文字分が予約されるため 253 文字までとなります。*hostname* はラベル要素をピリオド（.）で区切った形式で指定します。ラベル要素には、英数字またはハイフン（-）が使用できます。ただし、先頭は英字、末尾は英数字で指定してください（RFC 1034 に準拠）。

xscfu 設定する筐体を指定します。システム構成によって以下のように指定できます。省略した場合はエラーとなります。

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

XBBOX#80	xbbox#80
XBBOX#81	xbbox#81

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

BB#00	bb#00
BB#01	bb#01

- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合

bb#00

詳細説明

- 以下の場合には、applynetwork(8) 実行時にエラーとなります。
  - ホスト名と DNS ドメイン名が設定されていない場合
  - DNS ドメイン名に文字列「localdomain」を、ホスト名に文字列「localhost」を指定した場合
  - sethostname で設定する DNS ドメイン名と setnameserver(8) で設定するサーチパスの合計文字数が 256 文字を超えている場合
- 設定したホスト名および DNS ドメイン名を XSCF に反映させるには、applynetwork(8) を実行します。そのあと、rebootxscf(8) で XSCF を再起動し、設定内容を確定します。
- shownetwork(8) を使用すると、現在設定されているホスト名および DNS ドメイン名が確認できます。

使用例

使用例 1 BB#00 に scf0-hostname というホスト名を設定します。

```
XSCF> sethostname bb#00 scf0-hostname
```

使用例 2 マスタ筐体／ XSCF がスタンバイ状態の筐体に example.com という DNS ドメイン名を設定します。

```
XSCF> sethostname -d example.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork(8), **rebootxscf**(8), **setnameserver**(8), **showhostname**(8), **shownameserver**(8)

名前	sethsmode - CPU の高速モードの有効／無効を設定します。
形式	**sethsmode** [[-q] -{y|n}] -s {on|off}
	sethsmode -h
説明	sethsmode は、CPU の高速モードの有効／無効を設定するコマンドです。
	高速モードを有効（on）に設定すると FAN 回転数が上がり、冷却能力が向上するため、CPU 周波数が高くなります（最大 4.35 GHz）。
	初期設定値は無効（off）です。
	sethsmode を実行すると XSCF が再起動され、システム電源の投入時に設定情報が反映されます。
	本コマンドは、SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4/M10-4S ではサポートされていません。
	注 – 高速モードを有効にすると、無効時よりも騒音が大きくなります。また、有効に設定した場合の CPU 周波数は、最大の 4.35 GHz を保証するものではありません。
ユーザー権限	このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。
	ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。
オプション	以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-s {on|off}	"on" で CPU の高速モードを有効に、"off" で無効に設定します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- 無効なオプションを指定した場合は、sethsmode は異常終了します。
- CPU の高速モード設定は、システムが停止している状態で設定してください。システムが停止していない場合、エラーとなります。

  システム停止状態とは、すべての PPAR が停止している状態です。起動している状態の場合は、poweroff -a を実行することで、すべての PPAR が停止し、その後システムの電源が切断されます。システム電源の状態は、showhardconf(8) を実行し、「System_Power:」の表示（「On」または「Off」）を参照することで確認できます。

- sethsmode で設定した高速モードの有効／無効は、showhsmode(8) で確認できます。
- sethsmode の実行後、XSCF が再起動されます。
- XSCF の再起動を伴うため、次のコマンドを実行中の場合は CPU の高速モードを設定することはできません。

  diagxbu(8)、flashupdate(8)、poweron(8)、rebootxscf(8)、restoreconfig(8)、setdate(8)、testsb(8)

使用例

使用例 1 CPU の高速モードを有効（on）にします。

```
XSCF> sethsmode -s on
The specified modes will be changed.
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
```

使用例 2 システム電源が投入されている状態でコマンドを実行した場合

```
XSCF> sethsmode -s off
The specified modes will be changed.
The XSCF will be reset. Continue? [y|n] :y
Cannot perform this operation while the PPAR is powered on.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showhsmode(8)

名前

sethttps - XSCF ネットワークで使用する HTTPS サービスの開始と停止を設定します。また、認証関連の設定を行います。

形式

sethttps [[-q] -{y|n}] -c {enable|disable}

sethttps -c gencsr *country state* | *province locality organization organizationalunit common e-mail*

sethttps [[-q] -{y|n}] -c genserverkey

sethttps -c *importca*

sethttps [[-q] -{y|n}] -c selfsign *country state* | *province locality organization organizationalunit common e-mail*

sethttps -h

説明

sethttps は、XSCF ネットワークで使用する HTTPS サービスの開始と停止を設定するコマンドです。また、HTTPS サービスで使用される認証関連の設定を行います。

認証に関連する項目として、以下の内容を設定できます。

- 自己認証に関する設定
  - 自己認証局の構築
  - ウェブサーバの秘密鍵の生成
  - 自己署名されたウェブサーバ証明書の作成
- 外部認証に関する設定
  - ウェブサーバの秘密鍵の生成
  - ウェブサーバの証明書要求（CSR）の生成および証明書発行の依頼
  - ウェブサーバ証明書のインポート

XSCF が複数で構成されている場合は、スタンバイ状態の XSCF に対しても自動的に設定が反映されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c {enable|disable}
: HTTPS サービスの開始と停止を指定します。以下のどちらかを指定できます。省略した場合はエラーとなります。

enable	HTTPS サービスを開始します。
disable	HTTPS サービスを停止します。

HTTPS サービスを開始するときに、ウェブサーバ秘密鍵またはウェブサーバ証明書が存在しない場合は、自己認証局を作成後、ウェブサーバ秘密鍵および自己署名されたウェブサーバ証明書を作成し、HTTPS サービスを開始します。

HTTPS サービスを開始すると、コマンド実行完了時に設定が反映され、サービスが起動します。

-c gencsr
: CSR を生成します。

-c genserverkey
: ウェブサーバの秘密鍵を生成します。

-c importca
: 認証局で署名されたウェブサーバ証明書を XSCF へインポートします。

-c selfsign
: 自己認証局を構築します。また、自己署名されたウェブサーバ証明書を作成します。

-h
: 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-n
: プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。

-q
: プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

-y
: プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

common
: 作成者名やサーバのホスト名など、共通名を 64 文字以内で指定します。-c selfsign を指定した場合は、スペース文字だけの値を指定することできません。

country
: JP、US など、国名を 2 文字で指定します。-c selfsign を指定した場合は、スペース文字だけの値を指定することできません。

e-mail
: 電子メールアドレスを 64 文字以内で指定します。

locality
: 都市名などを 64 文字以内で指定します。

organization	会社名などを 64 文字以内で指定します。`-c selfsign` を指定した場合は、スペース文字だけの値を指定することできません。
organizationalunit	部、課など、所属を 64 文字以内で指定します。
state | province	州名や県名などを 64 文字以内で指定します。`-c selfsign` を指定した場合は、スペース文字だけの値を指定することできません。

オペランドの書式ルール :

- 値に記号や空白文字を含める場合は、"Kawasaki city" のように、値全体を一重引用符（'）または二重引用符（"）で囲んで指定します。
- 空白文字のみを指定する場合は、" " のように、空白文字を一重引用符（'）または二重引用符（"）で囲んで指定します。ただし、空白文字だけの値を指定できないオペランドもあります。詳細は各オペランドの説明を参照してください。
- CSR を作成する場合、すべてのオペランドに空白文字を指定することはできません。
- オペランドを省略する場合は、"" のように、一重引用符（'）または二重引用符（"）を連続して 2 つ指定します。このとき、既存で設定されている内容でウェブサーバ証明書が生成されます。
- 値にバックスラッシュ（円記号）（¥）、ダラーマーク（$）を含める場合は、「¥¥」または「¥$」のように、直前にバックスラッシュ（円記号）（¥）を付けて指定します。
- `-c selfsign` または `-c gencsr` では、オペランドの指定順序が決まっています。形式を参照してください。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- CSR は上書き作成されます。
- HTTPS サービスの開始は、`sethttps` 実行直後に設定内容が反映され、サービスが起動します。

  HTTPS サービス開始時にウェブサーバ秘密鍵またはウェブサーバ証明書が存在しない場合は、自己認証局を作成後、ウェブサーバ秘密鍵および自己署名されたウェブサーバ証明書を作成し、HTTPS サービスを開始します。
- HTTPS サービスの停止は、`sethttps` 実行直後に反映されます。このとき、動作中の HTTPS セッションがある場合は切断されます。
- ウェブサーバの秘密鍵の作成（`-c genserverkey`）、サーバ証明書のインポート（`-c importca`）、自己認証局の構築と自己署名したウェブサーバ証明書の作成（`-c selfsign`）は、HTTPS サービスが停止しているときだけ実行できます。
- `showhttps`(8) を使用すると、現在設定されている HTTPS サービスの内容が確認できます。

使用例

使用例 1 HTTPS サービスを開始します。

```
XSCF> sethttps -c enable
Continue? [y|n] :y
```

使用例 2 HTTPS サービスを停止します。

```
XSCF> sethttps -c disable
Continue? [y|n] :y
```

使用例 3 `enable` 実行時にウェブサーバ証明書が存在しない場合、自己認証局を作成し、自己署名したウェブサーバ証明書を作成し、HTTPS サービスを開始します。

```
XSCF> sethttps -c enable
The web serverkey or web server certificate which has been signed by an
external certification authority does not exist.
Create self certification authority and web server certificate which has
been self signed.
Continue? [y|n] :y
```

使用例 4 以下の内容で、ウェブサーバ証明書要求（CSR）を生成します。*country*: JP, *state|province*: Kanagawa, *locality*: Kawasaki, *organization*: Example, *organizationalunit*: development, *common*: scf-host, *e-mail*: abc@example.com

```
XSCF> sethttps -c gencsr JP Kanagawa Kawasaki Example development
\ scf-host abc@example.com
```

使用例 5 以下の内容で自己認証局を構築し、自己署名されたウェブサーバ証明書を生成します。*country*: JP, *state|province*: Kanagawa, *locality*: Kawasaki, *organization*: Example, *organizationalunit*: development, *common*: scf-host, *e-mail*: abc@example.com

```
XSCF> sethttps -c selfsign JP Kanagawa Kawasaki Example development
scf-host abc@example.com
CA key and CA cert already exist. Do you still wish to update? [y|n] :y
Enter passphrase:
Verifying - Enter passphrase:
```

使用例 6 ウェブサーバの秘密鍵を生成します。

```
XSCF> sethttps -c genserverkey
Server key already exists. Do you still wish to update? [y|n] :y
Enter passphrase:
Verifying - Enter passphrase:
```

使用例 7 コピーしたウェブサーバ証明書をインポートします。終了は [Enter] キーを押

してから、[Ctrl]+[D] キーを押します。

```
XSCF> sethttps -c importca
Please import a certificate:
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIDdTCCAt6gAwIBAgIBATANBgkqhkiG9w0BAQQFADCBgTELMAkGA1UEBhMCamox
DjAMBgNVBAgTBXN0YXRlMREwDwYDVQQHEwhsb2NhbGl0eTEVMBMGA1UEChMMb3Jn
YW5pemF0aW9uMQ8wDQYDVQQLEwZvcmdhbmkxDzANBgNVBAMTBmNvbW1vbjEWMBQG
CSqGSIb3DQEJARYHZWUubWFpbDAeFw0wNjA1MzAwNTI5MTVaFw0xNjA1MjcwNTI5
MTVaMG4xCzAJBgNVBAYTAmpqMQ4wDAYDVQQIEwVzdGF0ZTEVMBMGA1UEChMMb3Jn
YW5pemF0aW9uMQ8wDQYDVQQLEwZvcmdhbmkxDzANBgNVBAMTBmNvbW1vbjEWMBQG
CSqGSIb3DQEJARYHZWUubWFpbDCBnzANBgkqhkiG9w0BAQEFAAOBjQAwgYkCgYEA
nkPntf+TjYtyKlNYFbO/YavFpUzkYTLHdt0Fbz/tZmGd3e6Jn34A2W9EC7D9hjLs
j+kAP41Al6wFwGO7KP3H4iImX0Uysjl9Hyk4jLBU51sw8JqvT2utTjltV5mFPKL6
5A51Yuhf8OGrR+bYGli6H1a6RPmlMSD7Z0AGDxR0eY0CAwEAAaOCAQ0wggEJMAkG
A1UdEwQCMAAwLAYJYIZIAYb4QgENBB8WHU9wZW5TU0wgR2VuZXJhdGVkIENlcnRp
ZmljYXRlMB0GA1UdDgQWBBQHIlCmI7QyZa8zpt1Hl6EfLR+EwDCBrgYDVR0jBIGm
MIGjgBTnQYs6jzD7wdDhk7wsFeJGVaUTtaGBh6SBhDCBgTELMAkGA1UEBhMCamox
DjAMBgNVBAgTBXN0YXRlMREwDwYDVQQHEwhsb2NhbGl0eTEVMBMGA1UEChMMb3Jn
YW5pemF0aW9uMQ8wDQYDVQQLEwZvcmdhbmkxDzANBgNVBAMTBmNvbW1vbjEWMBQG
CSqGSIb3DQEJARYHZWUubWFpbIIBADANBgkqhkiG9w0BAQQFAAOBgQCqBFbo88Hi
yvOUyW8E8ll1AbuA04IrnjHI4cjHq9NuSX1w8mJsXKTVMx3WZCJpJDC+f/WoRMKw
R+OpXAVQvb2tjIn3kO99dq+begECo4mwknW1t7QI7A1BkcW2/MkOolIRa6iP1Zwg
JoPmwAbrGyAvGUtdzUoyIH0jl7dRQrVIRA==
-----END CERTIFICATE-----
[Ctrl]+[D]
```

使用例 8 ウェブサーバの秘密鍵を生成します。プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> sethttps -c genserverkey -y
Server key already exists. Do you still wish to update? [y|n] :y
Enter passphrase:
Verifying - Enter passphrase:
```

使用例 9 ウェブサーバの秘密鍵を生成します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> sethttps -c genserverkey -q -y
Enter passphrase:
Verifying - Enter passphrase:
```

使用例 10 *organizationalunit* に「$development」を指定して CSR を作成します。

```
XSCF> sethttps -c gencsr JP Kanagawa Kawasaki Example
'¥$development' xscf-host abc@example.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showhttps（8）

名前 sethwproperty - ハードウェア特性を設定します。

形式 `sethwproperty` [[-q] -{y|n}] `-p` *ppar_id* `-s` *ssb_mitigatione*=`{enable|disable}`

`sethwproperty -h`

説明 `sethwproperty` は、物理パーティション（PPAR）ごとにハードウェア特性を設定するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

`platadm`, `fieldeng`	すべての PPAR に対して実行できます。
`pparadm`	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

`-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-n` プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。

`-p` *ppar_id* 接続する PPAR-ID を設定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定できます。

`-q` プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

`-s` *ssb_mitigatione*=`enable|disable`

投機的ストアバイパス（Speculative Store Bypass）に対するハードウェアの緩和モードを設定します。

`enable` (Default)	CVE-2018-3639（Spectre Variant4）のために、ハードウェアの緩和モードを有効にする場合に選択します。
`disable`	CVE-2018-3639（Spectre Variant4）のために、ハードウェアの緩和モードを無効にする場合に選択します。

`-y` プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明 本コマンドは、PPAR が稼働している場合は設定できません。電源が切断されていない PPAR を指定した場合、エラーを応答します。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 のハードウェアの緩和モードを有効に設定します。

```
XSCF> sethwproperty -p 0 -s ssb_mitigation=enable
SSB Mitigation for the PPAR will be changed to enabled.
Continue? [y|n] :y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showhwproperty(8)

名前 setinterimpermit - CPU コアの一時利用機能の有効／無効を設定します。

形式 **setinterimpermit** [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* -c {enable|disable}

setinterimpermit -h

説明 setinterimpermit は、物理パーティション（PPAR）ごとに CPU コアの一時利用機能の有効／無効を設定するコマンドです。SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 システムでは、「PPAR ごとに設定」とは、実際には「システム全体に設定」を意味します。

CPU コアの一時利用機能は、PPAR に対して実装されているすべての CPU コアリソースの使用を 30 日間の期限付きで許可する機能です。PPAR で設定している有効な CPU コアリソースの数が不足し、ただちに追加の CPU コアリソースが必要な場合に、CPU コアの一時利用機能を利用します。CPU コアの一時利用機能を利用すると、注文した CPU コア アクティベーションが届くまでの間、追加の CPU コアリソースを使用できるので、突然発生する作業負荷の増大に対していち早く対応できます。

SPARC M12-2S/M10-4S システムでは、CPU コアの一時利用機能の有効／無効の設定は、setpcl(8) によって論理システムボード（LSB）の割り当てが行われている PPAR に対してのみ行うことができます。

CPU コアの一時利用機能を有効に設定すると、指定された PPAR に割り当てられた LSB 上のすべての CPU コアリソース数分の CPU コア アクティベーションが PPAR に一時的に割り当てられます。購入した CPU コア アクティベーションキーを受領し、システムに登録するまで、有効期間中（30 日間）であれば追加の CPU コアリソースを使用できます。

システムの CPU コア アクティベーションの不足時、適切な数の CPU コア アクティベーションを追加購入する予定であるが、今すぐに CPU コアリソースを追加して使用する必要がある場合に、CPU コアの一時利用機能を利用します。

CPU コアの一時利用機能を有効に設定できるのは、以下の 2 つのケースのいずれかです。

1. PPAR で、CPU コアの一時利用機能を一度も利用していない。この状態は、showinterimpermit(8) を実行したとき、Status が「Interim Permit is disabled」となっていることで確認できます。
2. PPAR で、CPU コアの一時利用機能を利用した。その後、以下の a から c のすべてを実施している。（CPU コアの一時利用機能を再び利用する場合）
   a. setinterimpermit を実行して、CPU コアの一時利用機能が無効に設定されている
   b. CPU コアの一時利用機能を有効にしたあとに追加で購入した CPU コア アクティベーションキーが、addcodactivation(8) を実行してシステムに登録されている

c. CPU コアの一時利用機能を有効にしたあとに追加した CPU コアリソースが、setcod(8) を実行して PPAR に割り当てられている

注 – a から c のすべてを実施した状態で showinterimpermit(8) を実行すると、Status は「Interim Permit is disabled (can be enabled)」となります。

setinterimpermit は XCP 2320 からサポートされますが、XCP 232*x* では SPARC M10-1/M10-4 のモデルだけでサポートされます。上記 2 のケースでは、XCP2330 以降で実施できます。お使いのシステムが XCP 232*x* の場合、CPU コアの一時利用機能を有効に設定できるのは SPARC M10-1/M10-4 のシステムだけであり、かつ 1 回のみです。そのため、XCP232*x* をお使いの場合、誤って有効に設定しないように注意してください。

XCP 2330 以降をお使いの場合は、CPU コアの一時利用機能を一度利用したとしても、再び利用できます。ただし、CPU コアの一時利用機能を再び利用するためには、上記 2 のケースの手順が実施済みである必要があります。未実施の場合は、setinterimpermit で CPU コアの一時利用機能を有効にしようとすると、エラーで終了します。

XCP 232*x* で CPU コアの一時利用機能を使用したことがあり、XCP 2330 以降にファームウェアアップデートを行うと、上記 2 のケースの手順を実施しても、CPU コアの一時利用機能を再び有効に設定することはできません。この場合は、担当営業にお問い合わせください。

CPU コアの一時利用機能を有効に設定すると、有効期限が切れるまで、残りの日数を知らせる警告メッセージが制御ドメインに表示されます（XSCF にログが登録されます）。この警告メッセージは、有効期限が切れる日の 2 週間前から、4 時間ごとに表示されます。有効期限が切れる前に、以下のいずれかを必ず実行してください。

1. 購入済みの CPU コア アクティベーションの数を増やす

   a. addcodactivation(8) を使用して、追加で購入した CPU コア アクティベーションキーをシステムに登録する。

   b. PPAR に割り当てた CPU コア アクティベーションの数が、購入した CPU コア アクティベーションの数以下になるように、setcod(8) を使用して設定する。

   c. setinterimpermit を使用して、CPU コアの一時利用機能を無効に設定する。

2. 使用中の CPU コアの数を減らす

   a. 論理ドメインに割り当てた CPU コアリソースの合計数が、購入済みの CPU コア アクティベーションの数以下になるように、CPU コアリソースを論理ドメインから解放する。

   b. setinterimpermit を使用して、CPU コアの一時利用機能を無効に設定する。

詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』を参照してください。

上記のすべての手順が実行され、購入済みの CPU コア アクティベーションの数が増えるまで、または使用中の CPU コアリソースが減るまで、警告メッセージは表示され続けます。

CPU コアの一時利用機能の有効期限が切れると（30 日が過ぎると）、CPU コアの一時利用機能は利用できなくなり、システムは「通常の」CPU コア アクティベーション制御に戻ります。この状態で、購入した数を上回る CPU コア アクティベーション数が PPAR に割り当てられていると、違反とみなされて警告メッセージが表示されます。さらに、割り当てられた CPU コアの数がシステムに登録された購入済みの CPU コア アクティベーションの数と同じになるまで、超過して割り当てられた CPU コアが、Oracle VM Server for SPARC によって論理ドメインから自動的に削除されます。CPU コアはすべての論理ドメインから削除されます。CPU コアが削除できず、違反が残っている場合は、すべての論理ドメインが停止します。上記の「1. 購入済みの CPU コア アクティベーションの数を増やす」または「2. 使用中の CPU コアの数を減らす」の手順を実行して、CPU コア アクティベーションの使用規定に従うよう、CPU コアの一時利用機能の利用を終了させてください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c enable	PPAR への CPU コアの一時利用機能を有効にする場合に指定します。
-c disable	PPAR への CPU コアの一時利用機能を無効にする場合に指定します。デフォルトは無効です。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-p *ppar_id*	設定対象の PPAR-ID を指定します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- showinterimpermit(8) を使用すると､現在設定されている CPU コアの一時利用機能の設定情報および状態を確認できます。

- CPU コアの一時利用機能の有効／無効を設定する前に、showcodusage(8) または showinterimpermitusage(8) を使用して、CPU コアリソースの使用状況を確認してください。
- CPU コアの一時利用機能の有効期限を変更することはできません。
- CPU コアの一時利用機能を有効にした場合、すべての CPU コアが使用可能な状態となり、Oracle VM Server for SPARC が提供する「CPU 自動交替機能」は動作しません。
- CPU コアの一時利用機能が有効／無効の状態にかかわらず、showcodusage(8) を実行した場合、購入して登録済みの CPU コア アクティベーションの数、および PPAR に割り当てられている CPU コアリソースの数は変わりません。以下の情報が表示されます。
  - -p all または -p resource を指定して「CoD Permitted」に表示される CPU コア アクティベーション数は、CPU コアの一時利用機能の有効／無効の状態によって変化することはありません。システムに登録されている購入済みの CPU コア アクティベーションの数が常に表示されます。
  - -p all または -p ppar を指定して「Assigned」に表示される CPU コア アクティベーション数は、CPU コアの一時利用機能の有効／無効の状態によって変化することはありません。setcod(8) により PPAR に割り当てた購入済みの CPU コア アクティベーションの数が表示されます。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 の CPU コアの一時利用機能を有効にします。

```
XSCF> setinterimpermit -p 0 -c enable

Note:
  Please add CPU Activation(s) within 30 days of enabling the
  Interim Permit.

The Interim Permit for the PPAR will be changed to enabled.
Continue? [y|n] :y

Completed.
```

使用例 2 PPAR-ID 0 の CPU コアの一時利用機能を無効にします。

```
XSCF> setinterimpermit -p 0 -c disable
The Interim Permit will be disabled.
Continue? [y|n] :y

Completed.
```

使用例 3 PPAR-ID 0 の CPU コアの一時利用機能がすでに使用された状態で、再度、有効を設定した場合

```
XSCF> setinterimpermit -p 0 -c enable

Note:
```

```
  Please add CPU Activation(s) within 30 days of enabling the Interim
  Permit.

The Interim Permit for the PPAR will be changed to enabled.
Continue? [y|n] :y

The Interim Permit cannot be enabled because it has already been used once
and cannot be enabled again (until more Purchased CPU Activations are
installed and Purchased cores are assigned to the PPAR).
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addcodactivation(8), **deletecodactivation**(8), **setcod**(8), **showcod**(8), **showcodactivation**(8), **showcodactivationhistory**(8), **showcodusage**(8), **showinterimpermit**(8), **showinterimpermitusage**(8)

名前

setldap - XSCF を Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）クライアントとして設定します。

形式

setldap [-b *bind*] [-B *baseDN*] [-c *certchain*] [-p] [-s *servers*] [-t *user*] [-T *timeout*]

setldap -h

説明

setldap は、XSCF を LDAP クライアントとして設定するコマンドです。

注 – LDAP クライアントは UNIX Crypt または MD5 である CRYPT 形式のパスワードだけをサポートしています。したがって、LDAP サーバもこの形式のパスワードをサポートする必要があります。詳細については、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』を参照してください。XSCF と LDAP では、同じユーザーアカウント名は使用できません。同様に、同じユーザー ID（UID）も使用できません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-B *baseDN*	検索ベースの識別名を指定します。指定できる最大文字数は 128 文字です。
-b *bind*	LDAP サーバへ接続するときに使用するバインド ID を設定します。指定できる最大文字数は 128 文字です。
-c *certchain*	LDAP サーバの CA 証明書となるリモートファイルを指定します。この CA 証明書は PEM 形式である必要があります。リモートファイルは、標準の scp 構文（[user@]host:file.）を使用して指定され、scp を使用してインポートされます。scp でユーザーパスワードが必要な場合は、入力するように求められます。-c オプションを使用すると、LDAP への接続時に、Transport Layer Security（TLS）の使用が暗黙的に有効になります。この動作は、*certchain* を none に指定して無効にできます。CA 証明書はサイズが 64K 以下であることと、有効であることが必要です。そうでない場合は、拒否されます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-p	LDAP サーバへ接続するときに使用するパスワードを設定します。パスワードを入力するように求められます。

-s *servers*　プライマリ LDAP サーバとセカンダリ LDAP サーバ、およびポートを設定します。*servers* は、*server*[:*port*] 形式で指定します。カンマ（,）で区切って複数指定できます。*port* は数字で、*server* は名前またはドット付き 10 進表記の IP アドレス、のいずれかで指定します。たとえば、`10.8.31.14:636,company:636` のようになります。リスト内の最初のサーバがプライマリとなります。サーバ名は DNS サーバによって、名前解決可能である必要があります。

-t *user*　設定されたすべての LDAP サーバへの接続をテストします。設定した各サーバから、指定したユーザーのパスワードデータの取得を試み、すべてのケースについての、成功または失敗を出力します。

-T *timeout*　LDAP 検索で結果を出力するまでのタイムアウト時間を秒単位で設定します。

使用例

使用例 1　LDAP サーバへ接続するときに使用するバインド名を設定します。

```
XSCF> setldap -b user -p
Password: <Enter password>
XSCF> showldap
Bind Name:                 user
Base Distinguished Name: Not set
LDAP Search Timeout:       0
Bind Password:             Set
LDAP Servers:              None
CERTS:                     None
```

使用例 2　検索ベースの識別名を指定します。

```
XSCF> setldap -B  ou=people,dc=company,dc=com
XSCF> showldap
Bind Name:                 user
Base Distinguished Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout:       0
Bind Password:             Set
LDAP Servers:              None
CERTS:                     None
```

使用例 3　LDAP 検索のタイムアウトを設定します。

```
XSCF> setldap -T 60
XSCF> showldap
Bind Name:                 user
Base Distinguished Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout:       60
Bind Password:             Set
LDAP Servers:              None
CERTS:                     None
```

使用例 4 LDAP サーバを設定します。

```
XSCF> setldap -s ldap://company.com,ldaps://company2.com
XSCF> showldap
Bind Name:               user
Base Distinguished Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout:     60
Bind Password:           Set
LDAP Servers:            ldap://company.com:389 ldaps://company2.com:636
CERTS:                   None
```

使用例 5 CA 証明書をインポートします。

```
XSCF> setldap -c user@remote.machine:/path/to/cacert.pem
XSCF> showldap
Bind Name:              user
Base Distinguished Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout:     60
Bind Password:           Set
LDAP Servers:            ldap://company.com:389 ldaps://company2.com:636
CERTS:                   cacert.pem
```

使用例 6 指定したユーザーで、LDAP 接続をテストします。

```
XSCF> setldap -t jsmith
company.com:389 PASSED
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setlookup(8), **showldap**(8)

名前

setldapssl - LDAP over SSL を構成します。

形式

setldapssl {enable|disable}

setldapssl loadcert [[-q] -{y|n}] [-i *n*] [-u *username*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] *URL*

setldapssl loadcert [[-q] -{y|n}] [-i *n*] console

setldapssl rmcert [[-q] -{y|n}] [-i *n*]

setldapssl group {administrator|operator|custom} -i *n* name [*groupname*]

setldapssl group custom -i *n* roles [*privileges*]

setldapssl userdomain -i *n* [*domainname*]

setldapssl defaultrole [*privileges*]

setldapssl timeout *seconds*

setldapssl server [-i *n*] [*ipaddr* [: *port*]]

setldapssl logdetail {none|high|medium |low|trace}

setldapssl log [[-q] -{y|n}] clear

setldapssl {strictcertmode|usermapmode} {enable|disable}

setldapssl usermap {attributeInfo|binddn|bindpw|searchbase} [*value*]

setldapssl default [[-q] -{y|n}]

setldapssl -h

説明

setldapssl は、LDAP over SSL を構成するコマンドです。LDAP over SSL を有効にする、または無効にするには、このコマンドを enable または disable のオペランドとともに実行します。LDAP over SSL の strictcertmode または usermapmode を有効にする、または無効にするには、そのモードを enable または disable とともに指定します。

プロパティを消去する、または設定解除するには、オペランドに何も値を設定しないで setldapssl を実行します。たとえば、setldapssl group custom -i 1 name はグループ 1 から name プロパティを消去し、setldapssl usermap searchbase はオプションのユーザーマッピング設定から searchbase プロパティを消去します。プロパティが設定されていない場合は、値なしで表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-i` *n*	インデックスマーカーを、1 から 5 の値で設定します。オペランドにより、インデックスマーカーの対象が異なります。
	`group`
	　グループのインデックスマーカー
	`userdomain`
	　ユーザードメインのインデックスマーカー
	`server`, `loadcert`, `rmcert`
	　代替 LDAP over SSL サーバのインデックスマーカー

`-n`	プロンプトに対して自動的に「`n`」(no) と応答します。
`-p` *proxy*	転送に使用されるプロキシサーバを設定します。`-t` *proxy_type* で修正しない場合の、デフォルトの転送タイプは `http` です。プロキシの値は *サーバ名* [: *ポート番号*] の形式で指定してください。
`-q`	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
`-t` *proxy_type*	プロキシの種類を指定します。`-p` と一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。
`-u` *username*	認証が必要となるリモート ftp または http サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。
`-y`	プロンプトに対して自動的に「`y`」(yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

`enable`	他のオペランドなしで使用すると、LDAP over SSL を有効にします。
`disable`	他のオペランドなしで使用すると、LDAP over SSL を無効にします。
`loadcert console`	コンソールに CA 証明書の入力プロンプトを表示します。ファイルからコピーした CA 証明書を貼り付けるには、このコマンドを使用します。[`Ctrl`]+[`D`] で入力を終了します。 `-i` を省略した場合はプライマリ LDAP over SSL サーバに設定されます。`-i` を指定した場合は代替 LDAP over SSL サーバに設定されます。

`loadcert` *URL*	LDAP over SSL サーバ用の CA 証明書をロードします。以下のフォーマットがサポートされています。 ファイルは絶対パスで指定します。 `http://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file* `https://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file* `ftp://`*server*[:*port*]`/`*absolute_path*`/`*file* `file:///media/usb_msd/`*absolute_path*`/`*file* `-i` を省略した場合はプライマリ LDAP over SSL サーバに設定されます。`-i` を指定した場合は代替 LDAP over SSL サーバに設定されます。
`rmcert`	LDAP over SSL サーバ用の CA 証明書ファイルを削除します。CA 証明書を削除するためには、`strictcertmode` は無効になっている必要があります。 `-i` を省略した場合は、プライマリ LDAP over SSL サーバに設定されます。`-i` を指定した場合は代替 LDAP over SSL サーバに設定されます。
`group administrator name`	*groupname* を指定した場合は、インデックスマーカーで指定された管理者グループの name プロパティにグループ名を割り当てます。管理者グループは、`platadm`、`useradm`、`auditadm` 権限を持ち、変更することはできません。*groupname* を省略した場合は、インデックスマーカーで指定された管理者グループの name プロパティを消去します。
`group operator name`	*groupname* を指定した場合は、インデックスマーカーで指定されたオペレーターグループの name プロパティにグループ名を割り当てます。オペレーターグループは、`platop`、`auditop` 権限を持ち、変更することはできません。*groupname* を省略した場合は、インデックスマーカーで指定されたオペレーターグループの name プロパティを消去します。
`group custom name`	*groupname* を指定した場合は、インデックスマーカーで指定されたグループの name プロパティにグループ名を割り当てます。*groupname* を省略した場合は、インデックスマーカーで指定されたグループの name プロパティを消去します。
`group custom roles`	*privileges* を指定した場合は、インデックスマーカーで指定されたグループの role プロパティを、グループに対して割り当てます。*privileges* を省略した場合は、インデックスマーカーで指定されたグループの role プロパティを消去します。

`userdomain`	*domainname* を指定した場合は、インデックスマーカーで指定されたユーザードメインを構成します。*domainname* を省略した場合は、インデックスマーカーで指定されたユーザードメインを消去します。 ユーザー名@ドメイン名の形式でログインした場合は、指定されたユーザードメインでユーザー認証を行い、`setldapssl` で指定した `userdomain` は無視されます。ユーザー名のみの形式でログインした場合は、`setldapssl` で指定した `userdomain` を順番に付与してユーザー認証します。
`defaultrole`	*privileges* を指定した場合は、デフォルトの権限を設定します。*privileges* を省略した場合は、デフォルトの権限を消去します。`defaultrole` が構成されている場合、ユーザーは、認証後に `defaultrole` によって指定された権限を持ち、ユーザーグループメンバーシップはチェックされません。`defaultrole` が構成されていない場合、ユーザーの権限は、グループメンバーシップに基づき LDAP over SSL サーバから得られる情報によって決定されます。
`timeout` *seconds*	トランザクションのタイムアウト時間を、秒単位で設定します。*seconds* には 1 から 20 までの数値を指定できます。デフォルトは 4 です。設定したタイムアウト時間が構成上短すぎる場合は、ログイン作業、またはユーザー権限を設定するための検索に失敗することがあります。
`server`	IP アドレスを指定した場合は、プライマリ、および最大 5 つの代替 LDAP over SSL サーバを設定します。ホストネームを使用するには、DNS が必ず有効になっている必要があります。ポート番号を IP アドレスとともに指定することができます。指定しない場合は、デフォルトのポートが使用されます。IP アドレスを省略した場合は、LDAP over SSL サーバを消去します。 `-i` を省略した場合はプライマリ LDAP over SSL サーバを設定します。`-i` を指定した場合は代替 LDAP over SSL サーバを設定します。

logdetail	LDAP over SSL サーバへの認証および認可の診断メッセージのロギングを、指定した詳細レベルで有効にします。このログは故障対応時に使用され、XSCF リセット時に消去されます。以下のいずれかのレベルを指定できます。

none	診断メッセージを記録しません。通常のシステム動作中は、この設定を使用します。
high	重大性が高い診断メッセージだけ記録します。
medium	重大性が高い、および重大性が中程度の診断メッセージだけ記録します。
low	重大性が高い、重大性が中程度、および情報を含む診断メッセージを記録します。
trace	重大性が高い、重大性が中程度、情報を含む、およびトレースレベルの診断メッセージを記録します。

log clear	LDAP over SSL サーバへの認証および認可の診断メッセージのログファイルを消去します。
strictcertmode	サーバ証明書の署名検証を有効（enable）または無効（disable）にします。デフォルトでは無効です。無効の場合は、チャネルはセキュリティ保護されますが、証明書の署名を検証しません。サーバ証明書の署名検証を有効にする場合は、サーバ認証が提示されたときに署名の妥当性が確認できるように、サーバ証明書をあらかじめロードしておく必要があります。 データは、サーバ証明書の署名検証が無効になっていても、常に保護されます。サーバ証明書の署名検証は、プライマリ LDAP over SSL サーバ、および代替 LDAP over SSL サーバに対しても同様に、適用されます。
usermapmode	usermap の使用を有効（enable）または無効（disable）にします。有効にすると、識別名ではなく、usermap オペランドで指定したユーザー属性が、ユーザー認証時に使用されます。

usermap
: usermap のパラメータを設定します。usermapmode が有効なときだけ設定します。以下のいずれかの値を指定できます。

attributeInfo
: 指定された属性情報をユーザーの検証に使用します。

binddn
: 指定された Distributed Name を LDAP over SSL サーバのバインドに使用します。

bindpw
: 指定されたパスワードを LDAP over SSL サーバのバインドに使用します。

searchbase
: search base を設定します。

default
: LDAP over SSL 設定をリセットし、工場出荷時設定に戻します。

使用例

使用例 1 デフォルト以外のポートを指定して、プライマリ LDAP over SSL サーバを設定します。

```
XSCF> setldapssl server 10.1.12.250:4040
```

使用例 2 管理者グループ 3 の名前を設定します。

```
XSCF> setldapssl group administrator -i 3 name CN=spSuperAdmin, \
OU=Groups,DC=Sales,DC=aCompany,DC=com
```

使用例 3 グループ 2 の名前を設定します。

```
XSCF> setldapssl group custom -i 2 name CN=spLimitedAdmin, \
OU=Groups,DC=Sales,DC=aCompany,DC=com
```

使用例 4 グループ 2 の権限を設定します。

```
XSCF> setldapssl group custom -i 2 role auditadm,platop
```

使用例 5 代替サーバ 4 の CA 証明書をコンソールからロードします。

```
XSCF> setldapssl loadcert -i 4 console
Warning: About to load certificate for Alternate Server 4:
Continue? [y|n]: y
Please enter the certificate:

-----BEGIN CERTIFICATE-----
```

```
MIIETjCCAzagAwIBAgIBADANBgkqhkiG9w0BAQQFADB8MQswCQYDVQQGEwJVUzET
MBEGA1UECBMKQ2FsaWZvcm5pYTESMBAGA1UEBxMJU2FuIERpZWdvMRkwFwYDVQQK
ExBTdW4gTWljcm9zeXN0ZW1zMRUwEwYDVQQLEwxTeXN0ZW0gR3JvdXAxEjAQBgNV
...
-----END CERTIFICATE-----
[Ctrl]+[D]
XSCF>
```


使用例 6 ユーザードメイン 2 を構成します。<USERNAME> はテンプレートであり、以下に示すとおり正確に入力する必要があります。認証中に、<USERNAME> は、ユーザーのログイン名に置き換えられます。`userdomain` は Distinguished Name（DN）の形式で指定します。

```
XSCF> setldapssl userdomain -i 2 \
'UID=<USERNAME>,OU=people,DC=aCompany,DC=com'
```

使用例 7 属性情報のユーザーマッピングを設定します。

```
XSCF> setldapssl usermap attributeInfo \
'(&(objectclass=person)(uid=<USERNAME>))'
```

使用例 8 Distributed Name とバインドするユーザーマッピングを設定します。

```
XSCF> setldapssl usermap binddn CN=SuperAdmin,DC=aCompany,DC=com
```

使用例 9 パスワードとバインドするユーザーマッピングを設定します。

```
XSCF> setldapssl usermap bindpw b.e9s#n
```

使用例 10 search base のユーザーマッピングを設定します。

```
XSCF> setldapssl usermap searchbase OU=yoshi,DC=aCompany,DC=com
```

使用例 11 指定した URL を使用して、LDAP over SSL 用の CA 証明書をロードします。

```
XSCF> setldapssl loadcert http://domain_2/UID_2333/testcert
```

使用例 12 ポート番号 8080 の http プロキシサーバを使用して、LDAP over SSL 用の CA 証明書をロードします。

```
XSCF> setldapssl loadcert -p webproxy.aCompany.com:8080 \
http://domain_2/UID_2333/testcert
```

使用例 13 ユーザー名とパスワードを使用して、LDAP over SSL 用の CA 証明書をロードします。

```
XSCF>setldapssl loadcert -u yoshi \
http://domain_2/UID_2333/testcert
```

使用例 14 重大性が高い診断メッセージのロギングを設定します。

```
XSCF> setldapssl logdetail high
```

使用例 15 プロンプトには自動的に "y" と応答し、診断メッセージをログファイルから消去します。

```
XSCF> setldapssl log -y clear
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showldapssl(8)

名前

setlocator - オペレーションパネルの CHECK LED の点滅状態を設定します。

形式

setlocator [-b *bb_id*] *value*

setlocator -h

説明

setlocator は、SPARC M12/M10 システムの筐体およびクロスバーボックスに搭載されているオペレーションパネルの、CHECK LED の点滅状態を設定するためのコマンドです。

以下の状態が設定できます。

点滅	CHECK LED を点滅させます。
点滅解除	CHECK LED の点滅を解除します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-b *bb_id*

CHECK LED の点滅状態を設定する SPARC M12/M10 システムの筐体またはクロスバーボックスを指定します。*bb_id* にはシステム構成によって以下のいずれかの値を指定できます。省略した場合、自筐体の CHECK LED の点滅状態を設定します。

SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）	0 から 15
SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）	0 から 15、80 から 83
SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4	0

-h

使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

value

CHECK LED の状態を指定します。以下のどちらかを指定できます。

blink	CHECK LED を点滅させます。
reset	CHECK LED の点滅を解除します。

詳細説明

showlocator(8) を使用すると、現在設定されている CHECK LED の状態が確認できます。

使用例

使用例 1 BB-ID 1 の CHECK LED を点滅させます。

```
XSCF> setlocator -b 1 blink
XSCF>
```

使用例 2 BB-ID 80 の CHECK LED の点滅を解除します。

```
XSCF> setlocator -b 80 reset
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showlocator(8)

名前

setloginlockout - ログイン時のロックアウト機能を有効または無効にします。

形式

setloginlockout -s unlock= *time*

setloginlockout -h

説明

setloginlockout は、ログインを 3 回続けて失敗したあとに、そのユーザーアカウントでログインできないようにする時間を設定するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-s unlock=*time*	ユーザーアカウントのロックアウト時間を分単位で指定します。0 から 1440 （24 時間）の範囲で指定できます。デフォルトは 0 分で、ロックアウト機能は無効になっています。

詳細説明

- ログイン時のロックアウト機能を設定した場合、ユーザーは 3 回続けてログインを試みることができます。ログインプロンプトにユーザーアカウント名を入力し、[Enter] キーを押すことでログインが成立します。このとき、パスワードなしで入力したり、ログインがタイムアウトになったりした場合もログインとみなされます。3 回続けてログインに失敗すると、以降、設定された時間、ログインできなくなります。ロックアウト中でも、ログインプロンプトにユーザーアカウント名とパスワードを入力することはできますが、正しいパスワードを入力しても、ログインは受け付けられません。ロックアウト中にログインに失敗しても、ロックアウト時間が延長されることはありません。
- setloginlockout -s 0 はユーザーアカウントのロックアウト機能を無効にします。ロックアウト機能が無効になると、無限に、ログインおよび失敗を繰り返すことができます。
- ユーザーアカウントのロックアウト機能が無効になってから再び有効になった場合、ロックアウトされたユーザーは、無効後再び有効になるまでの間、ログインを試みることができます。しかし、ロックアウト機能が再び有効になるまでの間にログインを試みなかった場合は、変化はなく、ロックアウトの無効と再有効が起こらなかった場合と同じように、ロックアウトされたままとなります。
- showloginlockout(8) を使用すると、現在設定されているユーザーアカウントのロックアウト機能が確認できます。

使用例

使用例 1 ロックアウトのタイムアウト時間を 90 分に設定します。

```
XSCF> setloginlockout -s 90
90 minutes
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showloginlockout(8)

名前

setlookup - 認証とユーザー権限に関する参照先を設定します。

形式

setlookup -a {local|ldap}

setlookup -p {local|ldap}

setlookup -h

説明

setlookup は、認証とユーザー権限のデータが、Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）から参照されるかどうかを設定するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	認証の参照先を指定します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-p	ユーザー権限の参照先を指定します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

ldap	参照先に LDAP を含めます。-a オプションまたは-p オプションと一緒に指定します。認証およびユーザー権限は最初に XSCF 内が参照され、見つからなかった場合は LDAP 内が参照されます。setlookup -a ldap または setlookup -p ldap を実行する前に、LDAP サーバが正しく設定されていることを確認してください。
local	参照先を XSCF とします。-a オプションまたは-p オプションと一緒に指定します。認証およびユーザー権限は XSCF 内だけ参照されます。

使用例

使用例 1 ユーザー権限の参照先を LDAP に設定します。

```
XSCF> setlookup -p ldap
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setldap(8), **showlookup**(8)

名前

setnameserver - XSCF ネットワークで使用されるネームサーバおよびサーチパスを設定／削除します。

形式

setnameserver [-c add] *address*...

setnameserver -c del *address*...

setnameserver -c del -a

setnameserver -c addsearch *domainname*...

setnameserver -c delsearch *domainname*...

setnameserver -c delsearch -a

setnameserver -h

説明

setnameserver は、XSCF ネットワークで使用されるネームサーバおよびサーチパスを設定／削除するコマンドです。

XSCF では最大 3 つのネームサーバを登録できます。3 つを超えた場合はエラーとなります。サーチパスは最大 5 つまで登録できます。5 つを超えた場合はエラーとなります。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	現在登録されているネームサーバまたはサーチパスをすべて削除します。ネームサーバを削除する場合は-c del と、サーチパスを削除する場合は-c delsearch と一緒に使用します。
-c add	ネームサーバを登録します。*address* と一緒に使用します。-c を省略した場合は-c add が指定されたとみなされます。ネームサーバを登録する場合は、既存の設定が削除され、*address* で指定したホストが追加されます。
-c addsearch	サーチパスを登録します。*domainname* と一緒に使用します。-c を省略した場合は-c add が指定されたとみなされます。サーチパスを登録する場合は、既存の設定が削除され、*domainname* で指定したドメイン名が追加されます。
-c del	ネームサーバを削除します。-c を省略した場合は-c add が指定されたとみなされます。複数のネームサーバを削除する場合は、設定した順番に削除されます。
-c delsearch	サーチパスを削除します。-c を省略した場合は-c add が指定されたとみなされます。スペースで区切って複数指定できます。

`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

address

登録または削除するネームサーバの IP アドレスを指定します。4 組の整数値の間にピリオド（.）を付けて指定します。以下の形式で指定できます。スペースで区切って、最大 3 つまで指定できます。

xxx.xxx.xxx.xxx

xxx 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。

ループバックアドレス（127.0.0.0/8）、ネットワークアドレス、またはブロードキャストアドレスを指定することはできません。設定すると名前解決に失敗する場合があります。

domainname

登録または削除するサーチパスのドメイン名を指定します。スペースで区切って、最大 5 つまで指定できます。*domainname* はラベル要素をピリオド（.）で区切った形式で 256 文字以内で指定します。ラベル要素には、英数字またはハイフン（-）が使用できます。ただし、先頭は英字、末尾は英数字で指定してください。最後には、ルートドメインを表すピリオド（.）を付けます（RFC 1034 に準拠）。

詳細説明

- ネームサーバが複数登録されている場合は、登録された順番で名前解決が行われます。
- 登録されたサーチパスは、`nslookup`(8) を使用してホスト名をネームサーバに照会するときなどに利用されます。`nslookup`(8) で指定するホスト名の後ろにサーチパスで登録されたドメイン名が付けられて、FQDN 形式でネームサーバに照会されます。

  たとえば、サーチパスに subdomain.example.com を登録後、以下のコマンドを実行した場合は、hostname.subdomain.example.com を、ネームサーバに照会します。

  XSCF> **`nslookup hostname`**
- サーチパスが複数登録されている場合は、登録された順番にドメイン名が付けられて、ネームサーバに照会されます。
- `sethostname`(8) で設定する DNS ドメイン名と `setnameserver` で設定するサーチパスは、合わせて 256 文字以内で指定してください。
- 設定したネームサーバおよびサーチパスを XSCF に反映させるには、`applynetwork`(8) を実行します。`applynetwork`(8) で XSCF に反映したら、`rebootxscf`(8) を使用して XSCF を再起動すると設定が完了します。

- shownameserver(8) を使用すると、現在設定されているネームサーバおよびサーチパスが確認できます。

使用例

使用例 1 IP アドレス 192.168.1.2, 10.18.108.10, 10.24.1.2 のホストをネームサーバとして登録します。指定された順番に名前解決が行われます。

```
XSCF> setnameserver 192.168.1.2 10.18.108.10 10.24.1.2
```

使用例 2 IP アドレス 10.18.108.10 のホストをネームサーバから削除します。

```
XSCF> setnameserver -c del 10.18.108.10
```

使用例 3 登録されているすべてのネームサーバを削除します。

```
XSCF> setnameserver -c del -a
```

使用例 4 ドメイン名 search1.com、search2.com、search3.com、search4.com、search5.com をサーチパスに登録します。

```
XSCF> setnameserver -c addsearch search1.com search2.com
search3.com search4.com search5.com
```

使用例 5 ドメイン名 search5.com をサーチパスから削除します。

```
XSCF> setnameserver -c delsearch search5.com
```

使用例 6 登録されているすべてのドメイン名をサーチパスから削除します。

```
XSCF> setnameserver -c delsearch -a
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork(8), **sethostname**(8), **setsscp**(8), **shownameserver**(8)

名前

setnetwork - XSCF で使用されるネットワークインターフェースを設定または削除します。

形式

setnetwork [-m *addr*] *interface address*

setnetwork -c {up|down} *interface*

setnetwork [[-q] -{y|n}] -r *interface*

setnetwork -h

説明

setnetwork は、XSCF で使用するネットワークインターフェースを設定または削除するコマンドです。

XSCF-LAN のネットワークインターフェースに対して、以下の内容を設定または削除できます。

- ネットワークインターフェースの有効または無効
- IP アドレス
- ネットマスク

IP アドレスやネットマスクを設定した場合は、設定と同時に、指定したネットワークインターフェースが有効となります。

ネットワークインターフェースを削除した場合は、削除と同時に、指定したネットワークインターフェースが無効となります。また、対象のネットワークインターフェースにルーティング情報が設定されている場合は、一緒に削除され、down 状態となります。

down を設定して applynetwork(8) を実行した場合、IP アドレス、ネットマスクが設定済みであってもインターフェースは無効となります。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c {up|down}	指定したネットワークインターフェースを有効にするかどうかを指定します。以下のどちらかを指定できます。省略した場合はエラーとなります。 up　ネットワークインターフェースを有効にします。 down　ネットワークインターフェースを無効にします。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-m *addr*	ネットマスクを指定します。*addr* は 4 組の整数をピリオド（.）で区切った形式で指定します。以下の形式で指定できます。 *xxx.xxx.xxx.xxx* *xxx*　0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。 -m を省略した場合は、*address* で指定する IP アドレスによって、以下のネットマスク値が設定されます。 ■ 指定する IP アドレスがクラス A の場合（例：20.1.1.1）ネットマスク値 255.0.0.0 が設定されます。 ■ 指定する IP アドレスがクラス B の場合（例：136.18.1.1）ネットマスク値 255.255.0.0 が設定されます。 ■ 指定する IP アドレスがクラス C の場合（例：200.18.108.1）ネットマスク値 255.255.255.0 が設定されます。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-r	ネットワークインターフェースの、IP アドレスおよびネットマスクを削除します。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

address

IP アドレスを指定します。*address* は 4 組の整数をピリオド（.）で区切った形式で指定します。

xxx.xxx.xxx.xxx

xxx	0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。

ループバックアドレス（127.0.0.0/8）、ネットワークアドレス、ブロードキャストアドレス、またはクラス D、E アドレス（224.0.0.0 から 255.255.255.255）を指定することはできません。

interface

設定するネットワークインターフェースを指定します。以下のいずれかを指定できます。

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

`xbbox#80-lan#0`	XBBOX#80-LAN#0
`xbbox#80-lan#1`	XBBOX#80-LAN#1
`lan#0`	XBBOX#80-LAN#0 と XBBOX#81-LAN#0 の引き継ぎ IP アドレス
`xbbox#81-lan#0`	XBBOX#81-LAN#0
`xbbox#81-lan#1`	XBBOX#81-LAN#1
`lan#1`	XBBOX#80-LAN#1 と XBBOX#81-LAN#1 の引き継ぎ IP アドレス

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

`bb#00-lan#0`	BB#00-LAN#0
`bb#00-lan#1`	BB#00-LAN#1
`lan#0`	BB#00-LAN#0 と BB#01-LAN#0 の引き継ぎ IP アドレス
`bb#01-lan#0`	BB#01-LAN#0
`bb#01-lan#1`	BB#01-LAN#1
`lan#1`	BB#00-LAN#1 と BB#01-LAN#1 の引き継ぎ IP アドレス

- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合

`bb#00-lan#0`	BB#00-LAN#0
`lan#0`	BB#00-LAN#0 の省略形
`bb#00-lan#1`	BB#00-LAN#1
`lan#1`	BB#00-LAN#1 の省略形

詳細説明

- 引き継ぎ IP アドレスとは、XSCF が複数構成の場合に、XSCF が切り替えられていることを意識せずに使用できる IP アドレスのことです。マスタ XSCF の各 LAN ポートを lan#0、lan#1 に設定しておくことによって、lan#0、lan#1 という名称でアクセスできるようになります。
- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合は、lan#0 は bb#00-lan#0、lan#1 は bb#00-lan#1 で固定となります。lan#0、lan#1 はおのおの bb#00-lan#0、bb#00-lan#1 の省略形として使用できます。
- 以下の場合、setnetwork はエラーとなります。
  - すでに設定されている IP アドレスと同じ IP アドレスを指定した場合
  - *interface* の IP アドレスにループバックアドレス（127.0.0.0/8）、ネットワークアドレス、ブロードキャストアドレスを設定した場合
  - -m *addr* で指定されたネットマスクが、以下のどちらにもあてはまらない場合

    最上位ビットだけが 1

    最上位ビットからの 1 の繰り返し
- SPARC M12-2S/M10-4S の場合で、up 状態のネットワークインターフェースが以下の設定の場合は、applynetwork(8) 実行時にエラーとなります。
  - xbbox#80-lan#0、xbbox#81-lan#0、引き継ぎ IP アドレス lan#0 のサブネットが異なる場合
  - xbbox#80-lan#1、xbbox#81-lan#1、引き継ぎ IP アドレス lan#1 のサブネットが異なる場合
  - xbbox#80-lan#0、xbbox#80-lan#1, SSCP リンクアドレスのいずれかのサブネットが同じ場合
  - xbbox#81-lan#0、xbbox#81-lan#1, SSCP リンクアドレスのいずれかのサブネットが同じ場合
  - xbbox#80-lan#0、xbbox#81-lan#1, SSCP リンクアドレスのいずれかのサブネットが同じ場合
  - xbbox#81-lan#0、xbbox#80-lan#1, SSCP リンクアドレスのいずれかのサブネットが同じ場合
  - bb#00-lan#0、bb#01-lan#0、引き継ぎ IP アドレス lan#0 のサブネットが異なる場合
  - bb#00-lan#1、bb#01-lan#1、引き継ぎ IP アドレス lan#1 のサブネットが異なる場合
  - bb#00-lan#0、bb#00-lan#1, SSCP リンクアドレスのいずれかのサブネットが同じ場合
  - bb#01-lan#0、bb#01-lan#1, SSCP リンクアドレスのいずれかのサブネットが同じ場合
  - bb#00-lan#0、bb#01-lan#1, SSCP リンクアドレスのいずれかのサブネットが同じ場合
  - bb#01-lan#0、bb#00-lan#1, SSCP リンクアドレスのいずれかのサブネットが同じ場合

- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合で、up 状態のネットワークインターフェースが以下の設定の場合は、applynetwork(8) 実行時にエラーとなります。
  - bb#00-lan#0、bb#00-lan#1 のサブネットが同じ場合
- 指定したネットワークインターフェースの IP アドレスとネットマスクを削除した場合、対象インターフェースに設定されているルーティング情報も削除され、down 状態となります。
- 指定したネットワークインターフェースをいったん無効にして applynetwork(8) を実行した場合、IP アドレス、ネットマスクが設定済みであってもネットワークインターフェースは無効となります。
- shownetwork(8) を使用すると、現在設定されているネットワークインターフェースの内容が確認できます。
- 設定したネットワークインターフェースの内容を反映させるには、applynetwork(8) を実行します。applynetwork(8) で XSCF に反映したら、rebootxscf(8) を使用して XSCF を再起動すると設定が完了します。
- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

使用例

使用例 1 BB#00 の LAN#0 に IP アドレス 192.168.10.10、ネットマスク 255.255.255.0 を設定します。

```
XSCF> setnetwork bb#00-lan#0 -m 255.255.255.0 192.168.10.10
```

使用例 2 SPARC M10-1 で BB#00 の LAN#0 に IP アドレス 192.168.10.10、ネットマスク 255.255.255.0 を設定します。

```
XSCF> setnetwork lan#0 -m 255.255.255.0 192.168.10.10
```

使用例 3 XBBOX#80 の LAN#1 を無効にします。

```
XSCF> setnetwork xbbox#80-lan#1 -c down
```

使用例 4 XBBOX#81 の LAN#0 に IP アドレス 192.168.11.10、ネットマスク 255.255.255.0 を設定します。

```
XSCF> setnetwork xbbox#81-lan#0 -m 255.255.255.0 192.168.11.10
```

使用例 5 LAN#0 の引き継ぎ IP アドレスに IP アドレス 192.168.1.10、ネットマスク 255.255.255.0 を設定します。

```
XSCF> setnetwork lan#0 -m 255.255.255.0 192.168.1.10
```

使用例 6　XBBOX#80 の LAN#0 に設定された IP アドレス、ネットマスクを削除します。

```
XSCF> setnetwork -r xbbox#80-lan#0
You specified '-r' interface remove option.
So, we delete routing information that interface corresponds.
Continue? [y|n] :y
If you choose 'y'es, you must execute 'applynetwork' command for
application.
Or you choose 'y'es, but you don't want to apply, you execute 'rebootxscf'
for reboot.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork(8), **rebootxscf**(8), **setroute**(8), **setsscp**(8), **shownetwork**(8)

名前

setntp - XSCF の時刻同期に関する設定を行います。

形式

setntp -s server -c {enable|disable}

setntp [-c add] *address* ...

setntp -c del *address* ...

setntp -c del -a

setntp -c stratum -i *stratum_no*

setntp -c {pool|server} *address* ...

setntp -s client -c {enable|disable}

setntp -m *type*= *value*

setntp -h

説明

setntp は、XSCF の時刻同期に関する設定を行うコマンドです。

setntp では以下の項目を設定できます。

- 上位 NTP サーバと同期するかどうか
- NTP サーバとして他のクライアントに対して NTP サービスを提供するかどうか
- XSCF に設定される stratum 値
- クライアントとしての prefer の有無
- XSCF のローカルクロックのクロックアドレス
- XSCF が NTP クライアントの場合、指定した NTP サーバに対して DNS ラウンドロビンを有効にするかどうか

XSCF は、デフォルトでは、上位 NTP サーバと同期せず、他のクライアントに対しても NTP サービスを提供しません。

XSCF ネットワークの上位 NTP サーバとしては、最大 3 つの NTP サーバが登録できます。4 つ以上登録しようとするとエラーとなります。XSCF が複数構成の場合は、マスタ XSCF とスタンバイ状態の XSCF に対しても自動的に設定が反映されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-a`	現在登録されている上位 NTP サーバをすべて削除します。`-c del` と一緒に使用します。
`-c add`	上位 NTP サーバに追加します。*address* と一緒に指定します。`-c` を省略した場合は`-c add` が指定されたとみなされます。NTP サーバを登録する場合は既存の設定が削除され、指定した *address* で上書きされます。
`-c del`	上位 NTP サーバを削除します。*address* または`-a` と一緒に指定します。`-c` を省略した場合は`-c add` が指定されたとみなされます。複数の NTP サーバを削除する場合は、設定した順番に削除されます。
`-c disable`	XSCF の NTP サーバとして設定を無効にします。`-s` と一緒に指定します。`-c` を省略した場合は`-c add` が指定されたとみなされます。
`-c enable`	XSCF の NTP サーバとして設定を有効にします。`-s` と一緒に指定します。`-c` を省略した場合は`-c add` が指定されたとみなされます。
`-c pool`	DNS ラウンドロビンを有効にします。デフォルトでは、DNS ラウンドロビンは無効です。
`-c server`	DNS ラウンドロビンを無効にします。
`-c stratum`	XSCF を NTP サーバとした場合の、stratum 値を設定します。stratum 値を設定しない場合は、デフォルトで 5 となります。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-i` *stratum_no*	stratum 値を指定します。`-c stratum` と一緒に使用します。1 から 15 までの整数で指定できます。

`-m` *type=value*

優先サーバまたは XSCF のローカルクロックを設定します。*type* には以下のどちらかを指定できます。

`prefer`	同期するときに、最初に登録されている DNS ラウンドロビン無効の NTP サーバを最優先にするかどうかを設定します。
`localaddr`	XSCF のローカルクロックを設定します。

type に `prefer` を指定した場合、*value* には以下のどちらかを指定できます。

`on`	最初に登録されている DNS ラウンドロビン無効の NTP サーバが最優先されます。以降は stratum 値の小さい NTP サーバから順番に優先されます。デフォルトは on です。
`off`	登録されている順番に関係なく、stratum 値の小さい NTP サーバから優先されます。

type に `localaddr` を指定した場合、*value* にはローカルクロックのクロックアドレス 127.127.1.*x* の、最下位バイトを指定します。0 から 3 までの数値で指定できます。デフォルトは 0 で、このときのローカルクロックのクロックアドレスは 127.127.1.0 となります。

`-s server`

XSCF の NTP サーバとしてのサービスを使用するかどうかを設定します。`-c disable` または`-c enable` と一緒に使用します。XSCF を NTP サーバとして使用する場合は`-s server` を`-c enable` と一緒に指定します。NTP サーバとして使用しない場合は`-s server` を`-c disable` と一緒に指定します。デフォルトは`-c disable` です。

`-s client`

XSCF を NTP クライアントとして、上位 NTP サーバと同期するかどうかを設定します。`-c disable` または`-c enable` と一緒に使用します。XSCF を NTP クライアントとして上位 NTP サーバと同期する場合は`-s client` を`-c enable` と一緒に指定します。NTP クライアントとしない場合は`-s client` を`-c disable` と一緒に指定します。デフォルトは`-c disable` です。同期するための上位 NTP サーバは`-c add` で指定できます。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

address　追加または削除するNTPサーバの、IPアドレスまたはホスト名を指定します。IPアドレスやホスト名は、スペースで区切って、最大3つまで指定できます。

IPアドレスで指定する場合は、*address* は4組の整数をピリオド（.）で区切った形式で指定できます。

xxx.xxx.xxx.xxx

xxx　0から255までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。

ホスト名で指定する場合は、*address* はラベル要素をピリオド（.）で区切った形式で64文字以内で指定します。ラベル要素には、英数字またはハイフン（-）が使用できます。ただし、先頭は英字、末尾は英数字で指定してください（RFC 1034に準拠）。サーバ名はDNSサーバによって、名前解決可能である必要があります。

NTPサーバを削除する場合、またはDNSラウンドロビンの有効／無効を設定する場合、*address* で指定したサーバが登録されていないとエラーになります。

詳細説明

- 設定した内容を反映させるには、`rebootxscf`(8)を使用して、XSCFを再起動する必要があります。
- NTPサーバが複数設定されている場合`prefer`を設定すると、最初に設定されたNTPサーバの優先順位が高くなります。ただし最初に設定されたNTPサーバでDNSラウンドロビンが有効になっているときは、DNSラウンドロビンが無効になっている次のNTPサーバの優先順位が高くなります。DNSラウンドロビンが無効のNTPサーバがない場合、`prefer`は有効／無効の設定にかかわらず無効になります。
- XSCFをNTPクライアントとした場合、XSCF起動時にntpdateが実行され、XSCFの時刻がNTPサーバの時刻と同期されます。
- XSCFをNTPクライアントとした場合、XSCF内で保持されている時刻差分によって、物理パーティション（PPAR）の時刻が変更される場合があります。`resetdateoffset`(8)を実行して、時刻の差分をリセットしてください。
- `showntp`(8)を使用すると、時刻同期に関する設定が確認できます。

使用例

使用例1　上位NTPサーバとして、3つのNTPサーバ192.168.1.2、10.18.108.10、10.24.1.2を登録します。

```
XSCF> setntp 192.168.1.2 10.18.108.10 10.24.1.2
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 2 上位 NTP サーバに設定されている NTP サーバ 10.18.108.10 を削除します。

```
XSCF> setntp -c del 10.18.108.10
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 3 2 つの NTP サーバ ntp1.examples.com、ntp2.example.com を登録します。

```
XSCF> setntp ntp1.example.com ntp2.example.com
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 4 XSCF ネットワークで使用される stratum 値を 7 に設定します。

```
XSCF> setntp -c stratum -i 7
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 5 NTP サーバの prefer 指定を解除します。

```
XSCF> setntp -m prefer=off
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 6 XSCF のローカルクロックのクロックアドレスを設定します。

```
XSCF> setntp -m localaddr=3
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 7 XSCF を NTP クライアントに設定し、上位 NTP サーバと同期させるように設定します。

```
XSCF> setntp -s client -c enable
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 8 XSCF を NTP サーバに設定し、他のクライアントに NTP サービスを提供するように設定します。

```
XSCF> setntp -s server -c enable
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 9 登録済みの NTP サーバの DNS ラウンドロビンを有効にします。

```
XSCF> setntp -c pool ntp1.examples.com
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

使用例 10 登録済みのすべての NTP サーバの DNS ラウンドロビンを無効にします。

```
XSCF> setntp -c server ntp1.examples.com ntp2.examples.com 10.24.1.2
Please reset the XSCF by rebootxscf to apply the ntp settings.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

rebootxscf(8), **setnameserver**(8), **showntp**(8)

名前

setpacketfilters - XSCF ネットワークで使用される IP パケットフィルタリングルールを設定します。

形式

setpacketfilters [[-q] -{y|n}] -c {add|del} [-i *interface*] [-s *address* [*/mask*]] -j *target*

setpacketfilters [[-q] -{y|n}] -c clear

setpacketfilters [[-q] -{y|n}] -c ipmi_port {enable|disable}

setpacketfilters -h

説明

setpacketfilters は、XSCF ネットワークで使用される IP パケットフィルタリングルールを設定するコマンドです。

IP パケットフィルタリングルールを設定することで、XSCF ネットワークへの不正アクセスを防止します。setpacketfilters は実行するとすぐに設定が反映されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c {add|del|clear}　IP パケットフィルタリングルールに対する操作を指定します。以下のいずれかを指定できます。省略できません。

add	IP パケットフィルタリングルールを追加します。
del	IP パケットフィルタリングルールを削除します。
clear	設定されている IP パケットフィルタリングルールをすべて削除します。

ただし、-c ipmi_port で設定したフィルタリングルールは変更できません。

-c ipmi_port {enable|disable}　IPMI ポートに対する IP パケットの有効／無効を設定します。

enable	IPMI ポートに対するフィルタリングルールの指定が解除され、電源連動機能で使用する IPMI サービスが有効になります。
disable	IPMI ポートに対するフィルタリングルールが設定され、電源連動機能で使用する IPMI サービスが無効になります。

初期値は disable で、IPMI ポートに対する IP パケットを破棄するフィルタリングルールが適用されています。

`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-i` *interface*	IP パケットフィルタリングルールを設定する XSCF ネットワークインターフェースを指定します。以下のいずれかを指定できます。

- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合

`bb#00-lan#0`	BB#00-LAN#0
`bb#00-lan#1`	BB#00-LAN#1

省略形 :

`lan#0`	bb#00-lan#0
`lan#1`	bb#00-lan#1

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

`bb#00-lan#0`	BB#00-LAN#0
`bb#00-lan#1`	BB#00-LAN#1
`bb#01-lan#0`	BB#01-LAN#0
`bb#01-lan#1`	BB#01-LAN#1

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

`xbbox#80-lan#0`	XBBOX#80-LAN#0
`xbbox#80-lan#1`	XBBOX#80-LAN#1
`xbbox#81-lan#0`	XBBOX#81-LAN#0
`xbbox#81-lan#1`	XBBOX#81-LAN#1

`-i` を省略した場合は、すべての XSCF ネットワークが対象となります。

- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合

  `bb#00-lan#0`、`bb#00-lan#1`

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

  `bb#00-lan#0`、`bb#01-lan#0`、`bb#00-lan#1`、`bb#01-lan#1`

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

  `xbbox#80-lan#0`、`xbbox#81-lan#0`、`xbbox#80-lan#1`、`xbbox#81-lan#1`

`-j` *target*	受信した IP パケットがフィルタリングルールと一致した場合の動作を指定します。以下のどちらかを指定できます。 `ACCEPT` IP パケットの通過を許可します。 `DROP` IP パケットを破棄します。
`-n`	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
`-q`	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
`-s` *address*[/*mask*]	IP パケットの送信元を指定します。IP アドレス、またはネットマスク（/*mask*）を付加したネットワーク IP アドレスのどちらかで指定できます。 IP アドレスおよびネットワーク IP アドレスは、4 組の整数をピリオド（`.`）で区切った形式で指定できます。 *xxx.xxx.xxx.xxx* *xxx* 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。 `-s` を省略した場合は、指定したネットワークインターフェースで受信したすべての IP パケットに対して、フィルタリングルールが適用されます。 /*mask* を省略した場合、/255.255.255.255 が指定されます。
`-y`	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- IP パケットフィルタリングルールは、先に設定されたルールから優先されます。
- フィルタリングで制限をかける前に、必ず、許可する送信元を設定してください。最初に、許可する送信元を設定してから、破棄する IP パケットを設定します。設定する順番を逆にした場合は、すべての IP パケットが破棄され通信できなくなります。
- IP パケットフィルタリングルールを設定することにより、XSCF のネットワーク機能が使用できなくなることがあります。
- `-i` *interface* と `-s` *address*[/*mask*] の両方を省略した場合は、XSCF-LAN で受信されるすべての IP パケットに対してルールが適用されます。
- `-s` *address*[/*mask*] で指定したネットマスク値が、以下のどちらにもあてはまらない場合は、エラーとなります。
  - 最上位ビットだけが 1
  - 最上位ビットからの 1 の繰り返し

- すでに設定されている IP パケットフィルタリングルールと重複したルールは設定できません。
- IP パケットフィルタリングルールは最大 16 個まで設定できます。ただし、-c ipmi_port で設定したフィルタリングルールは登録数に含まれません。
- XSCF の再起動を促すメッセージが出力された場合は、rebootxscf(8) を使用して XSCF を再起動してください。
- showpacketfilters(8) を使用すると、現在設定されている XSCF ネットワークの IP パケットフィルタリングルールが確認できます。
- IPMI サービスを有効に設定すると、IPMI サービスが即時に開始します。

  電源連動機能を使用する場合は、接続する電源連動グループに含まれる SPARC M12/M10 すべてにおいて、setpacketfilters で IPMI サービスを有効に設定してから、setremotepwrmgmt(8) で電源連動機能の設定を行ってください。
- IPMI サービスを無効に設定すると、IPMI サービスが即時に停止します。

  IPMI サービスを無効に設定する場合は、接続する電源連動グループに含まれる SPARC M12/M10 すべてにおいて、事前に setremotepwrmgmt(8) で電源連動機能の設定を無効にしてください。電源連動機能が有効になっている状態で IPMI サービスを無効に設定すると、setpacketfilters が異常終了します。

使用例

使用例 1 IP アドレス 10.10.10.10 から送信された IP パケットを破棄します。

```
XSCF> setpacketfilters -c add -s 10.10.10.10 -j DROP
-s 10.10.10.10/255.255.255.255 -j DROP
NOTE: applied IP packet filtering rules.
Continue? [y|n] :y
```

使用例 2 SPARC M10-4S（クロスバーボックスなし）で、bb#00-lan#0 への通信は、192.168.100.0/255.255.255.0 のネットワークから送信された IP パケットのみ許容します。

```
XSCF> setpacketfilters -c add -s 192.168.100.0/255.255.255.0 -i
bb#00-lan#0 -j ACCEPT
-s 192.168.100.0/255.255.255.0 -i bb#00-lan#0 -j ACCEPT
NOTE: applied IP packet filtering rules.
Continue? [y|n] :y
XSCF>
XSCF> setpacketfilters -c add -i bb#00-lan#0 -j DROP
-s 192.168.100.0/255.255.255.0 -i bb#00-lan#0 -j ACCEPT
-i bb#00-lan#0 -j DROP
NOTE: applied IP packet filtering rules.
Continue? [y|n] :y
```

使用例 3 IP アドレス 10.10.10.10 に設定された、IP パケットの破棄設定を削除します。

```
XSCF> showpacketfilters -a
-s 172.16.0.0/255.255.0.0 -i bb#00-lan#0 -j DROP
-s 10.10.10.10/255.255.255.255 -j DROP
XSCF>
```

```
XSCF> setpacketfilters -c del -s 10.10.10.10 -j DROP
-s 172.16.0.0/255.255.0.0 -i bb#00-lan#0 -j DROP
NOTE: applied IP packet filtering rules.
Continue? [y|n] :y
```

使用例 4 設定されている IP パケットフィルタリングルールをすべて削除します（-c ipmi_port で設定したルールを除く)。

```
XSCF> setpacketfilters -c clear
(none)
NOTE: applied IP packet filtering rules.
Continue? [y|n] :y
```

使用例 5 IPMI ポートに対する IP パケットを有効に設定します。

```
XSCF> setpacketfilters -c ipmi_port enable
Continue? [y|n] :y
```

使用例 6 IPMI ポートに対する IP パケットを無効に設定します。

```
XSCF> setpacketfilters -c ipmi_port disable
Continue? [y|n] :y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showpacketfilters(8)

名前

setpasswordpolicy - システムのパスワードポリシーを管理します。

形式

setpasswordpolicy [-d *dcredit*] [-e *expiry*] [-i *inactive*] [-k *difok*] [-l *lcredit*] [-M *maxdays*] [-m *minlen*] [-n *mindays*] [-o *ocredit*] [-r *remember*] [-u *ucredit*] [-w *warn*] [-y *retry*]

setpasswordpolicy -h

説明

setpasswordpolicy は、システムのパスワードポリシーを変更するコマンドです。

これらのポリシーは、サービスプロセッサ上の XSCF によって行われます。新しく設定されたパスワードポリシーは、setpasswordpolicy 実行後に追加されたユーザーアカウントに対して適用されます。

ユーザーを作成するとき、adduser(8) によって、*expiry*、*inactive*、*maxdays*、*mindays*、および *warn parameters* のパラメータが新しいアカウントのパスワード有効期限設定として使用されます。password(8) を使用して、既存アカウントのパスワード有効期限設定を変更することができます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-d *dcredit*	パスワードに含まれる数字の最大字数枠を設定します。最小許容パスワード長は、パスワードに含まれる数字 1 文字ごとに、*dcredit* の値まで 1 ずつ減ります。有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。初期設定値は 1 です。使用例 2 を参照してください。
-e *expiry*	新しいアカウントの有効期限が切れて無効になるまでの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。初期値は 0 です。ゼロは、アカウントの有効期限が切れないことを意味します。有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-i *inactive*	パスワードの有効期限が切れてからアカウントがロックされるまでの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。初期値は -1 です。値が -1 の場合は、パスワードの有効期限が切れたあともアカウントがロックされないことを意味します。有効な値は、-1 から 999999999 までの整数です。

`-k` *difok*	新しいパスワードの中に、新しい文字（古いパスワードに含まれていなかった文字）が何文字以上含まれている必要があるかを設定します。初期設定値は 3 です。 有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。
`-l` *lcredit*	パスワードに含まれる小文字の最大字数枠を設定します。最小許容パスワード長は、パスワードに含まれる小文字 1 文字ごとに、*lcredit* の値まで 1 ずつ減ります。 有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。初期設定値は `1` です。使用例 2 を参照してください。
`-M` *maxdays*	パスワードが有効である最大日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。初期値は `999999` です。 有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。
`-m` *minlen*	パスワードの字数枠が 1 つも適用されていない場合に、最小許容パスワード長を設定します。`-d`、`-u`、`-l`、`-o` によって字数枠が指定された場合、必要なパスワード長は、指定された文字タイプが使用されると減ります。初期値は `9` です。 有効な値は、6 から 999999999 までの整数です。使用例 2 を参照してください。
`-n` *mindays*	パスワードを変更してから次に変更するまでの間の最小日数を設定します。このフィールドの初期値 0 は、いつでもパスワードを変更できることを示します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。 有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。
`-o` *ocredit*	パスワードに含まれる英数字以外の文字の最大字数枠を設定します。最小許容パスワード長は、パスワードに含まれる英数字以外の文字 1 文字ごとに、*ocredit* の値まで 1 ずつ減ります。 有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。初期設定値は `1` です。使用例 2 を参照してください。
`-r` *remember*	パスワード履歴に記憶させるパスワードの数を設定します。 有効な最大値は `10` です。初期設定値は `3` です。 *remember* に 0 を指定して `setpasswordpolicy(8)` を実行すると、XSCF ユーザーは、パスワードを変更できず、エラーメッセージが表示されます。

-u *ucredit*　パスワードに含まれる大文字の最大字数枠を設定します。最小許容パスワード長は、パスワードに含まれる大文字 1 文字ごとに、*ucredit* の値まで 1 ずつ減ります。

有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。初期設定値は 1 です。使用例 2 を参照してください。

-w *warn*　ユーザーにパスワードの有効期限の警告を発してから実際に有効期限が切れるまでのデフォルトの日数を設定します。この値は、新しいユーザーアカウントが作成されたときにそのユーザーアカウントに割り当てられます。初期値は 7 です。

有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。

-y *retry password*　コマンドを使用してユーザーアカウント用のパスワードを変更する場合のパスワードの再試行を許可する回数を設定します。初期値は 3 回です。

有効な値は、0 から 999999999 までの整数です。

詳細説明

showpasswordpolicy(8) を使用すると、現在設定されているパスワードポリシーが確認できます。

使用例

使用例 1　記憶させるパスワードの最小サイズと数を設定します。

```
XSCF> setpasswordpolicy -m 12 -r 5
```

使用例 2　最小パスワード長と、文字種ごとの最大字数枠を設定します。

```
XSCF> setpasswordpolicy -m 10 -d 1 -u 0 -l 1 -o 1
```

このコマンドを実行すると、新しいパスワードの最小パスワード長は 10 文字になります。数字（または英数字以外の文字）を 1 文字以上含んでいる場合は、9 文字のパスワードが受け入れられます。数字 1 文字と、英数字以外の文字 1 文字を含んでいる場合は、8 文字のパスワードが受け入れられます。

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

adduser(8), **password**(8), **showpasswordpolicy**(8)

名前

setpciboxdio - SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S の PCI スロットから PCI ボックスに搭載された PCI カードへの、ダイレクト I/O 機能に関する設定を行います。

形式

setpciboxdio [-b *bb_id*] -s {enable|disable} [[-q] -{y|n}] all

setpciboxdio [-b *bb_id*] -s {enable|disable} [[-q] -{y|n}] *slot_no*...

setpciboxdio -h

説明

setpciboxdio は、SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S の PCI スロットから PCI ボックスに搭載された PCI カードへの、ダイレクト I/O 機能に関する設定を行うコマンドです。

ダイレクト I/O 機能は、SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S の PCI スロットごとに設定できます。設定された内容は、指定した SPARC M10-4/M10-4S の PCI スロットに接続された PCI ボックスを単位として反映されます。

setpciboxdio は、SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S にリンクカードが搭載されているかどうかにかかわらず実行できます。

setpciboxdio は、SPARC M12-1/M10-1 では使用できません。

なお、SPARC M12-1/M10-1 では、setpciboxdio を使ってダイレクト I/O 機能の設定を行う必要はありません。SPARC M12-1/M10-1 に PCI ボックスを接続するだけで、ダイレクト I/O 機能を使用できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-b *bb_id*

ダイレクト I/O 機能を設定する SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S の BB-ID を設定します。*bb_id* に指定できる値は以下のとおりです。

- SPARC M12-2/M10-4 の場合

  0 固定

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

  0 ～ 3 の整数

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

  0 ～ 15 の整数

SPARC M12-2S/M10-4S の場合、-b *bb_id* を省略すると、現在作業している SPARC M12-2S/M10-4S に対して設定されます。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-s {enable|disable}	ダイレクト I/O 機能を有効にするかどうかを設定します。以下のどちらかを指定できます。省略した場合はエラーとなります。 enable　ダイレクト I/O 機能を有効にします。 disable　ダイレクト I/O 機能を無効にします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

all	指定した SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S の、すべての PCI スロットに対して設定を適用します。*slot_no* と同時に使用することはできません。
slot_no	設定を適用する PCI スロット番号を設定します。0 から 10 までの整数で指定します。スペースで区切って複数指定できます。指定する順番は任意です。all と同時に使用することはできません。

詳細説明

- setpciboxdio は、クロスバーボックスに対して実行することはできません。また、クロスバーボックスで作業している場合に、-b オプションを省略するとエラーとなります。
- setpciboxdio は、対象の SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S の物理システムボード（PSB）が組み込まれている物理パーティション（PPAR）の、電源が切断された状態のみ設定が反映されます。PPAR の電源が切断されていない場合はエラーとなり、設定は次回 PPAR の電源を投入したときに反映されます。
- setpciboxdio でダイレクト I/O 機能が有効に設定された PCI スロットでは、PCI ホットプラグ機能が無効になります。
- SPARC M12-2S/M10-4S でスロット番号に 8 から 10 を指定しても、設定された内容は無視されます。
- setpciboxdio でダイレクト I/O 機能の設定を切り替えると、対象の SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S の PSB が組み込まれた PPAR の論理ドメイン構成は、factory-default になる場合があります。また、この場合、M10-4/M10-4S では制御ドメインの OpenBootPROM 環境変数が初期化されることがあります。M12-2/M12-2S では、制御ドメインの OpenBootPROM 環境変数は初期化されません。詳細は、お使いのサーバの最新の『プロダクトノート』を参照してください。

- showpciboxdio(8) を使用すると、現在のダイレクト I/O 機能の設定内容が表示されます。

使用例

使用例 1 BB-ID 2 の PCI スロット 2、3、7 に対して、ダイレクト I/O 機能を有効にします。

```
XSCF> setpciboxdio -b 2 -s enable 2 3 7
The Direct I/O feature via the PCIBOX will be enabled.

Notice:
  Logical domain config_name will be set to "factory-default".

Continue? [y|n] :y
```

使用例 2 現在作業中の筐体の、すべての PCI スロットに対して、ダイレクト I/O 機能を有効にします。プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> setpciboxdio -s enable -q -y all
```

使用例 3 SPARC M10-4 のすべての PCI スロットに対して、ダイレクト I/O 機能を無効にします。

```
XSCF> setpciboxdio -b 0 -s disable all
The Direct I/O feature via the PCIBOX will be disabled.

Notice:
  Logical domain config_name will be set to "factory-default".

Continue? [y|n] :y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showpciboxdio(8)

名前 setpcl - 物理パーティション（PPAR）構成情報（PCL）を設定します。

形式

setpcl -p *ppar_id* -s policy= *value*

setpcl -p *ppar_id* -s *variable=value lsb* [*lsb...*]

setpcl -p *ppar_id* -a *lsb=psb* [*lsb=psb...*]

setpcl -p *ppar_id* -r *lsb* [*lsb...*]

setpcl -h

説明

setpcl は、PCL を設定するコマンドです。

PCL とは、PPAR や PPAR を構成する論理システムボード（LSB）に設定できるハードウェアリソース情報です。

LSB とは、ハイパーバイザが認識するシステムボードの単位です。PPAR ごとに独立した 00 から 15 までの整数で表されます。

物理システムボード（PSB）は、XSCF で認識するシステムボードで、ハードウェアとして実装されているボードのことです。setpcl は、PCL を設定することで LSB と PSB を対応させます。また、搭載されているハードウェアリソースを論理ドメイン上の Oracle Solaris で使用させないように設定することができます。

setpcl では、PCL 内の、以下の情報を設定できます。SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 では policy だけ設定できます。

PPAR に対する設定：

- ハードウェア初期診断で異常が検出された場合の縮退範囲（policy）

  ただし PPAR が稼働している場合は設定できません、設定しなおす場合は PPAR の電源を切断する必要があります。

fru	CPU やメモリなどの部品単位で縮退（デフォルト）
psb	PSB 単位で縮退
system	縮退せずに対象の PPAR を停止

LSB に対する設定：

- LSB に対応させる PSB 番号

  LSB に対応させる PSB 番号を指定します。
- LSB に搭載されているメモリの使用（no-mem）

  LSB に搭載されているメモリを、論理ドメイン上の Oracle Solaris で使用させるかどうか設定できます。
- LSB に搭載されている入出力デバイスの使用（no-io）

LSB に搭載されている PCI カードなどの入出力デバイスを、論理ドメイン上の Oracle Solaris で使用させるかどうか設定できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a *lsb=psb*

PPAR の LSB 番号に対応させる PSB 番号を指定します。以下の形式で指定できます。SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 では指定できません。

lsb=psb

lsb LSB 番号を指定します。00 から 15 までの整数で指定できます。

psb PSB 番号を指定します。以下の形式で指定できます。

xx-y

xx: BB-ID の 00 から 15 までの整数で指定します。

y: 0 で固定です。

lsb と *psb* をイコール（=）で区切った形式で指定できます。「=」との間にスペースを含めてはなりません。*lsb=xsb* はスペースで区切って複数指定できます。

同じ LSB 番号と PSB 番号を重複して指定した場合はエラーとなります。また、指定した *lsb* に PSB 番号が設定されている場合もエラーとなります。

指定した *psb* が別の LSB に設定されている場合は、既存の設定が消去され、指定した *lsb* に上書きされます。

-h

使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-p *ppar_id*

設定する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。

-r

指定した PPAR の LSB 番号に対応する PSB 番号を消去します。SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 では指定できません。

-s *variable=value*　LSB へ対応させた PSB のハードウェアリソースに関して設定します。*variable* には設定する項目、*value* には *variable* に対する値を指定します。*variable* と *value* をイコール（=）で区切った形式で 1 つだけ指定します。「=」との間にスペースを含めてはなりません。

variable には、以下のいずれかを指定できます。SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 では `policy` だけ指定できます。

`policy`	ハードウェア初期診断で異常が検出された場合の縮退範囲
`no-mem`	メモリを論理ドメインで使用するかどうか
`no-io`	入出力デバイスを論理ドメインで使用するか

variable に `policy` を指定した場合、*value* には以下のいずれかを指定できます。

`fru`	診断で異常が発生した場合、対象の Field Replaceable Unit（FRU）を縮退します。
`psb`	診断で異常が発生した場合、対象の PSB を縮退します。
`system`	診断で異常が発生した場合、対象の PPAR を停止します。

variable に `no-mem` を指定した場合、*value* には以下のどちらかを指定できます。

`true`	メモリを論理ドメインで使用させません。
`false`	メモリを論理ドメインで使用させます（デフォルト）。

variable に `no-io` を指定した場合、*value* には以下のどちらかを指定できます。

`true`	入出力デバイスを論理ドメインで使用させません。
`false`	入出力デバイスを論理ドメインで使用させます（デフォルト）。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

lsb　設定する LSB 番号を指定します。*lsb* は 00 から 15 までの整数で指定できます。スペースで区切って複数指定できます。*lsb* は PPAR 内で一意の値を指定してください。同じ *lsb* を指定した場合はエラーとなります。SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 では指定できません。

詳細説明

- 指定した LSB に対応させた PSB がすでに PPAR 構成に組み込まれている場合は、LSB に設定されている内容は変更できません。deleteboard(8) で PSB を PPAR 構成から切り離したあとで変更してください。
- 指定した PPAR が稼働している場合、policy の値は変更できません。指定した PPAR を停止させてから変更してください。
- showpcl(8) を使用すると、現在設定されている PCL の情報が確認できます。
- すでに縮退が発生している状態で policy を変更した場合、期待とは異なる縮退を行う場合があります。

注 – -s no-mem オプションは指定できますが、LSB に搭載されているメモリを論理ドメイン上の Oracle Solaris で使用させないようにすることはできません。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 の LSB 0 に PSB 00-0、LSB 1 に PSB 01-0 を対応させます。

```
XSCF> setpcl -p 0 -a 0=00-0 1=01-0
```

使用例 2 PPAR-ID 0 に policy=system を設定します。

```
XSCF> setpcl -p 0 -s policy=system
```

使用例 3 PPAR-ID 0 の LSB 0、1 に対応している PSB を削除します。

```
XSCF> setpcl -p 0 -r 0 1
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **deleteboard**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showfru**(8), **showpcl**(8)

名前 setpowercapping - 消費電力制限に関する設定を行います。

形式 **setpowercapping** [[-q] -{y|n}] -s *option*= *value* [[-s *option*= *value*]...]

setpowercapping [[-q] -{y|n}] -c default

setpowercapping -h

説明 setpowercapping は、システムの消費電力制限を設定するコマンドです。

すべての設定は、コマンド実行後すぐに反映されます。

設定できる項目は以下のとおりです。

- power capping 機能の有効／無効
  システムの消費電力制限の有効／無効を設定します。デフォルトは無効です。
- 消費電力の上限値
  消費電力の上限値を設定します。ワット数またはパーセントが指定できます。デフォルトは、パーセント指定の 100（%）です。
  - 消費電力の上限値（ワット数指定）
    消費電力上限値をワット数で設定します。
  - 消費電力の上限値（パーセント指定）
    消費電力上限値をパーセントで設定します。
    システムの最小消費電力値（0 %）と最大消費電力値（100 %）から、上限の電力値（ワット）に換算します。
- 上限値を越えた場合の猶予時間
  システムの消費電力値が消費電力の上限値を超え続けた場合、違反とするまでの猶予時間を設定します。単位は秒で、デフォルトは 30 です。
- 違反時のシステム動作
  システムの消費電力値が消費電力の上限値を超えた状態で、猶予時間を経過した場合のシステム動作を設定します。none、shutdown、poff のいずれかが指定でき、デフォルトは none です。

電源ユニット（PSU）の供給電力最大値、およびシステムの最小消費電力値と最大消費電力値は、showenvironment(8) で確認できます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-c default	power capping 機能全体を初期設定値に戻します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-n	プロンプトに対して自動的に「n」(no) と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-s *option=value*	*option* には設定する項目、*value* には *option* に対する値を指定します。*option* と *value* をイコール (=) で区切った形式で指定します。「=」との間にスペースを含めてはなりません。スペースで区切って複数指定できます。

option には、以下のいずれかを指定できます。

activate_state	消費電力を制限するかどうかを設定します。
powerlimit_p	消費電力の上限値をパーセント (%) で設定します。 powerlimit_w と一緒に指定できません。
powerlimit_w	消費電力の上限値をワット数で設定します。powerlimit_p と一緒に指定できません。
timelimit	消費電力の上限値を越えた場合の猶予時間を設定します。
violation_actions	上限値を超えた状態で、猶予時間を経過した場合のシステム動作を設定します。

option に activate_state を指定した場合、*value* には以下のどちらかを指定できます。

enabled	消費電力を制限します。
disabled	消費電力を制限しません (デフォルト)。

option に powerlimit_p を指定した場合、*value* は 0 から 100 までの整数で指定できます。システムの最大消費電力値より大きい値を指定することはできますが、システムの最小消費電力値より小さい値を指定することはできません。

option に powerlimit_w を指定した場合、*value* は 0 から 99999 までの整数で指定できます。

option に timelimit を指定した場合、*value* は 10 から 99999 までの整数で指定できます。単位は秒です。また、以下の値も指定できます。

default	消費電力の上限値を越えた場合の猶予時間を 30 秒に設定します。
none	消費電力の上限値を越えた場合の猶予時間を 0 秒に設定します。

option に violation_actions を指定した場合、*value* には以下のいずれかを指定できます。

none	上限値越えのメッセージだけを出力します（デフォルト）。
shutdown	上限値越えのメッセージを出力したあと、上限値を下回るところまで物理パーティション（PPAR）を停止します。
poff	上限値越えのメッセージを出力したあと、上限値を下回るところまで PPAR を強制的に停止します。

-y　　プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- showpowercapping(8) を使用すると、消費電力制限に関する設定が確認できます。
- ある PPAR の Logical Domains（LDoms）Manager が停止した状態で、以下の条件をすべて満たす場合、他の PPAR の性能が低下したり、停止したりする可能性があります。
  - システムの power capping 機能が有効となっている場合
  - システムの消費電力値が消費電力上限値を超えている場合
- 論理ドメインの構成を変更した場合は、制御ドメイン上で ldm add-spconfig コマンドを実行し、最新の構成情報を XSCF に保存してください。保存しない場合は、-s violation_actions で設定した PPAR の停止処理が、正しく動作しないことがあります。
- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

使用例

使用例 1　システムの消費電力制限を有効にします。

```
XSCF> setpowercapping -s activate_state=enabled
activate_state      :disabled  -> enabled
powerlimit          :500w      -> -
timelimit           :30        -> -
violation_actions   :none      -> -
The specified options will be changed.
Continue? [y|n]:y
configured.
```

```
activate_state      :enabled
powerlimit          :500w
timelimit           :30
violation_actions   :none
```

使用例 2 システムの消費電力の上限値を 75 % に設定します。

```
XSCF> setpowercapping -s powerlimit_p=75
activate_state      :enabled   -> -
powerlimit          :25%       -> 75%
timelimit           :30        -> -
violation_actions   :none      -> -
The specified options will be changed.
Continue? [y|n]:y
configured.
activate_state      :enabled
powerlimit          :75%
timelimit           :30
violation_actions   :none
```

使用例 3 システムの消費電力の上限値を 1000W に、消費電力の上限値を越えた場合の猶予時間を 100 秒に設定します。

```
XSCF> setpowercapping -s powerlimit_w=1000 -s timelimit=100
activate_state      :enabled   -> -
powerlimit          :500w      -> 1000w
timelimit           :30        -> 100
violation_actions   :none      -> -
The specified options will be changed.
Continue? [y|n]:y
configured.
activate_state      :enabled
powerlimit          :1000w
timelimit           :100
violation_actions   :none
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showenvironment(8), **showpowercapping**(8)

名前

setpowerschedule - スケジュール運転情報を設定します。

形式

setpowerschedule {-p *ppar_id*|-a} -c control={enable|disable}

setpowerschedule {-p *ppar_id*|-a} -c recover={on|off|auto}

setpowerschedule -h

説明

setpowerschedule は、スケジュール運転に関連する情報を設定するコマンドです。

スケジュール運転は、物理パーティション（PPAR）全体または PPAR ごとに設定できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

platadm	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a

すべての PPAR に対して設定します。

-c control={enable|disable}

指定した PPAR のスケジュール運転を有効／無効にします。有効にする場合は enable を、無効にする場合は disable を指定します。デフォルトは無効です。

-c recover={on|off|auto}

復電時に電源を投入するかどうかを設定します。以下のいずれかを指定できます。

on	停電前と同じ電源状態に戻します（デフォルト）。停電前に電源が投入されていれば、電源を投入します。
off	電源を投入しません。
auto	復電した時刻がスケジュール運転期間（電源投入から電源切断のスケジュール期間内）の場合は、電源を投入します。スケジュール運転期間外の場合は、電源を投入しません。電源の投入と切断の両方のスケジュールが設定されていない場合は、スケジュール運転期間外となるため、電源を投入しません。 例 1：9 時に電源を投入し、13 時に電源を切断するスケジュールの場合 - 10 時に復電：電源は投入されます。 - 15 時に復電：電源は投入されません。 例 2：9 時に電源を投入するスケジュールのみ（電源切断スケジュールが設定されていない）の場合 - 10 時、15 時に復電：ともに電源は投入されません。

-h

使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-p *ppar_id*

スケジュール運転する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。

詳細説明

- 無停電電源装置（UPS）接続構成において、Power Chute Network Shutdown Enterprise（PCNS）のスケジュール設定連携機能と setpowerschedule によるスケジュール設定は別の機能です。スケジュールは、どちらか一方のみを設定してください。両方が設定されている場合、setpowerschedule で設定したスケジュール運転の無効や、スケジュール運転の休止（holiday 設定）では、PCNS のスケジュール設定連携機能で設定したスケジュールを休止できません。
- showpowerschedule(8) を使用すると、現在設定されているスケジュール運転情報が確認できます。
- 存在しない PPAR-ID や無効なオプションやパラメータを指定した場合には、エラーとなります。
- 論理ドメインの構成を変更した場合は、制御ドメイン上で ldm add-spconfig コマンドを実行し、最新の構成情報を XSCF に保存してください。保存しない場合は、自動電源切断処理が、正しく動作しないことがあります。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 1 のスケジュール運転を有効にします。

```
XSCF> setpowerschedule -p 1 -c control=enable
XSCF>
```

使用例 2 復電時に PPAR-ID 1 の電源をスケジュール運転に合わせて投入できるように設定します。

```
XSCF> setpowerschedule -p 1 -c recover=auto
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addpowerschedule(8), **deletepowerschedule**(8), **showpowerschedule**(8)

名前

setpowerupdelay - システムの暖機運転時間および空調待ち時間を設定します。

形式

setpowerupdelay -p *ppar_id* -c warmup -s *time*

setpowerupdelay -a -c warmup -s *time*

setpowerupdelay -c wait -s *time*

setpowerupdelay -h

説明

setpowerupdelay は、システムの暖機運転時間および空調待ち時間を設定するコマンドです。

空調待ち時間は、データセンター内の空調が適温になってからシステムを起動する、などの制御に利用できます。システムの入力電源がすでに投入され稼働している場合、設定した内容は次回のシステム起動時に有効となります。

暖機運転の待ち時間は、物理パーティション（PPAR）ごとに設定します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	すべての PPAR に対して、暖機運転時間を設定します。
-c warmup	暖機運転時間を設定します。
-c wait	空調待ち時間を設定します。 **注 –** 空調待ち時間は、SPARC M12/M10 ではサポートされていません。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-p *ppar_id*	暖機運転時間を設定する PPAR を指定します。
-s *time*	暖機運転または空調待ち時間を分単位で指定します。*time* は 0 から 255 までの整数で指定できます。

詳細説明

- showpowerupdelay(8) を使用すると、現在設定されている暖機運転時間および空調待ち時間が確認できます。
- testsb(8) を使用して電源が投入された場合、暖機運転時間や空調待ち時間は無視されます。起動時にこれらの時間を監視する場合は、poweron(8) を使用してください。
- オペレーションパネルを使用して電源が投入された場合、空調待ち時間は無視されます。

使用例

使用例 1 暖機運転時間を 10 分に設定します。

```
XSCF> setpowerupdelay -p 00 -c warmup -s 10
```

使用例 2 空調待ち時間を 20 分に設定します。

```
XSCF> setpowerupdelay -c wait -s 20
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

poweron(8),**showpowerupdelay**(8),**testsb**(8)

名前

setpparmode - 物理パーティション（PPAR）の動作モードを設定します。

形式

setpparmode [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* -m *function=mode*

setpparmode -h

説明

setpparmode は、PPAR の動作モードを設定するコマンドです。

PPAR の動作モードには、以下の種類があります。

診断レベル

Power-On Self-Test（POST）の診断レベル。PPAR が停止している状態で設定します。デフォルトは標準です。実行するとすぐに設定が反映されます。

メッセージレベル

POST 診断のコンソールメッセージの詳細レベル。PPAR が停止している状態で設定します。デフォルトは標準です。実行するとすぐに設定が反映されます。

Alive Check（XSCF- ハイパーバイザ間の監視）

Alive Check の有効または無効。デフォルトは有効です。実行するとすぐに設定が反映されます。

Host Watchdog（ハイパーバイザ - 論理ドメイン間の監視）タイムアウト時の動作

Host Watchdog タイムアウト時の論理ドメイン（制御ドメインを含む）の動作。デフォルトは論理ドメインをリセットします。実行するとすぐに設定が反映されます。

ブレーク信号（STOP-A）抑止

ブレーク信号送信抑止の有効または無効。デフォルトは有効です。実行するとすぐに設定が反映されます。

ゲストドメインのオートブート

PPAR 起動時にゲストドメインをオートブートさせるかどうか。デフォルトは有効です。設定を反映させるには、PPAR の電源投入または PPAR を再起動する必要があります。

Power Aware Dispatcher 機能

Solaris Power Aware Dispatcher を使用した省電力動作を有効または無効に設定します。Power Aware Dispatcher 機能（PAD 機能）が有効な場合、Solaris Power Aware Dispatcher が使用されます。初期設定値は有効です。SPARC M10-1/M10-4/M10-4S では設定できません。

PAD 機能と省電力動作の設定の組み合わせは以下のとおりです。
- PAD 機能が有効の場合、省電力動作は、以下のいずれかを設定できます。
disabled、performance、または elastic
- PAD 機能が無効の場合、省電力動作は、以下のどちらかを設定できます。
disabled または elastic

省電力動作が disabled または elastic の場合は、PAD 機能の設定がどちらでも省電力動作に差異はありません。設定は PPAR が停止している状態で実行します。

PAD 機能の設定を無効から有効、または有効から無効に変更すると、論理ドメインの構成情報が factory-default に戻ります。この場合、論理ドメインの再構成が必要になります。

省電力動作が performance に設定されている場合は、PAD 機能を無効に変更できません。省電力動作を disabled または elastic に設定したあと、無効に変更します。

注 – PAD 機能のサポート情報については、『SPARC M12 プロダクト ノート』の最新版を参照してください。

省電力動作

CPU とメモリの省電力動作を設定します。SPARC M12 では `powermgmt_policy` オプション、SPARC M10 では `elastic` オプションで設定します。デフォルトは無効です。実行するとすぐに設定が反映されます。Power Aware Dispatcher 機能が無効の場合、省電力動作は performance に変更できません。

I/O バス再構成（ioreconfigure）

PPAR 電源投入時や PPAR のリセット時に、バス構成に応じて I/O バスを再構成するかどうか。デフォルトは無効です。PPAR が停止している状態で実行します。SPARC M12-1/M10-1 では設定できません。

CPU 動作モード

SPARC64 X+ プロセッサを搭載した場合に、SPARC64 X+ 機能を使用して動作させせるか、あるいは SPARC64 X 互換で動作させせるかを設定します。初期設定値は auto モードです。auto モードでは、SPARC64 X+ 機能を使用して動作させせるか、あるいは SPARC64 X 互換で動作させせるかを自動的に判断します。

PPAR が停止していない状態（Powered Off 以外）の場合はエラーを返します。

PPAR が SPARC64 X+ 機能を使用して動作しているか、SPARC64 X 機能を使用して動作しているかを確認するには、Oracle Solaris 上で以下のコマンドを実行します。

```
# psrinfo -pv
```

CPU 動作モードは SPARC M12-2/M12-2S では指定できません。

auto モード

SPARC64 X+ 機能を使用して動作させるかどうかを自動的に判断するモードです。本モードを設定した場合、Oracle Solaris のブート時に PPAR の CPU 構成に従って、以下のように動作を自動的に決定します。

【PPAR 内の CPU がすべて SPARC64 X+ プロセッサの場合】
- Oracle Solaris は SPARC64 X+ 機能を使用することができます。
- SPARC64 X+ プロセッサを搭載した PSB を、DR 操作によって PPAR に追加することができます。
- SPARC64 X プロセッサを搭載した PSB は、DR 操作では PPAR に追加することができません。SPARC64 X プロセッサを PPAR に追加する場合には、PPAR をシャットダウンしたあと、PSB を PPAR に追加する必要があります。

【PPAR 内の CPU が SPARC64 X プロセッサと SPARC64 X+ プロセッサの混成状態である場合、または PPAR 内の CPU がすべて SPARC64 X プロセッサの場合】
- Oracle Solaris は SPARC64 X+ 機能を使用することができません。
- SPARC64 X プロセッサを搭載した PSB および SPARC64 X+ プロセッサを搭載した PSB のどちらでも、DR 操作によって PPAR に追加することができます。
- 本モードを設定した PPAR において、故障による PPAR リセット後に PPAR 内に SPARC64 X プロセッサが 1 つも存在しなくなった場合、SPARC64 X プロセッサを DR 操作によって組み込むことができなくなる場合があることに注意してください。この状態を避けるため、SPARC64 X プロセッサを搭載している PSB を含む PPAR では、compatible モードを設定してください。

`compatible` モード

SPARC64 X 互換で動作させるモードです。PPAR 内の CPU が SPARC64 X プロセッサと SPARC64 X+ プロセッサの混成状態でも、すべて SPARC64 X+ プロセッサで構成されている場合でも、強制的に SPARC64 X 互換で動作させます。
SPARC64 X プロセッサを搭載している PSB を含む PPAR、および将来的に SPARC64 X プロセッサを DR 操作により PPAR に組み込む場合には、本モードを設定してください。

- 本モードを設定すると、Oracle Solaris は SPARC64 X+ 機能を使用することができません。
- 本モードを設定すると、SPARC64 X プロセッサを搭載した PSB および SPARC64 X+ プロセッサを搭載した PSB のどちらでも、DR 操作によって PPAR に追加することができます。

PPAR DR 機能

稼働中の PPAR 構成に対する、物理システムボード（PSB）の組み込みおよび切り離しを行う機能の有効／無効を設定します。デフォルトは有効です。設定を反映させるには、PPAR の電源投入または PPAR を再起動する必要があります。SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 では設定できません。

PPAR DR の設定を無効から有効、または有効から無効に変更すると、物理パーティションがリセットされたあと、論理ドメインの構成情報が factory-default に戻ります。詳細は、『SPARC M12/M10 ドメイン構築ガイド』の「2.5 動的再構成の条件と設定」を参照してください。

PPAR の動作モードのいずれかを設定すると、現在の設定内容が一覧表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

■ 診断レベル、メッセージレベル、ゲストドメインのオートブート

`fieldeng`	すべての PPAR に対して実行できます。

■ Alive Check、Host Watchdog タイムアウト時の動作、ブレーク信号、ゲストドメインのオートブート、Power Aware Dispatcher 機能、省電力動作、I/O バスの再構成、CPU 動作モード、PPAR DR 機能

`platadm`	すべての PPAR に対して実行できます。
`pparadm`	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-m` *function=mode* 動作モードとその値を設定します。*function* には動作モードを指定します。以下のいずれかを指定できます。

`diag`

POST の診断レベルを設定します。

`message`

POST 診断のコンソールメッセージ詳細レベルを設定します。

`alive_check`

Alive Check の有効または無効を設定します。

`watchdog_reaction`

Host Watchdog タイムアウト時の動作を設定します。

`break_signal`

ブレーク信号抑止の有効または無効を設定します。

`guestboot`

ゲストドメインのオートブートの有効または無効を設定します。

注 – 制御ドメインのオートブートの有効または無効は、`setpparparam`(8) コマンドで設定します。

`pad`

Power Aware Dispatcher 機能を有効または無効に設定します。SPARC M10-1/M10-4/M10-4S では設定できません。

`elastic`

SPARC M10-1/M10-4/M10-4S の CPU とメモリの省電力動作を設定します。SPARC M12-1/M12-2/M12-2S では設定できません。

`powermgmt_policy`

SPARC M12-1/M12-2/M12-2S の CPU とメモリの省電力動作を設定します。SPARC M10-1/M10-4/M10-4S では設定できません。

`ioreconfigure`

PPAR 起動時や再起動時の、I/O バスの再構成を有効または無効に設定します。SPARC M12-1/M10-1 では設定できません。

`cpumode`

CPU 動作モードを設定します。SPARC M12-1/M12-2/M12-2S では設定できません。

`ppar_dr`

PPAR DR 機能を有効または無効に設定します。SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 では設定できません。

function に diag を指定した場合、*mode* には以下のいずれかを指定できます。PPAR が停止している状態で設定します。

off	診断しません。
min	診断レベルを「標準」に設定します（デフォルト）。
max	診断レベルを「最大」に設定します。

function に message を指定した場合、*mode* には以下のいずれかを指定できます。PPAR が停止している状態で設定します。

none	故障を検出しない限り診断出力は表示しません。
min	制限された量の診断出力を表示します。
normal	適度な量の診断出力を表示します（デフォルト）。
max	実行する各診断名と結果を含む完全な診断出力を表示します。
debug	各診断のデバッグ出力を含む広範囲な診断出力を表示します。

function に alive_check、break_signal、guestboot、または ppar_dr を指定した場合、*mode* には、以下のどちらかを指定できます。

on	alive check、ブレーク信号送信抑止、ゲストドメインのオートブート、PPAR DR 機能を有効に設定します。
off	alive check、ブレーク信号送信抑止、ゲストドメインのオートブート、PPAR DR 機能を無効に設定します。

function に `watchdog_reaction` を指定した場合、*mode* には以下のいずれかを指定できます。

`none`	何もしません。
`dumpcore`	異常を検出した論理ドメインにパニックを発生させます。
`reset`	異常を検出した論理ドメインをリセットします。

function に `pad` を指定した場合、*mode* には、以下のどちらかを指定できます。

`on`	Power Aware Dispatcher 機能を有効に設定します。（デフォルト）
`off`	Power Aware Dispatcher 機能を無効に設定します。この mode に設定する場合は、powermgmt_policy が disabled または elastic でなければなりません。

function に `elastic` を指定した場合、*mode* には以下のどちらかを指定できます。

`off`	CPU およびメモリの省電力動作を無効に設定します（デフォルト）。システムのすべての CPU およびメモリが常に最高のパフォーマンスで動作します。
`on`	CPU およびメモリの省電力動作を有効に設定します。CPU およびメモリの現在の使用率レベルに合わせて、システムの電力使用量が変化します。これにより、システムの消費電力を抑えることができます。

function に powermgmt_policy を指定した場合、*mode* には以下のいずれかを指定できます。

disabled	CPU およびメモリの省電力動作を無効に設定します（デフォルト）。システムのすべての CPU およびメモリが常に最高のパフォーマンスで動作します。
elastic	CPU およびメモリの省電力動作を有効に設定します。CPU およびメモリの現在の使用率レベルに合わせて、システムの電力使用量が変化します。これにより、システムの消費電力を抑えることができます。
performance	CPU の省電力動作を有効に設定します。システムで未使用のアイドル状態の CPU をより低速で動作させるか、またはスリープ状態に移行させることで、パフォーマンスにほとんど影響を与えずに電力を節約できます。この mode に設定する場合は、pad が on でなければなりません。

注 – 省電力動作のサポート情報については、『SPARC M12 プロダクトノート』の最新版を参照してください。

function に ioreconfigure を指定した場合、*mode* には以下のいずれかを指定できます。

true	システムに電源が投入されるたびに、XSCF は I/O バスを確認し、必要に応じて再構成します。
false	XSCF は I/O バスを再構成しません。
nextboot	次回システムに電源が投入されたときだけ、XSCF は I/O バスを再構成します。再構成したあとは自動的に false に設定します。

function に cpumode を指定した場合、*mode* には以下のいずれかを指定できます。

auto	OS ブート時の CPU 構成に従って、SPARC64 X+ 機能を使用できるかどうかを自動的に判断します。
compatible	SPARC64 X+ プロセッサが搭載されている場合でも、強制的に SPARC64 X 互換で動作させます。

-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-p *ppar_id*	動作モードを設定する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。

-q　　プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

-y　　プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- setpparmode で設定した動作モードは、実際の動作ではなく設定状態を表します。

  実際の動作はオペレーションパネルのモードスイッチの状態により変わります。オペレーションパネルのモードスイッチが「Service」の場合は、setpparmode(8) で設定された内容にかかわらず、PPAR の動作モードは以下のように設定されます。

  - 診断レベル、メッセージレベル、Host Watchdog タイムアウト時の動作、ゲストドメインのオートブート、Power Aware Dispatcher 機能、省電力動作、I/O バスの再構成、CPU 動作モード、PPAR DR 機能 : setpparmode の設定どおり
  - Alive Check: 無効
  - ブレーク信号（STOP-A）送信抑止 : 設定にかかわらず、ブレーク信号を送信
- showpparmode(8) を使用すると、現在設定されている PPAR の動作モードの内容が確認できます。setpparmode 実行後に showpparmode(8) を実行すると、setpparmode で設定された内容が表示されます。

使用例

使用例 1　SPARC M10-4S で、PPAR-ID 0 の診断レベルを「なし」に設定します。

```
XSCF> setpparmode -p 0 -m diag=off
Diagnostic Level          :min      -> off
Message Level             :normal   -> -
Alive Check               :on       -> -
Watchdog Reaction         :reset    -> -
Break Signal              :on       -> -
Autoboot(Guest Domain)    :on       -> -
Elastic Mode              :off      -> -
IOreconfigure             :true     -> -
CPU Mode                  :auto     -> -
PPAR DR                   :off      -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n] :y
configured.
Diagnostic Level          :off
Message Level             :normal
Alive Check               :on (alive check:available)
Watchdog Reaction         :reset (watchdog reaction:reset)
Break Signal              :on (break signal:non-send)
Autoboot(Guest Domain)    :on
Elastic Mode              :off
```

```
IOreconfigure            :true
CPU Mode                 :auto
PPAR DR                  :off
```

使用例 2 SPARC M12-2S で、PPAR-ID 0 の診断レベルを「なし」に設定します。

```
XSCF> setpparmode -p 0 -m diag=off
Diagnostic Level         :min      -> off
Message Level            :normal   -> -
Alive Check              :on       -> -
Watchdog Reaction        :reset    -> -
Break Signal             :on       -> -
Autoboot(Guest Domain)   :on       -> -
Power Aware Dispatcher   :on       -> -
Power Management Policy  :disabled -> -
IOreconfigure            :true     -> -
CPU Mode                 :-
PPAR DR                  :off      -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n] :y
configured.
Diagnostic Level         :off
Message Level            :normal
Alive Check              :on (alive check:available)
Watchdog Reaction        :reset (watchdog reaction:reset)
Break Signal             :on (break signal:non-send)
Autoboot(Guest Domain)   :on
Power Aware Dispatcher   :on
Power Management Policy  :disabled
IOreconfigure            :true
CPU Mode                 :-
PPAR DR                  :off
```

使用例 3 SPARC M10-4S で、PPAR-ID 0 のゲストドメインの Auto boot 機能を有効にします。プロンプトには自動的に「y」と入力します。

```
XSCF> setpparmode -y -p 0 -m guestboot=on
Diagnostic Level         :off      -> -
Message Level            :normal   -> -
Alive Check              :on       -> -
Watchdog Reaction        :reset    -> -
Break Signal             :on       -> -
Autoboot(Guest Domain)   :off      -> on
Elastic Mode             :off      -> -
IOreconfigure            :true     -> -
CPU Mode                 :auto     -> -
PPAR DR                  :off      -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n]:y
configured.
Diagnostic Level         :max
Message Level            :normal
```

```
Alive Check                :on (alive check:available)
Watchdog Reaction          :none (watchdog reaction:none)
Break Signal               :on (break signal:non-send)
Autoboot(Guest Domain)     :on
Elastic Mode               :off
IOreconfigure              :true
CPU Mode                   :auto
PPAR DR                    :off
```

使用例 4 SPARC M12-2S で、PPAR-ID 0 のゲストドメインの Auto boot 機能を有効にします。プロンプトには自動的に「y」と入力します。

```
XSCF> setpparmode -y -p 0 -m guestboot=on
Diagnostic Level           :off      -> -
Message Level              :normal   -> -
Alive Check                :on       -> -
Watchdog Reaction          :reset    -> -
Break Signal               :on       -> -
Autoboot(Guest Domain)     :off      -> on
Power Aware Dispatcher     :on       -> -
Power Management Policy    :disabled -> -
IOreconfigure              :true     -> -
CPU Mode                   :-
PPAR DR                    :off      -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n]:y
configured.
Diagnostic Level           :off
Message Level              :normal
Alive Check                :on (alive check:available)
Watchdog Reaction          :reset (watchdog reaction:reset)
Break Signal               :on (break signal:non-send)
Autoboot(Guest Domain)     :on
Power Aware Dispatcher     :on
Power Management Policy    :disabled
IOreconfigure              :true
CPU Mode                   :-
PPAR DR                    :off
```

使用例 5 SPARC M10-4S で、PPAR-ID 0 の Host Watchdog タイムアウト時の動作を「何もしない」に設定します。

```
XSCF> setpparmode -p 0 -m watchdog_reaction=none
Diagnostic Level           :max      -> -
Message Level              :normal   -> -
Alive Check                :on       -> -
Watchdog Reaction          :reset    -> none
Break Signal               :on       -> -
Autoboot(Guest Domain)     :on       -> -
Elastic Mode               :off      -> -
IOreconfigure              :true     -> -
CPU Mode                   :auto     -> -
```

```
PPAR DR                   :off      -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n]:y
configured.
Diagnostic Level          :max
Message Level             :normal
Alive Check               :on (alive check:available)
Watchdog Reaction         :none (watchdog reaction:none)
Break Signal              :on (break signal:non-send)
Autoboot(Guest Domain)    :on
Elastic Mode              :off
IOreconfigure             :true
CPU Mode                  :auto
PPAR DR                   :off
```

使用例 6 SPARC M10-4S で、PPAR-ID 0 の省電力動作を有効に設定します。

```
XSCF> setpparmode -p 0 -m elastic=on
Diagnostic Level          :max      -> -
Message Level             :normal   -> -
Alive Check               :on       -> -
Watchdog Reaction         :reset    -> -
Break Signal              :on       -> -
Autoboot(Guest Domain)    :on       -> -
Elastic Mode              :off      -> on
IOreconfigure             :true     -> -
CPU Mode                  :auto     -> -
PPAR DR                   :off      -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n]:y
configured.
Diagnostic Level          :max
Message Level             :normal
Alive Check               :on (alive check:available)
Watchdog Reaction         :reset (watchdog reaction:reset)
Break Signal              :on (break signal:non-send)
Autoboot(Guest Domain)    :on
Elastic Mode              :on
IOreconfigure             :true
CPU Mode                  :auto
PPAR DR                   :off
```

使用例 7 SPARC M12-2S で、PPAR-ID 0 の省電力動作を elastic に設定します。

```
XSCF> setpparmode -p 0 -m powermgmt_policy=elastic
Diagnostic Level          :max      -> -
Message Level             :normal   -> -
Alive Check               :on       -> -
Watchdog Reaction         :reset    -> -
Break Signal              :on       -> -
Autoboot(Guest Domain)    :on       -> -
Power Aware Dispatcher    :on       -> -
Power Management Policy   :disabled -> elastic
```

```
IOreconfigure            :true     -> -
CPU Mode                 :auto     -> -
PPAR DR                  :off      -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n]:y
configured.
Diagnostic Level         :max
Message Level            :normal
Alive Check              :on (alive check:available)
Watchdog Reaction        :reset (watchdog reaction:reset)
Break Signal             :on (break signal:non-send)
Autoboot(Guest Domain)   :on
Power Aware Dispatcher   :on
Power Management Policy  :elastic
IOreconfigure            :true
CPU Mode                 :auto
PPAR DR                  :off
```

使用例 8 SPARC M10-4S で、PPAR-ID 0 の IO バス再構成機能を無効に設定します。

```
XSCF> setpparmode -p 0 -m ioreconfigure=false
Diagnostic Level         :max      -> -
Message Level            :normal   -> -
Alive Check              :on       -> -
Watchdog Reaction        :reset    -> -
Break Signal             :on       -> -
Autoboot(Guest Domain)   :on       -> -
Elastic Mode             :off      -> -
IOreconfigure            :true     -> false
CPU Mode                 :auto     -> -
PPAR DR                  :off      -> -
The specified modes will be changed.
Continue? [y|n]:y
configured.
Diagnostic Level         :max
Message Level            :normal
Alive Check              :on (alive check:available)
Watchdog Reaction        :reset (watchdog reaction:reset)
Break Signal             :on (break signal:non-send)
Autoboot(Guest Domain)   :on
Elastic Mode             :off
IOreconfigure            :false
CPU Mode                 :auto
PPAR DR                  :off
```

使用例 9 SPARC M10-4S で、PPAR-ID 0 の PPAR DR 機能を有効に設定します。

```
XSCF> setpparmode -p 0 -m ppar_dr=on
Diagnostic Level         :max      -> -
Message Level            :normal   -> -
Alive Check              :on       -> -
Watchdog Reaction        :reset    -> -
Break Signal             :on       -> -
```

```
Autoboot(Guest Domain)   :on       -> -
Elastic Mode             :off      -> -
IOreconfigure            :true     -> -
CPU Mode                 :auto     -> -
PPAR DR                  :off      -> on
The specified modes will be changed.

Notice:
  Logical domain config_name will be set to "factory-default".

Continue? [y|n]:y
configured.
Diagnostic Level         :max
Message Level            :normal
Alive Check              :on (alive check:available)
Watchdog Reaction        :reset (watchdog reaction:reset)
Break Signal             :on (break signal:non-send)
Autoboot(Guest Domain)   :on
Elastic Mode             :on
IOreconfigure            :false
CPU Mode                 :auto
PPAR DR                  :on
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showpparmode(8)

名前

setpparparam - 制御ドメインの OpenBoot PROM 環境変数の強制書き換えおよびブートスクリプトの登録、削除を行います。

形式

setpparparam [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* use-nvramrc

setpparparam [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* security-mode

setpparparam [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* set-defaults

setpparparam [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* -s bootscript *value*

setpparparam [[-q] -{y|n}] -p *ppar_id* -s bootscript -r

setpparparam -h

説明

setpparparam は、制御ドメインの OpenBoot PROM 環境変数の強制書き換えおよびブートスクリプトの登録、削除を行うコマンドです。

以下の OpenBoot PROM 環境変数が設定できます。

use-nvramrc?	物理パーティション（PPAR）の起動または再起動時に NVRAM の内容を実行するかどうか
security-mode	ファームウェアのセキュリティレベルの設定

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, fieldeng	すべての物理パーティション（PPAR）に対して実行できます。
pparadm	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-p *ppar_id*	対象となる制御ドメインの PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。 **注 –** PPAR が停止している状態で設定します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

-r	設定されているブートスクリプトを削除します。
-s bootscript	ブートスクリプトの登録、削除を行います。*value* と一緒に指定すると *value* で指定された値がブートスクリプトとして登録されます。-r と一緒に指定すると登録されているブートスクリプトが削除されます。ブートスクリプトは 1 つだけ登録できます。ブートスクリプトを複数回登録した場合は、最後に登録したブートスクリプトだけが有効となります。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

use-nvramrc	制御ドメインの OpenBoot PROM 環境変数 use-nvramrc? を false に設定します。
security-mode	制御ドメインの OpenBoot PROM 環境変数 security-mode を none に設定します。
set-defaults	制御ドメインの OpenBoot PROM 環境変数を工場出荷時の状態に戻します。
value	登録するブートスクリプトを指定します。値は二重引用符 (") で囲んで入力します。254 文字以内で設定できます。複数の OpenBoot PROM 環境変数を指定する場合は、setenv コマンドごとに改行を入れてください。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- setpparparam は対象の PPAR の電源が切断された状態で実行してください。PPAR の電源が投入されている状態で実行するとエラーとなります。
- ブートスクリプトに setenv コマンドを登録して、OpenBoot PROM 環境変数を書き換えることができます。ただし、use-nvramrc? および security-mode は、ブートスクリプトによる書き換えの前に使用されるため、ブートスクリプトで書き換えを行っても効果がありません。
- setpparparam で設定した値は、次回 PPAR の電源が投入されたときにのみ有効です。次回より以降の電源投入時に再度 OpenBoot PROM 環境変数の強制書き換えおよびブートスクリプトの登録、削除を行う場合は、setpparparam で設定しなおしてください。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 の OpenBoot PROM 環境変数 use-nvramrc? を false に設定します。

```
XSCF> setpparparam -p 0 use-nvramrc
PPAR-ID of PPARs that will be affected:0
OpenBoot PROM variable use-nvramrc will be set to false.
Continue? [y|n] :
```

使用例 2 PPAR-ID 0 の OpenBoot PROM 環境変数 `security-mode` を `none` に設定します。

```
XSCF> setpparparam -p 0 security-mode
PPAR-ID of PPARs that will be affected:0
OpenBoot PROM variable security-mode will be set to none.
Continue? [y|n]:
```

使用例 3 PPAR-ID 0 の OpenBoot PROM 環境変数を工場出荷時の状態に初期化します。

```
XSCF> setpparparam -p 0 set-defaults
PPAR-ID of PPARs that will be affected:0
All OpenBoot PROM variables will be reset to original default values.
Continue? [y|n]:
```

使用例 4 PPAR-ID 1 の OpenBoot PROM 環境変数を工場出荷時の状態に初期化します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> setpparparam -q -y -p 1 set-defaults
```

使用例 5 PPAR-ID 0 のブートスクリプトを設定します。複数の環境変数を書き換える場合は s etenv コマンドごとに改行を入れ、全体を二重引用符（"）で囲んでください。

```
XSCF> setpparparam -p 0 -s bootscript "setenv auto-boot? true
setenv input-device virtual-console
setenv output-device virtual-console"
PPAR-ID of PPARs that will be affected:0
OpenBoot PROM variable bootscript will be changed.
Continue? [y|n]:
```

使用例 6 PPAR-ID 0 のブートスクリプトをクリアします。

```
XSCF> setpparparam -p 0 -s bootscript -r
PPAR-ID of PPARs that will be affected:0
OpenBoot PROM variable bootscript will be cleared.
Continue? [y|n]:
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpparmode(8), **showpparparam**(8)

名前

setprivileges - ユーザー権限を割り当てます。

形式

setprivileges *user* [*privileges*] [*pparprivilege* @ *ppars*]

setprivileges -h

説明

setprivileges は、XSCF ユーザーアカウントにユーザー権限を割り当てるコマンドです。

setprivileges で変更できるのは、XSCF のユーザー権限データだけです。1 つのユーザー権限に対して、最大 100 ユーザーアカウントを割り当てることができます。1 つのユーザーアカウントには、スペースで区切って、複数のユーザー権限を設定できます。ユーザー権限の一覧は、「オペランド」を参照してください。

pparop 権限、pparmgr 権限、pparadm 権限は、物理パーティション（PPAR）ごとに指定できるユーザー権限です。詳細は、「オペランド」および使用例 1 を参照してください。

ユーザー権限を指定しない場合、setprivileges は指定したユーザーアカウントの XSCF 上の権限データをすべて削除します。Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）へのユーザー権限の参照が有効になっている場合は、ユーザーアカウントの権限データが LDAP 内で参照されるようになります。

ユーザーアカウントに none が割り当てられた場合は、LDAP 内の権限データの内容にかかわらず、対象のユーザーアカウントには権限が与えられません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

pparprivilege@*ppars*

1 つまたは複数の PPAR に、pparadm 権限、pparmgr 権限、または pparop 権限を指定します。

pparprivilege には PPAR ごとに割り当てできるユーザー権限名を指定します。@*ppars* と一緒に指定します。以下のいずれかを指定できます。

pparadm	権限が与えられた PPAR に割り当てられている、ハードウェアに関するすべての操作（割り当て、割り当て解除、電源操作など）を実行できます。権限を与えられた PPAR に割り当てられている、ハードウェアの状態をすべて表示できます。権限を与えられた PPAR に関する、すべての操作を実行できます。権限を与えられた PPAR の、すべての状態を表示できます。
pparmgr	権限を与えられた PPAR の再起動、起動や停止を実行できます。権限を与えられた PPAR に割り当てられている、すべてのハードウェアの状態をすべて表示できます。権限を与えられた PPAR のすべての状態を表示できます。
pparop	この権限を持つ PPAR に割り当てられているすべてのハードウェアの状態をすべて表示できます。この権限を持つすべての PPAR の状態をすべて表示できます。
ppars	*pparprivilege* に対する適切な値に、@ 記号と *ppars* 記述子を付けて、1 つまたは複数の PPAR を指定します。 PPAR を指定するには、@ 記号の後ろに PPAR-ID を付けて使用します。 例 : pparadm@3-4 PPAR を範囲で指定する場合は、範囲に含まれる PPAR の始めと終わりを "-" で区切って指定します。 例 : pparadm@3-4 1 つの PPAR や PPAR 範囲を複数指定する場合は、カンマ（,）で区切ります。PPAR の指定が重複した場合はエラーとなります。 例 : pparadm@1-2,4

privileges

システム全体に影響するユーザー権限を指定します。以下のいずれかを指定できます。

auditadm	すべての監査状態と監査トレールを表示、設定できます。
auditop	すべての監査状態と監査トレールを表示できます。
fieldeng	保守作業者および当社技術員用に限定されているすべての操作を実行できます。
none	ユーザーに LDAP 内で権限が設定されている場合でも、ユーザー権限を必要とするサービスプロセッサに関する操作を一切実行できません。この権限を使用すると、サービスプロセッサおよび PPAR 上でそのような操作にアクセスすることを管理者が制限できます。
platadm	useradm 権限と auditadm 権限で実行できる内容を除いた、すべての XSCF の設定を実行できます。PPAR にハードウェアを割り当てたり、PPAR からハードウェアの割り当てを解除したりできます。PPAR と XSCF の電源に関する操作を実行できます。XSCF ユニットのフェイルオーバーに関する操作を実行できます。プラットフォームのすべての状態を表示できます。
platop	プラットフォームのすべての状態を表示できますが、変更はできません。
useradm	ユーザーアカウントの作成、削除、無効化、有効化ができます。ユーザーのパスワードとパスワードポリシーを変更できます。ユーザー権限を変更できます。

user

有効なユーザー名を指定します。

使用例

使用例 1 ユーザーアカウント（JSmith）に platadm 権限と PPAR-ID 1 から 4、および 6 に対して pparadm 権限を設定します。ます。

```
XSCF> setprivileges jsmith platadm pparadm@1-4,6,9
```

使用例 2 ユーザーアカウント（JSmith）に設定されているすべての権限を削除します。

```
XSCF> setprivileges jsmith none
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpasswordpolicy(8), **showuser**(8)

名前

setremotepwrmgmt - SPARC M12/M10 システムの電源連動機能（Remote Cabinet Interface over Lan : RCIL）に関する設定を行います。

形式

setremotepwrmgmt -c config [-V] [-u *user*] [-X *proxy* [-t *proxy_type*]] [-y|-n] *configuration_file*

setremotepwrmgmt -c enable [-y|-n]

setremotepwrmgmt -c disable [-y|-n]

setremotepwrmgmt -h

説明

setremotepwrmgmt は、電源連動機能に関する以下の設定を行うコマンドです。

- 電源連動グループの構築
- 電源連動グループの設定変更
- 電源連動グループの電源連動機能の無効
- 電源連動グループの電源連動機能の有効

電源連動機能を使用する場合は、事前に setpacketfilters(8) を使用して、IPMI ポートに対する IP パケットを有効に設定してください。IPMI サービスが無効になっていると、本コマンドが異常終了します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c config	電源連動グループの管理情報ファイルを読み込み、その設定をホストコントローラーに配信することで、電源連動グループの構築や設定変更を行います。電源を連動させる装置の初期設定、増設、減設、交換を行う場合に使用します。
-c disable	設定されているすべての電源連動グループの、電源連動機能を無効にします。電源を連動させる装置の保守開始時に利用します。
-c enable	設定されているすべての電源連動グループの、電源連動機能を有効にします。電源を連動させる装置の保守完了時に利用します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-t *proxy_type*	プロキシの種類を指定します。-X と一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。

-u *user*	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。
-v	詳細な情報を表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用します。
-X *proxy*	転送に使用するプロキシサーバを指定します。-t *proxy_type* を一緒に指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。*proxy* は *servername*:*port* の形式で指定します。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

configuration_file 設定に使用する電源連動グループの管理情報ファイルが存在する URL を指定します。

以下のような形式がサポートされています。

ファイルは絶対パスで指定します。

http://*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
https://*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
ftp://*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
file:///media/usb_msd/*absolute_path*/*file*

詳細説明

- setremotepwrmgmt の実行中には、同じグループ ID に対して setremotepwrmgmt を実行しないでください。
- 電源連動グループに追加する電源連動装置(ホストノード)が、他のグループに登録されていた場合は、clearremotepwrmgmt(8) を使用して、事前に、管理情報を削除してください。
- setremotepwrmgmt で-c config、-c enable および-c disable を実行する場合は、対象となる電源連動グループ内のすべての電源連動装置に対して、IPv4 形式のネットワークを設定し、常駐電源が投入された状態にしてください。
- 管理情報ファイルは CSV 型式としてください。管理情報ファイルのフォーマットは『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』を参照してください。
- 管理情報ファイルはグループごとに作成する必要があります。1 つの管理情報ファイルに複数のグループ ID が混在している場合はエラーとなります。
- 管理情報ファイルに情報の配信先へアクセスするためのパスワードが設定されておらず、かつデフォルトユーザーが指定されていない場合は、電源連動グループの情報を配信する段階でパスワードの入力を要求されます。
- 電源連動グループの初回構築時は、以下の手順で setremotepwrmgmt を実行してください。

  1. setremotepwrmgmt -c config を実行し、電源連動グループを構築します。

2. `setremotepwrmgmt -c enable` を実行し、構築した電源連動グループの電源連動機能を有効にします。

- すでに構築されている電源連動グループの更新時は、以下の手順で `setremotepwrmgmt` を実行してください。

1. `setremotepwrmgmt -c disable` を実行し、更新する電源連動グループの電源連動機能を無効にします。

2. `setremotepwrmgmt -c config` を実行し、電源連動グループの設定を更新します。

3. `setremotepwrmgmt -c enable` を実行し、更新した電源連動グループの電源連動機能を有効にします。

- `-c config` を指定した場合、対象の電源連動グループが構築済みで、かつ電源連動機能が `enable` の場合はエラーとなります。
- `-c enable` または `-c disable` を指定した場合、電源連動グループが 1 つも構築されていないと、エラーとなります。
- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

使用例

使用例 1 FTP サーバ上の管理情報ファイルを読み込んで電源連動グループ 1 を構築します。

```
XSCF> setremotepwrmgmt -c config ftp://dataserver/data/rpmgroup.1.conf
Download successful: 29184Byte at 1016.857KB/s
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a1

The following Remote power management group setting will be applied:
GroupID :01
NodeID NodeType    NodeIdentName                    PowerLinkage          Operation
------ ----------- -------------------------------- --------------------- -----------
001    Master HOST XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX Enable(Power-On Link)  IPMI
002    PwrLinkBox  XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX Enable                IPMI
003    Others      XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX Enable                IPMI
------ ----------- -------------------------------- --------------------- -----------

Continue? [y|n]: y
Enter password for user [xxx] on host [zz.zz.zz.zz]:
  :
The command completed successfully.
XSCF>
```

使用例 2 USB メモリ上の管理情報ファイルを読み込んで電源連動グループ 2 を構築します。

```
XSCF> setremotepwrmgmt -c config file:///media/usb_msd/path/rpmgroup.2.conf
Mounted USB device
Download successful: 29184Byte at 1016.857KB/s
Checking file...
MD5: e619e6dd367c888507427e58cdb8e0a1
```

```
The following Remote Power Management Group setting will be applied:
GroupID :02
NodeID NodeType    NodeIdentName                    PowerLinkage          Operation
------ ----------- -------------------------------- --------------------- -----------
001    Master HOST XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX Enable                IPMI
002    I/O         XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX Enable                IPMI
------ ----------- -------------------------------- --------------------- -----------

Continue? [y|n]: y
Enter password for user [xxx] on host [xx.xx.xx.xx]:
Enter password for user [xxx] on host [yy.yy.yy.yy]:
Enter password for user [xxx] on host [zz.zz.zz.zz]:
  :
The command completed successfully.
XSCF>
```

使用例 3 電源連動機能を有効にします。

```
XSCF> setremotepwrmgmt -c enable
Remote power management is enabled. Continue? [y|n]: y
The command completed successfully.
XSCF>
```

使用例 4 電源連動機能を無効にします。

```
XSCF> setremotepwrmgmt -c disable
Remote power management is disabled. Continue? [y|n]: y
The command completed successfully.
XSCF>
```

使用例 5 IPMI サービスが無効に設定されているため、オペレーションに失敗した場合

```
XSCF> setremotepwrmgmt -c config ftp://dataserver/data/
rpmgroup.1.conf
IPMI service is disabled. Please enable IPMI service by the
"setpacketfilters".
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

clearremotepwrmgmt(8), **getremotepwrmgmt**(8), **setpacketfilters**(8), **showremotepwrmgmt**(8)

名前

setremotestorage - リモートストレージへの接続を管理します。

形式

setremotestorage `-c config` *interface address* [`-m addr`] [`-g addr`]

setremotestorage `-c clear` *interface*

setremotestorage [[`-q`] `-{y|n}`] `-c attach` *interface target*

setremotestorage [[`-q`] `-{y|n}`] `-c detach` *interface*

setremotestorage `-h`

説明

`setremotestorage` は、XSCF-LAN を経由したリモートストレージへの接続を管理するコマンドです。

リモートストレージを使用する際は、通常、XSCF Web を使用して行います。

`setremotestorage` コマンドでは、XSCF Web 上でも操作できる以下の設定を行います。

- リモートストレージへの接続および切断
- スレーブ XSCF 経由でリモートストレージへアクセスするネットワークインターフェースの指定

XSCF Web または `setremotestorage` コマンドを使用してリモートストレージへの接続／切断を行う場合は、事前に以下の操作をしておく必要があります。

1. リモートストレージ選択画面である [XSCF Remote Storage Server] を起動する。
2. PC 側のドライブや ISO ファイルを選択する。
3. リモートストレージを起動する。

以上の操作終了後、XSCF Web または `setremotestorage` コマンドで、リモートストレージへの接続または切断を実施できます。

なお、1 つのリモートストレージへ接続する場合は、マスタ XSCF、スタンバイ XSCF、またはスレーブ XSCF のいずれか 1 つの XSCF-LAN のネットワークインターフェースしか使用できません。

また、スレーブ XSCF 経由でリモートストレージへ接続する場合は、リモートストレージ選択画面である [XSCF Remote Storage Server] を起動する前に、スレーブ XSCF の XSCF-LAN のネットワークインターフェースを設定しておく必要があります。

リモートストレージに関する操作の詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』の「4.6 リモートストレージを使用する」を参照してください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、`platadm` または `fieldeng` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-c config`
: スレーブ XSCF のネットワークインターフェースを設定します。たとえば BB#02 の筐体にリモートストレージを接続した場合は、*interface* に `bb#02-lan#0` または `bb#02-lan#1` を指定します。設定内容はリモートストレージへ接続する場合のみ使用されます。telnet や ssh などのサービスは利用できません。

  このオプションは SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 ではサポートされていません。

`-c clear`
: スレーブ XSCF のネットワークインターフェース設定を削除します。

  このオプションは SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 ではサポートされていません。

`-c attach`
: リモートストレージに接続します。

`-c detach`
: リモートストレージへの接続を切断します。

`-m addr`
: *interface* のネットマスクを設定します。0 〜 255 までの 4 組の整数値の間にピリオド（.）を付けて指定します。整数値はゼロサプレスで指定できます。

  省略した場合は、*address* で指定する IP アドレスによって、以下のネットマスクが設定されます。

  - 指定する IP アドレスがクラス A の場合（例 : 20.1.1.1）

    ネットマスク値 255.0.0.0 が設定されます。
  - 指定する IP アドレスがクラス B の場合（例 : 136.18.1.1）

    ネットマスク値 255.255.0.0 が設定されます。
  - 指定する IP アドレスがクラス C の場合（例 : 200.18.108.1）

    ネットマスク値 255.255.255.0 が設定されます。

`-g addr`
: リモートストレージ専用のデフォルトゲートウェイアドレスを指定します。0 〜 255 までの 4 組の整数値の間にピリオド（.）を付けて指定します。整数値はゼロサプレスで指定できます。省略した場合は、未設定となります。

  loopback アドレス（127.0.0.0/8）、ネットワークアドレス、およびブロードキャストアドレスを設定しないでください。

`-q`
: プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

`-y`
: プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

`-n`
: プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。

`-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

interface 設定するネットワークインターフェースを指定します。以下のいずれかを指定できます。

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合
  ```
  bb#00-lan#0    : BB#00-LAN#0
  bb#00-lan#1    : BB#00-LAN#1
  bb#01-lan#0    : BB#01-LAN#0
  bb#01-lan#1    : BB#01-LAN#1
   ...
  bb#14-lan#0    : BB#14-LAN#0
  bb#14-lan#1    : BB#14-LAN#1
  bb#15-lan#0    : BB#15-LAN#0
  bb#15-lan#1    : BB#15-LAN#1
  ```
- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合
  ```
  bb#00-lan#0    : BB#00-LAN#0
  bb#00-lan#1    : BB#00-LAN#1
  bb#01-lan#0    : BB#01-LAN#0
  bb#01-lan#1    : BB#01-LAN#1
  bb#02-lan#0    : BB#02-LAN#0
  bb#02-lan#1    : BB#02-LAN#1
  bb#03-lan#0    : BB#03-LAN#0
  bb#03-lan#1    : BB#03-LAN#1
  ```
  ただし、`-c config` または `-c clear` オプションの場合、bb#00 と bb#01 の *interface* は指定できません。
- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合
  ```
  bb#00-lan#0    : BB#00-LAN#0
  bb#00-lan#1    : BB#00-LAN#1
  ```

address スレーブ XSCF のネットワークインターフェースの IP アドレスを指定します。0 ～ 255 までの 4 組の整数値の間にピリオド（.）を付けて指定します。整数値はゼロサプレスで指定できます。

ただし、クラス D およびクラス E のアドレス（224.0.0.0 ～ 255.255.255.255）は指定できません。

target リモートストレージの IP アドレスまたはホスト名を指定します。

[XSCF Remote Storage Server] を起動した PC の IP アドレスまたはホスト名を指定します。

IP アドレスを指定する場合は、0 ～ 255 までの 4 組の整数値の間にピリオド（.）を付けて指定します。整数値はゼロサプレスで指定できます。

ホスト名は、DNS サーバによって名前解決可能である必要があります。

詳細説明

- スレーブ XSCF のネットワークインターフェースの IP アドレスに loopback アドレス（127.0.0.0/8）、ネットワークアドレス、またはブロードキャストアドレスを設定すると、実行条件違反が表示されます。
- スレーブ XSCF のネットワークインターフェースが以下の設定の場合、エラーになります。
  - マスタ XSCF・スタンバイ状態の XSCF・他のスレーブ XSCF のネットワークインターフェース、引き継ぎ IP アドレス、または SSCP リンクアドレスのいずれかの IP アドレスと重複している場合
  - 当該スレーブ XSCF の SSCP リンクアドレスのいずれかのサブネットと重複している場合
- `-m addr` で指定したネットマスク値が以下のどちらにもあてはまらない場合、エラーになります。
  - 最上位ビットのみ 1
  - 最上位ビットから 1 が連続している
- 1 つの SPARC M12/M10 筐体について、同時に接続できるリモートストレージは 1 つのみです。また、すでにリモートストレージに接続している場合、接続しているネットワークインターフェースに対して、`-c config`、`-c clear`、および `-c attach` は実行できません。リモートストレージへの接続を終了してから操作してください。
- リモートストレージの設定は、`setremotestorage` の実行と同時に反映されます。なお、XSCF を再起動した場合、スレーブ XSCF のネットワークインターフェース設定情報は保持されますが、リモートストレージへの接続は切断されます。

使用例

使用例 1 BB#02-LAN#00 のネットワークインターフェースを設定します。

```
XSCF> setremotestorage -c config bb#02-lan#0 10.26.147.222 -m
255.255.255.0 -g 10.26.147.1
```

使用例 2 SPARC M10-4S（クロスバーボックスなし）で、BB#00-LAN#0（マスタ

XSCF）のネットワーク情報を設定します。

```
XSCF> setremotestorage -c config bb#00-lan#0 10.26.147.220
Can not set network for Master or Standby BB.
```

使用例 3 マスタ XSCF を指定し、リモートストレージに接続します。

```
XSCF> setremotestorage -c attach bb#00-lan#0 10.20.43.26
Remote Storage Server will be attached. Continue? [y|n] :y
```

使用例 4 ネットワークインターフェース未設定のビルディングブロックを指定し、リモートストレージに接続します。確認のメッセージには、自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> setremotestorage -c attach bb#03-lan#0 remote-
server.example.com -y
Remote Storage Server will be attached. Continue? [y|n] :y
bb#03-lan#0 has not been configured for connection.
Please check the network settings.
```

使用例 5 リモートストレージに接続済みのネットワークインターフェースを指定して、リモートストレージへの接続を切断します。

```
XSCF> setremotestorage -c detach bb#02-lan#0
Remote Storage Server will be detached. Continue? [y|n] :y
```

使用例 6 リモートストレージに接続していないネットワークインターフェースを指定して、リモートストレージへの接続を切断します。確認のメッセージには、自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> setremotestorage -c detach bb#03-lan#0 -y
Remote Storage Server will be detached. Continue? [y|n] :y
```

使用例 7 BB#04-LAN#1 のリモートストレージ用ネットワークインターフェース設定情報を削除します。

```
XSCF> setremotestorage -c clear bb#04-lan#1
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork(8), **showremotestorage**(8)

名前

setroute - XSCF ネットワークインターフェースのルーティング情報を設定します。

形式

setroute -c {add | del} -n *address* [-m *address*] [-g *address*] *interface*

setroute -h

説明

setroute は、XSCF ネットワークインターフェースのルーティング情報を設定するコマンドです。

ルーティング情報は、ネットワークインターフェースごとに最大 8 個まで登録できます。8 個を超えた場合はエラーとなります。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c {add|del}　ルーティング情報に対する機能を指定します。以下のどちらかを指定できます。省略した場合はエラーとなります。

add	ルーティング情報を追加します。
del	ルーティング情報を削除します。

-g *address*　ルーティングで使用されるゲートウェイアドレスを指定します。*address* は 4 組の整数をピリオド（.）で区切った標準形式で指定します。たとえば *xxx.xxx.xxx.xxx* として、*xxx* には 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。

ループバックアドレス（127.0.0.0/8）、ネットワークアドレス、またはブロードキャストアドレスは指定できません。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-m` *address*	ルーティング情報の宛先となるネットマスクを指定します。*address* は 4 組の整数をピリオド（.）で区切った標準形式で指定します。たとえば *xxx.xxx.xxx.xxx* として、*xxx* には 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。ネットマスクを指定した場合、`-n` で指定したアドレスにネットマスクを適用したネットワークをルーティングの対象として設定します。

`-m` を省略した場合、または宛先となる IP アドレスが 0.0.0.0 以外のときにネットマスクに 0.0.0.0 を指定した場合は、`-n` で指定するアドレスによって、以下のネットマスクが設定されます。

- 指定するアドレスがクラス A の場合
  アドレスのホスト部（下位 24 ビット）が 0 の場合
  (例 :20.0.0.0)
  ネットマスク値 255.0.0.0 が設定されます。
  アドレスのホスト部（下位 24 ビット）が 0 以外の場合
  (例 :20.18.108.10)
  ネットマスク値 255.255.255.255 が設定されます。
- 指定するアドレスがクラス B の場合
  アドレスのホスト部（下位 16 ビット）が 0 の場合
  (例 :136.18.0.0)
  ネットマスク値 255.255.0.0 が設定されます。
  アドレスのホスト部（下位 16 ビット）が 0 以外の場合
  (例 :136.18.108.10)
  ネットマスク値 255.255.255.255 が設定されます。
- 指定するアドレスがクラス C の場合
  アドレスのホスト部（下位 8 ビット）が 0 の場合
  (例 :200.18.108.0)
  ネットマスク値 255.255.255.0 が設定されます。
  アドレスのホスト部（下位 8 ビット）が 0 以外の場合
  (例 :200.18.108.10)
  ネットマスク値 255.255.255.255 が設定されます。

`-n` で 0.0.0.0 を指定した場合は、`-m` に 0.0.0.0 を指定するか `-m` を省略してください。

`-n` *address*	ルーティング情報の宛先となる IP アドレスを指定します。*address* は 4 組の整数をピリオド（.）で区切った標準形式で指定します。たとえば *xxx.xxx.xxx.xxx* として、*xxx* には 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。

address に 0.0.0.0 を指定した場合は、デフォルトのルーティング情報が設定されます。ただし、クラス D、E アドレス（224.0.0.0 から 255.255.255.255）は指定できません。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

interface
設定するネットワークインターフェースを指定します。以下のいずれかを指定できます。

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

`xbbox#80-lan#0`	XBBOX#80-LAN#0
`xbbox#80-lan#1`	XBBOX#80-LAN#1
`xbbox#81-lan#0`	XBBOX#81-LAN#0
`xbbox#81-lan#1`	XBBOX#81-LAN#1

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

`bb#00-lan#0`	BB#00-LAN#0
`bb#00-lan#1`	BB#00-LAN#1
`bb#01-lan#0`	BB#01-LAN#0
`bb#01-lan#1`	BB#01-LAN#1

- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合

`bb#00-lan#0`	BB#00-LAN#0
`lan#0`	bb#00-lan#0 の省略形
`bb#01-lan#0`	BB#00-LAN#1
`lan#1`	bb#00-lan#1 の省略形

詳細説明

- 以下の場合、`setroute` はエラーとなります。
  - 8 個を超えてルーティングを設定しようとした場合
  - `-m` *addr* で指定されたネットマスクが、以下のいずれにもあてはまらない場合
    - 最上位ビットだけが 1
    - 最上位ビットからの 1 の繰り返し
    - すべてのビットが 0
  - SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 以外で引き継ぎ IP（`lan#0` または `lan#1`）にルーティング情報を設定した場合
- `setroute` で追加したルーティング情報のみ削除できます。
- ルーティング情報のゲートウェイアドレスに各 XSCF-LAN ネットワークに含まれないアドレスがあった場合、`applynetwork`(8) を実行するとエラーになります。
- ルーティング情報の宛先となるIPアドレスとSSCPリンクのサブネットが重複している場合、`applynetwork`(8) を実行するとエラーになります。
- 設定したルーティング情報を XSCF に反映させるには、`applynetwork`(8) を実行します。`applynetwork`(8) で XSCF に反映したら、`rebootxscf`(8) を使用して XSCF を再起動すると設定が完了します。
- `showroute`(8) を使用すると、現在設定されている XSCF ネットワークインターフェースのルーティング情報が確認できます。

使用例

使用例 1 XBBOX#80-LAN#0 に対して、宛先に 192.168.1.0、ネットマスク 255.255.255.0 としたルーティングを追加します。

```
XSCF> setroute -c add -n 192.168.1.0 -m 255.255.255.0 xbbox#80-lan#0
```

使用例 2 SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の BB#00-LAN#0 に対して、宛先を 192.168.1.0、ネットマスクを 255.255.255.0 としたルーティングを追加します。

```
XSCF> setroute -c add -n 192.168.1.0 -m 255.255.255.0 lan#0
```

使用例 3 XBBOX#80-LAN#1 に対して、宛先を 192.168.1.0、ゲートウェイを 192.168.1.1 としたルーティングを追加します。

```
XSCF> setroute -c add -n 192.168.1.0 -g 192.168.1.1 xbbox#80-lan#1
```

使用例 4 XBBOX#80-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.0、デフォルトのネットマスク（255.255.255.0）としたルーティングを追加します。

```
XSCF> setroute -c add -n 192.168.1.0 -m 255.255.255.0 xbbox#80-lan#1
```

使用例 5 XBBOX#80-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.0、デフォルトのネットマスク（255.255.255.0）としたルーティングを削除します。

```
XSCF> setroute -c del -n 192.168.1.0 -m 255.255.255.0 xbbox#80-lan#1
```

使用例 6 BB#00-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.4 としたルーティングを追加します。

```
XSCF> setroute -c add -n 192.168.1.4 bb#00-lan#1
```

使用例 7 BB#00-LAN#1 に対して、宛先 192.168.1.4 としたルーティングを削除します。

```
XSCF> setroute -c del -n 192.168.1.4 bb#00-lan#1
```

使用例 8 BB#00-LAN#1 に対して、デフォルトでゲートウェイを 192.168.10.1 としたルーティングを追加します。

```
XSCF> setroute -c add -n 0.0.0.0 -g 192.168.10.1 bb#00-lan#1
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

applynetwork(8), **rebootxscf**(8), **setsscp**(8), **showroute**(8)

名前

setservicetag - サービスタグを有効または無効にします。

形式

setservicetag -c {enable | disable} [-v]

setservicetag -h

説明

setservicetag はサービスタグを有効または無効にするコマンドです。

設定した内容は、rebootxscf(8) を使用して XSCF を再起動したあとに反映されます。サービスタグは、プラットフォーム、タイプ、シャーシシリアル番号など、プラットフォームをサポートするための情報を提供します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c enable	サービスタグを有効にします。
-c disable	サービスタグを無効にします。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-v	詳細な情報を表示します。

使用例

使用例 1 サービスタグを有効にします。

```
XSCF> setservicetag -c enable
Settings will take effect the next time the XSCF is rebooted.
```

使用例 2 サービスタグを無効にします。

```
XSCF> setservicetag -c disable
Settings will take effect the next time the XSCF is rebooted.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showservicetag(8)

名前

setsmtp - Simple Mail Transfer Protocol（SMTP）サービスを設定します。

形式

setsmtp [-v]

setsmtp [-s *variable*= *value*]...

setsmtp -h

説明

setsmtp は、SMTP サービスを設定するコマンドです。

オプションを指定しないで使用した場合、使用する SMTP 電子メールサーバ名、発信電子メールで使用するポート名と Reply-To アドレスを入力するよう求められます。ここで指定する電子メールアドレスが有効なものであることを確認してください。-s を指定すると、SMTP 設定値を非対話的にセットアップできます。

setsmtp を使用して電子メールサーバとポートを設定したあとは、setemailreport(8) で電子メールレポートを設定してテストメールを送信できるようになります。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h`
: 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-s` *variable=value*
: SMTPを設定します。*variable* には以下のいずれかを指定できます。

  `mailserver`

  IPアドレスまたはサーバ名を指定します。サーバ名を指定した場合は、名前解決ができるように設定する必要があります。

  `port`

  返信用のポートアドレスを指定します。

  `auth`

  認証方法を指定します。有効な値は以下のとおりです。
  `none`、`pop`、`smtp-auth`

  `user`

  SMTPメールサーバに対する認証情報となるユーザー名指定します。

  `password`

  SMTPメールサーバに対する認証情報となるパスワードを指定します。

  `replyaddress`

  返信アドレスを1つだけ指定します。`setsmtp` で使用できるメールアドレスの形式は詳細説明を参照してください。

  `popserver`

  IPアドレスまたはサーバ名を指定します。サーバ名を指定した場合は、名前解決ができるように設定する必要があります。

`-v`
: 詳細な情報を表示します。

詳細説明

- `showemailreport`(8) を使用すると、現在設定されている電子メールレポートのデータが確認できます。
- `setsmtp` で使用できるメールアドレスは、RFC5322の3.4.1. Addr-Spec Specificationを基準とした、以下の形式です。
  - local-partとdomainをアットマーク（@）で連結した「local-part@domain」の形式で、local-partは64文字以内、domainは255文字以内、またメールアドレス全体は256文字以内とします。

- local-part には以下の文字が使用できます。

  - abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

  - ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ

  - 0123456789

  - !#$%&'*+-/=?^_`{|}~.

  ドット（.）は local-part の先頭と末尾には使用できません。また、2 つ以上連続して使用できません。

- domain は構成要素となるラベルをドット（.）で連結した「ラベル 1. ラベル 2」の形式で指定します。

  ドット（.）は domain の先頭と末尾には使用できません。また、2 つ以上連続して使用できません。

- domain の構成要素であるラベルには以下の文字が使用できます。

  - abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

  - ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ

  - 0123456789

  - .-

  ハイフン（-）は ラベルの先頭には使用できません。

- replyaddress（返信アドレス）は 1 つだけ指定できます。複数の宛先は指定できません。

■ `showsmtp`(8) を使用すると、現在設定されている SMTP の情報が確認できます。

注 – 利用するメールサーバによっては、上記で定義された記号が利用できない場合があります。

注 – RFC5322 で定義されている以下の書式はサポートしていません。
3.2.1. Quoted Characters で定義されている quoted-pair
3.2.2. Folding White Space and Comments で定義されている CFWS, FWS, comment
3.2.4. Quoted Strings で定義されている quoted-string
3.4.1. Addr-Spec Specification で定義されている domain-literal
4 Obsolete Syntax で定義されている各種の廃止された書式

使用例

使用例 1 非対話型モードで、認証方法を指定せずに、メールサーバをセットアップします。

```
XSCF> setsmtp -s mailserver=10.4.1.1 -s auth=none
```

使用例 2 非対話型モードで、認証方法に POP 認証を指定してセットアップします。

```
XSCF> setsmtp -s auth=pop -s user=jsmith -s password=******
```

使用例 3 対話モードで、認証方法に SMTP 認証（SMTP-auth）を指定し、返信用ポートアドレスに 587 を指定してセットアップします。

```
XSCF> setsmtp
Mail Server [10.4.1.1]:
Port [25]: 587
Authentication Mechanism [none]: smtp-auth
 User Name []: jsmith
 Password []: ******
Reply Address [useradm@company.com]:
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setemailreport(8), **setnameserver**(8), **showsmtp**(8)

名前

setsnmp - SNMP エージェントを管理します。

形式

setsnmp enable [*mib_name*]

setsnmp disable [*mib_name*]

setsnmp addtraphost -t type -s *community-string* [-p *trap-port*] *traphost*

setsnmp remtraphost -t type [-s *community-string*] [-p *trap-port*] *traphost*

setsnmp addv3traphost -u *username* -r *authentication-protocol* {-n *engine_id* | -i} [-x *encryption-protocol*] [-a *authentication-password*] [-e *encryption-password*] [-p *trap-port*] *traphost*

setsnmp remv3traphost -u *username* [-p *trap-port*] *traphost*

setsnmp enablev1v2c *read-only-community-string*

setsnmp disablev1v2c

setsnmp [-l *system-location*] [-c *system-contact*] [-d *system-description*] [-p *agent-port*]

setsnmp default

setsnmp -h

説明

setsnmp は、SNMP エージェントの設定値を定義するだけでなく、SNMP エージェントを有効または無効にするコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c *system-contact*	エージェントのシステムの連絡先を指定します。
-d *system-description*	エージェントのシステムの説明を指定します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-l *system-location*	エージェントのシステムの場所を指定します。
-p *agent-port*	エージェントのリスニングポートを指定します。デフォルトは 161 です。
-s *community-string*	SNMP v1 エージェントと v2 エージェントへのアクセスを制御するパスワードに似た働きをします。インターセプト可能なプレーンテキスト文字列です。パスワード暗号化と非可視性には、addv3traphost を使用します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

`addtraphost`

SNMP エージェントから目的のホストへの、選択されたタイプのトラップの送信を有効にします。*trap-port* を指定しない場合、デフォルトは 162 です。コミュニティーストリングは必須です。

`addtraphost` には以下のオプションとオペランドがあります。

`-p` *trap-port*
: トラップポートの ID を指定します。デフォルト値は 162 です。

`-s` *community-string*
: SNMP v1 エージェントと v2 エージェントへのアクセスを制御するパスワードに似た働きをします。インターセプト可能なプレーンテキスト文字列です。パスワード暗号化と非可視性には、`addv3traphost` を使用します。

`-t` *type*
: トラップのタイプを指定します。有効なトラップのタイプは以下のとおりです。

- `v1` = エージェントは SNMPv1 トラップを送信します。
- `v2` = エージェントは SNMPv2 トラップを送信します。
- `inform` = エージェントは情報通知を送信します。

traphost トラップホスト名または IP アドレスを指定します。

`addv3traphost` SNMP エージェントから目的のホストへの、SNMPv3 トラップの送信または通知を有効にします。認証プロトコルを選択する必要があります。有効なプロトコルは以下のとおりです。

`MD5` = 認証に Message Digest 5（MD5）アルゴリズムを使用します。

`SHA` = 認証に Secure Hash Algorithm（SHA）を使用します。

暗号化プロトコルを選択する必要があります。有効なプロトコルは以下のとおりです。省略した場合は、Data Encryption Standard（DES）が設定されます。

`DES` = 暗号化に Data Encryption Standard （DES）を使用します。

`AES` = 暗号化に Advanced Encryption Standard （AES）を使用します。

パスワードオプションを使用しない場合、パスワードを入力するように求められます。パスワードは読み取られますが、画面にエコーされません。

`addv3traphost` には以下のオプションとオペランドがあります。

`-a` *authentication-password*
認証パスワードを設定します。8 文字以上である必要があります。

`-e` *encryption-password*
暗号化パスワードを設定します。8 文字以上である必要があります。

`-i`
受信側のホストに肯定応答を要求します。

`-n` *engine_id*
トラップを送信するローカルエージェントの ID を設定します。ローカル SNMP エージェントのエンジン ID を指定できますが、これを指定しない場合でも、受信側のホストから期待されるエンジン ID と一致している必要があります。「0x」で始まり、偶数の 16 進文字で構成されている必要があります。そうでない場合、エラーになります。

`-p` *trap-port*
トラップポートの ID を指定します。デフォルト値は 162 です。

`-r` *authentication-protocol*
認証プロトコルを設定します。

`-u` *username*
ユーザー名を指定します。

`-x` *encryption-protocol*
暗号化プロトコルを指定します。

traphost
トラップホスト名または IP アドレスを指定します。

`default` SNMP エージェントを停止し、SNMP を工場出荷時の設定に戻します。このオペランドを使用したあとは、SNMP エージェントを再起動する前に、SNMP を再構成する必要があります。

`disable` 単独で使用される場合、SNMP エージェントを停止します。

オプションの *mib_name* の値 `ALL` と一緒に使用される場合、SNMP エージェントを停止します。

オプションの *mib_name* の `ALL` 以外の値と一緒に使用される場合、対象 MIB モジュールのサポートを削除します。別の MIB モジュールのサポートが維持されている場合、SNMP エージェントは有効のままです。両方の MIB モジュールのサポートが削除されると、SNMP エージェントは無効になり、停止します。*mib_name* は一度に 1 つだけ指定できます。

mib_name
無効にする MIB モジュールの名前です。有効な MIB モジュールは以下のとおりです。

- `SP_MIB` = XSCF 拡張 MIB
- `ALL` = この一覧内のすべての MIB モジュール

`disablev1v2c` SNMPv1 または SNMPv2c を使用した SNMP エージェントの通信を無効にします。これらのバージョンを使用した SNMP 通信は安全ではありません。

`enable` 単独で使用される場合、すべての MIB モジュールをサポートする SNMP エージェントを有効にします。

オプションの *mib_name* の値 `ALL` と一緒に使用される場合、すべての MIB モジュールをサポートする SNMP エージェントをアクティブにします。

オプションの *mib_name* の `ALL` 以外の値と一緒に使用される場合、対象 MIB モジュールのサポートを追加し、必要に応じて SNMP エージェントを有効にします。*mib_name* は一度に 1 つだけ指定できます。

mib_name
有効にする MIB モジュールの名前です。指定できる MIB モジュールは以下のとおりです。

- `SP_MIB` = XSCF 拡張 MIB
- `ALL` = この一覧内のすべての MIB モジュール

`enablev1v2c` SNMPv1 または SNMPv2c を使用した SNMP エージェントの通信を有効にします。これらのバージョンを使用した SNMP 通信は安全ではありません。したがって、エージェントはデフォルトで SNMPv3 を実行します。このエージェントは読み取り専用です。唯一要求されるコミュニティーストリングは読み取り専用です。

`remtraphost` SNMP エージェントから目的のホストへの、選択されたタイプのトラップの送信を無効にします。`remtraphost` には以下のオプションとオペランドがあります。

`-p` *trap-port*
: トラップポートの ID を指定します。省略した場合は、すべてのトラップポートの ID を指定したとみなされます。

`-s` *community-string*
: コミュニティーストリングを指定します。省略した場合は、すべてのコミュニティーストリングを指定したとみなされます。

`-t` *type*
: トラップのタイプを指定します。有効なトラップのタイプは以下のとおりです。

- `v1` = エージェントは SNMPv1 トラップを送信します。
- `v2` = エージェントは SNMPv2 トラップを送信します。
- `inform` = エージェントは情報通知を送信します。

traphost
: トラップホスト名または IP アドレスを指定します。

`remv3traphost` SNMP エージェントから目的のホストへの、SNMPv3 トラップの送信を無効にします。`remv3traphost` には以下のオプションとオペランドがあります。

`-u` *username*
: ユーザー名を指定します。

`-p` *trap-port*
: トラップポートの ID を指定します。省略した場合は、すべてのトラップポートの ID を指定したとみなされます。

traphost
: トラップホスト名または IP アドレスを指定します。

詳細説明

- 以下の 3 コマンドを実行して登録されたすべてのエントリーの文字数が 8000 文字を超える場合、新たにトラップホストを登録することはできません。
  - `setsnmp`(8) で登録されたトラップホスト
  - `setsnmpusm`(8) で登録されたユーザー

  - setsnmpvacm(8) で登録されたグループ、ビュー、およびアクセス
- showsnmp(8)、showsnmpusm(8) および showsnmpvacm(8) を使用すると、現在設定されている SNMP エージェント情報が確認できます。
- コミュニティーストリングは最大 64 文字です。また、以下の文字が使用できます。
  - abcdefghijklmnopqrstuvwxyz
  - ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ
  - 0123456789
  - !"#$%&'()=-~^|¥@`[;+:*}],<.>/_{?

使用例

使用例 1 システム情報を設定します。

```
XSCF> setsnmp -l sandiego -c username@company.com -d ff1
```

使用例 2 パスワードオプションを使用して SNMPv3 トラップホストを設定します。

```
XSCF> setsnmp addv3traphost -u jsmith -n 0x### -r SHA -a xxxxxxxx
-e yyyyyyyy fiche
```

使用例 3 パスワードオプションを使用しないで SNMPv3 トラップホストを設定します。

```
XSCF> setsnmp addv3traphost -u bob -i -r SHA fiche
Enter the trap authentication passphrase:
Enter the trap encryption passphrase:
```

使用例 4 SNMP エージェントを有効にします。

```
XSCF> setsnmp enable SP_MIB
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showsnmp(8)

名前

setsnmpusm - SNMPv3 エージェントの User-based Security Model（USM）設定します。

形式

setsnmpusm `create -a` *authentication_protocol* [`-x` *encryption-protocol*] [`-p` *authentication_password*] [`-e` *encyrption_password*] *user*

setsnmpusm `delete` *user*

setsnmpusm `clone -u` *clone_user* *user*

setsnmpusm `passwd` [`-c` {`auth`|`encrypt`}] [`-o` *old_password*] [`-n` *new_password*] *user*

setsnmpusm `-h`

説明

`setsnmpusm` は、SNMP エージェントの USM を設定するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、`platadm` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

`clone` 指定したユーザーが、指定した *clone_user* と同じ設定で、以降の SNMP 通信でエージェントに認識されるようにします。

`-u` *clone_user*	クローンを作成するユーザー名を指定します。
user	*clone_user* のクローンを作成するための別のユーザー名を指定します。

`create`

指定した設定で、以降の SNMP 通信でエージェントに認識されるユーザーを作成します。`-e` または `-p` を指定しないで使用する場合、パスワードを求めるプロンプトが表示され、パスワードが読み取られますが、画面にはエコーされません。`setsnmpusm` では SNMP 通信で使用される暗号化プロトコルとして Advanced Encryption Standard（AES）または Data Encryption Standard（DES）のどちらかを指定できます。省略した場合は、DES が設定されます。また、SNMP 通信で使用される認証プロトコルとして Message Digest 5（MD5）アルゴリズムまたは Secure Hash Algorithm（SHA）のどちらかを指定できます。

user

ユーザー名を指定します。

`-a` *authentication_protocol*

認証プロトコルを指定します。`MD5` または `SHA` のどちらかを指定できます。

`-e` *encryption_password*

暗号化パスワードを指定します。8 文字以上で指定します。

`-p` *authentication_password*

認証パスワードを指定します。8 文字以上で指定します。

`-x` *encryption-protocol*

暗号化プロトコルを設定します。`DES` または `AES` のどちらかを指定できます。省略した場合は `DES` が設定されます。

`delete`

指定したユーザーを以降の SNMP 通信でエージェントに認識されないようにします。

user ユーザー名を指定します。

`passwd` 指定したユーザーのパスワードを変更します。変更できるパスワードは、認証パスワードまたは暗号化パスワードのどちらかです。-c を指定していない場合は、両方になります。-c を指定していない場合、認証パスワードと暗号化パスワードが一致している必要があります。そうでない場合はエラーとなります。オプションを指定しない場合、パスワードを求めるプロンプトが表示されます。パスワードは読み取られますが、画面には表示されません。

-c auth|encrypt

変更するパスワードを指定します。認証パスワードの場合は auth、暗号化パスワードの場合は encrypt を指定します。

-n *new_password*

新しいパスワードを指定します。8 文字以上で指定します。

-o *old_password*

古いパスワードを指定します。

user

ユーザー名を指定します。

詳細説明

以下の 3 コマンドを実行して登録されたすべてのエントリーの文字数が 8000 文字を超える場合、新たにユーザーを登録することはできません。

- setsnmp(8) で登録されたトラップホスト
- setsnmpusm(8) で登録されたユーザー
- setsnmpvacm(8) で登録されたグループ、ビュー、およびアクセス

showsnmp(8)、showsnmpusm(8) および showsnmpvacm(8) を使用すると、現在設定されている SNMP エージェント情報が確認できます。

使用例

使用例 1 パスワードを指定してユーザーを追加します。

```
XSCF> setsnmpusm create -a SHA -p xxxxxxxx -e yyyyyyyy jsmith
```

使用例 2 パスワードを指定しないでユーザーを追加します。

```
XSCF> setsnmpusm create -a SHA bob
Enter the user authentication passphrase:
Enter the user encryption passphrase:
```

使用例 3 ユーザーのクローンを作成します。

```
XSCF> setsnmpusm clone -u sue joe
```

使用例 4 ユーザーを削除します。

```
XSCF> setsnmpusm delete joe
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showsnmpusm(8)

名前

setsnmpvacm - SNMPv3 エージェントの View-based Access Control Model（VACM）設定を変更します。

形式

setsnmpvacm `creategroup -u` *username groupname*

setsnmpvacm `deletegroup -u` *username groupname*

setsnmpvacm `createview -s` *OID_subtree* [`-e`] [`-m` *OID_Mask*] *viewname*

setsnmpvacm `deleteview -s` *OID_subtree viewname*

setsnmpvacm `createaccess -r` *read_viewname groupname*

setsnmpvacm `deleteaccess` *groupname*

setsnmpvacm `-h`

説明

`setsnmpvacm` は、SNMP エージェントの VACM を設定するコマンドです。

このコマンドを使用するには、SNMP の基礎知識が必要です。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、`platadm` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

`createaccess` 指定したグループの MIB ビューへのアクセスを設定します。

`-r` *read_viewname*	SNMP エージェントビューを指定します。
groupname	有効なグループ名を指定します。

`creategroup` 指定したユーザーのグループのビューアクセスをセットアップします。

`-u` *username*	有効なユーザー名を指定します。
groupname	有効なグループ名を指定します。

`createview`	SNMP エージェントに関するエクスポート済み MIB 情報のビューをセットアップします。このエージェントのビューアクセスは、読み取り専用に制限されています。ビューは MIB OID サブツリーによって識別され、OID マスクを使用してそのサブツリーの特定部分に制限することができます。

`-e`	除外するビューを指定します。デフォルトは、含めるビューです。
`-m` *OID_Mask*	有効な OID サブツリーマスクを指定します。デフォルトでは、マスクは `ff`（サブツリー全体）です。
`-s` *OID_subtree*	MIB OID サブツリーを指定します。MIB ツリー全体において、値は `.1` で始まります。
viewname	有効なビュー名を指定します。

`deleteaccess`	アクセスエントリーを削除します。

groupname	有効なグループ名を指定します。

`deletegroup`	グループを削除します。

`-u` *username*	有効なユーザー名を指定します。
groupname	有効なグループ名を指定します。

`deleteview`	ビューを削除します。

`-s` *OID_subtree*	MIB OID サブツリーを指定します。MIB ツリー全体において、値は `.1` で始まります。
viewname	有効なビュー名を指定します。

詳細説明

以下の 3 コマンドを実行して登録されたすべてのエントリーの文字数が 8000 文字を超える場合、新たにグループ、ビュー、およびアクセスを登録することはできません。

- `setsnmp`(8) で登録されたトラップホスト
- `setsnmpusm`(8) で登録されたユーザー
- `setsnmpvacm`(8) で登録されたグループ、ビュー、およびアクセス

`showsnmp`(8)、`showsnmpusm`(8) および `showsnmpvacm`(8) を使用すると、現在設定されている SNMP エージェント情報が確認できます。

使用例

使用例 1 ビューアクセスのグループを作成します。

```
XSCF> setsnmpvacm creategroup -u jsmith admin
```

使用例 2 MIB 全体のビューを作成します。

```
XSCF> setsnmpvacm createview -s .1 all_view
```

使用例 3 サブツリーを除外したビューを作成します。

```
XSCF> setsnmpvacm createview -e -s .1.3.6.1.2.1.1 -m fe excl_view
```

使用例 4 MIB ビューへのアクセスを作成します。

```
XSCF> setsnmpvacm createaccess -r all admin
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showsnmpvacm(8)

名前 setsscp - サービスプロセッサ間通信プロトコル（SSCP）の IP アドレスを割り当てます。

形式

setsscp

setsscp [-x *xbbox_num*] [-n *bb_num*]-i *address* [[-m *netmask*]-N *network_id*]

setsscp -b *bb_id* -i *address* -N *network_id*

setsscp -c default

setsscp -r -b *bb_id* [-N *network_id*]

setsscp -h

説明

setsscp は、SSCP リンクに IP アドレスを割り当てるコマンドです。

setsscp は、初期設定にのみ使用することを目的としています。このコマンドを実行するときは、物理パーティション（PPAR）の電源を投入しないでください。

SSCP リンクのネットワークは、SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合には、以下の 3 つがあります。

- BB#00 から各 SPARC M12-2S/M10-4S の筐体間のネットワーク（ネットワーク ID 0）
- BB#01 から各 SPARC M12-2S/M10-4S の筐体間のネットワーク（ネットワーク ID 1）
- BB#00 と BB#01 間のネットワーク（ネットワーク ID 2）

SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合には、以下の 5 つがあります。

- XBBOX#80 から各 SPARC M12-2S/M10-4S の筐体間のネットワーク（ネットワーク ID 0）
- XBBOX#81 から各 SPARC M12-2S/M10-4S の筐体間のネットワーク（ネットワーク ID 1）
- XBBOX#80 から各クロスバーボックス間のネットワーク（ネットワーク ID 2）
- XBBOX#81 から各クロスバーボックス間のネットワーク（ネットワーク ID 3）
- XBBOX#80 と XBBOX#81 との間のネットワーク（ネットワーク ID 4）

注 – setsscp を使用して SSCP の IP アドレスを変更したあと、指定した IP アドレスを使用するためには、applynetwork(8) と rebootxscf(8) を実行する必要があります。また、SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 以外では、システムを構成するクロスバーボックスまたは SPARC M12-2S/M10-4S には必ず SSCP リンクの IP アドレスを設定しておく必要があります。

setsscp は SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 では使用できません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-b *bb_id*
: 対象の BB-ID を指定します。SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合には 0 から 3 まで、SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合には、SPARC M12-2S/M10-4S の指定として 0 から 15 まで、クロスバーボックス指定として 80 から 83 までの整数で指定できます。-i *address* と-N の組み合わせ、または-r と一緒に指定します。

-c *default*
: SSCP リンク全体をデフォルト設定に戻します。

-h
: 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-i *address*
: IP アドレスを IPv4 のドット付き 10 進表記で指定します。0 から 255 までの、4 組の整数値の間にピリオド（.）を付けて指定します。ただし、クラス D、E アドレス（224.0.0.0 ～ 255.255.255.255）は指定できません。整数値はゼロサプレスで指定できます。

  -m *netmask* と一緒に指定する場合は、システム内の SSCP リンクすべてのネットワークアドレスを指定します。

  -b *bb_id* と一緒に指定する場合は、SSCP で使用される各ネットワークでの個々の SPARC M12-2S/M10-4S またはクロスバーボックス固有の IP アドレスを指定します。

-m *netmask* システム内の SSCP リンクすべてのネットマスクアドレスを指定します。-i *address*、-N と一緒に指定します。

ネットマスクは 0 から 255 までの、4 組の整数値の間にピリオド（.）を付けて指定します。整数値はゼロサプレスで指定できます。

省略した場合は、以下のネットマスクが設定されます。

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合
  - -N で指定するネットワーク ID が 0 もしくは 1 の場合

    255.255.255.248 のネットマスク値が設定されます。
  - -N で指定するネットワーク ID が 2 の場合

    255.255.255.252 のネットマスク値が設定されます。
- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合
  - -N で指定するネットワーク ID が 0 または 1 の場合

    255.255.255.224 のネットマスク値が設定されます。
  - -N で指定するネットワーク ID が 2 または 3 の場合

    255.255.255.248 のネットマスク値が設定されます。
  - -N で指定するネットワーク ID が 4 の場合

    255.255.255.252 のネットマスク値が設定されます。

-N が指定されなかった場合には、指定されたネットマスク内を上記のネットマスクで自動的に分割して各ネットワークに順番に割り当てます。

-n *bb_num* 設定する SPARC M12-2S/M10-4S の数を指定します。SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合は 1 から 4 までの数値で指定できます。指定しなかった場合には指定可能な最大値が指定されます。SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合は 1 から 16 までの数値で指定できます。指定しなかった場合には 16 が指定されます。

-N *network_id* 設定対象とする SSCP リンクネットワークの ID を指定します。*network_id* には、SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合は 0 から 2 まで、SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合は 0 から 4 までの数値を指定します。省略された場合には、すべてのネットワークが指定されます。-b を-r なしで指定した場合には、省略することはできません。

-r -b *bb_id* と一緒に使用して、指定する SPARC M12-2S/M10-4S またはクロスバーボックスの IP アドレスを削除します。

`-x` *xbbox_num* 設定するクロスバーボックスの数を指定します。SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合は指定できません。SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合には、1、2、4 が指定できます。指定しなかった場合には指定可能な数値の最大値が指定されます。

詳細説明

- `setsscp` を一度も実行していない場合は SSCP リンクの IP アドレスとして、デフォルト値が設定されています。デフォルト値は以下のとおりです。
  - SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

    - ネットワーク ID#0（ネットマスク : 255.255.255.248）

BB#00	169.254.1.1
BB#01	169.254.1.2
BB#02	169.254.1.3
BB#03	169.254.1.4

- ネットワーク ID#1（ネットマスク : 255.255.255.248）

BB#00	169.254.1.9
BB#01	169.254.1.10
BB#02	169.254.1.11
BB#03	169.254.1.12

- ネットワーク ID#2（ネットマスク : 255.255.255.252）

BB#00	169.254.1.17
BB#01	169.254.1.18

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

  - ネットワーク ID#0（ネットマスク : 255.255.255.224）

XBBOX#80	169.254.1.1
BB#00	169.254.1.2
:	
BB#14	169.254.1.16
BB#15	169.254.1.17

- ネットワーク ID#1（ネットマスク : 255.255.255.224）

XBBOX#81	169.254.1.33
BB#00	169.254.1.34
:	
BB#14	169.254.1.48
BB#15	169.254.1.49

- ネットワーク ID#2（ネットマスク : 255.255.255.248）

XBBOX#80	169.254.1.65
XBBOX#81	169.254.1.66
XBBOX#82	169.254.1.67
XBBOX#83	169.254.1.68

- ネットワーク ID#3（ネットマスク : 255.255.255.248）

XBBOX#80	169.254.1.73
XBBOX#81	169.254.1.74
XBBOX#82	169.254.1.75
XBBOX#83	169.254.1.76

- ネットワーク ID#4（ネットマスク : 255.255.255.252）

XBBOX#80	169.254.1.81
XBBOX#81	169.254.1.82

- `setsscp`を何も指定しないで実行すると対話モードとなり､SSCPのIPアドレスを順番に入力するためのプロンプトが表示されます。

  SSCP を以前に設定していた場合は、現在の設定が表示されます。表示された設定が適切な場合は、`Enter` キーを押すことでそのまま使用できます。

- すべての SSCP リンクで使用するためのネットワークアドレスは､`-i` *address* と`-m` *netmask* を使用して指定できます。この動作モードでは、クロスバーボックスおよび SPARC M12-2S/M10-4S 固有の各 SSCP リンクで使用される IP アドレスは、ネットワークアドレスによって示されるアドレス範囲の中から自動的に選択されます。割り当ては XBBOX#80 から順番に行われます。すべての SSCP リンクで使用するためのネットワークアドレスを一括で設定するには、SPARC M12-2S/

M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合 255.255.255.224 と同じか、それより大きなホスト部を持てるネットマスク、SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合、少なくとも 255.255.255.128 と同じか、それより大きなホスト部を持てるネットマスクが必要です。

- すべての SSCP リンクネットワークのアドレス空間として、SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合には、以下のような構成の最大 10 個の IP アドレスを使用します。

ネットワーク ID	最大構成に必要な IP の個数	最大構成に必要なネットマスク
0	4	255.255.255.248
1	4	255.255.255.248
2	2	255.255.255.252

SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合には、以下のような構成の最大 44 個の IP アドレスを使用します。

ネットワーク ID	最大構成に必要な IP の個数	最大構成に必要なネットマスク
0	17	255.255.255.224
1	17	255.255.255.224
2	4	255.255.255.248
3	4	255.255.255.248
4	2	255.255.255.252

- 個々のクロスバーボックスまたはSPARC M12-2S/M10-4S固有SSCPリンクのIPアドレスを、その他すべての SSCP アドレス設定値とは別に設定するには、`-b` *bb_id* と`-N` *network_id*、および`-i` *address* を使用します。
- ネットマスクの設定値を変更したい場合には、対話モードまたは一括設定を実行する必要があります。
- 事前に設定されたネットワークアドレスの範囲外にある値をクロスバーボックスまたは SPARC M12-2S/M10-4S 固有の SSCP リンクで使用されるアドレスとして設定した場合は、エラーが発生します。
- クロスバーボックスまたは SPARC M12-2S/M10-4S を増設する場合は、`addfru`(8) を実行する前に、SSCP リンクの IP アドレスを割り当てておく必要があります。
- 割り当てられた IP アドレスが他の SSCP リンクの IP アドレスと重複する場合、`applynetwork`(8) でエラーとなります。

- システムに組み込まれているクロスバーボックスまたはSPARC M12-2S/M10-4SのSSCPリンクのIPアドレスを削除する場合、`applynetwork`(8)を実行するとエラーとなります。削除対象となるクロスバーボックスまたはSPARC M12-2S/M10-4Sがシステムに組み込まれているかの判断は`applynetwork`(8)で行います。
- *address*にループバックアドレス（127.0.0.0/8）、ブロードキャストアドレス、クラスD、Eアドレス（224.0.0.0～255.255.255.25）を設定した場合、エラーになります。
- `-m addr`で指定したネットマスク値が、以下のどちらにもあてはまらない場合、エラーになります。
  - 最上位ビットのみ1
  - 最上位ビットから1が連続している
- SSCPネットワークと他のネットワークのサブネットが重複する場合、`applynetwork`(8)を実行するとエラーになる条件は以下です。
  - xbbox#80-lan#0, xbbox#80-lan#1, SSCPリンクのいずれかのサブネットが同じ場合
  - xbbox#81-lan#0, xbbox#81-lan#1, SSCPリンクのいずれかのサブネットが同じ場合
  - xbbox#80-lan#0, xbbox#81-lan#1, SSCPリンクのいずれかのサブネットが同じ場合
  - xbbox#81-lan#0, xbbox#80-lan#1, SSCPリンクのいずれかのサブネットが同じ場合
  - bb#00-lan#0, bb#00-lan#1, SSCPリンクのいずれかのサブネットが同じ場合
  - bb#01-lan#0, bb#01-lan#1, SSCPリンクのいずれかのサブネットが同じ場合
  - bb#00-lan#0, bb#01-lan#1, SSCPリンクのいずれかのサブネットが同じ場合
  - bb#01-lan#0, bb#00-lan#1, SSCPリンクのいずれかのサブネットが同じ場合
- ルーティング情報の宛先となるIPアドレスとSSCPリンクのサブネットが重複している場合、`applynetwork`(8)を実行するとエラーになります。
- 対話モードで最大構成台数未満のSPARC M12-2S/M10-4Sまたはクロスバーボックス数を指定した場合、設定を行わなかったSPARC M12-2S/M10-4Sまたはクロスバーボックスの以前設定されたIPアドレスは削除されます。
- 一括設定で最大構成台数未満のSPARC M12-2S/M10-4Sまたはクロスバーボックス数を指定した場合、設定を行わなかったSPARC M12-2S/M10-4Sまたはクロスバーボックスの以前設定されたIPアドレスは削除されます。

  ただし、SSCPリンクネットワークのIDを一緒に指定した場合、該当するSSCPリンクネットワークのSPARC M12-2S/M10-4Sまたはクロスバーボックスの以前設定されたIPアドレスのみ削除されます。
- `-N` *network_id*を指定する場合、`-b` *bb_id*、`-n` *bb_num*、`-x` *xbbox_num*は以下の範囲でなければエラーとなります。

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

-N *network_id*	-b *bb_id* の範囲	-n *bb_num* の範囲	-x *xbbox_num* の範囲
0	0 ～ 3	1 ～ 4	指定できません
1	0 ～ 3	1 ～ 4	指定できません
2	0 ～ 1	1 ～ 2	指定できません

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

-N *network_id*	-b *bb_id* の範囲	-n *bb_num* の範囲	-x *xbbox_num* の範囲
0	0 ～ 15, 80	1 ～ 16	1
1	0 ～ 15, 81	1 ～ 16	1
2	80 ～ 83	指定できません	2,4
3	80 ～ 83	指定できません	2,4
4	80 ～ 81	指定できません	2

使用例

注 – 以下の使用例に示す IP アドレスは、サンプルです。SSCP の IP アドレスを指定する場合は、ローカルエリアネットワーク（LAN）上で使用されていない IP アドレスを指定してください。SSCP の IP アドレスの詳細は『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』を参照してください。

使用例 1 SPARC M10-4S 8 台構成で対話モードを使用して SSCP リンクを設定します。

```
XSCF> setsscp
How many XB-Box[4] > 2[Enter]
How many BB[16] > 8[Enter]
SSCP network ID:0 address [169.254.1.0    ] > 10.1.1.0[Enter]
SSCP network ID:0 netmask [255.255.255.224] > 255.255.255.0[Enter]
xbbox#80-if#0 address [10.1.1.1       ] > [Enter]
bb#00-if#0 address [10.1.1.2       ] > [Enter]
bb#01-if#0 address [10.1.1.3       ] > [Enter]
bb#02-if#0 address [10.1.1.4       ] > [Enter]
bb#03-if#0 address [10.1.1.5       ] > [Enter]
bb#04-if#0 address [10.1.1.6       ] > [Enter]
bb#05-if#0 address [10.1.1.7       ] > [Enter]
bb#06-if#0 address [10.1.1.8       ] > [Enter]
bb#07-if#0 address [10.1.1.9       ] > [Enter]

SSCP network ID:1 address [169.254.1.32   ] > 10.2.1.0[Enter]
SSCP network ID:1 netmask [255.255.255.224] > 255.255.255.0[Enter]
xbbox#81-if#1 address [10.2.1.1       ] > [Enter]
bb#00-if#1 address [10.2.1.2       ] > [Enter]
bb#01-if#1 address [10.2.1.3       ] > [Enter]
bb#02-if#1 address [10.2.1.4       ] > [Enter]
bb#03-if#1 address [10.2.1.5       ] > [Enter]
```

```
bb#04-if#1 address [10.2.1.6       ] > [Enter]
bb#05-if#1 address [10.2.1.7       ] > 10.2.1.20[Enter]
bb#06-if#1 address [10.2.1.8       ] > [Enter]
bb#07-if#1 address [10.2.1.9       ] > [Enter]

SSCP network ID:2 address [169.254.1.64   ] > 169.254.1.32[Enter]
SSCP network ID:2 netmask [255.255.255.248] > [Enter]
xbbox#80-if#2 address [169.254.1.33   ] > [Enter]
xbbox#81-if#2 address [169.254.1.34   ] > [Enter]

SSCP network ID:3 address [169.254.1.72   ] > 10.3.1.0[Enter]
SSCP network ID:3 netmask [255.255.255.248] > [Enter]
xbbox#80-if#3 address [10.3.1.1       ] > [Enter]
xbbox#81-if#3 address [10.3.1.2       ] > [Enter]

SSCP network ID:4 address [169.254.1.80   ] > [Enter]
SSCP network ID:4 netmask [255.255.255.252] > [Enter]
xbbox#80-if#4 address [169.254.1.81   ] > [Enter]
xbbox#81-if#4 address [169.254.1.82   ] > [Enter]
```

使用例 2 SPARC M10-4S 16 台構成ですべての SSCP リンクに対してアドレスを割り当てます。(192.168.1.1 ～ 192.168.1.82 までの IP アドレスが割り当てられます。)

```
XSCF> setsscp -i 192.168.1.0 -x 4 -n 16
```

使用例 3 SPARC M10-4S 16 台構成でネットワーク ID 1 のすべての SSCP リンクに対してアドレスを割り当てます。

```
XSCF> setsscp -m 255.255.255.0 -i 192.168.3.0 -x 1 -n 16 -N 1
```

使用例 4 SPARC M10-4S 16 台構成ですべての SSCP リンクに対して IP アドレスを割り当てたあと、XBBOX#80 のネットワーク ID 0 の IP アドレスに 192.168.1.20 を割り当てます。

```
XSCF> setsscp -i 192.168.1.0 -x 4 -n 16
XSCF> setsscp -b 80 -N 0 -i 192.168.1.20
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addfru(8), **applynetwork**(8), **rebootxscf**(8), **setnetwork**(8), **setroute**(8), **showsscp**(8)

名前 setssh - XSCF ネットワークで使用する Secure Shell（SSH）サービスに関する設定を行います。

形式

setssh [[-q] -{y|n}] -c {enable|disable}

setssh -c addpubkey [-u *user_name*]

setssh -c delpubkey {-a | -s *line* } [-u *user_name*]

setssh [[-q] -{y|n}] -c genhostkey [-b *bits*]

setssh -h

説明

setssh は、XSCF ネットワークで使用する SSH サービスに関する設定を行うコマンドです。

XSCF では SSH2 だけサポートされます。また、XSCF が複数構成の場合は、スタンバイ状態の XSCF に対しても自動的に設定が反映されます。

以下の内容を設定できます。

- SSH サービスの開始または停止（デフォルトは停止）
- SSH サービスに必要なホスト鍵の生成

  2048 ビットまたは 4096 ビットのどちらかを指定できます。DSA ホスト鍵のサイズは 4096 ビットで固定です。
- ユーザー公開鍵の登録

  ユーザー公開鍵はユーザーアカウントごとに登録できます。また、1 ユーザーアカウントに対して、複数のユーザー公開鍵を登録できます。1 ユーザーアカウントあたり、改行を含んだ最大 8191 文字数分まで、ユーザー公開鍵を登録することができます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

- SSH サービスの開始または停止、ホスト鍵の生成 :
  platadm
- 他のユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵の登録または削除 :
  useradm
- 現在ログインしているユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵の登録または削除 :
  必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-a`	登録されているすべてのユーザー公開鍵を削除します。`-c delpubkey` と一緒に指定します。
`-b` *bits*	作成するホスト鍵のサイズを指定します。*bits* には 2048 または 4096 を指定できます。省略した場合は 2048 ビットとみなされます。
`-c addpubkey`	ユーザー公開鍵を登録します。
`-c delpubkey`	ユーザー公開鍵を削除します。
`-c genhostkey`	ホスト鍵を生成します。
`-c {enable|disable}`	SSH サービスに対する操作を指定します。以下のいずれかを指定できます。デフォルトは `disable` です。 `enable` SSH サービスを開始します。 `disable` SSH サービスを停止します。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-n`	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
`-q`	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
`-s` *line*	削除するユーザー公開鍵の番号を指定します。*line* には、`showssh -c pubkey` を実行したときに表示される番号を指定します。`-c delpubkey` と一緒に指定します。
`-u` *user_name*	ユーザー公開鍵を登録、削除するユーザーアカウント名を指定します。`-c addpubkey`" または`-c delpubkey` と一緒に指定します。`-u` を省略した場合は、現在ログインしているユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵が対象となります。
`-y`	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- SSH サービスの開始は、`setssh` 実行直後に反映され、サービスが起動されます。
- SSH サービスの停止は、`setssh` 実行直後に反映されます。サービス停止時に、開いている SSH セッションがある場合は切断されます。
- Active Directory または LDAP over SSL ユーザーは、ユーザー公開鍵を登録できません。ユーザー公開鍵による認証ではなく、パスワード認証を使用して XSCF に SSH に接続し、ログインしてください。

- ホスト鍵を生成する場合は、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を入力します。
- すでにホスト鍵が存在する場合にホスト鍵を生成すると、更新するかどうかのプロンプトが表示されます。更新する場合は「y」、中断する場合は「n」を入力します。
- setssh で一度に登録できるユーザー公開鍵は、1 つです。
- setssh 実行時のユーザー公開鍵の入力は、[Enter] キーを押してから [Ctrl] + [D] キー（EOF）を押して終了します。
- システムに複数の XSCF ユニットがある場合は、スタンバイ側の XSCF にも自動的に設定が反映されます。スタンバイ側の XSCF が故障しているときはエラーとなり、アクティブ側の XSCF にだけ設定が反映されます。
- showssh(8) を使用すると、現在設定されている SSH サービスの内容が確認できます。

使用例

使用例 1 SSH サービスを開始します。

```
XSCF> setssh -c enable
Continue? [y|n] :y
```

使用例 2 SSH サービスを開始します。プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> setssh -y -c enable
Continue? [y|n] :y
```

使用例 3 SSH サービスを開始します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> setssh -q -y -c enable
```

使用例 4 SSH サービスを停止します。

```
XSCF> setssh -c disable
Continue? [y|n] :y
```

使用例 5 ホスト鍵を生成します。

```
XSCF> setssh -c genhostkey
Host key create. Continue? [y|n] :y
```

使用例 6 ホスト鍵を生成します。プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> setssh -c genhostkey -y
Host key create. Continue? [y|n] :y
```

使用例 7 ホスト鍵を生成します。確認のメッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> setssh -c genhostkey -q -y
```

使用例 8 4096 ビットのホスト鍵を生成します。

```
XSCF> setssh -c genhostkey -b 4096
Host key create. Continue? [y|n] :y
```

使用例 9 ユーザー公開鍵を登録します。公開鍵の入力は、[Enter] キーを押してから [Ctrl] + [D] キー（EOF）を押して終了します。

```
XSCF> setssh -c addpubkey
Please input a public key:
ssh-rsa AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAzFh95SohrDgpnN7zFCJCVNy+jaZPTjNDxcid
QGbihYDCBttI4151Y0Sv85FJwDpSNHNKoVLMYLjtBmUMPbGgGVB61qskSv/
FeV44hefNCZMiXGItIIpK
P0nBK4XJpCFoFbPXNUHDw1rTD9icD5U/wRFGSRRxFI+Ub5oLRxN8+A8=
abcd@example.com
[Enter]
[Ctrl]+[D]
```

使用例 10 ユーザー名を指定してユーザー公開鍵を登録します。公開鍵の入力は、[Enter] キーを押してから [Ctrl] + [D] キー（EOF）を押して終了します。

```
XSCF> setssh -c addpubkey -u efgh
Please input a public key:
ssh-rsa AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAzFh95SohrDgpnN7zFCJCVNy+jaZPTjNDxcid
QGbihYDCBttI4151Y0Sv85FJwDpSNHNKoVLMYLjtBmUMPbGgGVB61qskSv/
FeV44hefNCZMiXGItIIpK
P0nBK4XJpCFoFbPXNUHDw1rTD9icD5U/wRFGSRRxFI+Ub5oLRxN8+A8=
efgh@example.com
[Enter]
[Ctrl]+[D]
```

使用例 11 公開鍵番号を指定して、ユーザー公開鍵を削除します。

```
XSCF> setssh -c delpubkey -s 1
 1  ssh-rsa
AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAzFh95SohrDgpnN7zFCJCVNy+jaZPTjNDxcid
QGbihYDCBttI4151Y0Sv85FJwDpSNHNKoVLMYLjtBmUMPbGgGVB61qskSv/
FeV44hefNCZMiXGItIIpK
P0nBK4XJpCFoFbPXNUHDw1rTD9icD5U/wRFGSRRxFI+Ub5oLRxN8+A8=
abcd@example.com
```

使用例 12 すべてのユーザー公開鍵を削除します。

```
XSCF> setssh -c delpubkey -a
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showssh(8)

名前

settelnet - XSCF ネットワークで使用する Telnet サービスを開始または停止します。

形式

settelnet [[-q] -{y|n}] -c {enable | disable}

settelnet -h

説明

settelnet は、XSCF ネットワークで使用する Telnet サービスを開始または停止するコマンドです。デフォルトでは、Telnet サービスは停止しています。

XSCF が複数で構成されている場合は、スタンバイ状態の XSCF に対しても自動的に設定が反映されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c {enable|disable}　Telnet サービスを開始または停止するかどうかを指定します。以下のいずれかを指定できます。デフォルトは disable です。

enable	Telnet サービスを開始します。
disable	Telnet サービスを停止します。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-n　プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。

-q　プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

詳細説明

- Telnet サービスを有効にすると、Telnet サービスがすぐに開始されます。
- Telnet サービスの停止は、settelnet 実行直後に反映されます。このとき、開いている Telnet セッションがある場合は切断されます。
- showtelnet(8) を使用すると、現在設定されている Telnet サービスの内容が確認できます。

使用例

使用例 1　Telnet サービスを開始します。

```
XSCF> settelnet -c enable
Continue? [y|n] :y
```

使用例 2　Telnet サービスを停止します。

```
XSCF> settelnet -c disable
Continue? [y|n] :y
```

使用例 3 Telnet サービスを停止します。プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> settelnet -y -c disable
Continue? [y|n] :y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showtelnet(8)

名前

settimezone - XSCF のタイムゾーンおよびサマータイムを設定します。

形式

settimezone `-c settz -s` *timezone*

settimezone `-c settz -a` [`-M`]

settimezone `-c adddst -b` *std* `-o` *offset* `-d` *dst* [`-p` *offset*] `-f` *date* [/*time*] `-t` *date* [/*time*]

settimezone `-c deldst -b` *std* `-o` *offset*

settimezone `-h`

説明

`settimezone` は、XSCF のタイムゾーンおよびサマータイムを設定するコマンドです。

標準で用意されているタイムゾーンは POSIX 規格に準拠しています。

XSCF のタイムゾーンのデフォルト値は、UTC（協定世界時）です。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、`platadm` または `fieldeng` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-a`	設定可能なタイムゾーンを一覧表示します。`-c settz` と一緒に指定します。
`-b` *std*	タイムゾーンの標準時間の略称を指定します。*std* はアルファベット 3 から 7 文字で指定します。RFC2822 に準拠した形式で指定できます。`-c adddst` または`-c deldst` と一緒に指定します。
`-c adddst`	手動でタイムゾーンとサマータイムを設定します。 `-b`、`-o`、`-d`、`-p`、`-f`、`-t` で指定したタイムゾーン情報に基づいてサマータイムが設定されます。手動でサマータイムを設定した場合、`-c settz` で設定されたタイムゾーン情報は無視されます。 `settimezone` 実行後 XSCF へログインしなおすと、設定内容が反映されます。
`-c deldst`	手動で設定したタイムゾーンとサマータイムを削除します。手動で設定されたサマータイムが削除されると、XSCF は`-c settz` で設定されたタイムゾーンで動作するようになります。 `settimezone` 実行後 XSCF へログインしなおすと、設定内容が反映されます。
`-c settz`	POSIX 規格に準拠したタイムゾーンを設定します。タイムゾーンは `settimezone` 実行直後に反映されます。

-d *dst* サマータイムゾーン名を指定します。*dst* はアルファベット 3 から 7 文字で指定します。RFC2822 に準拠した形式で指定できます。`-c adddst` と一緒に指定します。

-f *date* [/*time*] サマータイムの開始時間を指定します。`-c adddst` と一緒に指定します。`-t` の *date* と同じ形式で指定します。*date* は以下のいずれかの形式で指定できます。

J*n*

J*n*: サマータイムを開始する日にちを指定します。*n* は 1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で指定できます。うるう年の場合は 2 月 29 日はカウントされません。365 を指定した場合は、うるう年であっても 12 月 31 日となります。

M*m.w.d*

M*m*: サマータイムを開始する月を指定します。*m* は 1 から 12 までの数値で指定できます。
w: サマータイムを開始する週を指定します。第 1 週の場合は 1、最終週の場合は 5 として、1 から 5 までの数値で指定できます。
d: サマータイムを開始する曜日を指定します。日曜日の場合は 0、土曜日の場合は 6 として、0 から 6 までの数値で指定できます。

n

n: サマータイムを開始する日にちを指定します。1 月 2 日を 1 として、1 から 365 までの数値で指定できます。うるう年の場合は 2 月 29 日もカウントされます。

time には時刻を指定します。以下の形式で指定できます。

hh:mm:ss 「時間 : 分 : 秒」の形式で指定します。*hh* は 0 から 23、*mm* は 0 から 59、は 0 から 60 です。省略した場合は、02:00:00 となります。

-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-M テキストを 1 画面ずつ表示します。

-o *offset*

タイムゾーンとグリニッジ標準時（GMT）とのオフセットを指定します。`-c adddst` または`-c deldst` と一緒に指定します。*offset* は以下の形式で指定できます。

`GMT`{+|-}*hh*[:*mm*[:*ss*]]

`GMT`	グリニッジ標準時
{+|-}	標準時を GMT よりプラスの時刻に設定する場合は - を指定します。（グリニッジより東側の地域時刻に合わせる場合、オフセットはマイナス値になります。）標準時を GMT よりマイナスの時刻に設定する場合は + を指定します。（グリニッジより西側の地域時刻に合わせる場合、オフセットはプラス値になります。）
hh[:*mm*[:*ss*]]	オフセット時間を指定します。*hh* は `0` から `23`、*mm* と *ss* は `0` から `59` です。

-p *offset*

サマータイムとグリニッジ標準時（GMT）とのオフセットを指定します。`-c adddst` と一緒に指定します。省略した場合は、`-o` で指定したオフセット時間の 1 時間前となります。*offset* は以下の形式で指定できます。

`GMT`{+|-}*hh*[:*mm*[:*ss*]]

`GMT`	グリニッジ標準時
{+|-}	標準時を GMT よりプラスの時刻に設定する場合は - を指定します。（グリニッジより東側の地域時刻に合わせる場合、オフセットはマイナス値になります。）標準時を GMT よりマイナスの時刻に設定する場合は + を指定します。（グリニッジより西側の地域時刻に合わせる場合、オフセットはプラス値になります。）
hh[:*mm*[:*ss*]]	オフセット時間を指定します。*hh* は `0` から `23`、*mm* と *ss* は `0` から `59` です。

-s *timezone*

タイムゾーンを指定します。`-c settz` と一緒に指定します。*timezone* には`-a` で表示されるタイムゾーンのいずれかを指定できます。

-t *date* [/*time*]

サマータイムの終了時間を指定します。-t adddst と一緒に指定します。-f の *date* と同じ形式で指定します。*date* は以下のいずれかの形式で指定できます。

J*n*

J*n*: サマータイムを終了する日にちを指定します。*n* は 1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で指定できます。うるう年の場合は 2 月 29 日はカウントされません。365 を指定した場合は、うるう年であっても 12 月 31 日となります。

M*m.w.d*

M*m*: サマータイムを終了する月を指定します。*m* は 1 から 12 までの数値で指定できます。
w: サマータイムを終了する週を指定します。第 1 週の場合は 1、最終週の場合は 5 として、1 から 5 までの数値で指定できます。
d: サマータイムを終了する曜日を指定します。日曜日の場合は 0、土曜日の場合は 6 として、0 から 6 までの数値で指定できます。

n

n: サマータイムを終了する日にちを指定します。1 月 2 日を 1 として、1 から 365 までの数値で指定できます。うるう年の場合は 2 月 29 日もカウントされます。

time には時刻を指定します。以下の形式で指定できます。

hh:mm:ss　　" 時間 : 分 : 秒の形式 " で指定します。*hh* は 0 から 23、*mm* は 0 から 59、*ss* は 0 から 60 です。省略した場合は、02:00:00 となります。

詳細説明

- タイムゾーン、サマータイムに有効年数を指定することはできません。年ごとにサマータイムが変更される場合は、settimezone で指定しなおす必要があります。
- サマータイムを設定している場合は、タイムゾーンの影響は受けません。
- -c adddst でサマータイムを設定する場合、開始と終了を同じ形式で指定してください。
- -c adddst でサマータイムを設定する場合、以下のいずれかの場合はエラーとなります。
  - J*n* または *n* 形式で、開始と終了の期間が 14 日未満の場合
  - M*m.w.d* 形式で、開始と終了が同一の月で、かつ期間が 2 週間未満の場合
  - -o *offset* に -p *offset* より小さいオフセットを指定した場合
  - -o *offset* と -p *offset* オフセットの差が 24 時間より大きい場合

- settimezone で設定された標準時にオフセット時間を加算すると GMT になります。
- showtimezone(8) を使用すると、現在設定されているタイムゾーンが確認できます。
- -c adddst、-c deldst で変更されたサマータイム情報を反映するには XSCF をいったんログアウトして、再びログインしてください。

使用例

使用例 1 タイムゾーンを 「Asia/Tokyo」に設定します。

```
XSCF> settimezone -c settz -s Asia/Tokyo
Asia/Tokyo
```

使用例 2 設定可能なタイムゾーンを一覧表示します。

```
XSCF> settimezone -c settz -a
Africa/Abidjan
Africa/Accra
Africa/Addis_Ababa
Africa/Algiers
Africa/Asmara
Africa/Asmera
Africa/Bamako
Africa/Bangui
 .
 .
```

使用例 3 タイムゾーン略称を JST、GMT からのオフセットを +9、サマータイムゾーン名を JDT、サマータイムを 1 時間前、期間を 3 月最終日曜日 2:00（JST）から 10 月最終日曜日 2:00（JDT）までとして、サマータイム情報を設定します。

```
XSCF> settimezone -c adddst -b JST -o GMT-9 -d JDT -f M3.5.0 -t
M10.5.0
JST-9JDT,M3.5.0,M10.5.0
```

使用例 4 タイムゾーン略称を JST、GMT からのオフセットを +9、サマータイムゾーン名を JDT、サマータイムの GMT からのオフセットを +10 時間、期間を 4 月第 1 日曜日 0:00（JST）から 9 月第 1 日曜日 0:00（JDT）までとして、サマータイム情報を設定します。

```
XSCF> settimezone -c adddst -b JST -o GMT-9 -d JDT -p GMT-10 -f
M4.1.0/00:00:00 -t M9.1.0/00:00:00
JST-9JDT-10,M4.1.0/00:00:00,M9.1.0/00:00:00
```

使用例 5 現在設定されているサマータイム情報を削除します。

```
XSCF> settimezone -c deldst -b JST -o GMT-9
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setdate(8), **showdate**(8), **showtimezone**(8)

名前 setupfru - デバイスのハードウェアに関する設定を行います。

形式 **setupfru** [[-q] -{y|n}] -c *function= mode device location*

setupfru [-m {y|n}] *device location*

setupfru -h

説明 setupfru は、指定したデバイスのハードウェアに関する設定を行うコマンドです。

デバイスとして物理システムボード（PSB）を指定できます。

PSB を増設したあとシステムで使用できるようにするため、PSB に対して、以下の内容が設定できます。

メモリミラーモード

メモリをミラーリングするかどうかを設定します。メモリをミラーリングすると CPU 配下のメモリサイズが 1/2 になりますが、データの信頼性が高まります。

メモリミラーモードに設定するためには、対象となる PSB は以下のいずれかの状態である必要があります。

- 物理パーティション（PPAR）に組み込まれていない
- 組み込まれている PPAR の電源が投入されていない

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c *function=mode*	*function* には設定対象を指定します。以下のいずれかを指定できます。*device* に sb が指定されている場合は、指定した PSB に属するすべての CPU chip に対して設定を行います。*device* に cpu が指定されている場合は、指定された CPU chip のみに対して設定を行います。 このオプションが使用できるのは、SPARC M12-1/M12-2/M12-2S のみです。 mirror　メモリミラーモードに設定するかどうかを指定します。*mode* には、以下のいずれかを指定できます。初期値は「no」です。 yes: メモリミラーモードに設定します。 no: メモリミラーモードを解除します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-m {y|n}	CPU 配下のメモリをメモリミラーモードに設定するかどうかを指定します。メモリミラーモードに設定する場合は y、設定しない場合は n を指定します。-m を省略した場合は、前の設定が引き継がれます。 *device* に sb を指定した場合、指定した PSB 配下のすべての CPU に対して、設定が反映されます。*device* に cpu を指定した場合、指定した CPU のみに設定が反映されます。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」(no) と応答します。 このオプションが使用できるのは、SPARC M12-1/M12-2/M12-2S のみです。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。 このオプションが使用できるのは、SPARC M12-1/M12-2/M12-2S のみです。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。 このオプションが使用できるのは、SPARC M12-1/M12-2/M12-2S のみです。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

device 設定するデバイスを指定します。以下のどちらかを指定できます。

sb	PSB
cpu	PSB 内の CPU

location デバイスの搭載されている位置を指定します。

sb は以下の形式で指定します。

xx-y

xx	BB-ID の 00 から 15 までの整数で指定します。
y	0 で固定となります。

cpu は以下の形式で指定します。

xx-y-z

xx	BB-ID の 00 から 15 までの整数で指定します。
y	0 で固定となります。
z	CPU チップ番号を指定します。 SPARC M12-1/M10-1：0 SPARC M10-4/M10-4S：0 から 3 までの整数 SPARC M12-2/M12-2S：0 または 2

詳細説明

showfru(8) を使用すると、現在設定されているデバイスのハードウェアに関する内容が確認できます。

使用例

使用例 1 PSB 01-0 配下のすべての CPU をメモリミラーモードに設定します。

```
XSCF> setupfru -m y sb 01-0
```

使用例 2 PSB 02-0 CPU chip 1 の CPU をメモリミラーモードに設定します。

```
XSCF> setupfru -m y cpu 02-0-1
```

使用例 3 SPARC M12-2S で、PSB 01-0 配下のすべての CPU をメモリミラーモードに設定します。

```
XSCF> setupfru -c mirror=yes sb 01-0

Notice:
  - Logical domain config_name will be set to "factory-default".

Memory mirror mode setting will be changed, Continue? [y|n] :y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **deleteboard**(8), **setpcl**(8), **showboards**(8), **showpcl**(8), **showfru**(8)

名前

setvbootconfig - Oracle Solaris のベリファイドブートのポリシーと、ブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書の有効／無効を設定します。

形式

setvbootconfig -p *ppar_id* -i *index* [[-q] -{y|n}] -c {enable|disable}

setvbootconfig -p *ppar_id* [[-q] -{y|n}] -s *policy=value*

setvbootconfig -h

説明

setvbootconfig は、Oracle Solaris のベリファイドブートのポリシーや、ブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書の有効／無効を設定するコマンドです。

setvbootconfig で有効／無効を設定できる証明書は、addvbootcerts(8) でユーザーが物理パーティション（PPAR）に追加した証明書だけであり、システムにプレインストールされている証明書を無効に設定することはできません。設定された内容は、showvbootconfig(8) で確認できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のどちらかの権限が必要です。

platadm	すべての物理パーティション（PPAR）に対して実行できます。
pparadm	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c {enable|disable}	X.509 公開鍵証明書をベリファイドブートで使用する場合は enable を、使用しない場合は disable を指定します。
-i *index*	設定を変更する X.509 公開鍵証明書の管理番号を指定します。指定可能な管理番号は 1 ～ 5 です。管理番号は showvbootcerts(8) コマンドで確認できます。
-n	プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。
-p *ppar_id*	設定を変更する PPAR の PPAR-ID を指定します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

-s *policy=value*	ベリファイドブートのポリシーを設定します。*policy* と *value* をイコール "=" で区切った形式で 1 つだけ指定します。"=" の両側にスペースを含めてはなりません。

policy に指定できる値は、以下のとおりです。

boot_policy	unix および genunix モジュールのブート検証のポリシーを設定します。
module_policy	genunix のあとにロードする必要がある、その他のカーネルモジュールのブート検証のポリシーを設定します。

value に設定できる値は、以下のとおりです。

none	ブート検証を実施しません（デフォルト)。
warning	ブート検証を実施します。 検証対象をロードする前に検証を行います。検証に失敗しても、検証対象をロードし、ブート処理を継続します。 ブートブロックおよび unix の検証に失敗すると、検証に失敗した旨をシステムコンソールに記録します。システムログと XSCF のエラーログには記録しません。 genunix およびその他のカーネルモジュールの検証に失敗すると、検証に失敗した旨をシステムコンソールとシステムログに記録します。XSCF のエラーログには記録しません。
enforce	ブート検証を実施します。検証対象をロードする前に検証を行います。ブートブロックおよび unix の検証に失敗すると、ブート処理を停止します。その際、検証に失敗した旨をシステムコンソールと XSCF エラーログに記録します。システムログには記録しません。genunix の検証に失敗すると、ブート処理を停止します。その際、検証に失敗した旨を システムコンソールに記録します。XSCF のエラーログとシステムログには記録しません。その他のカーネルモジュールの検証に失敗すると、モジュールをロードせずにブートを継続します。その際、検証に失敗した旨をシステムコンソールとシステムログに記録します。XSCF のエラーログには記録しません。

-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

-h　　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1　PPAR-ID 0 に管理番号 1 番で登録されている X.509 公開鍵証明書を有効にします。

```
XSCF> setvbootconfig -p 0 -i 1 -c enable
Index 1, CUSTOM_CERT_1 on PPAR-ID 0 will be enabled,
Continue?[y|n]:
```

使用例 2　PPAR-ID 15 に管理番号 2 番で登録されている X.509 公開鍵証明書を無効にします。確認のメッセージには「y」と応答します。

```
XSCF> setvbootconfig -p 15 -i 2 -y -c disable
Index 2, CUSTOM_CERT_2 on PPAR-ID 15 will be disabled,
Continue?[y|n]:y
```

使用例 3　PPAR-ID 2 の「unix および genunix モジュールのブート検証のポリシー」を「warning」に設定します。

```
XSCF> setvbootconfig -p 2 -s boot_policy=warning
PPAR-ID 2 policies for Verified Boot will be changed,
Continue?[y|n]:
```

使用例 4　PPAR-ID 4 の「genunix のあとにロードする必要があるその他のカーネルモジュールのブート検証のポリシー」を「enforce」に設定します。

```
XSCF> setvbootconfig -p 4 -s module_policy=enforce
PPAR-ID 4 policies for Verified Boot will be changed,
Continue?[y|n]:
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0　　正常に終了したことを表します。

>0　　エラーが発生したことを表します。

関連項目

addvbootcerts(8), **deletevbootcerts**(8), **showvbootcerts**(8), **showvbootconfig**(8)

名前 showad - Active Directory の構成およびメッセージを表示します。

形式

showad

showad `cert` [-v] [-i *n*]

showad `log` [-M] [-C] [-S *start_record_number*] [-E *end_record_number*]

showad `log -f`

showad `group administrator` [-i *n*]

showad `group operator` [-i *n*]

showad `group custom` [-i *n*]

showad `userdomain` [-i *n*]

showad `dnslocatorquery` [-i *n*]

showad `defaultrole`

showad `server` [-i *n*]

showad `-h`

説明

`showad` は、Active Directory の構成および診断メッセージを表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、`useradm` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-f`	診断メッセージをリアルタイムで表示します。このオプションが使用されると、コマンドは終了しません。それぞれの診断メッセージが登録されるごとに表示されます。リアルタイム表示を停止するには、[Ctrl]+[C] キーを押します。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-i` *n*	インデックスマーカーを、1 から 5 の値で設定します。`-i` なし、または`-i` に何も値を設定せずに実行した場合、オペランドにより以下のように動作します。
	
	`group`、`userdomain`、`dnslocatorquery`
	　インデックスマーカーの 1 から 5 を逐次検索します。
	
	`cert`
	　プライマリ Active Directory サーバの CA 証明書を表示します。
	
	`server`
	　プライマリ Active Directory サーバの構成を表示します。

`-v`	詳細出力を指定します。`cert` オペランドとのみ併用され、CA 証明書全文を表示します。
`-C`	出力結果の末尾に、ログ内のレコード数を付加します。
`-E`	表示する最後のレコード番号を指定します。このとき、*end_record_number* には、ログ内のどのレコード番号でも指定することができます。ログ内のレコード数を取得するには、`-C` オプションを使用します。
`-M`	テキストを 1 画面ずつ表示します。
`-S`	表示する最初のレコード番号を指定します。このとき、*start_record_number* には、ログ内のどのレコード番号でも指定することができます。ログ内のレコード数を取得するには、`-C` オプションを使用します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

`cert`	現在の CA 証明書を表示します。 `-i` を省略した場合はプライマリ Active Directory サーバを表示します。`-i` を指定した場合は代替 Active Directory サーバを表示します。
`log`	診断メッセージを表示します。
`group administrator`	現在のグループ構成を表示します。
`group operator`	現在のグループ構成を表示します。
`group custom`	現在のグループ構成を表示します。
`userdomain`	現在の userdomain 設定を表示します。
`dnslocatorquery`	現在の DNS ロケータークエリー構成を表示します。

`defaultrole`	現在の defaultrole 設定を表示します。
`server`	現在の Active Directory サーバ設定を表示します。 `-i` を省略した場合はプライマリ Active Directory サーバを表示します。`-i` を指定した場合は代替 Active Directory サーバを表示します。

使用例

使用例 1 現在の active directory の状態を表示します。

```
XSCF> showad
dnslocatormode: disabled
expsearchmode: disabled
state: enabled
strictcertmode: disabled
timeout: 4
logdetail: none
```

使用例 2 プライマリ Active Directory サーバの CA 証明書を表示します。

```
XSCF> showad cert
Primary Server:
certstatus = certificate present
issuer = C=US, ST=California, L=San Diego, O=aCompany,
OU=System Group, CN=John User serial number = 0 (00000000)
subject = C=US, ST=California, L=San Diego, O=aCompany,
OU=System Group, CN=John User serial number = 0 (00000000)
valid from = Apr 18 05:38:36 2013 GMT
valid until = Apr 16 05:38:36 2023 GMT
version = 3 (0x02)
```

使用例 3 指定した診断メッセージを表示します。

```
XSCF> showad log -S 5 -E 10
Thu Sep 2 01:43 2013 (ActDir): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:44 2013 (ActDir): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:47 2013 (ActDir): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:51 2013 (ActDir): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:52 2013 (ActDir): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:55 2013 (ActDir): -error- authentication status: auth-ERROR
```

使用例 4 管理者グループ 3 の構成を表示します。

```
XSCF> showad group administrator -i 3
Administrator Group 3
 name: CN=pSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=company,DC=com
```

使用例 5 代替サーバ 1 の設定を表示します。ポート番号 0 は、Active Directory のデ

フォルトのポートが使用されていることを示します。

```
XSCF> showad server -i 1
Alternate Server  1
address: (none)
port: 0
```

使用例 6 DNS ロケータークエリー 1 の構成を表示します。

```
XSCF> showad dnslocatorquery -i 1
service 1: \ _ldap._tcp.gc._msdcs.<DOMAIN>.<PORT:3269>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setad(8)

名前

showaltitude - システムの高度を表示します。

形式

showaltitude

showaltitude -h

説明

showaltitude は、現在設定されているシステムの高度を表示するコマンドです。

オプションを指定しないで showaltitude を実行すると、装置の高度を表示します。表示される高度は、setaltitude(8) によって設定された値です。

高度は 100 メートル（m）単位で表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明

setaltitude(8) を使用すると、システムの高度を設定できます。

使用例

使用例 1 システムの高度を表示します。

```
XSCF> showaltitude
1000m
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setaltitude(8)

名前 showaudit - 監査システムの現在の状態を表示します。

形式

showaudit

showaudit [all]

showaudit [-a *users*] [-c { *classes* | all}] [-e { *events* | all}] [-g] [-m] [-p] [-s] [-t]

showaudit -h

説明

showaudit は、システム監査の現在の状態を表示します。オプションを指定しないで showaudit を実行すると、監査レコードの書き込みが有効であるか無効であるかが表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、auditadm または auditop 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a *users* 指定されたユーザーの監査レコード生成ポリシーを表示します。*users* は、有効なユーザー名のカンマ区切りリストです。

-c *classes* 指定された監査クラスの監査レコード生成ポリシーを表示します。*classes* は、監査クラスのカンマ区切りリストです。クラスは数値または名前によって指定できます。ACS_ の接頭語は省略できます。たとえば、監査に関連するイベントのクラスは、ACS_AUDIT、AUDIT、または 2 と表現できます。

有効なクラスは以下のとおりです。

all	すべてのクラス
ACS_SYSTEM(1)	システムに関連するイベント
ACS_WRITE(2)	状態を変更できるコマンド
ACS_READ(4)	現在の状態を表示するコマンド
ACS_LOGIN(8)	ログインに関連するイベント
ACS_AUDIT(16)	監査に関連するイベント
ACS_PPAR(32)	物理パーティション（PPAR）管理に関連するイベント
ACS_USER(64)	ユーザー管理に関連するイベント
ACS_PLATFORM(128)	プラットフォーム管理に関連するイベント
ACS_MODES(256)	モードに関連するイベント

-e *events*　指定された監査イベントの監査レコード生成ポリシーを表示します。*events* は、監査イベントのカンマ区切りリストです。イベントは数値または名前によって指定できます。AEV_ の接頭語は省略できます。たとえば、SSH ログインのイベントは、AEV_LOGIN_SSH、LOGIN_SSH、または 4 と表現できます。

有効なイベントの一覧は、showaudit -e all を参照してください。

-g　ユーザーのグローバル監査レコード生成ポリシーを表示します。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-m　ローカルの監査領域の使用量がしきい値に達した場合に送信される電子メールの宛先アドレスを表示します。

-p　監査トレールが全容量に達した場合に従うポリシーを表示します。

-s　以下の監査ステータスを表示します。

- ローカルの監査レコードによって消費されている領域
- ローカルの監査レコード用に残っている空き領域
- 監査トレールが全容量に達したために（前回の起動以降に）削除された監査レコードの数

-t　ローカルの領域の使用量に関して警告を発行するしきい値を表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

all　以下の情報を表示します。

- 監査トレールの書き込みがenableとdisableのどちらに設定されているか。この情報は、オプションを何も指定しないで showaudit を実行した場合に表示されるものと同じです。
- -a、-c all、-e all、-g、-m、-p、-s、-t を指定して showaudit を実行した場合に表示されるすべての情報。

使用例

使用例 1　監査ステータスを表示します。

```
XSCF> showaudit
Auditing: enabled
```

使用例 2　ログイン監査に関するすべてのクラス情報を表示します。

```
XSCF> showaudit -c LOGIN
Events:
AEV_LOGIN_BUI                       enabled
```

```
AEV_LOGIN_CONSOLE                enabled
AEV_LOGIN_SSH                    enabled
AEV_LOGIN_TELNET                 enabled
AEV_LOGOUT                       enabled
AEV_AUTHENTICATE                 enabled
```

使用例 3 すべてのイベント情報を表示します。

```
XSCF> showaudit -e all
Events:
AEV_AUDIT_START                  enabled
AEV_AUDIT_STOP                   enabled
AEV_ENTER_MODE                   enabled
AEV_EXIT_MODE                    enabled
AEV_LOGIN_BUI                    enabled
AEV_LOGIN_CONSOLE                enabled
AEV_LOGIN_SSH                    enabled
AEV_LOGIN_TELNET                 enabled
AEV_LOGOUT                       enabled
AEV_AUTHENTICATE                 enabled
AEV_addboard                     enabled
AEV_addfru                       enabled
[...]
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setaudit(8), **viewaudit**(8)

名前

showautologout - XSCF シェルのセッションタイムアウト時間を表示します。

形式

showautologout

showautologout -h

説明

showautologout は、XSCF シェルに設定されているセッションタイムアウト時間を表示するコマンドです。

セッションタイムアウト時間は分単位で表示されます。setautologout(8) でセッションタイムアウト時間を設定していない場合は、デフォルトで 10 分と設定されています。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, pparadm, pparmgr, pparop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 ログインシェルのセッションタイムアウト時間を表示します。(30 分に設定されている場合)

```
XSCF> showautologout
30min
```

使用例 2 ログインシェルのセッションタイムアウト時間を表示します。(デフォルトの場合)

```
XSCF> showautologout
10min
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setautologout(8)

名前

showbbstatus - SPARC M12/M10 システムの筐体の状態を表示します。

形式

showbbstatus

showbbstatus -h

説明

showbbstatus は、現在操作している SPARC M12/M10 システムの筐体の状態を表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 現在操作している筐体の状態を表示します。

```
XSCF> showbbstatus
BB#01 (Standby)
```

使用例 2 現在操作している筐体の状態を表示します（マスタ XSCF とスタンバイ状態の XSCF の同期が取れない場合）。

```
XSCF> showbbstatus
BB#00 (Master)
Cannot communicate with Standby XSCF. Please check Standby XSCF's state.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

showboards - 物理システムボード（PSB）の情報を表示します。

形式

showboards [-v] -a [-c sp]

showboards [-v] -p *ppar_id* [-c sp]

showboards [-v] *psb*

showboards -h

説明

showboards は、物理システムボード（PSB）の情報を表示するコマンドです。

物理システムボード（PSB）は、1 つのビルディングブロック（BB）を指します。

現在物理パーティション（PPAR）に組み込まれている、または割り当てられている PSB や、搭載されているすべての PSB の情報が表示されます。PPAR を指定した場合は、PPAR 構成情報（PCL）に定義されている情報だけ表示されます。

以下の情報が表示されます。

PSB

PSB 番号

以下の形式で表示されます。

xx-y:

xx	BB-ID の 00 から 15 までの整数
y	0 で固定となります

PPAR-ID

PPAR-ID

以下のいずれかが表示されます。

00-15	PSB が割り当てられている PPAR-ID
SP	PSB が PPAR に属しておらず、システムボードプール状態
Other	PSB が、アクセス権限を持つ PPAR に PCL 設定されていて、かつ、アクセス権限を持たない PPAR に属している状態

LSB

PPAR に定義されている論理システムボード（LSB）番号

00 から 15 までの整数で表示されます。

`Assignment`	PSB の PPAR への割り当て状態 以下のいずれかが表示されます。	
	`Unavailable`	PSB がシステムボードプール状態（PPAR に割り当てられていない状態）であり、未診断、診断中、診断異常のいずれかの状態。 未実装状態の PSB も `Unavailable` となります。
	`Available`	PSB がシステムボードプール状態であり、診断が正常に終了している状態
	`Assigned`	PSB が PPAR に割り当てられている状態
`Pwr`	PSB の電源投入状態 以下のどちらかが表示されます。	
	`n`	電源が切断されている状態
	`y`	電源が投入されている状態
`Conn`	PSB の PPAR 構成への接続状態 以下のどちらかが表示されます。	
	`n`	該当する PPAR へ接続されていない、またはシステムボードプール状態
	`y`	該当する PPAR へ接続されている状態
`Conf`	Oracle Solaris での稼働状態 以下のどちらかかが表示されます。	
	`n`	PSB が Oracle Solaris で稼働していない状態
	`y`	PSB が Oracle Solaris で稼働している状態
`Test`	PSB の初期診断の状態 以下のいずれかが表示されます。	
	`Unmount`	未搭載または故障により認識できない状態
	`Unknown`	診断されていない状態
	`Testing`	初期診断中
	`Passed`	初期診断が正常に終了した状態
	`Failed`	初期診断で異常が発生した状態 PSB は使用できない、または縮退している状態となります。

`Fault`	PSB の縮退の状態 以下のいずれかが表示されます。 `Normal` 正常な状態 `Degraded` 縮退部品がある状態。PSB は稼働できます。 `Faulted` 異常により PSB が稼働できない状態

`-v` と指定すると、PSB の詳細ステータスとして、以下の情報が表示されます。

`R`	PSB の PPAR への Dynamic Reconfiguration（DR）予約状態 `*` DR 処理が予約されている状態。PPAR がリセットされると、PSB が組み込まれたり、切り離されたりして、PPAR 構成が変更されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

`platadm`, `platop`, `fieldeng`	すべての PPAR、PSB に対して実行できます。
`pparadm`, `pparmgr`, `pparop`	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-a`	PPAR に組み込まれている、または割り当てられている PSB や搭載されたすべての PSB の状態を表示します。
`-c sp`	システムボードプールの PSB を表示します。システムボードプールとは、どの PPAR にも属さない状態のことです。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-p` *ppar_id*	PSB の状態を表示する PPAR-ID を指定します。指定した PPAR の PCL に定義されている情報だけ表示されます。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。
`-v`	PSB の詳細な情報を表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

psb 　表示する PSB 番号を指定します。以下の形式で指定します。

xx-y

xx	BB-ID の 00 から 15 までの整数
y	0 で固定となります

詳細説明

- PPAR を指定した場合は、PCL に定義されている PSB 情報だけ表示されます。
- PPAR を停止した状態で rebootxscf コマンドなどで XSCF を再起動すると、診断状態の表示が Unkown になりますが、PPAR を起動しなおすと Passed に戻ります。

使用例

使用例 1 　搭載されているすべての PSB の情報を表示します。

```
XSCF> showboards -a
PSB  PPAR-ID(LSB) Assignment  Pwr  Conn Conf Test    Fault
---- ------------ ----------- ---- ---- ---- ------- --------
00-0 00(00)       Assigned    y    y    y    Passed  Normal
01-0 SP           Unavailable n    n    n    Testing Normal
02-0 Other        Assigned    y    y    n    Passed  Degraded
03-0 SP           Unavailable n    n    n    Failed  Faulted
```

使用例 2 　搭載されているすべての PSB の詳細な情報を表示します。

```
XSCF> showboards -v -a
PSB  R PPAR-ID(LSB) Assignment  Pwr  Conn Conf Test    Fault
---- - ------------ ----------- ---- ---- ---- ------- --------
00-0 * 00(00)       Assigned    y    y    y    Passed  Normal
01-0   SP           Unavailable n    n    n    Testing Normal
02-0   Other        Assigned    y    y    n    Passed  Degraded
03-0   SP           Unavailable n    n    n    Failed  Faulted
```

使用例 3 　PSB 00-0 の情報を表示します。

```
XSCF> showboards 00-0
PSB  PPAR-ID(LSB) Assignment  Pwr  Conn Conf Test    Fault
---- ------------ ----------- ---- ---- ---- ------- --------
00-0 00(00)       Assigned    y    y    y    Passed  Normal
```

使用例 4 　PSB 00-0 の詳細な情報を表示します。

```
XSCF> showboards -v 00-0
PSB  R PPAR-ID(LSB) Assignment  Pwr  Conn Conf Test    Fault
---- - ------------ ----------- ---- ---- ---- ------- --------
00-0 * 00(00)       Assigned    y    y    y    Passed  Normal
```

使用例 5 システムボードプールの PSB を表示します。

```
XSCF> showboards -a -c sp
PSB  PPAR-ID(LSB) Assignment  Pwr  Conn Conf Test    Fault
---- ------------ ----------- ---- ---- ---- ------- --------
01-0 SP           Available   n    n    n    Testing Normal
03-0 SP           Unavailable n    n    n    Failed  Faulted
```

使用例 6 PPAR-ID 0 に定義されていて、システムボードプールの PSB を表示します。

```
XSCF> showboards -P 0 -c sp
PSB  PPAR-ID(LSB) Assignment  Pwr  Conn Conf Test    Fault
---- ------------ ----------- ---- ---- ---- ------- --------
01-0 SP           Available   n    n    n    Passed  Normal
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。

>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **deleteboard**(8), **setpcl**(8), **setupfru**(8), **showfru**(8), **showpcl**(8)

名前 showcod - CPU コア アクティベーションの登録および設定情報を表示します。

形式

showcod [-v] -s cpu

showcod [-v] -p *ppar_id*

showcod [-v] [-M]

showcod -h

説明

showcod は、CPU コア アクティベーションの登録および設定情報を表示するコマンドです。

CPU コア アクティベーションの登録および設定情報には、addcodactivation(8) で SPARC M12/M10 システムに登録した CPU コア アクティベーションの数、および setcod(8) で物理パーティション（PPAR）に設定した CPU コア アクティベーションの数が含まれます。

-p *ppar_id* を指定しないで、showcod を実行した場合は、すべての PPAR の CPU コア アクティベーション情報が表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-p *ppar_id*	PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。
-s cpu	CPU コア アクティベーション情報を表示します。
-v	詳細な情報を表示します。-v を指定した場合、CPU コア アクティベーションの内訳を表示します。

詳細説明

リソースの種類として、以下のパラメータが表示されます。

PROC	CPU コアリソース

使用例

使用例 1 すべての CPU コア アクティベーション情報を詳細表示します（`platadm` 権限または `platop` 権限を持っている場合)。

```
XSCF> showcod -v -s cpu
PROC Permits installed : 8 cores
PROC Permits assigned for PPAR 0: 4 [Permanent 4cores]
PROC Permits assigned for PPAR 1: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 2: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 3: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 4: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 5: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 6: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 7: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 8: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 9: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 10: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 11: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 12: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 13: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 14: 0 [Permanent 0cores]
PROC Permits assigned for PPAR 15: 0 [Permanent 0cores]
```

使用例 2 すべての CPU コア アクティベーション情報を表示します（PPAR-ID 1 に対して `pparadm`, `pparmgr`, `pparop` のいずれかの権限を持っている場合)。

```
XSCF> showcod
PROC Permits assigned for PPAR 1: 0
```

使用例 3 すべての CPU コア アクティベーション情報を詳細表示します (PPAR-ID 1 に対して `pparadm`, `pparmgr`, `pparop` のいずれかの権限を持っている場合)。

```
XSCF> showcod -v
PROC Permits assigned for PPAR 1: 0 [Permanent 0cores]
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addcodactivation(8), **deletecodactivation**(8), **setcod**(8), **showcodactivation**(8), **showcodactivationhistory**(8), **showcodusage**(8)

名前

showcodactivation - システムに追加した CPU コア アクティベーションキーの情報を表示します。

形式

showcodactivation [-r | -v] [-i *key-index*] [-M]

showcodactivation -h

説明

showcodactivation は、システムに追加した CPU コア アクティベーションキーの情報を表示するコマンドです。

何も指定しないで、showcodactivation を実行した場合は、現在の CPU コア アクティベーションキーの情報が表示されます。

注 – CPU コア アクティベーションキーの詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』を参照してください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または platop 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-i *key-index*	*Key-index* に指定した管理番号の CPU コア アクティベーションキーの情報を表示します。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-r	CPU コア アクティベーションキーの情報を、XSCF に保存されているインデックス情報（管理番号）と共に表示します。
-v	詳細な情報を表示します。CPU コア アクティベーションキー情報は表形式と生データ形式の両方が表示されます。

詳細説明

showcodactivation を使用すると、以下の情報が表示されます。

Index	CPU コア アクティベーションキーの XSCF での管理番号。
Description	リソース（プロセッサ）の種類。CPU コア アクティベーションには、PROC が表示されます。
Count	リソースに与えられている CPU コア アクティベーションの数。

使用例

使用例 1 SPARC M10-1 で、CPU コア アクティベーションキーの情報を表示します。

```
XSCF> showcodactivation
Index   Description Count
```

```
------- ----------- ------
      1 PROC            2
      2 PROC            2
```

使用例 2 SPARC M10-1 で、管理番号 2 の CPU コア アクティベーションキーの情報を生データ形式で表示します。

```
XSCF> showcodactivation -r -i 2
*Index2
Product: SPARC M10-1
SequenceNumber: 116
Cpu noExpiration 2
Text-Signature-SHA256-RSA2048:
SBxYBSmB32E1ctOidgWV09nGFnWKNtCJ5N3WSlowbRUYlVVySvjncfOrDNteFLzo
  :
  :
1TSgrjnee9FyEYITT+ddJQ==
```

使用例 3 SPARC M12-2S で、管理番号 2 の CPU コアアクティベーションキーの情報を生データ形式で表示します。

```
XSCF> showcodactivation -r -i 2
*Index2
Product: SPARC M12-2S
SequenceNumber: 116
Cpu noExpiration 1
Text-Signature-SHA256-RSA2048:
SBxYBSmB32E1ctOidgWV09nGFnWKNtCJ5N3WSlowbRUYlVVySvjncfOrDNteFLzo
  :
  :
1TSgrjnee9FyEYITT+ddJQ==
```

使用例 4 SPARC M10-1 で、CPU コア アクティベーションキーの情報を生データ形式で表示します。

```
XSCF> showcodactivation -r
Permanent Keys:
*Index1
Product: SPARC M10-1
SequenceNumber: 116
Cpu noExpiration 2
Text-Signature-SHA256-RSA2048:
SBxYBSmB32E1ctOidgWV09nGFnWKNtCJ5N3WSlowbRUYlVVySvjncfOrDNteFLzo
  :
  :
1TSgrjnee9FyEYITT+ddJQ==
*Index2
  :
  :
```

使用例 5 SPARC M12-2S で、CPU コアアクティベーションキーの情報を生データ形式

で表示します。

```
XSCF> showcodactivation -r
Permanent Keys:
*Index1
Product: SPARC M12-2S
SequenceNumber: 116
Cpu noExpiration 1
Text-Signature-SHA256-RSA2048:
SBxYBSmB32E1ctOidgWV09nGFnWKNtCJ5N3WSlowbRUYlVVySvjncfOrDNteFLzo
  :
  :
1TSgrjnee9FyEYITT+ddJQ==
*Index2
  :
  :
```

使用例 6 SPARC M10-1 で、CPU コア アクティベーションキーの情報を詳細に表示します。

```
XSCF> showcodactivation -v
Index   Description Count
------- ----------- ------
      1 PROC             2
Product SPARC M10-1
SequenceNumber: 116
Cpu noExpiration 2
Text-Signature-SHA256-RSA2048:
SBxYBSmB32E1ctOidgWV09nGFnWKNtCJ5N3WSlowbRUYlVVySvjncfOrDNteFLzo
  :
  :
1TSgrjnee9FyEYITT+ddJQ==
------- ----------- ------
      2 PROC             2
Product SPARC M10-1
SequenceNumber: 116
Cpu noExpiration 2
Text-Signature-SHA256-RSA2048:
SBxYBSmB32E1ctOidgWV09nGFnWKNtCJ5N3WSlowbRUYlVVySvjncfOrDNteFLzo
  :
  :
1TSgrjnee9FyEYITT+ddJQ==
```

使用例 7 SPARC M12-2S で、CPU コアアクティベーションキーの情報を詳細に表示します。

```
XSCF> showcodactivation -v
Index   Description Count
------- ----------- ------
      1 PROC             1
Product: SPARC M12-2S
SequenceNumber: 116
```

```
Cpu noExpiration 1
Text-Signature-SHA256-RSA2048:
SBxYBSmB32E1ctOidgWV09nGFnWKNtCJ5N3WSlowbRUYlVVySvjncfOrDNteFLzo
  :
  :
1TSgrjnee9FyEYITT+ddJQ==
------- ----------- ------
      2 PROC              1
Product: SPARC M12-2S
SequenceNumber: 117
Cpu noExpiration 1
Text-Signature-SHA256-RSA2048:
SBxYBSmB32E1ctOidgWV09nGFnWKNtCJ5N3WSlowbRUYlVVySvjncfOrDNteFLzo
  :
  :
1TSgrjnee9FyEYITT+ddJQ==
  :
  :
```

使用例 8 SPARC M10-1 で、管理番号 2 の CPU コア アクティベーションキーの情報を表示します。

```
XSCF> showcodactivation -i 2
Index   Description Count
------- ----------- ------
      2 PROC              2
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addcodactivation(8), **deletecodactivation**(8), **setcod**(8), **showcod**(8), **showcodactivationhistory**(8), **showcodusage**(8)

名前

showcodactivationhistory - CPU コア アクティベーションキーの追加と削除のログ（Capacity on Demand（CoD）ログ）を表示します。

形式

showcodactivationhistory [-M]

showcodactivationhistory [-V] -m *mail_address*

showcodactivationhistory [-V] [-u *user*] [-p *proxy* [-t *proxy_type*]] *target_url*

showcodactivationhistory -h

説明

showcodactivationhistory は、CoD ログ内の、CPU コア アクティベーションキーの追加と削除に関するレコードを表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-m *mail_address*	CoD ログの送信先となるメールアドレスを指定します。
-p *proxy*	転送に使用するプロキシサーバを指定します。-t *proxy_type* を指定しない場合、デフォルトのプロキシの種類は http です。*proxy* は *servername*:*port* の形式で指定します。
-t *proxy_type*	プロキシの種類を指定します。-p と一緒に指定します。http、socks4、socks5 のいずれかを指定できます。デフォルトは http です。
-u *user*	認証が必要となるリモート FTP または HTTP サーバにログインする場合の、ユーザー名を指定します。パスワードを入力するためのプロンプトが表示されます。127 文字以内で指定できます。
-V	詳細なネットワークアクティビティを表示します。ネットワークやサーバの問題を診断する場合に使用されます。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

target_url CoD ログの出力先となる URL を指定します。以下のような形式がサポートされています。

ファイルは絶対パスで指定します。

`http://`*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
`https://`*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
`ftp://`*server*[:*port*]/*absolute_path*/*file*
`file:///media/usb_msd/`*absolute_path*/*file*

使用例

使用例 1 CoD ログを出力します。

```
XSCF> showcodactivationhistory
11/30/2012 01:42:41PM PST: Report Generated SPARC M10-1 SN: 843a996d
10/02/2012 02:08:49PM PST: Activation history initialized: PROC 0 cores
10/15/2012 01:36:13PM PST: Capacity added: PROC 2 cores
10/15/2012 01:46:13PM PST: Capacity added: PROC 2 cores
11/07/2012 01:36:23PM PST: Capacity deleted: PROC 2 cores
11/27/2012 01:46:23PM PST: Configuration backup created: PROC 2 cores
11/27/2012 21:26:22PM PST: Configuration restored: PROC 2 cores
11/28/2012 01:37:12PM PST: Capacity added: PROC 2 cores
11/28/2012 01:47:12PM PST: Capacity added: PROC 2 cores
11/30/2012 01:37:19PM PST: Capacity added: PROC 2 cores
11/30/2012 01:41:19PM PST: Capacity added: PROC 2 cores
11/30/2012 01:42:41PM PST: Summary: PROC 10 cores
Signature: yU27yb0oth41UL7hleA2vHL7S1aX4pmkBTIxesD1XEs
```

使用例 2 指定したメールアドレスに CoD ログを送信します。

```
XSCF> showcodactivationhistory -m sysadmin@comany.com
XSCF>
```

使用例 3 指定した URL に FTP 経由で CoD ログを送信します。

```
XSCF> showcodactivationhistory -u admin ftp://somehost/tmp/
history.txt
Password:
file transfer complete
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。

>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

addcodactivation(8), **deletecodactivation**(8), **setcod**(8), **setsmtp**(8), **showcod**(8), **showcodactivation**(8), **showcodusage**(8)

名前

showcodusage - CPU コアリソースの使用情報を表示します。

形式

showcodusage [-v] [-M] [-p {resource|ppar|all}]

showcodusage -h

説明

showcodusage は、CPU コアリソースの使用情報を表示するコマンドです。

オプションを何も指定しないで、showcodusage を実行すると、使用中および登録済みの CPU コア アクティベーションの概要が、CPU コアリソースの現在の状態とともに表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng	すべての物理パーティション（PPAR）に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-p all	すべての CPU コアリソースの使用情報を表示します。
-p ppar	CPU コアリソースの使用情報を PPAR 別に表示します。表示される情報には、PPAR で使用されている CPU コアリソースの数、PPAR に実装されている CPU コアリソースの数、および PPAR に割り当てられている CPU コア アクティベーションの数が含まれます。
-p resource	CPU コアリソースの使用情報をリソースタイプ別に表示します。
-v	詳細な情報を表示します。

詳細説明

■ showcodusage -p resource を使用すると、システムに関する以下の CPU コアリソースの使用情報が表示されます。

Resource	使用可能な CPU コアリソース（プロセッサ）のタイプ 以下のパラメータが表示されます。 PROC　　CPU コアリソース。単位は cores です。
In Use	システムで現在使用されている CPU コアリソースの数 ハイパーバイザと通信が確立できない場合は、システムで現在使用されている CPU コアリソース数は 0 となります。
Installed	システムに実装されている CPU コアリソースの数
COD Permitted	システムに登録されている CPU コア アクティベーションの数
Status	以下のどちらかの CPU コア アクティベーションの状態 OK　　使用中の CPU コアリソースに対して十分な数の CPU コア アクティベーションがあることを示します。また、現在未使用の CPU コア アクティベーションの数も表示されます。 VIOLATION　　CPU コア アクティベーション違反が存在します。使用可能な CPU コア アクティベーションの数を超えている、使用中の CPU コアリソースの数が表示されます。システム全体で使用中の CPU コアリソースの総数が、システム全体で割り当て可能な CPU コア アクティベーションの総数を超えてしまった場合に発生する可能性があります。

■ showcodusage -p ppar を使用すると､各 PPAR に関する以下の CPU コアリソースの使用情報が表示されます。

PPAR-ID/ Resource	各 PPAR と CPU コアリソースの種類 Unused と表示されている CPU コアリソースは､PPAR で使用されていない CPU コアリソースです。
In Use	PPAR で現在使用されている CPU コアリソースの数 ハイパーバイザと通信が確立できない場合は、PPAR で現在使用されている CPU コアリソース数は 0 となります。
Installed	PPAR に実装されている CPU コアリソースの数
Assigned	PPAR に割り当てられている CPU コア アクティベーションの数
Unused	システムで現在未使用の CPU コア アクティベーションの数

注 – showcodusage で表示される In Use の値は、XSCF の更新タイミングによって最新の値になっていない場合があります。In Use の値が最新の値になるまでに、最大 20 分かかることがあります。In Use の値が期待値と異なっている場合は、再度 showcodusage を実行して、値を確認してください。

使用例

プラットフォームに関する権限を持つユーザーは、リソースと、PPAR に関する使用情報の概要を両方表示できます。PPAR に関する権限を持つユーザーは、権限を持っている PPAR の使用権情報の概要と、使用されていない CPU コア アクティベーションのレポートだけ表示できます。

使用例 1 CPU コアリソースの使用情報をリソース別に表示します（SPARC M10-1 の場合）。

```
XSCF> showcodusage -p resource
Resource In Use Installed CoD Permitted Status
--------  ------  ---------  -------------  ------
PROC           4         16             16  OK: 12 cores available

Note:
  Please confirm the value of the "In Use" by the ldm command of Oracle
   VM Server for SPARC.

  The XSCF may take up to 20 minutes to reflect the "In Use" of logical
   domains.
```

使用例 2 CPU コアリソースの使用情報を PPAR 別に表示します（SPARC M10-4S の場合）。

```
XSCF> showcodusage -p ppar
PPAR-ID/Resource In Use Installed Assigned
---------------- ------ --------- --------------
0 - PROC              0        64       64 cores
1 - PROC              0         0       64 cores
2 - PROC              0         0        0 cores
3 - PROC              0         0        0 cores
4 - PROC              0         0        0 cores
5 - PROC              0         0        0 cores
6 - PROC              0         0        0 cores
7 - PROC              0         0        0 cores
8 - PROC              0         0        0 cores
9 - PROC              0         0        0 cores
10 - PROC             0         0        0 cores
11 - PROC             0         0        0 cores
12 - PROC             0         0        0 cores
13 - PROC             0         0        0 cores
14 - PROC             0         0        0 cores
15 - PROC             0         0        0 cores
Unused - PROC         0        64      128 cores

Note:
```

```
  Please confirm the value of the "In Use" by the ldm command of Oracle
   VM Server for SPARC.

  The XSCF may take up to 20 minutes to reflect the "In Use" of logical
   domains.
```

使用例 3 CPU コアリソースの使用情報をリソース別および PPAR 別に表示します (SPARC M10-4S でプラットフォームに関する権限を持つユーザーが実行した場合)。

```
XSCF> showcodusage -p all
Resource In Use Installed CoD Permitted Status
-------- ------ --------- ------------- ------
PROC         63       160           160 OK: 97 cores available
PPAR-ID/Resource In Use Installed Assigned
---------------- ------ --------- --------------
0 - PROC             15        64       32 cores
1 - PROC             16        32       32 cores
2 - PROC             16        32       32 cores
3 - PROC             16        32       32 cores
4 - PROC              0         0        0 cores
5 - PROC              0         0        0 cores
6 - PROC              0         0        0 cores
7 - PROC              0         0        0 cores
8 - PROC              0         0        0 cores
9 - PROC              0         0        0 cores
10 - PROC             0         0        0 cores
11 - PROC             0         0        0 cores
12 - PROC             0         0        0 cores
13 - PROC             0         0        0 cores
14 - PROC             0         0        0 cores
15 - PROC             0         0        0 cores
Unused - PROC         0         0       32 cores

Note:
  Please confirm the value of the "In Use" by the ldm command of Oracle
   VM Server for SPARC.

  The XSCF may take up to 20 minutes to reflect the "In Use" of logical
   domains.
```

使用例 4 CPU コアリソースの使用情報をリソース別および PPAR 別に表示します (SPARC M10-4S で CPU コア アクティベーション違反が存在する場合)。

```
XSCF> showcodusage -p all
Resource In Use Installed CoD Permitted Status
-------- ------ --------- ------------- ------
PROC         63       160            61 VIOLATION: 2 cores in excess
PPAR-ID/Resource In Use Installed Assigned
---------------- ------ --------- --------------
0 - PROC             15        64       15 cores
1 - PROC             16        32       16 cores
```

```
2 - PROC             16        32       15 cores
3 - PROC             16        32       15 cores
4 - PROC              0         0        0 cores
5 - PROC              0         0        0 cores
6 - PROC              0         0        0 cores
7 - PROC              0         0        0 cores
8 - PROC              0         0        0 cores
9 - PROC              0         0        0 cores
10 - PROC             0         0        0 cores
11 - PROC             0         0        0 cores
12 - PROC             0         0        0 cores
13 - PROC             0         0        0 cores
14 - PROC             0         0        0 cores
15 - PROC             0         0        0 cores
Unused - PROC         0         0       -2 cores

Note:
  Please confirm the value of the "In Use" by the ldm command of Oracle
   VM Server for SPARC.

  The XSCF may take up to 20 minutes to reflect the "In Use" of logical
   domains.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addcodactivation(8), **deletecodactivation**(8), **setcod**(8), **showcod**(8), **showcodactivation**(8), **showcodactivationhistory**(8)

名前 showconsolepath - 現在物理パーティション（PPAR）に接続されている制御ドメインコンソールの情報を表示します。

形式

showconsolepath -a

showconsolepath -p *ppar_id*

showconsolepath -h

説明

showconsolepath は、現在 PPAR に接続されているドメインコンソールの情報を表示するコマンドです。

以下の内容が表示されます。

User	ドメインコンソールに接続している XSCF ユーザーアカウント
PPAR-ID	PPAR の ID
RO/RW	ドメインコンソールの種類 ro　読み取り専用コンソール rw　書き込み可能コンソール
escape	コンソールに設定されているエスケープ記号
Date	ドメインコンソールに接続した XSCF の日時

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	アクセスできるすべての PPAR に接続されているコンソールの情報を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-p *ppar_id*	情報を表示する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定します。

詳細説明

1 つの PPAR に対して、書き込み可能コンソールは 1 つだけ、読み取り専用コンソールは複数接続できます。

使用例

使用例 1 アクセスできるすべての PPAR に接続されているコンソールの情報を表示します。

```
XSCF> showconsolepath -a
User            PPAR-ID  ro/rw  escape   Date
nakagawa        00       rw     @        Fri Jul 29 21:23:34
hana            00       ro     #        Fri Jul 29 09:49:12
k-okano         00       ro     #        Fri Jul 29 18:21:50
yuuki           01       rw     |        Fri Jul 29 10:19:18
uchida          01       ro     *        Fri Jul 29 13:30:41
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

console(8), **sendbreak**(8)

名前

showdate - XSCF の時計の日付、時刻を表示します。

形式

showdate [-u]

showdate -h

説明

showdate は、XSCF の時計の日付、時刻を表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-u	時刻を協定世界時（UTC）で表示します。省略した場合は地方時となります。

詳細説明

setdate(8) を使用すると、XSCF の時計の日付、時刻を設定できます。

使用例

使用例 1 現在の時刻を地方時（JST）で表示します。

```
XSCF> showdate
Sat Oct 20 14:53:00 JST 2012
```

使用例 2 現在の時刻を UTC で表示します。

```
XSCF> showdate -u
Sat Oct 20 05:56:15 UTC 2012
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setdate(8), **settimezone**(8), **showtimezone**(8)

名前 showdateinfo - XSCF および論理ドメインの日付、時刻を表示します。

形式 **showdateinfo** -p *ppar_id* [-i *index*] [-M]

showdateinfo -h

説明 XSCF および論理ドメインの日付、時刻を表示します。このコマンドは PPAR 起動前に論理ドメインの日付、時刻が正しいか確認するために実行します。PPAR 起動後は XSCF の日付、時刻のみ表示され、論理ドメインの日付、時刻は表示されません。

PPAR-ID	PPAR の ID
config_name	論理ドメイン構成名
Date	XSCF および論理ドメインの日付、時刻を表示します。

表示する日時は、XSCF のタイムゾーンで表示します。

保守交換によって XSCF の日付、時刻が初期値（2001 年以前）になっている場合は、行頭に "*" を付与して表示します。XSCF の時刻や NTP の設定を確認してください。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, pparadm, pparmgr, pparop, fieldeng

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-p *ppar_id*	論理ドメインの日付、時刻を表示する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。
-i *index*	論理ドメイン構成の管理番号を指定します。管理番号は showdomainconfig(8) で確認できます。1 から 8 までの整数で指定できます。
-M	テキストを一画面ずつ表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明 -i *index* オプションを省略した場合は、次回 PPAR 起動時に起動される論理ドメインの日付、時刻が表示されます。次回 PPAR 起動時に使用する論理ドメイン構成は、showdomainconfig(8) で確認することができます。

使用例

使用例 1　PPAR-ID 0 の次回起動する論理ドメインの日時と XSCF の日時を表示します。

```
XSCF> showdateinfo -p 0
PPAR-ID     : 0
config_name : 4guest_config

XSCF information:
-----------------
  XSCF
    Date    : Aug 03 19:56:16 JST 2017

Logical domains information:
----------------------------
  primary
    Date    : Aug 03 19:56:17 JST 2017
  guest_0
    Date    : Aug 03 19:57:27 JST 2017
  guest_1
    Date    : Aug 03 19:57:27 JST 2017
  guest_2
    Date    : Aug 03 19:57:27 JST 2017
XSCF>
```

使用例 2　PPAR-ID 0 の factory-default の日時を表示します。

```
XSCF> showdateinfo -p 0 -i 1
PPAR-ID     : 0
config_name : factory-default

XSCF information:
-----------------
  XSCF
    Date    : Aug 03 19:57:44 JST 2017

Logical domains information:
----------------------------
  primary
    Date    : Aug 03 19:57:45 JST 2017
XSCF>
```

使用例 3　PPAR 起動後のため、XSCF 日時のみ表示します。

```
XSCF> showdateinfo -p 0
PPAR-ID     : 0
config_name : 4guest_config

XSCF information:
-----------------
  XSCF
    Date    : Aug 03 19:56:16 JST 2017

Logical domains information:
```

```
----------------------------
This PPAR is powered on.
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showdomainconfig(8)

名前 showdateoffset - システム時刻と各物理パーティション（PPAR）の時刻との差分を表示します。

形式 **showdateoffset** -p *ppar_id*

showdateoffset [-a]

showdateoffset -h

説明 showdateoffset は、XSCF の時計で管理されるシステム時刻と、各 PPAR の時計で管理される時刻との差分を、秒単位で表示するコマンドです。

XSCF では、システム時刻と各 PPAR の時刻との差分が保存されています。setdate(8) の実行または NTP サーバを使用した時刻同期によってシステム時刻を変更すると、各 PPAR の時刻と変更されたシステム時刻との差分が更新されます。

時刻の差分は PPAR やシステムの電源の再起動をした場合でも保持されています。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a	すべての PPAR の時刻との差分を表示します。 オプションを省略した場合も、-a 指定と同様にすべての PPAR の時刻との差分を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-p *ppar_id*	システム時刻との差分を表示する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定できます。

使用例

使用例 1 システム時刻と PPAR-ID 1 の 時刻との差分を表示します。

```
XSCF> showdateoffset -p 1
PPAR-ID         Domain Date Offset
01              0 sec
```

使用例 2 XSCF のシステム時刻とすべての PPAR の時刻との差分を表示します。

```
XSCF> showdateoffset -a
PPAR-ID        Domain Date Offset
00             0 sec
01             0 sec
02             0 sec
03             0 sec
04             0 sec
05             0 sec
06             0 sec
07             0 sec
08             0 sec
09             0 sec
10             0 sec
11             0 sec
12             0 sec
13             0 sec
14             0 sec
15             0 sec
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

resetdateoffset(8)

名前

showdomainconfig - 指定した物理パーティション（PPAR）の論理ドメイン構成情報を表示します。

形式

showdomainconfig `-p` *ppar_id* [`-M`]

showdomainconfig `-h`

説明

`showdomainconfig` は、論理ドメイン構成情報を表示するコマンドです。

以下の設定値が表示されます。

`Index`	論理ドメイン構成の XSCF での管理番号
`PPAR-ID`	PPAR の ID
`Booting config (Current)`	現在稼働中の PPAR で使用している論理ドメイン構成名
`Booting config(Next)`	次回 PPAR 起動時に使用する論理ドメイン構成名
`config_name`	論理ドメイン構成名
`date_created`	論理ドメイン構成作成日時
`domains`	論理ドメイン構成に含まれる論理ドメイン数

注 – `ldm add-spconfig` コマンドで論理ドメイン構成情報を XSCF に保存した時に bound または active 状態だった論理ドメインの数が表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

`useradm`, `platadm`, `platop`, `fieldeng`, `pparadm`, `pparmgr`, `pparop`

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-M`	テキストを 1 画面ずつ表示します。
`-p` *ppar_id*	論理ドメイン構成情報を表示する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定できます。

詳細説明

Oracle VM Server for SPARC の復旧モード（recovery mode）によって論理ドメイン構成情報がリカバリーされた場合、「`Booting config (Current)`」で表示さ

れる論理ドメイン構成情報名の後ろに「[degraded]」という文字列が追加されます。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 に設定されている論理ドメイン構成情報を表示します。

```
XSCF> showdomainconfig -p 0
PPAR-ID      :0
Booting config
 (Current)   :ldm-set1
 (Next)      :ldm-set2
-------------------------------------------------------------------------
Index        :1
config_name :factory-default
domains      :1
date_created:-
-------------------------------------------------------------------------
Index        :2
config_name :ldm-set1
domains      :8
date_created:'2012-08-08 11:34:56'
-------------------------------------------------------------------------
Index        :3
config_name :ldm-set2
domains      :20
date_created:'2012-08-09 12:43:56'
-------------------------------------------------------------------------
Index        :4
config_name :initial
domains      :256
date_created:'2012-08-08 11:34:56'
XSCF>
```

使用例 2 Oracle VM Server for SPARC の復旧モード（recovery mode）によってリカバリーされた論理ドメイン構成情報の表示例です。

```
XSCF> showdomainconfig -p 0
PPAR-ID      :0
Booting config
 (Current)   :recovery-resource [degraded]
 (Next)      :recovery-resource
-------------------------------------------------------------------------
Index        :1
config_name :factory-default
domains      :1
date_created:-
-------------------------------------------------------------------------
Index        :2
config_name :recovery-resource
domains      :4
date_created:'2014-06-19 14:53:38'
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setdomainconfig(8)

名前

showdomainstatus - 現在の論理ドメインの状態を表示します。

形式

showdomainstatus -p *ppar_id* [-v] [-M] [-g *domainname*]

showdomainstatus -h

説明

showdomainstatus は、現在の論理ドメインの状態を表示するコマンドです。

表示される状態は以下のとおりです。

- Logical Domain Name

  論理ドメインのホスト名。ホスト名が 21 文字を超える場合は、22 文字目以降の文字の表示が省略されます。論理ドメイン起動前の場合は「-」を表示します。

- Status

  現在の論理ドメインの稼働状態。以下の状態が表示されます。

Host stopped	論理ドメインが停止している状態
Solaris booting	論理ドメインの Oracle Solaris が起動中の状態
Solaris running	論理ドメインの Oracle Solaris が稼働している状態
Solaris suspended	論理ドメインの Oracle Solaris がサスペンドしている状態
Solaris halting	論理ドメインの Oracle Solaris が停止処理をしている状態
Solaris powering down	論理ドメインの Oracle Solaris が電源切断処理をしている状態
Solaris rebooting	論理ドメインの Oracle Solaris がリセット中の状態
Solaris panicking	論理ドメインの Oracle Solaris でパニックが発生している状態
Solaris debugging	論理ドメインの kmdb プロンプトで停止している状態 カーネルデバッグ中
OpenBoot initializing	論理ドメインの OpenBoot PROM が初期化処理中の状態
OpenBoot Running	論理ドメインの OpenBoot PROM による初期化が完了した状態または、ok プロンプトで停止している状態
OpenBoot Primary Boot Loader	論理ドメインが Oracle Solaris ロード中の状態
OpenBoot Running OS Boot	論理ドメインが Oracle Solaris に遷移中の状態
OS Started. No state support	論理ドメインが OpenBoot PROM から Oracle Solaris に遷移した状態

OpenBoot Running Host Halted	論理ドメインの Oracle Solaris から init 0 実行中の状態
OpenBoot Exited	論理ドメインの ok プロンプトから reset-all 実行中の状態
OpenBoot Host Received Break	論理ドメインの Oracle Solaris から enter サービスが呼ばれた状態
OpenBoot Failed	論理ドメインの OpenBoot PROM による初期化でエラーが発生した状態
Unknown	ユーザーがオプションで指定した論理ドメインのホスト名と一致するホスト名が見つからず不明な状態 Logical Domains（LDoms）Manager で add-spconfig を未実行の状態、および Logical Domains（LDoms）Manager で add-spconfig 実行時に論理ドメインが unbind 状態だった場合を含みます。
-	物理パーティション（PPAR）が定義されていない状態

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-g *domainname*	表示対象の論理ドメインのホスト名を指定します。-g を省略した場合、表示対象の PPAR 配下のにあるすべての論理ドメインの情報を表示します。 *domainname* には 255 文字以内で指定できます。「#」を含める場合は「¥#」、「;」を含める場合は「¥;」、「 (」を含める場合は「¥(」、「)」を含める場合は「¥)」のように、直前にバックスラッシュ（円記号）（\）を付けて指定します。記号を含める場合は、値全体を一重引用符（'）または二重引用符（"）で囲んで指定します。（例 : 'guest01'）
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-p *ppar_id*	状態を表示する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定できます。

-v　　詳細情報を表示します。論理ドメインの ID（16 進数表記）も表示されます。

詳細説明

論理ドメインの構成を変更した場合は、すべての論理ドメインを active または bound 状態にしたうえで、制御ドメイン上で `ldm add-spconfig` コマンドを実行し、最新の構成情報を XSCF に保存してください。

active または bound 以外の状態の論理ドメインが 1 つでもあるときに構成情報を XSCF に保存した場合、-g オプションでその論理ドメインを指定すると、以下の現象が発生することがあります。

- 論理ドメインの状態が Unknown と表示される。
- 正しくない論理ドメイン名が表示される。

使用例

使用例 1　PPAR-ID 0 上のすべての論理ドメインの状態を表示します。

```
XSCF> showdomainstatus -p 0
Logical Domain Name   Status
primary               Solaris running
guest00               Solaris running
guest01               Solaris booting
guest02               Solaris powering down
guest03               Solaris panicking
guest04               Shutdown Started
guest05               OpenBoot initializing
guest06               OpenBoot Primary Boot Loader
```

使用例 2　PPAR-ID 0 上の論理ドメイン名 guest01 の状態を表示します。

```
XSCF> showdomainstatus -p 0 -g guest01
Logical Domain Name   Status
guest01               Solaris powering down
```

使用例 3　PPPAR-ID 0 上の論理ドメイン名 guest01 の詳細情報を表示します。

```
XSCF> showdomainstatus -p 0 -v -g guest01
GID      Logical Domain Name   Status
00000002 guest01               Solaris powering down
```

使用例 4　PPAR-ID 0 上の論理ドメイン名 guest01 の状態を表示します。（PPAR に PSB が割り当てられていない場合）

```
XSCF> showdomainstatus -p 0 -g guest01
Logical Domain Name   Status
-                     -
PPAR 0 is not configured.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showpparstatus(8)

名前 showdualpowerfeed - 二系統受電モードの状態を表示します。

形式 **showdualpowerfeed**

showdualpowerfeed -h

説明 showdualpowerfeed は、二系統受電モードの状態を表示するコマンドです。

注 – SPARC M10 システムおよび SPARC M12-1 には、電源ユニットが 2 台搭載されています。二系統受電機能を有効／無効のどちらに設定しても、冗長構成のシステムの挙動に影響はありません。二系統受電に関する設定機能は、現在の状態を確認するためのシステム管理者用のメモとして利用します。
SPARC M12-2/M12-2S には電源ユニットが 4 台搭載されています。二系統の場合、電源ユニットが 2 台ずつの受電系統になります。詳細は、『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』を参照してください。

二系統受電モードは、setdualpowerfeed(8) で設定できます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 SPARC M10-1 で、二系統受電モードの設定内容を表示します。

```
XSCF> showdualpowerfeed
BB#00: Dual power feed is enabled.
```

使用例 2 SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり）で、二系統受電モードの設定内容を表示します。

```
XSCF> showdualpowerfeed
BB#00:Dual power feed is disabled.
BB#01:Dual power feed is disabled.
BB#02:Dual power feed is disabled.
BB#03:Dual power feed is disabled.
BB#04:Dual power feed is disabled.
BB#05:Dual power feed is disabled.
BB#06:Dual power feed is disabled.
BB#07:Dual power feed is disabled.
BB#08:Dual power feed is disabled.
BB#09:Dual power feed is disabled.
BB#10:Dual power feed is disabled.
BB#11:Dual power feed is disabled.
BB#12:Dual power feed is disabled.
BB#13:Dual power feed is disabled.
```

```
BB#14:Dual power feed is disabled.
BB#15:Dual power feed is disabled.
XBBOX#80:Dual power feed is disabled.
XBBOX#81:Dual power feed is disabled.
XBBOX#82:Dual power feed is disabled.
XBBOX#83:Dual power feed is disabled.
```

使用例 3 SPARC M10-4S（クロスバーボックスなし）で、二系統受電モードの設定内容を表示します。

```
XSCF> showdualpowerfeed
BB#00:Dual power feed is enabled.
BB#01:Dual power feed is enabled.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setdualpowerfeed(8)

名前

showemailreport - 電子メールレポートの設定データを表示します。

形式

showemailreport [-v]

showemailreport -h

説明

showemailreport は、電子メールレポートの設定データを表示するコマンドです。

オプションを指定しないで使用すると、現在の電子メールレポートの設定データが表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-v	詳細な情報を表示します。

使用例

使用例 1 電子メールレポートの設定を表示します。

```
XSCF> showemailreport
E-Mail Reporting: enabled
E-mail Recipient Address: admin@company.com, adm2@company.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setemailreport(8)

名前 showenvironment - システムの吸気温度、温度センサー情報、電圧センサー情報、ファン回転情報を表示します。

形式 **showenvironment** [-M] [temp|volt|Fan|power|air]

showenvironment -h

説明 showenvironment は、以下の情報を表示するコマンドです。

以下の情報が表示されます。

環境情報	SPARC M12/M10 システムの筐体の吸気温度
温度情報	SPARC M12/M10 システムの筐体の吸気温度と各コンポーネントの温度情報 以下のコンポーネントの温度情報が確認できます。 SPARC M10-1 マザーボードユニット（MBU）、CPU、DIMM、SW、SAS SPARC M10-4/M10-4S（クロスバーボックスなし） CMUU、CMUL、CPU、DIMM、SW、SAS、XBChip（BB） SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり） CMUU、CMUL、CPU、DIMM、SW、SAS、XBChip（BB）、XBChip（XB-Box） SPARC M12-1 マザーボードユニット（MBU）、CPU、DIMM、SW、SAS、GIGALAN SPARC M12-2/M12-2S（クロスバーボックスなし） CMUU、CMUL、CPU、DIMM、SW、SAS、GIGALAN、SAS-EXP、XBChip（BB） SPARC M12-2S（クロスバーボックスあり） CMUU、CMUL、CPU、DIMM、SW、SAS、GIGALAN、SAS-EXP、XBChip（BB）、XBChip（XB-Box）
電圧情報	電圧センサー値 電圧マージン設定時は、マージン設定情報を表示します。
ファン回転情報	ファンの回転状態と回転数
電力モニタ	消費電力情報
エアフロー	SPARC M12/M10 システムの筐体の排気量

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

temp|volt|Fan|power|air
: 表示する情報のタイプを指定します。以下のいずれかのタイプが指定できます。省略した場合は、SPARC M12/M10 システムの筐体の吸気温度の情報を表示します。

temp	温度情報を表示します。
volt	電圧情報を表示します。
Fan	ファンの回転情報を表示します。
power	消費電力情報を表示します。
air	SPARC M10 システムの筐体の排気量を表示します。

詳細説明

power および air で表示される情報には、PCI ボックスおよび周辺の I/O デバイスの情報は含まれません。

使用例

使用例 1 システムの吸気温度を表示します。

```
XSCF> showenvironment
BB#00
    Temperature:30.71C
BB#01
    Temperature:29.97C
```

使用例 2 SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり）で、システムと各コンポーネントの温度情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment temp
BB#00
    Temperature:30.71C
    CMUU
        CPU#0
            CPU#0:45.21C
            CPU#0:45.42C
            CPU#0:43.24C
            CPU#0:47.11C
        CPU#1
            CPU#1:45.21C
```

```
            CPU#1:45.42C
            CPU#1:43.24C
            CPU#1:47.11C
        MEM#00A:30.75C
        MEM#01A:31.25C
        MEM#02A:31.50C
        MEM#03A:31.50C
        MEM#04A:31.25C
        MEM#05A:31.00C
        MEM#06A:31.75C
        MEM#07A:31.25C
        MEM#10A:30.62C
        MEM#11A:30.50C
        MEM#12A:29.75C
        MEM#13A:30.12C
        MEM#14A:30.50C
        MEM#15A:30.38C
        MEM#16A:30.00C
        MEM#17A:30.25C
    CMUL
        CPU#0
            CPU#0:45.21C
            CPU#0:45.42C
            CPU#0:43.24C
            CPU#0:47.11C
        CPU#1
            CPU#1:45.21C
            CPU#1:45.42C
            CPU#1:43.24C
            CPU#1:47.11C
        MEM#00A:30.75C
        MEM#01A:31.25C
        MEM#02A:31.50C
        MEM#03A:31.50C
        MEM#04A:31.25C
        MEM#05A:31.00C
        MEM#06A:31.75C
        MEM#07A:31.25C
        MEM#10A:30.62C
        MEM#11A:30.50C
        MEM#12A:29.75C
        MEM#13A:30.12C
        MEM#14A:30.50C
        MEM#15A:30.38C
        MEM#16A:30.00C
        MEM#17A:30.25C
        SW#0:45.55C
        SW#1:45.55C
        SW#2:45.55C
        SW#3:45.55C
        SAS#0:52.23C
    XBU#0
        XB#0
            XB#0:52.12C
```

```
                XB#0:52.12C
        XBU#1
            XB#0
                XB#0:52.12C
                XB#0:52.12C
    BB#01
        Temperature:30.71C
        CMUU
            CPU#0
                CPU#0:45.21C
                CPU#0:45.42C
                CPU#0:43.24C
                CPU#0:47.11C
            CPU#1
                CPU#1:45.21C
                CPU#1:45.42C
                CPU#1:43.24C
                CPU#1:47.11C
            MEM#00A:30.75C
            MEM#01A:31.25C
            MEM#02A:31.50C
            MEM#03A:31.50C
            MEM#04A:31.25C
            MEM#05A:31.00C
            MEM#06A:31.75C
            MEM#07A:31.25C
            MEM#10A:30.62C
            MEM#11A:30.50C
            MEM#12A:29.75C
            MEM#13A:30.12C
            MEM#14A:30.50C
            MEM#15A:30.38C
            MEM#16A:30.00C
            MEM#17A:30.25C
        CMUL
            CPU#0
                CPU#0:45.21C
                CPU#0:45.42C
                CPU#0:43.24C
                CPU#0:47.11C
            CPU#1
                CPU#1:45.21C
                CPU#1:45.42C
                CPU#1:43.24C
                CPU#1:47.11C
            MEM#00A:41.00C
            MEM#01A:40.50C
            MEM#02A:40.50C
            MEM#03A:40.50C
            MEM#04A:40.50C
            MEM#05A:39.25C
            MEM#06A:40.75C
            MEM#07A:41.25C
            MEM#10A:39.50C
```

```
        MEM#12A:39.75C
        MEM#13A:40.25C
        MEM#14A:40.75C
        MEM#15A:40.25C
        MEM#16A:39.75C
        MEM#17A:38.50C
        SW#0:45.55C
        SW#1:45.55C
        SW#2:45.55C
        SW#3:45.55C
        SAS#0:52.23C
    XBU#0
        XB#0
            XB#0:52.12C
            XB#0:52.12C
    XBU#1
        XB#0
            XB#0:52.12C
            XB#0:52.12C
XBBOX#80
    Temperature:30.71C
    XBU#0
        XB#0
            XB#0:52.12C
            XB#0:52.12C
        XB#1
            XB#1:52.12C
            XB#1:52.12C
XBBOX#81
    Temperature:30.71C
    XBU#0
        XB#0
            XB#0:52.12C
            XB#0:52.12C
        XB#1
            XB#1:52.12C
            XB#1:52.12C
XSCF>
```

使用例 3 SPARC M12-2S（クロスバーボックスあり）で、システムと各コンポーネントの温度情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment temp
BB#00
    Temperature:28.56C
    CMUU
        CPU#0
            CPU#0:42.75C
            CPU#0:45.00C
            CPU#0:47.50C
            CPU#0:43.25C
        MEM#00A:36.12C
        MEM#01A:35.62C
```

```
          MEM#02A:36.44C
          MEM#03A:36.38C
          MEM#04A:36.00C
          MEM#05A:34.31C
          MEM#06A:36.69C
          MEM#07A:34.62C
      CMUL
          CPU#0
              CPU#0:48.50C
              CPU#0:48.75C
              CPU#0:40.75C
              CPU#0:46.25C
          MEM#00A:37.00C
          MEM#01A:36.75C
          MEM#02A:37.75C
          MEM#03A:37.50C
          MEM#04A:36.25C
          MEM#05A:34.00C
          MEM#06A:37.25C
          MEM#07A:36.75C
          SAS#0:35.75C
          SAS#1:35.25C
          GIGALAN#0:35.62C
          GIGALAN#1:35.44C
          SW#0:36.81C
          SW#1:35.00C
          SW#2:33.81C
          SW#3:34.25C
          SASEXP:35.88C
      XBU#0
          XB#0
              XB#0:37.52C
              XB#0:38.35C
      XBU#1
          XB#0
              XB#0:35.94C
              XB#0:37.18C
  BB#01
      Temperature:29.12C
      CMUU
          CPU#0
              CPU#0:42.75C
              CPU#0:44.00C
              CPU#0:47.00C
              CPU#0:43.00C
          MEM#00A:32.56C
          MEM#01A:31.94C
          MEM#02A:32.75C
          MEM#03A:32.62C
          MEM#04A:32.19C
          MEM#05A:30.56C
          MEM#06A:32.75C
          MEM#07A:30.75C
      CMUL
```

```
            CPU#0
                CPU#0:48.00C
                CPU#0:48.50C
                CPU#0:40.50C
                CPU#0:46.25C
            MEM#00A:33.75C
            MEM#01A:33.50C
            MEM#02A:34.50C
            MEM#03A:34.25C
            MEM#04A:33.00C
            MEM#05A:30.25C
            MEM#06A:33.50C
            MEM#07A:32.69C
            SAS#0:34.44C
            SAS#1:33.62C
            GIGALAN#0:33.81C
            GIGALAN#1:33.44C
            SW#0:35.31C
            SW#1:33.44C
            SW#2:31.62C
            SW#3:32.00C
            SASEXP:34.19C
        XBU#0
            XB#0
                XB#0:35.59C
                XB#0:36.42C
        XBU#1
            XB#0
                XB#0:33.87C
                XB#0:35.04C
    XBBOX#80
        Temperature:27.06C
        XBU#0
            XB#0
                XB#0:26.28C
                XB#0:26.28C
            XB#1
                XB#1:26.46C
                XB#1:26.02C
        XBU#1
            XB#0
                XB#0:26.81C
                XB#0:26.63C
            XB#1
                XB#1:26.54C
                XB#1:26.37C
    XBBOX#81
        Temperature:26.94C
        XBU#0
            XB#0
                XB#0:26.28C
                XB#0:25.85C
            XB#1
                XB#1:26.11C
```

```
            XB#1:26.28C
    XBU#1
        XB#0
            XB#0:26.54C
            XB#0:26.46C
        XB#1
            XB#1:26.72C
            XB#1:26.54C
XSCF>
```

使用例 4 SPARC M10-1 で、システムの各コンポーネントの電圧情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment volt
MBU
    0.89V Power Supply Group:0.891V
    0.90V#0 Power Supply Group:0.898V
    0.90V#1 Power Supply Group:0.894V
    0.90V#2 Power Supply Group:1.023V
    0.90V#3 Power Supply Group:1.024V
    1.0V#0 Power Supply Group:1.038V
    1.0V#1 Power Supply Group:1.041V
    1.35V#0 Power Supply Group:1.346V
    1.35V#1 Power Supply Group:1.348V
    1.5V#0 Power Supply Group:1.539V
    1.5V#1 Power Supply Group:1.506V
    1.8V#0 Power Supply Group:1.804V
PSUBP
    3.3V Power Supply Group:3.300V
    5.0V Power Supply Group:5.000V
XSCF>
```

使用例 5 SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり）で、システムの各コンポーネントの電圧情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment volt
BB#00
    CMUU
        0.89V-0 Power Supply Group:0.892V
        0.89V-1 Power Supply Group:0.892V
        0.90V#0-0 Power Supply Group:0.930V
        0.90V#0-1 Power Supply Group:0.929V
        0.90V#1-0 Power Supply Group:0.898V
        0.90V#1-1 Power Supply Group:0.899V
        0.90V#2-0 Power Supply Group:0.912V
        0.90V#2-1 Power Supply Group:0.926V
        0.90V#3-0 Power Supply Group:0.914V
        0.90V#3-1 Power Supply Group:0.924V
        1.35V#0-0 Power Supply Group:1.349V
        1.35V#0-1 Power Supply Group:1.349V
        1.35V#1-0 Power Supply Group:1.349V
        1.35V#1-1 Power Supply Group:1.349V
        1.5V-0 Power Supply Group:1.639V
```

```
        1.5V-1 Power Supply Group:1.632V
        5.0V#0 Power Supply Group:5.002V
        5.0V#1 Power Supply Group:4.972V
        5.0V#2 Power Supply Group:4.975V
        5.0V#3 Power Supply Group:4.967V
    CMUL
        0.89V-0 Power Supply Group:0.893V
        0.89V-1 Power Supply Group:0.892V
        0.90V#0-0 Power Supply Group:0.929V
        0.90V#0-1 Power Supply Group:0.930V
        0.90V#1-0 Power Supply Group:0.897V
        0.90V#1-1 Power Supply Group:0.899V
        0.90V#2-0 Power Supply Group:0.933V
        0.90V#2-1 Power Supply Group:0.943V
        0.90V#3-0 Power Supply Group:0.931V
        0.90V#3-1 Power Supply Group:0.943V
        0.9V#0 Power Supply Group:0.895V
        0.9V#1 Power Supply Group:0.894V
        1.0V#0 Power Supply Group:1.038V
        1.0V#1 Power Supply Group:1.039V
        1.35V#0-0 Power Supply Group:1.348V
        1.35V#0-1 Power Supply Group:1.348V
        1.35V#1-0 Power Supply Group:1.348V
        1.35V#1-1 Power Supply Group:1.346V
        1.5V-0 Power Supply Group:1.634V
        1.5V-1 Power Supply Group:1.632V
        1.5V Power Supply Group:1.497V
        1.8V#0 Power Supply Group:1.816V
        1.8V#1 Power Supply Group:1.814V
        3.3V#0 Power Supply Group:3.380V
        3.3V#1 Power Supply Group:3.390V
        5.0V#0 Power Supply Group:4.972V
        5.0V#1 Power Supply Group:4.982V
        5.0V#2 Power Supply Group:4.960V
        5.0V#3 Power Supply Group:4.960V
        5V_USB Power Supply Group:5.017V
    XBU#0
        0.85V Power Supply Group:0.852V
        0.9V Power Supply Group:0.945V
        1.5V Power Supply Group:1.587V
        3.3V Power Supply Group:3.328V
    XBU#1
        0.85V Power Supply Group:0.849V
        0.9V Power Supply Group:0.946V
        1.5V Power Supply Group:1.596V
        3.3V Power Supply Group:3.344V
    PSUBP
        5.0V Power Supply Group:5.037V
BB#01
    CMUU
        0.89V-0 Power Supply Group:0.892V
        0.89V-1 Power Supply Group:0.892V
        0.90V#0-0 Power Supply Group:0.930V
        0.90V#0-1 Power Supply Group:0.929V
```

```
        0.90V#1-0 Power Supply Group:0.898V
        0.90V#1-1 Power Supply Group:0.899V
        0.90V#2-0 Power Supply Group:0.912V
        0.90V#2-1 Power Supply Group:0.926V
        0.90V#3-0 Power Supply Group:0.914V
        0.90V#3-1 Power Supply Group:0.924V
        1.35V#0-0 Power Supply Group:1.349V
        1.35V#0-1 Power Supply Group:1.349V
        1.35V#1-0 Power Supply Group:1.349V
        1.35V#1-1 Power Supply Group:1.349V
        1.5V-0 Power Supply Group:1.639V
        1.5V-1 Power Supply Group:1.632V
        5.0V#0 Power Supply Group:5.002V
        5.0V#1 Power Supply Group:4.972V
        5.0V#2 Power Supply Group:4.975V
        5.0V#3 Power Supply Group:4.967V
    CMUL
        0.89V-0 Power Supply Group:0.893V
        0.89V-1 Power Supply Group:0.892V
        0.90V#0-0 Power Supply Group:0.929V
        0.90V#0-1 Power Supply Group:0.930V
        0.90V#1-0 Power Supply Group:0.897V
        0.90V#1-1 Power Supply Group:0.899V
        0.90V#2-0 Power Supply Group:0.933V
        0.90V#2-1 Power Supply Group:0.943V
        0.90V#3-0 Power Supply Group:0.931V
        0.90V#3-1 Power Supply Group:0.943V
        0.9V#0 Power Supply Group:0.895V
        0.9V#1 Power Supply Group:0.894V
        1.0V#0 Power Supply Group:1.038V
        1.0V#1 Power Supply Group:1.039V
        1.35V#0-0 Power Supply Group:1.348V
        1.35V#0-1 Power Supply Group:1.348V
        1.35V#1-0 Power Supply Group:1.348V
        1.35V#1-1 Power Supply Group:1.346V
        1.5V-0 Power Supply Group:1.634V
        1.5V-1 Power Supply Group:1.632V
        1.5V Power Supply Group:1.497V
        1.8V#0 Power Supply Group:1.816V
        1.8V#1 Power Supply Group:1.814V
        3.3V#0 Power Supply Group:3.380V
        3.3V#1 Power Supply Group:3.390V
        5.0V#0 Power Supply Group:4.972V
        5.0V#1 Power Supply Group:4.982V
        5.0V#2 Power Supply Group:4.960V
        5.0V#3 Power Supply Group:4.960V
        5V_USB Power Supply Group:5.017V
    PSUBP
        5.0V Power Supply Group:5.000V
    XBU
        0.85V Power Supply Group:0.850V
        0.9V Power Supply Group:0.900V
        1.5V Power Supply Group:1.500V
        3.3V Power Supply Group:3.300V
```

```
XBBOX#80
    XBU#0
        0.85V#0 Power Supply Group:0.850V
        0.85V#0 Power Supply Group:0.850V
        0.9V#0 Power Supply Group:0.900V
        0.9V#1 Power Supply Group:0.900V
        1.5V Power Supply Group:1.500V
        3.3V Power Supply Group:3.300V
XBBOX#81
    XBU#0
        0.85V#0 Power Supply Group:0.850V
        0.85V#0 Power Supply Group:0.850V
        0.9V#0 Power Supply Group:0.900V
        0.9V#1 Power Supply Group:0.900V
        1.5V Power Supply Group:1.500V
        3.3V Power Supply Group:3.300V
XSCF>
```

使用例 6 SPARC M12-2S（クロスバーボックスあり）で、システムの各コンポーネントの電圧情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment volt
BB#00
    CMUU
        0.9V#0 Power Supply Group:0.895V
        0.9V#1 Power Supply Group:0.911V
        1.0V#0 Power Supply Group:1.080V
        1.0V#1 Power Supply Group:1.080V
        1.0V#2 Power Supply Group:1.080V
        1.0V#3 Power Supply Group:1.079V
        1.0V#4 Power Supply Group:1.081V
        1.0V#5 Power Supply Group:0.993V
        1.0V#6 Power Supply Group:1.069V
        1.0V#7 Power Supply Group:1.011V
        1.2V#0 Power Supply Group:1.196V
        1.2V#1 Power Supply Group:1.196V
        1.5V#0 Power Supply Group:1.491V
        1.5V#1 Power Supply Group:1.498V
        2.5V#0 Power Supply Group:2.503V
    CMUL
        0.67V Power Supply Group:0.673V
        0.8V Power Supply Group:0.804V
        0.9V#0 Power Supply Group:0.896V
        0.9V#1 Power Supply Group:0.909V
        0.9V#2 Power Supply Group:0.925V
        0.9V#3 Power Supply Group:0.924V
        1.0V#0 Power Supply Group:1.080V
        1.0V#1 Power Supply Group:1.079V
        1.0V#2 Power Supply Group:1.079V
        1.0V#3 Power Supply Group:1.079V
        1.0V#4 Power Supply Group:1.081V
        1.0V#5 Power Supply Group:0.993V
        1.0V#6 Power Supply Group:1.069V
```

```
            1.0V#7 Power Supply Group:1.010V
            1.0V#8 Power Supply Group:1.025V
            1.0V#9 Power Supply Group:1.041V
            1.0V#10 Power Supply Group:1.044V
            1.05V Power Supply Group:1.048V
            1.2V#0 Power Supply Group:1.195V
            1.2V#1 Power Supply Group:1.195V
            1.2V#2 Power Supply Group:1.202V
            1.2V#3 Power Supply Group:1.204V
            1.5V#0 Power Supply Group:1.489V
            1.5V#1 Power Supply Group:1.496V
            1.8V#0 Power Supply Group:1.796V
            1.8V#1 Power Supply Group:1.795V
            2.5V#0 Power Supply Group:2.504V
            2.5V#1 Power Supply Group:2.505V
            3.3V#0 Power Supply Group:3.354V
            3.3V#1 Power Supply Group:3.371V
            3.3V#2 Power Supply Group:3.379V
            5.0V#0 Power Supply Group:5.075V
            5.0V#1 Power Supply Group:5.040V
            5V_MEDIA Power Supply Group:4.958V
            12V_MEDIA Power Supply Group:11.975V
        XBU#0
            0.85V Power Supply Group:0.846V
            0.9V Power Supply Group:0.946V
            1.5V Power Supply Group:1.612V
            3.3V Power Supply Group:3.338V
        XBU#1
            0.85V Power Supply Group:0.846V
            0.9V Power Supply Group:0.945V
            1.5V Power Supply Group:1.606V
            3.3V Power Supply Group:3.368V
```

使用例 7 SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり）で、システムのファン回転情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment Fan
BB#00
    FANU#0: High speed (Level-4)
        FAN#0:  7510rpm
        FAN#1:  8571rpm
    FANU#1: High speed (Level-4)
        FAN#0:  7520rpm
        FAN#1:  8490rpm
    FANU#2: High speed (Level-4)
        FAN#0:  7489rpm
        FAN#1:  8411rpm
    FANU#3: High speed (Level-4)
        FAN#0:  7479rpm
        FAN#1:  8450rpm
    FANU#4: High speed (Level-4)
        FAN#0:  7397rpm
        FAN#1:  8437rpm
```

```
BB#01
    FANU#0: Middle speed (Level-3)
        FAN#0:  6390rpm
        FAN#1:  7468rpm
    FANU#1: Middle speed (Level-3)
        FAN#0:  6467rpm
        FAN#1:  7307rpm
    FANU#2: Middle speed (Level-3)
        FAN#0:  6221rpm
        FAN#1:  7105rpm
    FANU#3: Middle speed (Level-3)
        FAN#0:  6398rpm
        FAN#1:  7346rpm
    FANU#4: Middle speed (Level-3)
        FAN#0:  6443rpm
        FAN#1:  7190rpm
XBBOX#80
    FANU#0: Middle speed (Level-3)
        FAN#0:  8294rpm
        FAN#1:  9677rpm
    FANU#1: Middle speed (Level-3)
        FAN#0:  8206rpm
        FAN#1:  9694rpm
    FANU#2: Middle speed (Level-3)
        FAN#0:  8169rpm
        FAN#1:  9747rpm
    FANU#3: Middle speed (Level-3)
        FAN#0:  8320rpm
        FAN#1:  9574rpm
XBBOX#81
    FANU#0: Low speed (Level-2)
        FAN#0:  7327rpm
        FAN#1:  8585rpm
    FANU#1: Low speed (Level-2)
        FAN#0:  7346rpm
        FAN#1:  8598rpm
    FANU#2: Low speed (Level-2)
        FAN#0:  7366rpm
        FAN#1:  8695rpm
    FANU#3: Low speed (Level-2)
        FAN#0:  7458rpm
        FAN#1:  8517rpm
```

使用例 8 SPARC M12-2S（クロスバーボックスあり）で、システムのファン回転情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment Fan
BB#00
    FANU#0: Middle speed (Level-3)
        FAN#0: 8059rpm
        FAN#1: 9457rpm
    FANU#1: Middle speed (Level-3)
        FAN#0: 8083rpm
```

```
            FAN#1: 9424rpm
        FANU#2: Middle speed (Level-3)
            FAN#0: 8095rpm
            FAN#1: 9507rpm
        FANU#3: Middle speed (Level-3)
            FAN#0: 8000rpm
            FAN#1: 9490rpm
        FANU#4: Middle speed (Level-3)
            FAN#0: 7906rpm
            FAN#1: 9507rpm
        FANU#5: Middle speed (Level-3)
            FAN#0: 7883rpm
            FAN#1: 9473rpm
        FANU#6: Middle speed (Level-3)
            FAN#0: 8059rpm
            FAN#1: 9608rpm
        FANU#7: Middle speed (Level-3)
            FAN#0: 7952rpm
            FAN#1: 9457rpm
    BB#01
        FANU#0: High speed (Level-4)
            FAN#0: 8940rpm
            FAN#1: 10887rpm
        FANU#1: High speed (Level-4)
            FAN#0: 8925rpm
            FAN#1: 10609rpm
        FANU#2: High speed (Level-4)
            FAN#0: 9060rpm
            FAN#1: 10843rpm
        FANU#3: High speed (Level-4)
            FAN#0: 8910rpm
            FAN#1: 10714rpm
        FANU#4: High speed (Level-4)
            FAN#0: 9090rpm
            FAN#1: 10693rpm
        FANU#5: High speed (Level-4)
            FAN#0: 8794rpm
            FAN#1: 10505rpm
        FANU#6: High speed (Level-4)
            FAN#0: 9030rpm
            FAN#1: 10778rpm
        FANU#7: High speed (Level-4)
            FAN#0: 8794rpm
            FAN#1: 10714rpm
    XBBOX#80
        FANU#0: Middle speed (Level-3)
            FAN#0: 8157rpm
            FAN#1: 9694rpm
        FANU#1: Middle speed (Level-3)
            FAN#0: 8320rpm
            FAN#1: 9642rpm
        FANU#2: Middle speed (Level-3)
            FAN#0: 8320rpm
            FAN#1: 9694rpm
```

```
    FANU#3: Middle speed (Level-3)
        FAN#0: 8181rpm
        FAN#1: 9729rpm
XBBOX#81
    FANU#0: Middle speed (Level-3)
        FAN#0: 8120rpm
        FAN#1: 9625rpm
    FANU#1: Middle speed (Level-3)
        FAN#0: 8307rpm
        FAN#1: 9677rpm
    FANU#2: Middle speed (Level-3)
        FAN#0: 8320rpm
        FAN#1: 9557rpm
    FANU#3: Middle speed (Level-3)
        FAN#0: 8256rpm
        FAN#1: 9642rpm
```

使用例 9 システムの消費電力情報を表示します。

```
XSCF> showenvironment power
Power Supply Maximum       :1000W
Installed Hardware Minimum:718W
Peak Permitted             :3725W
BB#00
    Permitted AC power consumption:1000W
    Actual AC power consumption   :38W
BB#01
    Permitted AC power consumption:470W
    Actual AC power consumption:430W
```

使用例 10 システムの排気量を表示します。

```
XSCF> showenvironment air
BB#00
    Air Flow:53CMH
BB#01
    Air Flow:53CMH
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpowercapping(8), **showpowercapping**(8)

名前

showfru - デバイスのハードウェアに関する設定内容を表示します。

形式

showfru *device* *location*

showfru -a [-M]

showfru -h

説明

showfru は、setupfru(8) によってデバイスのハードウェアに設定された内容を表示するコマンドです。

指定したデバイスか、すべてのデバイスの内容を表示できます。デバイスとして物理システムボード（PSB）を指定できます。

以下の内容が表示されます。

Device　　デバイス名

以下のいずれかの値が表示されます。

sb	PSB
cpu	PSB 内の CPU

Location　　デバイスが搭載されている位置

以下の形式で表示されます。

- Device が sb の場合

xx-y:

xx	BB-ID の 00 から 15 までの整数
y	0 で固定となります

- Device が cpu の場合

xx-y-z:

xx	BB-ID の 00 から 15 までの整数
y	0 で固定となります
z	CPU チップ番号 SPARC M12-1/M10-1：0 SPARC M10-4/M10-4S：0 から 3 までの整数 SPARC M12-2/M12-2S：0 または 2

Memory Mirror Mode　　PSB に設定されているメモリのミラーモード

以下のどちらかの値が表示されます。

yes	メモリミラーモード
no	非メモリミラーモード

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	すべてのデバイスの内容を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

device

表示するデバイスを指定します。以下のデバイスが指定できます。

sb	PSB
cpu	PSB 内の CPU

location

device の搭載されている位置を指定します。

以下の形式で指定します。

- *device* が sb の場合

xx-y:

xx	BB-ID の 00 から 15 までの整数
y	0 で固定となります

- *device* が cpu の場合

xx-y-z:

xx	BB-ID の 00 から 15 までの整数
y	0 で固定となります
z	CPU チップ番号 SPARC M12-1/M10-1 : 0 SPARC M10-4/M10-4S : 0 から 3 までの整数 SPARC M12-2/M12-2S : 0 または 2

詳細説明

setupfru(8) を使用すると、デバイスのハードウェアに関する設定ができます。

使用例

使用例 1 すべてのデバイスに設定されている情報を表示します。

```
XSCF> showfru -a
Device     Location     Memory Mirror Mode
sb         00-0
    cpu    00-0-0       yes
    cpu    00-0-1       yes
    cpu    00-0-2       yes
    cpu    00-0-3       yes
```

```
sb          01-0
    cpu     01-0-0        yes
    cpu     01-0-1        yes
    cpu     01-0-2        yes
    cpu     01-0-3        yes
sb          02-0
    cpu     02-0-0        no
    cpu     02-0-1        no
    cpu     02-0-2        no
    cpu     02-0-3        no
sb          03-0
    cpu     03-0-0        yes
    cpu     03-0-1        yes
    cpu     03-0-2        no
    cpu     03-0-3        no
.
.
XSCF>
```

使用例 2 指定したデバイス（PSB）に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> showfru sb 01-0
Device      Location      Memory Mirror Mode
sb          01-0
    cpu     01-0-0        yes
    cpu     01-0-1        yes
    cpu     01-0-2        yes
    cpu     01-0-3        yes
XSCF>
```

使用例 3 指定したデバイス（CPU）に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> showfru cpu 01-0-3
Device      Location      Memory Mirror Mode
sb          01-0
    cpu     01-0-3        yes
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **deleteboard**(8), **setpcl**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showpcl**(8)

名前 showhardconf - システムに搭載されている Field Replaceable Unit（FRU）の情報を表示します。

形式 **showhardconf** [-u] [-M]

showhardconf -h

説明 showhardconf は、FRU 単位の情報を表示するためのコマンドです。

表示される情報は、以下のとおりです。

- 現在の構成、状態
- 搭載されている台数
- 物理パーティション（PPAR）情報
- PCI ボックス情報
- PCI カード情報

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-u	FRU 単位の搭載個数を表示します。さらに、CPU モジュールでは動作周波数が表示されます。メモリでは DIMM タイプおよびサイズが表示されます。省略した場合は、FRU 単位の現在の構成、状態情報と PPAR 情報が表示されます。

詳細説明

- FRU の構成、状態情報と PPAR 情報を表示した場合、故障または縮退が発生したユニットに対して、異常箇所であることを表すアスタリスク（*）と以下のいずれかの状態が表示されます。

状態	内容
Faulted	故障していて動作していない状態
Degraded	ユニット内の一部が、故障または縮退しているが、ユニットは動作を継続している状態

Deconfigured	他のユニットの故障または縮退による影響で、そのユニット自体は、下位層のコンポーネントを含めて、正常でありながら縮退している状態
Maintenance	保守作業中。addfru(8)、replacefru(8)、または initbb(8) 操作中
Normal	正常に動作している状態

- SPARC M12-2S/M10-4S において、マスタ筐体と XSCF がスタンバイ状態となっている筐体の オペレーションパネルにあるモードスイッチが一致していない場合、マスタ筐体と XSCF がスタンバイ状態となっている筐体のオペレーションパネルユニットに、アスタリスク（*）が表示されます。
- ゲストドメインの PCI Express（PCIe）カード情報は、該当するゲストドメインの Oracle Solaris が起動したあとに反映されます。

PCI カード情報及び、PCI ボックス情報が表示される条件は以下の通りです。

- factory-default 構成の場合
  PPAR の電源が投入され OpenBoot PROM または Oracle Solaris が起動している状態。
- 論理ドメイン構成で、論理ドメインに未割り当ての場合
  論理ドメインが認識していない IO リソースは表示されません。
  増設した IO リソースを showhardconf コマンドで表示するためには、制御ドメイン上で IO リソースの追加が必要な場合があります。
- 論理ドメイン構成で、論理ドメインに割り当て済の場合
  該当する論理ドメインの Oracle Solaris が起動している状態。

使用例

使用例 1 SPARC M10-1 の FRU 情報を表示します。

```
XSCF> showhardconf
SPARC M10-1;
    + Serial:2101151008A; Operator_Panel_Switch:Locked;
    + System_Power:Off; System_Phase:Cabinet Power Off;
    Partition#0 PPAR_Status:Powered Off;
    MBU Status:Normal; Ver:2004h; Serial:USDA-P00007 ;
        + FRU-Part-Number:CA20366-B10X 002AB/LGA-MBU -01          ;
        + Power_Supply_System: Dual ;
        + Memory_Size:32 GB; Type: B ;
        CPU#0 Status:Normal; Ver:4142h; Serial: 00010448;
           + Freq:3.200 GHz; Type:0x20;
           + Core:16; Strand:2;
        MEM#00A Status:Normal;
           + Code:ce8002M393B5270DH0-YH9  0000-85A8EFD9;
           + Type:01; Size:4 GB;
        MEM#01A Status:Normal;
           + Code:ce8002M393B5270DH0-YH9  0000-85A8EF57;
           + Type:01; Size:4 GB;
  .
```

```
  .
  .
        MEM#12A Status:Normal;
           + Code:ce8002M393B5270DH0-YH9  0000-85A8EEAD;
           + Type:01; Size:4 GB;
        MEM#13A Status:Normal;
           + Code:ce8002M393B5270DH0-YH9  0000-85A8EEB5;
           + Type:01; Size:4 GB;
        PCI#0 Name_Property:fibre-channel;
           + Vendor-ID:14e4; Device-ID:1648;
           + Subsystem_Vendor-ID:10cf; Subsystem-ID:13a0;
           + Model: LPe1250-F8-FJ;
        PCI#1 Status:Normal; Name_Property:;
           + Vendor-ID:14e4; Device-ID:1648;
           + Subsystem_Vendor-ID:10cf; Subsystem-ID:13a0;
           + Model: LPe1250-F8-FJ;
           + Connection:PCIBOX#X0DF;
*          PCIBOX#X0DF; Status:Faulted; Ver:0512 Serial:XCX0DF;
               + FRU-Part-Number:CF00541-0314 05   /501-6937-05;
               IOB Status:Normal; Serial:XX00KA; Type:PCI-X;
                   + FRU-Part-Number:CF00541-0316 03   /501-6938-05;
               LINKBOARD Status:Faulted; Ver:0512 Serial:XCX0DF;
                   + FRU-Part-Number:CF00541-0314 05   /501-6937-05;
               PCI#0 Name_Property:fibre-channel;
                   + Vendor-ID:14e4; Device-ID:1648;
                   + Subsystem_Vendor-ID:10cf; Subsystem-ID:13a0;
                   + Model: LPe1250-F8-FJ;
               FANBP Status:Normal; Serial:7867000297;
                   + FRU-Part-Number:CA20393-B50X A2 ;
               PSU#0; Status:Normal; Serial:LL0807;
                   + FRU-Part-Number:CF00300-2001 02   /300-2001-02;
               PSU#1; Status:Normal; Serial:LL0381;
                   + FRU-Part-Number:CF00300-2001 02   /300-2001-02;
               FAN#0; Status:Normal;
               FAN#1; Status:Normal;
               FAN#2; Status:Normal;
       OPNL Status:Normal; Ver:0102; Serial:PP0629L068
           + FRU-Part-Number:CA20393-B50X A2 ;
       PSUBP Status:Normal; Ver:0102; Serial:PP0629L068
           + FRU-Part-Number:CA20393-B50X A2 ;
       PSU#0 Status:Normal; Ver:0102; Serial:0000000-ASTECB18 ;
           + FRU-Part-Number:CF00300-1898 0002 /300-1898-00-02;
           + Power_Status:ON; AC:200 V;
       PSU#1 Status:Normal; Ver:0102; Serial:0000000-ASTECB18 ;
           + FRU-Part-Number:CF00300-1898 0002 /300-1898-00-02;
           + Power_Status:ON; AC:200 V;
       FANU#0 Status:Normal; Type: B;
       FANU#1 Status:Normal; Type: B ;
       FANU#2 Status:Normal; Type: B ;
       FANU#3 Status:Normal; Type: B ;
       FANU#4 Status:Normal; Type: B ;
```

使用例 2 SPARC M10-1 に搭載されている FRU の数を表示します。

```
XSCF> showhardconf -u
SPARC M10-1; Memory_Size:32 GB;
 +-----------------------------------+------------+
 |               FRU                 |  Quantity  |
 +-----------------------------------+------------+
 | MBU                               |      1     |
 |     Type:B                        |  (   1)    |
 |     CPU                           |      1     |
 |         Freq:3.200 GHz;           |  (   1)    |
 |     MEM                           |      8     |
 |         Type:01; Size:4 GB;       |  (   8)    |
 | PCICARD                           |      0     |
 | LINKCARD                          |      0     |
 | PCIBOX                            |      0     |
 |     IOB                           |      0     |
 |     LINKBOARD                     |      0     |
 |     PCI                           |      0     |
 |     FANBP                         |      0     |
 |     PSU                           |      0     |
 |     FAN                           |      0     |
 | OPNL                              |      1     |
 | PSUBP                             |      1     |
 |     PSU                           |      2     |
 |     FANU                          |      4     |
 +-----------------------------------+------------+
```

使用例 3 SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり）の FRU 情報を表示します。

```
XSCF> showhardconf
SPARC M10-4S;
    + Serial:2081230011; Operator_Panel_Switch:Locked;
    + System_Power:On; System_Phase:Cabinet Power On;
      Partition#0 PPAR_Status:Powered Off;
      Partition#1 PPAR_Status:Initialization Phase;
    BB#00 Status:Normal; Role:Slave; Ver:2003h; Serial:2081231002;
        + FRU-Part-Number:CA07361-D202 A1                          ;
        + Power_Supply_System:Single;
        + Memory_Size:256 GB;
        CMUL Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP123002Z4  ;
            + FRU-Part-Number:CA07361-D941 A8                          ;
            + Memory_Size:128 GB; Type: B ;
            CPU#0 Status:Normal; Ver:4142h; Serial:00010448;
                + Freq:3.700 GHz; Type:0x20;
                + Core:16; Strand:2;
            CPU#1 Status:Normal; Ver:4142h; Serial:00010418;
                + Freq:3.700 GHz; Type:0x20;
                + Core:16; Strand:2;
            MEM#00A Status:Normal;
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-85D0AD54;
                + Type:01; Size:4 GB;
            MEM#01A Status:Normal;
```

```
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-85D0AD67;
                + Type:01; Size:4 GB;
.
.
.
            MEM#16B Status:Normal;
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-87D37530;
                + Type:01; Size:4 GB;
            MEM#17B Status:Normal;
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-87D3752D;
                + Type:01; Size:4 GB;
        CMUU Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP123002ZB  ;
            + FRU-Part-Number:CA07361-D951 A4                         ;
            + Memory_Size:128 GB; Type: B ;
            CPU#0 Status:Normal; Ver:4142h; Serial:00010478;
                + Freq:3.700 GHz; Type:0x20;
                + Core:16; Strand:2;
            CPU#1 Status:Normal; Ver:4142h; Serial:00010505;
                + Freq:3.700 GHz; Type:0x20;
                + Core:16; Strand:2;
            MEM#00A Status:Normal;
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-85D0AFA1;
                + Type:01; Size:4 GB;
            MEM#01A Status:Normal;
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-85D0B057;
                + Type:01; Size:4 GB;
.
.
.
            MEM#16B Status:Normal;
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-87D37652;
                + Type:01; Size:4 GB;
            MEM#17B Status:Normal;
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-87D37520;
                + Type:01; Size:4 GB;
        PCI#0 Name_Property:fibre-channel;
            + Vendor-ID:14e4; Device-ID:1648;
            + Subsystem_Vendor-ID:10cf; Subsystem-ID:13a0;
            + Model: LPe1250-F8-FJ;
        XBU#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP123002ZQ  ;
            + FRU-Part-Number:CA07361-D102 A1                         ;
            + Type: B  ;
            CBL#0L Status:Normal;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                    + Type:Optic;   Length: 2;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                    + Type:Optic;   Length: 2;
            CBL#0R Status:Normal;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                    + Type:Optic;   Length: 2;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                    + Type:Optic;   Length: 2;
            CBL#1L Status:Normal;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
```

```
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#1R Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:0020h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3020h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
    XBU#1 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP123002ZN  ;
        + FRU-Part-Number:CA07361-D102 A1                         ;
        + Type: B  ;
        CBL#0L Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#0R Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#1L Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#1R Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:0020h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3020h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
    OPNL Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP1230020A  ;
        + FRU-Part-Number:CA07361-D012 A1                         ;
    PSUBP Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP123002ZS  ;
        + FRU-Part-Number:CA07361-D202 A1                         ;
        + Type: B  ;
    PSU#0 Status:Normal; Ver:303443h; Serial:MD12190452    ;
        + FRU-Part-Number:CA01022-0761  /           ;
        + Power_Status:ON; AC:200 V; Type: B ;
    PSU#1 Status:Normal; Ver:303443h; Serial:MD12190454    ;
        + FRU-Part-Number:CA01022-0761  /           ;
        + Power_Status:ON; AC:200 V; Type: B ;
    FANU#0 Status:Normal; Type: B ;
    FANU#1 Status:Normal; Type: B ;
    FANU#2 Status:Normal; Type: B ;
    FANU#3 Status:Normal; Type: B ;
    FANU#4 Status:Normal; Type: B ;
BB#01 Status:Normal; Role:Slave; Ver:0101h; Serial:7867000297;
    + FRU-Part-Number:CA20393-B50X A2 ;
    + Power_Supply_System:Single;
    + Memory_Size:256 GB;
    CMUL Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP123002Z4  ;
        + FRU-Part-Number:CA07361-D941 A8                         ;
        + Memory_Size:128 GB; Type: B ;
```

```
            CPU#0 Status:Normal; Ver:4142h; Serial:00010448;
                + Freq:3.700 GHz; Type:0x20;
                + Core:16; Strand:2;
            CPU#1 Status:Normal; Ver:4142h; Serial:00010418;
                + Freq:3.700 GHz; Type:0x20;
                + Core:16; Strand:2;
            MEM#00A Status:Normal;
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-85D0AD54;
                + Type:01; Size:4 GB;
            MEM#01A Status:Normal;
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-85D0AD67;
                + Type:01; Size:4 GB;
 .
 .
 .
            MEM#16B Status:Normal;
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-87D37530;
                + Type:01; Size:4 GB;
            MEM#17B Status:Normal;
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-87D3752D;
                + Type:01; Size:4 GB;
        CMUU Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP123002ZB  ;
            + FRU-Part-Number:CA07361-D951 A4                         ;
            + Memory_Size:128 GB; Type: B ;
            CPU#0 Status:Normal; Ver:4142h; Serial:00010478;
                + Freq:3.700 GHz; Type:0x20;
                + Core:16; Strand:2;
            CPU#1 Status:Normal; Ver:4142h; Serial:00010505;
                + Freq:3.700 GHz; Type:0x20;
                + Core:16; Strand:2;
            MEM#00A Status:Normal;
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-85D0AFA1;
                + Type:01; Size:4 GB;
 .
 .
 .
            MEM#17B Status:Normal;
                + Code:ce8002M393B5270DH0-YK0  0000-87D37520;
                + Type:01; Size:4 GB;
        PCI#0 Status:Normal; Name_Property:;
            + Vendor-ID:14e4; Device-ID:1648;
            + Subsystem_Vendor-ID:10cf; Subsystem-ID:13a0;
            + Model: LPe1250-F8-FJ;
        PCI#1 Status:Normal; Name_Property:;
            + Vendor-ID:14e4; Device-ID:1648;
            + Subsystem_Vendor-ID:10cf; Subsystem-ID:13a0;
            + Model: LPe1250-F8-FJ;
        XBU#0 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP123002ZQ  ;
            + FRU-Part-Number:CA07361-D102 A1                         ;
            + Type: B ;
*           CBL#0L Status:Degraded;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                    + Type:Optic;   Length: 2;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
```

```
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#0R Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#1L Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#1R Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:0020h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3020h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
    XBU#1 Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP123002ZN  ;
        + FRU-Part-Number:CA07361-D102 A1                          ;
        + Type: B ;
        CBL#0L Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#0R Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#1L Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#1R Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:0020h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3020h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
    OPNL Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP1230020A  ;
        + FRU-Part-Number:CA07361-D012 A1                          ;
    PSUBP Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP123002ZS  ;
        + FRU-Part-Number:CA07361-D202 A1                          ;
        + Type: B ;
    PSU#0 Status:Normal; Ver:303443h; Serial:MD12190452    ;
        + FRU-Part-Number:CA01022-0761  /          ;
        + Power_Status:ON; AC:200 V; Type: B ;
    PSU#1 Status:Normal; Ver:303443h; Serial:MD12190454    ;
        + FRU-Part-Number:CA01022-0761  /          ;
        + Power_Status:ON; AC:200 V; Type: B ;
    FANU#0 Status:Normal; Type: B ;
    FANU#1 Status:Normal; Type: B ;
    FANU#2 Status:Normal; Type: B ;
    FANU#3 Status:Normal; Type: B ;
```

```
        FANU#4 Status:Normal; Type: B ;
    XBBOX#80 Status:Normal; Role:Master; Ver:0101h; Serial:7867000297;
        + FRU-Part-Number:CA07361-D011 A0   /NOT-FIXD-01          ;
        + Power_Supply_System:Single;
        XBU#0 Status:Normal; Serial:PP0629L068
            + FRU-Part-Number:CA20393-B50X A2 ;
            + Type: A ;
            CBL#L0 Status:Normal;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                    + Type:Optic;   Length: 3;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                    + Type:Optic;   Length: 3;
            CBL#L1 Status:Normal;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                    + Type:Optic;   Length: 2;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                    + Type:Optic;   Length: 2;
            CBL#R0 Status:Normal;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                    + Type:Optic;   Length: 2;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                    + Type:Optic;   Length: 2;
            CBL#R1 Status:Normal;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                    + Type:Optic;   Length: 2;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                    + Type:Optic;   Length: 2;
        XSCFU Status:Normal; Ver:0101h; Serial:7867000262  ;
            + FRU-Part-Number:CA20393-B56X A0
        XBBPU Status:Normal; Serial:PP0629L068
            + FRU-Part-Number:CA20393-B50X A2 ;
            + Type: A ;
        XSCFIFU Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP12040198 ;
            + FRU-Part-Number:CA20365-B52X 001AA/NOT-FIXD-01 ; Type: A ;
        OPNL Status:Normal; Serial:PP0629L068
            + FRU-Part-Number:CA20393-B50X A2 ;
        PSU#0 Status:Normal; Ver:0201 Serial:0000000-ASTECB18 ;
            + FRU-Part-Number:CF00300-1898 0002 /300-1898-00-02;
            + Power_Status:ON; AC:200 V;
        PSU#1 Status:Normal; Ver:0201 Serial:0000000-ASTECB18 ;
            + FRU-Part-Number:CF00300-1898 0002 /300-1898-00-02;
            + Power_Status:ON; AC:200 V;
        FANU#0 Status:Normal;
        FANU#1 Status:Normal;
        FANU#2 Status:Normal;
        FANU#3 Status:Normal;
    XBBOX#81 Status:Normal; Role:Standby; Ver:0101h; Serial:7867000297;
        + FRU-Part-Number:CA07361-D011 A0   /NOT-FIXD-01          ;
        + Power_Supply_System:Single;
        XBU#0 Status:Normal; Ver:0201 Serial:PP0629L068
            + FRU-Part-Number:CA20393-B50X A2 ;
            + Type: A ;
            CBL#L0 Status:Normal;
                + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
```

```
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#L1 Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#R0 Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#R1 Status:Normal;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + FRU-Part-Number:2123628-2       ; Ver:3820h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
    XSCFU Status:Normal; Ver:0101h; Serial:7867000262  ;
        + FRU-Part-Number:CA20393-B56X A0
    XBBPU Status:Normal; Ver:0201 Serial:PP0629L068
        + FRU-Part-Number:CA20393-B50X A2 ;
        + Type: A ;
    XSCFIFU Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP12040198 ;
        + FRU-Part-Number:CA20365-B52X 001AA/NOT-FIXD-01 ; Type: A ;
    OPNL Status:Normal; Ver:0201 Serial:PP0629L068
        + FRU-Part-Number:CA20393-B50X A2 ;
    PSU#0 Status:Normal; Ver:0201 Serial:0000000-ASTECB18 ;
        + FRU-Part-Number:CF00300-1898 0002 /300-1898-00-02;
        + Power_Status:ON; AC:200 V;
    PSU#1 Status:Normal; Ver:0201 Serial:0000000-ASTECB18 ;
        + FRU-Part-Number:CF00300-1898 0002 /300-1898-00-02;
        + Power_Status:ON; AC:200 V;
    FANU#0 Status:Normal;
    FANU#1 Status:Normal;
    FANU#2 Status:Normal;
    FANU#3 Status:Normal;
```

使用例 4　SPARC M12-2S（クロスバーボックスなし）の FRU 情報を表示します。

```
XSCF> showhardconf
SPARC M12-2S;
    + Serial:PZ51552003; Operator_Panel_Switch:Locked;
    + System_Power:On; System_Phase:Cabinet Power On;
    Partition#0 PPAR_Status:Running;
    BB#00 Status:Normal; Role:Master; Ver:3009h; Serial:PZ51552003;
        + FRU-Part-Number:CA20369-B17X 003AB/9999999              ;
        + Power_Supply_System: ;
        + Memory_Size:64 GB;
        CMUL Status:Normal; Ver:1101h; Serial:PP155100VD  ;
            + FRU-Part-Number:CA07855-D291 A1   /9999999              ;
            + Memory_Size:64 GB; Type: C ;
            CPU#0 Status:Normal; Ver:4241h; Serial:00040006;
```

```
            + Freq:4.250 GHz; Type:0x30;
            + Core:12; Strand:8;
        MEM#00A Status:Normal;
            + Code:ce8001M393A1G40EB1-CRC    00-02EBB91D;
            + Type:81; Size:8 GB;
                .
                .
        MEM#07A Status:Normal;
            + Code:ce8001M393A1G40EB1-CRC    00-02EBB960;
            + Type:81; Size:8 GB;
    CMUU Status:Normal; Ver:1101h; Serial:PP155100VK  ;
        + FRU-Part-Number:CA07855-D491 A1   /9999999              ;
        + Memory_Size:64 GB; Type: C ;
        CPU#0 Status:Normal; Ver:4241h; Serial:00000030;
            + Freq:4.250 GHz; Type:0x30;
            + Core:12; Strand:8;
        MEM#00A Status:Normal;
            + Code:ce8001M393A1G40EB1-CRC    00-02EBB915;
            + Type:81; Size:8 GB;
                .
                .
        MEM#07A Status:Normal;
            + Code:2c800f18ASF1G72PZ-2G3A3   33-10735AD4;
            + Type:81; Size:8 GB;
    XBU#0 Status:Normal; Ver:1101h; Serial:PP155002PB  ;
        + FRU-Part-Number:CA20369-B18X 001AA/9999999              ;
        + Type: C ;
        CBL#0L Status:Normal;
            + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#0R Status:Normal;
            + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
    XBU#1 Status:Normal; Ver:1101h; Serial:PP155002PA  ;
        + FRU-Part-Number:CA20369-B18X 001AA/9999999              ;
        + Type: C ;
        CBL#0L Status:Normal;
            + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
        CBL#0R Status:Normal;
            + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
            + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
                + Type:Optic;   Length: 2;
    XSCFU Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP154903GH  ;
        + FRU-Part-Number:CA20369-B08X 001AA/9999999              ;
        + Type: A ;
    OPNL Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP15500CFC  ;
```

```
          + FRU-Part-Number:CA20365-B35X 005AC/7060922              ;
          + Type: A ;
      PSUBP Status:Normal; Ver:1101h; Serial:PP154901EP  ;
          + FRU-Part-Number:CA20369-B17X 003AB/9999999              ;
          + Type: C ;
      PSU#0 Status:Normal; Ver:303141h; Serial:HWCD1549000009;
          + FRU-Part-Number:CA01022-0850/7            ;
          + Power_Status:ON; AC:200 V; Type: C ;
      PSU#1 Status:Normal; Ver:303141h; Serial:HWCD1549000021;
          + FRU-Part-Number:CA01022-0850/7            ;
          + Power_Status:ON; AC:200 V; Type: C ;
      PSU#2 Status:Normal; Ver:303141h; Serial:HWCD1549000084;
          + FRU-Part-Number:CA01022-0850/7            ;
          + Power_Status:ON; AC:200 V; Type: C ;
      PSU#3 Status:Normal; Ver:303141h; Serial:HWCD1549000070;
          + FRU-Part-Number:CA01022-0850/7            ;
          + Power_Status:ON; AC:200 V; Type: C ;
      FANU#0 Status:Normal; Type: C ;
        .
        .
      FANU#7 Status:Normal; Type: C ;
      HDDBP Status:Normal; Type: A ;
  BB#01 Status:Normal; Role:Standby; Ver:3009h; Serial:PZ51552006;
      + FRU-Part-Number:CA20369-B17X 003AB/9999999              ;
      + Power_Supply_System: ;
      + Memory_Size:128 GB;
      CMUL Status:Normal; Ver:1101h; Serial:PP155100VE  ;
          + FRU-Part-Number:CA07855-D291 A1   /9999999              ;
          + Memory_Size:64 GB; Type: C ;
          CPU#0 Status:Normal; Ver:4241h; Serial:00040023;
              + Freq:4.250 GHz; Type:0x30;
              + Core:12; Strand:8;
          MEM#00A Status:Normal;
              + Code:ce8001M393A1G40EB1-CRC    00-02EBB8F4;
              + Type:81; Size:8 GB;
                  .
                  .
          MEM#07A Status:Normal;
              + Code:2c800f18ASF1G72PZ-2G3A3   33-1011A476;
              + Type:81; Size:8 GB;
      CMUU Status:Normal; Ver:1101h; Serial:PP15500DZ0  ;
          + FRU-Part-Number:CA07855-D491 A1   /9999999              ;
          + Memory_Size:64 GB; Type: C ;
          CPU#0 Status:Normal; Ver:4241h; Serial:00040019;
              + Freq:4.250 GHz; Type:0x30;
              + Core:12; Strand:8;
          MEM#00A Status:Normal;
              + Code:2c800f18ASF1G72PZ-2G3A3   33-10735E7F;
              + Type:81; Size:8 GB;
                  .
                  .
          MEM#07A Status:Normal;
              + Code:2c800f18ASF1G72PZ-2G3A3   33-107359F1;
              + Type:81; Size:8 GB;
```

```
PCI#2 Status:Normal; Name_Property:pci;
    + Vendor-ID:108e; Device-ID:9020;
    + Subsystem_Vendor-ID:10b5; Subsystem-ID:8716;
    + Model:;
    + Connection:2001;
    PCIBOX#2001; Status:Normal; Ver:5220h; Serial:2121212001;
        + FRU-Part-Number:;
        IOB Status:Normal; Serial:PP122300JW  ;
            + FRU-Part-Number:CA20365-B66X 007AF              ;
        LINKBOARD Status:Normal; Serial:PP123300TR  ;
            + FRU-Part-Number:CA20365-B60X 001AA              ;
        FANBP Status:Normal; Serial:PP120904SY  ;
            + FRU-Part-Number:CA20365-B68X 004AC              ;
        PSU#1; Status:Normal; Serial:FEJD1201000169;
            + FRU-Part-Number:CA01022-0750-D/         ;
        FAN#0; Status:Normal;
        FAN#1; Status:Normal;
        FAN#2; Status:Normal;
XBU#0 Status:Normal; Ver:1101h; Serial:PP155002PP  ;
    + FRU-Part-Number:CA20369-B18X 001AA/9999999              ;
    + Type: C ;
    CBL#0L Status:Normal;
        + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
            + Type:Optic;   Length: 2;
        + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
            + Type:Optic;   Length: 2;
    CBL#0R Status:Normal;
        + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
            + Type:Optic;   Length: 2;
        + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
            + Type:Optic;   Length: 2;
XBU#1 Status:Normal; Ver:1101h; Serial:PP155002PN  ;
    + FRU-Part-Number:CA20369-B18X 001AA/9999999              ;
    + Type: C ;
    CBL#0L Status:Normal;
        + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
            + Type:Optic;   Length: 2;
        + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
            + Type:Optic;   Length: 2;
    CBL#0R Status:Normal;
        + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
            + Type:Optic;   Length: 2;
        + Vendor-ID:FCBN414QB1C02   ; Ver:4120h;
            + Type:Optic;   Length: 2;
XSCFU Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP154903GP  ;
    + FRU-Part-Number:CA20369-B08X 001AA/9999999              ;
    + Type: A ;
OPNL Status:Normal; Ver:0101h; Serial:PP15500CFH  ;
    + FRU-Part-Number:CA20365-B35X 005AC/7060922              ;
    + Type: A ;
PSUBP Status:Normal; Ver:1101h; Serial:PP154901ET  ;
    + FRU-Part-Number:CA20369-B17X 003AB/9999999              ;
    + Type: C ;
PSU#0 Status:Normal; Ver:303141h; Serial:HWCD1549000036;
```

```
          + FRU-Part-Number:CA01022-0850/7            ;
          + Power_Status:ON; AC:200 V; Type: C ;
      PSU#1 Status:Normal; Ver:303141h; Serial:HWCD1549000039;
          + FRU-Part-Number:CA01022-0850/7            ;
          + Power_Status:ON; AC:200 V; Type: C ;
      PSU#2 Status:Normal; Ver:303141h; Serial:HWCD1549000092;
          + FRU-Part-Number:CA01022-0850/7            ;
          + Power_Status:ON; AC:200 V; Type: C ;
      PSU#3 Status:Normal; Ver:303141h; Serial:HWCD1549000057;
          + FRU-Part-Number:CA01022-0850/7            ;
          + Power_Status:ON; AC:200 V; Type: C ;
      FANU#0 Status:Normal; Type: C ;
        .
        .
      FANU#7 Status:Normal; Type: C ;
      HDDBP Status:Normal; Type: A ;
```

使用例 5 SPARC M10--4S（クロスバーボックスあり）に搭載されている FRU の数を表示します。

```
XSCF> showhardconf -u
SPARC M10-4S; Memory_Size:720 GB;
 +------------------------------------+------------+
 |               FRU                  |  Quantity  |
 +------------------------------------+------------+
 | BB                                 |      2     |
 |     CMUL                           |      2     |
 |         Type:A                     |  (   1)    |
 |         Type:B                     |  (   1)    |
 |         CPU                        |      4     |
 |             Freq:3.000 GHz;        |  (   2)    |
 |             Freq:3.700 GHz;        |  (   2)    |
 |         MEM                        |     64     |
 |             Type:01; Size:4 GB;    |  (  64)    |
 |     CMUU                           |      2     |
 |         Type:A                     |  (   1)    |
 |         Type:B                     |  (   1)    |
 |         CPU                        |      4     |
 |             Freq:3.000 GHz;        |  (   2)    |
 |             Freq:3.700 GHz;        |  (   2)    |
 |         MEM                        |     64     |
 |             Type:01; Size:4 GB;    |  (  64)    |
 |     PCICARD                        |      3     |
 |     LINKCARD                       |      0     |
 |     PCIBOX                         |      0     |
 |         IOB                        |      0     |
 |         LINKBOARD                  |      0     |
 |         PCI                        |      0     |
 |         FANBP                      |      0     |
 |         PSU                        |      0     |
 |         FAN                        |      0     |
 |     XBU                            |      4     |
 |         Type:A                     |  (   2)    |
```

```
|          Type:B                    |   (    2)   |
|      OPNL                          |        2    |
|      PSUBP                         |        2    |
|          Type:A                    |   (    1)   |
|          Type:B                    |   (    1)   |
|          PSU                       |        4    |
|               Type:A               |   (    2)   |
|               Type:B               |   (    2)   |
|          FANU                      |       10    |
| XBBOX                             |        2    |
|      XBU                           |        2    |
|          Type:A                    |   (    1)   |
|          Type:B                    |   (    1)   |
|      XSCFU                         |        2    |
|      OPNL                          |        2    |
|      XBBPU                         |        2    |
|          Type:A                    |   (    1)   |
|          Type:B                    |   (    1)   |
|          XSCFIFU                   |        2    |
|          PSU                       |        4    |
|          FANU                      |        8    |
+------------------------------------+-------------+
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

showhostname - マスタ筐体と XSCF がスタンバイ状態の筐体に設定されているホスト名を表示します。

形式

showhostname {-a | *xscfu*}

showhostname -h

説明

showhostname は、マスタ筐体と XSCF がスタンバイ状態の筐体に現在設定されているホスト名を表示するコマンドです。

ホスト名は Fully Qualified Domain Name（FQDN）形式で表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	マスタ筐体と XSCF がスタンバイ状態の筐体に設定されているホスト名を表示します。-a と一緒に指定されている筐体名は無効となります。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

xscfu

表示する筐体名を指定します。システム構成によって以下を指定できます。-a と一緒に指定した場合は無効となります。

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

  XBBOX#80 は、「xbbox#80」を指定します。

  XBBOX#81 は、「xbbox#81」を指定します。

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

  BB#00 は、「bb#00」を指定します。

  BB#01 は、「bb#01」を指定します。

- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合

  「bb#00」を指定します。

詳細説明

- sethostname(8) を使用すると、マスタ筐体と、XSCF がスタンバイ状態の筐体のホスト名を設定できます。

使用例

使用例 1 マスタ筐体と、XSCF がスタンバイ状態の筐体に設定されているホスト名を表示します。

```
XSCF> showhostname -a
bb#00:scf0-hostname.example.com
bb#01:scf1-hostname.example.com
```

使用例 2 XBBOX#80 に設定されているホスト名を表示します。

```
XSCF> showhostname xbbox#80
xbbox#80:scf0-hostname.example.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

sethostname(8)

名前

showhsmode - CPU の高速モードの設定値を表示します。

形式

showhsmode

showhsmode -h

説明

showhsmode は、CPU の高速モードの設定値を表示するコマンドです。

設定値には有効（on）と無効（off）があります。初期設定値は無効（off）です。

本コマンドは、SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4/M10-4S ではサポートされていません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 CPU の高速モードの現在の設定値を表示します。

```
XSCF> showhsmode
off
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

sethsmode(8)

名前

showhttps - XSCF ネットワークに設定されている HTTPS サービスの状態を表示します。

形式

showhttps [-M]

showhttps -t [-M]

showhttps -h

説明

showhttps は、XSCF ネットワークに現在設定されている HTTPS サービスの状態を表示するコマンドです。

HTTPS サービスが動作しているかどうかと、認証に必要な情報のインストール状態が確認できます。インストールされている場合は、インストールされた日付も表示されます。

以下の状態が表示されます。

HTTPS status	HTTPS サービスが動作しているかどうか
Server key	ウェブサーバの秘密鍵がインストールされているかどうか
CA key	認証局の秘密鍵がインストールされているかどうか
CA cert	認証局の証明書がインストールされているかどうか
CSR	ウェブサーバ証明書要求

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-t	設定されている証明書を表示します。

詳細説明

sethttps(8) を使用すると、XSCF ネットワークの HTTPS サービスが設定できます。

使用例

使用例 1 HTTPS サービスの状態と鍵のインストール状態を表示します。

```
XSCF> showhttps
HTTPS status: enabled
Server key: installed in Apr 24 12:34:56 JST 2010
CA key: installed in Apr 24 12:00:34 JST 2010
CA cert: installed in Apr 24 12:00:34 JST 2010
```

```
CSR:
-----BEGIN CERTIFICATE REQUEST-----
MIIBwjCCASsCAQAwgYExCzAJBgNVBAYTAmpqMQ4wDAYDVQQIEwVzdGF0ZTERMA8G
A1UEBxMIbG9jYWxpdHkxFTATBgNVBAoTDG9yZ2FuaXphdGlvbjEPMA0GA1UECxMG
b3JnYW5pMQ8wDQYDVQQDEwZjb21tb24xFjAUBgkqhkiG9w0BCQEWB2VlLm1haWww
gZ8wDQYJKoZIhvcNAQEBBQADgY0AMIGJAoGBAJ5D57X/k42LcipTWBWzv2GrxaVM
5GEyx3bdBW8/7WZhnd3uiZ9+ANlvRAuw/YYy7I/pAD+NQJesBcBjuyj9x+IiJl9F
MrI5fR8pOIywVOdbMPCar09rrU45bVeZhTyi+uQOdWLoX/Dhq0fm2BpYuh9WukT5
pTEg+2dABg8UdHmNAgMBAAGgADANBgkqhkiG9w0BAQQFAAOBgQAux1jH3dyB6Xho
PgBuVIakDzIKEPipK9qQfC57YI43uRBGRubu0AHEcLVue5yTu6G5SxHTCq07tV5g
38UHSg5Kqy9QuWHWMri/hxm0kQ4gBpApjNb6F/B+ngBE3j/thGbEuvJb+0wbycvu
5jrhB/ZV9k8X/MbDOxSx/U5nF+Zuyw==
-----END CERTIFICATE REQUEST-----
```

使用例 2 設定されている証明書を表示します。

```
XSCF> showhttps -t
Certificate:
    Data:
        Version: 3 (0x2)
        Serial Number:
            cb:92:cc:ee:79:6c:d3:09
        Signature Algorithm: sha256WithRSAEncryption
        Issuer: C=JP, ST=Kanagawa, O=Kawasaki, OU=luna2, CN=luna2
ization Validation CA
        Validity
            Not Before: May 24 07:15:17 2017 GMT
            Not After : May 22 07:15:17 2027 GMT
        Subject: C=JP, ST=Kanagawa, O=Fujitsu, OU=Fujitsu, CN=XSCF/
emailAddress=hoge@hoge
        Subject Public Key Info:
            Public Key Algorithm: rsaEncryption
                Public-Key: (2048 bit)
                Modulus:
                    00:c7:5f:f1:61:ad:ba:4b:64:25:7e:49:ba:7a:6c:
                    d4:5c:b1:8c:2d:15:9f:8a:2f:70:c8:cc:4a:3d:2c:
                    bd:0a:b7:f8:1d:4a:12:93:ea:22:d5:be:85:69:d7:
                    0b:31:a8:1a:ae:34:c6:f6:e8:a1:c8:cc:02:08:be:
                    bc:2b:e9:34:8f:f2:ee:4a:93:26:a0:47:93:7e:b7:
                    f8:3f:73:24:55:45:02:14:f7:c2:d8:56:f7:a1:cf:
                    2f:2d:3e:d4:ff:05:1a:82:25:34:1f:f2:1a:83:91:
                    a7:35:98:7d:2a:92:53:6b:19:75:91:86:b5:2e:ef:
                    e9:79:ec:a0:5c:bc:88:1c:7b:53:2f:ab:a2:18:77:
                    84:42:1e:4c:80:c4:91:28:fe:0a:35:8d:27:f9:90:
                    46:22:70:71:10:0d:03:cb:2e:5c:e9:27:20:b3:d5:
                    bd:15:39:16:c1:18:7a:a7:13:8f:40:e8:1e:5d:39:
                    71:bc:ca:4b:ac:c3:74:9f:03:5e:b3:3c:1c:c8:2e:
                    1b:bf:31:c4:4b:33:9a:07:d4:28:e3:f2:6d:19:37:
                    10:33:4f:04:85:3b:40:ce:b2:be:f4:16:c1:7c:a9:
                    6a:5e:fc:c0:ae:a1:e8:49:a5:b4:ac:37:e3:3f:ca:
                    cf:c1:5d:fa:00:8e:d3:33:1f:13:7d:76:b1:ad:ce:
                    e4:27
                Exponent: 65537 (0x10001)
```

```
        X509v3 extensions:
            X509v3 Basic Constraints:
                CA:FALSE
            Netscape Cert Type:
                SSL Server
            Netscape Comment:
                OpenSSL Generated Certificate
            X509v3 Subject Key Identifier:
                DE:71:13:37:5D:74:7E:D5:B8:C0:96:F8:AF:A7:FB:AB:EA:B9:DB
:07
            X509v3 Authority Key Identifier:
                keyid:BE:0D:11:61:59:98:0B:2F:29:42:88:6F:94:38:7C:D0:6A
:FC:EB:4B

    Signature Algorithm: sha1WithRSAEncryption
        b9:6d:06:3a:b5:71:51:9d:15:b6:55:08:64:76:9e:13:69:1b:
        ce:6b:b4:be:aa:48:49:55:29:c3:6f:9e:b1:ca:0c:6f:96:c3:
        e9:f7:fd:91:03:ce:a3:b5:d8:27:58:a4:a3:81:f1:60:81:3a:
        fb:75:5e:36:a6:5d:05:3d:bd:cf:6b:34:13:41:c2:68:94:51:
        f2:4b:1a:02:50:e6:bc:8c:48:d2:87:84:cf:12:8b:de:2d:da:
        10:b5:1b:41:94:b6:c4:83:1e:1c:ae:0d:0c:dc:01:21:91:49:
        8c:44:4c:1d:2f:52:3a:b0:19:da:ed:5b:6a:aa:b2:05:bc:76:
        3c:f4:90:35:97:81:5c:bf:64:cb:a4:5d:ed:78:cf:97:b1:8a:
        43:7b:4b:82:4f:21:83:60:28:18:b1:87:ba:4f:a9:7c:f4:ac:
        47:a2:81:ac:70:e7:50:b9:ec:52:ab:66:72:ef:c5:c9:98:89:
        4b:ae:3a:fe:d3:46:be:8b:b8:c8:7c:99:2a:8e:7f:8c:ec:10:
        b6:cb:60:8c:4b:b7:8f:c0:5d:4b:44:45:cb:48:35:69:b3:7c:
        37:c2:33:fe:dd:a4:9f:19:6d:a3:0e:cd:79:7c:05:6e:1b:44:
        d9:b6:21:76:6f:6a:1e:fc:0d:1f:7f:e9:61:9a:70:70:9f:f5:
        17:42:f7:b6
```

使用例 3 設定されている証明書を表示します（証明書が設定されていない場合)。

```
XSCF> showhttps -t
No certificate.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

sethttps（8）

名前

showhwproperty - ハードウェア特性の設定を表示します。

形式

showhwproperty -p *ppar_id*

showhwproperty -h

説明

showhwproperty は、物理パーティション（PPAR）に設定されているハードウェア特性を表示します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-p *ppar_id*	表示する PPAR の ID を指定します。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 のハードウェア特性を表示します。

```
XSCF> showhwproperty -p 00
SSB Mitigation        : enabled
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

sethwproperty(8)

名前 showinterimpermit - CPU コアの一時利用機能の状態および情報を表示します。

形式 **showinterimpermit** [-M] [-v] [-p *ppar_id*]

showinterimpermit -h

説明 showinterimpermit は、CPU コアの一時利用機能の状態および情報を表示するコマンドです。

"-v" を指定しない場合、現在の CPU コアの一時利用機能の有効／無効の状態、有効期限切れまでの残日数、有効期限切れ状態、または再び利用できるかどうかが表示されます。

"-v" を指定した場合、CPU コアの一時利用機能が再利用可能な状態であるかを、詳細情報とともに表示します。

ppar_id を指定しない場合は、すべての PPAR の CPU コアの一時利用機能の状態および情報が表示されます。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-p *ppar_id*	表示対象の PPAR-ID を指定します。
-v	CPU コアの一時利用機能が再利用可能な状態であるかを表示します。

詳細説明

CPU コアの一時利用機能の状態は、PPAR ごとに以下の形式で表示されます。

`Interim Permit for PPAR` *X*: *status*

X PPAR の ID

status CPU コアの一時利用機能の状態および情報が、以下のいずれかで表示されます。

`disabled` CPU コアの一時利用機能は無効になっています。一度も有効に設定されていない（デフォルト）ため、有効にできることを示しています。

`enabled [...]` CPU コアの一時利用機能は有効です。
`[ ]` 内には、有効期限が切れるまでの残日数を示すメッセージが表示されます。有効期限が切れるまでの残日数は 1 から 29 までの数値で表示されます。
例 1:
`enabled [25 days remaining]`
有効期限が残り 25 日であることを示しています。
例 2:
`enabled [less than 1 day remaining]`
有効期限が切れる当日であることを示しています。

`expired` CPU コアの一時利用機能は有効期限切れの状態であることを示しています。
この状態になると、使用できる CPU コアリソースが減少し、システムの論理ドメインが停止するおそれがあります。CPU コアリソースの自動削減を避けるために、十分に足りるだけの購入済みの CPU コア アクティベーションをすぐに追加し、`setcod`(8) を実行してそれらを PPAR の CPU コアリソースに割り当てるか、または論理ドメインに割り当てた CPU コアリソースの合計数が、購入済みの CPU コア アクティベーションの数以下になるように、CPU コアリソースを論理ドメインから解放してください。その後、CPU コアの一時利用機能を無効にします。
CPU コアの一時利用機能を無効にすると、*status* は「`cannot be enabled again`」に変更されます。

`cannot be enabled again`

CPU コアの一時利用機能は再利用できない状態です。CPU コアの一時利用機能を一度利用したことがあるため、再利用できないことを示しています。この状態の PPAR の CPU コアの一時利用機能を再利用するには、購入済みの CPU コア アクティベーションキーを `addcodactivation`(8) を使用してシステムに追加し、さらに PPAR に割り当てる CPU コア アクティベーションの数を `setcod`(8) を使用して増やす必要があります。なお、XCP 232*x* では対処が異なります。詳細は『SPARC M12/M10 システム運用・管理ガイド』を参照してください。

`-v` オプションを指定すると、CPU コアの一時利用機能が再利用可能な状態であるかが PPAR ごとに表示されます。

`CPU Activation Information from the last time Interim Permit was enabled`

`Registered CPU Activation Keys (in units of cores)`

最後に `setinterimpermit` を実行して CPU コアの一時利用機能を有効に設定した時点で記録された、システム全体にコア単位で登録されていた購入済みの CPU コア アクティベーションキーの数が表示されます。まだ CPU コアの一時利用機能を一度も使用していない場合は、「-」が表示されます。

`Purchased Cores Assigned to PPAR`

最後に `setinterimpermit` を実行して CPU コアの一時利用機能を有効に設定した時点で記録された、PPAR に割り当てられていた CPU コア アクティベーションの数が表示されます。まだ CPU コアの一時利用機能を一度も使用していない場合は、「-」が表示されます。

`Current CPU Activation Information`

`Registered CPU Activation Keys (in units of cores)`

システム全体にコア単位で現在登録されている、購入済みの CPU コア アクティベーションキーの数が表示されます。

`Purchased Cores Assigned to PPAR`

PPAR に現在割り当てられている CPU コア アクティベーションの数（コア単位）が表示されます。CPU コアの一時利用機能により割り当てられた数は含みません。

`Status` CPU コアの一時利用機能が無効で、有効に設定できる場合、「Interim Permit is disabled (can be enabled)」と表示されます。

CPU コアの一時利用機能が現在有効で、利用されている場合、「Interim Permit is enabled [xx days remaining]」と表示されます。

CPU コアの一時利用機能が有効だが、有効期限切れの場合、「Interim Permit is expired」と表示されます。

CPU コアの一時利用機能が無効で、有効に設定できない場合、「Interim Permit cannot be enabled again (until more Purchased CPU Activations are installed and Purchased cores are assigned to the PPAR)」と表示されます。

CPU コアの一時利用機能を一度も使用していない場合、「-」が表示されます。

Status が「Interim Permit is disabled (can be enabled)」の場合、`setinterimpermit`(8) を使用して、PPAR に対して CPU コアの一時利用機能を再び有効に設定することができます。

Status が「Interim Permit is expired」の場合、CPU コアの一時利用機能を再び有効に設定するためには、一度 "`setinterimpermit -p` *ppar_id* `-c disable`" を実行して、CPU コアの一時利用機能を無効に設定する必要があります。実行後、Status には「Interim Permit is disabled (can be enabled)」または「Interim Permit cannot be enabled again (until more Purchased CPU Activations are installed and Purchased cores are assigned to the PPAR)」と表示されます。

`showinterimpermit` は XCP 2320 からサポートされますが、XCP 232*x* では SPARC M10-1/M10-4 のモデルだけでサポートされます。CPU コアの一時利用機能を再利用できるのは、XCP2330 以降です。お使いのシステムが XCP 232*x* の場合、CPU コアの一時利用機能を有効に設定できるのは SPARC M10-1/M10-4 のシステムだけであり、かつ 1 回のみです。そのため、XCP232*x* をお使いの場合、誤って有効に設定しないように注意してください。

お使いのシステムが XCP 2330 以降の場合、CPU コアの一時利用機能を再利用できます。ただし、再利用するためには以下の条件を満たす必要があります。

XCP 232*x* で CPU コアの一時利用機能を使用したことがあり、XCP 2330 以降にファームウェアアップデートを行うと、以下の条件を満たしても、CPU コアの一時利用機能を再び有効に設定することはできません。この場合は、担当営業にお問い合わせください。

CPU コアの一時利用機能を再び利用するには、CPU コアの一時利用機能を最後に使用後、以下のすべての条件を満たす必要があります。

1. CPU コアの一時利用機能が現在有効であれば、setinterimpermit(8) を実行して、一度無効に設定すること。実行後、Status は「Interim Permit cannot be enabled again (until more Purchased CPU Activations are installed and Purchased cores are assigned to the PPAR)」に変更されます。
2. システムに登録されている購入済みの CPU コア アクティベーションキーの数を、addcodactivation(8) を実行して増やしていること。「Current CPU Activation Information」の「Registered CPU Activation Keys (in units of cores)」が、「CPU Activation Information from the last time Interim Permit was enabled」の「Registered CPU Activation Keys (in units of cores)」より大きい値であることが必要です。
3. CPU コアの一時利用機能を再び有効にしたい PPAR（SPARC M12-2S/M10-4S の場合）／システム（SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合）に割り当てられている CPU コアリソースの数を、setcod(8) を実行して増やしていること。「Current CPU Activation Information」の「Purchased Cores Assigned to PPAR」が、「CPU Activation Information from the last time Interim Permit was enabled」の「Purchased Cores Assigned to PPAR」より大きい値であることが必要です。

上記の 3 つの条件をすべて満たす場合、Status は「Interim Permit cannot be enabled again (until more Purchased CPU Activations are installed and Purchased cores are assigned to the PPAR)」から、「Interim Permit is disable (can be enabled)」に変更されます。

「Interim Permit is disabled (can be enabled)」が表示された場合は、CPU コアの一時利用機能を再び有効に設定できます。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 の CPU コアの一時利用機能の情報を表示します。（有効に設定し、残り日数が 25 日の場合）

```
XSCF> showinterimpermit -p 0
Interim Permit for PPAR 0: enabled [25 days remaining]
```

使用例 2 PPAR-ID 0 の CPU コアの一時利用機能の情報を表示します。（有効に設定し、残り日数が 1 日の場合）

```
XSCF> showinterimpermit -p 0
Interim Permit for PPAR 0: enabled [1 day remaining]
```

使用例 3 PPAR-ID 0 の CPU コアの一時利用機能の情報を表示します。（有効に設定し、有効期限切れが当日の場合）

```
XSCF> showinterimpermit -p 0
Interim Permit for PPAR 0: enabled [less than 1 day remaining]
```

使用例 4 PPAR-ID 0 の CPU コアの一時利用機能の情報を表示します。(一度も有効にせず、無効のままの場合)

```
XSCF> showinterimpermit -p 0
Interim Permit for PPAR 0: disabled
```

使用例 5 PPAR-ID 0 の CPU コアの一時利用機能の情報を表示します。(一度有効に設定したため、再利用できない場合)

```
XSCF> showinterimpermit -p 0
Interim Permit for PPAR 0: cannot be enabled again
```

使用例 6 PPAR-ID 0 の CPU コアの一時利用機能の情報を表示します。(CPU コアの一時利用機能が有効期限切れになった場合)

```
XSCF> showinterimpermit -p 0
Interim Permit for PPAR 0: expired
```

使用例 7 すべての PPAR の CPU コアの一時利用機能の情報を表示します。(SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合)

```
XSCF> showinterimpermit
Interim Permit for PPAR 0: enabled [25 days remaining]
```

使用例 8 すべての PPAR の CPU コアの一時利用機能の情報を表示します。(SPARC M12-2S/M10-4S でプラットフォームに関する権限を持つユーザーの場合)

```
XSCF> showinterimpermit
Interim Permit for PPAR 0: disabled
Interim Permit for PPAR 1: enabled [29 days remaining]
Interim Permit for PPAR 2: expired
Interim Permit for PPAR 3: cannot be enabled again
Interim Permit for PPAR 4: disabled
Interim Permit for PPAR 5: disabled
Interim Permit for PPAR 6: disabled
Interim Permit for PPAR 7: disabled
Interim Permit for PPAR 8: disabled
Interim Permit for PPAR 9: disabled
Interim Permit for PPAR 10: disabled
Interim Permit for PPAR 11: disabled
Interim Permit for PPAR 12: disabled
Interim Permit for PPAR 13: disabled
Interim Permit for PPAR 14: disabled
Interim Permit for PPAR 15: disabled
```

使用例 9 すべての PPAR について、CPU コアの一時利用機能の情報を表示します。(SPARC M12-2S/M10-4S で PPAR#0、#1、#3 の権限を持つユーザーの場合)

```
XSCF> showinterimpermit
```

```
Interim Permit for PPAR 0: disabled
Interim Permit for PPAR 1: enabled [29 days remaining]
Interim Permit for PPAR 3: cannot be enabled again
```

使用例 10 PPAR-ID 0 について、CPU コアの一時利用機能が再利用可能な状態であるかを表示します。

```
XSCF> showinterimpermit -v -p 0
PPAR-ID: 0
  Status: Interim Permit is disabled (can be enabled)

  CPU Activation Information from the last time Interim Permit was enabled:
    Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    16
    Purchased Cores Assigned to PPAR:                       8

  Current CPU Activation Information:
    Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    32
    Purchased Cores Assigned to PPAR:                      16
```

使用例 11 すべての PPAR について、CPU コアの一時利用機能が再利用可能な状態であるかを表示します。(SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合)

```
XSCF> showinterimpermit -v
PPAR-ID: 0
  Status: Interim Permit is disabled (can be enabled)

  CPU Activation Information from the last time Interim Permit was enabled:
    Registered CPU Activation Keys (in units of cores):     2
    Purchased Cores Assigned to PPAR:                       4

  Current CPU Activation Information:
    Registered CPU Activation Keys (in units of cores):     4
    Purchased Cores Assigned to PPAR:                       8
```

使用例 12 すべての PPAR について、CPU コアの一時利用機能が再利用可能な状態であるかを表示します。(SPARC M12-2S/M10-4S で platadm 権限を持つ場合)

```
XSCF> showinterimpermit -v
PPAR-ID: 0
  Status: Interim Permit is disabled (can be enabled)

  CPU Activation Information from the last time Interim Permit was enabled:
    Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    24
    Purchased Cores Assigned to PPAR:                       8

  Current CPU Activation Information:
    Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    40
    Purchased Cores Assigned to PPAR:                      16

PPAR-ID: 1
  Status: Interim Permit cannot be enabled again
  (until more Purchased CPU Activations are installed and Purchased cores
```

```
    are assigned to the PPAR)

    CPU Activation Information from the last time Interim Permit was enabled:
      Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    24
      Purchased Cores Assigned to PPAR:                       8

    Current CPU Activation Information:
      Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    40
      Purchased Cores Assigned to PPAR:                       8

  PPAR-ID: 2
    Status: Interim Permit is enabled [20 days remaining]

    CPU Activation Information from the last time Interim Permit was enabled:
      Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    24
      Purchased Cores Assigned to PPAR:                       8

    Current CPU Activation Information:
      Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    40
      Purchased Cores Assigned to PPAR:                       8

      :

  PPAR-ID: 15
    Status: -

    CPU Activation Information from the last time Interim Permit was enabled:
      Registered CPU Activation Keys (in units of cores):     -
      Purchased Cores Assigned to PPAR:                       -

    Current CPU Activation Information:
      Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    40
      Purchased Cores Assigned to PPAR:                       0
```

使用例 13 すべての PPAR について、CPU コアの一時利用機能が再使用可能な状態であるかを表示します。(SPARC M12-2S/M10-4S で PPAR#0、#1、#3 に対して pparadm 権限を持つ場合)

```
XSCF> showinterimpermit -v
PPAR-ID: 0
  Status: Interim Permit is disabled (can be enabled)

  CPU Activation Information from the last time Interim Permit was enabled:
    Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    24
    Purchased Cores Assigned to PPAR:                       8

  Current CPU Activation Information:
    Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    40
    Purchased Cores Assigned to PPAR:                      16

PPAR-ID: 1
  Status: Interim Permit cannot be enabled again
  (until more Purchased CPU Activations are installed and Purchased cores
```

```
    are assigned to the PPAR)

   CPU Activation Information from the last time Interim Permit was enabled:
     Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    24
     Purchased Cores Assigned to PPAR:                       8

   Current CPU Activation Information:
     Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    40
     Purchased Cores Assigned to PPAR:                       8

 PPAR-ID: 3
   Status: -

   CPU Activation Information from the last time Interim Permit was enabled:
     Registered CPU Activation Keys (in units of cores):     -
     Purchased Cores Assigned to PPAR:                       -

   Current CPU Activation Information:
     Registered CPU Activation Keys (in units of cores):    40
     Purchased Cores Assigned to PPAR:                       0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addcodactivation(8), **deletecodactivation**(8), **setcod**(8), **setinterimpermit**(8), **showcod**(8), **showcodactivation**(8), **showcodactivationhistory**(8), **showcodusage**(8), **showinterimpermitusage**(8)

名前

showinterimpermitusage - CPU コア アクティベーションや CPU コアリソースに関する情報を表示します。

形式

`showinterimpermitusage [-M] [-p` *ppar_id*`]`

`showinterimpermitusage -h`

説明

`showinterimpermitusage` は、CPU コアの一時利用機能に関連した情報を PPAR 単位に表示するコマンドです。PPAR に実装されている CPU コアの数、PPAR に割り当てられた CPU コア アクティベーションの数、PPAR が現在使用中の CPU コアリソースの数、CPU コアの一時利用機能によって追加で使用可能になった CPU コア アクティベーションの数を表示します。

`platadm` 権限または `platop` 権限を持つユーザーが `showinterimpermitusage` を実行した場合は、システム全体の CPU コア アクティベーションの情報および CPU コアリソースの利用状況が PPAR 単位に表示されます。

対象の PPAR に対する権限だけを持っているユーザーが `showinterimpermitusage` を実行した場合は、対象の PPAR の CPU コアリソースの現在の利用状況が表示されます。

ppar_id を指定しない場合は、すべての PPAR の CPU コア アクティベーションの情報および CPU コアリソースの利用状況が PPAR 単位に表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

`platadm`, `platop`, `fieldeng`	すべての PPAR に対して実行できます。
`pparadm`, `pparmgr`, `pparop`	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-M`	テキストを 1 画面ずつ表示します。
`-p` *ppar_id*	表示対象の PPAR-ID を指定します。

詳細説明

`Installed Cores`	PPAR に実装されている CPU コアの数
`Purchased Cores Assigned to PPAR`	PPAR に割り当てられている CPU コア アクティベーションの数
`Cores In Use by Ldoms`	Oracle VM Server for SPARC の論理ドメインで現在使用されている CPU コアリソースの数
`Interim Assignable Cores`	CPU コアの一時利用機能により追加で使用可能になった CPU コア アクティベーションの数 「Installed Cores」から「Purchased Cores Assigned to PPAR」を引いた値が表示されます。 CPU コアの一時利用機能が無効または有効期限切れの場合は「0」が表示されます。
`In Use Interim Cores`	CPU コアの一時利用機能によって追加で使用可能になった CPU コア アクティベーションの数のうち、Oracle VM Server for SPARC の論理ドメインで現在使用されている CPU コアリソース（CPU コアの一時利用機能によって一時的に利用できるコア）の数 「Cores In Use by Ldoms」から「Purchased Cores Assigned to PPAR」を引いた値が表示されます。 「Cores In Use by Ldoms」が「Purchased Cores Assigned to PPAR」の範囲内の場合は「0」が表示されます。 CPU コアの一時利用機能が無効または有効期限切れの場合も「0」が表示されます。

使用例

使用例 1 システム全体の CPU コア アクティベーション、および CPU コアリソースの情報を表示します。（SPARC M12-2S/M10-4S で platadm 権限を持つユーザーの場合）

```
XSCF> showinterimpermitusage

PPAR-ID: 0
  Installed Cores:                      32
  Purchased Cores Assigned to PPAR:     16
  Cores In Use by Ldoms:                32
  Interim Assignable Cores:             16
  In Use Interim Cores:                 16

PPAR-ID: 1
  Installed Cores:                      32
  Purchased Cores Assigned to PPAR:     16
  Cores In Use by Ldoms:                 8
```

```
    Interim Assignable Cores:            0
    In Use Interim Cores:                0

  PPAR-ID: 2
    Installed Cores:                    32
    Purchased Cores Assigned to PPAR:    4
    Cores In Use by Ldoms:              12
    Interim Assignable Cores:           28
    In Use Interim Cores:                8

  PPAR-ID: 3
    Installed Cores:                    32
    Purchased Cores Assigned to PPAR:   10
    Cores In Use by Ldoms:               8
    Interim Assignable Cores:           22
    In Use Interim Cores:                0

     :

  PPAR-ID: 15
    Installed Cores:                     0
    Purchased Cores Assigned to PPAR:    0
    Cores In Use by Ldoms:               0
    Interim Assignable Cores:            0
    In Use Interim Cores:                0

  Note:
    Please confirm the value of "Cores In Use by Ldoms" using the Oracle VM
    Server for SPARC ldm command.
    The XSCF may take up to 20 minutes to reflect the "Cores In Use by Ldoms"
    of logical domains.
```

使用例 2 システム全体の CPU コア アクティベーションや CPU コアのリソースの情報を表示します。(SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 で platadm 権限を持つユーザーの場合)

```
  XSCF> showinterimpermitusage

  PPAR-ID: 0
    Installed Cores:                    16
    Purchased Cores Assigned to PPAR:    8
    Cores In Use by Ldoms:              12
    Interim Assignable Cores:            8
    In Use Interim Cores:                4

  Note:
    Please confirm the value of "Cores In Use by Ldoms" using the Oracle VM
    Server for SPARC ldm command.
    The XSCF may take up to 20 minutes to reflect the "Cores In Use by Ldoms"
    of logical domains.
```

使用例 3 PPAR ごとの CPU コア アクティベーションおよび CPU コアリソースの情報を表示します。(SPARC M12-2S/M10-4S で PPAR#0、#2 に対して pparadm 権限を持つユーザー場合)

```
XSCF> showinterimpermitusage

PPAR-ID: 0
  Installed Cores:                      32
  Purchased Cores Assigned to PPAR:     16
  Cores In Use by Ldoms:                32
  Interim Assignable Cores:             16
  In Use Interim Cores:                 16

PPAR-ID: 2
  Installed Cores:                      32
  Purchased Cores Assigned to PPAR:      4
  Cores In Use by Ldoms:                12
  Interim Assignable Cores:             28
  In Use Interim Cores:                  8

Note:
  Please confirm the value of "Cores In Use by Ldoms" using the Oracle VM
  Server for SPARC ldm command.
  The XSCF may take up to 20 minutes to reflect the "Cores In Use by Ldoms"
  of logical domains.
```

使用例 4 PPAR#2 の CPU コア アクティベーションおよび CPU コアリソースの情報を表示します。

```
XSCF> showinterimpermitusage -p 2

PPAR-ID: 2
  Installed Cores:                      32
  Purchased Cores Assigned to PPAR:      4
  Cores In Use by Ldoms:                12
  Interim Assignable Cores:             28
  In Use Interim Cores:                  8

Note:
  Please confirm the value of "Cores In Use by Ldoms" using the Oracle VM
  Server for SPARC ldm command.
  The XSCF may take up to 20 minutes to reflect the "Cores In Use by Ldoms"
  of logical domains.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addcodactivation(8), **deletecodactivation** (8), **setcod** (8), **setinterimpermit** (8), **showcod** (8), **showcodactivation** (8), **showcodactivationhistory** (8), **showcodusage** (8)

名前

showldap - XSCF の Lightweight Directory Access Protocol（LDAP）設定を表示します。

形式

showldap

showldap [-c]

showldap -h

説明

showldap は、XSCF の LDAP 設定を表示するコマンドです。

オプションを指定せずに showldap を実行すると､LDAP サーバへの接続時に使用される CA 証明書とパスワードを除くすべての LDAP 設定が表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c	LDAP サーバの CA 証明書を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1　すべての LDAP 設定データを表示します。

```
XSCF> showldap
Bind Name: user
Base Distinguishing Name: ou=people,dc=company,dc=com
LDAP Search Timeout: 60
Bind password: Set
LDAP Servers: ldap://company.com:389
CERTS: None
```

使用例 2　LDAP サーバの CA 証明書を表示します。

```
XSCF> showldap -c
Certificate:
  Data:
    Version: 3 (0x2)
    Serial Number:
      fc:c1:32:c4:02:72:35:ea
    Signature Algorithm: sha256WithRSAEncryption
    Issuer: C=JP, ST=Kanagawa, L=Kawasaki, O=Fujitsu, OU=Fujitsu
    Validity
      Not Before: Jul 29 19:57:22 2013 GMT
      Not After : Jul 29 19:57:22 2014 GMT
    Subject: C=JP, ST=Kanagawa, L=Kawasaki, O=Fujitsu, OU=Fujitsu
    Subject Public Key Info:
      Public Key Algorithm: rsaEncryption
```

```
        RSA Public Key: (1024 bit)
          Modulus (1024 bit):
            00:db:dc:60:74:41:ab:a6:cf:3d:6c:43:ec:58:30:
            65:29:15:92:c7:e7:af:d9:4c:8b:69:63:f4:77:66:
            3a:27:db:4a:05:60:3a:39:d6:a8:e1:b1:9f:21:93:
            1f:a1:c0:24:66:f2:0c:4b:7c:0f:7f:44:45:ee:99:
            49:8f:48:f5:0f:b7:d5:c5:23:67:26:0c:b8:56:ea:
            02:2a:c3:06:e2:97:5c:cc:ca:82:2b:02:7f:f1:14:
            2a:7e:3c:0a:d2:af:ab:35:53:d6:55:df:6b:f5:91:
            53:95:21:4d:b0:e1:f4:d9:bc:9c:93:b0:72:0c:85:
            3f:0e:91:bc:72:e2:fe:c9:93
          Exponent: 65537 (0x10001)
      X509v3 extensions:
        X509v3 Subject Key Identifier:
          1D:23:C0:57:EB:AA:29:CF:BD:A0:40:61:AC:B9:0D:FE:09:27:50:45
        X509v3 Authority Key Identifier:
          keyid:1D:23:C0:57:EB:AA:29:CF:BD:A0:40:61:AC:B9:0D:FE:09:27:50:45
          DirName:/C=JP/ST=Kanagawa/L=Kawasaki/O=Fujitsu, Inc./OU=Fujitsu
          serial:FC:C1:32:C4:02:72:35:EA

        X509v3 Basic Constraints:
          CA:TRUE
    Signature Algorithm: sha256WithRSAEncryption
      90:56:fc:50:79:81:b1:59:ec:51:24:6f:d7:9c:e7:ac:63:09:
      7b:74:5f:3c:72:94:d7:91:be:f2:f3:9d:b6:65:76:a0:3f:03:
      b1:96:06:48:d3:55:f8:2c:4e:3d:17:ba:66:47:81:a5:54:7f:
      c3:01:47:c0:cb:8b:4a:0b:3f:fc:e6:45:28:4d:1b:8d:da:72:
      9f:8f:c5:5f:61:2b:96:e6:21:c3:55:3c:02:81:e2:cb:bd:ea:
      00:18:59:93:5f:36:60:be:73:64:1a:41:14:ac:da:8d:d5:18:
      e8:16:40:77:fd:3a:ce:a4:60:a8:fd:3c:11:0f:72:e4:23:2d:
      5c:d3
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setldap(8)

名前	showldapssl - LDAP over SSL の構成およびメッセージを表示します。

形式

showldapssl

showldapssl `cert` [`-v`] [`-i` *n*]

showldapssl `log` [`-M`] [`-C`] [`-S` *start_record_number*] [`-E` *end_record_number*]

showldapssl `log -f`

showldapssl `group administrator` [`-i` *n*]

showldapssl `group operator` [`-i` *n*]

showldapssl `group custom` [`-i` *n*]

showldapssl `userdomain` [`-i` *n*]

showldapssl `usermap`

showldapssl `defaultrole`

showldapssl `server` [`-i` *n*]

showldapssl `-h`

説明

`showldapssl` は、LDAP over SSL の構成および診断メッセージを表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、`useradm` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-f`	診断メッセージをリアルタイムで表示します。このオプションが使用されると、コマンドは終了しません。それぞれの診断メッセージが登録されるごとに表示されます。リアルタイム表示を停止するには、[Ctrl]+[C] キーを押します。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-i` *n*	インデックスマーカーを、1 から 5 の値で設定します。`-i` なし、または`-i` に何も値を設定せずに実行した場合、オペランドにより以下のように動作します。
	
	`group`、`userdomain`
	　インデックスマーカーの 1 から 5 を逐次検索します。
	
	`cert`
	　プライマリ LDAP over SSL サーバの CA 証明書を表示します。
	
	`server`
	　プライマリ LDAP over SSL サーバの構成を表示します。

`-v`	詳細出力を指定します。`cert` オペランドとのみ併用され、CA 証明書全文を表示します。
`-C`	出力結果の末尾に、ログ内のレコード数を付加します。
`-E`	表示する最後のレコード番号を指定します。このとき、*end_record_number* には、ログ内のどのレコード番号でも指定することができます。ログ内のレコード数を取得するには、`-C` オプションを使用します。
`-M`	テキストを 1 画面ずつ表示します。
`-S`	表示する最初のレコード番号を指定します。このとき、*start_record_number* には、ログ内のどのレコード番号でも指定することができます。ログ内のレコード数を取得するには、`-C` オプションを使用します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

`cert`	現在の CA 証明書を表示します。 `-i` を省略した場合はプライマリ LDAP over SSL サーバを表示します。`-i` を指定した場合は代替 LDAP over SSL サーバを表示します。
`log`	診断メッセージを表示します。
`group administrator`	現在のグループ構成を表示します。
`group operator`	現在のグループ構成を表示します。
`group custom`	現在のグループ構成を表示します。
`userdomain`	現在の userdomain 設定を表示します。
`usermap`	現在のユーザーマッピング設定を表示します。

`defaultrole`	現在の defaultrole 設定を表示します。
`server`	現在の LDAP over SSL サーバ設定を表示します。 `-i` を省略した場合はプライマリ LDAP over SSL サーバを表示します。`-i` を指定した場合は代替 LDAP over SSL サーバを表示します。

使用例

使用例 1 現在の LDAP over SSL の状態を表示します。

```
XSCF> showldapssl
usermapmode: enabled
state: enabled
strictcertmode: enabled
timeout: 4
logdetail: none
```

使用例 2 プライマリ LDAP over SSL サーバの CA 証明書を表示します。

```
XSCF> showldapssl cert
Primary Server:
certstatus = certificate present
issuer = C=US, ST=California, L=San Diego, O=aCompany,
OU=System Group, CN=John User serial number = 0 (00000000)
subject = C=US, ST=California, L=San Diego, O=aCompany,
OU=System Group, CN=John User serial number = 0 (00000000)
valid from = Apr 18 05:38:36 2013 GMT
valid until = Apr 16 05:38:36 2023 GMT
version = 3 (0x02)
```

使用例 3 指定した診断メッセージを表示します。

```
XSCF> showldapssl log -S 5 -E 10
Thu Sep 2 01:43 2013 (LdapSSL): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:44 2013 (LdapSSL): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:47 2013 (LdapSSL): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:51 2013 (LdapSSL): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:52 2013 (LdapSSL): -error- authentication status: auth-ERROR
Thu Sep 2 01:55 2013 (LdapSSL): -error- authentication status: auth-ERROR
```

使用例 4 管理者グループ 3 の構成を表示します。

```
XSCF> showldapssl group administrator -i 3
Administrator Group 3
 name: CN=pSuperAdmin,OU=Groups,DC=sales,DC=company,DC=com
```

使用例 5 代替 LDAP over SSL サーバ 1 の設定を表示します。ポート番号 0 は、LDAP over SSL のデフォルトのポートが使用されていることを示します。

```
XSCF> showldapssl server -i 1
Alternate Server  1
address: (none)
port: 0
```

使用例 6 オプションのユーザーマッピング設定を表示します。

```
XSCF> showldapssl usermap
attributeInfo: (&(objectclass=person)(uid=<USERNAME>))
binddn: cn=Manager,dc=company,dc=com
bindpw: Set
searchbase: ou=people,dc=company,dc=com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setldapssl(8)

名前

showlocator - オペレーションパネルの CHECK LED の状態を表示します。

形式

showlocator [-a | -b *bb_id*]

showlocator -h

説明

showlocator は、SPARC M12/M10 システムの筐体およびクロスバーボックスに搭載されているオペレーションパネルの、CHECK LED の点滅状態を表示するコマンドです。

以下のいずれかの状態が表示されます。

Off（消灯）	正常、入力電源切断中、停電のいずれかの状態であることを表します。
Blinking（点滅）	保守対象の筐体であることを表します。
On（点灯）	筐体に異常が検出されたことを表します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	現在接続されているすべての CHECK LED の状態を表示します。
-b *bb_id*	指定した *bb_id* に該当する SPARC M12/M10 システムの筐体およびクロスバーボックスの CHECK LED の状態を表示します。省略した場合、自筐体の CHECK LED の状態を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明

setlocator(8) を使用すると、CHECK LED の点滅状態を設定できます。

使用例

使用例 1 BB-ID 10 の CHECK LED の状態を表示します。

```
XSCF> showlocator -b 10
BB#10: Locator LED status: Blinking
```

使用例 2 すべての CHECK LED の状態を表示します。

```
XSCF> showlocator -a
XB-Box#80 : Locator LED status: Blinking
 :
BB#00 : Locator LED status: Blinking
```

```
BB#01 : Locator LED status: Off
BB#02 : Locator LED status: On
  :
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setlocator(8)

名前

showloginlockout - ユーザーアカウントのロックアウト機能に設定されている時間を表示します。

形式

showloginlockout

showloginlockout -h

説明

showloginlockout は、ログインを 3 回続けて失敗したあとに、ログインできないようにする時間を、分で表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明

ユーザーは 3 回続けてログインを試みることができます。3 回目の試みが失敗すると、setloginlockout(8) で設定された時間、ログインできなくなります。showloginlockout は、設定されているロックアウト時間を、分で表示します。

設定されたロックアウト時間を経過したあとは、再度ログインを試みることができるようになります。

使用例

使用例 1 ロックアウトのタイムアウト時間を表示します。

```
XSCF> showloginlockout
90 minutes
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setloginlockout(8)

名前 showlogs - 指定したログを表示します。

形式

showlogs [-t *time* [-T *time*] | -p *timestamp*] [-v | -V | -S] [-r] [-M] error

showlogs [-t *time* [-T *time*] | -p *timestamp*] [-v] [-r] [-M] event

showlogs [-t *ime* [-T *time*]] [-r] [-M] power

showlogs{-a|-b *bb_id*} [-t *time* [-T *time*]] [-r] [-M] env

showlogs [-r] [-M] monitor

showlogs -p *ppar_id* [-t *time* [-T *time*]] [-r] [-M] {console | ipl | panic}

showlogs -h

説明

showlogs は、指定したログを表示するコマンドです。

ログは、デフォルトでタイムスタンプの古いものから順に表示されます。採取される単位別に、以下のログを指定できます。

- システム単位
  - エラーログ（スキャンログを含む場合がある）
  - パワーログ
  - イベントログ
  - 監視ログ
- SPARC M12/M10 システムの筐体単位
  - 温度履歴
- 物理パーティション（PPAR）単位
  - コンソールメッセージログ
  - パニックメッセージログ
  - IPL メッセージログ

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

- エラーログ、イベントログ、温度履歴、監視ログ

  platadm, platop, fieldeng
- パワーログ

platadm, platop, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

- コンソールメッセージログ、パニックメッセージログ、IPL メッセージログ

platadm, platop, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

- スキャンログ

  fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a　システムのすべての筐体を対象とします。温度履歴に対して指定できます。

-b *bb_id*　ログを表示する BB-ID を 1 つだけ指定します。温度履歴に対して指定できます。*bb_id* に指定できる値は以下のとおりです。

- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合

  0 固定
- SPARC M12-2S/M10-4S の場合

  0 ～ 15 の整数
- クロスバーボックスの場合

  80 ～ 83 の整数

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-M　テキストを 1 画面ずつ表示します。

-p *ppar_id*　表示する PPAR-ID を 1 つだけ指定します。コンソールメッセージログ、パニックメッセージログ、IPL メッセージログに対して指定できます。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。

`-P` *timestamp*
: ログを単独で表示する場合に、ログのタイムスタンプを指定します。エラーログとイベントログに対して指定できます。

  timestamp は、以下のいずれかの形式で指定します。

  yyyy-mm-dd,hh:mm:ss
  : 年 - 月 - 日 , 時 : 分 : 秒の形式で指定します。

  mm/dd/yy,hh:mm:ss
  : 月 / 日 / 年 , 時 : 分 : 秒の形式で指定します。

  Monddhh:mm:ssyyyy
  : 月名 , 日 , 時 : 分 : 秒 , 年の形式で指定します。

`-r`
: タイムスタンプの新しいログから表示します。デフォルトでは、タイムスタンプの古いログから表示されます。

`-S`
: エラーログに付帯されているスキャンログを表示します。`fieldeng`権限を持つユーザーだけ指定できます。`-v`、`-V`とは一緒に指定できません。

`-t` *time*
: ログの表示範囲を指定する場合の、開始日時を指定します。以下のいずれかの形式で指定します。

  yyyy-mm-dd,hh:mm
  : 年 - 月 - 日 , 時 : 分の形式で指定します。

  mm/dd/yy,hh:mm
  : 月 / 日 / 年 , 時 : 分の形式で指定します。

  Monddhh:mmyyyy
  : 月名 , 日 , 時 : 分 , 年の形式で指定します。

  yyyy-mm-dd,hh:mm:ss
  : 年 - 月 - 日 , 時 : 分 : 秒の形式で指定します。

  mm/dd/yy,hh:mm:ss
  : 月 / 日 / 年 , 時 : 分 : 秒の形式で指定します。

  Monddhh:mm:ssyyyy
  : 月名 , 日 , 時 : 分 : 秒 , 年の形式で指定します。

  `-r` と一緒に指定しても、`-t` と `-T` の指定が逆になることはありません。監視ログには使用できません。

-T *time* ログの表示範囲を指定する場合の、終了日時を指定します。以下のいずれかの形式で指定します。

yyyy-mm-dd,hh:mm
年 - 月 - 日 , 時 : 分の形式で指定します。
mm/dd/yy,hh:mm
月 / 日 / 年 , 時 : 分の形式で指定します。
Monddhh:mmyyyy
月名 , 日 , 時 : 分 , 年の形式で指定します。
yyyy-mm-dd,hh:mm:ss
年 - 月 - 日 , 時 : 分 : 秒の形式で指定します。
mm/dd/yy,hh:mm:ss
月 / 日 / 年 , 時 : 分 : 秒の形式で指定します。
Monddhh:mm:ssyyyy
月名 , 日 , 時 : 分 : 秒 , 年の形式で指定します。

-r と一緒に指定しても、-t と-T の指定が逆になることはありません。監視ログには使用できません。

-v 詳細な情報を表示します。通常の表示に加え、詳細な診断コード（Diagnostic Code）が表示されます。-V、-S とは一緒に指定できません。エラーログとイベントログに対して指定できます。

-V より詳細な情報を表示します。-v で表示される情報に加え、マシン管理詳細ログ情報および PCI カード情報、I/O 異常フォルトログ情報が採取されている場合は、それらが表示されます。エラーイベントの種類により採取されない場合があります。-v、-S とは一緒に指定できません。エラーログに対して指定できます。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

error	エラーログを表示します。（スキャンログを含む場合がある）
event	イベントログを表示します。
power	パワーログを表示します。
env	温度履歴を表示します。
monitor	監視ログを表示します。
console	コンソールメッセージログを表示します。
ipl	IPL メッセージログを表示します。
panic	パニックメッセージログを表示します。

詳細説明

コンソールメッセージログ（console）の 1 行に表示するログの上限文字数は、2047 文字です。上限文字数を超えた分は、表示されません。

各ログは以下のフォーマットで表示されます。

- エラーログ

  デフォルト

```
Date: Oct 20 17:45:31 JST 2012
      Code: xxxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
      Status: Alarm                  Occurred: Oct 20 17:45:31.000 JST 2012
      FRU: /BB#xx/PSU#x
      Msg: PSU failed
```

  -v を指定した場合

```
Date: Oct 20 17:45:31 JST 2012
      Code: xxxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
      Status: Alarm                  Occurred: Oct 20 17:45:31.000 JST 2012
      FRU: /BB#xx/PSU#x
      Msg: PSU failed
      Diagnostic Code:
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxx
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxx
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxx
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxx
```

  -V を指定した場合

```
Date: Oct 20 17:45:31 JST 2012
      Code: xxxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
      Status: Alarm                  Occurred: Oct 20 17:45:31.000 JST 2012
      FRU: /BB#xx/PSU#x
      Msg: PSU failed
      Diagnostic Code:
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxx
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxx
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxx
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxx
      Diagnostic Messages
      :
```

  -S を指定した場合

```
Date: Oct 20 17:45:31 JST 2012
      Code: xxxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxxxx-xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
      Status: Alarm                  Occurred: Oct 20 17:45:31.000 JST 2012
      FRU: /BB#xx/PSU#x
      Msg: PSU failed
      Diagnostic Code:
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxx
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxx
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxx
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
```

```
          xxxxxxxx xxxxxxxx xxxx
      Detail log: SCAN MINOR RC 2K
      0000: xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
      0010: xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx xxxxxxxx
      :
```

Date:	ログが採取された日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年） ローカルタイムで表示されます。
Code:	エラーコード 25 バイトで表示されます。
Status:	エラーの状態 以下のいずれかが表示されます。 Warning　ユニットの部分的な縮退または警告 Alarm　ユニットの故障または異常 Information　通知 Notice　システム状態通知
Occurred:	異常が発生した日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年） ローカルタイムで表示されます。
FRU:	被疑ユニット 第 1、第 2、第 3 被疑ユニットがカンマ（,）で区切られて表示されます。第 4 被疑ユニットがある場合はアスタリスク（*）が表示されます。第 2 被疑ユニット以降が表示されるかどうかは、検出された箇所によって異なります。
Msg:	エラー内容
Diagnostic Code:	エラー詳細コード 16 進数で表示されます。
Diagnostic Messages:	詳細メッセージ ログに詳細なメッセージがある場合に表示されます。
Detail log:	スキャンログコード ログにスキャンログがある場合に表示されます。

■ パワーログ

```
Date                          Event              Cause             ID  Switch
Oct 20 17:25:31 JST 2012      Cabinet Power On   Operator          00  Service
Oct 20 17:35:31 JST 2012      PPAR Power On      Operator          00  Locked
Oct 20 17:45:31 JST 2012      PPAR Power Off     Software Request  00  Locked
Oct 20 17:50:31 JST 2012      Cabinet Power Off  Self Reset        00  Service
      :
      :
```

Date:	ログが採取された日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年） ローカルタイムで表示されます。	
Event:	電源の状態 以下のいずれかの状態が表示されます。	
	SCF Reset	XSCF が再起動されている状態
	PPAR Power On	PPAR の電源が投入されている状態
	PPAR Power Off	PPAR の電源が切断されている状態
	PPAR Reset	PPAR が再起動されている状態
	Cabinet Power On	筐体の電源が投入されている状態
	Cabinet Power Off	筐体の電源が切断されている状態
	XIR	eXtended Internal Reset がされている状態
Cause:	Event となった要因 以下のうちのいずれかが表示されます。 CoD, Self Reset, Power On, System Reset, Panel, Scheduled, IPMI, Power Recover, Power Capping, Operator, Software Request, Alarm, Fatal	
ID:	PPAR-ID または BB-ID すべての筐体やすべての PPAR に対する Event の場合は「--」が表示されます。 Event が Cabinet Power On または Cabinet Power Off の場合に BB-ID が表示されます。BB-ID は 00 から 15 まで、80 から 83 までの整数で表示されます。 Event が PPAR Power On または PPAR Power Off、PPAR Reset の場合に PPAR-ID が表示されます。PPAR-ID は 00 から 15 までの整数で表示されます。	
Switch:	オペレーションパネルのモードスイッチの状態 以下のいずれかの状態が表示されます。	
	Locked	通常運用時のモード
	Service	サービスモード

- イベントログ
  デフォルト

```
Date                          Message
Oct 20 17:45:31 JST 2012      System power on
```

```
Oct 20 17:55:31 JST 2012      System power off
   :
   :
```

-v を指定した場合

```
Date                          Message
Oct 20 17:45:31 JST 2012      System power on
Switch= Service
Code=xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx
     xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx xxxx
     xxxx xxxx
```

Date:	ログが採取された日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年） ローカルタイムで表示されます。
Message:	イベントメッセージ
Switch:	オペレーションパネルのモードスイッチの状態 以下のいずれかの状態が表示されます。 Locked　通常運用時のモード Service　サービスモード
Code:	イベント詳細情報 16 進数で表示されます。

■ 温度履歴

```
BB#00
Date                          Temperature  Power
Oct 20 17:45:31 JST 2012       32.56(C)    System Power On
Oct 20 17:55:31 JST 2012       32.56(C)    System Power Off
   :
```

BB#*xx*:	BB-ID BB-ID はシステム構成によって、00 から 15、80 から 83 の整数で表示されます。

Date:	ログが採取された日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年） ローカルタイムで表示されます。
Temperature:	吸気温度 10 進数で小数点第 2 位まで表示されます。単位は摂氏（℃）です。
Power:	筐体の電源の状態 以下のどちらかの状態が表示されます。

Cabinet Power On	筐体の電源が投入されている状態
Cabinet Power OFF	筐体の電源が切断されている状態

■ 監視ログ

```
Oct 20 17:45:31 JST 2012      monitor message
Oct 20 17:55:31 JST 2012      monitor message
      :
```

日付と監視メッセージが 1 行 1 メッセージで表示されます。日付にはログ採取時の日付が（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）、ローカルタイムで表示されます。

■ コンソールメッセージログ

```
PPAR-ID: 00
Oct 20 17:45:31 JST 2012      console message
Oct 20 17:55:31 JST 2012      console message
      :
      :
```

[1 行目]

PPAR-ID:	PPAR の ID システム構成によって、00 から 15 までの整数で表示されます。

[2 行目以降]

日付とコンソールメッセージが 1 行 1 メッセージで表示されます。

日付にはログ採取時の日付が（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）、ローカルタイムで表示されます。

■ パニックメッセージログ

```
<<panic>>
Date: Oct 20 18:45:31 JST 2012      PPAR-ID: 00
Oct 20 17:45:31 JST 2012      panic message
Oct 20 17:55:31 JST 2012      panic message
      :
```

[2 行目]

Date: パニック時の日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）
ローカルタイムで表示されます。

PPAR-ID: PPAR の ID
システム構成によって、00 から 15 までの整数で表示されます。

[3 行目以降]

日付とパニックメッセージが 1 行 1 メッセージで表示されます。

日付にはログ採取時の日付が（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）、ローカルタイムで表示されます。

■ IPL メッセージログ

```
<<ipl>>
Date: Oct 20 18:45:31 JST 2012      PPAR-ID: 00
Oct 20 17:45:31 JST 2012      ipl message
Oct 20 17:55:31 JST 2012      ipl message
      :
```

[2 行目]

Date: IPL 時の日付（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）
ローカルタイムで表示されます。

PPAR-ID: PPAR の ID
システム構成によって、00 から 15 までの整数で表示されます。

[3 行目以降]

日付と IPL メッセージが 1 行 1 メッセージで表示されます。

日付にはログ採取時の日付が（月 日 時 : 分 : 秒 TimeZone 年）、ローカルタイムで表示されます。

使用例

使用例 1 エラーログを表示します。

```
XSCF> showlogs error
Date: Oct 20 12:45:31 JST 2012
    Code: 00112233-445566778899aabbcc-8899aabbcceeff0011223344
    Status: Alarm                  Occurred: Oct 20 12:45:31.000 JST 2012
    FRU: /BB#0/PSU#0
    Msg: PSU failed
Date: Oct 20 15:45:31 JST 2012
    Code: 00112233-445566778899aabbcc-8899aabbcceeff0011223344
    Status: Alarm                  Occurred: Oct 20 12:45:31.000 JST 2012
    FRU: /BB#1/PSU#1
    Msg: PSU Input voltage too high
```

使用例 2 指定したタイムスタンプでのエラーログを、詳細（-v）に表示します。

```
XSCF> showlogs error -P Oct2012:45:312012 -v
Date: Oct 20 12:45:31 JST 2012
    Code: 00112233-445566778899aabbcc-8899aabbcceeff0011223344
    Status: Alarm                  Occurred: Oct 20 12:45:31.000 JST 2012
    FRU: IOU#0/PCI#3
    Msg: offline(vendor=FUJITSU, product=MAJ3182MC)
    Diagnostic Code:
        00112233 44556677 8899
        00112233 44556677 8899
        00112233 44556677 8899
        00112233 44556677 8899aabb ccddeeff
        00112233 44556677 8899
```

使用例 3 指定したタイムスタンプでのエラーログを、より詳細（-V）に表示します。

```
XSCF> showlogs error -P Oct2012:45:312012 -V
Date: Oct 20 12:45:31 JST 2012
    Code: 00112233-445566778899aabbcc-8899aabbcceeff0011223344
    Status: Alarm                  Occurred: Oct 20 12:45:31.000 JST 2012
    FRU: IOU#0/PCI#3
    Msg: offline(vendor=FUJITSU, product=MAJ3182MC)
    Diagnostic Code:
        00112233 44556677 8899
        00112233 44556677 8899
        00112233 44556677 8899
        00112233 44556677 8899aabb ccddeeff
        00112233 44556677 8899
    Diagnostic Messages
        Jul 11 16:17:42 plato10 root: [ID 702911 user.error] WARNING: /
pci@83,4000/scsi@2/sd@0,0 (sd47):
        Jul 11 16:17:42 plato10 root: [ID 702911 user.error]    incomplete
write- givin up
```

使用例 4 パワーログを表示します。

```
XSCF> showlogs power
Date                          Event              Cause             ID  Switch
Oct 20 17:25:31 JST 2012      Cabinet Power On   Operator          00  Service
Oct 20 17:35:31 JST 2012      PPAR Power On      Operator          00  Locked
Oct 20 17:45:31 JST 2012      PPAR Power Off     Software Request  00  Locked
Oct 20 17:50:31 JST 2012      Cabinet Power Off  Self Reset        00  Service
```

使用例 5 パワーログをタイムスタンプの新しいログから表示します。

```
XSCF> showlogs power -r
Date                          Event              Cause             ID  Switch
Oct 20 17:50:31 JST 2012      Cabinet Power On   Operator          00  Service
Oct 20 17:45:31 JST 2012      PPAR Power On      Operator          00  Locked
Oct 20 17:35:31 JST 2012      PPAR Power Off     Software Request  00  Locked
Oct 20 17:25:31 JST 2012      Cabinet Power Off  Self Reset        00  Service
```

使用例 6 パワーログのうち、指定した範囲のログを表示します。

```
XSCF> showlogs power -t Oct2017:302012 -T Oct2017:492012
Date                         Event              Cause             ID  Switch
Oct 20 17:35:31 JST 2012     PPAR Power Off     Software Request  00  Locked
Oct 20 17:45:31 JST 2012     PPAR Power On      Operator          00  Locked
```

使用例 7 パワーログのうち、指定した範囲のログを表示します。タイムスタンプの新しいログから表示します。

```
XSCF> showlogs power -t Oct2017:302012 -T Oct2017:492012 -r
Date                         Event              Cause             ID  Switch
Oct 20 17:45:31 JST 2012     PPAR Power On      Operator          00  Locked
Oct 20 17:35:31 JST 2012     PPAR Power Off     Software Request  00  Locked
```

使用例 8 表示の開始日時を指定してパワーログを表示します。

```
XSCF> showlogs power -t Oct2017:302012
Date                         Event              Cause             ID  Switch
Oct 20 17:35:31 JST 2012     PPAR Power On      Operator          00  Locked
Oct 20 17:45:31 JST 2012     PPAR Power Off     Software Request  00  Locked
Oct 20 17:50:31 JST 2012     Cabinet Power Off  Self Reset        00  Service
```

使用例 9 指定した PPAR-ID のコンソールメッセージログを表示します。

```
XSCF> showlogs console -p 00
PPAR-ID: 00
Oct 20 17:45:31 JST 2012      Executing last command: boot
Oct 20 17:55:31 JST 2012      Boot device: /pci@83,4000/FJSV,ulsa@2,1/
disk@0,0:a File and args:
Oct 20 17:55:32 JST 2012      SunOS Release 5.10 Version Generic 64-bit
```

使用例 10 指定した BB-ID の温度履歴を表示します。

```
XSCF> showlogs env -b 0
BB#00
   Date                          Temperature  Power
   Oct 20 17:45:31 JST 2012       32.56(C)    Cabinet Power On
   Oct 20 17:55:31 JST 2012       32.56(C)    Cabinet Power Off
```

使用例 11 すべての筐体の温度履歴に表示します。

```
XSCF> showlogs env -a
BB#00
   Date                          Temperature  Power
   Oct 20 17:45:31 JST 2012       32.56(C)    Cabinet Power On
   Oct 20 17:55:31 JST 2012       32.56(C)    Cabinet Power Off
BB#01
   Date                          Temperature  Power
   Oct 20 17:45:31 JST 2012       32.56(C)    Cabinet Power On
   Oct 20 17:55:31 JST 2012       32.56(C)    Cabinet Power Off
.
```

```
.
.
XB-Box#83
   Date                          Temperature  Power
   Oct 20 17:45:31 JST 2012       32.56(C)    Cabinet Power On
   Oct 20 17:55:31 JST 2012       32.56(C)    Cabinet Power Off
```

注 – 表示されているコードやメッセージは実際の表示と異なる場合があります。

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

showlookup - 認証とユーザー権限のルックアップに関する設定を表示します。

形式

showlookup

showlookup -h

説明

showlookup は、認証とユーザー権限に関する設定を表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h　使用方法を表示します。

使用例

使用例 1　認証とユーザー権限に関する設定を表示します。

```
XSCF> showlookup
Privileges lookup:Local only
Authentication lookup: Local and LDAP
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0　正常に終了したことを表します。

>0　エラーが発生したことを表します。

関連項目

setlookup(8)

名前

showmonitorlog - 監視メッセージログの内容をリアルタイムに表示します。

形式

showmonitorlog

showmonitorlog -h

説明

showmonitorlog は、監視メッセージログの内容をリアルタイムに表示するコマンドです。"tail -f" と同様です。

showmonitorlog を実行すると、監視メッセージログを表示するためにコマンドは終了せず、XSCF シェルが占有されます。監視メッセージログ内にメッセージが登録されると、その内容が表示されます。コマンドを実行すると、次に監視ログが登録されるまで何も表示されません。

リアルタイム表示を終了する場合は、[Ctrl]+[C] キーを押します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 監視メッセージログの内容をリアルタイムに表示します。

```
XSCF> showmonitorlog
Jun 23 12:17:18 PAPL-SERVER Warning: /BB#0/CMUL,/UNSPECIFIED:SCF:SCF SPI
FMEM access error
Jul 10 14:13:32 PAPL-SERVER Alarm: /BB#0/CMUU:SCF:Critical low voltage
error
Jul 11 13:40:20 PAPL-SERVER Information: /BB#0/XBU#0:ANALYZE:CPU-XB
interface correctable error
Jul 11 13:46:21 PAPL-SERVER Notice: /FIRMWARE,/BB#0/CMUL:SCF:SCF process
down detected
Jul 11 15:31:54 PAPL-SERVER Event: SCF:System powered on
  .
  .
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

shownameserver - XSCF ネットワークに設定されているネームサーバおよびサーチパスを表示します。

形式

shownameserver

shownameserver -h

説明

shownameserver は、XSCF ネットワークに現在設定されているネームサーバの IP アドレスの一覧およびサーチパスを表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明

setnameserver(8) を使用すると、XSCF ネットワークのネームサーバおよびサーチパスが設定できます。

使用例

使用例 1 XSCF ネットワークに現在設定されているネームサーバを表示します。3 つのネームサーバと 5 つのサーチパスが設定されている場合を例に挙げます。

```
XSCF> shownameserver
nameserver 192.168.1.2
nameserver 10.18.108.10
nameserver 10.24.1.2
search     example1.com
search     example2.com
search     example3.com
search     example4.com
search     example5.com
```

使用例 2 XSCF ネットワークに現在設定されているネームサーバを表示します。ネームサーバおよびサーチパスは設定されていない場合を例に挙げます。

```
XSCF> shownameserver
nameserver ---
search     ---
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setnameserver（8）

名前

shownetwork - XSCF に設定されているネットワークインターフェースの情報を表示します。

形式

shownetwork [-M] [-a | -i | *interface*]

shownetwork -h

説明

shownetwork は、XSCF に現在設定されているネットワークインターフェースの情報を表示するコマンドです。

指定したネットワークインターフェース、またはすべてのネットワークインターフェースに対する情報を表示できます。以下の情報が表示されます。

xscf#*x-y*	XSCF ネットワークインターフェース名
HWaddr	MAC アドレス（16 進表示）
inet addr	IP アドレス
Bcast	ブロードキャスト
Mask	ネットマスク
UP/DOWN	ネットワークインターフェースが有効がどうか

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	すべての XSCF ネットワークインターフェースに設定されている情報を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-i	現在の XSCF ネットワークの状態を表示します。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

interface 表示するネットワークインターフェースを指定します。システム構成によって、以下のいずれかを指定できます。-a オプションと一緒に指定した場合は無効となります。

■ SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

`xbbox#80-lan#0`	XBBOX#80-LAN#0
`xbbox#80-lan#1`	XBBOX#80-LAN#1
`lan#0`	XBBOX#80-LAN#0 と XBBOX#81-LAN#0 の引き継ぎ IP アドレス
`xbbox#81-lan#0`	XBBOX#81-LAN#0
`xbbox#81-lan#1`	XBBOX#81-LAN#1
`lan#1`	XBBOX#80-LAN#1 と XBBOX#81-LAN#1 の引き継ぎ IP アドレス

■ SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

`bb#00-lan#0`	BB#00-LAN#0
`bb#00-lan#1`	BB#00-LAN#1
`lan#0`	BB#00-LAN#0 と BB#01-LAN#0 の引き継ぎ IP アドレス
`bb#01-lan#0`	BB#01-LAN#0
`bb#01-lan#1`	BB#01-LAN#1
`lan#1`	BB#00-LAN#1 と BB#01-LAN#1 の引き継ぎ IP アドレス

■ SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合

`bb#00-lan#0`	BB#00-LAN#0
`lan#0`	bb#00-lan#0 の省略形
`bb#00-lan#1`	BB#00-LAN#1
`lan#1`	bb#00-lan#1 の省略形

詳細説明

- 引き継ぎ IP アドレスとは、XSCF が複数で構成されている場合に、XSCF が切り替えられていることを意識せずに使用できる IP アドレスのことです。アクティブな XSCF ユニットの各 LAN ポートを `lan#0`、`lan#1` に設定しておくことによって、`lan#0`、`lan#1` という名称でアクセスできるようになります。
- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合は、`lan#0` は `bb#0-lan#0`、`lan#1` は `bb#0-lan#1` で固定となります。
- SPARC M12-2S/M10-4S の場合、`setnetwork`(8) で引き継ぎ IP アドレスを無効としているときは、`shownetwork` で引き継ぎ IP アドレス指定しても何も表示されません。
- `setnetwork`(8) を使用すると、XSCF ネットワークインターフェースが設定できます。

使用例

使用例 1 XBBOX#80 の LAN#1 に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shownetwork xbbox#80-lan#1
xbbox#80-lan#1
          Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:56
          inet addr:192.168.10.11  Bcast: 192.168.10.255
Mask:255.255.255.0
          UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
          RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
          TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
          collisions:0 txqueuelen:1000
          RX bytes:20241827 (19.3 MiB)  TX bytes:2089769 (1.9 MiB)
          Base address:0x1000
```

使用例 2 XBBOX#80 の LAN#0 に設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shownetwork xbbox#80-lan#0
xbbox#80-lan#0
Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:56 E0:00:C4:00:8B
          inet addr: 192.168.11.10  Bcast: 192.168.11.255
Mask:255.255.255.0
          UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
          RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
          TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
          collisions:0 txqueuelen:1000
          RX bytes:12241827 (11.3 MiB)  TX bytes:1189769 (0.9 MiB)
          Base address:0x1000
```

使用例 3 LAN#0 の引き継ぎ IP アドレスに設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shownetwork lan#0
lan#0     Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:56
          inet addr:192.168.1.10   Bcast:192.168.1.255
Mask:255.255.255.0
          UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
          Base address:0xe000
```

使用例 4 XSCF ネットワークの状態を表示します。

```
XSCF> shownetwork -i
Active Internet connections (without servers)
Proto Recv-Q Send-Q Local Address          Foreign Address         State
tcp        0      0 xx.xx.xx.xx:telnet     xxxx:1617           ESTABLISHED
```

使用例 5 SPARC M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合で、設定されている情報を表示します。

```
XSCF> shownetwork -a
bb#00-lan#0
          Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:56
          inet addr: 192.168.11.10  Bcast: 192.168.11.255
Mask:255.255.255.0
```

```
          UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
          RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
          TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
          collisions:0 txqueuelen:1000
          RX bytes:12241827 (11.3 MiB)  TX bytes:1189769 (0.9 MiB)
          Base address:0x1000

lan#0     Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:56
          inet addr:192.168.11.11   Bcast:192.168.11.255
Mask:255.255.255.0
          UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
          Base address:0xe000

bb#00-lan#1
          Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:57
          inet addr:192.168.10.10  Bcast: 192.168.10.255
Mask:255.255.255.0
          UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
          RX packets:54424 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
          TX packets:14369 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
          collisions:0 txqueuelen:1000
          RX bytes:20241827 (19.3 MiB)  TX bytes:2089769 (1.9 MiB)
          Base address:0x1000

lan#1     Link encap:Ethernet  HWaddr 00:00:00:12:34:57
          inet addr:192.168.10.11   Bcast:192.168.10.255
Mask:255.255.255.0
          UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
          Base address:0xe000

bb#01-lan#0
          HWaddr 00:00:00:12:34:59
          inet addr:192.168.10.12  Mask:255.255.255.0

bb#01-lan#1
          HWaddr 00:00:00:12:34:60
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setnetwork(8)

名前

shownotice - XSCF Control Package（XCP）の著作権および著作権に関するライセンス情報を表示します。

形式

shownotice [-c {copyright|license}]

shownotice -h

説明

shownotice(8) は、XCP の著作権、および存在する場合はライセンス情報を表示するコマンドです。

オプションを指定しない場合は、著作権情報とライセンス情報が表示されます。-c オプションを指定すると、著作権またはライセンス情報のどちらかを表示できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細については、setprivileges(8) コマンドを参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c {copyright|license}　表示する XCP 情報を指定します。以下のどちらかを指定できます。

copyright
　著作権情報だけを表示します。

license
　ライセンス情報だけを表示します。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1　著作権情報だけを表示します。

```
XSCF> shownotice -c copyright
[ 著作権情報が表示されます。]
```

使用例 2　著作権情報とライセンス情報を表示します。

```
XSCF> shownotice
[ 著作権情報とライセンス情報が表示されます。]
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0　正常に終了したことを表します。

>0　エラーが発生したことを表します。

名前

showntp - XSCF ネットワークに設定されている NTP 情報を表示します。

形式

showntp {-l | -a | *address* | -s | -m}

showntp -h

説明

showntp は、XSCF ネットワークに現在設定されている NTP 情報を表示するコマンドです。

以下の情報を表示できます。

- XSCF ネットワークに登録されている NTP サーバ
- 上位 NTP サーバとの同期状態
- クライアントへの NTP サービス提供の有無
- XSCF ネットワークに設定されている stratum 値
- 優先サーバの指定の有無
- XSCF に設定されているローカルクロックのクロックアドレス
- DNS ラウンドロビンの有効／無効の設定状態

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	XSCF ネットワークに現在設定されているすべての NTP サーバを表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-l	NTP サーバと同期しているかどうかを表示します。
-m	優先サーバが指定されているかどうか（prefer）と、ローカルクロックのクロックアドレス（localaddr）を表示します。 prefer では以下のどちらかが表示されます。 on　優先サーバが指定されています。 off　優先サーバが指定されていません。 localaddr ではローカルクロックのクロックアドレス 127.127.1.u の最下位バイトが、0 から 3 までの数値で表示されます。
-s	XSCF に設定されている stratum 値を表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

address

表示する NTP サーバの IP アドレスまたはホスト名を指定します。-a が指定されている場合は無効となります。

IP アドレスで指定する場合は、*address* は 4 組の整数をピリオド（.）で区切った形式で指定できます。

xxx.xxx.xxx.xxx

xxx 0 から 255 までの整数を指定します。ゼロサプレスで指定できます。

ホスト名で指定する場合は、*address* はラベル要素をピリオド（.）で区切った形式で 64 文字以内で指定します。ラベル要素には、英数字またはハイフン（-）が使用できます。ただし、先頭は英字、末尾は英数字で指定してください（RFC 1034 に準拠）。サーバ名は DNS サーバによって、名前解決可能である必要があります。

詳細説明

- 優先サーバが指定されていない場合は、showntp で表示された NTP サーバには prefer 情報はありません。
- setntp(8) を使用すると、XSCF ネットワークの NTP サーバが設定できます。
- setntp(8) 実行後に showntp を実行すると、setntp(8) で設定された内容が表示されます。現在動作している NTP の設定情報を確認する場合は、-l を付けて実行してください。

使用例

使用例 1 登録済みの NTP サーバをすべて表示します。setntp で-m prefer=off を設定した場合は、prefer の文字が表示されません。

```
XSCF> showntp -a
client : enable
server : disable

server ntp1.example.com prefer
server ntp2.example.com
```

使用例 2 NTP サーバへの同期を確認し、結果を表示します。

```
XSCF> showntp -l
 remote           refid      st t when poll reach   delay   offset  jitter
==============================================================================
*192.168.0.27   192.168.1.56    2 u   27   64  377   12.929   -2.756   1.993
+192.168.0.57   192.168.1.86    2 u   32   64  377   13.030    2.184  94.421
 127.127.1.0    .LOCL.         5 l   44   64  377    0.000    0.000   0.008
```

使用例 3 XSCF ネットワークに設定されている stratum 値を表示します。

```
XSCF> showntp -s
stratum : 5
```

使用例 4 優先サーバが指定されているかどうかと、ローカルクロックのクロックアドレスを表示します。

```
XSCF> showntp -m
prefer : on
localaddr : 0
```

使用例 5 NTP サーバを上位 NTP サーバと同期させず、クライアントにサービスの提供もしない設定の場合に、同期確認を行います。

```
XSCF> showntp -l
NTP is unavailable.
```

使用例 6 登録済み NTP サーバの DNS ラウンドロビンが有効かどうかを表示します。

```
XSCF> showntp ntp1.example.com
pool ntp1.example.com
```

使用例 7 すべての NTP サーバを表示します。この例は、1 番目の NTP サーバの DNS ラウンドロビンが有効に設定されています。

```
XSCF> showntp -a
client : enable
server : disable

pool ntp1.example.com
server ntp2.example.com prefer
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setntp(8), **setnameserver**(8)

名前 showpacketfilters - XSCF ネットワークで設定されている IP パケットフィルタリングルールを表示します。

形式 **showpacketfilters** {-a | -l} [-M]

showpacketfilters -h

説明 showpacketfilters は、XSCF ネットワークで設定されている IP パケットフィルタリングルールを表示するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a	setpacketfilters(8) で設定した IP パケットフィルタリングルールを表示します。ただし、-c ipmi_port で設定した IP パケットフィルタリングルールは表示されません。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-l	setpacketfilters(8) で設定した IP パケットフィルタリングルールを、iptables コマンドの出力形式で表示します。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。

詳細説明 setpacketfilters(8) を使用すると、XSCF ネットワークで使用する IP パケットフィルタリングルールを設定できます。

使用例

使用例 1 SPARC M10-4S(クロスバーボックスあり)で、XSCF ネットワークに設定されている IP パケットフィルタリングルールを表示します。

```
XSCF> showpacketfilters -a
-s 172.16.0.0/255.255.0.0 -i xbbox#80-lan#0 -j DROP
-s 172.16.0.0/255.255.0.0 -i xbbox#81-lan#0 -j DROP
-s 10.10.10.10/255.255.255.255 -j DROP
-s 192.168.100.0/255.255.255.0 -i xbbox#80-lan#1 -j ACCEPT
-s 192.168.100.0/255.255.255.0 -i xbbox#81-lan#1 -j ACCEPT
-i xbbox#80-lan#1 -j DROP
-i xbbox#81-lan#1 -j DROP
```

使用例 2 SPARC M10-4S(クロスバーボックスあり)で、XSCF ネットワークの IP パケットフィルタリングルールの運用状態を表示します。

```
XSCF> showpacketfilters -l
 pkts bytes target     prot in             source
    0     0 DROP       udp  *              0.0.0.0/0.0.0.0          udp dpt:623
    0     0 DROP       all  xbbox#80-lan#0 172.16.0.0/255.255.0.0
    0     0 DROP       all  *              10.10.10.10
```

```
     0     0 ACCEPT     all  xbbox#80-lan#1 192.168.100.0/255.255.255.0
     0     0 DROP       all  xbbox#80-lan#1 0.0.0.0/0.0.0.0

  pkts bytes target     prot in             source
     0     0 DROP       all  xbbox#81-lan#0 172.16.0.0/255.255.0.0
     0     0 DROP       all  *              10.10.10.10
     0     0 ACCEPT     all  xbbox#81-lan#1 192.168.100.0/255.255.255.0
     0     0 DROP       all  xbbox#81-lan#1 0.0.0.0/0.0.0.0
XSCF>
```

使用例 3 IPMI ポートに対する IP パケットを無効に設定した場合（default）

```
XSCF> showpacketfilters -l
 pkts bytes target     prot in             source
    0     0 DROP       udp  *              0.0.0.0/0.0.0.0          udp dpt:623
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpacketfilters（8）

名前

showpasswordpolicy - 現在のパスワードポリシーの設定を表示します。

形式

showpasswordpolicy

showpasswordpolicy -h

説明

showpasswordpolicy は、パスワードポリシーの設定を表示するコマンドです。

pam_cracklib モジュール、有効期限の日付、およびパスワード履歴に保存されるパスワードの数が含まれます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、useradm 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 パスワードポリシーの設定を表示します。

```
XSCF> showpasswordpolicy
Mindays:  0
Maxdays:  99999
Warn:     7
Inactive: -1
Expiry:   0
Retry:    3
Difok:    10
Minlen:   9
Dcredit:  1
Ucredit:  1
Lcredit:  1
Ocredit:  1
Remember: 3
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpasswordpolicy(8)

名前

showpciboxdio - SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S の PCI スロットから PCI ボックスに搭載された PCI カードへの、ダイレクト I/O 機能の設定状況を表示します。

形式

showpciboxdio [-a|-b *bb_id*] [-M] all

showpciboxdio [-a|-b *bb_id*] [-M] *slot_no...*

showpciboxdio -h

説明

showpciboxdio は、SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S の PCI スロットから PCI ボックスに搭載された PCI カードへの、ダイレクト I/O 機能の設定状況を表示するコマンドです。

showpciboxdio は、SPARC M12-1/M10-1 では使用できません。

なお、SPARC M12-1/M10-1 では、showpciboxdio を使ってダイレクト I/O 機能の設定を行う必要はありません。SPARC M12-1/M10-1 に PCI ボックスを接続するだけで、ダイレクト I/O 機能を使用できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a　すべての SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S 筐体に対して、ダイレクト I/O 機能の設定状況を表示します。-a と -b を両方省略した場合は、現在作業している SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S に対する設定状況が表示されます。

-b *bb_id*　ダイレクト I/O 機能の設定状況を表示する SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S の BB-ID を設定します。*bb_id* に指定できる値は以下のとおりです。

- SPARC M12-2/M10-4 の場合

  0 固定

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

  0 〜 3 の整数

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

  0 〜 15 の整数

-b と -a を両方省略した場合は、現在作業している SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S に対する設定状況が表示されます。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

all	指定した SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S の、すべての PCI スロットに対して設定状況を表示します。*slot_no* と同時に使用することはできません。
slot_no	設定状況を表示する PCI スロット番号を設定します。0 から 10 までの整数で指定します。スペースで区切って複数指定できます。指定する順番は任意です。all と同時に使用することはできません。

詳細説明

- showpciboxdio は、クロスバーボックスに対して実行することはできません。また、クロスバーボックスで作業している場合に、-a と -b *bb_id* を省略するとエラーとなります。
- SPARC M12-2S/M10-4S でスロット番号に 8 から 10 を指定しても、設定された内容は無視されます。
- setpciboxdio(8) でダイレクト I/O 機能の設定を切り替えると、対象の SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S の PSB が組み込まれた、PPAR の論理ドメイン構成は factory-default になる場合があります。また、この場合、M10-4/M10-4S では制御ドメインの OpenBootPROM 環境変数も初期化される場合があります。M12-2/M12-2S では制御ドメインの OpenBootPROM 環境変数は初期化されません。詳細は、お使いのサーバの最新の『プロダクトノート』を参照してください。

使用例

使用例 1 BB-ID 2 の PCI スロット 2、3、7 に対して、ダイレクト I/O 機能の設定状況を表示します。

```
XSCF> showpciboxdio -b 2 2 3 7
PCI slot Direct I/O via PCIBOX
BB#02
 2          enabled
 3          enabled
 7          disabled
```

使用例 2 SPARC M10-4 の、すべての筐体の PCI スロットに対して、ダイレクト I/O 機能の設定状況を表示します。

```
XSCF> showpciboxdio -a
PCI slot Direct I/O via PCIBOX
BB#00
 0          enabled
 1          enabled
```

```
 2         enabled
 3         enabled
 4         enabled
 5         enabled
 6         enabled
 7         disabled
 8         enabled
 9         enabled
10         enabled
```

使用例 3 SPARC M10-4S の、すべての筐体の PCI スロットに対して、ダイレクト I/O 機能を無効にします。

```
XSCF> showpciboxdio -a
PCI slot Direct I/O via PCIBOX
BB#00
 0         enabled
 1         enabled
 2         enabled
 3         enabled
 4         disabled
 5         enabled
 6         enabled
 7         enabled
 8         disabled
 9         disabled
10         disabled
BB#01
 0         enabled
 1         enabled
 2         enabled
 3         enabled
 4         enabled
 5         enabled
 6         enabled
 7         enabled
 8         enabled
 9         enabled
10         enabled
BB#02
 0         enabled
 1         enabled
 2         disabled
 3         disabled
 4         enabled
 5         enabled
 6         enabled
 7         disabled
 8         disabled
 9         disabled
10         disabled
BB#03
 0         enabled
```

```
  2         enabled
  3         enabled
  4         enabled
  5         enabled
  6         enabled
  7         enabled
  8         enabled
  9         enabled
 10         enabled
 BB#02
  0         enabled
  1         enabled
  2         disabled
  3         disabled
  4         enabled
  5         enabled
  6         enabled
  7         disabled
  8         disabled
  9         disabled
 10         disabled
 BB#03
  0         enabled
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpciboxdio(8)

名前

showpcl - 現在設定されている物理パーティション（PPAR）構成情報（PCL）を表示します。

形式

showpcl [-v] -a [-M]

showpcl [-v] -p *ppar_id* [[-l *lsb*]...]

showpcl -h

説明

showpcl は、setpcl(8) で設定された PCL を表示するコマンドです。

PCL とは、PPAR や PPAR を構成する論理システムボード（LSB）に設定できるハードウェアリソース情報です。

LSB とは、ハイパーバイザが認識するシステムボードの単位です。PPAR ごとに独立した 00 から 15 までの整数で表されます。

物理システムボード（PSB）は、システムで認識するシステムボードで、ハードウェアとして実装されているボードのことです。

showpcl コマンドでは、PCL 内の、以下の情報を表示できます。

PPAR-ID　PPAR の ID

LSB　LSB 番号。00 から 15 までの整数で表示されます。

PSB　LSB に対応する PSB 番号。以下の形式で表示されます。

xx-y:
xx　BB-ID の 00 から 15 までの整数
y　0 固定となります

Status　PPAR の稼働状態。以下のいずれかが表示されます。

Powered Off
　電源が切断されている状態

Initialization Phase
　POST 動作中の状態

Initialization Complete
　POST 完了の状態

Running
　POST 処理が完了し稼働中の状態

Hyp Aborted
　Hypervisor Abort が発生し、PPAR がリセットされるまでの状態

-v を指定すると、以下の情報が追加されます。

Cfg-policy　ハードウェア初期診断で異常が検出された場合の縮退範囲。以下のいずれかが表示されます。

FRU	CPU やメモリなどの部品単位で縮退します（デフォルト）
PSB	PSB 単位で縮退します
System	PPAR 単位で縮退します

No-Mem　LSB に搭載されているメモリを論理ドメインで使用させるかどうか。以下のどちらかが表示されます。

True	メモリを使用させません
False	メモリを使用させます（デフォルト）

No-IO　LSB に搭載されている入出力デバイスを論理ドメインで使用させるかどうか。以下のどちらかが表示されます。

True	入出力デバイスを使用させません
False	入出力デバイスを使用させます（デフォルト）

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	すべての PPAR の情報を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-l *lsb*	表示する LSB 番号を指定します。*lsb* は 0 から 15 まで整数で指定します。-l はスペースで区切って複数指定できます。-l を省略した場合は、PPAR 内のすべての LSB が対象となります。
-M	テキストを一画面ずつ表示します。
-p *ppar_id*	表示する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で表示されます。
-v	PCL の Cfg-policy、No-Mem、No-IO の情報を追加して表示します。

詳細説明

setpcl(8) を使用すると、PCL を設定できます。

注 – No-Mem の内容が True と表示されても、論理ドメイン上の Oracle Solaris は LSB に搭載されているメモリを使用できます。No-Mem の表示内容は False と読み替えてください。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 に設定されている PCL 情報を表示します。

```
XSCF> showpcl -p 0
PPAR-ID   LSB   PSB   Status
00                    Running
          00    00-0
          01    01-0
          02    02-0
          03    03-0
```

使用例 2 PPAR-ID 0 に設定されている PCL 情報を表示します。

```
XSCF> showpcl -p 0
PPAR-ID   LSB   PSB   Status
00                    Running
          00    00-0
          04    01-0
          08    02-0
          12    03-0
```

使用例 3 PPAR-ID 0 に対する PCL の詳細情報を表示します。

```
XSCF> showpcl -v -p 0
PPAR-ID   LSB   PSB   Status   No-Mem   No-IO    Cfg-policy
00                    Running
                                                  System
          00    -
          01    -
          02    -
          03    -
          04    01-0           False    False
          05    -
          06    -
          07    -
          08    02-0           False    False
          09    -
          10    -
          11    -
          12    03-0           False    True
          13    -
          14    -
          15    -
```

使用例 4 すべての PPAR に対する PCL の詳細情報を表示します。

```
XSCF> showpcl -v -a
PPAR-ID   LSB   PSB   Status   No-Mem   No-IO    Cfg-policy
00                    Running
                                                 System
          00    -
          01    00-0           False    False
 .
 .
---------------------------------------------------------------
01                     Powered Off
                                                  unknown
          00    01-0           False    True
 .
 .
---------------------------------------------------------------
15                     Running
                                                  System
          00    15-0           False    True
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addboard(8), **deleteboard**(8), **setpcl**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showfru**(8)

名前

showpowercapping - 消費電力制限の状態を表示します。

形式

showpowercapping

showpowercapping -h

説明

showpowercapping は、システムの消費電力制限の状態を表示するコマンドです。

以下の状態が表示されます。

- power capping 機能の有効、無効

  システムの消費電力制限の有効／無効を表示します。
- 消費電力上限値
  - 消費電力上限値（ワット数）

    消費電力上限値をワット数で表示します。
  - 消費電力上限値（パーセント）

    消費電力上限値をパーセンテージで表示します。

    システム最小消費電力値（0 %）とシステム最大消費電力値（100 %）から、上限の電力値（ワット）に換算します。

    setpowercapping(8) の消費電力上限値をワット数指定で設定している場合は、値が表示されません。
- 上限超え猶予時間

  システムの消費電力値が消費電力上限値を超えたあと、違反とするまでの猶予時間（秒）を表示します。
- 違反時のシステム動作

  システムの消費電力値が消費電力上限値を超えた状態で、上限超え猶予時間を経過した際のシステム動作（ワーニングメッセージ表示、シャットダウン処理、強制電源切断処理）を表示します。

システムの最小消費電力値と最大消費電力値は、showenvironment(8) で確認できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 システムの消費電力制限状態を表示します。（setpowercapping(8) の消費

電力上限値をパーセント指定で設定している場合)

```
XSCF> showpowercapping
activate_state      :enabled
powerlimit          :25%
timelimit           :30
violation_actions   :none
XSCF>
```

使用例 2 システムの消費電力制限状態を表示します。(setpowercapping(8) の消費電力上限値をワット数指定で設定している場合)

```
XSCF> showpowercapping
activate_state      :enabled
powerlimit          :1000w
timelimit           :300
violation_actions   :poff
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpowercapping(8), **showenvironment**(8)

名前 showpowerschedule - スケジュール運転情報を表示します。

形式 **showpowerschedule** {-p *ppar_id* | -a} -m state

showpowerschedule {-p *ppar_id* | -a} -m list [-v] [-M]

showpowerschedule -h

説明 showpowerschedule は、スケジュール運転情報を表示するコマンドです。

表示内容には、以下の 2 つがあります。

- スケジュール運転設定に関する情報
  - PPAR-ID
  - スケジュール運転の有効／無効
  - スケジュールの設定数
  - 復電投入モードの設定
- スケジュールに関する情報
  - スケジュール ID
  - PPAR-ID
  - 指定方法
  - 期間／指定日
  - 電源投入時間
  - 切断時間

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a	すべての物理パーティション（PPAR）に設定されているスケジュール情報を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-m list	スケジュール情報を表示します。

-m state	スケジュール運転設定を表示します。
-p *ppar_id*	指定した *ppar_id* の情報を表示します。*ppar_id* はシステム構成によって 0 から 15 までの整数で指定できます。
-v	PPAR の次の電源投入時間と切断時間の情報を表示します。

詳細説明

- スケジュール運転情報を変更する場合は、setpowerschedule(8) を使用してください。
- スケジュールを設定する場合は addpowerschedule(8)、削除する場合は deletepowerschedule(8) を使用します。
- 存在しない *ppar_id* や無効なオプションを指定した場合には、エラーとなります。

使用例

使用例 1 すべての PPAR に設定されているスケジュール情報を表示します。

```
XSCF> showpowerschedule -a -m state
PPAR-ID schedule member recover mode
------- -------- ------ ------------
0       disable  -      on
1       enable   2      auto
2       enable   1      on
3       disable  -      off
XSCF>
```

使用例 2 PPAR-ID 1 のスケジュールリストを表示します。（-v なしで 1 月 1 日 0 時に実行した場合）

```
XSCF> showpowerschedule -p 1 -m list
ID#  PPAR-ID Type    Term/Date       OnTime/OffTime Pattern
---- ------- ------- --------------- -------------- ---------------------
------
15   1       Daily   Dec 01 - Mar 01 06:00 / 22:00  -
16   1       Monthly Nov    - Feb    08:00 / --:--  01-01
1    1       Daily   Jan 01 - Dec 31 09:00 / 21:30  -
17   1       Monthly Nov    - Feb    --:-- / 20:00  29-29
4    1       Weekly  Feb    - Apr    07:10 / 19:50
sun,mon,tue,wed,thu,fri,sat
10   1       Special Mar 04 2013     00:00 / 23:50  -
6    1       Monthly May    - May    09:20 / 18:40  01-05
11   1       Holiday May 04 2013     --:-- / --:--  -
12   1       Weekly  Jun    - Aug    07:10 / --:--  mon
13   1       Weekly  Jun    - Aug    --:-- / 19:50  fri
XSCF>
```

使用例 3 すべての PPAR のスケジュールリストを表示します。（-v ありで 1 月 1 日 0 時に実行した場合）

```
XSCF> showpowerschedule -a -m list -v
PPAR-ID 1  Next Power On= Jan 01 06:00 2013 Next Power Off= Jan 01 21:30 2013
PPAR-ID 2  Next Power On= May 01 09:20 2013 Next Power Off= Mar 01 28:40 2013
```

```
ID#  PPAR-ID Type    Term/Date       OnTime/OffTime Pattern
---- ------- ------- --------------- -------------- ---------------------
------
15    1      Daily   Dec 01 - Mar 01 06:00 / 22:00  -
16    1      Monthly Nov    - Feb    08:00 / --:--  01-01
1     1      Daily   Jan 01 - Dec 31 09:00 / 21:30  -
17    1      Monthly Nov    - Feb    --:-- / 20:00  29-29
4     1      Weekly  Feb    - Apr    07:10 / 19:50  mon,tue,wed,thu,fri
10    1      Special Mar 04 2013     00:00 / 23:50  -
6     2      Monthly May    - May    09:20 / 18:40  01-05
11    2      Holiday May 04 2013     --:-- / --:--  -
12    2      Weekly  Jun    - Aug    07:10 / --:--  mon
13    2      Weekly  Jun    - Aug    --:-- / 19:50  fri
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addpowerschedule(8), **deletepowerschedule**(8), **setpowerschedule**(8)

名前

showpowerupdelay - 現在設定されているシステムの暖機運転時間と空調待ち時間を表示します。

形式

showpowerupdelay

showpowerupdelay -h

説明

showpowerupdelay は、現在設定されているシステムの暖機運転時間と空調待ち時間を表示するコマンドです。

以下の内容が表示されます。

warmup time	暖機運転時間。物理パーティション（PPAR）ごとの設定値が表示されます。
wait time	空調待ち時間 **注 –** 空調待ち時間は、SPARC M12/M10 ではサポートされていません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, pparadm, pparmgr, pparop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明

setpowerupdelay(8) を使用すると、システムの暖機運転と空調待ち時間が設定できます。

使用例

使用例 1 システムの暖機運転時間と空調待ち時間を表示します。

```
XSCF> showpowerupdelay
warmup time :
    PPAR#00      :10 minute(s)
    PPAR#01      :10 minute(s)
       :
    PPAR#15      :15 minute(s)
wait time    : 20 minute(s)
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpowerupdelay（8）

名前

showpparinfo - 物理パーティション（PPAR）のリソース情報を表示します。

形式

showpparinfo `-p` *ppar_id* [`-M`]

showpparinfo `-h`

説明

`showpparinfo` は、PPAR 内の CPU、メモリに関するリソース情報を表示するコマンドです。

`showpparinfo` で表示されるリソース情報は以下のとおりです。

PPAR# Information

PPAR 内のリソース情報。以下の情報が表示されます。

CPU(s)	PPAR に割り当てられている CPU チップ数の合計
CPU Cores	PPAR に割り当てられているCPU コア数の合計
CPU Threads	PPAR に割り当てられているCPU スレッド数の合計
Memory size (GB)	PPAR に割り当てられているメモリサイズの合計。単位は GB。
CoD Assigned (Cores)	PPAR に割り当てられているCPU コア アクティベーション数の合計

CPU(s)

PPAR に割り当てられている PSB に搭載されている CPU の情報。以下の情報が表示されます。

PID	割り当て先の PPAR-ID。00 から 15 の整数で表示されます。
PSB	割り当て先の PSB 番号。*xx-y*（*xx*: BB-ID（00 から 15 の整数）、*y*: 0 固定）の形式で表示されます。
CPU#	CPU チップ番号。0 から 3 の整数で表示されます。
Cores	CPU チップ配下の CPU コア 数の合計（整数）
Threads	CPU チップ配下の CPU コア数の合計とスレッド値との積算値（整数）

Memory	PPAR に割り当てられている PSB に搭載されているメモリの情報。以下の情報が表示されます。	
	PID	割り当て先の PPAR-ID。00 から 15 の整数で表示されます。
	PSB	割り当て先の PSB 番号。*xx-y*（*xx*: BB-ID（00 から 15 の整数）、*y*: 0 固定）の形式で表示されます。
	install size GB	PSB に搭載されているメモリサイズの合計（整数）。単位は GB。
IO Devices	PPAR に割り当てられている CPU メモリユニット（CMU）に搭載されている PCI カードの情報。内蔵のオンボードデバイスは表示されません。PPAR の電源が投入されている場合に表示されます。以下の情報が表示されます。	
	PID	割り当て先の PPAR-ID。00 から 15 の整数で表示されます。
	PSB	割り当て先の PSB 番号。*xx-y*（*xx*: BB-ID（00 から 15 の整数）、*y*: 0 固定）の形式で表示されます。
	device	PCI カードの搭載位置や種類を表示します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

`platadm`, `platop`, `fieldeng`	すべての PPAR に対して実行できます。
`pparadm`, `pparmgr`, `pparop`	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
`-M`	テキストを 1 画面ずつ表示します。
`-p` *ppar_id*	状態を表示する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定できます。

詳細説明

- PPAR の電源が投入されている場合は PPAR に組み込まれているリソース情報を表示します。

■ PPAR の電源が切断されている場合はPPARに割り当てられているリソース情報を表示します。

使用例

使用例 1 電源切断状態の PPAR#0（2BB 構成）を指定して情報を表示します。

```
XSCF> showpparinfo -p 0
PPAR#00 Information:
--------------------
 CPU(s)                    :        8
 CPU Cores                 :      128
 CPU Threads               :      256
 Memory size (GB)          :     2432
 CoD Assigned (Cores)      :      128

CPU(s):
-------
 PID PSB   CPU#  Cores  Threads
 00  00-0  1        16       32
 00  00-0  2        16       32
 00  00-0  3        16       32
 00  01-0  0        16       32
 00  01-0  1        16       32
 00  01-0  2        16       32
 00  01-0  3        16       32

Memory:
-------
            install
 PID  PSB   size GB
 00   00-0     1216
 00   01-0     1216

IO Devices:
-------
 PID  PSB   device
```

使用例 2 電源投入状態の PPAR#0（2BB 構成）を指定して情報を表示します。

```
XSCF> showpparinfo -p 0
PPAR#00 Information:
--------------------
 CPU(s)                    :        8
 CPU Cores                 :      128
 CPU Threads               :      256
 Memory size (GB)          :     2432
 CoD Assigned (Cores)      :      128

CPU(s):
-------
 PID PSB   CPU#  Cores  Threads
 00  00-0  1        16       32
 00  00-0  2        16       32
 00  00-0  3        16       32
```

```
 00  01-0  0        16       32
 00  01-0  1        16       32
 00  01-0  2        16       32
 00  01-0  3        16       32

Memory:
-------
            install
 PID  PSB   size GB
 00   00-0     1216
 00   01-0     1216

IO Devices:
-------
 PID  PSB   device
 00    00-0  PCI#0 Name_Property:pci;
 00    00-0  PCI#0 PCIBOX#0008;
 00    00-0  PCI#0 PCIBOX#0008 PCI#1 Name_Property:network;
 00    00-0  PCI#0 PCIBOX#0008 PCI#4 Name_Property:network;
 00    00-0  PCI#0 PCIBOX#0008 PCI#7 Name_Property:network;
 00    00-0  PCI#1 Name_Property:network;
 00    01-0  PCI#0 Name_Property:LSI,sas;
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showhardconf(8), **showstatus**(8)

名前

showpparmode - 現在設定されている物理パーティション（PPAR）の動作モードを表示します。

形式

showpparmode `-p` *ppar_id* [-v]

showpparmode `-h`

説明

`showpparmode` は、指定した PPAR に現在設定されている動作モードを表示するコマンドです。

以下の状態が表示されます。

`HOST-ID` — PPAR のホスト ID。ホスト ID が割り当てられていない場合はハイフン（-）が表示されます。

`Diagnostic Level` — 自己診断テスト（POST）の診断レベル。以下のいずれかが表示されます。

`off`	なし
`min`	標準（デフォルト）
`max`	最大

`Message Level` — POST 診断のコンソールメッセージの詳細レベル。以下のいずれかが表示されます。

`none`	なし
`min`	抜粋
`normal`	標準（デフォルト）
`max`	最大
`debug`	デバッグ

`Alive Check` — Alive check の有効、無効。以下のいずれかが表示されます。

`on`	有効（デフォルト）
`off`	無効

`Watchdog Reaction` — Host Watchdog タイムアウト時の論理ドメイン（制御ドメインを含む）の動作。以下のいずれかが表示されます。

`none`	なし
`dumpcore`	パニック処理
`reset`	論理ドメインのリセット（デフォルト）

`Break Signal` — ブレーク信号抑止の有効、無効。以下のどちらかが表示されます。

`on`	有効（デフォルト）
`off`	無効

Autoboot(Guest Domain)	PPAR 起動時のゲストドメインオートブートの有効、無効。以下のどちらかが表示されます。 on　有効（デフォルト） off　無効
pad	SPARC M12 システムでの Power Aware Dispatcher 機能の有効、無効。以下のどちらかが表示されます。 on　有効（デフォルト） off　無効
Elastic Mode	SPARC M10 システムでの CPU とメモリに対する省電力動作の有効、無効。以下のどちらかが表示されます。 off　無効（デフォルト）。システムのすべての CPU およびメモリが常に最高のパフォーマンスで動作します。 on　有効。CPU およびメモリの使用率レベルに合わせてシステムの電力使用量が変化します。これにより、システムの消費電力を抑えることができます。
Power Management Policy	SPARC M12 システムでの CPU とメモリに対する省電力動作の有効、無効。以下のいずれかが表示されます。 disabled　無効（デフォルト）。システムのすべての CPU およびメモリが常に最高のパフォーマンスで動作します。 elastic　有効。CPU およびメモリの使用率レベルに合わせてシステムの電力使用量が変化します。これにより、システムの消費電力を抑えることができます。 performance　有効。システムで未使用のアイドル状態の CPU をより低速で動作させるか、またはスリープ状態に移行させることで、パフォーマンスにほとんど影響を与えずに電力を節約できます。
IOreconfigure	PPAR の起動時やリセット時に、I/O バスを再構成するかどうか。以下のいずれかが表示されます。 true　有効 false　無効（デフォルト） nextboot　次回起動時のみ有効。以降は自動的に無効になります。

`CPU Mode`	PPAR に設定されている CPU 動作モードを表示します。CPU 動作モードとは、SPARC64 X+ プロセッサを搭載した場合に、SPARC64 X+ 機能を使用して動作させるか、あるいは SPARC64 X 互換モードで動作させるかを決めるモードです。CPU 動作モードには `auto` モードと `compatible` モードがあります。 SPARC M12-1/M12-2/M12-2S では設定されず、"-" が表示されます。
`PPAR DR`	稼働中の PPAR 構成に対する、物理システムボード（PSB）の組み込みおよび切り離しを行う機能の有効／無効を表示します。
	`PPAR DR(Current)`　現在稼働中の PPAR 上で動作している PPAR DR 機能の設定状態を表示します。 電源が投入されていない PPAR の「PPAR DR(Current)」の表示内容は、「-」です。
	`PPAR DR(Next)`　次回 PPAR を起動、リセットしたときに PPAR 上で動作する PPAR DR 機能の設定内容を表示します。
`Ethernet Address`	PPAR のイーサネット（MAC）アドレス。このアドレスは、OpenBoot PROM の環境変数 `local-mac-address?` が `false` の場合、使用されます。この情報は、`-v` を指定した場合のみ表示されます。ただし、イーサネット（MAC）アドレスが割り当てられていない場合はハイフン（`-`）が表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

`platadm`, `fieldeng`	すべての PPAR に対して実行できます。
`pparadm`	管理権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h
使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-p *ppar_id*
表示する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で指定できます。

-v
詳細な情報を表示します。-v オプションを指定した場合、PPAR のイーサネット（MAC）アドレスも表示されます。

詳細説明

- showpparmode で表示される動作モードは、実際の動作ではなく設定状態を表します。実際の動作はオペレーションパネルのモードスイッチの状態により変わります。オペレーションパネルのモードスイッチが「Service」の場合は、showpparmode で表示された内容にかかわらず、PPAR の動作モードは以下のように設定されます。
  - 診断レベル、メッセージレベル、Host Watchdog タイムアウト時の動作、ゲストドメインのオートブート、Power Aware Dispatcher 機能、省電力動作、I/O バス再構成、CPU 動作モード、PPAR DR 機能 : showpparmode の表示どおり
  - Alive Check: 無効
  - ブレーク信号（STOP-A）: 信号を送信
- setpparmode(8) を使用すると、PPAR の動作モードを設定できます。

使用例

使用例 1 SPARC M10-4S で、PPAR-ID 0 に設定されている PPAR の動作モードを表示します。

```
XSCF> showpparmode -p 0
Host-ID                    :0f010f10
Diagnostic Level           :min
Message Level              :normal
Alive Check                :on
Watchdog Reaction          :reset
Break Signal               :on
Autoboot(Guest Domain)     :on
Elastic Mode               :off
IOreconfigure              :true
CPU Mode                   :auto
PPAR DR(Current)           :off
PPAR DR(Next)              :off
XSCF>
```

使用例 2 SPARC M12-2S で、PPAR-ID 0 に設定されている PPAR の動作モードを表示します。

```
XSCF> showpparmode -p 0
Host-ID                    :0f010f10
Diagnostic Level           :min
Message Level              :normal
```

```
Alive Check                 :on
Watchdog Reaction           :reset
Break Signal                :on
Autoboot(Guest Domain)      :on
Power Aware Dispatcher      :on
Power Management Policy     :disabled
IOreconfigure               :true
CPU Mode                    :-
PPAR DR(Current)            :off
PPAR DR(Next)               :off
XSCF>
```

使用例 3 SPARC M10-4S で、PPAR-ID 0 に設定されている PPAR の動作モードの詳細な情報を表示します。

```
XSCF> showpparmode -p 0 -v
Host-ID                     :8099010c
Diagnostic Level            :min
Message Level               :normal
Alive Check                 :off
Watchdog Reaction           :reset
Break Signal                :off
Autoboot(Guest Domain)      :on
Elastic Mode                :off
IOreconfigure               :true
CPU Mode                    :auto
PPAR DR(Current)            :off
PPAR DR(Next)               :on
Ethernet Address            :00:0b:5d:e2:01:0c
XSCF>
```

使用例 4 SPARC M12-2S で、PPAR-ID 0 に設定されている PPAR の動作モードの詳細な情報を表示します。

```
XSCF> showpparmode -p 0 -v
Host-ID                     :8099010c
Diagnostic Level            :min
Message Level               :normal
Alive Check                 :off
Watchdog Reaction           :reset
Break Signal                :off
Autoboot(Guest Domain)      :on
Power Aware Dispatcher      :on
Power Management Policy     :disabled
IOreconfigure               :true
CPU Mode                    :-
PPAR DR(Current)            :off
PPAR DR(Next)               :on
Ethernet Address            :00:0b:5d:e2:01:0c
XSCF>
```

使用例 5 SPARC M10-4S で、PPAR-ID 0 に設定されている PPAR の動作モードの詳細

な情報を表示します。(ホスト ID およびイーサネットアドレスが未割り当ての場合)

```
XSCF> showpparmode -p 0 -v
Host-ID                      :-
Diagnostic Level             :min
Message Level                :normal
Alive Check                  :off
Watchdog Reaction            :reset
Break Signal                 :off
Autoboot(Guest Domain)       :on
Elastic Mode                 :off
IOreconfigure                :true
CPU Mode                     :auto
PPAR DR(Current)             :-
PPAR DR(Next)                :on
Ethernet Address             :-
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpparmode(8)

名前

showpparparam - 指定した物理パーティション（PPAR）の次回起動時に設定される、制御ドメインの OpenBoot PROM 環境変数およびブートスクリプトを表示します。

形式

showpparparam -p *ppar_id*

showpparparam -p *ppar_id* -c auto-boot

showpparparam -h

説明

showpparparam は、指定した物理パーティション（PPAR）の次回起動時に設定される、制御ドメインの OpenBoot PROM 環境変数およびブートスクリプト（OpenBoot PROM が起動するときに OpenBoot PROM で実行されるスクリプト）の設定値を表示するコマンドです。

注 – PPAR 稼働中に OpenBoot PROM から環境変数の値を変更した場合は、showpparparam の出力には反映されません。また、次回 PPAR を起動したときには、OpenBoot PROM で変更した値が設定されます。

以下の設定値が表示されます。

use-nvramrc	制御ドメインの OpenBoot PROM 環境変数 use-nvramrc? の設定値を表示します。
security-mode	制御ドメインの OpenBoot PROM 環境変数 security-mode の設定値を表示します。
bootscript	登録されているブートスクリプトを表示します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-c auto-boot	OpenBoot PROM 環境変数 auto-boot? の設定値を表示します。
-p *ppar_id*	表示対象の PPAR-ID を指定します。

詳細説明

- 設定されていない OpenBoot PROM 環境変数にはハイフン「-」が表示されます。

- showpparparam で表示される "bootscript" は、setpparparam(8) で設定した値が有効である間、設定値が表示されます。有効である間とは、setpparparam(8) で設定した直後から、次回 PPAR 起動時に OpenBoot PROM 環境変数が書き換えられ、登録されたブートスクリプトが実行されるまでの間です。その後は何も表示されません。
- showpparparam で表示される "use-nvramrc" および "security-mode" は、setpparparam(8) で設定した値が有効である間、設定値が表示されます。有効である間とは、setpparparam(8) で設定した直後から、次回 PPAR 起動時に OpenBoot PROM 環境変数が書き換えられ、登録されたブートスクリプトが実行されるまでの間です。その後は "-" が表示されます。
- -c auto-boot? オプションを指定して表示される "auto-boot?" の値は現在の OpenBoot PROM 環境変数の値が表示されます。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 の制御ドメインに設定されている OpenBoot PROM 環境変数の設定値およびブートスクリプトを表示します。

```
XSCF> showpparparam -p 0
use-nvramrc         :false
security-mode       :none
bootscript          :
setenv auto-boot? true
setenv input-device virtual-console
setenv output-device virtual-console
```

使用例 2 PPAR-ID 0 の制御ドメインに設定されている OpenBoot PROM 環境変数 auto-boot? の設定値を表示します。

```
XSCF> showpparparam -p 0 -c auto-boot
auto-boot?          :true
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setpparparam(8)

名前

showpparprogress - 電源制御シーケンス中の、物理パーティション（PPAR）の詳細な状態を表示します。

形式

showpparprogress -p *ppar_id*

showpparprogress -h

説明

showpparprogress は、電源の投入、切断、およびリセットシーケンス中の、PPAR の詳細な状態を表示するコマンドです。

showpparprogress で表示される PPAR の状態は以下のとおりです。

PPAR Power On Processing	PPAR の電源投入前処理
PPAR Power On	PPAR の電源投入開始
XBBOX Reset	クロスバーボックス筐体のリセット
PSU On	電源ユニット（PSU）の電源投入開始
CMU Reset Start	CPU メモリユニット（CMU）のリセット
XB Reset 1	クロスバーユニット（XBU）のリセット（1/3）
XB Reset 2	クロスバーユニット（XBU）のリセット（2/3）
XB Reset 3	クロスバーユニット（XBU）のリセット（3/3）
CPU Reset 1	CPU のリセット（1/2）
CPU Reset 2	CPU のリセット（2/2）
Reset released	リセット制限解除
CPU Start	CPU 起動
PPAR Power Off	PPAR の電源切断開始
CPU Stop	CPU 停止
PSU Off	PSU の電源切断開始
PPAR reset	PPAR のリセット開始

showpparprogress を実行すると、電源制御シーケンスの進み具合により、リアルタイムで表示が更新されます。シーケンスが終了すると、コマンドの実行が終了します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

`useradm`, `platadm`, `platop`, `fieldeng`	すべての PPAR に対して実行できます。
`pparadm`, `pparmgr`, `pparop`	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-h` 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-p` *ppar_id* 状態を表示する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定できます。

詳細説明

- システムに存在しない PPAR-ID を指定した場合は、何も表示されずにコマンドの実行が終了します。
- 表示を中断する場合は、[Ctrl]+[C] を押します。
- 論理ドメインの状態は、`showdomainstatus`(8) で確認してください。
- すでに PPAR の電源の投入が完了している、または電源の切断が開始されていない状態の場合は、「`This PPAR is powered on.`」のメッセージが表示され、コマンドの実行が終了します。
- すでに PPAR の電源の切断が完了している、または電源の投入が開始されていない状態の場合は、「`This PPAR is powered off.`」のメッセージが表示され、コマンドの実行が終了します。

使用例

使用例 1 電源の投入シーケンス中に、PPAR の状態を表示します（シーケンスの途中の場合）。

```
XSCF> showpparprogress -p 0
PPAR Power On Preprocessing PPAR#0 [ 1/12]
PPAR Power On               PPAR#0 [ 2/12]
XBBOX Reset                 PPAR#0 [ 3/12]
PSU On                      PPAR#0 [ 4/12]
CMU Reset Start             PPAR#0 [ 5/12]
XB Reset 1                  PPAR#0 [ 6/12]
XB Reset 2                  PPAR#0 [ 7/12]
XB Reset 3                  PPAR#0 [ 8/12]
/
```

使用例 2 電源の投入シーケンス中に、PPAR の状態を表示します（電源の投入が成功

した場合)。

```
XSCF> showpparprogress -p 0
PPAR Power On Preprocessing PPAR#0 [ 1/12]
PPAR Power On               PPAR#0 [ 2/12]
XBBOX Reset                 PPAR#0 [ 3/12]
PSU On                      PPAR#0 [ 4/12]
CMU Reset Start             PPAR#0 [ 5/12]
XB Reset 1                  PPAR#0 [ 6/12]
XB Reset 2                  PPAR#0 [ 7/12]
XB Reset 3                  PPAR#0 [ 8/12]
CPU Reset 1                 PPAR#0 [ 9/12]
CPU Reset 2                 PPAR#0 [10/12]
Reset released              PPAR#0 [11/12]
CPU Start                   PPAR#0 [12/12]
The sequence of power control is completed.
XSCF>
```

使用例 3 電源の切断シーケンス中に、PPAR の状態を表示します（電源の切断が成功した場合)。

```
XSCF> showpparprogress -p 0
PPAR Power Off              PPAR#0 [ 1/ 3]
CPU Stop                    PPAR#0 [ 2/ 3]
PSU Off                     PPAR#0 [ 3/ 3]
The sequence of power control is completed.
XSCF>
```

使用例 4 電源のリセットシーケンス中に、PPAR の状態を表示します（電源のリセットが成功した場合)。

```
XSCF> showpparprogress -p 0
PPAR reset                  PPAR#0 [ 1/13]
CPU Stop                    PPAR#0 [ 2/13]
PSU Off                     PPAR#0 [ 3/13]
XBBOX Reset                 PPAR#0 [ 4/13]
PSU On                      PPAR#0 [ 5/13]
CMU Reset Start             PPAR#0 [ 6/13]
XB Reset 1                  PPAR#0 [ 7/13]
XB Reset 2                  PPAR#0 [ 8/13]
XB Reset 3                  PPAR#0 [ 9/13]
CPU Reset 1                 PPAR#0 [10/13]
CPU Reset 2                 PPAR#0 [11/13]
Reset released              PPAR#0 [12/13]
CPU Start                   PPAR#0 [13/13]
The sequence of power control is completed.
XSCF>
```

使用例 5 電源のリセットシーケンス中に、PPAR の状態を表示します（リセットシー

ケンス中に縮退によるリセットが発生した場合)。

```
XSCF> showpparprogress -p 0
PPAR reset                    PPAR#0 [ 1/13]
CPU Stop                      PPAR#0 [ 2/13]
PSU Off                       PPAR#0 [ 3/13]
XBBOX Reset                   PPAR#0 [ 4/13]
PSU On                        PPAR#0 [ 5/13]
CMU Reset Start               PPAR#0 [ 6/13]
* Power control sequence has been restarted
PPAR reset                    PPAR#0 [ 1/13]
CPU Stop                      PPAR#0 [ 2/13]
PSU Off                       PPAR#0 [ 3/13]
XBBOX Reset                   PPAR#0 [ 4/13]
PSU On                        PPAR#0 [ 5/13]
CMU Reset Start               PPAR#0 [ 6/13]
XB Reset 1                    PPAR#0 [ 7/13]
XB Reset 2                    PPAR#0 [ 8/13]
XB Reset 3                    PPAR#0 [ 9/13]
CPU Reset 1                   PPAR#0 [10/13]
CPU Reset 2                   PPAR#0 [11/13]
Reset released                PPAR#0 [12/13]
CPU Start                     PPAR#0 [13/13]
The sequence of power control is completed.
XSCF>
```

使用例 6 電源の投入シーケンス中に、PPAR の状態を表示します（リセットシーケンス中に縮退によるリセットが発生した場合)。

```
XSCF> showpparprogress -p 0
PPAR reset                    PPAR#0 [ 1/13]
CPU Stop                      PPAR#0 [ 2/13]
PSU Off                       PPAR#0 [ 3/13]
XBBOX Reset                   PPAR#0 [ 4/13]
PSU On                        PPAR#0 [ 5/13]
CMU Reset Start               PPAR#0 [ 6/13]
* Power control sequence has been restarted
PPAR reset                    PPAR#0 [ 1/13]
CPU Stop                      PPAR#0 [ 2/13]
PSU Off                       PPAR#0 [ 3/13]
XBBOX Reset                   PPAR#0 [ 4/13]
PSU On                        PPAR#0 [ 5/13]
CMU Reset Start               PPAR#0 [ 6/13]
XB Reset 1                    PPAR#0 [ 7/13]
XB Reset 2                    PPAR#0 [ 8/13]
XB Reset 3                    PPAR#0 [ 9/13]
CPU Reset 1                   PPAR#0 [10/13]
CPU Reset 2                   PPAR#0 [11/13]
Reset released                PPAR#0 [12/13]
CPU Start                     PPAR#0 [13/13]
The sequence of power control is completed.
XSCF>
```

使用例 7 電源の投入シーケンス中に、PPAR の状態を表示します（電源の投入が失敗した場合）。

```
XSCF> showpparprogress -p 0
PPAR Power On Preprocessing PPAR#0 [ 1/12]
PPAR Power On               PPAR#0 [ 2/12]
XBBOX Reset                 PPAR#0 [ 3/12]
PSU On                      PPAR#0 [ 4/12]
CMU Reset Start             PPAR#0 [ 5/12]
The sequence of power control is terminated.
XSCF>
```

使用例 8 電源の投入シーケンス中に、PPAR の状態を表示します（電源の投入を中断した場合）。

```
XSCF> showpparprogress -p 0
PPAR Power On Preprocessing PPAR#0 [ 1/12]
PPAR Power On               PPAR#0 [ 2/12]
XBBOX Reset                 PPAR#0 [ 3/12]
PSU On                      PPAR#0 [ 4/12]
CMU Reset Start             PPAR#0 [ 5/12]
XB Reset 1                  PPAR#0 [ 6/12]
/^C
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

poweroff(8), **poweron**(8), **reset**(8)

名前 showpparstatus - 現在の物理パーティション（PPAR）の状態を表示します。

形式 **showpparstatus** -p *ppar_id*

showpparstatus -a

showpparstatus -h

説明 showpparstatus は、現在の PPAR の状態を表示するコマンドです。

PPAR ごとに、以下のいずれかの状態が表示されます。

Powered Off	電源が切断されている状態
Initialization Phase	Power-On Self-Test （POST）動作中の状態
Initialization Complete	POST 完了の状態
Running	POST 処理が完了し稼働中の状態
Hypervisor Aborted	Hypervisor Abort が発生し、PPAR がリセットされるまでの状態。
-	上記以外（PPAR が定義されていない状態）

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, fieldeng	すべての PPAR に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-a	アクセスできるすべての PPAR の状態を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-p *ppar_id*	状態を表示する PPAR-ID を指定します。*ppar_id* はシステム構成によって、0 から 15 までの整数で 1 つだけ指定できます。

詳細説明 showdomainstatus(8) を使用すると、論理ドメインの状態が確認できます。

使用例

使用例 1 すべての PPAR の状態を表示します。

```
XSCF> showpparstatus -a
PPAR-ID        PPAR Status
00             Powered Off
01             Initialization Phase
02             Initialization Phase
03             Running
04             -
05             Hypervisor Aborted
06             Running
07             Initialization Complete
08             Initialization Phase
09             Initialization Phase
10             -
11             Powered Off
12             Running
13             Running
14             Powered Off
15             -
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

poweroff(8), **poweron**(8), **reset**(8), **showdomainstatus**(8), **showpcl**(8)

名前 showremotepwrmgmt - SPARC M12/M10 システムの電源連動機能（Remote Cabinet Interface over Lan : RCIL）の設定およびノードの電源状態を表示します。

形式 **showremotepwrmgmt** [-a|-G *groupid* [-N *nodeid*]] [-M]

showremotepwrmgmt -h

説明 showremotepwrmgmt は、電源連動グループ管理情報と、設定されているノードの電源状態を表示するコマンドです。

showremotepwrmgmt では、以下の情報が表示されます。

[Remote Power Management Group Information]

GroupID — 設定されている電源連動グループのグループ ID。01 から 32 までの整数で表示されます。

Remote Power Management Status — 設定されている電源連動グループのステータス。以下のどちらかが表示されます。

Enable	電源連動機能が有効
Disable	電源連動機能が無効

NodeID — 設定されているノードのノード ID。001 から 128 までの 10 進数の整数で表示されます。

NodeType — 設定されているノードの種別。以下のいずれかが表示されます。

Master HOST	サーバ装置（マスタホストノード）
HOST	サーバ装置（ホストノード）
I/O	I/O 装置（I/O ノード）
PwrLinkBox	電源連動ボックス（I/O ノード）
Others	その他ノード

NodeIdentName — ノードを識別するユニークな ID または名称。32 バイトで表示されます。

Power — ノードの電源状態。以下のどちらかが表示されます。

ON	電源オン
OFF	電源オフ

PowerLinkage	設定されているノードに対する電源投入連動フラグ。以下のいずれかが表示されます。

Disable	電源連動無効
Enable	電源投入／切断連動有効
Enable(Power-On Link)	電源投入連動のみ有効
Enable(Power-Off Link)	電源切断連動のみ有効

ノードがサーバ装置である場合は、以下を行います。

- ”Enable”時、電源連動グループの各ノードへ電源連動の指示を出す
- ”Enable”時、電源連動グループのサーバ装置から電源連動の指示を受ける

ノードが I/O 装置、電源連動ボックス、その他ノードである場合は、以下を行います。

- ”Enable”時、電源連動グループのサーバ装置から電源連動の指示を受ける

Operation	電源投入手段。以下のどちらかが表示されます。

IPMI	IPMI による電源投入
WakeUpOnLAN	Wake-On LAN による電源投入

[Power Status Information]

ノードおよびサブノードが存在する場合はサブノードの電源状態。サブノードは「SubNode#*xx*」の形式で表示され、「*xx*」は PPAR-ID を表します。電源状態は以下のどちらかが表示されます。

ON	電源オン
OFF	電源オフ

[IPMI Information]

IPMI UserName	連動対象ノードを制御するコントローラーの IPMI ユーザー名。最大 20 バイトまでとなります。
IPMI IP address	連動対象ノードを制御するコントローラーの IPMI ポートの IP アドレス。IPv4 型式で表示されます。
IPMI Slave Address	連動対象ノードを制御するコントローラーの IPMI Slave Address。16 進数で表示されます。 Slave Address は IPMI 仕様書『Intelligent Platform Management Interface Specification Second Generation v2.0』を参照してください。
IPMI MAC Address	連動対象ノードを制御するコントローラーの IPMI MAC アドレス。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a
: 設定されているすべての電源連動グループの管理情報を表示します。オプションを指定せずに showremotepwrmgmt を実行した場合に表示されるものと同じです。

-G *groupid*
: 表示を行う電源連動グループのグループ ID を 1 つ、または複数指定します。1 から 32 までの数値で指定できます。

例 :-G 1

複数の電源連動グループを範囲で指定する場合は、範囲に含まれる電源連動グループのグループ ID の、はじめと終わりをハイフン（-）で区切って指定します。

例 :-G 2-10

1 つの電源連動グループや電源連動グループの範囲を複数指定する場合は、カンマ（,）で区切って指定します。指定が重複した場合はエラーとなります。

例 :-G 1,3,5

-h　　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-M　　テキストを 1 画面ずつ表示します。

-N *nodeid*　　-G で指定された電源連動グループ内に登録されている、表示する電源連動装置のノード ID を 1 つ指定します。1 から 128 までの数値で指定できます。

例 :-N 1

詳細説明

- -G により、構築されていない電源連動グループを指定して実行した場合はエラーとなります。
- -a によりすべての電源連動グループを対象として実行する場合、電源連動グループが 1 つも構築されていない（初期状態または clearremotepwrmgmt (8) 実行後）とエラーになります。
- -N により表示対象の電源連動装置を指定して実行する場合、同時に指定する -G が範囲指定されているとエラーになります。

使用例

使用例 1　　登録されているすべての電源連動グループの情報を表示します。

```
XSCF> showremotepwrmgmt

[Remote Power Management Group#01 Information]
Remote Power Management Status     :[Enable]

NodeID NodeType    NodeIdentName                    Power PowerLinkage          Operation
------ ----------- -------------------------------- ----- --------------------- -----------
001    Master HOST XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX ON    Enable                IPMI
002    PwrLinkBox  XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX ON    Enable                IPMI
003    Others      XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX ON    Enable                IPMI
------ ----------- -------------------------------- ----- --------------------- -----------

[Remote Power Management Group#02 Information]
Remote Power Management Status     :[Enable]

NodeID NodeType    NodeIdentName                    Power PowerLinkage          Operation
------ ----------- -------------------------------- ----- --------------------- -----------
001    Master HOST XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX ON    Enable                IPMI
002    I/O         XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX ON    Enable                IPMI
------ ----------- -------------------------------- ----- --------------------- -----------

[Remote Power Management Group#03 Information]
Remote Power Management Status     :[Enable]

NodeID NodeType    NodeIdentName                    Power PowerLinkage          Operation
------ ----------- -------------------------------- ----- --------------------- -----------
000    Master HOST XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX ON    Enable                IPMI
001    HOST        XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX ON    Enable                IPMI
002    PwrLinkBox  XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX OFF   Disable               IPMI
003    Others      XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX OFF   Disable               IPMI
------ ----------- -------------------------------- ----- --------------------- -----------

XSCF>
```

使用例 2 電源連動グループ 2 の情報を表示します。

```
XSCF> showremotepwrmgmt -G 2

[Remote Power Management Group#02 Information]
Remote Power Management Status     :[Enable]

NodeID NodeType    NodeIdentName                    Power PowerLinkage          Operation
------ ----------- -------------------------------- ----- --------------------- -----------
001    Master HOST XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX ON    Enable                IPMI
002    I/O         XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX ON    Enable                IPMI
------ ----------- -------------------------------- ----- --------------------- -----------

XSCF>
```

使用例 3 電源連動グループ 2 に含まれる電源連動装置（ノード ID=1）の情報を表示します（サブノードが存在しない場合)。

```
XSCF> showremotepwrmgmt -G 2 -N 1
Remote Power Management Group Information
    GroupID                         :[02]
    Remote Power Management Status  :[Enable]
    NodeID                          :[001]
    NodeType                        :[Master HOST]
    NodeIdentName                   :[XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX]
    PowerLinkage                    :[Enable]
    Operation                       :[IPMI]

Power Status Information
    Node#002                        :[ON]

IPMI Information
    IPMI UserName                   :[pwm]

Controller#0
    LAN#0
    IPMI IP address                 :[xxx.xxx.xxx.xxx]
    IPMI SlaveAddress               :[00]
    IPMI MAC Address                :[00:00:00:00:00:00]

    LAN#1
    IPMI IP address                 :[xxx.xxx.xxx.xxx]
    IPMI SlaveAddress               :[00]
    IPMI MAC Address                :[00:00:00:00:00:00]

Controller#1
    LAN#0
    IPMI IP address                 :[xxx.xxx.xxx.xxx]
    IPMI SlaveAddress               :[00]
    IPMI MAC Address                :[00:00:00:00:00:00]

    LAN#1
    IPMI IP address                 :[xxx.xxx.xxx.xxx]
    IPMI SlaveAddress               :[00]
```

```
    IPMI MAC Address                :[00:00:00:00:00:00]

XSCF>
```

使用例 4 電源連動グループ 2 に含まれる電源連動装置（ノード ID=2）の情報を表示します（サブノードが存在する場合）。

```
XSCF> showremotepwrmgmt -G 2 -N 2
Remote Power Management Group Information
    GroupID                         :[02]
    Remote Power Management Status  :[Enable]
    NodeID                          :[002]
    NodeType                        :[Master HOST]
    NodeIdentName                   :[XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX]
    PowerLinkage                    :[Enable]
    Operation                       :[IPMI]

Power Status Information
    Node#002                        :[ON]
         SubNode#00                 :[ON]
         SubNode#01                 :[ON]

IPMI Information
    IPMI UserName                   :[pwm]

Controller#0
    LAN#0
    IPMI IP address                 :[xxx.xxx.xxx.xxx]
    IPMI SlaveAddress               :[00]
    IPMI MAC Address                :[00:00:00:00:00:00]

    LAN#1
    IPMI IP address                 :[xxx.xxx.xxx.xxx]
    IPMI SlaveAddress               :[00]
    IPMI MAC Address                :[00:00:00:00:00:00]

Controller#1
    LAN#0
    IPMI IP address                 :[xxx.xxx.xxx.xxx]
    IPMI SlaveAddress               :[00]
    IPMI MAC Address                :[00:00:00:00:00:00]

    LAN#1
    IPMI IP address                 :[xxx.xxx.xxx.xxx]
    IPMI SlaveAddress               :[00]
    IPMI MAC Address                :[00:00:00:00:00:00]

XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

clearremotepwrmgmt(8), **getremotepwrmgmt**(8), **setremotepwrmgmt**(8)

名前

showremotestorage - リモートストレージの情報を表示します。

形式

showremotestorage [-M] [*interface*]

showremotestorage -h

説明

showremotestorage は、ネットワークインターフェースの設定情報およびリモートストレージへの接続状態を表示します。

接続状態としては、以下のいずれかが表示されます。

Not Installed	対象の SPARC M12/M10 筐体が実装されていないため、リモートストレージを使用できません。
Not Set	対象ネットワークインターフェースの IP アドレスが設定されていないため、リモートストレージを使用できません。
Unavailable	通信異常や内部異常により、リモートストレージを使用できません。
Session Exist	対象の SPARC M12/M10 筐体の他のネットワークインターフェースがすでにリモートストレージに接続しているため、対象ネットワークインターフェースではリモートストレージを使用できません。たとえば bb#00-lan#0 が接続状態の場合、bb#00-lan#1 は Session Exist 状態になります。
Available	IP アドレスは設定済みで、リモートストレージを使用できます。
IP アドレス	リモートストレージへ接続済みです。接続先の IP アドレスが表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

interface

表示するネットワークインターフェースを指定します。以下のいずれかを指定できます。

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

```
bb#00-lan#0    : BB#00-LAN#0
bb#00-lan#1    : BB#00-LAN#1
bb#01-lan#0    : BB#01-LAN#0
bb#01-lan#1    : BB#01-LAN#1
 ...
bb#14-lan#0    : BB#14-LAN#0
bb#14-lan#1    : BB#14-LAN#1
bb#15-lan#0    : BB#15-LAN#0
bb#15-lan#1    : BB#15-LAN#1
```

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

```
bb#00-lan#0    : BB#00-LAN#0
bb#00-lan#1    : BB#00-LAN#1
bb#01-lan#0    : BB#01-LAN#0
bb#01-lan#1    : BB#01-LAN#1
bb#02-lan#0    : BB#02-LAN#0
bb#02-lan#1    : BB#02-LAN#1
bb#03-lan#0    : BB#03-LAN#0
bb#03-lan#1    : BB#03-LAN#1
```

- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合

```
bb#00-lan#0    : BB#00-LAN#0
bb#00-lan#1    : BB#00-LAN#1
```

interface の指定を省略すると、すべてのネットワークインターフェースが表示されます。ただしネットワークインターフェースが搭載されていない場合、または設定されていない場合は表示されません。

使用例

使用例 1 BB#02-LAN#0 の状態を表示します。

```
XSCF> showremotestorage bb#02-lan#0
Interface   XSCF IP Address Netmask         Gateway         Connection
----------- --------------- --------------- --------------- ---------------
bb#02-lan#0 192.168.1.12    255.255.255.0   192.168.1.1     192.168.2.10
```

使用例 2 3BB 構成のすべてのネットワークインターフェースの状態を表示します（SPARC M10-4S（クロスバーボックスなし））。

```
XSCF> showremotestorage
Interface   XSCF IP Address Netmask         Gateway         Status
----------- --------------- --------------- --------------- ----------------
bb#00-lan#0 192.168.1.10    255.255.255.0   192.168.1.1     Available
```

```
bb#00-lan#1 -               -               -               Not Set
bb#01-lan#0 192.168.1.11    255.255.255.0   192.168.1.1     Available
bb#01-lan#1 -               -               -               Not Set
bb#02-lan#0 192.168.1.12    255.255.255.0   192.168.1.1     192.168.2.10
bb#02-lan#1 -               -               -               Not Set
bb#03-lan#0 192.168.1.13    255.255.255.0   192.168.1.1     Not Installed
```

使用例 3 16BB 構成のすべてのネットワークインターフェースの状態を表示します（SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり））。

```
XSCF> showremotestorage
Interface   XSCF IP Address Netmask         Gateway         Status
----------- --------------- --------------- --------------- ----------------
bb#00-lan#0 192.168.1.10    255.255.255.0   192.168.1.1     Available
bb#00-lan#1 -               -               -               Not Set
bb#01-lan#0 192.168.1.11    255.255.255.0   192.168.1.1     Available
bb#01-lan#1 -               -               -               Not Set
bb#02-lan#0 192.168.1.12    255.255.255.0   192.168.1.1     192.168.2.10
bb#02-lan#1 192.168.1.13    255.255.255.0   192.168.1.1     Session Exist
bb#03-lan#0 -               -               -               Not Set
bb#03-lan#1 -               -               -               Not Set
...
bb#14-lan#0 -               -               -               Not Set
bb#14-lan#1 -               -               -               Not Set
bb#15-lan#0 -               -               -               Not Set
bb#15-lan#1 -               -               -               Not Set
```

使用例 4 未搭載の BB#04-LAN#0 の状態を表示します。

```
XSCF> showremotestorage bb#04-lan#0
Interface   XSCF IP Address Netmask         Gateway         Connection
----------- --------------- --------------- --------------- ---------------
bb#04-lan#0 -               -               -               Not Installed
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setremotestorage (8)

名前

showresult - 直前に実行したコマンドの終了ステータスを表示します。

形式

showresult

showresult -h

説明

showresult は、直前に実行したコマンドの終了ステータスを表示するコマンドです。

showresult は、直前に実行したコマンドが成功したか否かをリモート制御プログラムが確認するのに便利です。

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明

[Ctrl]+[C] キーなどで、実行中のコマンドの処理を中断したあと showresult を実行すると、0 または 0 以外の数値で、中断されたコマンドに依存した終了ステータスが表示されます。

使用例

使用例 1 showdate(8) の実行結果を表示します。

```
XSCF> showdate
Sat Oct 20 14:53:00 JST 2012
XSCF> showresult
0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

showroute - XSCF ネットワークインターフェースに設定されているルーティング情報を表示します。

形式

showroute [-M] [-n] {-a | *interface*}

showroute -h

説明

showroute は、XSCF ネットワークインターフェースに現在設定されているルーティング情報を表示するコマンドです。

指定したネットワークインターフェース、またはすべてのネットワークインターフェースに対するルーティング情報を表示できます。以下の情報が表示されます。

Destination	宛先となる IP アドレス
Gateway	ゲートウェイ
Netmask	ネットマスク
Flags	ルーティングの状態を表すフラグ

U	経路が有効である
H	1 つのホストだけに到達可能
G	ゲートウェイを使用する
R	回復される動的経路
C	キャッシュのエントリーである
!	拒否された経路である

Interface	XSCF ネットワークインターフェース名

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	すべての XSCF ネットワークインターフェースに設定されているルーティング情報を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-n	ホスト名の名前解決をしないで、IP アドレスを表示します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

interface 表示するネットワークインターフェースを指定します。システム構成によって、以下のいずれかを指定できます。-a オプションと一緒に指定した場合は無効となります。

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

xbbox#80-lan#0	XB-Box#80-LAN#0
xbbox#80-lan#1	XB-Box#80-LAN#1
xbbox#81-lan#0	XB-Box#81-LAN#0
xbbox#81-lan#1	XB-Box#81-LAN#1

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

bb#00-lan#0	BB#00-LAN#0
bb#00-lan#1	BB#00-LAN#1
bb#01-lan#0	BB#01-LAN#0
bb#01-lan#1	BB#01-LAN#1

- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 の場合

bb#00-lan#0	BB#00-LAN#0
lan#0	bb#00-lan#0 の省略形
bb#00-lan#1	BB#00-LAN#1
lan#1	bb#00-lan#1 の省略形

詳細説明

setroute(8) を使用すると、XSCF ネットワークのルーティングが設定できます。

使用例

使用例 1 XB-Box#80-LAN#0 に設定されているルーティング情報を表示します。

```
XSCF> showroute xbbox#80-lan#0
Destination      Gateway          Netmask          Flags Interface
192.168.10.0     *                255.255.255.0    U     xbbox#80-lan#0
default          192.168.10.1     0.0.0.0          UG    xbbox#80-lan#0
```

使用例 2 XB-Box#80-LAN#0 に設定されているルーティング情報を名前解決せずに表示します。

```
XSCF> showroute -n xbbox#80-lan#0
Destination      Gateway          Netmask          Flags Interface
192.168.10.0     *                255.255.255.0    U     xbbox#80-lan#0
0.0.0.0          192.168.10.1     0.0.0.0          UG    xbbox#80-lan#0
```

使用例 3 設定されているルーティング情報を表示します。

```
XSCF> showroute -a
Destination      Gateway          Netmask          Flags Interface
192.168.10.0     *                255.255.255.0    U     xbbox#80-lan#0
default          192.168.10.1     0.0.0.0          UG    xbbox#80-lan#0
```

```
Destination     Gateway         Netmask         Interface
192.168.10.0    *               255.255.255.0   xbbox#81-lan#0
default         192.168.10.1    0.0.0.0         xbbox#81-lan#0
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setroute（8）

名前

showservicetag - サービスタグの現在の状態を表示します。

形式

showservicetag [-v]

showservicetag -h

説明

showservicetag は現在設定されているサービスタグの状態を表示するコマンドです。

サービスタグは、プラットフォーム、タイプ、シャーシシリアル番号など、プラットフォームをサポートするための情報を提供します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm 権限または platop 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-v	詳細な情報を表示します。

使用例

使用例 1 サービスタグの現在の状態を表示します（サービスタグが有効の場合）。

```
XSCF> showservicetag
Enabled
```

使用例 2 サービスタグの現在の状態を表示します（サービスタグが無効の場合）。

```
XSCF> showservicetag
Disabled
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setservicetag(8)

名前 showsmtp - Simple Mail Transfer Protocol（SMTP）の設定情報を表示します。

形式

showsmtp

showsmtp [-v]

showsmtp -h

説明 showsmtp は、SMTP の設定情報を表示するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-v	詳細な情報を表示します。

詳細説明 SMTP 情報には、メールサーバおよび返信用アドレスが含まれます。

使用例

使用例 1 SMTP の設定情報を表示します。

```
XSCF> showsmtp
Mail Server: 10.4.1.1
Port: 25
Authentication Mechanism: smtp-auth
 User Name: jsmith
 Password: ********
Reply Address: adm@customer.com
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setsmtp**(8)

名前

showsnmp - SNMP エージェントの設定情報と現在のステータスを表示します。

形式

showsnmp

showsnmp -h

説明

showsnmp は、SNMP エージェントの設定情報と現在のステータスを表示するコマンドです。

表示される情報には、エージェントのステータス、ポート、システムの場所、連絡先と説明、トラップホスト、および SNMP のバージョンおよび有効な MIB モジュールが含まれます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 セットアップされていないシステムの、SNMP 情報を表示します。

```
XSCF> showsnmp

Agent Status:       Disabled
Agent Port:         161
System Location:    Unknown
System Contact:     Unknown
System Description: Unknown

Trap Hosts: None
SNMP V1/V2c: None

Enabled MIB Modules: None
```

使用例 2 SNMPv3 トラップホストがセットアップされた、無効なシステムの SNMP 情報を表示します。

```
XSCF> showsnmp

Agent Status:       Disabled
Agent Port:         161
System Location:    SanDiego
System Contact:     bob@jupiter.west
System Description: POST-APL/COL3
```

```
Trap Hosts:
Hostname      Port      Type   Community String  Username  Auth Encrypt
--------      ----      ----   ----------------  --------  ---- -------
host1         162       v3     n/a               jsmith    SHA  DES

SNMP V1/V2c: None

Enabled MIB Modules: None
```

使用例 3 SNMPv1 トラップホストや SNMPv2c トラップホストがセットアップされた、有効なシステムの SNMP 情報を表示します。

```
XSCF> showsnmp

Agent Status:       Enabled
Agent Port:         161
System Location:    SanDiego
System Contact:     jsmith@jupiter.west
System Description: POST-APL/COL3

Trap Hosts:
Hostname      Port      Type   Community String  Username  Auth Encrypt
--------      ----      ----   ----------------  --------  ---- -------
host1         162       v1     public             n/a      n/a  n/a
host2         162       v2c    public             n/a      n/a  n/a
host3         162       v3     n/a                bob      SHA  DES

SNMP V1/V2c:

Status: Enabled
Community String: public

Enabled MIB Modules:
SP_MIB
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setsnmp (8)

名前

showsnmpusm - SNMP エージェントに関する現在の User-based Security Model（USM）情報を表示します。

形式

showsnmpusm

showsnmpusm -h

説明

showsnmpusm は、SNMP エージェントに関する現在の USM 情報を表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 SNMP エージェントに関する現在の USM 情報を表示します。

```
XSCF> showsnmpusm
Username Auth Encrypt
-------- ---- -------
jsmith   SHA  DES
sue      MD5  AES
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setsnmpusm(8)

名前 showsnmpvacm - SNMP エージェントに関する現在の View-based Control Access (VACM) 情報を表示します。

形式 **showsnmpvacm**

showsnmpvacm -h

説明 showsnmpvacm は、SNMP エージェントに関する現在の VACM 情報を表示するコマンドです。

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-h 使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例 **使用例 1** システムの SNMP 情報を表示します。

```
XSCF> showsnmpvacm
Groups:
Groupname   Username
---------   --------
admin       jsmith, bob

Views:
View      Subtree   Mask   Type
----      -------   ----   ----
all_view  .1        ff     include

Access:
View      Group
----      -----
all_view  admin
```

終了ステータス 以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。

>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目 **setsnmpvacm**(8)

名前

showsscp - サービスプロセッサ間通信プロトコル（SSCP）に割り当てられている IP アドレスを表示します。

形式

showsscp [-a | -b *bb_id*] [-N *network_id*] [-M]

showsscp -h

説明

showsscp は、SPARC M12-2S/M10-4S またはクロスバーボックスの SSCP リンクの設定値を表示するコマンドです。

システム内の SSCP リンクすべての IP アドレスを表示する場合、出力は表になります。この表は、PPAR-ID によってソートされます。

特定の PPAR またはサービスプロセッサの IP アドレスを表示する場合、表ではなく、指定した PPAR またはサービスプロセッサの IP アドレスのみが出力されます。

showsscp は、SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4 では使用できません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	すべてのクロスバーボックスおよび SPARC M12-2S/M10-4S の SSCP リンクの設定値を表示します。
-b *bb_id*	対象の BB-ID を指定します。SPARC M12-2S/M10-4S の場合は 00 から 15 まで、クロスバーボックスの場合は 80 から 83 までの整数で指定できます。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-N *network_id*	設定対象とする SSCP リンクネットワークの ID を指定します。*network_id* には、SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合は 0 から 2 まで、SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合は 0 から 4 までの数値を指定します。省略した場合には、すべてのネットワークが指定されます。

詳細説明

- オプションを指定せずに showsscp を実行すると、すべてのクロスバーボックスおよび SPARC M12-2S/M10-4S の SSCP リンクの設定値を表示します。これは、-a オプションを指定した場合と同様です。
- -b *bb_id* で BB-ID を指定して showsscp を実行すると、指定した BB-ID の SSCP リンクのすべての設定値を表示します。
- -N *network_id* でネットワーク ID を指定して showsscp を実行すると、指定したネットワーク ID の SSCP リンクの設定値のみを表示します。

- `-b` *bb_id* と `-N` *network_id* を組み合わせると、特定のBB-IDの特定のネットワークにおける SSCP リンクの設定値を表示できます。
- `-a` と `-N` *network_id* を組み合わせると、特定のネットワークにおけるすべての SSCP リンクの設定値を表示できます。

  設定反映前の情報は `applynetwork`(8) を参照してください。
- `-N` *network_id* を指定する場合、`-b` *bb_id* は以下の範囲でなければエラーとなります。

  SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合

`-N` *network_id*	`-b` *bb_id* の範囲
0	0 〜 3
1	0 〜 3
2	0 〜 1

  SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合

`-N` *network_id*	`-b` *bb_id* の範囲
0	0 〜 15, 80
1	0 〜 15, 81
2	80 〜 83
3	80 〜 83
4	80 〜 81

- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスなし）の場合、SSCP リンクのネットワークには以下の 3 つがあります。
  - BB#00 から各 SPARC M10-4S の筐体間のネットワーク（ネットワーク ID 0）
  - BB#01 から各 SPARC M10-4S の筐体間のネットワーク（ネットワーク ID 1）
  - BB#00 と BB#01 間のネットワーク（ネットワーク ID 2）
- SPARC M12-2S/M10-4S（クロスバーボックスあり）の場合、SSCP リンクのネットワークには以下の 5 つがあります。
  - XBBOX#80 から各 SPARC M10-4S の筐体間のネットワーク（ネットワーク ID 0）
  - XBBOX#81 から各 SPARC M10-4S の筐体間のネットワーク（ネットワーク ID 1）
  - XBBOX#80 から各クロスバーボックス間のネットワーク（ネットワーク ID 2）
  - XBBOX#81 から各クロスバーボックス間のネットワーク（ネットワーク ID 3）
  - XBBOX#80 と XBBOX#81 との間のネットワーク（ネットワーク ID 4）

使用例

注 – 以下の使用例に示す IP アドレスは、サンプルです。

使用例 1 SPARC M10-4S（クロスバーボックスなし）ですべての SSCP リンクの設定値を表示します。

```
XSCF> showsscp
SSCP network ID:0 address 169.254.1.0
SSCP network ID:0 netmask 255.255.255.248

Location        Address
-------------   ---------------
bb#00-if#0      169.254.1.1
bb#01-if#0      169.254.1.2
bb#02-if#0      169.254.1.3
bb#03-if#0      169.254.1.4

SSCP network ID:1 address 169.254.1.8
SSCP network ID:1 netmask 255.255.255.248

Location        Address
-------------   ---------------
bb#00-if#1      169.254.1.9
bb#01-if#1      169.254.1.10
bb#02-if#1      169.254.1.11
bb#03-if#1      169.254.1.12

SSCP network ID:2 address 169.254.1.16
SSCP network ID:2 netmask 255.255.255.252

Location        Address
-------------   ---------------
bb#00-if#2      169.254.1.17
bb#01-if#2      169.254.1.18
```

使用例 2 SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり）ですべての SSCP リンクの設定値を表示します。

```
XSCF> showsscp -a
SSCP network ID:0 address 169.254.1.0
SSCP network ID:0 netmask 255.255.255.224

Location        Address
-------------   ---------------
xbbox#80-if#0   169.254.1.1
bb#00-if#0      169.254.1.2
bb#01-if#0      169.254.1.3
bb#02-if#0      169.254.1.4
bb#03-if#0      169.254.1.5
bb#04-if#0      169.254.1.6
bb#05-if#0      169.254.1.7
bb#06-if#0      169.254.1.8
bb#07-if#0      169.254.1.9
bb#08-if#0      169.254.1.10
bb#09-if#0      169.254.1.11
bb#10-if#0      169.254.1.12
```

```
bb#11-if#0      169.254.1.13
bb#12-if#0      169.254.1.14
bb#13-if#0      169.254.1.15
bb#14-if#0      169.254.1.16
bb#15-if#0      169.254.1.17

SSCP network ID:1 address 169.254.1.32
SSCP network ID:1 netmask 255.255.255.224

Location        Address
-------------   ---------------
xbbox#81-if#1   169.254.1.33
bb#00-if#1      169.254.1.34
bb#01-if#1      169.254.1.35
bb#02-if#1      169.254.1.36
bb#03-if#1      169.254.1.37
bb#04-if#1      169.254.1.38
bb#05-if#1      169.254.1.39
bb#06-if#1      169.254.1.40
bb#07-if#1      169.254.1.41
bb#08-if#1      169.254.1.42
bb#09-if#1      169.254.1.43
bb#10-if#1      169.254.1.44
bb#11-if#1      169.254.1.45
bb#12-if#1      169.254.1.46
bb#13-if#1      169.254.1.47
bb#14-if#1      169.254.1.48
bb#15-if#1      169.254.1.49

SSCP network ID:2 address 169.254.1.64
SSCP network ID:2 netmask 255.255.255.248

Location        Address
-------------   ---------------
xbbox#80-if#2   169.254.1.65
xbbox#81-if#2   169.254.1.66
xbbox#82-if#2   169.254.1.67
xbbox#83-if#2   169.254.1.68

SSCP network ID:3 address 169.254.1.72
SSCP network ID:3 netmask 255.255.255.248

Location        Address
-------------   ---------------
xbbox#80-if#3   169.254.1.74
xbbox#81-if#3   169.254.1.73
xbbox#82-if#3   169.254.1.75
xbbox#83-if#3   169.254.1.76

SSCP network ID:4 address 169.254.1.80
SSCP network ID:4 netmask 255.255.255.252

Location        Address
```

```
-------------   ---------------
xbbox#80-if#4   169.254.1.81
xbbox#81-if#4   169.254.1.82
```

使用例 3 BB#14 のネットワーク ID 1 のネットワークでの現在の設定を表示します。

```
XSCF> showsscp -b 14 -N 1
SSCP network ID:1 address 192.168.1.0
SSCP network ID:1 netmask 255.255.255.224

Location        Address
-------------   ---------------
bb#14-if#1      192.168.1.48
```

使用例 4 SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり）でネットワーク ID 1 のネットワークのすべての IP を表示します。

```
XSCF> showsscp -a -N 1

SSCP network ID:1 address 169.254.1.32
SSCP network ID:1 netmask 255.255.255.224

Location        Address
-------------   ---------------
xbbox#81-if#1   169.254.1.33
bb#00-if#1      169.254.1.34
bb#01-if#1      169.254.1.35
bb#02-if#1      169.254.1.36
bb#03-if#1      169.254.1.37
bb#04-if#1      169.254.1.38
bb#05-if#1      169.254.1.39
bb#06-if#1      169.254.1.40
bb#07-if#1      169.254.1.41
bb#08-if#1      169.254.1.42
bb#09-if#1      169.254.1.43
bb#10-if#1      169.254.1.44
bb#11-if#1      169.254.1.45
bb#12-if#1      169.254.1.46
bb#13-if#1      169.254.1.47
bb#14-if#1      169.254.1.48
bb#15-if#1      169.254.1.49
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setsscp(8)

名前

showssh - XSCF ネットワークに設定されている Secure Shell（SSH）サービスの内容を表示します。

形式

showssh [-c hostkey] [-M]

showssh -c pubkey [-u *user_name*] [-M]

showssh -h

説明

showssh は、XSCF ネットワークに現在設定されている SSH サービスの内容を表示するコマンドです。

以下の情報が表示されます。

SSH status	SSH サービスが有効かどうか
RSA key	RSA 形式のホスト公開鍵
DSA key	DSA 形式のホスト公開鍵
Fingerprint	フィンガープリント形式のホスト公開鍵

ユーザー公開鍵の表示を指定した場合は、システムで自動的に付けられるユーザー公開鍵番号とユーザー公開鍵が表示されます。

XSCF では SSH2 だけサポートされます

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下の権限が必要です。

- ユーザー名の指定 :
  useradm
- 上記以外の場合 :
  必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c hostkey	ホスト公開鍵を表示します。-c が省略された場合は-c hostkey が指定されたとみなされます。
-c pubkey	ユーザー公開鍵を表示します。-c が省略された場合は-c hostkey が指定されたとみなされます。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-u *user_name*	ユーザー公開鍵を表示するユーザーアカウント名を指定します。-c pubkey と一緒に指定します。-u を省略した場合は、現在ログインしているユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵が表示されます。

詳細説明

- ユーザー公開鍵に対して自動的に付けられるユーザー公開鍵番号は、setssh(8) でユーザー公開鍵を削除するときに指定できます。
- setssh(8) を使用すると、XSCF ネットワークの SSH サービスが設定できます。

使用例

使用例 1 ホスト公開鍵の情報を表示します。

```
XSCF> showssh
SSH status: enabled
RSA key:
ssh-rsa AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAt0IG3wfpQnGr51znS9XtzwHcBBb/
UU0LN08SilUXE6j+
avlxdY7AFqBf1wGxLF+Tx5pTa6HuZ8o8yUBbDZVJAAAAFQCfKPxarV+/5qzK4A43Qaigkqu/
6QAAAIBM
LQl22G8pwibESrh5JmOhSxpLzl3P26ksI8qPr+7BxmjLR0k=
Fingerprint:
1024 e4:35:6a:45:b4:f7:e8:ce:b0:b9:82:80:2e:73:33:c4 /etc/ssh/
ssh_host_rsa_key.pub
DSA key:
ssh-dss
AAAAB3NzaC1kc3MAAACBAJSy4GxD7Tk4fxFvyW1D0NUDqZQPY3PuY2IG7QC4BQ1kewDnblB8
/
JEqI+8pnfbWzmOWU37KHL19OEYNAv6v+WZT6RElU5Pyb8F16uq96L8QDMswFlICMZgrn+ilJN
Str6r8
KDJfwOQMmK0eeDFj2mL40NOvaLQ83+rRwW6Ny/yF1Rgv6PUpUqRLw4VeRb+uOfmPRpe6/
kb4z++lOhtp
WI9bay6CK0nrFRok+z54ez7BrDFBQVuNZx9PyEFezJG9ziEYVUag/23LIAiLxxBmW9pqa/
WxC21Ja4RQ
VN3009kmVwAAAIAON1LR/
9Jdd7yyG18+Ue7eBBJHrCA0pkSzvfzzFFj5XUzQBdabh5p5Rwz+1vriawFI
ZI9j2uhM/3HQdrvYSVBEdMjaasF9hB6T/
uFwP8yqtJf6Y9GdjBAhWuH8F13pX4BtvK9IeldqCscnOuu0
e2rlUoI6GICMr64FL0YYBSwfbwLIz6PSA/yKQe23dwfkSfcwQZNq/
5pThGPi3tob5Qev2KCK2OyEDMCA
OvVlMhqHuPNpX+hE19nPdBFGzQ==
Fingerprint:
1024 9e:39:8e:cb:8a:99:ff:b4:45:12:04:2d:39:d3:28:15 /etc/ssh/
ssh_host_dsa_key.pub
```

使用例 2 現在ログインしているユーザーアカウントの、ユーザー公開鍵を表示しま

す。

```
XSCF> showssh -c pubkey
Public key:
 1  ssh-rsa
AAAAB3NzaC1yc2EAAAABIwAAAIEAzFh95SohrDgpnN7zFCJCVNy+jaZPTjNDxcid
QGbihYDCBttI4151Y0Sv85FJwDpSNHNKoVLMYLjtBmUMPbGgGVB61qskSv/
FeV44hefNCZMiXGItIIpK
P0nBK4XJpCFoFbPXNUHDw1rTD9icD5U/wRFGSRRxFI+Ub5oLRxN8+A8=abcd@example.com
 2  ssh-rsa
CSqGSIb3DQEJARYHZWUubWFpbDCBnzANBgkqhkiG9w0BAQEFAAOBjQAwgYkCgYEA
nkPntf+TjYtyKlNYFbO/YavFpUzkYTLHdt0Fbz/
tZmGd3e6Jn34A2W9EC7D9hjLsj+kAP41Al6wFwGO7
KP3H4iImX0Uysjl9Hyk4jLBU51sw8JqvT2utTjltV5mFPKL6bDcAgY9=efgh@example.com
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setssh(8)

名前

showstatus - 縮退された Field Replaceable Unit（FRU）を表示します。

形式

showstatus [-M]

showstatus -h

説明

showstatus は、システムを構成する FRU の中で、縮退されたユニットの情報を表示するためのコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, pparadm, pparmgr, pparop, fieldeng

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。

詳細説明

- システムを構成する FRU の中で、故障または縮退が発生したユニットとその 1 階層上のユニットの情報が表示されます。表示されたユニットには、"Status:" 以降に以下のいずれかの状態が表示されます。また、故障または縮退が発生したユニットには、異常箇所であることを表す "*" が表示されます。

状態	内容
Faulted	故障していて動作していない状態
Degraded	ユニット内の一部が、故障または縮退しているが、ユニットは動作を継続している状態
Deconfigured	他のユニットの故障または縮退による影響で、そのユニット自体は、下位層のコンポーネントを含めて、正常でありながら縮退している状態
Maintenance	保守作業中。addfru(8)、replacefru(8)、または initbb(8) 操作中

- XSCF が複数で構成されているシステムで、マスタ XSCF とスタンバイ状態の XSCF の、オペレーションパネルのスイッチに不一致がある場合、マスタ XSCF とスタンバイ状態の XSCF の OPNL ユニットに「*」が表示されます。

使用例

使用例 1 縮退されたユニットを表示します。ここでは BB#00 の CMUL 上の CPU とメモリー、XBBOX#80 の PSU が、故障のため縮退されている場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
    BB#00;
```

```
        CMUL Status:Normal;
*           CPU#0 Status:Faulted;
*           MEM#00A Status:Faulted;
    XBBOX#80;
*       PSU#0 Status:Faulted;
```

使用例 2 縮退された部品を表示します。ここでは MBU 上のメモリが故障のため縮退している場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
    MBU Status:Normal;
*       MEM#0A Status:Faulted;
```

使用例 3 縮退された部品を表示します。ここでは MBU 上のメモリが故障のため縮退している場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
    MBU Status:Normal;
*       MEM#1B Status:Deconfigured;
```

使用例 4 縮退された部品を表示します。ここではクロスバーユニットが縮退しているため、CPU メモリーユニットが縮退されている場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
    BB#00
        CMUU Status:Normal;
*           CPU#1 Status:Deconfigured;
*       XBU#0 Status:Degraded;
```

使用例 5 縮退された部品を表示します。ここでは、XB ケーブルが故障のため縮退されている場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
    BB#00 Status:Normal;
        XBU#1 Status:Normal;
*           CBL#2L Status:Degraded;
```

使用例 6 縮退された部品を表示します。ここでは、クロスバーボックス配下の XB ケーブルが故障のため縮退されている場合を例に挙げます。

```
XSCF> showstatus
    XBBOX#80 Status:Normal;
        XBU#0 Status:Normal;
*           CBL#L1 Status:Faulted;
        XBU#1 Status:Normal;
*           CBL#L2 Status:Degraded;
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

showtelnet - XSCF ネットワークに設定されている Telnet サービスの状態を表示します。

形式

showtelnet

showtelnet -h

説明

showtelnet は、XSCF ネットワークに現在設定されている Telnet サービスの状態を表示するコマンドです。

以下のどちらかの状態が表示されます。

enable	Telnet サービスが稼働していること表します。
disable	Telnet サービスが停止していることを表します。

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

詳細説明

settelnet(8) を使用すると、XSCF ネットワークの Telnet サービスが設定できます。

使用例

使用例 1 XSCF ネットワークに現在設定されている Telnet サービスの状態を表示します。

```
XSCF> showtelnet
Telnet status:enabled
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

settelnet(8)

名前

showtimezone - 現在設定されている XSCF のタイムゾーンとサマータイム情報を表示します。

形式

showtimezone -c tz

showtimezone -c dst [-m {standard | custom}]

showtimezone -h

説明

showtimezone は、現在設定されている XSCF のタイムゾーンとサマータイム情報を表示するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

useradm, platadm, platop, auditadm, auditop, fieldeng, pparadm, pparmgr, pparop

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-c tz	タイムゾーンを表示します。
-c dst	サマータイムの情報を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-m {standard | custom}	表示するサマータイムの情報を指定します。以下のどちらかを指定できます。-m を省略した場合は、-m custom が指定されたとみなされます。 standard 現在のタイムゾーンに標準で設定されている、サマータイムの情報を表示します。 custom settimezone(8) で設定したサマータイムの情報を表示します。サマータイムを設定していない場合は、何も表示されません。

詳細説明

- サマータイムの情報は、以下の形式で表示されます。
  - custom を指定した場合

    std offset dst[*offset2*] [*from-date*[/*time*] *to-date*[/*time*]]

std	タイムゾーンの略称

offset タイムゾーンとグリニッジ標準時（GMT）とのオフセット時間

オフセットがプラスの場合はマイナス（-）、マイナスの場合はプラス（+）で表示されます。

dst サマータイム名

offset2 サマータイムと GMT とのオフセット時間

オフセットがプラスの場合はマイナス（-）、マイナスの場合はプラス（+）で表示されます。

from-date[/*time*] サマータイム開始情報

from-date は以下のいずれかの形式で表示されます。

`M`*m.w.d*

`M`*m*: サマータイムが開始される月。*m* は 1 から 12 までの数値で表示されます。
w: サマータイムが開始される週。第 1 週の場合は 1、最終週の場合は 5 として、1 から 5 までの数値で表示されます。
d: サマータイムが開始される曜日。日曜日の場合は 0、土曜日の場合は 6 として、0 から 6 までの数値で表示されます。

`J`*n*

`J`*n*: サマータイムが開始される日にち。1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で表示されます。うるう年の場合は 2 月 29 日はカウントされません。

n

n: サマータイムが開始される日にち。1 月 2 日を 1 として、1 から 365 までの数値で表示されます。うるう年の場合は 2 月 29 日もカウントされます。

time にはサマータイムに切り替える時刻が、切り替える前の時刻で表示されます。

hh:mm:ss 「時間 : 分 : 秒の形式」で表示されます。デフォルトは、02:00:00 です。

to-date[/*time*] サマータイム終了情報

to-date は以下のいずれかの形式で表示されます。

M*m*.*w*.*d*

M*m*: サマータイムが終了する月。*m* は 1 から 12 までの数値で表示されます。
w: サマータイムが終了する週。第 1 週の場合は 1、最終週の場合は 5 として、1 から 5 までの数値で表示されます。
d: サマータイムが終了する曜日。日曜日の場合は 0、土曜日の場合は 6 として、0 から 6 までの数値で表示されます。

J*n*

J*n*: サマータイムが終了する日にち。1 月 1 日を 1 として、1 から 365 までの数値で表示されます。うるう年の場合は 2 月 29 日はカウントされません。

n

n: サマータイムが終了する日にち。1 月 2 日を 1 として、1 から 365 までの数値で表示されます。うるう年の場合は 2 月 29 日もカウントされます。

time にはサマータイムから切り替える時刻が、切り替える前の時刻で表示されます。

hh:*mm*:*ss* 「時間 : 分 : 秒の形式」で表示されます。デフォルトは、02:00:00 です。

- standard を指定した場合

  From: *ddd MM dd hh*:*mm*:*ss yyyy dst*

  To: *ddd MM dd hh*:*mm*:*ss yyyy dst*

ddd	曜日
MM	月
dd	日
hh	時
mm	分
ss	秒
yyyy	年
dst	サマータイムゾーン名

- settimezone(8) を使用すると、XSCF のタイムゾーンが設定できます。

使用例

使用例 1 タイムゾーンを 表示します。

```
XSCF> showtimezone -c tz
Asia/Tokyo
```

使用例 2 タイムゾーン略称を JST、GMT からのオフセットを +9、サマータイムゾーン名を JDT、サマータイムを 1 時間前、期間を 3 月最終日曜日 2:00 から 10 月最終日曜日 2:00 までと設定されている場合に、サマータイム情報を 表示します。

```
XSCF> showtimezone -c dst -m custom
JST-9JDT,M3.5.0,M10.5.0
```

使用例 3 タイムゾーン略称を JST、GMT からのオフセットを +9、サマータイムゾーン名を JDT、サマータイムを 1 時間前、期間を 4 月第 1 日曜日 0:00 から 9 月第 1 日曜日 0:00 までと設定されている場合に、サマータイム情報を 表示します。

```
XSCF> showtimezone -c dst
JST-9JDT-10,M4.1.0/00:00:00,M9.1.0/00:00:00
```

使用例 4 settimezone でサマータイムが設定されていない場合。

```
XSCF> showtimezone -c dst
```

使用例 5 現在のタイムゾーンに標準で設定されているサマータイムの情報を表示します。

```
XSCF> showtimezone -c dst -m standard
From: Sun Mar 25 03:00:00 2012 CEST
To:   Sun Oct 28 02:59:59 2012 CEST
```

使用例 6 システム標準のサマータイムが設定されていない場合。

```
XSCF> showtimezone -c dst -m standard
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setdate(8), **settimezone**(8), **showdate**(8)

名前

showuser - XSCF ユーザーアカウント情報を表示します。

形式

showuser [-a] [-p] [-u] [-M]

showuser [-a] [-p] [-u] [-M] *user*

showuser [-a] [-p] [-u] [-M] -l

showuser -h

説明

showuser は、XSCF ユーザーアカウント情報を表示するコマンドです。

ユーザーアカウント名を指定して showuser を実行すると、指定したユーザーのアカウント情報が表示されます。ユーザーアカウント名を指定しないで showuser を実行すると、現在のユーザーのアカウント情報が表示されます。-l を指定して showuser を実行すると、すべてのユーザーのアカウント情報が表示されます。

-a、-p、-u のうち 1 つまたは複数のオプションを指定して showuser を実行すると、以降のオプションの項で説明する情報が表示されます。これらのオプションを何も指定せずに showuser を実行すると、すべてのアカウント情報が表示されます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下の権限が必要です。

- 自分のアカウント情報の表示 :
  必要な権限はありません。
- 他のユーザーアカウント情報の表示 :
  useradm

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	パスワードの有効性およびアカウントの状態に関する情報を表示します。XSCF ユーザーアカウントに対してのみ有効です。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-l	ユーザーのログイン名でソートされたすべての XSCF ユーザーアカウント情報を表示します。*user* とは一緒に使用できません。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-p	ユーザーに割り当てられているすべての権限を表示します。これは、ローカルユーザーとリモートユーザーに対して有効です。
-u	ユーザー ID（UID）を表示します。これは、ローカルユーザーとリモートユーザーに対して有効です。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

user 既存のユーザーアカウントの名前。-l とは一緒に使用できません。

使用例

使用例 1 パスワードおよびアカウントの有効性に関する情報を表示します。

```
XSCF> showuser -a
User Name:          jsmith
Status:             Enabled
Minimum:            0
Maximum:            99999
Warning:            7
Inactive:           -1
Last Change:        Aug 22, 2005
Password Expires:   Never
Password Inactive: Never
Account Expires:    Never
```

使用例 2 ユーザー権限の情報を表示します。

```
XSCF> showuser -p
User Name:          jsmith
Privileges:         pparadm@1,3-6,8,9
                    platadm
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0 正常に終了したことを表します。

>0 エラーが発生したことを表します。

関連項目

adduser(8), **deleteuser**(8), **disableuser**(8), **enableuser**(8), **password**(8), **setprivileges**(8)

名前

showvbootcerts - 各物理パーティション（PPAR）に設定されている、Oracle Solaris をブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書の情報を表示します。

形式

showvbootcerts -p *ppar_id* -a [-M]

showvbootcerts [-v] -p *ppar_id* -{s|u} -i *index* [-M]

showvbootcerts -h

説明

showvbootcerts は、PPAR に設定された、Oracle Solaris をブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書の情報を表示するコマンドです。

ベリファイドブートで使用する X.509 公開鍵証明書には、システムにプレインストールされている証明書と、addvbootcert(8) で追加したユーザー証明書の 2 種類が存在します。showvbootcerts はその両方の証明書の情報を表示することができます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

platadm, platop, fieldeng	すべての物理パーティション（PPAR）に対して実行できます。
pparadm, pparmgr, pparop	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a	PPAR に登録されているすべての X.509 公開鍵証明書の情報を表示します。
-i *index*	index に指定した管理番号の X.509 公開鍵証明書の情報を表示します。指定可能な管理番号は、-s を指定した場合は 1 または 2、-u を指定した場合は 1 ～ 5 です。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-p *ppar_id*	X.509 公開鍵証明書の情報を表示する PPAR の PPAR-ID を指定します。
-s	システムにプレインストールされている X.509 公開鍵証明書の情報を表示します。
-u	addvbootcert(8) コマンドで追加した X.509 公開鍵証明書の情報を表示します。
-v	X.509 公開鍵証明書の全文を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 にプレインストールされている管理番号 1 番の X.509 公開鍵証明書の情報を表示します。

```
XSCF> showvbootcerts -p 0 -s -i 1
--------------------------------------------------------------------------------
PPAR-ID 0 System Index : 1  name : SYSTEM_CERT_1 [Enable(Unchangeable)]
--------------------------------------------------------------------------------
Data:
    Version: 3 (0x2)
    Serial Number:
        0d:fb:b1:5a:2d:2a:e5:81:80:86:eb:34:5e:a4:7e:ed
    Signature Algorithm: sha1WithRSAEncryption
    Issuer: C=US, O=Oracle Corporation, OU=VeriSign Trust Network, OU=Class 2
Managed PKI Individual Subscriber CA, CN=Object Signing CA
    Subject: O=Oracle Corporation, OU=Corporate Object Signing, OU=Solaris
Signed Execution, CN=Solaris 11
--------------------------------------------------------------------------------
```

使用例 2 PPAR-ID 2 に登録されているすべての X.509 公開鍵証明書の情報を表示します。

```
XSCF> showvbootcerts -p 2 -a
--------------------------------------------------------------------------------
PPAR-ID 2 System Index : 1  name : SYSTEM_CERT_1 [Enable(Unchangeable)]
--------------------------------------------------------------------------------
Data:
    Version: 3 (0x2)
    Serial Number:
        0d:fb:b1:5a:2d:2a:e5:81:80:86:eb:34:5e:a4:7e:ed
    Signature Algorithm: sha1WithRSAEncryption
    Issuer: C=US, O=Oracle Corporation, OU=VeriSign Trust Network, OU=Class 2
Managed PKI Individual Subscriber CA, CN=Object Signing CA
    Subject: O=Oracle Corporation, OU=Corporate Object Signing, OU=Solaris
Signed Execution, CN=Solaris 11
--------------------------------------------------------------------------------
PPAR-ID 2 User Index : 2    name : CUSTOM_CERT_2 [Enable]
--------------------------------------------------------------------------------
Data:
    Version: 3 (0x2)
    Serial Number:
        07:ad:b3:06:99:82:39:db:dd:60:41:44:71:be:aa:70
    Signature Algorithm: sha1WithRSAEncryption
    Issuer: C=US, O=Thirdparty Corporation, OU=Thirdparty CA, CN=www.example.com
    Subject: O=Thirdparty Corporation, OU=Thirdparty Signed Execution,
CN=www.example.com
--------------------------------------------------------------------------------
PPAR-ID 2 User Index : 5    name : CUSTOM_CERT_5 [Disable]
--------------------------------------------------------------------------------
Data:
    Version: 3 (0x2)
    Serial Number:
        07:ad:b3:06:99:82:39:db:dd:60:41:44:71:be:bb:71
    Signature Algorithm: sha1WithRSAEncryption
    Issuer: C=US, O=Thirdparty Corporation, OU=Thirdparty CA, CN=www.example.com
    Subject: O=Thirdparty Corporation, OU=Thirdparty Signed Execution,
CN=www.example.com
--------------------------------------------------------------------------------
```

使用例 3 PPAR-ID 4 の管理番号 2 番に登録されている X.509 公開鍵証明書の詳細情報を表示します。

```
XSCF> showvbootcerts -v -p 4 -u -i 2
--------------------------------------------------------------------------------
PPAR-ID 4 User Index : 2    name : CUSTOM_CERT_2 [Enable]
--------------------------------------------------------------------------------
Data:
    Version: 3 (0x2)
    Serial Number:
        07:ad:b3:06:99:82:39:db:dd:60:41:44:71:be:aa:70
    Signature Algorithm: sha1WithRSAEncryption
    Issuer: C=US, O=Thirdparty Corporation, OU=Thirdparty CA, CN=www.example.com
    Subject: O=Thirdparty Corporation, OU=Thirdparty Signed Execution,
CN=www.example.com
    Subject Public Key Info:
        Public Key Algorithm: rsaEncryption
            Public-Key: (2048 bit)
            Modulus:
                00:de:f0:2c:45:61:7f:10:c7:16:56:a9:14:b4:a4:
                39:44:b9:2f:65:4f:7e:a7:c0:15:89:b0:e2:1d:c0:
                25:4c:a6:31:75:14:a3:c4:cd:11:d2:87:b7:1a:7c:
                b2:0d:41:99:4f:a6:e9:d4:8e:77:55:19:ce:f1:a4:
                3c:cf:00:8d:e6:d1:c6:bc:06:f7:71:85:28:a4:c5:
                e0:8d:b3:e1:62:25:d5:df:93:d2:d9:1c:5b:48:35:
                70:e1:8a:9b:bf:9d:8b:41:b3:be:b6:c0:50:66:3b:
                d8:9d:2f:82:49:11:f7:6d:43:95:6e:ea:bc:57:dc:
                1c:90:6b:7e:8b:e3:0f:89:bd:32:3a:88:50:f0:48:
                d3:98:8c:bc:eb:7f:44:31:2b:86:01:d0:80:4c:a2:
                36:6e:24:47:48:d5:86:8e:86:06:c3:8e:df:5f:fb:
                6b:fe:6a:aa:0c:a8:ca:b6:ed:60:47:ea:8e:5d:63:
                b1:4f:ff:94:00:34:52:82:cf:a6:6a:84:69:4c:26:
                ac:a3:dc:d7:45:eb:7c:4e:fc:fc:92:4a:73:12:9f:
                31:7a:75:b9:de:33:54:34:af:0b:cf:46:c0:ac:2f:
                ec:28:af:0d:f7:c6:50:c0:e7:4c:88:16:13:95:54:
                0e:01:6e:1a:b6:33:bf:20:52:34:f4:69:a6:9e:bf:
                02:95
            Exponent: 65537 (0x10001)
Signature Algorithm: sha256WithRSAEncryption
     44:65:95:e1:33:a4:ce:d1:c1:02:1a:ce:b3:2c:fa:c0:b2:34:
     4e:12:d0:86:c7:09:23:9d:5b:46:f4:b2:bf:88:8b:5b:5d:d7:
     57:c3:f9:9a:ba:95:bc:ed:4b:29:4b:19:97:ca:6c:bc:e1:44:
     e0:e1:89:a3:ed:bd:29:ad:a7:91:c8:76:ea:62:d2:2c:e3:ff:
     50:01:0a:3b:5a:28:53:38:53:82:ea:de:bc:24:84:bc:31:63:
     ab:b2:10:81:81:73:f4:02:46:5f:2d:6d:22:b0:af:d7:70:c0:
     db:de:ea:b9:23:87:3c:19:ef:c0:24:de:05:77:eb:89:d2:36:
     d0:85:8a:ed:d1:7f:12:b0:58:5f:f5:53:f1:db:0b:44:53:a0:
     72:8c:1a:e6:4a:fd:e8:8e:f8:ee:9e:7e:4e:85:59:42:44:fa:
     1f:d3:70:4f:81:95:8e:a9:0f:83:49:a2:b0:fd:5b:f4:2d:5e:
     86:ef:f3:56:b3:31:f3:58:3a:37:42:bb:39:c4:c1:b5:8c:e9:
     b4:01:d2:2e:e8:7d:86:1a:66:88:34:1e:e5:36:ee:6d:6c:90:
     78:45:a0:5b:a9:50:84:62:a8:88:ee:a6:70:fa:7c:ad:81:b7:
     89:f1:d6:64:94:c4:17:69:c8:35:81:b2:f3:79:ad:a2:5a:a0:
     02:28:a9:7f
--------------------------------------------------------------------------------
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addvbootcerts(8), **deletevbootcerts**(8), **setvbootconfig**(8), **showvbootconfig**(8)

名前

showvbootconfig - Oracle Solaris のベリファイドブートのポリシーと、ブート検証する際に使用される X.509 公開鍵証明書の有効／無効の設定を表示します。

形式

showvbootconfig `-p` *ppar_id*

showvbootconfig `-h`

説明

`showvbootconfig` は、物理パーティション（PPAR）に設定されたベリファイドブートの設定に関する情報を表示するコマンドです。

表示される情報は以下のとおりです。

Policies setting:

ブート検証のポリシーの設定が表示されます。

Policy: ブート検証のポリシーです。

`boot_policy`
: unix および genunix モジュールのブート検証のポリシー

`module_policy`
: genunix のあとにロードする必要がある、その他のカーネルモジュールのブート検証のポリシー

Setting: ポリシーの設定内容です。

`none`
: ブート検証を実施しません（デフォルト）。

`warning`
: ブート検証を実施します。
検証対象をロードする前に検証を行います。
検証に失敗しても、検証対象をロードし、ブート処理を継続します。
ブートブロックおよび unix の検証に失敗すると、検証に失敗した旨をシステムコンソールに記録します。システムログと XSCF のエラーログには記録しません。
genunix およびその他のカーネルモジュールの検証に失敗すると、検証に失敗した旨をシステムコンソールとシステムログに記録します。XSCF のエラーログには記録しません。

`enforce`	ブート検証を実施します。 検証対象をロードする前に検証を行います。 ブートブロックおよび unix の検証に失敗すると、ブート処理を停止します。その際、検証に失敗した旨をシステムコンソールと XSCF エラーログに記録します。システムログには記録しません。 genunix の検証に失敗すると、ブート処理を停止します。その際、検証に失敗した旨を システムコンソールに記録します。XSCF のエラーログとシステムログには記録しません。 その他のカーネルモジュールの検証に失敗すると、モジュールをロードせずにブートを継続します。その際、検証に失敗した旨をシステムコンソールとシステムログに記録します。XSCF のエラーログには記録しません。

Certificates setting: 各管理番号の X.509 公開鍵証明書の有効／無効の設定が表示されます。

Index: 証明書の管理番号です。

Setting: 証明書の登録状態と有効／無効の設定です。証明書が登録されていない管理番号ではハイフン "-" が表示されます。

`Enabled`	有効になっています。ブート検証に使用されます。
`Disabled`	無効になっています。ブート検証では使用されません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、以下のいずれかの権限が必要です。

`platadm`, `platop`, `fieldeng`	すべての物理パーティション（PPAR）に対して実行できます。
`pparadm`, `pparmgr`, `pparop`	アクセス権限を持つ PPAR に対して実行できます。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-p` *ppar_id*	設定を表示する PPAR の PPAR-ID を指定します。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

使用例

使用例 1 PPAR-ID 0 に設定されているベリファイドブート設定の情報を表示します。

```
XSCF> showvbootconfig -p 0
PPAR#00 Verified Boot Information:
----------------------------------
Policies setting:
-----------------
Policy        Setting
boot_policy   warning
module_policy none

System Certificates setting:
----------------------------
Index Certificate Name                 Setting
    1 SYSTEM_CERT_1                    Enable(Unchangeable)
    2 SYSTEM_CERT_2                    Enable(Unchangeable)

User Certificates setting:
----------------------------
Index Certificate Name                 Setting
    1 CUSTOM_CERT_1                    Enable
    2 -                                -
    3 CUSTOM_CERT_3                    Disable
    4 -                                -
    5 -                                -
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addvbootcerts(8), **deletevbootcerts**(8), **setvbootconfig**(8), **showvbootcerts**(8)

名前

snapshot - 環境、ログ、エラー、および Field Replaceable Unit Identifier（FRUID）に関するデータを収集し、転送します。

形式

snapshot -d *device* [-r] {-a|-b *bb_id*} [-e [-P *password*]] [-L{F|I|R}] [-l] [-v] [[-q] -{y|n}] [-S *time* [-E *time*]]

snapshot -t *user@host:directory* {-a|-b *bb_id*} [-e [-P *password*]] [-k *host-key*] [-l] [-L{F|I|R}] [-p *password*] [-v] [[-q] -{y|n}] [-S *time* [-E *time*]]

snapshot -h

説明

snapshot はデータ収集メカニズムを提供し、サービスプロセッサ上の診断情報を迅速、確実、柔軟に取得するコマンドです。

snapshot は、構成、環境、ログ、エラー、および FRUID 情報のデータを収集し、指定された宛先にデータを転送します。

snapshot は、収集したデータをファイルへ出力します。ファイル名は、サービスプロセッサに割り当てられているホスト名と IP アドレス、および snapshot 実行時のサービスプロセッサ上の日付と UTC 時間（時、分、秒形式）に基づいて自動生成されます。たとえば jupiter:10.1.1.1_2012-10-20T22-33-44 のようになります。

snapshot は、出力ファイル名は指定できません。ファイルとコマンド出力がサービスプロセッサから収集されると、snapshot は出力データを圧縮して、.zip 形式のアーカイブに書き込みます。

出力ファイルは、各 SPARC M12/M10 システムの筐体で採取した情報を .zip 形式アーカイブにしたものをさらに 1 つの .zip 形式アーカイブにしたものです。

SPARC M12/M10 システムの各筐体の .zip アーカイブの名称は、SPARC M12/M10 システム名とサービスプロセッサに割り当てられているホスト名、IP アドレス、snapshot 実行時のサービスプロセッサ上の日付と UTC 時間（時、分、秒形式）に基づいて自動生成されます。たとえば BB#01_jupiter_10.1.1.1_2012-10-20T22-33-44 のようになります。

また、サービスプロセッサに割り当てられているホスト名や IP アドレスがない SPARC M12/M10 システムの筐体の .zip アーカイブの名称は、SPARC M12/M10 システム名と snapshot 実行時のサービスプロセッサ上の日付と UTC 時間（時、分、秒形式）に基づいて自動生成されます。たとえば BB#03_2012-10-20T22-33-44 のようになります。

snapshot は、-t、-d のどちらが使用されているかによって、収集したデータをリモートネットワークホストまたは外部メディア装置に保存します。収集したデータを -t を使ってリモートネットワークホストに保存するには、ホスト名（ または IP アドレス）、リモートネットワークホスト上の宛先ディレクトリ、およびリモートホスト上のユーザー名 を指定する必要があります。リモートネットワークホスト上にデータを保存するとき、snapshot はリモートファイルへのデータのパイプ役としての機能を果たすために SSH ネットワーク接続を開きます。

-S、および必要に応じて-E を使用して、日付範囲を指定することでいくつかのより大きいログファイルのデータ収集を制限できます。

暗号化ネットワークプロトコルである SSH が、ネットワーク接続を介したデータ転送に使用されます。さらに、SSL を用いて .zip アーカイブそのものを暗号化できます。.zip アーカイブ自体を暗号化するには、-e を使用します。このプロセスで暗号化した .zip アーカイブを復号化するには、以下の openssl で、snapshot に指定した暗号化パスワードを使用します。以下は、ファイル jupiter_10.1.1.1_2012-10-20T22-33-44.zip.e を復号化する例です。

```
% openssl aes-128-cbc -d -in jupiter_10.1.1.1_2012-10-20T22-33-
44.zip.e -out jupiter_10.1.1.1_2012-10-20T22-33-44.zip
```

snapshot によって生成されるすべての .zip アーカイブに、snapshot 自体が生成する 2 つのファイルが入っています。README という名前の最初のファイルには、.zip アーカイブのもとの名前、.zip アーカイブの作成に使用したサービスプロセッサ上の設定ファイルの名前、snapshot のバージョン、およびアーカイブの生成にログ専用モード（-l）が使用されたかどうかが記述されます。CONFIG という名前の 2 番目のファイルは、snapshot がアーカイブの生成に使用した、実際の設定ファイルのコピーです。

snapshot によって SPARC M12/M10 システムの各筐体に生成された .zip 形式アーカイブをさらに 1 つの .zip 形式アーカイブにまとめたファイルは snapshot が生成する 2 種類のファイルが入っています。README という名前の最初のファイルには、SPARC M12/M10 システムの各筐体に .zip アーカイブ生成結果が記述されます。もう 1 種類は、SPARC M12/M10 システムの各筐体に .zip アーカイブ生成時のログが、筐体ごとのファイルとして記述されます。

snapshot で SPARC M12/M10 システムの各筐体に作成されるデータは、システム上の問題を診断するために保守作業員に使用される場合があります。snapshot では、診断の目的によって異なるデータのセットを収集できます。これらのデータセットはそれぞれ Initial、Root Cause、Full と呼ばれ、-L を使用して設定されます。

収集したデータを使用して問題を診断する場合、問題の発生後できるだけ速やかに、PPAR の電源 On/Off や設定変更などは行なわずに snapshot を実行してください。時間が経過したり、他のコマンドを実行したり、システムの状態が変化したりすると、有用なデータが失われる恐れがあります。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-a`	システムで共通のログに加えて、すべての SPARC M12/M10 システムの筐体に格納されるログが採取され、1 つのファイルが出力されます。 システムに異常がある場合は、採取できないログもあります。
`-b` *bb_id*	データを採取する BB-ID を選択します。複数指定はできません。 システムで共通のログに加えて、指定された SPARC M12/M10 システムの筐体に格納されるログが採取されます。 *bb_id* には、SPARC M12/M10 システムの筐体は 0 から 15 まで、クロスバーボックスは 80 から 83 までの整数で指定できます。
`-d` *device*	使用する外部メディア装置を指定します。`-d` には、以下のオプションが使用可能です。 `-r`　データ収集の前に、外部メディア装置にあるすべてのファイルを削除します。このオプションは、`-t` と一緒に使用すると、無効になります。

`-E` *time*	データが収集される終了時間を指定します。開始時間の `-S` *time* と一緒に使用して、`snapshot` で収集されるログメッセージの時間枠を定義します。`-E` *time* によって指定した時間より前に作成されたログエントリーだけが、`snapshot` によって収集されます。`-S` も参照してください。
	
	time　`strptime`(3) で記述される、以下の 2 つのフォーマットのどちらか 1 つの形式を使用します。
	
	`%Y-%m-%d,%H:%M:%S`
	`%Y-%m-%d_%H-%M-%S`

`-e`	zip 形式のアーカイブを暗号化します。`-P` と *password* を使用する場合に必要です。
`-h`	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

`-k` *host-key*	`-t` を指定します。サービスプロセッサがネットワークホストにログインするために使用する公開鍵を設定します。このオプションは、`-d` と一緒に使用すると、無効になります。 895 文字以内で指定できます。 *host-key* に指定できる値は、以下のとおりです。		
	`none`	ネットワークホストの認証に公開鍵を使用しない場合に、このリテラル値を指定します。	
	`download`	`snapshot` が SSH を使用してネットワークホストの公開鍵のダウンロードと、`-t` で指定されたホストからの公開鍵のダウンロードを行う場合に、このリテラル値を指定します。`snapshot` は公開鍵の SHA-256 フィンガープリントを表示し、確認を求めます。公開鍵を受け入れると、その公開鍵はサーバ認証に使用されます。公開鍵を拒否すると、`snapshot` は何もせずに終了します。`-k` が指定されていない場合、これが SSH ターゲットモードでのデフォルトの動作になります。	
	`public`	指定した公開鍵は、サーバ認証に使用されます。*host-key* は、ネットワークホストの完全な公開鍵（キータイプで始まる）でなければなりません（つまり、ネットワークホスト上の `/etc/ssh/ssh_host_rsa_key.pub` の完全な内容でなければなりません）。	
	注 – 公開鍵は、シェルが単一の語として処理できるように引用符で囲む必要があります。		
`-L{F|I|R}`	収集するログセットを指定します。		
	`F`	Full ログセット	
	`I`	Initial ログセット	
	`R`	Root Cause ログセット	
	ログセットが指定されない場合、Full ログセットがデフォルトで収集されます。		
`-l`	ログファイルのみを収集するように指定します。コマンド出力は収集しません。		
`-n`	プロンプトに対して自動的に「n」(no) と応答します。		

`-P` *password*	`-e` と一緒に指定します。出力ファイルの暗号化に使用する暗号化パスワードを設定します。 63 文字以内で指定できます。
`-p` *password*	SSH ログインに使用されるユーザーパスワードを設定します。このオプションは、`-t` と一緒に指定します。`-d` と一緒に使用すると、無効になります。 63 文字以内で指定できます。
`-q`	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

`-S` *time*	データが収集される開始時間を指定します。終了時間の `-E` *time* と一緒に使用して、`snapshot` で収集されるログメッセージの時間枠を定義します。終了時間の指定がないと、ターゲット期間は、`snapshot` が実行された時点で終わります。`-E` も参照してください。
	
	time　`strptime`(3) で記述される、以下の 2 つのフォーマットのどちらか 1 つの形式を使用します。
	
	`%Y-%m-%d,%H:%M:%S`
	`%Y-%m-%d_%H-%M-%S`

`-t` *user@host:directory*	データ転送先のネットワークホストとリモートディレクトリを設定します。*host* には、ネットワークホストのホスト名または IP アドレスを指定します。*user* には、アーカイブホストへの SSH ログイン用のユーザー名を指定します。*directory* には、出力ファイルの保存先となるアーカイブホスト上のアーカイブディレクトリを指定します。*directory* は、"-" や "~" で始めてはいけません。 **注 –** `snapshot` ではターゲットディレクトリは作成されません。あらかじめリモートホストにターゲットディレクトリを作成しておいてください。
`-v`	詳細な情報を表示します。SPARC M12/M10 システムの筐体ごとの snapshot ファイル収集状況を表示します。`-q` と一緒に指定すると、`-v` は無効になります。 **注 –** `snapshot` 設定ファイルで実行されるすべてのコマンドを動作させるためのユーザー権限は与えられていないかもしれません。この場合、これらのコマンド操作が許可されていないことを示すエラーメッセージが表示されます。
`-y`	プロンプトに対して自動的に「y」（yes）と応答します。

詳細説明

動作モード

以下に、snapshot の動作モードの概要について説明します。

最初のモードは「SSH ターゲットモード」です。-t を指定してデータコレクタを起動すると、このモードで実行されます。このモードでは、データコレクタはサービスプロセッサから指定された宛先の SSH 接続を（適切な認証後に）開き、zip 形式のデータアーカイブを SSH 接続を介して宛先ホストに送信します。snapshot ではターゲットディレクトリは作成されません。あらかじめリモートホストにターゲットディレクトリを作成しておいてください。このモードでの転送暗号化は、SSH によって行われます。

2 番目のモードは、「USB デバイスモード」です。-d を指定してデータコレクタを起動すると、このモードで実行されます。このモードでは、データコレクタの出力（zip 形式のアーカイブ）は、USB 装置上のファイルに保存されます。USB 装置は FAT32 ファイルシステムでフォーマットされている必要があります。このモードでは、SSH ターゲットモードの場合のように zip ファイルを暗号化するための -e が使用できます。しかしながら、このモードではデータがサービスプロセッサに対してローカルなままであるため、転送暗号化（SSH のような）は行われません。

マスタ筐体で snapshot を実行する場合は、USB 装置をマスタ筐体の USB ポートに接続してください。スタンバイ状態となっている筐体で snapshot を実行する場合は、USB 装置をスタンバイ状態となっている筐体の USB ポートに接続してください。

使用例

使用例 1 外部メディア装置へダウンロードします。

```
XSCF> snapshot -d usb0 -r -b 3
Testing writability of USB device....SUCCESS
About to remove all files from device ‘usb0’. Continue? [y|n] : y
Collecting data into /media/usb_msd/jupiter_10.1.1.1_2012-10-20T22-41-
51.zip
Data collection complete.
```

使用例 2 データ範囲に対する特定のログを得るため、ログ収集を制限します。

```
XSCF> snapshot -d usb0 -b 3 -S 2012-01-01,01:00:00  -E 2012-01-
31_14-00-00
Testing writability of USB device....SUCCESS
Collecting data into /media/usb_msd/jupiter_10.1.1.1_2012-10-20T22-41-
51.zip
Data collection complete.
```

使用例 3 すべての SPARC M12/M10 システムの筐体のログを収集します。

```
XSCF> snapshot -d usb0 -r -a -v
Testing writability of USB device....SUCCESS
About to remove all files from device 'usb0'. Continue? [y|n] : y
BB#00: start to execute snapshot
BB#01: start to execute snapshot
.
```

```
.
.
BB#00: finish to execute snapshot
BB#01: finish to execute snapshot
.
.
.
BB#00_jupiter_10.1.1.1_2012-10-20T22-33-44.zip - Status: ok
BB#01_jupiter_10.1.1.2_2012-10-20T22-33-44.zip - Status: FAIL
.
.
.
Collecting data into /media/usb_msd/jupiter_10.1.1.1_2012-10-20T22-41-
51.zip
Data collection complete.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

showlogs(8)

名前

switchscf - XSCF のアクティブ状態とスタンバイ状態を切り替えます。

形式

switchscf [[-q] -{y|n}] -t {Master | Standby} [-f]

switchscf -h

説明

switchscf は、XSCF のアクティブ状態とスタンバイ状態を切り替えるコマンドです。

switchscf は、XSCF が複数で構成されているシステムにだけ使用できます。

アクティブ状態の XSCF とはマスタ XSCF のことです。そのため、switchscf を実行することで、マスタ XSCF とスタンバイ状態の XSCF を切り替えることになります。

switchscf はマスタ XSCF またはスタンバイ状態の XSCF で実行できます。現在ログイン中の XSCF に対してコマンドを実行すると、対となっている XSCF 間（クロスバーボックスありの場合は XBBOX#80 と XBBOX#81 間、クロスバーボックスなしの場合は BB#00 と BB#01 間）で切り替え処理が行われます。

注 – XSCF の切り替え時には、マスタ XSCF に接続されているネットワークのセッションは切断されます。

注意 – 通常、保守作業中の場合は XSCF を切り替えることはできません。switchscf の実行結果が「Switching of XSCF state is disabled due to a maintenance operation. Try again later.」となって、XSCF が切り替えられない場合は、addfru(8)、replacefru(8)、flashupdate(8) の保守コマンドが実行中かどうか確認してください。実行中であればコマンドが終了するまでお待ちください。保守コマンドが実行中でないにもかかわらず XSCF が切り替えられない場合は、-f を使用して切り替えてください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-f　　XSCF が切り替えられない場合に、強制的に切り替えます。

注意 – -f は強制的に XSCF を切り替えるため、通常の操作で切り替えられない場合に限り使用してください。

-h　　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-n　　プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。

-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-t Master	XSCF をマスタ状態に切り替えます。
-t Standby	XSCF をスタンバイ状態に切り替えます。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

詳細説明

コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。

使用例

使用例 1 現在ログインしている XSCF をスタンバイ状態に切り替えます。

```
XSCF> switchscf -t Standby
The XSCF unit switch between the Master and Standby states. Continue? [y|n]:y
```

使用例 2 現在ログインしている XSCF をスタンバイ状態に切り替えます。プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> switchscf -t Standby -y
The XSCF unit switch between the Master and Standby states. Continue? [y|n]:y
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前 testsb - 指定した物理システムボード（PSB）の初期診断を行います。

形式

testsb [[-q] -{y|n}] [-m diag=*mode*] *location*

testsb [[-q] -{y|n}] [-m diag=*mode*] -a

testsb -v [-y|-n] [-m diag=*mode*] [-p] [-s] *location*

testsb -v [-y|-n] [-m diag=*mode*] [-p] [-s] -a

testsb -h

説明

testsb は、指定した PSB の初期診断を行うコマンドです。

PSB の構成、および PSB に搭載された各デバイスの動作が診断されます。診断中は、PSB の電源の投入および切断が実施されます。診断後は、診断結果が表示されます。また、showboards(8) で表示される Test や Fault の項目で確認できます。

診断完了後に、縮退された部品がないこと、およびエラーログが登録されていないことを確認してください。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-a　搭載されているすべての PSB を診断します。

-h　使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-m diag=*mode*　初期診断の診断レベルを指定します。*mode* には以下のどちらかを指定できます。

min	標準（デフォルト）
max	最大

-n　プロンプトに対して自動的に「n」（no）と応答します。

-p　診断処理の途中で OpenBoot PROM の probe-scsi-all を実行し、結果を表示します。

SPARC M12-1/M12-2/M12-2S の場合、PCI ボックスが接続されていれば、PCI ボックスおよび LINK カードのファームウェア版数情報と、PCI ボックスに搭載されているコンポーネントの情報も表示します。

-q　プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。

`-s`	診断処理の途中で OpenBoot PROM の `show-devs` を実行し、結果を表示します。 SPARC M12-1/M12-2/M12-2S の場合、PCI ボックスが接続されていれば、PCI ボックスおよび LINK カードのファームウェア版数情報と、PCI ボックスに搭載されているコンポーネントの情報も表示します。
`-v`	詳細な情報を表示します。
`-y`	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

location 　診断する PSB 番号を 1 つだけ指定します。

以下の形式で指定できます。

xx-y

xx	BB-ID の 00 から 15 までの整数で指定します。
y	0 で固定となります。

詳細説明

- SPARC M12-2S の場合、以下のいずれかに該当するときは、電源の投入と切断が 2 回繰り返されます。
  - *location* を指定して診断を行うとき
  - システム内に診断対象の PSB が 1 つのみのとき
- SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4/M10-4S の場合、診断中は PSB の電源の投入と切断が行われます。
- CPU コア アクティベーションキーが登録されていなくても、`testsb` による診断を実施できます。
- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- `-a` はシステムが停止している状態で実行してください。システムが停止していない場合、エラーとなります。

  システム停止状態とは、すべての PPAR が停止している状態です。起動している状態の場合は、`poweroff -a` を実行することで、すべての PPAR が停止し、その後システムの電源が切断されます。システム電源の状態は、`showhardconf(8)` を実行し、「System_Power:」の表示(「On」または「Off」)を参照することで確認できます。
- 指定した PSB が以下の状態の場合は、`testsb` はエラーとなります。
  - PSB が PPAR に組み込まれていて、かつ、その PPAR が稼働中
  - PSB が PPAR に組み込まれていて、かつ、その PPAR が OpenBoot PROM(ok プロンプト)状態

  - PSB が PPAR に組み込まれていて、かつ、その PPAR が電源投入中、電源切断中、再起動中のいずれかの状態
  - PSB を対象に、addboard(8)、deleteboard(8) を実行中
- 他の PSB やクロスバーボックスに対して､それぞれ testsb や diagxbu(8) を実行しているときに、testsb を実行しようとするとエラーとなります。
- 指定した PSB が Unmount または Faulted 状態となっている場合は､診断の対象から外され、診断結果に表示されないときがあります。このような場合は、showboards(8) で診断結果を確認してください。
- 暖機運転および起動までの待ち時間が設定されている場合は、これらを無視して testsb を実行してよいかを確認するプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- testsb による診断結果は、以下のように表示されます。

PSB　　PSB に属する番号

以下の形式で表示されます。

xx-y

xx	BB-ID の 00 から 15 までの整数
y	0 で固定となります

Test　　PSB の初期診断状態
以下のいずれかが表示されます。この状態表示は showboards(8) で表示される状態表示と同じです。

Unmount	未搭載または故障により認識できない状態
Unknown	診断されていない状態
Testing	初期診断中
Passed	初期診断が正常に終了した状態
Failed	初期診断で異常が発生した状態 PSB は使用できない、または縮退している状態となります。

Fault　　PSB の縮退状態
状態は 1 つ、または複数で表示されます。この状態表示は showboards(8) で表示される状態表示と同じです。

Normal	正常な状態
Degraded	縮退部品がある状態 PSB は稼働できます。
Faulted	異常により PSB が稼働できない状態

- -p または-s を指定して実行した場合､probe-scsi-all もしくは show-devs 実施中に、[Ctrl]+[C] キーを押すと、強制的に電源が停止できます。

使用例

使用例 1 SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4/M10-4S で、PSB 00-0 の初期診断を行います。

```
XSCF> testsb 00-0
Initial diagnosis is about to start, Continue?[y|n] :y
PSB#00-0 power on sequence started.
 0end
Initial diagnosis started. [7200sec]
 0..... 30..... 60..... 90.....120end
Initial diagnosis has completed.
PSB power off sequence started. [1200sec]
 0.end
PSB powered off.
PSB  Test    Fault
---- ------- --------
00-0 Passed  Normal
```

使用例 2 SPARC M12-2S で、PSB 00-0 の初期診断を行います。電源の投入と切断が 2 回繰り返されます。

```
XSCF> testsb 00-0
Initial diagnosis is about to start, Continue?[y|n] :y
PSB#00-0 power on sequence started.
  0end
Initial diagnosis started. [1 / 2] [7200sec]
  0..... 30..... 60.....end
Initial diagnosis has completed.
PSB power off sequence started. [1200sec]
  0..end
PSB powered off.
PSB#00-0 power on sequence started.
  0end
Initial diagnosis started. [2 / 2] [7200sec]
  0..... 30..... 60..... 90.....120end
Initial diagnosis has completed.
PSB power off sequence started. [1200sec]
  0..... 30..... 60end
PSB powered off.
PSB  Test    Fault
---- ------- --------
00-0 Passed  Normal
```

使用例 3 SPARC M12-1/M12-2/M10-1/M10-4/M10-4S で、PSB 00-0 の初期診断を詳細なメッセージを表示して行います。

```
XSCF> testsb -v 00-0
Initial diagnosis is about to start. Continue? [y|n] :y
PSB#00-0 power on sequence started.
     :
auto-boot? =            false
{0} ok Initial diagnosis has completed.
PSB power off sequence started. [1200sec]
```

```
 0.end
PSB powered off.
PSB  Test    Fault
---- ------- --------
00-0 Passed  Normal
```

使用例 4 SPARC M12-2S で、PSB 01-0 の初期診断を詳細なメッセージを表示して行います。電源の投入と切断が 2 回繰り返されます。

```
XSCF> testsb -v 01-0
Initial diagnosis is about to start. Continue? [y|n] :y
PSB#01-0 power on sequence started.
    :
<<1 回目の診断メッセージが表示されます >>
    :
post(s00c0.00.0)>Initial diagnosis has completed.
PSB power off sequence started. [1200sec]
  0...end
PSB powered off.
PSB#01-0 power on sequence started.
    :
<<2 回目の診断メッセージが表示されます >>
    :
auto-boot? =            false
{0} ok Initial diagnosis has completed.
PSB power off sequence started. [1200sec]
  0...end
PSB powered off.
PSB  Test    Fault
---- ------- --------
01-0 Passed  Normal
```

使用例 5 搭載されているすべての PSB の初期診断を行います。

```
XSCF> testsb -a
Initial diagnosis is about to start. Continue? [y|n] :y
PSB power on sequence started.
 0end
Initial diagnosis started. [1800sec]
 0..... 30..... 60..... 90.....120end
Initial diagnosis has completed.
PSB power off sequence started. [1200sec]
 0.end
PSB powered off.
PSB  Test    Fault
---- ------- --------
00-0 Passed  Normal
01-0 Passed  Normal
02-0 Passed  Normal
03-0 Passed  Normal
```

使用例 6 暖機運転、空調待ち設定された状態で PSB の初期診断を行います。(暖機運

転時間、空調待ち時間の途中なので診断を中断します。)

```
XSCF> testsb -a
Initial diagnosis is about to start, Continue? [y|n] :y
Ignore warmup-time and air-conditioner-wait-time, Continue?[y|n] :n
Initial diagnosis canceled by operator.
```

使用例 7 設定されている暖機運転および空調待ち時間を無視して、PSB の初期診断を行います。

```
XSCF> testsb -a
Initial diagnosis is about to start. Continue? [y|n] :y
Ignore warmup-time and air-conditioner-wait-time, Continue?[y|n] :y
PSB power on sequence started.
 0end
Initial diagnosis started. [1800sec]
 0..... 30..... 60..... 90.....120end
Initial diagnosis has completed.
PSB power off sequence started. [1200sec]
 0.end
PSB powered off.
PSB  Test    Fault
---- ------- --------
00-0 Passed  Normal
01-0 Passed  Normal
02-0 Passed  Normal
03-0 Passed  Normal
```

使用例 8 PSB 01-0 の初期診断を `probe-scsi-all` コマンド付きで行います。

```
XSCF> testsb -v -p 01-0
Initial diagnosis is about to start, Continue? [y|n] :y
PSB#01-0 power on sequence started.
:
auto-boot? =            false
:
PSB  Test    Fault
---- ------- --------
01-0 Passed  Normal
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addfru(8), **diagxbu**(8), **replacefru**(8), **setupfru**(8), **showboards**(8), **showfru**(8)

名前

traceroute - 指定したホストまでのネットワーク経路を表示します。

形式

traceroute [-n] [-r] [-v] [-m *maxttl*] [-p *port*] [-q *nqueries*] [-s *src_addr*] [-w *wait*] *host*

traceroute -h

説明

traceroute は、指定したホストまでのネットワーク経路を表示するコマンドです。

ネットワーク経路とは、指定したホストまたはネットワーク装置間を接続するルータ（ゲートウェイ）を表し、経路上にどのようなルータが位置しているかを表示します。

traceroute は IP プロトコルの TTL フィールドを利用して、指定したホストまたはネットワーク装置までの、ネットワーク経路上にあるすべてのゲートウェイから ICMP TIME_EXCEEDED レスポンスを引き出そうと試みます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するのに必要な権限はありません。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-m *maxttl*	ホップ数の最大値を指定します。指定したホップ数分のゲートウェイを表示します。省略した場合は 30 に設定されます。
-n	DNS 逆引きを行わずに、IP アドレスだけを出力します。
-p *port*	使用する UDP パケットのポート番号を指定します。UDP パケットを使用する場合にだけ有効です。省略した場合は 33434 に設定されます。
-q *nqueries*	1 つのゲートウェイに対する試行回数を指定します。省略した場合は 3 回に設定されます。
-r	ルーティングテーブルを無視して、直接パケットを、指定したホストまたはネットワーク装置へ転送します。同一の物理ネットワーク上に目的のホストまたはネットワーク装置がない場合は、エラーとなります。
-s *src_addr*	経路をたどるソースアドレスを指定します。
-v	詳細な情報を表示します。パケットの送信サイズ、および送信元アドレスが表示されます。
-w *wait*	タイムアウト時間を秒単位で指定します。省略した場合は 3 秒に設定されます。

オペランド

以下のオペランドがサポートされています。

host パケットを送信するホストまたはネットワーク装置を指定します。ホスト名または IP アドレスで指定できます。DSCP アドレスを指定した場合はエラーとなります。

詳細説明

- いずれのオプションも指定しない場合は、使用方法が表示されます。
- *host* に "`localhost`"、loopback アドレス (127.0.0.0/8) を指定する場合は、`fieldeng` 権限を持つユーザーだけが実行できます。
- *host* に SSCP リンクのインターフェースを指定する場合は、`fieldeng` 権限を持つユーザーだけが実行できます。
- *host* に指定したホスト名が 127 文字を越える場合は、ホスト名の代わりに、IP アドレスが表示されます。

使用例

使用例 1 server.example.com というホストまでのネットワーク経路を表示します。

```
XSCF> traceroute server.example.com
traceroute to server.example.com (192.168.100.10), 30 hops max, 38 byte
packets
 1  10.16.10.1 (10.16.10.1)  1.792 ms  1.673 ms  1.549 ms
 2  10.16.11.1 (10.16.11.1)  2.235 ms  2.249 ms  2.367 ms
 3  10.24.1.1 (10.24.1.1)  2.199 ms  2.228 ms  2.361 ms
 4  10.13.0.1 (10.13.0.1)  2.516 ms  2.229 ms  2.357 ms
 5  10.15.0.1 (10.15.0.1)  2.546 ms  2.347 ms  2.272 ms
 6  server.example.com (192.168.100.10)  2.172 ms  2.313 ms  2.36 ms
```

使用例 2 server.example.com というホストまでの詳細なネットワーク経路を表示します。(XSCF-LAN=192.168.100.10)

```
XSCF> traceroute -v server.example.com
traceroute to server.example.com (192.168.100.10), 30 hops max, 38 byte
packets
 1  10.16.10.1 (10.16.10.1) 36 bytes to 192.168.100.10  1.792 ms  1.673 ms
1.549 ms
 2  10.16.11.1 (10.16.11.1) 36 bytes to 192.168.100.10  2.235 ms  2.249 ms
2.367 ms
 3  10.24.1.1 (10.24.1.1) 36 bytes to 192.168.100.10  2.199 ms  2.228 ms
2.361 ms
 4  10.13.0.1 (10.13.0.1) 36 bytes to 192.168.100.10  2.516 ms  2.229 ms
2.357 ms
 5  10.15.0.1 (10.15.0.1) 36 bytes to 192.168.100.10  2.546 ms  2.347 ms
2.272 ms
 6  server.example.com (192.168.100.10) 46 bytes to 192.168.100.10  2.172 ms
2.313 ms  2.36 ms
```

使用例 3 loopback アドレスを設定した場合。

```
XSCF> traceroute 127.0.0.1
This private IP address cannot be accessed.
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

unlockmaintenance - addfru(8) および replacefru(8) による多重起動ロック状態を解除します。

形式

unlockmaintenance [[-q] -{y|n}]

unlockmaintenance -h

説明

unlockmaintenance は、addfru(8) および replacefru(8) による保守中に、LAN 切断等で予期せずに作業が中断された場合、保守コマンドの多重起動ロック状態を解除するコマンドです。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-n	プロンプトに対して自動的に「n」(no) と応答します。
-q	プロンプトを含む、標準出力へのメッセージを表示しないようにします。
-y	プロンプトに対して自動的に「y」(yes) と応答します。

詳細説明

注 – 保守メニューの多重起動防止ロックを強制的に中断するため、LAN 切断等により、予期せずに保守作業が中断された場合以外は、絶対に使用しないでください。

- コマンドを実行すると、指定した内容で実行してよいかを確認するためのプロンプトが表示されます。実行する場合は「y」、中断する場合は「n」を指定します。
- unlockmaintenance はマスタ XSCF でだけ実行できます。スタンバイ状態の XSCF で実行しようとするとエラーとなります。

使用例

使用例 1 保守作業で生じたロック状態を解除します。

```
XSCF> unlockmaintenance
This command unlocks the maintenance lock which prevents the multiple
execution of maintenance commands.
*Never* use this command, except when the lock state remains by some reason.
Careless execution of this command causes serious situation because it
interrupts the running command and XSCF might not be able to recognize the
parts.
Continue? [y|n] :y
```

使用例 2 保守作業で生じたロック状態を解除します。プロンプトには自動的に「y」

と応答します。

```
XSCF> unlockmaintenance -y
This command unlocks the maintenance lock which prevents the multiple
execution of maintenance commands.
*Never* use this command, except when the lock state remains by some
reason.
Careless execution of this command causes serious situation because it
interrupts the running command and XSCF might not be able to recognize the
parts.
Continue? [y|n] :y
```

使用例 3 保守作業で生じたロック状態を解除します。メッセージは非表示にして、プロンプトには自動的に「y」と応答します。

```
XSCF> unlockmaintenance -q -y
XSCF>
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

addfru(8), **replacefru**(8)

名前 version - ファームウェアの版数を表示します。

形式 **version** -c xcp [-v] [-t]

version -c {cmu | xscf} [-v] [-M]

version -h

説明 version はファームウェアの版数を表示するコマンドです。

以下の版数が表示できます。

xcp	システムに適用されている XSCF Control Package（XCP）の総合版数
cmu	自己診断テスト（POST）／ OpenBoot PROM ／ハイパーバイザのアーカイブの代表版数
xscf	XSCF ファームウェアの版数

ユーザー権限 このコマンドを実行するには、platadm または fieldeng 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション 以下のオプションがサポートされています。

-c xcp	XCP 総合版数を表示します。
-c cmu	POST ／ OpenBoot PROM ／ハイパーバイザのアーカイブの代表版数（CMU ファームウェア版数）を表示します。
-c xscf	XSCF ファームウェアの版数を表示します。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。
-M	テキストを 1 画面ずつ表示します。
-t	XSCF 内に登録されている XCP 総合版数の情報を表示します。-c xcp と一緒に指定します。
-v	詳細な情報を表示します。-c xscf と一緒に指定した場合は、通常と同じ情報が表示されます。

使用例

使用例 1 SPARC M10-4S（クロスバーボックスなし）の XCP 総合版数を表示します。

```
XSCF> version -c xcp
BB#00-XSCF#0 (Master)
XCP0 (Current): 2320
XCP1 (Reserve): 2320
BB#01-XSCF#0 (Standby)
XCP0 (Current): 2320
```

```
XCP1 (Reserve): 2320
BB#02-XSCF#0
XCP0 (Current): 2320
XCP1 (Reserve): 2320
```

使用例 2 SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり）の XCP 総合版数を表示します。

```
XSCF> version -c xcp
XBBOX#80-XSCF#0 (Master)
XCP0 (Current): 2320
XCP1 (Reserve): 2320
XBBOX#81-XSCF#0 (Standby)
XCP0 (Reserve): 2320
XCP1 (Current): 2320
BB#00-XSCF#0
XCP0 (Current): 2320
XCP1 (Reserve): 2320
BB#01-XSCF#0
XCP0 (Current): 2320
XCP1 (Reserve): 2320
```

使用例 3 SPARC M10-1 の XCP 総合版数を表示します。

```
XSCF> version -c xcp
BB#00-XSCF#0 (Master)
XCP0 (Current): 2320
XCP1 (Reserve): 2320
```

使用例 4 SPARC M10-4S（クロスバーボックスなし）の XCP 総合版数の詳細を表示します。

```
XSCF> version -c xcp -v
BB#00-XSCF#0 (Master)
XCP0 (Current): 2320
CMU            : 02.32.0000
    POST           : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
XSCF           : 02.32.0000
XCP1 (Reserve): 2320
CMU            : 02.32.0000
    POST           : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
XSCF           : 02.32.0000
BB#01-XSCF#0 (Standby)
XCP0 (Current): 2320
CMU            : 02.32.0000
    POST           : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
XSCF           : 02.32.0000
```

```
XCP1 (Reserve): 2320
CMU           : 02.32.0000
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
CMU BACKUP
#0: 02.32.0000
#1: ..
```

使用例 5 SPARC M10-4S（クロスバーボックスあり）の XCP 総合版数の詳細を表示します。

```
XSCF> version -c xcp -v
XBBOX#80-XSCF#0 (Master)
XCP0 (Current): 2320
XSCF          : 02.32.0000
XCP1 (Reserve): 2320
XSCF          : 02.32.0000
XBBOX#81-XSCF#0 (Standby)
XCP0 (Reserve): 2320
XSCF          : 02.32.0000
XCP1 (Current): 2290
XSCF          : 02.32.0000
BB#00-XSCF#0
XCP0 (Current): 2320
CMU           : 02.32.0000
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
XSCF          : 02.32.0000
XCP1 (Reserve): 2320
CMU           : 02.32.0000
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
XSCF          : 02.32.0000
BB#01-XSCF#0
XCP0 (Current): 2320
CMU           : 02.32.0000
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
XSCF          : 02.32.0000
XCP1 (Reserve): 2320
CMU           : 02.32.0000
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
CMU BACKUP
#0: 02.32.0000
#1: ..
```

使用例 6 SPARC M10-1 の XCP 総合版数の詳細を表示します。

```
XSCF> version -c xcp -v
BB#00-XSCF#0 (Master)
XCP0 (Current): 2320
CMU           : 02.32.0000
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
XSCF          : 02.32.0000
XCP1 (Reserve): 2320
CMU           : 02.32.0000
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
XSCF          : 02.32.0000
```

使用例 7 SPARC M12-2S（クロスバーボックスなし）の XCP 総合版数の詳細を表示します。

```
XSCF> version -c xcp -v
BB#00-XSCF#0 (Master)
XCP0 (Current): 3022
XSCF          : 03.02.0002
XCP1 (Reserve): 3022
XSCF          : 03.02.0002
CMU           : 03.02.0002
    POST          : 5.9.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+3.1.0
    Hypervisor    : 1.5.13
BB#01-XSCF#0 (Standby)
XCP0 (Current): 3022
XSCF          : 03.02.0002
XCP1 (Reserve): 3022
XSCF          : 03.02.0002
CMU           : 03.02.0002
    POST          : 5.9.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+3.1.0
    Hypervisor    : 1.5.13
CMU BACKUP
#0: 03.02.0002
#1: ..
```

使用例 8 XSCF に登録されている XCP 総合版数を表示します。

```
XSCF> version -c xcp -t
XCP: 2320
```

使用例 9 XSCF に登録されている XCP 総合版数の詳細を表示します。

```
XSCF> version -c xcp -v -t
XCP           : 2320
    CMU           : 02.32.0000
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
XSCF          : 02.32.0000
```

使用例 10 CMU ファームウェアの版数を表示します。

```
XSCF> version -c cmu
PPAR-ID 0: 02.32.0000
PPAR-ID 1: 02.32.0000
PPAR-ID 2: 02.32.0000
PPAR-ID 3: 02.32.0000
:
PPAR-ID 15: 02.32.0000
```

使用例 11 SPARC M10-4S の CMU ファームウェアの詳細な版数を表示します。

```
XSCF> version -c cmu -v
PPAR-ID 0: 02.32.0000
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
PPAR-ID 1: 02.32.0000
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
PPAR-ID 2: 02.32.0000
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
PPAR-ID 3: 02.32.0000
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
PPAR-ID 15: 02.32.0000
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
PSB#00-0: 02.32.0000(Current)
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
PSB#00-0: 02.32.0000(Reserve)
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
PSB#01-0: 02.32.0000(Current)
    POST          : 3.10.0
```

```
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
PSB#01-0: 02.32.0000(Reserve)
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8

    :

PSB#15-0: 02.32.0000(Current)
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
PSB#15-0: 02.32.0000(Reserve)
    POST          : 3.10.0
    OpenBoot PROM : 4.38.5+2.19.0
    Hypervisor    : 1.4.8
```

使用例 12 SPARC M10-4S の XSCF ファームウェアの詳細な版数を表示します。

```
XSCF> version -c xscf -v
BB#00-XSCF#0 (Master)
02.32.0000(Reserve) 02.32.0000(Current)
BB#01-XSCF#0 (Standby)
02.32.0000(Current) 02.32.0000(Reserve)
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

名前

viewaudit - 監査レコードを表示します。

形式

viewaudit

viewaudit [-A *date-time*] [-B *date-time*] [-C] [-c *classes*] [-D *date-time*] [-E *end-record*] [-e *events*] [-i *audit-ids*] [-l] [-m *del*] [-n] [-p *privilege-results*] [-r *return-values*] [-S *start-record*] [-u *users*] [-x]

viewaudit -h

説明

viewaudit は、監査レコードを表示するコマンドです。

オプションを指定しないで viewaudit を実行すると、現在のローカル監査レコードがすべて表示されます。オプションを指定して viewaudit を実行すると、選択したレコードのみが表示されます。デフォルトでは、レコードはテキスト形式で表示されます。1 行に 1 トークンずつ示され、フィールド区切り文字としてカンマが使用されます。出力形式は、-C、-E、-l、-m *del*、-n、-S、を使い分けることにより変更できます。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、auditadm または auditop 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、setprivileges(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

-A *date-time*

date-time 以後に発生したレコードを選択します。*date-time* はローカル時間に基づきます。-A と -B を一緒に使用すると、範囲を指定できます。*date-time* の有効な値は以下のとおりです。

- 絶対時間 *date-time* : *yyyymmdd*[*hh*[*mm*[*ss*]]]
  変数の意味は以下のとおりです。
  - *yyyy* = 年（1970 が最も早い有効値）
  - *mm* = 月（01 ～ 12）
  - *dd* = 日（01 ～ 31）
  - *hh* = 時（00 ～ 23）
  - *mm* = 分（00 ～ 59）
  - *ss* = 秒（00 ～ 59）

hh、*mm*、および *ss* のデフォルトの値は 00 です。

-B *date-time*

date-time 以前に発生したレコードを選択します。*date-time* はローカル時間に基づきます。-A と-B を一緒に使用すると、範囲を指定できます。*date-time* の有効な値は、絶対時間またはオフセット時間です。

- 絶対時間 *date-time* : *yyyymmdd*[*hh*[*mm*[*ss*]]]

  変数の意味は以下のとおりです。

  - *yyyy* = 年（1970 が最も早い有効値）
  - *mm* = 月（01 ～ 12）
  - *dd* = 日（01 ～ 31）
  - *hh* = 時（00 ～ 23）
  - *mm* = 分（00 ～ 59）
  - *ss* = 秒（00 ～ 59）

- オフセット *date-time*: +*n* *d*|*h*|*m*|*s*

  変数の意味は以下のとおりです。

  - *n* = ユニット数
  - *d* = 日数
  - *h* = 時間数
  - *m* = 分数
  - *s* = 秒数

  オフセット時間は-B でだけ指定でき、-A と一緒に指定する必要があります。

  hh、*mm*、および *ss* のデフォルトの値は 00 です。

-C

出力の最後に、選択基準に一致したレコード数を追加します。

-c *classes*	指定されたクラスのレコードを選択します。*classes* は、監査クラスのカンマ区切りリストです。クラスは数値または名前のどちらかで指定できます。接頭語「ACS_」は省略できます。たとえば、監査に関連するイベントのクラスは、ACS_AUDIT、AUDIT、または 2 と表現できます。 有効なクラスは以下のとおりです。

all	すべてのクラス
ACS_SYSTEM(1)	システムに関連するイベント
ACS_write(2)	状態を変更できるコマンド
ACS_READ(4)	現在の状態を表示するコマンド
ACS_LOGIN(8)	ログインに関連するイベント
ACS_AUDIT(16)	監査に関連するイベント
ACS_PPAR(32)	PPAR 管理に関連するイベント
ACS_USER(64)	ユーザー管理に関連するイベント
ACS_PLATFORM(128)	プラットフォーム管理に関連するイベント
ACS_MODES(256)	モードに関連するイベント

-D *date-time*	特定の日（指定の日の 00:00:00 に開始して 23:59:59 に終了する 24 時間の期間）に発生したレコードを選択します。指定日はローカル時間に基づき、*yyyymmddhhmmss* （年、月、日、時、分、秒）の形式で指定します。指定した日付のタイムスタンプを持つすべてのレコードが選択されます。時間、分、秒を指定しても無効となります。-D は、-A や -B とは一緒に指定できません。
-E *end-record*	表示する選択基準と一致する、最後のレコードを指定します。
-e *events*	指定されたイベントのレコードを選択します。*events* は、監査イベントのカンマ区切りリストです。イベントは数値または名前のどちらかで指定できます。接頭語「AEV_」は省略できます。たとえば、SSH ログインのイベントは、AEV_LOGIN_SSH、LOGIN_SSH、または 4 と表現できます。 有効なイベントの一覧は、showaudit -e all を参照してください。
-h	使用方法を表示します。他のオプションやオペランドと一緒に指定した場合はエラーになります。

-i *audit-ids*	指定された監査セッション識別子のレコードを選択します。特定の監査レコードに反映されるアクティビティに関心がある場合は、そのセッションのすべての監査レコードを表示することができます。*audit-id* は固定ではなく、サービスプロセッサをリセットすると再割り当てされます。*audit-ids* は、監査セッション識別子のカンマ区切りリストです。*audit-id* は、監査ファイルの「subject」ラベルの後ろにある数字です。 たとえば、以下のリストでは、*audit-id* は「`1`」です。 `subject,1,bob,normal,telnet 45880 jupiter`
-l	1 行に 1 レコードずつ出力します。
-m *del*	フィールド区切り文字として、デフォルトの区切り文字（カンマ）ではなく *del* を使用します。*del* がシェルで特別な意味を持つ場合は、引用符で囲む必要があります。区切り文字の最大文字数は 3 文字です。区切り文字は意味を持ちません。また、-x と一緒には指定できません。
-n	UID と IP アドレスをユーザー名またはホスト名に変換しないよう指定します。
-p *privilege-results*	指定された *privilege-results* に従ってレコードを選択します。*privilege-results* は、カンマ区切りリストです。*privilege-results* は、granted、denied、または error です。
-r *return-values*	指定された戻り値に従ってレコードを選択します。*returnvals* は、値 success または failure のカンマ区切りリストです。success は、戻り値 0 に対応します。failure は非ゼロの戻り値に対応します。
-S *start-record*	表示する選択基準と一致する、最初のレコードを指定します。
-u *users*	指定されたユーザーに帰属するレコードを選択します。*users* は、ユーザーのカンマ区切りリストです。ユーザーはユーザー名または数値 UID によって指定できます。
-x	XML 形式で出力します。

使用例

使用例 1 2012 年 12 月 12 日の監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -D 20121212

file,1,2012-01-11 10:52:30.391 -05:00,20120111155230.0000000000.jupiter
```

使用例 2 ユーザーの監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -u jsmith

file,1,2012-01-11 10:52:30.391 -05:00,20120111155230.0000000000.jupiter
```

```
header,37,1,login - telnet,jupiter,2012-01-11 11:31:09.659 -05:00
subject,1,jsmith,normal,ssh 45880 jupiter
command,showuser
platform access,granted
return,0
```

使用例 3　ユーザー権限の監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -p granted

file,1,2012-01-11 10:52:30.391 -05:00,20120111155230.0000000000.jupiter
header,37,1,login - telnet,jupiter,2012-01-11 11:31:09.659 -05:00
subject,1,jsmith,normal,ssh 45880 jupiter
command,showuser
platform access,granted
return,0
```

使用例 4　アクセスが成功した監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -r success

file,1,2012-01-11 10:52:30.391 -05:00,20120111155230.0000000000.jupiter
header,37,1,login - telnet,jupiter,2012-01-11 11:31:09.659 -05:00
subject,1,jsmith,normal,ssh 45880 jupiter
command,showuser
platform access,granted
return,0header,57,1,command - viewaudit,jupiter.company.com,2006-01-26
16:13:09.128 -05:00
subject,5,sue,normal,ssh 1282 saturn
command,viewaudit
platform access,granted
return,0
...
```

使用例 5　2 日間の監査レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -A 20120108 -B +2d

file,1,2012-01-09 20:12:12.968 -08:00,20120110041212.0000000004.sca-m5k-0-0
file,1,2012-01-10 21:14:49.481 -08:00,terminated
file,1,2012-01-10 21:14:49.485 -08:00,20120111051449.0000000005.sca-m5k-0-0
```

使用例 6　日付の範囲に一致したレコード（4238 レコード）のうち、最初の 5 レコードを表示します。

```
XSCF> viewaudit -C -A 20120109 -B 20120110 -E 5

file,1,2012-01-09 20:12:12.968 -08:00,20120110041212.0000000004.sca-m5k-0-0
header,63,1,command - setaudit,sca-m5k-0-0.sfbay.sun.com,2012-01-09
20:12:12.974 -08:00,subject,250,opl,normal,ssh 42759 san-e4900-
0.West.Sun.COM,command,setaudit,delete,platform access,granted,return,0
header,37,1,login - ssh,sca-m5k-0-0.sfbay.sun.com,2012-01-09 20:12:14.455 -
```

```
08:00,subject, 252,scfroot,normal,ssh 42761 san-e4900-0.West.Sun.COM
header,37,1,logout,sca-m5k-0-0.sfbay.sun.com,2012-01-09 20:12:14.800 -
08:00,subject,250,o pl,normal,ssh 42759 san-e4900-0.West.Sun.COM
header,37,1,login - ssh,sca-m5k-0-0.sfbay.sun.com,2012-01-09 20:12:15.595 -
08:00,subject, 253,scfroot,normal,ssh 42762 san-e4900-0.West.Sun.COM
4238
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

setaudit(8), **showaudit**(8)

名前

xscfstartupmode - SPARC M12-1/M10-1 の起動モードを設定します。

形式

xscfstartupmode `-m` *mode*

xscfstartupmode `-d`

説明

`xscfstartupmode` は、SPARC M12-1/M10-1 の起動モードを設定するコマンドです。

起動モードには、高速モード（fast）と通常モード（normal）の 2 種類のモードがあります。

SPARC M12-1/M10-1 の物理パーティションを自動的に起動するには、本コマンドで起動モードを高速モード（fast）に設定し、オペレーションパネルのモードスイッチを Locked にした状態で、入力電源を投入します。起動モードを通常モード（normal）に設定すると、物理パーティションは自動的に起動されず、`poweron`(8) を実行することで、物理パーティションが起動されます。また、高速モードに設定していても、オペレーションパネルのモードスイッチを Service にした状態で入力電源を投入すると、XSCF は通常モードで動作します。

本コマンドは、SPARC M12-2/M12-2S/M10-4/M10-4S ではサポートされていません。

ユーザー権限

このコマンドを実行するには、`platadm` または `fieldeng` 権限が必要です。

ユーザー権限の詳細は、`setprivileges`(8) を参照してください。

オプション

以下のオプションがサポートされています。

`-d`
: 以下の情報を表示します。

`Current Mode`
: 現在動作中の起動モードを表示します。

  `fast`: システムは高速モードで起動しています。

  `normal`: システムは通常モードで起動しています。

`Setting Mode`
: 起動モードの設定状態を表示します。

  `fast`: 高速モードに設定されています。オペレーションパネルのモードスイッチが Locked の状態で入力電源を切断および投入すると、次回は高速モードで起動します。

  `normal`: 通常モードに設定されています。入力電源を切断および投入すると、次回は通常モードで起動します。

  `fast [need AC OFF/ON]`: 高速モードに設定が変更されています。オペレーションパネルのモードスイッチが Locked の状態で入力電源を切断および投入すると、次回は高速モードで起動します。

  `normal [need AC OFF/ON]`: 通常モードに設定が変更されています。入力電源を切断および投入すると、次回は通常モードで起動します。

`-m` *mode* 起動モードを設定します。*mode* には、`fast`（高速モード）または `normal`（通常モード）のいずれかを指定できます。デフォルト値は `normal`（通常モード）です。

`fast`

起動モードを高速モードにします。
高速モードにしたあとは、入力電源の切断および投入が必要です。オペレーションパネルのモードスイッチが Locked の状態で入力電源を投入すると、システムは高速モードで起動します。Service の状態で入力電源を投入すると、システムは通常モードで起動します。

`normal`

起動モードを通常モードにします。
通常モードにしたあとは、入力電源の切断および投入が必要です。入力電源を投入すると、オペレーションパネルのモードスイッチの状態にかかわらず、システムは通常モードで起動します。

詳細説明

- 物理パーティションが停止している状態で、高速モードに設定変更し、XSCF を再起動しても、物理パーティションは自動的に起動されません。入力電源を再度投入するか、`poweron`(8) により物理パーティションを起動してください。
- XSCF が起動しているときに、オペレーションパネルのモードスイッチの状態を変更しても、起動モードの状態は途中で変化しません。
- 高速モードで物理パーティションが起動されると、パワーログの要因（Cause）には power recover が登録されます。
- 起動モードの設定情報は、`dumpconfig`(8) および `restoreconfig`(8) によって保存および復元されるシステム構成情報には含まれません。
- 高速モードで起動している場合、telnet または SSH で XSCF にログインできる最大接続数は、10 セッションに制限されます。
- SPARC M10-1 では、本コマンドの監査ログ（audit ログ）は採取されません。
- システム構成情報および論理ドメイン構成情報を作成または変更する場合は、XSCF が通常モードで起動していることを必ず確認してください。
- 以下のコマンドは、XSCF が通常モードで起動している状態でのみ実行してください。
  - `showhardconf`(8)
  - `showstatus`(8)
  - `dumpconfig`(8)、`restoreconfig`(8)
  - `replacefru`(8)
  - `restoredefaults`(8)
  - `flashupdate`(8)

使用例

使用例 1 起動モードを高速モードに設定します。

```
XSCF> xscfstartupmode -m fast
```

使用例 2 起動モードを表示します。(高速モードを設定し、入力電源を再度投入する前の状態)

```
XSCF> xscfstartupmode -d
Setting Mode: fast [need AC OFF/ON]
Current Mode: normal
```

使用例 3 起動モードを表示します。(高速モードで起動した状態)

```
XSCF> xscfstartupmode -d
Setting Mode: fast
Current Mode: fast
```

使用例 4 起動モードを表示します。(通常モードで起動した状態)

```
XSCF> xscfstartupmode -d
Setting Mode: normal
Current Mode: normal
```

終了ステータス

以下の終了値が返されます。

0	正常に終了したことを表します。
>0	エラーが発生したことを表します。

関連項目

poweron(8), **poweroff**(8), **setpparmode**(8), **showpparmode**(8), **showpparstatus**(8)

機能別コマンド一覧